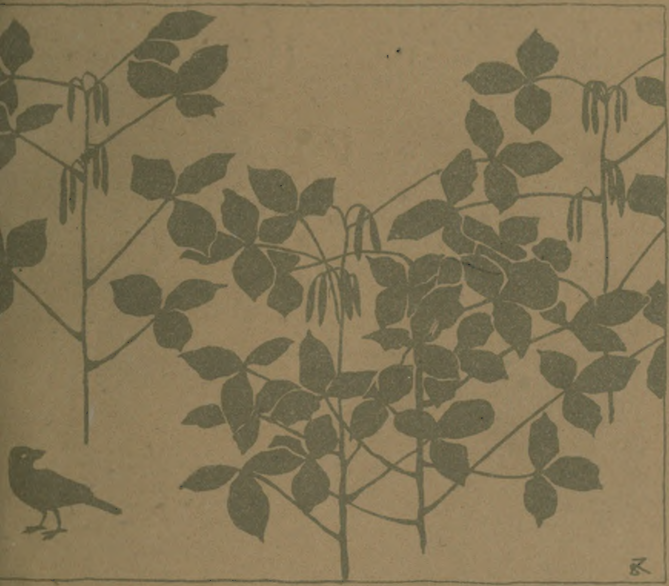




大正四年一月廿四日印刷
大正四年一月廿七日發行

有朋堂文庫
閑田・年々・遊京・花月（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

花月草紙終

時は―この下に「あやまちあるものぞ」など補ひ見よ

づから夢とや思ふらん樣なり。まして酒に醉ひて濡るゝも知らず顏に笑ひなどするもあれば、思ひよらぬ愚なる雨かなと怒りのゝしるもありぬべし。かの舟は早く漕ぎ行きぬれど、我が住む浦は遠ければ、とある橋の下に船とめて居しが、橋の上など人の走りさわぐは、鳴神のやうに聞えぬ。はや雨もかぞふる計りに川の面に見ゆる頃、夕月のことさらに新しくみがき出でたれば、はや雨のなごりもなし。堤の花いかゞあらんと漕ぎかへして見れば、その比ははや人もなし。櫻の木の間にほの〴〵と月の見えたるは、我が爲につくりなしけんと思ふ計りなり。濡れにし人はいかゞしたりけん、この月などは思ひもよらであらんなど一人思ふも、何となく心おごり行きぬ。かぞいろも、我一人人にこえて心地よきと思ふ時は、といましめ給ひたれば、又あやまちやしぬべくと恐しく覺えければ、飮み殘したる酒携へて、遂に漕ぎかへりしとか。

かへさ—歸るさ

かりがねに云々—古今集「春がすみ立つを見すててゆく雁は花なき里に住みやならへる」又、白居易の河亭晴望詩に「晴虹橋影出、秋雁櫓聲來」

ものも—まもの誤か

いさご—砂

く心ゆたかに樂び遊びて、かへさ忘るゝ計りしても、何のわづらひ憂もなきに、此花もむかしより盡きぬ御惠深き露に生ひそひしとやらんと聞けば、さ思ふ人もありや無しやと見れど、王世の民の心とや、斯る照る日の惠をば思ひもよらず、いつも斯く空はるゝものと計りも思はぬ輩おほからんなど思ひかへして、四方をふと打見れば、筑波根のあたりいと細くひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふ疾風などいふものなりけり。餘りに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて蓑も笠もはなたで居しが、はや艫おし立てて漕ぎ歸るを、「いかに、此花を見捨てて歸るは、かりがねにつらさやならへる、櫓の音計りまなべよかし」など口々にわらふを、耳にも入れで漕ぎ去りぬ。いつか其雲のいと廣りてけるが、彼輩は露も知らず。日のかげらふも知らず。「今日はあつき計りなり」とて、はだ脱ぐもあり、又は衣などぬぎて、馳歩くもありぬべし。雨に先だつ風の一通り吹き落ちたれば、こは花よと思ふものもなく、いさご吹きたてたれば、ただ驚きて居るがうち、雨の降り出でたり。初は心地よき雨などともいひたらんが、後には人の聲に雨の音もせず、馬を馳せてかへるもあれば、驚きあわてて堤よりまろび落つるもあり。女などはいといたう見苦しきまであわてふためきて、はじめ裝ひしをもみ

范蠡云々—越王勾践に仕へ呉を滅し、功名天下に顯はるゝに及び、遂に姓名を變匿して扁舟五湖に泛び終に返らず

りといひし。

もろこしの君と臣との道は、我國のとは違へれば、言ひわくべき事にはあらねど、范蠡が功遂げてのち船に乗りて去りしを、難きことの様にいへど、代々の功遂げし人の終よからぬより見れば、よしとはいはめ。されど船うかべて去ることだにならば、難きことはあらじといふを、よきをばよきになして見給へ、よきをも其上のこと云ひて責むるは、いとあしき心ぞや。聖ならでは許す人はあらじと。

今日はいとのどかなり、いでや隅田川原の花見んと、小船に乗りて行きたるが、花見んと立出づる諸人の様、げに都のみやびを盡せり。さま〴〵の心々に打ちむれて行くに、女房なども何か口たゝきつゝ、心そらに歩くもあり。馬馳せて花をも目にかけず、いとばうぞくに行くもあり。やごとなき人にや、人々打圍みてつゝましげに行く女もあり。或は木蔭にてはや瓢かたぶけ、何やらん矢立出し書いつけ、紙縒して花の枝につけて、我は顔なる風情なるもあり。今日はげに晴に晴れて一天に雲なく、富士も筑波も手にとる計りに見えたれど、又それを打眺むる人もなし。ましてかく晴れたる日は、とみに雨風のあるなどいふことは、露思ふものもあらじかし。こののどかなる御代の春の御恵にぞ、斯

かぞいろ—兩親

禹水湯旱—堯、鯀を用ひて洪水を治めしめしも功用成らず、舜の時、鯀の子禹よく水を治めたり、殷の成湯は桀王の虐政に憤起して仁政を施せり

狹衣—狹衣物語

藥玉—種々の香を包みたる袋を造花などにて飾りたるもの

いつもゆたかにて災なしとす。たま〳〵災知りても、昔の例などいひて心にかけぬ輩は、遂に身にかゝる災となりぬるとかや語りし。漢儒なんどの、大空のことなど言ひて、人を責めし例あれば、無しとはいかゞいはん。されどもまた大空のかへりみを受くるものは、よく其責を得るとかや云ひて、かぞいろの我子をよく育てなさんと思へば、さまざま教へみちびくまゝに、或はいきめきてのゝしりなどすれど、わが子ながらも思ひすつる時は、むづかる聲をもなさず。さればかぞいろの責なしと思へば、つひに大いなる災を得るなり。禹水湯旱とかいふ如く、聖はなほ其責ありて改め給ふことも速なるべし。ことに斯くても民草のうれひ少きをもて尊しともいふと、又いひし。

伊勢物語は梅のごとく、源氏物語は櫻のごとく、狹衣は山吹のごとし、徒然草は藥玉につくれる花のごとしと、人はいひけり。

我惡しきをば桀紂を引きてなだめ、人のよきをば堯舜を引出でてとがむ。かれはかゝる惡しき事なしぬといへば、げにさあらんといふ。このものかくよきことし侍りぬといへば、いかゞあらん詐しといふ。げにも人は惡しき心あるものかなといへば、よき名得まほしと思ふが故に、人の惡しきにてわが心をなだめ、人のよきをば妬むより出で來るな

大黃―根を下劑に用ふ
巴豆―舶來する一種の木の實
麻黃―きつねぐさ
白朮―根の白きうけら
陳皮―蜜柑の皮を乾したるもの
甘露―瑞應圖「王者の德天に至り和氣感ずれば、則ち甘露松柏に降る」
しひごと―誣言

す。例なき事なれば、恐しくて逃げ隠れぬと、かの友どちに語りにけり。

醫師の道知り得しと、みづからいふ人有りけり。附子人參は人をして氣のぼる病を生ず。大黃の類はもとより恐しきものにて、味もまたいと苦し。芩蓮は中をひやすの毒あり。まして巴豆なんどは更なり、石膏のたぐひの石藥、もと人を害するものなり。麻黃は人をして汗をもらさしむ。たゞかの君子の名よびたる茯苓、白朮、陳皮の類のみこそ、藥なりけりといひぬ。病ありても斯樣の藥のみ用ひけるが、元よりかろかりしにや、つひに癒えにけり。彌かよるもののみ用ひて、一道によければこれに惡しく、毒あれば毒をもてうつことなんども知らず。いかなる病出來らん時は、かならず悔い思ふべしと人もいひけるが、そのもの幸に病なく、齡もいと長かりければ、いとゞ我おもふより外に醫師の道なしとて、その子孫等へも云ひおきて、家の掟とぞしたりける。

雨風の時たがへぬといふも、甘露くだるといふも、必ずしひごとのみはいはじ。政ゆるきに過ぎぬれば、暑さも寒さもゆるく、政ながるれば、氣候の移つるも正しからずなどいふ。天人一理なればさもあらんかし。また政にあやまちあれば、大空の咎ありといふも、あやまち知るものは責を見る。あやまち知らざるものは、責をも知らず。

しゝむら―肉

に病ひを生ず。今日は頭いたみ、昨日は胸のあたり塞りぬと日毎にいふものは、大きなる病得る事稀なり。若き折より藥飲みし事なし、病は聊も知らずといふ者は、とみに大なる病を得る」といへば、やむことなき人聞き給ひて、げにもとて頷き給ひしとか。

夫婦の別といふ道は、新枕のあけの日起出でたらん時の心を忘れぬをいふとか、人のいひし。

鷹の羽にすむ蟲ありけり。空たかく飛びかける時は、はるかに人の住家などをも見下しつ、げに我は事足れる身かな、翼もうごかさで千里の遠きに行きかよひ、雲井のよそ迄もあがるめり、ことに樣々の鳥は皆おそれて逃げはしる、げにも我に勝つものは大かたあらじなど思ひつゝ、かの鷹の毛の中に居つゝ、頻にしゝむらをさし、血を吸ひて居しが、其のやからいと多くなりもて行きしにや、遂に其鷹もたふれにけり。それより自ら出でて飛びかけらんと思へども、飛び得ず、走らんと思へども、速ならず。血も盡き肉むらもかれぬれば、今は命つなぐやうもなし。辛うじてまづ其毛の中をくゞり出でて這ひ行けば、雀の子の居たりけり。われを恐れなんと見れば、雀の子は知らぬ樣なり。いかにして見つけざるやと傍へ這ひ寄れば、うれしげに見て、嘴さしいだして啄まんと

聖の教―中庸などの教をいふ

出でいて拭へど、水は疊にながれ行くを、又すこし取出してぬぐふ。つひに疊に水は半入りてけれぱ、さし措きぬるもあるべし。水のほどにしたがひて紙もて押拭ふべきを、多きも少きも其のほどを知らざるは、みな聖の教にたがふ」といへば、聞く人笑ひて、「紙なんどに聖の道などとはいかゞなれ。こは如何してもありなん」といふを、「紙とて空より降り來しものにはあらず。大君の賜よりして、日用の事を辨ずるなり。我家國の用度もいくさ出すも、悪しき年をすくふ備へも、飲み食ふものも、皆その賜の中よりしてわかち出す事にて、これは我物ならぬ事なり。扨しはくして、我物と思ふも、費して顧ぬも、みな賜なるを知らざるより起るとぞ。げに國郡おほく賜ひしも少きもあるを、そのほど知らで身を終ふるは、力ある者のまねびして、重き物あげんとしても、われ力なければあぐることを得ざるは、誰も知れるを、我身のほどを知りたる人の少きこそをかしけれ」と笑ひし。

「寒さを嫌ふものは、寒さにさはらず、暑さ忌むものは、暑さにあたらず。我こそ健にして、遠里行くとも疲るゝことなしと言ふものは、おほく足に病を生ず。我は目のあきらかなるにや、遙なる物、かすかなる物といへども、のがす事なしといふものは、必ず目

獨寢衾に恥ぢず—獨を愼むの喩
ふづくむ—憤る

といふを書いてものしたりとなり。言葉添ふるまでもあらず、いとをかし。

膽をねるといふは、いかにして得てんと尋ねしに、天命を知るにあり。此知るはまことに知るをいふなり。只黄金などの欲は去りやすし。好名の欲ぞいと悲しき。古にも父君の命に背きて身を潔くし、朝廷の事をそしりて直をうる、これを忍ぶならば何か忍び得ざらんとまで、古よりいひしをや。只その天命をまことに知りて、疑ふことなければ、つゆも心の煩なく、塵計りも穢なし。獨寢衾に恥ぢずとかいふ、彼浩々たる氣ともいふらん。

物の大きく見ゆる人は、瞳子の中高なるにて、中くぼなるは物をさゝやかに見する故に、遠くの物は見えず、人に問はざれば、世の人みな斯く見ゆると思ふなり。陽氣おほき人は、水飲水浴して、ます〳〵よきを覺ゆ。それをもて世の人かゝれと思ふたぐひにて、彼よろこばんと思ひて云ふことをふづくむあり。うらまんと思ふ事をよろこぶあり。我私智獨見にて、人をいかで量らん。敵情を察し軍に勝つものもあるを。

「今いふ費は、斯くせずともあるべきを爲すなり。世に云ふしはきといふは、斯くすべき事をせぬなり。いはゞ水を疊の上にこぼしたりとて、いさゝかの水を、ふところの紙手にあたるまに〳〵つかみ出して、押拭ひ棄つるもあり。又多くこぼれぬる水に、少し取

みかゝづらひて其事を思はぬは、たとへ何の才あり何の力あるものとても、何にかはせん。

政をなすも時と勢と位とを知るを要とすといふを、或人のいかのぼりに例へし。江都にていはゞ、春を待ち得しは時を得しなり。風を得しは勢を得しなり。我身は高きところに居て、よもの梢を下視して、絲をはなつは位を得しなり。そのいかのぼりを持ち、絲など持つものあるは、人を得しなり。風のほどを見て、尾などいふもの、又は絲などのほどを計り、引きつ緩めつして風まつは術なり。術といふもいかのぼりを上ぐるの外ならず。別に巧にすべきにもあらずかし。昏愚の下民を救はんとても、人毎に説き、戸毎に諭さるべきものにあらざれば、かりに術を設けて、その道によらしむることもあるべしと言ひしも聞えぬ。とにかくよき事にても、その功なきは、此三を待ちつくる心の薄きなりとなんいひし。

人の上たるものの心得べき古歌をと望みしものに、いか計りかありなん、今胸にうかびしとて、

心ひくかた計りにてなべて世の人に情のある人ぞなき

き樣にいふは、民草の力の衰へしなりけり。おもき病につき居たる緣の者等、「今日も昨日もおなじ樣にて、惡しき事はなし」といふは、病重るなりと人のいひし。

むかし兩頭の蛇ありしと聞けばとて、蛇の同じほどなるを捕へて、二つの尾をしかと結ひて離れざるやうにして、庭へ放したり。一つは南の方の草むらさして行かんとすれば、一つは北の方の林へ入らんとし、頓に行かんとのみして、一つ所にのみ居けり。たはぶれに下り立ちて驚かすれば、いよ〳〵挑み合ひて、一つ所にをどり居けり。いかゞすらんと折々見たるが、三日計り經て、二つの蛇やはらぎて心を共にあはせ、尾のかたを繩の如くにして、頭を二つならべて行くにぞ、常のよりははるかに速に這ひ行きけり。げに人も心の一つなれば、目も耳も心にしたがひて見聞し、手足も一つ心なればこそ斯りけれ。もし一つ〳〵の心ならば、右の手は左を凌ぎ、左は右をそねみ、手して取らんとすれば、足はよそへ行き、左は左に行かんとすれば、右は右へ行かんとして、一つも人の事足ることはあらじかし。さるに古より國の官たる者等、或はそねみ惡み、又は互にしのぎなどして、たゞに我威をふらんとするは、何の心にやあらん。國家の事をよそにして、只我身あることをのみ心とするにや。かくては亂れざる國はあらじを、我身にの

大内家―大内義興足利義稙を翼戴して功ありしが、長子義隆武事を怠り遂に將士離散して亡ぶ

大内家の強大なるより驕り出でて、管絃亂舞、詩歌風流に流れて、雲上のまねびし、もととすべき武の道も衰へければ、終に忽ちほろびにけり。いといたうやんごとなき御訓といふにも、大内今川室町の事をば、鑒戒とすべき御ひどきもあるなれ。今も猶愚なる例にはいふなりけり。かの詩歌管絃など惡事にもあらざれば、自らゆるして節度の流るるをも知らず、終に武道を忘れて、物わらひとはなりにけり。さすがにあらき事をば誰もつゝしめど。

やごとなき官の人にいひし、「君はもろ〳〵の官のうちにて、いはゞ先づ手とやいはん、足あればこそ手の尊きを知るとかやいふぞかし。山の高きも、麓の土よりこそ出來るなれ。足なくば手もて這ひ歩かなん。手もし足のかはりを僞さば、足かならず手とや成りなんかし」と言ひぬ。

民草の雨風をいとふ餘りに、「昨日の風にはや葉末しをれぬ、この比の雨にたけも伸び過ぎぬれば、みのりも少かるべし」などいふは、力ある民草なり。「此雨には如何あらん」と問へど、「さして變りもあらじ。明日さへ晴れなば、かへりて生立ち早かるべし」といふは、心のうちは秋のたのみ心にかゝれど、いふもさすがに心地惡しければ、口にはよ

龜燒きて見る―龜の甲を燒き其龜裂に因りて判斷するト

知りたれども、たゞ私の心におほはれて、てらし得ぬなりけり。もとより其わざはひに遭ふものは、おもてにもあふれて、その惡しき色をあらはすべければ、心の神ははや照らしけんを知らざりしなり。こは蟲けらも其いくる道をもとめ、死すべきを厭ひて、殺すに心なきものには、なれちかづく類は、これ自ら生々の德そなへし、大ぞらの御心にて、それを受け得し萬のもの、みな斯くあるべきことなり。されば占にあらはるゝも、龜燒きて見るも、みな天地の中にあるとあるもの知らざるはなく、感ぜざるはなければ、聖も一つの教とものし給ふとや。

人を知るは偏なき處よりあきらかなり。かの辟すれば正しきを失ふ。いかで我心くもりて、人の心を照さん。わが才智機轉にて照さんとすれど、時にとりくらき時あり、いかで照さん。

家國のすがたは、若々とあらまほし。もし年老いたるすがたに成りもて行けば、物每しづみ果てて、人に見知られじと、物のいろめも花やかならざれと思ふまでになり行くぞかし。その心よりして人に秀でんの心元より無ければ、物の堪能上手も絕え果てぬるものとなん。

しうねき—執念深き
常夏—撫子
こきまぜし—見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

もつひに枯れぬるにぞ、われひとりの心ばえ見えて、木高く咲きみつると思へば、嵐などにあふ時、もとより枯れし木なれば打倒れてけり。高う見えし花も遂に叢にうづもれて、また見る人もなし。代々の小人の情態にも譬へつべしと、人のいひけり。

しうねき深きは、山吹と常夏なり。春も過ぎて、桃も櫻もひとつ柳と見ゆるに、こきまぜし春の錦も忘れぬる頃、山吹のいさゝか咲き出でたるも、いはぬ恨ぞふかげなる。また花さへ散り果てて、紫陽花もおもかげ殘す頃、はかなげに咲きたるも。

深川の八幡の社の祭ある日、おほくの人見にいきけり。二つ三つばかんの子をいだきて母の行きたるが、大きなる橋あり。渡らんとすれば、その子のひた泣に泣きてやまず。橋をわたらじと歸れば泣きやみつ。如何にしつることよとて、樣々にすれど、はじめに變らず。先づさらばこゝらに憩ふべしとて、橋のかたはらに居たるが、しばしして橋の上の人さわぎたちて、聲のかぎりに呼びつゝ、あわてふためき逃げまどふ。如何なることともわかず。よく聞けば、その橋の半より落ちて、渡りかゝりし人千人計りも落ちしとなり。それを聞くより、彼母もおぼえず涙おちてけり。いかにして此子の知りつらん、神佛のたすけ給ひしなりとて、伏し拜みつゝ、いそぎ歸りにけり。その子のみかは、その母も

夜居僧―宿直の僧
本居―本居宣長

示したるはいとをかし。その比藤氏のさかりになりて、君をなみしゝ勢を憚らず書いて、源氏の君を大臣の列にくはへ給ひて、藤氏をおししづめしことも、夕霧を大學寮に入れ給ひしも、皆斯からんかしと思ふ事をよそごとにして書けるぞ尊き。げにまたなき物語なりけり。されば見るごとに奥意の深きをおぼゆ。たゞ佛の道にのみ入りて誠の道にくらければ、冷泉の帝、光君の御子なりしことを、はじめて知しめしたる所の書いざま、道知らぬよりして誤れりけり。こゝのみぞ女わらべなんどの見ても、道踏みたがふべくやと危くぞ覺ゆる。薄雲、朧月夜なんどの、人の道に背けしは、童も知りぬべければ、迷ふべしとは思はずなん。佛のことをばやんごとなく尊きかぎり書けれど、夜居の僧の益なき事さし出て言ふ樣、三所にまで書いたるは、またをかし。此物語を、たゞにあはれを盡したるものにて、させる理あらはしたる物にはあらずと、本居のいひたるはをかし。されども端々心はこめて書いたるには疑なし。

藤の花はちかう見れば美しけれど、餘りに近づくれば薫はまたよからず。華に咲くかと見れば、末までは開き得ず。殊におのれひとり盛を見すること難く、かならず異木によりてたけ高き勢見するが、其より添ふ木の枝も花も見えぬ計りにおほひぬれば、其木

薄雲の后ー藤壺
たらちねー母なる桐壺更衣
酒の醉云々ー窃に朧月夜に遇ひしに始り密會の事朱雀帝に露顯して遂に須磨に退居の運命を指す
使の者等云々ー明石の卷
いきすだまー生靈
御息所ー六條御息所

ひしとぞ。

源氏物語に、薄雲の后に心をかけ初め給ひしは、たらちねによう似通ひ給ふと聞きて、何となう幼き御時より慕はしと思ふを初とせし樣に書けるはをかし。花の宴の時、酒の醉にまぎれし過失、過に身を終ふる禍となりしも、はじめのほど天が下にとどろきたる御勢、つひに榊の卷にいたりて衰へにたる頃、御自らの行ひもいと亂れもて行きて、禍うながしける樣も、必ず斯るものなるを書い載せ、須磨のさすらひに至りても、御自ら咎なきやうに言ひ給ひて、何となく濡衣著給ひしふりに書けれど、其浦の波風のとがめにて、大空の許し給はざることをあらはし、使の者等が都の長雨のことなど言ひて紛らしゝ後、大炊殿の雷のおちけるも、須磨の浦に限りたることを示したる、いとたくみなり。また源氏の君ふたゝび歸り給ひて、繪合に至りて、大臣の心挑み合ふけしき、つねに自らが威をふり給ふ樣を記し、後にいや高くなりきはまり給ひては、何の禍かあるべきと思ふに、女三宮の後見のこと出來て、をはり全くし給はざりしにとゞまれるぞ殊に覺えぬ。女三宮の物怪は、柏木のいきすだまなど書くべきを、こは人も知らねばさは書かで、かの御息所は人々の心の殘るより、はた斯かりけりと對へて、思ふ心を

今參り―新參

たらちね―母親

北野―北野天滿宮

て、心の駒のつなぎがたきに至るものもあり。千年を一時として此世にながらふる中に、はや名ほろぼすもあり。碁なんど圍みて、一日を時の間に費すもあるべし。たゞ仙人は、よし益なくても其名は今に殘れど、今の仙人のまねするものは、此のところ違ふにやと笑ふ。

田舍より出でたる今參りの女、年もいと若かりければ、人々何くれと欺きなどしけり。黃昏の比使に出でぬ。かへらん比はまだ暮れじ、彼をおどろかしてんと、門の中なる柳のいと茂りたるあたりへ白き衣引きまとひ、女の髮亂せしやうに作りて置きけり。物けぢめもさだかならぬ頃かへりにけり。柳の前を通りたらば、聲あげて逃げまどふべしと、息ころして垣間見居しが、何ともいはで過ぎにけり。「柳のあたりには此比變化のものの出づると聞きしが、もし見しや」と問へば、「げにも柳のあたりに白き衣著し女の立ちて居しやうに見し」とて、おどろく氣色もなし。「いかにして恐しくは思はずや」と問へば、「都へ出づる頃、たらちねの、此觀音の御守と北野のとは、膚はなさでよとて袋に入れて賜ひぬ。變化のものあらば、觀世音も北野の御神もましまさん。かれ我を殺さんとせば守り給ふべし。神も佛もなき世ならば、變化の物もあるまじと思ひしなり」とい

ましら―猿

つ一つ言ひ消たして行きぬ。其かへさの道に、名もなき岩のありしをふと見れば、「よくもましらの腰かけし姿に似たり」といへば、げにと人もいひけり。おとよりきたる人を招きて、「ましらに似たる石あり」とほこらしげに言ひて、「これ見給へ」といへば、「似たるところ無し」といひけり。あけの年、かの寝覺の里へ行きて見しが、案内の者のいひしことは、はや忘れてげれば、これは虎のすがたなり、これは獅子の勢なりと見なしぬ。はじめは虎よ獅子よと聞きて見しかば、似たるやうには思はざりしが。

こゝに行幸あり、はや鳳輦の既にかゞやき見ゆるほどなるに、市巷の雑人むらがり居て、何となう人の聲のひゞきわたるを、前驅なんど走りめぐりて制止するが中に、一人大きなる聲出して、「はやこゝに行幸あるに、何とて聲高うはするぞ」と制止すれば、むらがる中に誰とはなけれど、「その制止する聲、我等が聲よりいと高し」といふも、人おほければ高く聞ゆ。彌いきめきて聲高に雑言まじへて制止すれば、猶いと聲高く、「制止する聲いと高し」と、どつと笑ふ。

仙人はめづらしと人はいへど、世のさかしき風に乗り得て歩く人もあり。益なきものを買ひやしなひて樂む人もあり。鶴をめで龜になれて、齢むさぼる人もあり。瓢の酒によ

ぬれば、四方みな網の目なり。こは如何にせんと思ふに、或はあわて騷ぐもあり、又は何計りの事かあらんなど、かしこき人をも侮りて、躍り上りて越えんとし、又はやぶらんとするを、人はもとより人なれば、樣々にあつかひて遂にとるぞかし。我は彼のざと音するを聞けば、心しづめて水底につきて離れず。網引は上の方を行きぬ。故にとらるゝことなし。川獺、あしかなんどいふ物もあれど、深くひそまり隱るれば、その患もまぬかれぬ。また俄に雨降り出でて、思ひよらぬあたり、又は常いさゝか水の落つる岩がねなどより、瀧の白絲くりためて、落ちそふ勢のはげしさに、こゝろもうきたちて、かの龍門の瀧ならぬとは知りながらも、あまりに心地のよさにほだされて、その瀧をのぼるにぞ、或は岩角にあたりてきずつくもあり、辛うじて上りぬるも、雨やみぬればいと淺き瀬なり。かへらん道も知らねば、深きところ〴〵たどり行くを、行く人などの見つけてとるぞかし。斯樣のにはかなる勢にも乘らずして、斯く百年をもいくたびか經にけん」と語りし。

寢覺の里に行きて見れば、案内の者出で來て、この岩は獅子といふ、虎といふなど敎ゆるもうるさく、「いかでこは獅子なるべき、これもはた虎の形とは見えぬを」なんどと、一

あしか—海獺、川獺に似て肥大なり

龍門—支那龍州龍門縣なる黃河の水の下り口三段になり居て險にして通ぜぬこと、江海の大魚能く上るものは龍となると云ひ傳ふ

寢覺の里—信州木曾川畔

ふり—風習
面ぶせ—不面目
とめ—求め
ひめもす—終日

知らぬ魚見るは珍しといひしが、それも常になりにければ買ふものもなく、山越え來し魚おほく腐れぬとて、浦々よりはうらみなど言ひぬ。その里の若き者等はこと浦の人々に交れば、昔より持て來しふりも違ひつゝ、魚なくては物食ひしやうに覺えず、みづから織りてし衣著んは、面ぶせなりとて、異物好みぬる風となりてければ、富み榮えたる里なりしが、衰へ行きて、異里の人々あまた入來れば、爭ひ事も絶えざりしとかや。

年經る鯉のありけり。「いかにして樣々の事にもかゝり給はで、かくまし〳〵給ふや」と問へば、「さらば語りものせん。かぐはしき餌のあれば、とめ來ても食はまほしきことながら、これぞ大事のことゝ心にしめて見れば、あやしき事あるものなり。さ思ひつくれば、鰭ふりて遠くのがれて、いさゝかも顧みず、よその魚もあやしき事よとは思へど、遠く去ることをせず、童べなんどは、彼釣針てふ物にかゝりて、いかほども取らるゝを見ながらも、とにかく其かぐはしさに心つながれて、あたり離れず歩きて、心の中には、愚なる魚共は、みな彼餌にとらるれど、いかで我は彼にものせられんと思へど、ひめもす此あたりに漂ひぬれば、かのあやしき外に餌のなきにせんかたなく、立寄りて少し食ひてんなどとするうちに、遂には懸かるもあるぞかし。また網といふものあり。ざと音し

調じ合せ―示し合せ、諜の字の意なるべし

しは、一言ながら心とゞむべき事とや。

或山里ありけり。人もいとおほく住み居て、なに乏しき事なく、家々皆富み足りぬ。絲とり機織りて衣とし、みづから作りし稲麥刈り收めて、一年の食とす。外にもとむる事なければ、其里年を逐うて繁昌す。海も遠からねど、四方に山をへだつれば、關を置きて異里より物あきなふことを禁ず。魚は月にいくたびと定めて干したるのを買ひ來りて、村の中賣りひさぎて食ふなり。異村へ出づるものもなければ、うらやむ心もなし。異村よりいと富めれば、こゝへ魚など持ちこしたらば、めづらしさの餘り打ちこぞりて買ひなんと思へども、その村の掟たゞしくしてやぶり難し。ある浦の長年ごろ心にかけて居けるが、かの山里のうちにも心合する者ありければ、それと調じ合せて、魚など賣り來ることを許されぬ。いでやとて持ちこしたるが、めづらしきうちは、鯛よ、鱸よと買ひにけり。また異浦のもの打聞きて、「昔より彼山里へ賣らまほしく思へど、掟あればもだし居しなり。かの浦より魚ひさぐと聞きぬ。浦にへだてのあるべしや」とて、また持ちこしたり。もはや彼里人とゞめんやうもなし。こゝかしこの浦より持ちこして、名も

中國—中華

とぢめ—終、果

禍福云々—禍福の裏を相爲すこと三合の繩を糾合するが如し

くるやうなる事は、なまじひなる事にて、徳なくして害とはなりぬべし。もとより其子の才に隨ひては、猶かねてより、猶その助くるものらよりして、心ぞなへもあるべき事ならんかし。いづこの家にもある習にて、よし事縺れしたること出で來ぬとも、其子をもしのぎて、よし淸らに打ちそゝぎたりとて、後の爲よしとはいはじかし。後の害をもいとはで爲すは、ことにことなるにあらざれば、いかであらん。されどもこは易き事なるべし。後の害の重きと、今の重きとをよく思ひくらべて、やむことを得ずば爲すとも、中國よりしばし夷の力かりし樣なる悔事をも思ひはかるべし。たゞ二人の君ある姿になしつゝ、後の爲にも悪しからぬほどを爲さんの道は、時にもよるべけれど、いと難き事にて、猶後の害はありぬべし。たゞ仕かへしぬる身は、よし身後の心地とても、生けらん中こそいといたう大事なれ。如何となれば、こは人のとぢめなればなり。若きが中はよし過ちし事ありとも、また改めて後も年をつむものなるに、人のとぢめとなりては、改めての後とても幾程かあらん。さらば仕かへしゝ人は、仕ふる中よりも、物毎愼みてこそありぬべし」

「禍福は、組み合ふ繩のごとなる事は、もとより知ることなり。唐の古書の世々の亂

いたづき―病

風月―風流を樂むこと

獨善―ひとり其身を善くするをいふ

やんごとなき人、にはかにいたづきに罹れりけり。たやすからぬ樣なりければ、「今この醫師一人にまかせんも如何なり。かれも醫師の道には尋常ならねば、これと心を合せて藥調せよ」といへば、はじめの醫師頭ふりて、「さらば其尋常ならぬ者にまかせ給へ、斯る頃のいたづきを療治せんに、人を語らひてはいかで出來べき」といひければ、げにもとて初のにまかせてければ、其いたづきも速に怠りぬ。

「時ありとてや、梢より心かろく散る紅葉の庭に打積れば、木枯の風は梢に聲たえて、庭の落葉のいまさら時めきがほに、舞ひつ騷ぎつ音立つるもいとさわがし。かの世捨人の今さら又人交りなすに譬へつべし」といふを聞きて、「げに彼仕かへして風月の全身にほこるなど言はんには、世の事をば塵泥の如く思ひすつべけれども、我家をば我子にゆづりてし上は、我が今の職は風月なりけりとて、後の事も家の事もよそごとと思ふべくや」と問へば、「いかでさあらん、大君の御祖にたまひそめし此家のゆづりを得て、また御ゆるし蒙りて其子にゆづりしなるを、如何なりともよそに見んは、かの獨善の人ならんかし。されど其子の爲家の爲とて、また落葉の立ちまふやうにし侍れば、其子のすべき事をもかすめ、其威德をも消つべきなり。さればとて物によそへなどして、少し力助

黃橘の苦―さびれて生計にも窮するをいふ

猿樂―諧謔の事を演ずる樂、後世の能狂言

まめだちて―眞面目になりて

食ふことも得せず、心を傷むるなり、この心猶忘るべからず。さて其心にも、人々おのづから感じて、いと年若けれども、せちに心用ひぬ、かの風もおこたりぬ、こゝの痞も遂に療えぬと、幼者の筆とりて、書くによきことなければ、見るもの其幼きにしては能書なりと褒むれば、自らはまことの能書と心得て下達する如く、風の心地おこたりしとて、褒むるにも及ばざれども、年若くしてと思ふ心から、人もめづらしきを喜ぶ心よりしてもてはやすを、我心にも慢ずるきざし出來て、切に思ふ心もうすくなりぬ。もとより拙きにつとむる心もゆるびたれば、病多く癒えず。また招く人もなし。この時ぞ醫師終身の覺悟の定る時なり。この時よく心得しが、名ある醫師とはなるとなり。人招かねば、黃橘の苦にせまりて、わが方より規矩をすてて病家にへつらひ、又は我道をば次にし、酒など食べ猿樂やうの事などして、それもて人に用ひられん事をほりするの類、其餘さま〴〵利に走りて、つひに我業に怠るものもあるぞかし。さるに人招かぬ折も我規矩を亂さず、潛まり居て書々よく見て心に會得し、三年にてもあれ、いつまでも心をかへず日をあはせて、物食ひなどして時を待つ。斯くの如きもの、時にあへば必ず遂には名ある者となるなり」と、まめだちて殊更にいひしは、醫師の事のみにはあらずかし。

せに―專ら

方―處方

腹かゝへ云々―笑ふ可き事なり

などいふもあるべし。されば斯くせんと思ふ志の一つなり」といひし。

醫師の心得べきことを語り給へといふものに、「まづ師をえらぶべし。世にいふ才あるものは、學ぶところ淺く、味ふ所うすし。年老いたる醫師の、しかも文などもよく味ひ、治療せになせども、晝夜殊に奔走するほどにもあらぬ者にならふべし。規矩を守り居るものは、世の中の交りを心にせざれば、左も右も南も北も、とり用ふるやうにはあらぬものなり。今いふはやるとか言ふ醫師を見ても知るべし。すべて又物にかたよりて、傷寒論中の藥のみ強ひて用ひんとするも、東垣などの流によるも、また用には立ちがたし。古今の方より俗間の方までをも試み、それを編してつかふ者はたのむべし。さて師としても、其師の僻をよく見て、我心にいましむべし。いまは師の僻を似するを心とし、はては老いたる師なれば、腰打ちかゞめ、老聲學びいださんぞ、腹かゝへぬべき事なり。さて物をもよく習ひ覺えて後、病家に始めて行けば、こゝぞ大事と心得て、診察はさらなり、匕とりてもたやすくは盛らず、この心を後々も忘るべからず。其うちむづかしき病あれば、たゞ心にかゝりて、夜半も案じものし、明くる待ちて行きて見んと思ふ、この心をも忘るべからず。藥あたへたるが、つひに救ひがたきに至れば、一日二日はもの

こそなるべきを、いまは心もて心を治めんとして、勞しても功うすきにはあらずや。まして勞するほどに至るも少きをや。

事に處するに利害得失に心をつくるも宜なれども、まづ其事の筋をよく見て、さて利害得失をも照し見るべし。世にいふ才あるものは、まづ我利害得失早く見ゆれば、利につき害に遠ざからんとのみして、その筋を失ふなり。たゞ害ありとも、斯くすべきといふはいといたう重き筋の事なり。さればその筋の重きと輕きと、利害の重きと輕きとをかけ合せても、その筋の方おもきは、害にあふともその筋にしたがふべし。また才なくして筋にもくらく、たゞ一筋に心得るものは、筋の輕きにも重き害を得て、辭せじとするもありぬべし。才ありても道學びて明かなるにあらざれば、輕きを重しとして、つひに道失ふものこそ多かめれ。

「生れて物覺ゆる頃より老い行くまで、いさゝかも怠らずする事あらば、必ずいかなる業にも秀でぬべし」といへば、「たゞに心用ふるにあらざれば、いくたび僞すとても得べしとは思はず。この飯食ひ汁吸ふは、もの覺えてより日に三度は缺くる事なけれども、斯くせんと思ふ心なければ、飯食ふに上手もなく、却りて食ひこぼし、又は魚の骨たてしよ

ぼうぞく—風俗の字をあつ、謂なく傍若無人なるをいふ

至大至剛云々—孟子の所謂盛大流行の氣

閉藏の氣云々—冬より春に移る頃

いはんばかりになり行くめり。うしろにては笑ひ譏れど、あらそふにも及ばざれば、知らぬ樣すればいよ〳〵高ぶりて、ぼうぞくの振舞なすものぞかし。まして惡しきも人にすぐれたるが、心つよく理なきことを押し立てて、世をおほひ人をかすめて、しばらく勝をとるもの、古の書にもおほきを見るべし。其によても思ふべし、かの至大至剛の浩然の氣、天地の間に滿つるてふこと、げにさもあらんかし。惡しきも一筋に行ひて疑はざれば、ひとたびは世を蓋ひぬるものを。

閉藏の氣ひとたび變じて開け出づる頃は、かならず風吹き雨もはげし。又のびたる陽氣のひとたび變じてひそまらんとする折も、斯くあるなり。いかで雨風の花をねたみ、紅葉のあだをなさん。おなじく降る雨なれど、一重の花には早散りなんとうらみ、八重の方には咲き初めんと待ちものし、この雨いつか霽れなんと麥擣くものはいひ、雨こそ嬉しと苗植うるものはいふらん。麥擣くかたの雲をはらし、苗植うる空は降らせんとは、いかであらん。かの小民うらみ歎くは、絶えぬものとやいはんかし。

孔子喪ある折、つねをかへて拱手し給ひしを、門弟子それを學びしかば、二三子學を嗜むの甚しきと宣ひしをもても知るべし。古かたちの教ありて、かたちより内に及ぼして

くすしのまき〳〵―醫書

屋の上の烏を云云―「愛其人者兼屋之烏、憎其人者惡其餘胥」とある文の飜案、「坊主が憎ければ袈裟まで惡い」

車を横に押し云云―無理推しする諺

すといはゞ信じなん。唐やまとの醫師の書のかず〳〵読み得て、治療せずして老にいたる醫師も少からじを、まして蠻國のくすしのまき〳〵こなたへ渡るも多からねば、その多からぬ書を片言讀にして、いで其風をなさんといふ類ならまし。ちかき頃蠻國の草木のこと書いたる書を和解したるをば、ありあふ醫師のたすけにせんといふは、いとうべなり。いかにも民間の妙薬とても、功いちじるきも多ければ、また彼國の事よとて、よき事をも惡むは、屋の上の烏を惡む類にして、その善きを知るの教にも違へりなん。されど唐やまとの傳ふ事をもよそにして、蠻ぶりのくすしの道ひたすらに新しうものせんとする人も出來べきやとて、この事のおほく益なきことを先いふと言へりけり。げに此事は人にもかゝりぬる事なれば、よそごとにはせじと思ひて、語りけんかし。さらでも蠻ぶりの事は、何となうはやり行くなる人情の、いといたう好ましからぬと言ふことも聞きたれば、斯くは繰言いひにけんかし。

人並よりは聲たかく、心つよく愚なるものが、我思ふまゝの事などいふを、いと理なき事と知りても、こなたも同じく聲あげて、爭はんも益なき事なれば、其儘になし置くなり。さればいよ〳〵我計り理あるもののやうに思して、かの車を横に押し、舟を陸にと

末書—註解講說の書

濟生の術—醫術

りしや。或人のいひしは、「蠻書の和解など見たるが、こゝにて用なきと思ふことは審かにして、こゝぞと思ふ事いとあらし。おしなべていへば、用なきことぞ多かめる。今の世、もはら醫師の書讀みて、もろ〳〵の病を療さんとする者もありぬべし。人もめづらしきには傾く習なれば、たのむ者も出來にけらし。若しひたすらに成りもて行かば、あやふき事にこそと人もいふなれ。如何にとなれば、蠻の文字書むとても、その心をよし得るとても、唐國の書見るごとくに精微には至らじかし。いはゞ不學なるもの、字書をかたはらに置きて、一つ〳〵見つゝ讀むたぐひならまし。斯くしてありあふ醫書、師もなく口授もなく、代々の末書註釋もなく、字書のまに〳〵讀みくだすとも、いかで審かには得てん。蠻の文はその類とやいふべからん。其文字とても詳しく我がものにはなりがたきが故なり。今いふごとく、醫書の二部三部、師もなく末書註釋もなく、たゞ一通讀み得しものの、にはかに濟生の術なさんとしても、信じ難くやあらん。まして風土も違へれば、草も木も我國とは同じからず、うまれ得し人もまた違ひぬべし。さるにおぼろげに讀み得て、似よりたる草木とりて、風土違し其人に與へんとするは如何にやあらん。たゞ珍しきをこのむ心より信ずるやうにもなるべからん。蠻學十年の功つみて治療

生涯―源氏の生涯
花の宴の巻より云々―源氏、朱雀帝の寵深き朧月夜と契り、事露顯して遂に須磨に退居せし事をいふ
人少なる云々―花宴の後、源氏酒の酔にまぎれて窃に藤壺を慕ひて寄り、計らず朧月夜に邂逅する條
蠻國―和蘭などを指す

ことを、そのまゝに知るなり。まして古のさまより、代々の服章風俗なんども、文筆もて傳ふとても、この畫なくては見ざるものの、見る様にはいかであらん。書と畫とを左右の離るべからざるがごと言ひしは、畫の尊きをよく知りたるなり。しかるに彼はよくゑがくものなり、筆をくだせば何となう雲の勢をなしつ、あるは遠山のほのぐ見ゆるも、海原の打霞みたるも、心に造化をこめて筆にあらはすに、妙なることなりと言ふは、たゞに一技にしたるなり。いはゞ獨樂よく廻す、鞠よく蹴るといふに等し。たゞに其尊きこと知らざる故に、尊からぬことをあげていふは、かへりて其道をけがすなりといひし。

源氏物語の心ふかく作りしがうちにも、殊にいといたう感じぬる事こそありけれ。その中にも須磨のさすらひは、生涯のいと大なることなるに、そのはじめは花の宴の巻より起りたるを、人の心の靈妙、いかでそれを感じ知らざらんと思へば、はや其事を書いおけり。「人少なるけはひなり。奥の樞戸もあきて人音もせず、かやうにて世の中の過失はするぞかしと思ひて、やをら上りてのぞき給ふ」と書いたる、いとをかしと言ひぬ。蠻國の文字よむ事は、古きことにはあらざりけり。ちかき頃はいともてあそぶこととな

うすき相―輕々しき相

て防がせたりしと聞きぬ」といふ。「聲たかき男えらびしにや」と問へば、「さにはあらず、人の顏を打見て、「かれは疾くのぼりて防ぐべし、かれはのぼり侍るまじ」といふ。「いかに此頃のことなるに、人ぎらひし給ふ」といへば、「彼はいとうすき相なり、斯る事なさせそ」といひし」と語りし。

晴雨をよくあらかじめ言ふ者ありけり。「明日は雪降らん」といふ。其日になれど降らず。「風はげしからん」といふ、其日になれど吹かず。「如何にしつることよ」といへば、「こゝは降らねども、いづこか降りしなり。こゝは吹かねども、いづこか吹きしなり」といふ。聞く人笑ふ。後に聞けば、その日箱根の山は雪降り、武藏野あたりは風いと烈しかりしとぞ。こゝの里の晴雨にたがへば、人の笑はまぬかれじ。さらば言はぬには如かじかし。

今の世畫をこのむも、おほかた畫を知らず。されば尊ぶべきことをば言はで、尊からぬことを擧げつらねて尊ぶなり。畫のこと何にかも書きけん如く、言葉と文筆の及ばざるを助くるものなり。いでや黑き白きとは、言ひもし書きもすれど、斯かるを黑きといひ、とあるを白きとは、何をもてあらはさん。さるに此畫ありてこそ、言葉にもいひがたき

うけて—浮して

かせて賣りひさぐといふを聞けば、いかゞはせん、それと等しからんもいと口惜し、來ん春もはや近し、さればとて蓄へ置きし花を、むげに爲すべくもあらずとおもへど、まれ人もおはせねば詮方なく、只酒のむ人の來りぬる時、封きりて花を取出したれば、客打見し計りにて、やがて食ひさしながら、「これは鹽けある花なり。此頃さる方にて酒飲みしとき、盆に植ゑたる櫻を出し給ひしかば、盃にうけて飲みぬ。花は鹽けなきこそよかりけれ」といひしを聞きて、淚おとして悔いけりとかや。

秋の末つかた、雨風殊にはげしく、高殿のたぐひ吹きあらすも多かりけり。その冬にかありけん、眺望よきところにいたりて見れば、案内の男が出でて、「今年秋の嵐にこゝの高殿かしこの臺も吹きたふれにけり。されど此一つばかりは、嵐にもさはらざりし」と云ふを見れば、いといたう古き高殿なり。「如何にしてか」と問へば、「人のおほく登りて、風の吹き來るごとに聲あげて居たりしが、人の勢はいかにも恐しきものにて、斯くはありけり。川の堤または橋なんども、皆斯くして防げば、みなぎる浪もよぎて行くとか聞きぬる」といふ。「げに我も聞きしことなり。されどこの高殿はいと古くて、人ふせぐとも堪ふべしとは思はぬを、ふせぎし術もありけん」と猶たづぬれば、「かの主、人を選び

清明—一年の二十四氣の一、四月五日

釣垂れし人—太公望をいふ

玉の盃—古諺「玉の盃底なきが如し」「玉の巵底なし、寶と雖も用に非ず」

の心はつゆもなし。これは立冬の頃、かれは立夏のころ植うべし。此草は清明のころ植うべし。いま見てをかしと思ふ計りの大きなる木山なんどに植ゑたらば、枝も枯れなどして、風景を損ずるなれば、五六尺の若木植ゑて、この山にておのづから長ずれば、心の外の景色をなすものなり。いかで二年三年に全くそなはるべき。十年もたちてこそ、をかしうも見るべし。今俄にすべきものならぬことを眞に知りぬれば、初より物急する心は露もなし。いちはやく功なさんと思ひ給ふは、木草植うる時を、眞に知り給はざる故なり」といひし。「げに知るはおなじく知るなれど、眞に知るにあらざれば、知るとはいひがたし。古の釣垂れし人も、眞に時をば知りにしなり」と、また人に語りしとぞ。

櫻の花を鹽にし、壺にたくはへ、封附けて置きけり。客人のおはする頃などと思ひ置きたり。夏のころ客人おはしけれど、酒も汲み給はねば、かゝる折出さんも、玉の盃の何とかいはん心地すればとて出さず。また異君來給ひしには、酒このみ給へど、風流好み給はぬものに、いかでとて封きらず。秋の末つ方になりにければ、此頃返咲とて、ここかしこの枝に、はかなけれども咲くこともあれば、これをもそれと思はんは、いと憾あればとて出さず。師走のころ、例の草木賣るかたには、櫻はさらなり、藤なんども咲

靈妙なる人が、たゞ心の切ならねばこそ、樣々心の惱などはあり」となん人のいひき。

或人足の疾ありて、歩むことも得せず、いといたう惱みてけり。三年になりにたれど、些かおこたらざりしを、或醫師見て、「この藥まゐらすべし。三年も經なば、つねに復すべし」といふを、「さらば其藥飮みてん」といふ。かたはらの者打聞きて、「このうへ三年とては六年の間の苦みなるを」といへば、「さにはあらじ。その藥によて三年たちて本に復するならば、まづ一年たちなば、今よりはいさゝかよかるべし。二年たちなば猶よかるべし。斯くて三年にて本に復しなん。いかで三年がうち、今の如くにして三年たちしとて、にはかに本に復すべきや。今よりいさゝかにても年を追うてよからば、三年はさらなり、九年にてもあれ藥飮みなん」といひし。

或人庭このみて、「こゝに山きづきて此の木を植ゑ、こゝに池つくりて岸べに何植ゑん」などいひけり。「いつ作るか」と問へば、「まづ此木をこなたへ移しぬべし。この木は來ん春うつし、これは秋うつしなん、うつし終りて池をほりて、其土もて山築かん」といふを、「例もの急し給ふに、これ計りはいと心長きこと宣ふ。二年三年にては、いまだまたき山水の景色はなさじ」といへば、「此木いま植うれば枯るゝことを眞に知れゝば、今植ゑん

うてな—蕚

目黒—東都の近郊

赤疱瘡—はしか

斯くせん、斯く救ひてんとまげてもと思ふは、みな中道には背けりといはん。たゞその所長を友とすれば、交りがたき人もなく、我に益なき友もあらじ。かの友によて我方のみだれんとするは、皆その短を友とする故なり」と答へし者ありしとや。

花の散るは、うてなの中の實の大きやかになりて、花瓣の居どころなき故に散るなり。この雨に花は散りぬといふは、雨のうるほひにて彼實の大きくなればなり。秋冬に至りて葉の落つるは、若芽の莖のうらより芽ぐみて、その若芽の大きくなれば、古き葉の居どころがなければ散るなりけり。

或女疣といふもの襟のあたりより出で來て、一夜の中に數ましてけり。いま一人のは、額におほく出で來て、鮫といふ魚の皮なんどの如く、星ある兜よりはしげく見えし。女のことなればいと歎きて、目黒といふ所に、蛸藥師と名づけし佛のあるを、人の教へにまかせて、信じて蛸食はじと誓ひて、夜一夜心をこらしてねぎごとしたり。夜あけて、手あらひ顏など洗ふに隨ひて、二つ三つづつ疣の落ちにければ、いとうれしくて、猶心こらしければ、二日三日のうちに皆おちてげり。彼額に出で來しものも見ならひければ、これは十日計りに、赤疱瘡のかせたるやうに、霜のごとなりて皆きえぬ。「かほどの

管鮑―管仲、鮑叔の交、事は列子に詳し

ものごと聞かぬ僞なれば、ものごとに遠ざかりて、ものにかゝづらはぬが理なり。さるを人中にたちまじはり、そしられ笑はるゝことを知らぬも有るべし。これ聊ながら自らの道にさかふ故となんいひき。

友に交る道は、如何なることか心得べきといふに、「友はその所長を友とすべし。古きこと好むには、その事に友とし、武技このむには、それに友とし、歌よむものには、その道に友とするぞよき。さるに歌とても此風は悪しけれ、かれに學び給ふはひがごとなりなどと言ふにも及ばじ。たゞ交りてこそあるべけれ。古にいふ管鮑の交りといへども、此二人おなじ德おなじ心なりしにもあらじかし。世の中に同じ心の人といふものは、いと稀なる事なるべし。たゞ我が好める方に引入れんとするもうるさし。この人、この所は長じぬれど、こゝはいと短し。その短き所を引きのべんとするはいと苦し。さ思ふ我もまた其短き所あるものを、ことに思ふこと皆諫めものせんとするを、かの信と思ふは違へりけり。交るがうちにも、知己の人はいと稀なるものなり。其等よくことばを求めなば、もとよりいふべし。されど屢すべきには非ずかし。淺き契の友なりとても、友といふうちならば、其人のうへの存亡にかゝはる計りの事ならばいふべし。すべて強ひて

おのれ—自ら

ながるゝものは、道知る人に笑はるゝのみにてやあらん。

鳶の子の巣立する頃、兄鳥の巣より飛び出でしに、弟のは、羽も未だとゝのはざるを知らで遂に飛びたれば、梢より落ちてけり。親鳥いかに思へども、形ははや親にまさる計りに羽のふくらかに生立ちたれば、せんかたなく、巣に入りて呼べども、もとより飛び得ざれば、立歸るべきやうなし。二三日たちて見るに、おなじ處にうづくまり居たり。捕へて見れば、動きもやらず、いと飢ゑに飢ゑたる樣なれば、一夜さま〴〵餌を與へてけり。あけの日は、餌をやらんとすれば、おそろしき姿しておどす。昨日は飢ゑてければ、その心も出で來ざりしと見えし。人をおどすは惡けれども、このまゝにして殺さんもしのびずとて、育みやりけり。廿日ばかりたちてければ、羽もよくとゝのひぬ。さらばとて、もとの木蔭につれ行きて、籠よりやをら出したれば、おのれ辛うじて逃げ出でし樣して飛び行きぬ。親鳥も人の斯くして斯くは放ちしは知らず、かしこく籠をのがれ出でしと心得し樣して、連れて往にけり。

老いて齒のぬけしは、はや脾胃のめぐりも惡しく、若き折の如くならねば、和かなるもの食へとなり。さるを堅きものなど強ひて嚥下せば、遂に害となる。耳遠きははや密に

およびー指

いたづきー病

量料平かなり云云ー孔子季の吏となりて料量平かなり、嘗て司職の吏となりては畜蕃足す

手まさぐりー手あそびにすること

ある吝嗇なるもの、今年は殊に物費しぬとて、および折りて數へたてぬ。まづ春より秋まで、かのいたづきによて飲める藥もかばかりなり、それにかゝる事もありしなど數へつゝいふを、つく〴〵と聞き居し人が、「いとさりがたきが上に、君が身につきたるもの一つあり。是をいかで費といはん」といへば、「何なるや」と問ふ。「藥飲み給はずばかく今日なげき事もえいひ給はじ。かくいひ給ふは藥のめぐみなれば、それにむくい給ふを費と心得給ふか」といひし。かの人はこれを費と切に思ひけんかし。

文つくり詩つくらんと、硯ひき寄せて、朝より夕つ方までも思ひこらし居たるに、こは姨君よりの御消息なりと持て來れば、封おしきりて、「これよりいらへ仕らんといへ」といふ。「こはむこ君よりのなり。兄の君よりの」とて消息出せば、見もやらず、「俗事紛紛たり」などいひて、傍へ投げやりつ。このいらへ書くも文なり、今日の事なすこそ學ぶ道なれ。かの量料平かなり、畜蕃足すとはいはずや。かゝる目の前にある事をもよそごとと思ふぞはかなき。されど我が才をも足れりとし、いさゝか漢土の書籍手まさぐりし計りにて、我邦のいくさ物語など見て、時の勢も知らず、人情をもわきまへず、例の理いひつのりて、童べなど教へ引入れんとするは、いと害とこそはなりぬれ、風流に

日に新なり―此語大學、易經等に出づ

り悪しく怠りすさむ事となりてげり。むかしは會斯樣の人ありしが、今はおしなべていづこの山べ海づらの里とても、皆そのふりになりて、口にはかしこき事などいひて、老いたるものをあざむき、村の長をもはゞからず、はてはおほやけの事をも、恐れみ薄きやうになりなんと思ふ事のみ多かれば」とて、遂にはおなじ心に涙こぼしてげり。

草木やしなふ者のいひし、「西より吹く風は、草木を枯しきはむ。さるは西より北におよぶべき故なり。北より吹く風は、極まればはや陽をふくむが故に、枯しきはめず」とかや言ひし、げにさもありなんかし。

大凡躬行にてもあれ、人事にあづかる事にてもあれ、政にてもあれ、新なりといふ文字を忘るべからず。日に新なりといふは物かは、事々にあらたに物々にあらたなるべし。昨日の事になれて思ひあやまるも、かねてしれる事と思ひてやぶれとるも多し。彼のかしこき人も、女などに迷ひ、愚なる人に欺かるゝも、一つ〳〵に新ならねばこそありけれ。昨日にくしと思ふ事心にそみ、去年のうれしと思ふこと心につきて離れねば、それより根ざして迷ふとか聞けり。げに日新の教こそ、萬にかよはして身を終ふるまでも忘れなと語りし老人もありけり。

がまのさう―降魔の相か

憂しと云々―藤原清輔「ながらへば又此頃や偲ばれん憂しと見し世ぞ今は戀しき」

りを咎むれば、出でて行くけしきなり。いづこの神の祭などいへば、鹽燒きすてて出で來めり。つひには林の木々も人に伐らせぬれば、いとゞ魚は寄り來ぬまゝに、網もよその物となしぬ。老魚の寄り來ると聞きても、人のとるを見歩くのみなり。今は髮ゆひ候といふ所さへ出で來ぬ。昔は藁もてつかね、なえたる烏帽子ひき入れて居しが、今は都ぶりとやらん見もせぬふりにし、草履かさねたるを音たててきそひ歩くなり。我若き頃は酒のむ事もなかりしが、この村里にも早酒造くる所多く出で來てけり。それらが爲に時費し、財費してみつぎ物の妨とはなるなり。この屋にも久しく住み得んことは難かるべし」など、さま〴〵いふうちに、聞き居しと思ひしが、ふと見れば、いつか寢にけり。翁もあまりの事にあきれて、がまのさうもやめてけり。

或翁がまた此浦回うちめぐりて、おなじ昔の物語に立ちよりたれば、かの翁もゐざり出でて、ひたすらに昔の事のみ言ひ出でければ、「憂しと見し世も、過ぎにし事はなつかしきものぞかし、昔とても益なきものもありき。我が若き時など、庭の教のみかは、その比のはやり行きしかたちを咎められし時、親の古ぶりといひ給ふも、その頃のはやりもて行きし事なるをと、心のそこに思ひし事もありけり。されどげにいと今の若人は、ふ

驚かせば―注意を與ふれば

ども打忘れぬ。世はいと變りにけり、越の國もいまは雪いとうすく、信濃の國の寒さもよそに變らずとかや、この國のかばかり雨すくなきことは、八十の翁も知らずとかや、船も益なきものなりなど言ひてけり。つひに翌年は、田をこと〴〵く川面ちかき方へうつしてければ、芥などの寄りきし所なりければ、山田よりはいと生ひたつ樣もことなりとて、喜びあへりしとぞ。つねに愚なりとて笑はるゝ男計り、はる〴〵鍬かたげて山田をつくるを、指ざして笑ひけり。其年も川面の田はよくみのりけり。

或日蜑の子など呼び集めて、「昔我がわかき時は、布刈り鹽燒くことも汝等が樣にはなかりしぞかし。今は唯空のみ仰ぎつゝ、よく降る雨かな、斯くてはいつしか鹽は燒くらんとのみいふ。もとより鹽汲む業には雨ほどつらき物はなけれど、はや晴れぬ、急ぎて汲むかと見れば、「この晴れしも時の間なるべし。よし鹽汲みても、夜のまに降り出でなば、押流して益なき事になりなん」とて、夕日の輝くにも、たゞ浦回を徒に打ちめぐりて居るを、いかにと驚かせば、「あの向の島のちかう見ゆれば、また夜半には降り出でなん」など、いつしか口賢き事をばおぼえてけり。又あけの日も晴れぬれば、はやく出づるかと見れば、朝寢して晝つかたやう〳〵出でて鹽汲むが、それもいさゝかして早歸りぬ。その怠

五つの道―五常

千里の駒云々―支那の孝文帝千里の馬を卻けし故事、通鑑綱目孝文紀に詳し

王導―晉の元帝に仕ふ、其友反するに及び大義を以て友を滅す

深谷の鶯―詩經小雅に「伐木丁丁鳥鳴嚶々出自幽谷遷于喬木」嚶其鳴矣、求其友聲」とあるをいふ

方は古今など口にはいへど我心に病を牽きつけんとするもありぬべし。

楓の芽の紅なるに、堅の芽の白きを見て、かならず草木の葉は緑なるものとのみは言はじとはいはじ。温泉を見て水の冷かなるのみにはあらじとはいはじ。さるに何くれと、人の五つの道をそなへて生るゝことはさらなり、人はよくも悪しくも生れたるなどと、さま〲疑へることなど、かしこきといふ人さへも言ふとか、いといぶかし。

千里の駒をおくりし者あり、受けざりしかども、忘れがたかりしとか言ひしを、よき事のやうには云へど、さはいかで思ふやと疑はしきやうなるを、いかで斯くはいふらん。かの國のよきといふ人にも、うけがひ難き事もありとや。王導といへるものが、この良友に背きしといひしは、もはら私なり。よき侍をもてつかひ給へば、その道をもて讐むくいしといふも、かの深谷の鶯、深山の梅が香にはおとりぬべしとか。

雨いさゝか降りつゞくと思へば、はや水嵩そふところあり。されば常に船をうかべて、水嵩そひ行けば、打ち乗りて避くることのみ心とす。或年絶えて雨の降らざりければ、かねて水をおそるゝより、高きところに田つくりたるが、みな枯れなんとす。水汲みてそゝがんも力及ばず、とやせんかくやと騒ぐうちに、かの繋ぎおける船の修理加ふるこ

面あらため―易革卦に「君子豹變小人革面」

虎の皮―素書に「羊質虎皮者柔」揚子法言漢書等にも見ゆ

鷄婁―鷄婁鼓、樂器の一種

ぞ多き。其頃の昔物語に聞けば、浦曲の戰のおそろしさに、妻子うちつれて、深山へ入りし世もありしと聞きつるに、月なき空にも心のたのしびを極めぬるは、いかにぞや。かゝる事も、かの若人の老いたる樣するをも、あはせていはまほしけれど、また例の老いほれて繰言いふとやむづかりなん。

人を責むるはあらはなるを責むべしとか聞きし。まづ面あらためたらば善しとこそいはめ。かれは虎の皮著ぬる羊なりとはいはじ。羊にもせよ、虎の皮著たらば、虎にしてこそ養はめ。さらば千里をば走らずとも、羊の力のおよぶたけは走りもしなん。外を責めて内を責めざれと、昔より聞きしを。

藝能ありしものも昔はおほく聞えたれど、今はさいふ計りのものも稀なるにやあらん。すべて昔人はたがへりしや、今殘れる鎧などいふものを見ても、鏃など見ても知りぬべし。天王寺にある鷄婁はいと重くて、今の世の人はかけがたしとかいふ。そのほか昔物語を今にして見ても、今の世のよろづ劣りたる事は知りぬべし。さるに漢の張氏の治法とても、斟酌すべきことをも思はず。ことに張氏は、汗下の劑なんどはいと心をこめて、其兆までも厚く示し置きしをも疎かにし、一つ病の治法をもて、萬の病を療さんとし、

牛のかたなにて—論語「割レ鷄焉用ニ牛刀一」小事を處するに大器を用ひざるに譬ふ

もどく—左樣には非じと批難する

いぎたなくて—朝寢坊にて

まだきに—まだ若い内から

と思ふなり。この心天が下皆さるやうになれば、いとゞ米はうごかず。この村里なんどは更なり、米なき山里までも、何に代へつとも米積ましと思ふぞ、値たかうなる理なり。この心を村里にてよく教へみちびきなば、聊は其しるしもあるべけれ」と、まめだちて言ひけれど、牛のかたなにてと言へる類にやと聞きつれど、老いたる人の言もどくべきにあらずと、聞き居たりしとぞ。

月なき夜半はいと心のそこ澄みまさるものなりけり。海の面くらうして、寄せくる波の音ゆたかにして、磯邊の松にも音せぬ風の、袖にそよと吹きかふに、晝の暑もわすれぬべし。秋はなほ蟲の音もきそひ行くに、千草の花の色も見えて、沖こぐ船にまがふかりがねのわたるも、いづこなるらんと哀なるに、浦のあしべに聲あはせたるもをかし。まいて曉比に月の出づれば、宵の入口の殘れるたぐひにはあらず、海のおもて黃金の波の滿ち來るにぞ、言葉にものぶべしとは思はず。昔いぎたなくて、在明の月にうとかりし頃もありけりと思へば、口惜しきものから、又うらやましくも思へり。それより思ひの移り行きて、實にいにしへは惡しき波にも舟うけて、鰹釣りしこともありし、又はいと寒きころ、海に入りて鮑とりし事もありしが、今の若人は、まだきに老いぬる樣するもの

さきつさが─前兆

らより下し給ふことなんどは、浮きたることに思ふぞかし。かの年のみのりの豐けさ打續きぬれば、それに苦みて何くれといへど、はては必ずたのみ少くなり行く基なるを知るべきなり。されど時たがはず運り來るものならねば、さは思はぬなり。豐なる年に惡しき年の心もたずしては、蟲けらにも劣りつべし。冬ひそまるものは、其蓄へをこそなせ、たゞあさはかに今年豐なれば、はや惡しき年はあらじと思ふこそはかなけれ。世の人みな善きは惡しきの本なるに疑なくば、必ず豐なる年とても、米のあふるゝ事はあらじ」といへば、「いかで人々をして斯くはなすべき」といふ。「さはまだ其心にあらぬ故なり」と田つくる翁のいひしを聞きて、「我輩かすかに其日をおくるを、いかでまた惡しき年の備なすべからん」といへば、「さにあらず、尊き米と思へば、口毎にくるゝも、鳥獸に與ふるも、又は炊ぐにも、其心はありけり。やすしと思へば、このうらとなりて、打ちこぼれぬるも箒もて掃きもずつべし。此心天が下皆同じければ、一日の費すところ如何ばかりと思ひ給ふか。さるを此の豐なるは、惡しきみのりの來るさきつさがと思へば、この一村にても、其心にて一年に米つむ程にもなりぬべし。米たかうなれば、人々積みおかまほしく思ふにぞ、米のいやしき年よりは、積める米おほけれども、猶足らず

もぬけし―人に抽んでし

さして―格別

餘慶餘殃―易「積善之家、必有餘慶、積不善之家必有餘殃」

らびなしとのみ、常にいひ給ひてげり。或日書屋に居給ふ時、末の間の障子をひらき、跳り出でたるを見れば、大なる男のあかはだかになりて、君をめがけて飛びかゝるを、いで心得たりと、刀抜きて切らんとすれば、跳り超え、或は伏し、左へ避け、右へ走りなどして、いかにも打ち得ず。とやかくするうち、すら〳〵と走り寄りて、その刀を取りてげれば、口惜しさかぎりなく、如何にせんとあせり給へば、彼男疊にひれ伏してげり。よく見給へば、外衛の臣下なり。その者のいふ、「君はつるぎの道よくは心得給へども、いまだもぬけし位にもわたり給はず、さる故に自ら負うて得てしとのみ思ひ給ふ。まことに得しものは、たれかよきと思ふべき。さる御心にてましまさば、如何なるあやまちかし給はん。臣はつるぎの道さして習ひしにはあらねど、死をきはめてすれば、臣をだに打ち給ふこともなり難かりしぞかし。これをよく〳〵思ひ給はゞ、御身の過もあらじ」と涙こぼいて言ひしかば、君も殊に感じ給ひて、我が無下につたなかりし事をさとり給ひしとぞ。よくこれらの事を聞き給ひて、悟とやらんの道はやめ給へ」と言ひしとかや。

「世の人のせばき心から、汐の満干の如く、時たがはぬ事はさ思へど、かの餘慶餘殃の、そ

斯るところ得てし人は、今の世にあるべしとも思ほえぬ計り稀なるを、いまだ其事々も知り給はで、いかで得給ふべき」といへば、腹立ちて、「知らざらん人は如何にいふとも、私こそ得しものを、などて君はしかいふ。我が得ざる事を知り給はゞ、言ひのべ給へ」と聲ふるはして言ふにぞ、「それ見給へ、怒をもいまだ捨て得ずして、この身を捨てしと宣ふや。ことに色と酒とに耽り給ふと聞きぬ。それだに勝ち給はで、我身にかち給はんとや。よし勝ち得しとても、忘るてふ事はいと難きことなめりかし。得しと思ふものいかで得ん。君は武夫なれば、弓射る事もて言はん。よく引きてよく放つが外に、弓の道はなし。斯くすれば、よくあたるを知りても、さは出來ぬはいかにぞや。勝負あらそふ時、人多く當てぬる折なんどは、唯それに勝たまほしく思ふぞかし。また早く放つ弓の病もあり、はなし得がたき病もあり、いづれも心の外なるものぞかし。また弓絃のゆるみて我耳を打てば、いとゞ懲りに懲りて、又や耳うたんと思ふぞかし。耳をすつることも得せず、遲く放ち早く放つことだに心にまかせず、人にまくるの口惜しさをも未だすて得ずして、いかでか此身をわすれ給はん。とにかく今は身に行ふことはつもらで、口のみたかくなり行きぬ。或やんごとなき人ありけり。つるぎの道を得てしとて、自ら世にな

さたー評
三玉ー三玉集、即ち後柏原天皇の柏玉集、西三條實隆の雪玉集、冷泉政爲の碧玉集
草庵ー頓阿法師の草庵和歌集
玉葉風雅ー共に二十一代集の一
しなー階
浩然の氣ー盛大流行の氣、孟子公孫丑上に出づ

ぶることも得ず。まいて調はさたにも及ばずなん。かの三玉の比は、あまりに力入れていひ給へば、調の少しいやしきを、たゞ歌は古今集によるべしといへども、目も及びがたければ、草庵などの集によりてよみ習ふ事となりて、たゞすなほに正しかれと思ふより、百首一體にいたり、力もなく味もなく、我がものにもあらぬ風とはなるべきなり。歌は我がものとなりての後に、調のさたにも及ぶべし。まづ今の勢にていはゞ、玉葉、風雅なんどによりて力をきはむべし。我がものとなりし上に、調の高く直なるふりを學ばゝ、遂に千首に一首はよき歌も出來なんと思ふなりと語りしは、もとり過ぎたるにやあらん。されど古今集は、いと巧なる歌も多かれど、一つまことより出でたれば、たくみとは見えずなん。はじめより斯様にせんとしては、しな越えて學び得ざるものとかや。何にまれ花さへ實さへ薫さへ、始より得んとてはいかで得ん。

禪意を得たりといふ者あり、「如何にして得給ひし」と問へば、「我がこの身は天地のものにて、我といふものはなし、我なければ敵もなし、これを彼浩然の氣ともいひ置き給ひしなり」と、高く心得て言ひてげり。「いかにしてその所を得給ひしや」といへば、「思ひ思ひて遂に得しなり」といふ。聞きたる人いと笑ひて、「さまぐ〜聖も說きおかれけれど、

かずまへられ―指折り數へられ
我より古をなす―古規に拘泥せざるをいふ、宋史に出でたる語
敷島の道―和歌の道

るを、今はいと重き事のやうに心得て、其道知らぬもの、其室に入れば、顔あかめて一言も出し得ざるやうに、人の心に染みわたりしも、いと愚なることと悲しび思ふ。さるに君は人にもかずまへられ給ふ身にて、我が如きものを尊び、此道のはかなきをも知らで、いとおもき事と心得給ふ心の低くつたなさは、我もいといやしみ思へど、さすが流れくみ給ふ縁もあれば語りぬ。君いま心たかうて、其身のほどにしたがひ、爲すべき事をつとめ給はゞ、君が手ならしつる器物よとて、千年の後も傳へものすべし。これを我より古をなすといふなり。いやしき我等の持たる器物などに、おほくの財を盡して買ひ求むるのはかなさにては、此のさゞやかなる道とても、心にはいかで得給ふべき」と、はたと睨むと思へば、睡もさめにけりとぞ。げに彼敷島の道とても、それをもて家國治むべきもののやうに言へど、定家卿が、

苔の下にうづもれぬ名を残すともはかなの道や敷島の歌

とよみ給へれば、今の和歌嗜むものの中にも、定家卿の悪み給はんもありぬべし。釋迦の道、孔子の道學ぶものも如何あらんと、人のいひし。

和歌は、只すなほなれとても、餘りに力もなく味もなく、止水の如くなれば、思ひをの

うま子—孫
宗易—千利休、千家の祖
宗佐—宗易の孫、千家表の祖
自らおひ—自負し誇る
あさ／＼しく—淺はかに、

かし。たゞ蓄ひおける主の心は如何ありけん。

狐のよな／＼來るを、必ず餌與ふる者ありけり。かれは獸のうちにて才あるものなれば、斯くしなばかれも惠を知りて、むくゆる事もありなんとて、日每に怠らず與ふれば、かれも慣れになれてけり。或日うま子生れてければ、いと事繁さに、二日ばかり餌あたふることを忘れければ、狐うらみ怒りてや、其うま子を食ひてけりとぞ。

やんごとなき人ありけり。茶たつることを好みて、かの宗易が流をくみて、彼が持たる器など多くとりあつめ、宗佐より今の代々のつくらせたる什器やうの物までも、缺くることなく備へしなどと、自らおひ給ひてけり。或時宗易が像を壁にかけて、「斯く尊びぬるは、我にまさるものやあらん」など、傍の者にもあさ／＼しく言ひて、茶ひきて居給ひしが、かの像より煙のごと霧の立つやうに見えしが、宗易來りて、「我はもとよりいやしき者なるが、物にかゝはらず、心たかき氣象ありければ、太閤のとり用ひ給ひてけり。茶たつる事は一時の心やりにて、爲してもありなん、爲さでもあるべきものなれど、其頃いともてあそび草となりて、さま／＼心にまかせ、つひには法もなく禮もなく亂れても行くべきと思へば、さゞやかなる道ながら、式を立て法を定めて、人にも敎へものした

左様なる事のあらん、君はたゞ遠き事といふがなかにも、人の思ひ寄らぬことを言ひ出いて、人おどろかす事をこのみ給ふ。人はおどろくとも、いかで驚かされん」など言ひて、あざわらひぬ。「彼は必ず災にあひなん、思ひ寄るべきことをも思はぬ人なり」といひし。

むすめの十あまり六つ七つになりたるを、月花にもかへじと思ひたるに、年來飼ふ猫の、むすめが厠へ行けば、必ずあとより跟きて行く。いかに制すれども聞かず。繋ぎおくに、厠へ行く時は必ず知りて、たけうなりて、繩食ひきりて馳せて行く。如何にとたづぬれば、厠の中につと附きそひて居侍るといふ。いかにも心の底知りがたしとて、親なりける者、劒もちゐてかの猫の厠へ馳せ行く時、頭を切りたれば、そのかうべ厠のうちに入りぬ。彌あやしみ驚きて見れば、そのかうべ厠の中なる蛇に食ひつきて、蛇は死してけり。さらば其むすめに蛇の思ひ入りたるを知りて、斯くはありけりと、涙おとさぬはなかりしとなり。宛牛とかいふ事、彼國の書にもありとなり。猫のうらみは如何にといへば、元よりものいふ事ならぬ身なれば、其にうらみもなし。かの蛇を殺して、君の難をすくひぬれば、たゞに本意遂げしなり。もとより功名に心なければ、思ひおくこともあらじ

葉月—陰曆八月

給ふが—此下に「若しよそに出て給はゞ」と補ひて見よ

には何といふ方劑調ずることとなり、それは何々の藥を用ゆ、この箱の上のかたに自ら入れ置きたれば、とり出して調ぜしなり、下に組みたる箱のとて、尊き卑しきのへだてなしと、まめだちて言ふとも、いかで聞きわくべき。障りなくば其心に任するにてこそをかしかりけれ。

ものを引きのばいて、時失ふものありけり。人の早苗植うる頃、種ほどこしてげり。葉月のころ早稻の穗の出でたるに、嵐吹きてげれば、花散りぬと歎くを、「あまりにもの急ぎし給へばこそあれ、我稻は此比植ゑしかば、嵐のわざはひにもあひ侍らず」と人にたかぶりけり。人の刈收むる頃、少し計り穗の見えたるが、はや霜のおきてければ、皆枯れぬ。今年はいと早う霜のおきしなりとて、年をのみ罪して、いまだ悟らざりしとなり。

「君も門の外へ出でて見給へ。あまりに此膝入るゝにて足りぬとて、よそも知らで其日其日をたのしび給ふが、また如何ばかりおどろき給ふこともありぬべし。此頃聞きしにも、君が屋にしのび入らんとにや、劒もたる男やゝ門ちかく寄り來れど、例のうちには知らで、やすらかに樂び給ひたり。もとより其夜はいかゞしたりけん、うかゞひしのみにて歸りしとや。月なき夜半なんどには必ず來るべしと、いふものあり」といへば、「いかで

ねぎ―願ひ

「鳥黐をもて、蠅といふ蟲を多くとりたるを、ふと顯微鏡とて、目も及ばぬものを見るめがねのあれば、それもて見しに、その黐につきたる蠅が、逃げんとして羽を動かすが、はては其羽も黐につきて動き得ず、頭うごかして苦しむもあり、又久しくつきしは飢にのぞみて、よわり死するけしきもあり、たゞに羽をならす音のみ聞きしが、よく見ればいと悲しき樣なりし」と語るを、「さあらんよ」など人の答へしを、「見しと聞きしとはいと違ふものぞかし。見しごとく聞き給はゞ、さあらんなどと計りはいひ給はじ。まいて目の及ばぬあたりの事は、猶心にて見給へかし」と言ひしものありけり。

ある醫師ありけり。病むものあれば、上下えらまず、いとせちに心を盡しけり。いといたう賤しきもの病めるありけり。藥箱いだいて藥調ずるに、その母なりける老婆の、つくづくと見てゐしが、ゐざり出でて、「憚りなることながら、ねぎ思ふことこそ侍れ」とて、いと云ひかねたるを、「何の事にてもあれ、思ふことは打ちあらはして云ひね」といへば、つゝましげに聲ふるはして、「下に組み置き給ふ箱の御藥も賜はれかし」といひけるにぞ、思はずほゝゑみて、「さらば與へん」とて、下にありしが中の障りなき藥二つ三つ取出でて調ぜしが、「必ず其藥はしるしあるべし」と語りぬ。かく愚なるものに、此病

金星草―ひとつばの類、大木の下などに生ず
表衣―袍に同じ

れを花がつみとはいふべし。されば兵の鎧てふものの革用ゆるところには、かつてふことに通はせてつくるを、今は菖蒲革といへど、中のあたりたけ高くして、花の形附けたり。されば疑ふべくもあらぬを」といふをまた傍より、「もと酸草をかたばみといひ、四片ある田字草を花かたばみと言ひしと見ゆ。こは陸と水との別あれど、古は今の様にこまやかには言はず。しのぶは軒に生ふる苔にて、其中にはかの金星草もありぬべし。中比より云ふしのぶもあるべし。一つにして是をしのぶと打ちまかせて云ひし如く、遂に田字草をかたばみと計りも云ひしなり。されば枕草紙に、表衣はかたばみ、あやの紋にもかたばみとあり。かたばみとはかつみなりけり。雑要抄の畫に、四ひらある花の形せし手箱のうへのかたに、花かたばみと記せれば、つひに轉略して、はなかつみとは言ひしなり」といふ。初より何とも言はざりし人が、「むかし人の、かつ詠みながら知らぬなりけりとよみたる事もあれば、いま何ともわき難かるべし。今のこと〲聞きては、四ひらあるのを花かたばみと言ふは、をかしきやうに我は思へれど、人をも其にせんとするは、いと苦しきわざなめり。よし此の一種あやまりしとても、させることもあらじを、强ひてちからを入れ給ふは、せんなき事よ」と言ひてけり。

もてあそび物―詩歌管絃

こゝ―此地

河社云々―以下何れも古來諸說ある語の例也

なく力もなきとはいはん。つひに攻めかねて厭きたるは、智もなく力もなしと返してやいふべきと言ひしも、悖り過ぎたる事にやあらんか。いづれ外國のありとだに知らざるばかりになり行きて、よその國の益なきもてあそび物のみ好みあつめて、いつか此災の深からん事を知らざる輩もありやせんと、かへす〴〵もおそれ思ふとか語りしとや。

今こゝにては黒きを鈴蟲といひ、柿の核のごとなるを松蟲といへど、もとはりん〱と鳴くは松にて、ちんちろりと鳴くは鈴なるを、誤りにけりともいふ。蟲賣るかたへ行きて松のを得んと思はゞ、鈴の方をといふなり。ひとり〴〵に「こは誤りなり、黒きかたは松虫なり」と敎ゆとも、皆それと違へば、賣るものもせん方なかるべし。行燈をちやうちんと云はまほしくても如何はせん。是も誤にならひてこそ世に行はるれ。

ものしり顔なるもの、三人四人圓居せしが、「かつみは菰をいふ、花がつみとは菰の花をいふと、能因法師のさ云ひ給へれば」といふを、「能因さ云ひしとて、あのさゝやかなる花を、花の字かうむらすべき據所あることをいはねば、能因がとて諾ふべきにや。古よりさま〴〵說々あるは、河社にてもあれ、もずのくさぐき、いはとがしは、ゆめのの鹿、とぶひのかゞみなど、皆信ずべしとはいはじ。あさかの沼に四片の花のあやめあり、そ

筑紫に―筑前の箱崎八幡宮
延喜の帝―醍醐天皇
むくり―蒙古

なく病得て頓に死してけり。言ひあてし者に、「いかゞして斯くはいひ給ひし」と問ひければ、「かの人滿面紅潤、斯かることあるべきものならず。いはゞ幸あれば、かならず散財あるが如く、左の方よければ右の方あしきは、天地のつねなり。さるに斯く惡しきところ無きは、必ず其裏に變ずるものなり。一天雲なければ、三日のうちに雨降るといへば、相書にあることにはあらねど、かゝる吉の裏は凶に變るべしとなん思ひしなり」とは語りしとぞ。

筑紫に敵國降伏の額は、延喜の帝の勅願にて、したしく御筆を染められしといふ。敵國は外國をさしての事とかや。むくりの襲ひ來りしことだにありし例をだに知らざる輩もありぬべし。たゞに外國のありとだに、心にとめざる計りに見ゆるやうにも成りゆくべくや。豐臣氏のこなたの戰になれたる兵をえらびて、朝鮮のひさしく戰のことも知らず、怠りすさびたる暗き世の君と臣とを打破りしより、外國はすべて智もなく力もなきものよと思ふ類ぞいとうたてき。武の平氏の末の歌よみなどし、もはら風流にながれたる一族なりとて、弱きものの樣に人はいへども、さすがによく彼が如くはありしと覺ゆ。朝鮮の戰の折、彼國のたちまち破れしは、よわきと計りはいひがたし。いかで智も

ともしび消つ頃—夜の明け離れたる頃

そろへて立つめり。下をあはれむ心はあれど、上の心もて下を見るより、斯くは違ふなり。めぐむ心ありて下の事知らねば、かくぞ有りける。

二人連れだちて相観る人にあひて、「君の仰によて、こたび旅立つ事あり、いかに侍らん見給へ」といひしに、相者見終りて、「二人ともかならず旅にて難あらん、つゝしみ給へ」といひぬ。一人はいそぎの御事なれど、「旅の道にて難あらば、おのづから君の仰も滞るべし。遲くとも難なきに如かじ」とて、ともしび消つ比宿を出で、日の暮るゝ頃には宿をとる。一人は「とみの御使なり、つゝしむとは君命をつゝしむに如かじ。この身はたとひ難にあふとも如何はせん」とて、星をいたゞきてやどりを出で、灯とりて宿をとる。さればことに早く思ふ方に著きてげれば、君よりも賞を得たり。一人の方は遲きとて罪にあひにけり。されば相はともあれ、我がすべき所をつとむれば、難なきものよとはいひてげり。

滿面紅潤の人あり。ひとりの相者見て、「君は必ず祿を得、名を得、壽を得給はむ。あゝその幸まことにいふべからず」と言ひてげり。一人の相者は、「君かならず近きうちに頓の病にかゝりて死に給はん」といひければ、その人腹立ち、袖拂ひてかへりしが、ほど

しれたる事―愚かな事

道路は云々―此文顔氏家訓に「人足所レ履不レ過二數寸一。然而咫尺之途、必顚二蹶於崖岸一、拱二抱之梁一、毎沈二溺於川谷一、何哉、爲二其傍無一レ餘地一故也」とあるに出づと見ゆ

面に牆する―書經に「不レ學面レ牆、莅レ事惟煩」

れど、しれたる事いひてあらそはんはと念じて居しと語りし。

道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは、例の理のみなり。いかで歩むべからん。梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの陳氏のいひたる餘地なきなり。あまりにことに甚しく物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物に對して餘地なきなりと聞きぬ。

目しひし者の、人のいひがたき事をもいふは、色も見えず、氣色にも知らねばいふなりけり。くらき人は我が惡しきも見えねば、よきと心得て人に恥ぢざるは、目しひし人の類なり。されば古より面に牆するなどともいふめり。

或やんごとなき人、「旅の道は早く寢ねて、疲をだにやすめなば、下が下までも憂きことはあらじ。さらば早くやどりを立ち出でて、早くやどりに著くにしかず。これぞ下をめぐむの道なれば、よろこびぬべし」といひける。まづその君、早くやどりに著きて、格子おろし、ともし出して、晝の半頃より寢ぬれど、下のものは我心のまゝならず、人の寢る頃ならでは寢ねがたし。殊に晝のうちはさわがしく、道行く人も絶えぬを、世の人に背きて夜なりけりともいひ難く、寢ねんとする頃、其君ははや起き出でて、夜半に供

道體—道の本體
性理—性命の理氣
良智—孟子「人之所不學而知者良知也」
七つの島々—伊豆七島

たゞに其めぐれとのみの心もて輪をすりするなり。おぎなふ藥とて、いかで別にものを持て來てすりすべけん。たゞに氣血をもとの如せんとなりけり。

聖賢の道まねびて、唐の書など好むものが、ふと禪家の法語など見て、遂にそれに耽るものありけり。或人のいまめづらしく信じ給ふは、道體性理のことに盡したるには心もとめず、日の明きをつねとして、ともしびの力をたふとむ類なり。それも實は彼良智にて、聖の書見れば、心にかゝりて恥しさのおきどころなければ、かの法語など見て、心をおのれとなだむるなりと言ひしはをかし。

相州の日金の峰といふは、いと高き山にて、十州を見るといふ。或人登らんとするよべ、神鳴はためきて、雨は水こぼす如なりしが、夜明くるころは、わするばかり晴れて、霧もなく霞もなし。かの峰に登りたれば、七つの島々も手にとる計り見えて、八丈の島のあなたも鏡もて照しなば、かの人なき島とかいふをも見つべく覺えしを、其者この峰に立ち居て、「こゝに家たてたらば、かの夷の船々いまは八丈に來りけりと、こともなく見ゆめり。さるを此處の岸に早船ならべて、こゝやかしこに知らせんは如何にぞや」といふ。かゝる晴れし日は一年に稀なるを、その日に必ず夷の船來るべしやと言はまほしけ

呂尚―太公望、文王と奇遇の事、史記の周紀に詳し

に、「呂尚が釣垂れて彼奇遇なくば、釣たれし翁と呼ばれん。たゞその時にあひて斯くなすなり。かゝらば後に何といひて、わが才をも知られんと、其人たちいかで思ふべき。これらは凡智もて不凡の人の心を論ずるなり」といひし。

酒過ぐれば彌飲まゝほしく、行ゆるめば彌みだる。わざはひのぞめば、みづから促すものとかや聞けり。

補藥とても、草根木皮もて、天受の缺けたるはさらなり、うちのやぶれしをもいかで補ふべき。補ふといへば、造作の修理する様に思ふぞわろき。先この人は、この天地の氣をもて生くるなり。されば出づる息にふるき氣を吐けば、毛穴よりも其氣を出すなり。又氣を吸ふときは、その如く入るなり。その出で入る氣のいさゝか滯ることなければ、病てふものは無き事なり。さるにその氣滯れば熱をもつ。熱あればものをかわかすなり。其氣の洩るゝをふたぎ、ふたがるを開き、滯るをながし、かわかすを濕すも、皆打ちまかせていへば、氣の滯らぬやうに爲すより外はなし。その滯ること多ければ其害もおほく、滯ること久しければ其害も深し。其急なるはまづ其處を打つ。末をそゝぎて源に及ぶもあり。車の輪のめぐらざるも様々にて、かわけば油さし、油過ぐればかわかして、

初の―君の時を脱するか

ほりする―欲する

狄仁傑―字は懷英、唐の太原の人、中宗の時、梁國公に封ぜらる

初の「物にすぐれし者とても、一二百石の地だに與へかねたるが、わが輩の或は十萬石二十萬石の地を賜ふは、いかなることと思ひ給ふや。たゞに御祖のいさをと、大君のゆたけく大なる御惠なり。しかるに生れてより、かく尊きものとのみ思ひて、なほいやましに位官も人にこえんとし、大路ありく行裝も、わが格よりも高く、わが家の定よりもみやびかにと、市の童のほめなんことをほりするのみにて、内にかへりみる心のなきは、いとうたてし」と言ひ給ひしとかや。

雲の上のやんごとなき君おはしましけり。その御子の御かたはらにまし〳〵けるが、外面より風の吹き來て、ともしびの光定らざりければ、人召して「風の吹き來るぞ、ともしびも消えなん。障子たてよ」といひ給ひければ、父君殊にいかり給ひて、「さやうなる言葉遣しては、歌はいかでか讀むべき」とて、むづかり給へば、御子はいとおそれて退き給へり。御次に居たるもの、いかゞしたる御教ぞと思ひて、御色うかゞひて問ひ奉りければ、「ものを盡していふべきものにはあらず」と宣ひしとぞ。

「武氏の折、狄仁傑などの仕へざまは、斯くあらざれば唐室保ちがたきを知りてこそありけれ。されど若し其中興せざらば、おもねり諛ひし人とのみ言はれなん」といふもの

まとゐ―圓居、集會

いやしき者なりけるが、常食ふべき米をも食はず、ひさぎて黄金にかへて、命にもかへじと、袋に入れて持ち居たるに、秋の末つかた、にはかに水出でにければ、かの袋を首にかけて高きところへ行かんとするに、はや水嵩高くて行くべきやうなければ、せんかたなく、木に攀ぢのぼりてげるが、殊の外に饑に臨みけり。さるに米いさゝか苞にし負うて、水およぐものを見て、かの袋の黄金を見せて、「これを皆まゐらせん。その負ふところの米いさゝか分けて給はれ」といへば、いと怒りて、「にくき男の言ひざまかな、かゝる時黄金もちて何にかはせん」といひすてて、およぎ行きしとなり。

大名といふ人たちつどひ、物語し給ひける時、一人の君のいひ給ふ、「手よく書く人あらば、一二百石の地あたへ給ふや、弓馬の道まれなる計り得てし人あらば、千石計りの地あたへ給ふや。才も秀で、文の道より武夫の道、皆至れるといはゞ、一萬石の地をあたへ給はんや」といへば、「昔はさなんいふ事もありけらし。今はいづこにてもさすべしとは覺えず」と答へ給ふ。「さらば此まとゐのうちの君たち、文の道人にすぐれ給ふもありや、武夫の道もありやと思へど、人なみには嗜み給へど、秀でしことは聞き侍らず、いかゞあらん」といへば、「いかにも秀でしなどいふことは、一ふしもなし」と答へ給ふ。

心風―狂氣

著背長―鎧

面頬―鐵製の面の如く顔を被ふもの

たはら添ふ物、もし心風やまば、いかゞし給はん、男女をも退けて、鐵の櫃に入りても居給はんが、君もし心風やみ給はゞ、いかにし給ふらん」といひてげり。また或者が打刀側をさらず、起居もの〱しくして、いで敵來たらばといはん計りにかまへたる人に、「君寢ね給ふ時、鎧著てや臥し給ふらん」といひし。また其類の人が、鎧をかね厚くして作らせたるを見て、「いかにもまたく備りし御著背長なり、惜しきことには、この面頬の目の穴もふたぎ給へ、矢なんどの此處へ來たらんが危く候ふ」といひし。

四の時うつり行く景色こそ、またなくをかしきを、咲かざるをりの花を咲かせんとし、散るころに散らさじと思ふは、いとくるし。散れば又來ん年は咲きぬべし。いかに心をくるしむるとも、霜白く氷かたき折に、蓮の咲くべきことわりなし。されど咲くを待ち散るを惜むは道なり。散るをもよそにして心とせぬは、道知らぬ心なるべし。

觀相の人のいふ、「ふかき病または災は、いと氣のしづみて見えざるものなり。かの感冒なんどいひて、疾厄宮に暗氣のあらはるゝは、いとあさき事なり。惡しきとても著く見ゆるは、あさはかなり。これをもて見れば、見えざるを愼むがほかに道はあらじ」と。

うとかりし世―耳の遠かりし時

遠慮云々―論語「子曰、人無遠慮、必有近憂」

はぬなり。いざかたみに今日は多く食べ侍らん、うれしや」など言ふも聞えぬ。にくさ限りなきものから、聞きしともはた言ひがたし。まいて隣の物語には、聞き苦しき事も多く、こゝやかしこの言葉より、鳥の聲、蟲の音、遠近もらさず聞ゆれば、かしがましさいふ計なくて、耳ほどうるさきものはあらじと、うとかりし世を戀ひしとものせしとかや。

或翁に、「かの人はいかなる人にか」と問へば、「いとよき人なり」と答ふ。「彼は」といへば、「よき人」といふ。必ず彼をば惡しきといはんを選びてたづね見るに、よき人と答ふ。「いかなることぞ」と尋ねしに、「人を見るには、まづ十にして五つ計も善き事あるは、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよき事あるは、よき人なり、十にして皆惡しきをば、惡しきと心得給へ」といひしとぞ。こは人をかく見るなり。我を見るの道ならず。よきも惡しきも、輕きと重きとのわかちもあらんかし。

遠慮、遠謀せざる人は、とみの災にあふことは、人の知れることなり。その遠慮遠謀に似たるやうにても、殊更に物おぢし、例のことわりに屈したる心より出來れば、なほ人のものわらひとこそはなりぬれ。かの物おぢして、何くれと心くだくものに、「君がか

むづかり―怒り

必ず二三十人乘り出づるが、おほく死して、かへるは二三人に過ぎず。まづ高浪見ては膽をけし、食乏しきを見ては心を痛めなんどするやからは、おほく死に絕ゆると聞えぬ。よし人なき島へ著ても、さも知らぬ木の實とり食ひ、知らぬ鳥とらへて、其皮をはぎて身にまとひ、肉をほして食にたくはふなんど、事にふれて心の極りなく、常度うしなはぬものは、必ず異國の人にあひても欺かれず、つひに命またうして歸るとかや。されば一船のうちの英雄、かならず生きのこりて斯くあるなりけり。

仙人の傳へし藥とて、いと耳のさとくなるを持ち傳へたるありけり。耳うときものが、「今いひ給ふことは何ぞ」と、二度三度問ひかへせば、人も笑ひて言ひもせぬさまなり。聞えぬまゝに打ちもだし居れば、また笑ふさまはさすがに見ゆめり。餘りの恥しさに、かの藥を乞ひうけて飮みしかば、にはかに耳いとさとくなりしは嬉しきものから、餘りによそのよその事までも洩るゝことなく聞えけり。米かしぐ男が、「此飯に蟲の這ひ入りたるが、言はばむづかり給はんの恐しさに、ひそかに取り捨てげり」と、いとひそかに言ふもはや聞ゆ。知らぬ樣すれど、潔疾あれば、聞けばいといとふ心ありて箸もとらねば、また彼男等がさゝやきして、「よべ酒の過ぎ給ひつらんと思ひしが、果して見入れもし給

「神は我なり、外にもとむべからず」と言ひたる人に、「そはかの剝の卦に、陰もまた然り、聖人いはざるなりとことわられしは、いまだ至り深からざりしにや、といふが如にこそ。」いで神は我なりと思ひ給ふならば、またよく思ひて見給へ。我がごとく色にそみたる神ありや、酒好みてほど知らぬ神ありや。見るものに奪はれ、聞くごとに心とられ、人に欺かれても知らざる神ありや。たゞ神は人なり、我は神なりといふは、いと易かめれど、正しく直き神德の、曇ることなく照さゞることなきを得て後にこそ」

攝津の國に川あり。その川の末に、かの酒つくる所ありて、その川水を汲みてつくるが、天が下にすぐれし酒とはいふなりけり。川の上には穢多といひて、獸の皮などつくるものが住み居て、川の中へ杭をたてて、生皮をさらすこと常のことなり。或年其事をいひ出でて、この酒は神にもそなへ佛にも奉るものなるを、皮ひたす川水にてつくらんは如何にぞや、穢多なるものをば、川の末へうつして給はれ、と訴へしかば、つひに其如くなりにけり。其歳より、いかに酒つくれども例のごとあらねば、今はひそかにまた其皮ひたす水の末汲みてや造らんとすらん。

年々東の國へ吹きながさるゝ船子ども、命またうして歸り來るものもあることなり。

煙柳―柳形の煙火

戸ごとに云々―漢書に「天下家給人足、頌聲並作」とある類

あるなれば、必ず陣はらひて歸るまじ。煙柳をも打せてけるが、折節一叢の雨雲に入りてけり。されば音のみして姿は見えざれど、煙柳と心得て、山の左の谷間より打出づべし」と書いたりければ、大將もほゝゑみて、廻し置きたる兵をさがし得て勝ちにけり。

戸ごとに富み、家ごとに足るなどといふは、如何なることにかあらんといふに、風俗質朴にして、上下の制あるをいふ。おの／＼その分をまもらず、奢に流れもて行かば、貢みな民にあたふとも、富みたることはあらじかし。

三年四年、門より出づることもなく、夜も寢で書のみ見居たりしが、つひに病出來にけり。「ふみ見るは病のもとなれば、我はせず」といへば、「君は酒飲み過ぎて病出來たる人を見て、酒やめ給ふや」といひし。

何にかへじと思ふみどり子の這ひまはるを見て、「げに此子は行末才も秀でぬべし。ちぶさ見すれば、ひたすらに這ひ行くめり。心にさからふことあれば、有りあふ物にて人を打つ。我が此頭の疵を見給へ。この子の煙管もて打ちしあとなり。親とても心に違へば、斯くするぞ心のすなほなるなり。年のほどより力もありて、此疵をいでかしにけり」と、あとおしなでて賞めぬるを、愚なる者も笑ひにけり。笑ふ人よりは賢き人なるが。

庭月―花火の釣火の名

國を治むるは、忠のいと重きものなり。たゞにまた悪しき事諫め、よき事をすゝむるとて、その諫むるにも、さま〴〵のほども道もあるべし。その善きの悪しきのといふも、斯様のあさ〳〵しき人、よきといふも必ずよきものかは、悪しきといふも。

「花の咲く比、雨ふり出でたるに、風さへ添ひぬれば、必ず花の時雨風のうさ添ふならひにて、人の世の別れはなるゝ理見する事にこそ。さりとてはつらき雨かな、うき風かな」といふを聞きて、「雨降るとても五月雨のやうにはあらず。はげしきとて夕立のやうにはあらず。風そふとても、秋の末つ方の野分、または凩のやうにはあらぬものを、花を惜めば、ことさらに雨も風も世になきやうに思ひ給ふか」と言ひき。

昔いくさするとて、互に陣をかまへて居しが、敵の方にて大なる音の三つ四つしてげり。されば知らせのあるよと、備をたてて待てども何のけしきなし。人を出してうかゞはせければ、ほどなく敵の使者をとらへて來りぬ。たづぬれど答へず。兜をとれば、鉢のうちに消息あり、封押切りて見れば、「かねて定め置きたるごとく、庭月の相圖せしが、いかゞしたりけん、火うつらで落ちぬ。三光の相圖したるが、一つの星は火うつらざりしかば、二星とや思ひたがふらん。二星ならば陣はらひて歸れとの定なれど、三光にて

みづからおふ―自負す

詠歌大概―藤原定家の著

日々に新なる―大學に「湯之盤銘曰、苟日新日日新又日新」

れば、左右の齒又拔けて、遂に半は落ちてけり。殘ると見るも動きゆるぎて、無きに劣るさましてけり。彼生れてよりやはらかなる齒の男は、今に變らず、齒一つも落ちずとて、又今にては自らおふを、齒なき男、齒ぎりして怒らんもなきをとて、人も笑ひにけり。

傍より言ふことは、いとよく當るものなり。彼人はおとろへ給ひしといへど、かゞみ見てもさは思はず。かれは今斯くすれど、後には悔い思ふべしなどいへど、知らざるものぞかし。私の心だに無くば、かたはらにて見ると同じかるべし。

詠歌大概に、情は新を先にすといふことを、何くれといへど、こは彼日々に新なるといふ心ばへにて、流るゝ水のごとし。されば善きを惡しく、惡しきを善くなどひき違へいふは珍しきにて、新しきとはいはじ。花を雲と見、雪を花と見る、幾度いふとも我がまことよりいへば、いつも新し。心してわざといふは新しきといふものならず。われ愚なれど、親に孝し君に忠する事は知れり。されば別に書見る事もあらず、誰かこの二つの道を知らざらんといふは、いと知らぬなり。かの曾子とやらんの賢き人も、打たるゝ杖によて、おもき不孝となりし事を知らざる類もありけり。まして君をたすけ

腐腸伐性—枚乘の七發に「甘脆肥醲、命曰腐腸之藥、皓齒蛾眉、命曰伐性之斧」

へさし入れたる針をぬけば、絲筋のやうに血のはしり出でて止らず、つひに爪の色もうせて顔も青ざめにけり。かくても心をいためず、樂むものあらんや。また誰か斯樣のことをせん。人の身にとりても、腐腸伐性などいふこともありしとぞ。

藥の病に應じて、その人の運よき折は、飲みくだすより心地よく覺ゆるものなり。運あしき時は、其藥飲めば、或は膽にさはり、又はけのぼりなどして、病因の外なる事にさはり出來るなり。押して用ふれば、功をなすくすり、病に應ぜず。其人運よければ、たちまち其さはり見ゆ。運惡しければ其さはり見えず。必ずしばしよきやうに見ゆるは、病の沈みてにはかに災をなさず、たゞその枝葉のうれひ癒ゆるやうに見ゆるなり。救ひがたきに至りて人々彼藥應ぜざるよといふ。是もまた藥のみかは。

齒の固きものありけり。石など噛みくだくをほまれのごと思ひにたり。一人の男は生れてより齒やはらかにて、固きもの噛むことを得せず。さるに彼石くだく男、齒の一つ動きて脹れ痛みければ、この一つの齒の爲に物食ふことも心よからずとて、物を打ちあて、其齒を拔きてけり。其よりまた昔へかへりぬるとて、石など噛み碎きければ、人もみな褒めのゝしりたるが、一年もたゝざるに、彼打ちあてし隣の齒、殊に脹れ痛みて拔けた

小松の内府―平重盛

浮屠氏―僧侶

をいかでさはし給ふ」といへば、「燒け行かば遠きも近くなりぬべし」といふ。「風よければ此方へは來らじ」といへば、「風かはりなばさはあらじ」といふ。人みな笑ひぬ。或日いと遠方のなりしが、風とみに吹き出でて、またゝくうちに燒け廣り、彼男のあたりも燒け失せぬ。火しづまりて、近きあたりの者等、もの食はんとしても器ものなしと歎けば、彼男したり顏にて、「貸してまゐらせん」とて、「かの繩を引きたぐれば、鋏よ櫛よなどいふもの引き上げつ。また袋のうちより器物など出しつゝ、「つねぐ\人に笑はれずば、いかで斯る時ほまれしつべき」と言ひしを、げにもと言ひし人もありしとぞ。

小松の内府が、平氏のおとろへ行くを見んよりはとて、早く此世さりてんと願ひしと書いたれど、元よりさせる事はあらじかし。若しありし事と見ては薄き心とやいふべからん。猶ながらへて平氏のならん果をも見、力の及ぶたけはあやまちを救ひて、いさめ止めつべきを、はやく此世さらんと思ひしは、げに薄き心なるべし。例の浮屠氏のあとより言ひたることとなるべしと、人のいひし。

肉腐らす膏藥をはり、血をとる針をさすに、藥のつきたるあたりを見れば、血色かはりて、今日は一寸ばかりも腐れぬといふがうちに、肉つきて臟腑に腐れ入りぬ。また絡

升に云々―吳志「車載斗量不レ可ニ勝數ニ」

御神―德川家康

道春―林羅山

伊物―伊藤仁齋、物徂徠、藤樹以下何れも米學以外の人也

調度―手まはりの道具

說をひらきて、直に聖の旨を得んとは如何にぞや。その秀でたる大儒のいひ給ひしところをさへ、あとより見れば疑ふべき事もあるならひなるを、君がほどなる、書生は、升にはかり車につむ計なるを、互にこれぞ聖の旨なるといふとも、たれか一定すべき。さあらば甲の說を乙はそしり、東の論をば西にてやぶりて、かの升にはかり車につむべき輩、さまざまの說をいひのゝしり、湯の沸くが如く絲の亂れたる如くになりたらば、誰かこの學を維持すべき。それが故にみだれたる世のいまだ治らざるうちに、はや御神のかゝる事をはからせ給ひければ、道春といふ人をあげ給ひて、代々の學のめあてしるしをたてて置き給ひにければ、藤樹、蕃山、伊物の徒出でたれども、おほやけの學の道はかはる事なし。もし人の心のまに〳〵、己がさま〴〵論說を經文に加へなば、代々の大君の御說々よりして、諸侯大夫をはじめ、思ひよること言ひたらば、何をもて後の世を救ひなん。斯かることだにいまださとり給はぬ人が、おのが力をもはからで何くれといふは、いかなる心にかあらん」と言ひさして、ためいきして居たりとぞ。

いづかたに火ありと聞きても、ありあふ調度なんど繩に結ひつけて、井のうちへ入れつ。水に入れがたきものは袋やうのものへ打入れて、かたはら去らず置きぬ。「火のかく遠き

して之を相剋と名づく
七星―北斗星
吹返―兜の眉庇の左右に添ひて出でたる耳の如きもの
程朱―二程子即ち程顥、程頤及び朱子
牛のしりへ―「寧爲二鷄口一、無レ爲二牛後一」

き事よとて、吹返もひねりかへしとかいふになし、なかには鎧も著ず、澁染の羽織てふものなど肩にかけて出づるを、いとたかく潔きことのやうに覺えて、まことの侍は斯くよといふ樣になりにけり。それより其頭の大將の鎧のいと賤しきを、のちに見て大將と見受けられざるやうに、雜人にひとしきを著給ふものなりと、あまりなる事にまでいふことにはなりにけり。すべて世の中の習のくだりもて行きしことをば、これを見てもかれを見ても知るべしと答へしとぞ。

或人の問ふ、「朱學とやらんいひて、程朱の説ける事をのみ尊びて用ひ給へど、程朱の説においても疑ふべきこと少なからず。たゞ學は聖の道なり、古今に通じて聖の旨をもて折衷するにはしかじ。など牛のしりへになり給ふや」翁の答へしに、「問ひ給ふ旨は聞えたれど、程朱の大才絶倫だに、まだ此のところは如何など疑ひ給ふ事あるにて知り給ふべし。かの國の大なるに、人も多く、そのうちに秀でし人の、かの國の人かの國の文字をもてまねび得たるなれば、我國の人の及ぶべきにあらざることは知りぬべし。まいて宋、元、明、清、大儒たち皆その説を尊信したるを、この比書物讀みていさゝか此のあたりの人に知られたるのみの君が、その宋、元、明、清の大儒の上に立ちて、それらの

ゐや—禮

心ことに—特に念入りに

ことそげたる—簡略にしたる

相生相剋—木火土金水を五行といひ、木より火、火より土と順次に生ずるを相生といふ、又其反對に木は土に、土は水に剋つと

の中に立ちがたく、ことに必ず罪せらるべし。されば遠矢に大將など射るも、ゐやなきことなれば、それが爲に聲かけて後に射ることなり。かゝればこそ代々ゆづり傳へてし鎧をも著、いさゝかも後に名を殘さんと心ことにひきつくろひ、これぞ最期のいくさと思へば、身に負はぬ直垂までこひ得てしと思ふ心のみなれば、鎧も今の如くことそげたることは爲ざりしなり。其のふりもやゝ衰へてより、馬を射て敵を討ちとめんともし、欺きたぶらかしても勝ちてんとするより、おほくの人とりこめて討ちしことも、背よりひそかに來りて討ちとめし事もありしなり。故にむかしは、鎧の弓手の方と前の方計り心こめて作りしが、源平の頃よりは、はや前も後もひまなけれとつくりたて、兜の鉢も前後おなじく作りなせるをもて、その時世を見ることとまでもなりにけり。それよりして南北朝の比よりは、いよ〳〵みだれたる風になりてけり。室町の比にいたりては、花奢よりして高上のことわりをも加へ、かの相生相剋などいふより、七星五行の數などに引きかけて、事むづかしくいひもしたり。田舍の武士どももみな貧しきに、つくりなすものなく、物具かゞやかす力もなくて、京風の花奢高上なるを惡しざまにいひて、戰とてもたゞ命棄つるのみにて、難いこともなきものを、さま〳〵の縅毛の鎧などいとめゝし

肅殺―秋の氣の物を損ひ枯らすこと

文龜天正の頃―文龜は元龜の誤、正親町天皇の頃

うちもの―太刀かたな

だ哀樂喜怒の四も、みな樂の哀、樂の怒にて、いはゞ秋は春の肅殺、冬は春の閉藏なりといふに　じこととなん思ふとなり。

昔の鎧と今のとは、いかで斯くまでは違ひしにやと、問ふ人のありけり。このわかちは、代々の昔のふりを能く心得ぬれば明かなるを、さはせで、いくさといへば文龜、天正の頃の、近きことのみ聞覺え、むかしのこと書いたるをば、かゝる事ありしやなど、夢物語のやうに心得て、かの甲斐の國の何とか云ふ人の記せるものと僞りいひしをまことゝして、今の鎧のよきなど思ふたぐひぞ多かる。まづ古のいくさは一人々々に道をみがき名ををしみ、譽を後に傳へんことのみ思へば、御祖のことより言ひいでて、みづからの名を呼はりて出づれば、敵の方よりも劣らじと、同じく名乘りて出であふなり。さればかたみに物音もせず、目のごひてこれを見る、その打合ふなかにも、いで組まんと聲かけて、うちもの棄てて寄り來れば、力かひなくして、必ず打ちがたからんと思ひても、さいふ時に組までは名をけがすにぞ、命棄つる道に二つはなしと思ひ極めて、己もうちもの棄てて組合ふなり。組みしかれて首とらるゝまでも、靜りかへりて見ることなり。敵より組まんとてうちもの棄てたるところを斬らば、たやすく斬り得べけれど、名けがれては武夫

牆に鬩ぐ―詩經小雅の「兄弟鬩₂于牆₁外禦₂其務₁」この語に取る、子等の相爭ふをいふ

六十にて耳順ふ―論語に出づ

子にもち給ふが、折々つまは君と爭ひ、その子も互に牆に鬩ぐに、君もあまねき心にはあらずや、子を見給ふにも、深き淺きのかはりあるは、よそより見てさへなにくれと言ふとぞ。さゝやかなる家のうちも治らず、今日の煙も立て得ぬとなん聞きぬ。みづからを思ひ給ふの淺きにや。打ちまかせていはゞ、いづこを見る心も、みな深からずや、よく言にはいだし給ふ。彼の憂國の心あるべし、憂國の語あるべからずとも聞けり。言にいだすは心の深きにはあらじとか。

我誠より貫き出づれば、見ざる事も見え、聞かざる事も聞ゆめりといふは、いと至りしことにて、それをばかの孔子の君も、六十にて耳順ふとも宣へりしぞかし。さるに我輩の色にそみ香にめづる心はさらなり、いさゝかもほりする心あれば誠をおほふにぞ、そのさかひに至ることなし。弓いる道を得て、かの妙なる奥意得しものは、弓にはまことのはしをも得べし。弓に得しとて、それをもて馬に乗るべしと思ふべけんや。みな道知らぬより、たやすからぬことを、たやすきやうに言ふかといひし。

聖の樂むてふことは、天地の心なり。天地の心は常に春なれば、いつものどけからぬ事なし。苦しきを樂むにはあらず。苦しきは苦しく、嬉しきはうれしきに外なけれど、た

不動智—外物の誘惑を斥くる明白正大の智慧
聖の書—易繫辭上傳に「易无レ思也、无レ爲也、寂然不動、感而遂通ニ天下之故ニ」とあるをいふ
いつか—いつしか

大なる松杉は、さゞやかなる岡には生ひ出でず。童何を知らんなど思ふ心より、をさなき者のいふこと爲すこと打聞きては、おどろき感ずれど、皆人なみの事にて、年たけしものは元より遙にまされど、さあるべき事と思へば、感ずべき事をも感ぜずなん。才ある人の、佛の道など信ずるは、佛の道は聖の道より高きにもあらず、明かなるにもあらねど、佛たちのよくは斯ることと知りけりと思ふより、おどろき感ずるもあるべし。彼不動智とやらんを世になき高きことゝいへど、いつか寂然不動天下の故に通ずるてふこと、聖の書にもあるを味はずや。すべてあなどる心よりわざはひを受くると知るべし。古の英明の帝をはじめ、すぐれたる人ら、女わらべにたぶらかされて、後には制することも力及ばで、みだるゝはしを知りつゝ、打ちもだし居し人もありけり。これも彼のいかで知らんとあなどるが故に、いつか斯くはなるとや。

諫は明かなる所より入る、讒はくらき所より入る。たゞ代々の帝のほりする所の、心のまゝならぬものは、我身と我名の二つなり。その二つをそこねんと聞けば、いとおそろしく思ふべらなり。かの其のくらき所より入れば、遂に賢も疑はれなどするとかや。

天が下の御事などをさま〴〵心にかけ、心くだくさまに語るものありけり。君はつまに

延喜のみかど―醍醐天

菅原のおほちぎ―大臣道眞、おほちぎはおほいまうちぎみの略なるべし

鯀―鯀を用ひて洪水を治めしめしも、九年にして功用來らざりしをいふ

管蔡―周の文王の子管叔、蔡叔

或人の、「かしこきを擧げて政を任ずるほかに、國ををさむる道はなし」と、事もなげにいふを聞きて、「如何にさはいひ給ふや。我國のみかど多きが中にも、延喜のみかどをこそ聖の代と今にもいへど、菅原のおほちぎの事なんども聞ゆるぞかし。二十餘りの代をつみしがうちの、唐國のみかどの多きが中にも、かゝる人をいかで用ひ給はざりけん。この人を用ひ給ひし故に、遂にかゝる事出來にけりなど、いふことも絶えぬぞかし。堯舜三代の初には、もとより聞えねども、それも後の世の如くはしく記しつたふ書あらば、また後々のさたもありぬべし。はやそれにも鯀とかいふ人を用ひて、その職にかなはざりしことも、管蔡の君のわざはひせられて、聖のしばしぬれぎぬ著給ひしこともありしぞかし。さるに君はたゞかしこき人を用ひて任ぜよと、こともなげにいひ給ふは、聖にもまさりぬると思ひ給ふや。事のあとより見る如くならば、人を知るの難きなどとはいひ置き給はじ」

理なきが理のまことなり、理のごと行はるゝ物ならば、何の難きこともあらじを、さも知らで人とあらそひ、政を譏りなどしてたかぶるものは、理のまことを知らぬとやいふらん。

能坂長範—嘉應承安の頃の大盜賊

鈐錄—兵書

藍より色よき—「青は藍より出でて藍よりも青し」

といへば、室町の比の庭の殘れるを見ても知るべし。野山の景色なすも、また假につくりなせしなり。實にさまぐ\の石などおもしろかれと爲したるは、おもしろからぬやうもなし。翁が庭はといへば、おのが儘になすにて、古の庭などの意とも違へば、心高きわけもなし。紅紫の色はよきとて賞しぬれど、衣にして翁など著まほしとは思はざるなり。我心に違へばそしるは、みな道理知らぬもののすることにや」

或人のいふ、「われは劍難の相ありといふものあり、いかにして劍難をのがれ侍らん」翁のいふ、「もののふの劍難の相あるは、いとたのもしきことなり。たゞ忠孝仁義の道にたがはざるのみ。楠正成も劍難なり、熊坂長範も同じ相なるべし。正成帝の召に應ぜず逃げかくれなば、劍難にも遁れん、されどたれか賢人忠臣の名をもて賞すべき。觀相はつたなきわざなり。聖人の中道いづこにかさはるべき、いづこの道かまさらなん」

兵は今日にありとて、正心より治國の事など經書を書きぬきして、わが物がほに說くぞをかしき。鈐錄はさながら今世にある流のたぐひならず。火術も自得流は開けざること多けれども、その比、人に先だちてかく思ひそめしは殊勝なり。斯かるさへあるをと勵まば、又藍より色よき例もあり。とにかく志を勵ますべきことなりかし。

奈須の與市云々—扇の的の事平家物語巻十一に詳し

たゝずまひ—様子

木野狐—碁盤のこと、拊掌録に「人目₂棋枰₁爲₂木野狐₁言₃其媚₂惑人₁如₂狐也」と、以て茶人の碁客を譏る所以を知るべし

奈須の與市は、弓の上手にてもあるべけれど、馬を海に乘入れて、風に動きてさだまらぬ扇を射んといふは、いと難きことなり。射損じなば、死ぬべしといふも、さもあるべき心なるべし。たゞ扇にのみ心ありて放ちたりとて、必ずあたるべしともいひ難かるべし。さるに心にたちかへりて、神に祈念したるにて、心は内にとゞまりて外へ馳せず。つひに思ふ矢つぼ違はざりしは、我心のまことへかへりて、神明良能の妙の出でしなりといひしが、さあらんこともありぬべし。

或人の庭見しが、松の枝をため葉をすかし、一草一木みな作り立ててけり。まして石などは、様々の色あるをも竝べわけ、大なるも小なるも、たゞずまひをかしくなしたるを、翁ことに褒めにけり。かへりて後に、「翁のつね好み給ふは、草は階前より立ちのび、松も檜原もおのが儘になしおき給ふかと思へば、今日の庭をば殊にほめ給ふはいかに」と問ふ。「何もさせる理なし。世の人我が好むところにあふものをばほめのゝしり、心にあはぬものをば譏りなどすれど、理盡して思ふにはあらず。茶たつること好むものは、碁など圍むものを見て、惜しき月日をむなしくし給ふ、木野狐の名をわすれ給へりやなどいへど、茶たつるも一時の心やりにて、よき悪しきいふべき品もなし。いで此庭

ほりする―欲する

つる心ありて、いかで迷はじとはいはなん。昔は人の心すなほなりければ、冑著るにも髻の中に、信ずる佛など入れて、いくさにも出でてげり。或は奉納寄附などし、敵に勝ち、本意遂げんことを願ふ輩もおほかりし。もとよりよき事にあらぬはいふにも及ばず、士卒の心をとるには又あるべきことなり。いまは女にても大方に神佛のことをそしり、なにくれと高きこと言ふ輩ぞありける、かれら生死の道はさらなり、色香に迷ふのみかは、聊のものにも心とられぬものが、高きことといふは、皆心に問はゞ恥ぢぬべし。されば佛の道に迷はずといふはよき事なれど、直なる心失せたるなれば、むかし人のをかしきまでに、佛にこび僧にへつらふよりは、劣れりともいふべからんかし。斯樣の事は、よく我心に問ひて後にいふべし。神佛に祈りて病を去らんとし、得がたき位を得、職を得んとし、聊もほりすることを遂げんとする心は迷なり。されども其迷に淺きと深きとありて、又おのづからまことの道を得べきはしとも成るべきことにもあるべければ、強ひてまた深く咎むべきにもあらじ。生をもとめ死を惡むよりして、もろ〳〵の强ひてほりすることあるが中は、このまよひ實に解けしとはいひ難かるべければ、まづ餘りに高きことなど言ふは、心に問ふまでもあらず、我程をも知りて愼むべし」とか言ひしとぞ。

ねぎごと—願ひ事
勅願所—天子の御祈願あらせ給ふ社寺
もぬけ—超越し
まめだちて—本氣になつて

むもあるぞかし。また其修法において、ねぎごとなどするを、いと無下なる事といふべけれど、唐國にては、名山大川などに祈るといふも、こゝらには古より勅願所の、祈願所のといふも少なからず。さるを、もぬけぬることは、まづ易の道をよく心にいれ、生死の道に疑なきにあらざれば、この迷は解けがたしと書けり。たゞに血氣にて今いふは、いとうきたる事になりぬべし。藥は我がいとふものなり。病みて死ぬとも藥はのまじなど言ひ、または酒に醉ひて、我が恐るゝものなしなどいふ類にて、皆醉事なり。それら病にかゝれば、殊にあはれげにうなり出して、藥與ふれば押しいたゞきて呑むめり。この苦さを退く呪よといふとも、まめだちて受けぬべし。また彼酒の醉さむれば、もとより拙き心はかはらず、何とかいひけん忘れにけり、其折人は怒りはし給はざりしやと、心にかけてものも食はで居るたぐひは、皆何知らぬものの、血氣にて神佛そしるたぐひなり。我慢つよきものは、たとひ病む時藥のまずとも過しぬべけれども、心に尋ねたらんには、人だに見ずは飲まゝほしくやあらんかし。沖漕ぎ行く船のうちにて、波風のわざはひに遭へば、髻きるもありぬべし。今この疊の上にては、いかでさありとも、我はなどて、など言ひ給はんが、さもなきものぞかし。其上生死はさらなり、色に迷ひ香にう

伏陰—夏になりて陰雨多く氣候の不順なること
愆陽—冬期にをさまりかへれざる陽の氣、國語に「冬無愆陽」夏無伏陰」こと見ゆ

れど、みやびは花のかをりの如く、物のうるほひの如し。まいて彼國の文字をおぼえて、書よむとも、文字のつかひざまにて、深さ淺さの違ひめあるものにて、彼國の人のごとは、知り得がたかんめれど、さすがに漢詩つくり文つくれば、おのづから言葉の外なる心をも得るものとかや聞きぬ。されば爲すにはしかじかし、などてこれを禁ずべき。

夏は麻の衣を著るべし、冬は綿入れし衣かさぬべしといふは理なり。されど伏陰ある折は、夏も綿入れし衣きることもあるべし。冬愆陽ある折は、一重袷の衣をも著るべし。さるを理の如くせば、また病をも得べし。今の世たゞに理のみいひて、國を治め人を治めんとするものは、斯かることやありつらん。

神佛を信ずるものを見て、「いと愚なることなりかし」と、若き男打寄りていふを、「君たちは年若くても、佛なんどの道にまよひ給ふ事なしと見えたり。いかにして斯くも心の掟正しく修し給ひしや、いと尊き事にこそ。翁はもとより愚なればにや、近き頃やゝまよはじと思ひぬれど、そをだに心の修行怠りなば如何あらんなどと思ふぞかし」といへば、「いかにさは宣ふ、地獄極樂の無きことは、今の世誰か知らざらん」といふ。「神佛にまよはじとは、その地獄極樂のことにはあらず、佛道心法は唐國の博學の人たち、好

かはらじと、心の中に思ひて、聞き居しもまたをかしかりけり。
遠からぬ頃より、夏のうち、疫とて病めるがいと多し。はじめは泄瀉し、又は熱甚しく、汗流るゝごと出で、舌は變ぜざるもあり。たちまち譫語妄語し、大渴となり、あるは發狂す。大陽の症なりとて發表し、或は下劑投ずれば、二三日にして虛症と變じて死す。かゝる傳經の早きはなかりけりとて、或は初に附子用ふれば、彌乾燥甚しくなるなり。みな匕をすててけり。さるにはや傷寒論には、喝病のことを記して、汗下も温もすべからざるよし書いたるが、其後代々それを知るもの無くやありけん、回春に至り其事を委しく記すを、今はかの古き方をせになすものら、回春などはおくれたもののやうに覺えて試みず。ひとり其をもて治療すれば、たちどころに癒ゆ。癒ゆればさしての病にてはなかりしといふ計りなり。また近き頃より、腹いと痛みて、水を吐く病おほし、疝とし、又は飜胃などにあつれども、多くは治しがたしといふも、心用ひざるにやあらんかし。亞科は何のやまひ見ても胎毒とし、つよき藥投じて事去れば、藥力及ばざりしといふ類ぞおほき。いと多くていと少きものは藥師とか。
學問は人の道まねぶことなり。漢詩つくり文つくるはせんなしと、よく人のいふことな

附子―とりかぶとの根に生ずる芋頭の如き物、毒藥
傷寒論―支那漢の長沙の守張仲景の著にして、漢方醫の金科玉條
亞科―小兒科
事去れば―患者が死ねば

つき〴〵し―ふさはし、似合はし
野分―秋の暴き風
おどろ〳〵しき―物凄き
よみ―數へ

山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。つねに聞きなれし筧の水の音までも、哀ふかくこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいてやゝ夜寒のころ、鳴きからしたる虫の音の、雨のをやみにかすかなる聲して、枕ちかく鳴きよるも哀なり。この雨に木々も染めなんと思へば、茸なども生ひ出でなん、栗もはや落つべしなどと、童のものさびしげに、燈火にむかひつゝ言ひ出づるも、げにさま〴〵なり。夜ふかき鐘の音の打ちしめるものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、待つ夜、別のおもひまでも思ひ出で、鐘つく人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつり行きてひとさかり見するも、尾花の露おもげに打萎れたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりも、つき〴〵し。朝顔のみな枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝過ぐるまでもしぼみ遅れたる、又あはれなり。野分の風は、おどろ〳〵しきものから、雨は夕立に劣らざれと、さすがに哀をそふるは、秋のならひなるべし。時雨のざと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。月よりも闇の夜よりも、哀ふかき物には侍らずや」といへば、斯様に言ひならべては、げにもといふべからんが、一年も降る心地して、よみ見れば、この雨は一昨日より降りいでしをと、思ふ心は

かたみに—互に

ふつゝかなる—不細工な

ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹きおちたるに、柳蓮葉なんどの、葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の、間遠におちたるが、後にはしきりに降りきて、物音もきこえず、土のにほひ來たるもいと心地よし。軒端は玉のすだれ懸けたらんやうに、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つみづうみとなりて、あるは瀧おとし、または水はしらせたるに、人々しばし物いはで、うちまもり居たるもをかし。やゝ雲うすくなれば、池の面にはかぞふる計り雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて、餌拾ふさまなり。はじめ雲の立出でし方は、はや空の一しほ緑に見えて、虹なんど見ゆるに、木々の緑の庭潦に、かげ見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷の音におどろきて、はひ出でたるが、今日のは幼かりし時のごと、よく晴れにけり、今時のは斯く晴るゝこと稀なりなんど、はやくり言いふもあり。かれはかくあわてしなどいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、今日は蚊もすくなかるべし、雷の音もいとかすかなり、此頃の暑さもわすれぬとて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、もの待ちがほに空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋來るころの雨は、昨日にかはりて何となうさびし。荻の上風、外

蜘のい―蜘の巣

「月の夜半こそ思ふくまもなく、心の底もすみわたりぬるものなれ。されど、闇の夜の空はれて、星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、またまさりぬるやうに覺ゆる」といへば、「雨ぞいとまさりぬるを」といふ。「いかに」と問へば、「いでや旱天の雨はさらなり、草木の花咲きみのるも、皆この惠にこそあんなれ。またその感情のふかさをいはば、今日は元日なりけりといふに、雨そぼ降りて霞みわたりたるは、げに春哉とぞ思ふめる。師走の晦日のどやかに降りたるも、春待ちがほにていとをかし。すべて春は雨こそのどかなれ、軒ばより霞みわたりて、いとこまやかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えず、軒の玉水も間遠に音して、住み捨てし蜘のいに玉ぬくけしき、庭の面のかれふの底に、緑やゝそひ行くも、柳の絲の動きもやらで露そふも、共にいとのどかなれ。燈火かゝげても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心すみわたりぬるものぞかし。其外梅が香のしめり、夜ふかく匂ひわたるも、花にうしとかこちぬるも、哀はありけり。春も老い行くころ、蛙の時得がほにすだくもをかし。ほとゝぎすの初音いかにと思ふころ、村雨のはら〱と降り出でたるも、五月雨の幾日も降りくらして、書の卷々くりかへしつゝ居たれば、何となく世中の事にも、遠ざかりぬる心地

よみ—數へ

七つの書—宋の元豐中、孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、李衛公問對を合輯して武經七書となす

越の國の男—前條の話をいふ

強ひてくばり置きにし人も見えわかず、はや敵は近寄りぬ。今や敵のかたより弓とりまじへて、うち出すべしと思ふに、鳴神のごとして、鞠のやうなるものの二つ三つ落ちたるにぞ、かねて思ひしと違ひたれば、いかゞはせんと思へど、せんすべなく、「槍たづさへて進むべし。かの一番、二番のいさをしはさらなり、場中やりわきなど、さま〴〵の事あるを」といさむれど、敵の方には、長柄も見えず、たゞ馬に乗りたるもの、弓など持ちて駈け出づるにぞ、「斯くは戰せぬものなり、道知らぬ人のする事よ」といへど、語らふ人もなし。采配とりて、かの定の如く振りたれど、つはものどもは敵の方ばかり見居たれば、采配の振りざま見るものもなし。鼓など數の掟もあれば、そのごと打ちたれど耳にも入らず、寐覺の鐘の音さへ、折々はよみ違ふこともあんなるに、まして心も身にそはぬ折なれば、よみ見る人もあらじかし。爲んかたなくてふと見れば、傍に漢土の七つの書を明らめて、常にはさま〴〵いくさの事など言ひあらそふ男あれば、かゝる折はさすがたのもしく、それに語らひ見れど、たゞに理のみいひて、とみの用にたつべからず。「はや敵はいと近寄りぬ。いかに〳〵」といひつゝ衾ふみさきて、ひた汗になりて目さめしとぞ。かの越の國の男、よその國の水にあひしにも譬へつべしとかや。

ながれ―流派

さかしらする―他人が惡口をいふ

みの手―水の手、水口

五六あるものはいさをしなすこともあれど、多くやぶれをとるとぞ。志五にして、智の五より以下なるものは、多くやぶれをとるとかや。必ず智劣りて志厚きものは、時をも知らずほどをも辨へず、人をも知らで、我ばかりゆるして、我が智の足らざるをも知らざるより、かゝるものよと言ひしとや。

いくさの道とて、樣々のながれ分ち、かど立てゝきそひてらふ輩、治れる代におほく出來ぬるもをかし。かつて昔のいくさのことも知らず、今はた斯くかはりぬべしと心盡すこともせず、いつも我がながれ汲む人を敵として、いくさする心なりやと、さかしらするをも聞かぬ樣して居し翁ありけり。或夜夢にいくさするところを見けり。彼のつねの心から人より先に何くれとすれど、かねていひし如くはあらず。まづ敵寄來ると聞えしかば、「いで物見といふ事つかうまつれ」といへど、誰も出で來ず。せん方なく自ら乘出いて見しが、いづこに隱しおける兵のあるべきや、いかなる森林より遠矢は射ずやと思ふのみにて、敵のけしき見る隙もなく、こぜりあひなど始りたらば、味方にはこれぞと思ふものも無ければと思ひつきて、まづ鞭を打ちて歸りぬ。「いで水手に足輕くばれよ」といへど、こゝろみなれし事にもあらぬに、夏草はいと高し、土地も平らかならねば、

しづめて―落著き拂ひて

三代―夏、商、周

まがごと―禍事、邪なる事

濃の國へ行きたりしに、雨いと降りつゞきてければ、人々堤に出でて水防ぐに、彼男は水ふせぐ事も知らざれば、米をいさゝか袋に入れて、腰につけゐたり。はやその堤もくづれぬと人々よばはれば、高浪みなぎりて、流れ行く水の勢に目くるめきて、逃げまどふ暇もなきほどなり。かのをのこ故郷にては、左も右も山なれば、たゞちに打登りて、かの聊の米食ひつくさゞるに、はや水おつる心ならひに、人よりしづめて打見るに、あるかぎり岡もなく山もなし、遂におしながされけるとぞ。

邦道あるといひ、無しといふを、堯舜の御代を邦道あるといひ、桀紂の代を無しと心得るは、あやまりなり。三代の初の世とても、かしこき人のみあるものかは。いま名の聞ゆるを見ても知るべし。そのかしこき人とても、それ〴〵氣質とやらんもあるべし。また折にふれては、心あやまりもあるべし。よそごとの聞違もあらなん。また正しくすぐなる心より、まがごとをもしばし實と心得る折もあるべければ、我が其時にあひては、いまは道ありと思ひ、道なしとも思ひつべしといふ。そのをりも知り得ぬものは、いつも行をつゝしむにしかじとぞ。

志五ありて、智の七より以上のものは、必ずいさをしをなす。志五ありて、智の

さはらの木―椹、幹は槇に似たり

の市にて賣らんとはかりけるが、折節さはる事あれば、人に賴みて、「晝つかたには來るべし、それまでに賣りてたべ」といふにぞ、もて出でて賣るに、かへりみる人もなし。さればよ、斯うやうのもの此市にて賣りしためしなきを、益なき事に時費すものかなと思ひつゝ、いかに賣れども、買ふものなければ、往來の人の袖ひかへて、「これめさせ給へ」などといふに、引きはなちて行くめり。晝過ぐるころ、かの人きたりて、「いかに」と問へば、斯くといふ。「何といひて賣りし」といへば、「別に何とかいはん、かいやきの貝めさせ給へとて賣りし」と答ふ。彼ほゝゑみて、「我が賣るを見給へや」とて、いと聲高に、「はや鍋はや鍋」といへば、過ぎ行くものは立ちかへりて買ひ求め、そこら行く人も聲をとめて買ひぬ。見るがうちに多くの貝を皆うりてげり。この市は人おほく出づれば、殊にかまびすしくて、靜に心とむるものもなければ、手桶賣るものはさはらさはらといふ。さはらの木もてつくりし手桶よとはいふ暇もなく、聞くひまもなしとかや。物の勢といふものもまた理の外なるものなりけり。

越路の深山はいと奥ふかくて、雨に水そふとても、山あひの谷河なれば、流とづれば山などくづれて災なせど、水はいと早く落つるとぞ。その深山に住める男が、一年美

といふをつけたるが、あるやんごとなき人、「かの茶の道とてしひて斯かることまねぶこそ心得ね、そのほどをこそ思ふべかめれ」とて、上句は其のまゝ置きて、

汲みて世わたる人もこそあれ

と作りなほしたるとか。

やまと歌は、人の心より天地鬼神をも感ぜしむるなどいふは、和歌の道に限ることにはあらず。たゞ一つの誠もてこそ、大空をも動しつべし。漢の高祖の太子うごかすべきわたくしの御心を、さまぐくことわり盡して、人々諫むれども諾ひ給はず。さるに周勃といふ人が、口にはいひ得ねども、よからぬ事を知れゝば、その勅をばうけじと言ひし一言にて、さばかりの御心まどひもはれ給ひしとか。されば詞の花を咲かせたりとも、誠のつらぬくにあらざれば、益なき事なり。誠もつらぬきて、詞の色もそなはりなば、いとゞ人の心をもうごかし、和ぎつべければ、一やうに實だにあらば、花はなくてもありなんとはいはじ。

やまと歌は云々
――古今集の序

年の暮に、淺草寺のあたりに市といふ事ありて、誠に人おほく出づるなり。ある人薩摩の國より鮑の貝おほく買ひもとめてげり。その貝の穴をふたぎ、木もて蓋をつくりて、そ

玉の緒—命

わらうづ—草鞋

遠州政一—遠州流の祖なる小堀遠江守政一

あそ—朝臣

るが、姿はいかにありしや」など尋ぬれば、「我庭にも槇のありしや、常見侍れば忘れたり」と言ひし。

蝦夷の人に飯をあたへしかば、いと喜びながら、そこら食ひこぼしてけり。「やよ米は玉の緒つなぐものなるを、など斯くおろそかに爲すや」と問へば、「我等は米食ひて命をまたうするにはあらず、鮭といふ魚食ひて生くるを」といふ。「さらば鮭の魚にて命をのばゆるならば、それをば尊ぶべからん。今その足に履きたるものは、鮭の皮ならずや」と言へば、しばし頭かたぶけて、「君の足につけ給ふわらうづとやらんは、かの米の出來る草にはあらずや」と言ひしにぞ、侮るまじきことよと、人の言ひしとぞ。我國の人はよその事を知らねば、蝦夷人のなりかたち、我國の人と違へば、いと愚にて何知らぬものよと思ふたぐひぞ多き。それより漢國にてもあれ、蝦夷の人にてもあれ、たゞすがたの見なれぬを見ては、腹かゝへて、言葉のわき難きを聞きては、又わらふ。心せばくよそ見ぬ故なるべしと言ひぬ。

遠州政一あその色紙釜てふものあり。山のふもとに筧のけしき畫いたるに、西行法師の、

とく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほすまでも無きすまひかな

槊横へて―舊唐書に見えたる曹操曹丕の故事

うるま―うるまの島、即ち琉球國

つゞら―葛

末つ方の者は猶早く起出でぬべしと思ひやりて、名殘惜しとも打捨て、閨に入るをこそ、其ほど得しみやびとは言ふべけれ。殊に月花の宴とても、それをばよそになして、戯れたる事にのみ夜を明すなんどは、いふにも及ばずなん。いでや武夫ならば、かの槊横へて漢詩よみ、弓に矢はけて歌よみしなんどは、眞のみやびなるべし。みな我がすべき事をもせず、我がほどを知らで、いやしきものは高きまねびし、高きものははかなき住ひなんどのまねびし、漢詩つくるものは、唐國の物商ふ賤にもあれ、うるま百濟の人も、唐國に近しとてや、その書いたるものなど殊に尊ぶ類もあり。歌よむものは雲の上人ならば、いつも名だたる人のやうに覺えて、拙き歌をも寫しものして、もてあそぶもあるべし。又は古き物集むとて、今の用ある物に代へても、用なき物をもとむるもありぬべし。みやびは花の薫なり。花と實とありてたりなん。されどこの薫ありてこそ梅は桃にまさりぬれ。

よく物を心にとめて忘れぬものが、「昔いづこの山にのぼりしが、かゝる峰に松の幾本ありて、そのうちに斯く枝垂れたるに、いま一木は高くそびえて立てり。その傍に横の大きやかなるが横ざまに生ひいでて、靑つゞらの懸りし樣など」と語るに、「いとこまやかに覺え給ふものかな、君が庭もその山によりて造り給ひしや、松のある中にまきの見えた

謝氏―晉書謝安列傳會に「東山に棲遲し、常に臨安の山中に往き情を丘壑に放たず然れども遊賞する每に必ず妓女を以て從ふ」
やんごとなき人―高貴の人
大炊殿―臺所

風流好む者、今の世にいと多かれど、いづれを眞の風流とはいひも定めん。只月を見花を見るとても、いかでいはん。歌よみ漢詩作るとて、いかでいはん。今の風流といふは、まづ我名を衒ひてんと思ふより、をかしと思はでも、古人の好みしものは、物まねびして、それもて名得んとするもあるべし。歌よむとても、よその心より詠みいで、よその口まねびして、人にてらひてほまれ得んことをのみ思へば、心にもあらぬ事を詠みなし、或は奈良の都の古言を集めて作りなせど、詠みなす心の中は、今の世の末が末なるふりを改めず。かくて古に復せりと思ふもあるべし。または世につかふる道をもよそにして、人に高ぶる風流もありなん。中には謝氏とやらんの妓女携ふることは、かの器といひ才といひ、世をも人をも治めものして、千歳の後も名をあらはす功あれば、よし善からぬ事のあるとも、善きに比ぶればものの數ならず。さるに何のかぐはしさもあらで、只色に耽り酒に飲まれてかゝずり歩き、我がすべき事もせず、晉の世のみやびなりと思ふ類は言ふにもたらじ。唯やんごとなき人は、花を見月を見るとても、いかで心のままにすべき。我一人面白きとて、夜ふくるまで月花の宴に耽らば、大炊殿のあたりはさらなり、從者なんどを始として、睡ることもえせじ。君は遲く寐ねば遲くも起出でなん、

彼國—極樂淨土

祕閣—支那の天子の圖書を藏する處、こゝは手文庫などの意と見ゆ

かさ—穗先にかぶせたるさや

我が欲を欲もてふせがんとするは、いと難し。今日盃にひとつ酒飲まんよりは、明日は心にまかせて飲ますべしといふが如し。この世はかりの世なり、彼國にはよき音の鳥、よき色香の花よりしてなど教ゆるは、その國のおろかなる民草のはかなきほども知られぬ。

かりの世と此の世をいはゞ、君と親のめぐみは何と人に答へん

とか詠みしもありとかや。

「この筆はいとわろし、三度四度ものすれば、皆かぶろのやうになりぬ」とて、とみに物書く折は墨もすらで、硯の海を搔いまはし、書き果つれば投げおくにぞ、硯や祕閣のはざまなどに橫たはりて、いつか先も釣針のやうになりて乾きに乾きたるを、また惜しげなく、縱ざまに干潟のあたりにて音出づる計に搔いまはし、或は齒もて嚙みくだき、又は墨もて筆の先をおしひしぎて書きつ。斯くてはいかでいのちの長かるべき。よき筆をば先かさ取るもしづめてし、物書いたる後にても洗ひものし、紙に押しあて、又はすかし見て、一筋も亂さじとして置くめり。いとゞいのちの長かるべき理なり。はやく損じなんと思ふをば、いとあらく〳〵しく爲して、「これ見給へ、三度四度にはや斯くなりし」といふもをかし。

かぞいろ―父母
開きて―口を

て、人より先にいざり出でつゝ、老いたるものよと自らゆるして、人の厭ふをもいとはず、盃人にさして、わが齢ゆづりてんなどばうぞくにいふも、かたはらいたし。殊に富みたるものなんどは、たをやめなど二人三人そば去らず置きて、樂むもありとや。それらは卑しき身なれば、かぞいろなど養はん爲にや、鬼が岩屋に立ち入りて、苦しきをしのびて宮仕するをば、あはれにもいとほしくも思ふべかめるを、猶老いほれもてゆきては、我がかく翁びたるをも知らず、昔の心ならひに、斯かる人わろき心もありやせん。されど、人は必ず衰ふる理にして、老いず死なずの藥もなければ、爲んすべなし。されどかの狼藉の事なんどは、いふも更なり、世にも人にも遠ざかり、繰言なんどの愚さをも戒めたらば、そしりをも免るべし。老いぬるとて昨日より今日にかはるものならねば、鏡のかげも面なれて、自らはおどろかざんめれど、若き時に老いたる人見し心ばへ、忘れずしてこそあるべけれ。ことに我がかしこげに言ふことは、いつか人の言ひしことなりしをも、或はわすれ又は耳に入らで、まめだちて言ふを、笑ふをまだ知らず。このことはや幾度聞きしをなど、指折りて笑ふをも、猶よそごとと思ひてや、ひろらかに開きて笑ふをまた笑ふ。

せー瀬の音にて、先途として人の勉むる意ならんか

いたびてー痛みて、但原本ひに濁音符を加へず、文字の續けざまもやゝ疑はし

失へりとやいふべき。樂のことは殊にあやまりのいと多きをも、知る人なきぞうたてきと、人の口まねびにや、人の言ひし。

「人の心のひらけぬるに従ひて、ならはしは自らかはりぬべし。百年も經なば、いかにかはり侍らん。かの今の茶たつる道なんどは、如何あらん」といへば、「こはもとより廢れぬべし。茶入るゝ壺、あるは茶のむ器などに、千々のこがね費すもの誰かあるべき。むかし人いかでこれらに財費しきといはんかし。たゞ夷のならはしなどの様なること、多くたちまじり、見るところ若やかならずして、利あることなど、せとやなりなん」と言ひしとぞ。

老いぼれたるものこそいといたう淺ましけれ。顔の色もくろみもて行くに、雨雲のむらむら見ゆるやうなる物さへ見えて、さゝ波の皺よりくるに、腰もうちかゞめて、膝なむる様し、咳がちに涙おしのごひつゝ、老舌いたびて聲もわなゝきつゝ、耳はかの時しらぬ蟬の聲に、物の音もうと〳〵しく、おのが耳に入らねば、人も聞かじとや、いと聲高にのゝしり、もの食ふにも目うちしほめて、顔は大地震ふるやうに打動し、はては洟をさへうちかみつゝ居るぞ淺ましき。かくては人にも避けてこそ有るべきに、若人にうちまじり

明石の浦―「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」

あなかまーあゝ喧し

おほどかにーおほやうに

らで、この藥師いかで呪すべきと、心高く思ふ輩ぞ多かめる。

或人、人麿が明石の浦のといへる歌をめづらしげに、打ちかへし打誦して、「いかにも名歌なりけり」と言ふもをかし。一人がいふ、「この歌こそ其頃の體にもあらずなん、撰集にもまさしくそれとも書かず、何のおほんかみの歌、何の菩薩のよみ給ひし歌などといふをも載せられたる類もあれば、打ちまかせては」と言ふを、「あなかま、斯くな宣ひそ、童はべもこの歌を人麿がなりと言ふものを」と爭ふもをかし。殊にこの歌は、篁がなりとぞいふなる。よしそれとても斯かることは、斯かる人などにはいはであるべきを。

「古の事とさへいへば、いとおほどかに、事少きものと思ふが、いかでさは有りなん。それはかの太古の世をいふにや、むかしべは今の世よりも開けぬれば、今の樂もていふとも、横笛の手のしげきも、箏の琴に左手用ひしも、かの蘇香の作りざまの巧なるなど、いかでおほどかなる風とはいはん。さるを樂の舞なんども、手を少くしておもしろからぬ樣にしなし、樂もこゝらのは、いと長く引きのばして、人の睡生ずる樣にするを、高き事と心得るぞ淺ましき。雅樂とても、人の心を樂ましむるものなるを、睡生ずるを本意とせんや。殊に今の樂は、房中又は妓樂なるを、おもしろからぬ樣になすぞ、本意

いたづき―病
おもてぶせ―面目なきこと
人事―他人の事

或藥師が、「君はかならず來ん秋の頃、何のいたづきにかゝり給はん」と言ふを、むづかりて、「いかで然ることあらん」と、秋まではいひぬ。遂にいたづきに罹りてければ、言ひあてし藥師に遇はんもおもてぶせなりとて、よその藥師招ぎてけり。さまぐ\藥與へたるがしるしも見えず、初の程はうちのそこねしなるべしとて、うちとゝのふる藥なりければ、胸のあたりいよぐ\苦しく、ものも見入れねば、藥師も心得て、その藥はやめつ。こたびは汗にとらんとしてもしるしなく、下さんとすれば腹のみ痛みて、いよいよ苦し。せんかたなくて、試にふと調ぜし藥、その病にあたりやしけん、飮下すより、胸のうち心地よく、終に其やまひ癒えにけり。命たすけし人なりとて、家傾けても報はまほしく思ひしとなり。さるに、「來ん秋は、必ずこの病出づべし、此藥今より飮み給へ」といふを、いま一人の男、「いかでさあらん、されどさ言ひ給はゞ、飮みてまゐらすべし」とて、人事のやうに飮み居たるが、遂に其病も起らず、常に變りし事もなかりしかば、さればこそ斯くあるべしと思ひしを、あの藥飮までもあるべき物をと言ひしとや。醫師もいと心高くなりにけり。むかしは巫醫などといひて、むかしの醫師の書にはさまぐ\の呪事などをも書いおけるを、藥ももとおほく呪より出でしものあるを知

雪螢あつめ云々ー勤學をいふ、車胤は螢火に、孫康は積雪に映じて讀書せり
五常ー仁義禮智信
五つのみちー君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の道

と、人のいひし。

彼人は、雪螢あつめし窓に年をつみて、文見る道に心をつくし侍るなり、されば世の中の事には、いと疎く侍りといへば、さるこそまことの道學ぶ人なりけれと、褒めものする者ありとや。もとより道學ぶものは、五の常、五のみちよりして、人ををさめ己を修むる道學ぶより外のことはなし。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千年の前の世のこと、見ぬ唐のむかし今のさきより、盛り衰ふるきざし、人の心のうへより仕ふる道のくさ／＼に至るまでも、明かなるこそ道學ぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道學ぶ人とはいふべからんと。

旱つゞく頃は東風吹きて、雲の出でたるにぞ、さらば今日こそは降りいづらめと見るに、其風もいつしかやみて、雲もむら／＼と絶間がちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。また雨の降りつゞく頃は、松吹く風の音、いといさぎよくて、はや晴れなんと見れば、雲間もはやむら／＼と青く、入日のかたは、こちたきまで紅ふかく見ゆるにぞ、このよの月よ明けくこそと思ふに、月出づる比は、雲出でてまた玉水の音するものぞかし。代々の亂をさまる際も、我心のうへも、この如きものとかや。

の隱逸なるものとして愛し、周茂叔は蓮を花の君子として愛したり

橋姫の卷―源氏物語

かろう―河漏、蕎麥切のこと

ぞうるさき。つくも蟲嫌ふも、げぢ〳〵嫌ふも、何の理あるものにはあらずなん。

親に孝するは、この身を人となし給へる御恵、山よりも高く、海よりも深し。また其親も、我も、子等も、斯くながらふるは、君の御恵なりといふは、淺かりけり。其報にて、孝し忠するものにはあらず。人知らぬ深山の梅の花とても、薫らざるはなく、深谷の鶯とて啼かざるはなし。子となりては必ずかく、臣となりては斯くあるべき道は、もとより人に備りたることにて、鳥獸も親をしたひ子をはぐくみ、冤牛のことさへ語りつぐものを。

霜夜をわびて水鳥の鳴くを、物知りがほなる人が、「水鳥のさへづるよ」と言ひしを、同じやうなる人打聞きて、「鶯のさへづるなどとは聞けど、水鳥のといふは、いと物ごとにあらたまり、めづらしきことを聞きしかな」と言ふ。初の人うそぶきながら、「橋姫の巻に、水鳥の羽うちかはして、己がじしさへづる聲とあるものを」と、心得顏にいひたるも惡し。もとめて珍しきことを言ふべきものかは。蕎麥切を好み給ふやといふべきを、「かろうは如何に」といへば、「辛きものこそ好み侍れ」と言ひしを、問ひし人笑ひし。知るべき人には言ひもしなん、人をも知らで、かうやうの事いふは、くらき心より出づるなり

空にまかせて云云—天運の成るに任せて小才を用ひざれとの宿命説

雪の降りたるに云々—枕草紙に出づる清少納言の故事による

かの高嶺—香爐

菊も蓮も云々—陶淵明は菊を花

知りての後に、あげ用ひ給へ」と、何某が言ひしと聞きしが、翁が船に乗るも、今いふごとして、悪しき處々を知れゝば、悪しきかたへは波風うけず、よわきには波風ある日、沖を乗らでありしかば、遂に危きをもまぬかれし。

久方の空にまかせて、我がさゝやかなる才を用ひざれとはいへど、空にまかするに深き心あるべし。星の光みても、はや沖はあらき風吹出でつ、此のあたりへは、明日の晝つかた吹き來べしといふ事も知れゝば、心して乗るを、空にまかするとは言はめ。沖の風吹くも吹かぬもとはずして、今こゝの波平かなれば、はや漕ぎ出でて行くを、空にまかすとはいはじ。もの食ふものにてもあれ、すべて身をやしなふ道をつくし、そのほどを愼みて後、生死をそらに任すべきを、やしなひのことは心とせず、たゞ己が欲りすることにのみ隨ひて、生死をそらに任するといふこともありぬべし。

雪の降りたるに、小簾垂るゝも口惜しければ、かの高嶺の雪はと言ひたれば、何となう打笑みてまた立ちもやらず、さすがに捨てもおかで、童なんどに、あれかゝげ給へよなど、ほのかに言ひしこそよけれ。いとも女はかゝるべしとぞ。

竹を好みめづるも、菊も蓮も、理あることにはあらぬを、さまぐ\の理いひて才おふ

ゆるにぞ、出ではなれたらば、はやかゝらん隈はあらじと思ふに、いつのまにか、また白雲の月待ちがほにたなびきて見ゆれば、胸打ちつぶれて打見るに、初の雲より出でたる光いとあたらしう見えて、殊にさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、又はせ入るもいとつらし。月の入りて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこに、それとおもかげ見ゆるにぞ、ひたすらに打見はてて見居たる中に、衣手もしめり行きて、露も蟲の音もさかりなりけり。つく〴〵と對ひ居たれば、心の果なきやうにこそ覺えしか。

たゞうどは、漁船といへば同じやうに造るものと思ふべけれど、こはさ造りても、おのづから能くとゝのひて出で來しもあり、こゝはよくかしこは惡しきもあり。打ち見ては如何にもよきが、乘り得てみれば違ふもありて、一つも同じからぬものぞかし。波風凌ぐと思へば、行くこと鈍きもあり。行くこと疾きものは弱きもあり。いづれいさゝかも節なきは無きものなり。乘り試みてそれを明かに知り得てこそ、遠くへもはせつべけれ。むかし或人が、「人を見て、いかにもよき人なり、いさゝかも惡しきところなきと思はゞ、まづ思ひかへして、聖は知らず、かしこき人とても、いづこもくまなくよき人は無きものなるを、さ見ゆるは、わが心のくらみしなり、まづその人の惡しきところ〴〵、よく

近劣―遠目によくて近く見ては劣ること
才おふ―才智を自負する
こちたからぬ―くど／＼しからぬ
匂ひ―うるはしくほのめき

ば、無しとこそ言ふべけれ。いでや櫻と言はでしも、花とだにいへば、異木にはまぎれぬものを、ほの〴〵と明け行く山際、雲か雪かとばかり咲きみちたるも、霞こめたる夕まぐれ、花のけはひも朧に見えて、こゝにのみ暮れ殘す景色などいふは淺かりけり。まいて、蕚ののびやかなれば、近劣するなどいふは、彼のことかへて才おふ心にいふことなりかし。風に散りかふも雨にぬるゝも、遠山に見るも軒端にむかふも、明ぼのも夕暮も、露のひるまも、目かるゝ時しなきを、ことに我國ぶりの姿にて、枝もすなほに花のかたちもゆたけく、匂さへもこちたからぬも、あやしきまでにこそ覺ゆるものなれ。然るをいづこにもありと言ふはさらなり、曙夕暮などとおもしろからんやうに言葉添ゆるは、いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべて言葉もて言ひ盡さんと思ふは、いとあさき心かな。

月のさしのぼる頃、明ぼのの空おぼえて横雲のたなびきたるに、やゝ匂ひ初めたれど、遠山の梢にいざようて、姿も見えず、辛うじてさしのぼりけり。梢の憂さも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、近寄るほどあやにくに、月の方より雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こは如何にせんとしばし打ちまもるに、雲の端つかた赤う見

藻屑—文反古に喩ふ

白波のよる〳〵—白波の寄るに盜賊の夜々を言ひ掛けたり

蜑のさへづり—聞き分け難き物言ひ

花月草紙

松平樂翁著

久しう浦わの里に住める翁ありけり。め刈り鹽燒くいとまには、えうなき藻屑かい集めて、鹽屋の窓の戶にかい挾み置きたるを、世のえせ者の取りて歸りにけり。またの年行きて見れば、懲りずまにかいはさみ置きたり。かく白波のよる〳〵ごとに數もつみしかば、遂にこの卷々となりぬとぞ。此藻屑のはしつかたに、月と花とのことなが〳〵しく書いたれば、それをもて名だてしは、彼のえせ者のせしことなりとぞ。「蜑のさへづりとこそ言はまほしけれ」と、里の子はいひし。

無きと聞けば有りといはまほしく、惡しきといふをば善きと事かへて言はんこそ、いとねぢけたることなれ。櫻てふ花は、我國のものなるを、唐國にもありとて、さまざま例など引きつくれど、櫻畫いたるもろこしの畫もなく、かなへりと思ふ詩もなけれ

此書を蜑のさへづりとは、作者の卑下の言葉なるべし。本の雫、富士の烟など呼びたる人もありとなん。げに富士の烟は盡くることなき心をふくめるにや、はた此巻々の末の章は、殊に心こめたるものと見れば、本の雫とも呼びけらし。いづれいといたう深き心こめたるものなれば、同じ高嶺の烟をも、或は雲とも見霞とも見るは、其の人がらにもかはり行く無盡の雙紙とやいふべき。友垣のへだてなきまゝに記しぬるなり。

また或人の書き給ひしなり。

あるらん現にやあらんと、しばしためらひたるに、寝るともなく覺むるともなく、ひとり衾をかづきて我家にあり。いぶかしさのまゝ、こゝかしこ見渡したれば、枕上に書の卷々あり。やごとなき手して花月雙紙と題せり。よく見ればさきに持て歸らんとせしに露たがふことなし。うれしさ限りなく、何某が老いず死なずの藥得たりけんも斯くやと、とみに繰返しぬるほど、傍より、はや明け果て侍りぬとの大聲なるに、驚きていそぎ起き出でつゝ、常のごとさうぞきたてて、日かげの塵にまじらひぬる有樣、仙人の目には如何に見るらん。

こは月の桂男の書き給ひしとや。

一日一葉の舟に乗りて、とある浦わを漕ぎめぐりしに、渚近き鹽屋の烟のほそう立ちのぼりたれば、舟よりあがりてさしのぞきたるに、松の柱竹の編戸のおろそかなる窓にさしはさめるものあり。取りて見れば、たきしめたる陸奥紙に、やごとなき人の手して、筆のまにまにはしり書い給ふさま尋常ならず。花によそへ月になずらへて、世のため人のため、ねもごろに教へしめされしをぢ〳〵理を盡し、心に味ふるほどいたり深き事どもの多かりければ、我も白波の名にや立つらんとうしろめたけれど、そと懐にして歸らんとせしに、内よりあてなる翁立ち出で給ひ、手を引きて座にいざなひ、霞をすひ露をしたんでくみかはしつゝ、外面の方を詠めやるに、園には名も知らぬ草木ども咲きみだれ、池には色々の水鳥のあそべる風情、うき世の外の心地なれば、こは仙境にや入りけんとおほめくあまり、如何なる所にやと問ふに、翁笑ひて、こゝは名におふ蓬瀛の洲にして、塵にまじはる人の長く留る所にあらず、はや歸りね〳〵と言ひすてて、袖を拂ひて入り給ひぬ。さては夢にや

もてあつかひて—始末におへずして

飾らんとこそ思へ。又後見給ふ人も、さればこそはかなきわなみの爲に、寶をも盡し給へ。仰言にしたがひて、人なみ〳〵に差交りたち倣はんとならば、何の面目かは侍らん。わなみは此つらにまじり侍るまじ」といふに、長者もてあつかひて、「さらば今日のみは、そこの心にまかせん。明日よりさだめの如くせよ」といふに、其日は花紫が心のまゝにかざりて、道中ありき、げに群鳥の中に鳳凰の舞ひ下れるごとく、千羊の中に一虎のたちまじれるが如くなん有りける。二日の日よりは、定のまゝに數をへらしけるが、とにかくに病のことにことつけて、其つらにまじらぬやうにしけり。心ぎもしたゝかなる遊女なりけり。

都よりかへりて後、人々つどひ來物語らふに、

濱臣

遊京漫錄終

たい〴〵しきこと—あるまじき事
くぜち—爭論
ふきよう—不興
わなみ—我々

も櫛も、玉に金にみがきたてて、多くの寶を盡せるなりけり。まして競ひたる錦綾のうるはしさは、いはずとも思ひやるべし。斯くてその日となりて、家ごとに劣らじと、かゞやかし出したつるに、花紫の頭のかざり、おほかたのに過ぎて花やかなれば、誰もみな目をおどろかして、とよみ合へるを、同じほどの遊女ども、いとたい〴〵しき事に思ひて、くぜち出來にけり。長者花紫を近く呼びて、「始よりさだめたるを、斯く數に過ぐしたるは、いかに心得たるにか、そこにも同じ列に、櫛簪の數をへらし給ふべし」といふ。花紫答へて、「仰さる事には侍れど、よく〳〵思ほしめぐらして、わなみの心をも推量り給へかし。かゝる身のならひ、ふきようなる申し事には侍れど、黄金にかへて子を賣れる親なれば、親あれども無きに同じく、夜ごとにかはる枕のちぎりは、つひのよすが定めん男もなし。いふまでもなく、子とては侍らず、何の覊もなく、ことやすき身に侍り。さるからには、末を樂むたのみもあらず、今日を思ひて明日をはからぬがわなみらが身の上なり。されば一日も花やかに身をかゞやかし、名を知られ人にめでられ、おのれを樂むよりほかのこと侍らず。たゞ其身の花やぎて人にめでらるゝをはかなき樂とし侍る身なれば、心のおよばんかぎりは、錦綾を身にまとひ、珊瑚、玳瑁に、頭の上を

はて―到着し
むね〳〵しき―立派なる
物いふ花―解語花、美人
おきて―規定し

ざりしを、片田舎には今もなほあやしき事の有りけるはと、とかくもの語らふほどに、若山の城のべ近く舟はてにけり。

○西扇屋花紫

難波に新町といふは、遊女どもの集ふ所にて、いと賑はしく、むね〳〵しき家居ども數たてつらねたる中に、九軒の揚町とて、殊にすぐれしあり。去年火のさわぎにかゝりて後、あらたに作りみがけるなれば、いときら〳〵し。しかのみならず、今年は大江門の吉原のさだめにならひて、こゝにも櫻を植ゑつらねたれば、往來の人道もさりあへず。物いはぬ花に物いふ花たちまじりて、色をあらそふ樣いはんかたなし。三月廿日より道中とかいひて、日ごとに九軒のあたり、花のもとを遊女ども練り歩く。まことに天の下の綾錦をつくしにけり。西扇屋の花紫といふは、わきて高名の遊女なりけるが、今年の道中には、かねてより心だくみしたるに、たのもしき後見人もありて、よそほひ飾りたるかたち、あるが中にぬけ出でたり。さだめ有りて簪は右左に六本づつ十二本、櫛は二枚とおきてたりしを、花紫は右左十本づつ廿本、櫛は三枚をさしいたゞきたり。簪

つとめて―翌朝

ゆるに、女あと一聲さけびて、のけざまに反るを、動しもあへず血を吸ふ。手足をわななかして泣き叫ぶ聲いと悲し。男もたましひ消えて、われさへ腰立たずうつぶしぬ。ややう血を吸ふにつけて、よわり行く聲かすかなり。はては腹わたをかき出でて食ひつくしぬ。さてなきがらを倒に松の枝に引きかけたるを、男一目見るより、まことに絶え入りぬ。つとめて逐ひ來る人々、此所まで來りて、男の絶え入りたるを、とかく見あつかふに、いき出でて、ありし事語り聞えければ、人々おぢ恐れて、つひに此山に分け入ること絶えにけり。そも〱此山は、薪多く伐り出す山にて、殿の御林も有りければ、かゝる事のありて、木こりども山に入る事かたき由訴へ申したりしかば、其あやしの物とりて參らすべしとて、弓矢の道にかしこきもの二十人ばかり遣されにたり。昨日見出でたりとて、とよみ合へりしが、又見失ひぬ。狒々といふ獸の年經たるなるべしといふ人もあるを、かたへより、否あらじ、ひゝは人を取食ふものにはあらず、猶異物ならんといへり。とまれかくまれ、殿の兵かこみたれば、近きうちにたやすく打捕りなまし。今二日三日も遲くおはせば、捕へたるを見給はんに」と語りぬ。けしかる事をも聞くものか。かゝる事は、そゞろなる昔物語にこそ聞きしか、まのあたり見聞すべき事とは思は

ついゐ—佇み居

かたなく、猶いかで女をとりかへさばやと、木の根、岩かど、たゞ越えに踏み越えて、山路ふかく分入るに、月なほ山の端に殘りて、木の間もる影すごし。谷川の岸にいたりたるに、岸のむかひに、女ついゐたり。嬉しさいはんかたなし。聲をあげて呼ぶに、かしこにも呼ぶ聲す。見ればあやしのものも居らず、渡せる板橋をば、かしこの岸に引きあげ置きたれば、渡るべきてだてなし。男大聲に、其橋はや渡せといへど、女たゞ手をあげて、こなたをさし招くのみなり。男心いらだちて、いかで疾く〳〵といふに、女物をたよりにて、立上らんとすれど足たゝず。こなたを見て泣くことかぎりなし。男いとかひなき事といらちて、「如何にもして其橋わたせ」と叫ぶに、女又頭の上におほへる松の大木を指さして泣く。男目をさだめてよく見れば、松の上にあやしの物のぼり居て、下なる女をにらまへて居り。見るに恐しとは物かは、身の毛いよだちてわなゝかるゝより外なし。せん方なくまもり居たるに、あやしのもの木末よりすら〳〵と下りて、女のもとゞりを搔摑みて、あふのけに押倒しぬ。女やゝと叫ぶを、たしかに押へて、劍のやうなる長き爪にて、乳のあたりより下へ二かへりばかり撫づるやうにするに、著たるものも、結びたる帶も寸々に裂けて、はだへのあらはるゝを、胸先に口さしあつるやうに見

ゆくりなく―不意に
よばふ人―言ひ寄る人
たど〳〵しき―おぼつかなき

するは、「二月末つ方よりの事なりけり、此山の麓の村々の女、ともすればゆくりなく失することあり。始のほどは密男などのありて、心を合せ盗み去にたるならんと言ひて、さがし求めしかど、誰一人さがし出でたる無かりければ、まよはし神にさそはれつらんなど、いぶかりあへるほどに、誰いふとなく、白髪畑の山陰には、あやしのもの出でて人を取食ふとなりと言ひさわぎしかど、たしかに見たりと言ふ者もなくて、日頃經るに、此山の麓に某村とかいふありて、そこの村長の女年二十ばかりなるが、田舎めづらしき容貌なりければ、とかくよばふ人も多かりけり。さるに早く懸想しける男ありければ、親のゆるさぬ中にて、にはかに異男を壻にとらんとしけるを、女苦しいことに思ひて、密男と計りて、夕月のたど〳〵しきまぎれにあくがれ出でにけり。追來る人あらんをしのびて、山路を經てのがれ行くに、うしろより來るもの有り。男にやあらん、女にやあらん、丈ひきく顔いと皺みて、頭には針をうゑたるやうなる髮を尺ばかり振亂して、海松のやうに裂けわゝけたる襤褸を著たるが、行きすがふまゝに女をつと搔抱きて走り行くを、男おどろきて追懸くるに、鳥のかけるやうにて、追ひつきがたし。此あやしのものは幾度かかへり見て、笑ふ〳〵行くに、いつか行方を見失ひぬ。男くやしさ言はん

有レ酒如レ池。有レ肉如レ坡。詳謝二妖婆一。勿レ過二我家一。

後に聞けば、難波より言ひつたへ來しなりとぞ。難波にては、其嫗來る家には疱瘡を病むと言ひのゝしりて、門ごとに赤き紙にしか書きて出せりとぞ。それを傳へあやまりて、たゞに疫病の事と思ひて、白紙には書き傳へしなりとぞ。もとよりあとなしごとは心とむべき事ならねど、何事を種として、かゝる言葉をばいひ散らしけん。さそはれやすき人心、かばかりはかなきものは無かりけりかし。

○白髮畑の恠

彌生十日、高野山の麓、矢立といふ宿を、つとめて立出で、高野辻と云ふ所より舟にて紀の川を下すに、川瀬はやくして、こなたかなたの岸の猿鳴く聲耳にとゞまらずとも言はまほしき所なり。五里ばかり下りて、左にかたく聳えたる山を白髮畑といふ。楫取の物語るを聞くに、「此ほど此嶺にあやしのもの出でて、人をとる事有りければ、紀の殿より討手の人たち、をとつひの日此所に來りて、とかくあなぐりせらるれども、いまだとらへ得ず」といふ。「そは如何なるあやしの物にか」と問ふに、舟人くはしく語り聞か

こなたかなたの云々―唐詩選李白「兩岸猿聲啼不レ住」の句

あなぐり―求め

かいなでー通一遍
石川方救ー石川依平
せまりたるー困窮したる
みつばよつばー幾重にも宮殿の重りたるさまをいふ

今猶かいなでの物知り人なり。こたび東路を上るとて、遠江の國新坂の宿つゞき伊達方村なる石川方救に、はじめて對面したるに、是は五つのよはひより、冷泉中納言爲泰殿の御弟子となりて、歌よむとて、東路の奇童といへりしも、旅物語して試むれば、栗田土滿にまなび、今は夏目甕滿に問ひきゝて、なべての古歌學びけるどちなり。されば此多田田舍の奇童も、生先は如何ならん、ゆかしきばかりの事もあらじとは思ふものから。

○酒賣る媼

四月はじめつ方より、京におしなべて、「上酒有り」といふ三字を紙のはしに書きて、門ごとにおしはる事あり。誰がいひ出でしともなく、せまりたるあやしの媼が、酒賣り歩くことあるべし。もし其酒を買はゞ必ず惡しき病をわづらはん、よし買はずとも、門にいたらば惡しかりなまし、さるからに、「上酒有り」と書きておしはり置けば、酒賣る媼來ずといふ。やんごとなきみつばよつばの軒端より、賤が伏屋にいたるまで、門といふ門に、此三字書きておしはらぬなし。折しも、江門の太田博士都にのぼり來て居られしが、門におしはらせたるは、

としかげ―うつぼ物語の主人公
うつぼ木―うつろの木、無學文盲の親の義によそへていへり

ろはをやは書くべき」とて、上大人丘（上大人、丘乙巳、七十子、爾小生、八九子、佳作仁、可知禮○右秉燭談云、祝枝山猥談、引水東日記）と書きて見す。手のしたゝかなるよりは、此廿一字を手習ふはじめに書く事を知りしが驚かれて、「こは彼老法師や敎へたりし」と問ふに、うなづく。いとゞゆかしくめづらしく、生先思はれて、猶語らはまほしきこと多きに、從者ども、「行くさき遠し、知らぬ山路に日暮れぬべし」と急がせば、「げに日も山の端に落ちかゝりぬるを」とて、何事も語はで立ちぬ。道すがら思ふに、都にだに斷るばかりの年にて、心より書讀まんとする子はなきものを、としかげが女の生めりけん子も、けふの心はたけくこそありけめ、うつぼ木のもとに、書よみしとは聞えぬをと、かへす〴〵も忘れがたくて、人に向ひては、先づ語りぐさとしたりき。されどまた思へば、むかしもろこしの陳韙とかいへる人の詞には、「小時了々大未必佳」と言ひおきけんやうに、幼きほどの賢きは、大人となりてさばかりならぬものにて、大方をさなきほどの賢きは、癇症のわざなりと、或はかせの言はれしは、さる事と覺ゆるなり。近くは、おのが知れる人にも、荻野某は八つになりけるに、晦日の夜に月のかたちの空に見えけるを、人々あやしがりしに、是は水氣なりと言ひしが、げに雨となりしより、人々奇童とたゝへて、生先世のすぐれ人となりなましと語り合ひしも、

石礫—石を空に撒きて其の落ちざる間に他の石を拾ひて之れにねらひ當つる兒童の遊戯

實語教—兒童の教訓を記せる書、足利時代、作者未詳

ふほど、主だつ男かへり來たり。何人の世にはひ隱れたるならんとゆかしさに、先此子をほめて、親の心をとらんと、とかく語らへど、むげの賤の男にて、おのが子の書よむも知らずして答へいふやう、「宣ふごとく、此幼きものは、わが子にて侍れど、大かたの男の童どもにまじりて、石礫、草結などのすさびも好まず、ともすれば、文机のもとにかゞまり居て、草子めく物とりまさぐり、口に何事をか言ひ侍れど、おのれは何讀むか知り侍らず。此村に侍る山寺の老法師のもとに、日ごとに行きてのみ侍り。生ひたちて後も、何にかはなり侍らん。老法師のために法の子とや成りなまし。いと益なき事」と、心もゆかぬ顔に言ふに、思ふところ違へば、心のうちに爪彈して何事も語らはず。此子に向ひて、「我兒は手習ふわざもすや。其老法師をよろづの師とやたのむ」と問へば、「あらず、法師は年老い給ひて、人を教へさとし給ふ心だましひもなし。たゞかたへにありて、見ならひ聞きならふばかりなり。いかで實のすぢば學び得侍らん」といふに、いよいよゆかしくて、唐詩選をとりて讀まするに、かたこと打ちまぜて讀む。大方そらにうかべたり。また實語教をそらにうかべ讀む。又筆とらせて、「何にまれ書け」といへば、「手はまだ習ひ覺えず」といふ。「さらば、先いろはを」といふに、すこし打笑ひて、「い

事、返す〴〵もくやしかりき。

○多田の奇童

有馬のいで湯あみてよりの歸さ、中山の觀世音に詣でて、滿願寺の山越して、多田の社にと心ざす道、あやしのふせ庵にしばし憩ひたりしに、年の程四つにやあまるらん、五つにやたらざらん、はしたなる幼子の、襷結ひたるまゝにてあるが、小さき文机におしかゝりて書よむさまなり。いろ白く肥えて、酸漿などを吹きふくらめたらんやうに、いと愛敬づき、うち笑めるまみなど言はんかたなし。おのれもとよりみどり子めづる癖のあれば、近く寄りて、「我兒はいくつ」と問へば、「六つなり」と言ふ。かしこきものは、かたち大きやかならぬならひにて、此ちごも、年よりは打ち見たる處の小やかなるべし。「何事す」と問へば、「書よむなり」といふ。「何よむぞ」と問へば、「唐詩選を」といふに、まづ驚かれぬ。かゝる奥山中に、まだ幼き子のいかでとゆかしくて、取持てる菓物、一つ二つ出して與ふれば、打ち笑みておめるいろも無く食ふさま、世のつねの子にかはらず。父ぬしやゆゑある人ならんと思ひて、「てゝきは何處にか」と問へば、「畑打に」とい

まみ—目元

てゝき—父君

立返りて、打ちふしたる二人に、とゞめの刀さし貫きたるほど、父馳せつきてければ、始終の事聞えて、「今は何をか聞え參らせん」と言ふまゝに、みづから高胸先を貫きぬ。父もたゞものならざりければ、「理なり、斯くこそあらまほしけれ。よろづよきに計らはん。心な殘いそ」といひながら、女の頭打ちおとしぬ。すなはち所のつかさに訴へ奉りて申すやう、「女はおのれが子にて侍れど、公の御さだめをも待ちきこえ奉らず、心にまかせて頭打ちおとし侍りしおこたり、おほやけの御法のまゝによりて、おのれをも罪なひ給へ。露うらみ奉らず」と、おめたる樣もなく聞えあげければ、官人たち、とかく考へさだめ給ひて、「いましに罪なし。とかくのさたあるまじきなり」とて、女のなきがらは父にたまひて、とかくのわざ營ませさせ給ひぬ。此由つたへ聞き給ひて、殿にはいとゞ惜み給ひて、「あとの事ねんごろに營むべし」とて、黃金どももあまた賜ひぬ。父のはじめの主と聞えしよりも、こたびの事によりて、ふたゝび召仕ひさせ給ひて、昔のまゝの祿賜はりてけり。此烈女のことを褒めさせ給ひて、津の君より大湊に石碑立てて、事のゆゑよし詳しく記しつけさせ給へりけりとぞ。こゝには山田人の語りきかせしまゝを記しぬ。おのれ山田にありし頃にて、大湊までは程も遠からぬ所なるを、尋ね見ざりし

いましー汝
とかくのわざー葬送の事

首ほそし―小身にて頼り少し
さらがへりねたく―嫉ましく
あながちなるすさび―無理なる玩び、強姦
高名の鍛冶云々―名刀の義

ねば、女よりしていはせけり。男心に思ふに、まこと互に思ひ絶えて、然るがたの證文をさへ取交しつることなれば、今さらに恨むべきふしもあらず、さこそいへ、始は我が物となしたる女を、目に見す〳〵人の花とよそに見んも心よからぬ事なり、又思へば、彼殿の若子君とやらんには、早くより心をかはしてや有りけん、さて我をば中絶えたるならん、我を首ほそしと思ひ侮りて、にぎはゝしきに思ひうつりたるにやなど、己がおこたりをばかへり見で、さらがへりねたく思ひつゝ、一向心なる若人二人を語らひて、其夜父の家になき程をうかゞひて、女をぬすみ出してけり。女心をあはせたる事ならねば、とかく諍へど聞きも入れず。强ひてとらへ來て、大湊に率て來て、三人心を合せて、けしからぬ業せんとしけり。一人は後よりつと抱かひ、一人は足を捉へて居り。彼男すゝみ寄りて、あながちなるすさびせんとするを、女心をさだめて、やをら押へられたる手を振放ち、男の佩きたる太刀をむかひざまに引きぬきて、打ちかけたるに、高名の鍛冶やうちたりけん、男一太刀に倒れぬ。やがて後ざまに抱へたる一人の脇腹を突通しければ、これも一聲叫びしまゝにて死にぬ。足とらへたる一人は、是におぢて逃げんとしたるを、思ひざまに尻たぶらをしたゝかに切りさけたれど、つひに逃げうせぬ。女は

女は云々ー「女は氏なくて玉の輿に乘る」

おのがよゝー緣を切るをいふ

たいぐヽしきー有る可らざる

と幾度か辭み聞えしを、本意に思しつめて、父の方へ申したまはしけり。父は身にあまる忝さに、女を呼びとりて、「いかで御心には從ひ奉らぬぞ。そこの身のなりいづる時ならずや。女は氏なくてとか言ふ諺もある物を」と諭しけるに、しばらくさしうつぶきて居たりしが、父にむかひて、「宣ふ事げに理なり。何をかつゝみ聞ゆべき。父の御目をしのびて私男せしこと有り、其罪さりどころなきは如何はせん。男の心いと淺くて悔しきこと度かさなりしかば、契を絶えて、互におのがよゝにはかけはなれ侍り。かくて後殿へは參りたれば、宣ふごとく仰言にしたがひ奉りて、こともなきことながら、私男有りしことを、父にも聞え參らせず、殿もしろしめさず。さるを今召しつかひ給ひて後、うしろ淸からぬ名のほころび聞えなば、いとたいぐヽしき事ならじやは。かゝれば父にも此事聞え奉り、父より此由殿に申しあげ給ひて、さてもなほ御心に思ひ捨て給はぬ緣侍らば、心よくうけがひ參らすべしと思ひ侍りてなん。此事あらはに聞え侍るは、いと苦しかれど、默しあへでなん」といふに、父も理と思ひ、殿に聞え參らせたりければ、うしろぎたなからぬ心の、いとゞゆかしく思して、「疾く參らすべし」と宣ひければ、父はよろこびて、家に歸るすなはち、家族にも言ひ知らせり。彼男にも隱すべきなら

よすが—一生連れ添ふ女房
今參り—新に來りて仕ふる人
ことゞ—離緣、神代紀「絶妻之誓此云許等度」
うるせき者—愛すべき者
やごとなき—貴き

ず睦じうなりにけり。はじめの程こそありけれ、此男いとたはれたる本性にて、此處彼處にかゝづらふ方多く、此女を終の便とも思ひとまらざりければ、女心かろく身をまかせたることと悔い歎きけり。父はさる事ありとも知らで思ふやう、我こそ斯くうもれたれ、女をだにいかで宮仕に出立せて、人めかしくあらせばやと思ふに、某殿に今參りをもとめ給ふなりと、そゝのかす者あり。女にも斯くといふに、女もよき事と思ひて諾ひぬ。さてわたくし男に遇ひて言ふやう、「父の宣ふによりて、某殿に仕へ奉らんとす。我君の心、みづからを妻と思ひさだめ給ふさまにもあらず。自らもいたゞく君出來ては、身を心にもまかせねば、有りし契は夢と思ひさまして、御心にかなひたらん御よすがをも定め給へ」といへば、男も幸の事とや思ひけん、まこと然りとて、ことゞをわたすとか言ひけん神世のしわざをまねびにけり。かくて女は殿に參りたるに、よろづの業にかしこく、心まめ〳〵しく仕へ奉りければ、殿を始め奉り、御かた〴〵うるせき者にまつはし給ひけり。此殿に廿に一つ二つ餘り給へる若子君おはすが、此女の心ざしのまめやかに、姿のにくからぬを愛で給ひて、いかで添臥にと思しければ、うち〳〵に宣ふこと有りけり。女數ならぬ身のやごとなき御具とは、いかでかはならん、ふえうなること

あひ―契り
はふちして―零落して
はしたなる―なさけなき
かそけき―幽かなる
かいなで―十人並

るやうに、うかれ人たち此女をいとぞあひける。十夜ばかりはさて有りしが、物の端に歌を書きつけおきて、又の夜より絶えて見えざりけり。その歌、

あだし世に露のうき身のながらひて草のむしろにぬれぬ夜ぞなき

いかなる人の、身をはふらして、斯るはしたなる樣には成果てしならんと、此頃のことぐさには、皆人いひあへりけり。

○大湊の烈女

去年のことなりしとかや、伊勢國度會郡山田の里より、二見の浦への道に、大湊と云ふ所あり。こゝにて、少女の一人して男三人まで害ひたること有りき。其故よしを問ひ聞くに、此ほとりに一人の武士有り、はやく仕へし君に、いさゝか勘當蒙りて、暇たまはりければ、ふたゝび主といたゞく方も無くて、かそけき煙を立てつゝ、春秋をおくり迎へけるに、女一人もたりけり。容貌かいなでにはこよなく優りにけり。十といひて六つ七つにやなりにけん、幼きほどより大かたの女にかはりて、太刀とる業に心を入れたりき。されど男を思ふ心は變らざりけん、いつの程よりかとかくいふ男有りて、人知れ

内わたり—禁裡
斯るもの—穢多
いたづらになり—死に
御垣の中—禁中
夜發—よたか
いくり—海石

などのわたるに、所狹ければとて、七日の祭をば見ざりしを、うち〳〵に兎角のたまはす方や有りけん、十四日のわたりをば、ある家の庇の下にかゞまり居て見しとぞ。内わたりにも、誰聞えあげけん、よそながら一目見まほしげに宣ふ女房たち、うへ人などやおはしけん、すべて斯かるもののたぐひ、犬猫のいたづらになりたるを、とり捨てに參るありければ、その人數の中にまじりて御垣の中にも入りしとぞ。かゝるものの世の人にまぎれて、こゝかしこに遊びうかるゝことも、しのびてはある事なれど、忍びあへぬべき姿ならねば、さる方のたのしさは、絶えて知らずして、水無月の廿日過ぎて、京をたち歸りにけり。

○難波の夜發

難波にはじめて下りしは、やよひの朔日頃なりしに、あはれなる打聞こそ有りしか。難波新地といふ所に、夜な〳〵辻陰に立ちて、往來の人になさけを商ふものども集ふ中に、正月二月のほどにや有りけん。ひとりの女のみめ貌よげなるが、いづくより來ると知る人もなくて、同じさまに立ちまじりて、さる業しけるを、いくりの中の眞玉拾ひ出でた

布引に云々—布を引き張りたる如く續きたり

中のおとり—兄弟中にて一番劣りて

し事なきからに、おのづから出づべき力も出でぬなるべし。京にては、六條村といふに、ゑとりどもの住む處ありて、そこにしばし居りき。日ごとに大男見にとて、六條村へと行く人、布引に續きたり。おのれも人にそゝのかされて行き見しに、家居むね〳〵しきも有りて、村長めく者の家に大男居たり。こゝかしこより賜へりと見えて、衣服をはじめて、よろづの物うづ高く積みかさね、紙にその品々某殿よりなどと書きて、上におしはりたり。さるたよりありて伴ふ人と行きしかば、村長敬命して、上座におのれを居ゑて、大男をともなひ出でたり。みづから語りいふ、「姉にて侍るものは、たけ八尺侍り、弟も七尺八寸侍り。おのれは中のおとりにて、實は七尺三寸侍るなり」といふ。明障子のたてわたしたる長押の上に扇をおきて、居ながらに手さしおよぼして取るに、いとやすし。居たけの高さ思ひやるべし。又語らふ、「くちをしく、せんかたなきは、大路を行きかふを、見る人ごとに、あなめづらしの大男や、たけだちの優れたるのみかは、見るめも賤しげなきを、ゑとりにだにあらざらましかばといふを、聞くたびに身の程のくやしくて、消えも入りぬべき心地し侍り」といふ。げにさることなるべし。祇園會にも、人の家に入り居て、見ることはなしがたし、大路に立ちてはかたへに見る人のおしごりて鉾

ゑとり―穢多
いたづき―病
ふりはへ―わざわざ
ことぐさ―話の種
某の草子―徒然草
らうがはし―亂りがはし
おしこりて―集合して
かしこまり―謝辭
ほて―大關

由いひさわぐ事有り。是は伊豫の國大洲のゑとりなりけるが、手のすぢをたがへてければ、難波にさる方のいたづきつくろふ道にたへたる主ありければ、ふりはへのぼり來て、いたづきつくろふほど留れるなりけり。いづくにも珍しきに移る人心にて、此頃はたゞ大男をのみことぐさとしたりき。六月ついたち頃には、いたづきも癒えにければ、京に六條の御堂に詣でながら、祇園會もをがみ奉らばやとて、難波よりのぼり來る由、又いひさわぐに、五日には、彼大男のぼり來たり。今日は六條に詣づ、明日は北野になどいひて、某の草子にいひけん鬼娘のやうに、辻大路を西東に馳せ、南北にかける人おびただしく、らうがはしさいはん方なかりき。されど鬼娘はうきたることなり、是はまことなりけり。しかおしこりて行く人の中を、たちまじりて歩み來るものが、肩より上はあらはれて、遠目にもまぎれざりけり。年は廿七、たけの高さ七尺五寸、身の重さ三十八貫目ありとぞ。なり形よくとゝのほりて、相撲めきたるさまはなし。六條の御堂にまうでし折、門主より米二俵賜へりしを、左右の手に引きさげて、かしこまり申して退きたりとか。力はかたちには劣りたりとぞ人々いひける。そは世の中のまじらひ心にかなふ身なりせば、はやく相撲となりて、今の世のほてともいはるべきを、力を出しこゝろ見

毛詩―毛氏の注釋したる詩經

江菅兩家―大江家、菅家

あげつらふ―論ずる

○皇子の御いみなの字

五月なかばにや有りけん、皇子降誕まし〱ぬ。かけまくもかしこしや、御をさな名を鍠宮と申し奉るとぞ。鍠の字は、說文に「鐘鼓聲也」とあるのみにて、をさとよむゆゑたしかならず。或人のいふは、毛詩小雅斯干篇に、「其泣喤々」と見えて、說文に、喤は小兒聲とあれば、小兒の啼聲とあるより、をさなき心により給ひしにや。さらばをさなとはいふべし。をさとのみにては聞えず。又鍠の字を用ひ給ひしは、喤と鍠とは通字なるに、今年は金性なれば、金扁の字を用ひ給ひしならんかなどさだめ言へりき。いかにもいぶかしきことなり。されど江菅兩家の博士たちのえらび考へて奉られし御名なるべければ、いかばかり由あることならん、おのれらが口のはにかけて、とかくの事あげつらふべきならず。あなおそろし〱。

○大洲の大男

五月末つかた都にありしに、伊豫の國より世にめづらしき大男の來て、難波に旅居する

江門―江戸
おとしめ―卑み見さげ
さだめ―評

將殿の見まほしき由宣ふとて、江門に下したりしに、又都にて日野中納言殿のゆかしがり給へばとて、江門より申しのぼせて、正宣みづから持ちて五月朔日都にのぼりて、「今日日野殿に持ちて参るなり」とて、おのれが旅居を訪ひぬ。持て來れる者なれば披きて見るに、文字のこまやかなるに、筆の勢をゝしく、はたにほひありてめでたく見ゆ。假名遣古にも今にも叶はずいとみだりなるが、多くてにをはも調はぬ所まじれり。歌も一きはいかにぞや覺ゆるあれど、近き世のものとは見えず。あながちに後の人のつくり物とおとしめ悪きものなり。其事の正史どもに違へるは、唐にもこゝにも多くあることなれば、とかくのさだめ、益なきことならん。其文詞は別に寫しおけり。奥に、經房卿の懐紙の書法めきて書かれたる、

かきくもる雪げの空をふきかへて月になり行く須磨の浦風

と云ふ歌あり。正宣是を板に彫らせて、ふるごと好む人たちにはとらせぬ。此經房卿といふは、たしかに知られず。おなじ頃別に藤原經房といふ卿あれども、こと人なり。猶つぎ／＼に考へ得る事もありぬべしと、大よそを斯くなん。

黑木の御所—皮を削らぬ材木にて製れる麁末なる御所
もがさ—疱瘡
なまざかしうする—なまなか賢ぶる
かゝづらはねば—てんで相手にせねば

に、いとこまやかにて、かしこくも安德の帝の御ありさまを書き記したるなり。其大かたは、帝西海の底にしづみ給ひしにはあらで、しか〴〵の人たち、五人六人具し奉りて但馬國にひそかに行幸まし〳〵て、黑木の御所と云ふをつくりてかくれおはせしを、文治三年五月十七日に、もがさにわづらひ給ひて、遂にかくれさせ給ひきとぞ。行幸の事、御なやみのほど、かくれさせ給ひての後まで、いとくはしく書きつゞけて、中には人々の歌もおほく見え、末に、建保五年九月二日と書きて、「左古麻呂へ經房」とあり。經房は帝をもり奉りて、かくれ忍びしぬしにて、其子左古麻呂へ書き殘したる文なりけり。其次々に、左古麻呂が末々經久と云ふまで、十三代傳へしと見えて、ひとりごとに自からの手して記しつゞけしが、天正十五年といふまで有りて、其後は見えず。天正の時、家の棟の上に結ひつけ置きしまゝの物と見えたりとて、津國池田人山川正宣語り聞かせしを、おのれうけがはずして、「かゝる事はつね聞く事にて、なまざかしうする人の、僞り作ることあるものなり。見まほしくも覺えず」とて、かゝづらはねば、正宣も强ひても言はず。難波人非辻尚監も、「いとめづらしきものなり。見給ひつや」といふにも、おのれ又、「後の人のつくりごとと覺ゆれば、ゆかしくもあらず」といらへて月を經しに、此文書白川少

薨。時年七十五。詔遣二攝津大夫從四位下佐伯宿禰毛人。兵部大輔從五位上大伴宿禰家持一弔二賻之一。年足者後岡本朝大臣。大紫蘇我臣牟羅志曾孫。平城朝左大辨。從三位石足之長子也。率性廉勤習二於治體一。起レ家補二少判事一。頻歷二外任一。天平七年授二從五位下一。任二出雲守一。視レ事數年。百姓安レ之。聖武皇帝善レ之。賜二絁三十疋。布六十段。當國稻三萬束一。九年至二從四位春宮大夫兼左中辨一。拜二參議一。勝寶五年授二從三位一。累遷至二中納言兼文部卿神祇伯一。公務之閑。唯書是喜。寶字二年、授二正三位一、轉二御史大夫一。時勅二公卿一。各言二意見一。仍上二便宜作別式二十卷一。各以二其政繁二於本司一。雖レ未二施行一。頗有二據用一焉。

養和のみかど―安徳天皇

おほんたから―百姓

○養和のみかどのあやしの傳

文化十四年春ばかりの事なりけり。攝津國能勢郡出野村に、辻勘兵衞といへるは、いと古くより此村に住むおほんたからなりけるが、茅屋のむね葺きかふとて、長さ壹尺五寸ばかり、めぐり六寸に足らぬほどの竹筒の幾重かつゝみたるが、棟木の上より落ちにけり。あやしと思ひてひらき見しに、竹をふたつに割りて、中には石灰にて包みこめたり。一ひらの紙に、何にかあらん、書きける有りけり。石灰をふるひ清めて書ける物を讀み見る

懷風藻―天智天皇の御代より平安朝に至る迄の我國人の詩集

ちぬ。そも〳〵此石川年足朝臣は、平城の帝に仕へ奉りて、つかさくらゐ三位式部卿までなりのぼり、天平寶字六年に身まかられし事、續紀廿四の巻にくはしく傳ありて、金牌とあはせ見るに、違ふことなし。しかのみならず、作意見別式廿巻と有りて、おほやけのまつりごとにいさをおはせし朝臣なり。又萬葉十九の巻に、

天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布

といふ歌見えたり。父の石足朝臣も、懷風藻に、五言、春苑應ㇾ詔詩一首載せられたり。近世に大和、河内、攝津などより、ふるき墓誌これかれ掘り出でたるものあれど、かく昔にちかく位たかき人の、黄金もてつくれるさへあるに、文字の書きざまめでたく、よろづとり具したるはあらざりけり。いでや、かくめづらしきものを掘り出でたる折しも、都に上りあひて、まのあたりその物を見し事のかしこくもうれしくも、尊くも珍しくも覺えて、このたび旅路のつとには、これにまさるものあらじと、人にも誇りぬべし。墓誌の文のくはしきことは、こと物に記しぬれば、こゝに省きて、たゞ其掘り出でたるゆゑよしのみを、書きつけぬるになん。

廢帝天平寶字六月九日。紀曰。御史大夫。正三位兼文部卿。神祇伯。勳十二等石河朝臣年足

うちぬ—寫しぬなどの誤なるべし

是はいとも古の墓誌なり」とて、其掘りし所をばもとの儘に埋めさせて、金牌をば寺に持ちかへりぬ。多門院は歌よむ法師とて、西六條の門主につかへまつる瀧詮に物學びければ、すなはち持ち行きて見せけり。詮見ておほきに驚き、「是はいと尊くめづらしき物なり。門主に見せ奉らんを、しばしあづけよ」とて、門主にも見せ奉りぬ。門主もめづらしき物とて、めでさせ給ひて、詮にかへし給ひけり。詮つく〴〵思ふやう、すべて墓誌と云ふものは、後の世にいたりて、おくつき所さだかならず成りたらん折、人に掘りかへされたらんにも、是を見て某が墓なるを知りて、掘りも出ださず、もとのまゝにをさめしめんが爲のものなり、されば今此墓誌も、もとのまゝに埋めて、さて碑を立てばや、其いしぶみには、たゞに續日本紀に見えたる此朝臣の傳を、それがまゝに彫りつけて、石のうしろに、いさゝか掘り出でたるよしを記し添へてんと思ひて、其由多門院にも語りて、墓誌はしばらくがほど多門院がもとに預らせおきぬ。かゝるほどに、やんごとなき御方々よりもほの聞き給ひて、いかで一目見ばやと宣ふに、もだしあへぬ方には見せ奉り、又ふるもの好むおのがどちは、多門院に訪ひ行きても見るほどに、都べにはやう〳〵かくれなくなりにけり。おのれも二人三人ともなひ行きて、五ひら六ひらはう

刀自—一家の主婦の稱、或は單に婦女の稱

おくつき所—墓所

ひごとしけり。狐呪ひごとにうてて、日にけに痩せ衰ひゆきつゝ、つひに此岡を枕として死にけり。故六右衛門殿是を見つけて、人知れず母刀自と二人して、ひそかに此松の下に埋められにたり。其夜より母刀自物の怪にわづらひて、あらぬ事ども口ばしりつゝ、年久しく我が斯く領じをする所に、如何なればけがらはしき物をば埋みたる、とく掘り出しきよめずば、いみじきめ見すべしと、かへす〴〵言ひのゝしれど、何の祟といふ事を知る人あらねば、たゞあきれたる計なり。故六右衛門殿、ひとり其心を知り侍られしかば、ひそかに松の下に行きて、狐のなきがら掘り出でて、外に埋めかへられしかば、刀自の物の怪おしぬぐひたるやうに、心地たひらぎにけりとぞ。おのれ幼き耳に聞き覺え居れり。かくて思へば、此松のもとは、尊き人のおくつき所なりしならん。其まゝに打ち捨ておかん事もいかゞなり。よくあらため見て、爲んかたあるべし。いざ給へ。おのれも行きて見ん」とて、共に行き見て、かたへより始のやうに掘りかへし見るに、こたびは、三尺まで掘らぬに、墓誌の金牌を取出たり。あるじは心なしの賤男なりければ、はじめにも心づかざりしなるべし。多門院打ちかへし見て、土にまみれたるを洗ひ淸めければ、こがねの光かゞやきて、文字あらはれ出でたり。多門院、「さればこそありけれ、

すゞろ云々—何となく薄氣味惡しければ
六孫王—貞純親王の長子源經基

ばや」と言ふ〳〵、二人してうがつに、四尺ばかり下にいたりいと固し。土をかき出して見れば、下は炭もてひたうづめに埋めたり。又うがつに、炭ばかり壹尺も掘り出でたらんと思ふ下に、朱にて、一尺一二寸に七分ばかりの、かたち角なるもの有り。其かたへを掘り崩したるに、中に白骨のいと薄らぎたる有りけり。六右衛門も夢語をも思ひあはせて、何となく物おそろしく覺えしかば、もとのまゝに繕ひ埋めぬ。某も疑はれたれど、すゞろむくつけければ、言葉ずくなにて、互に口かためて別れかへりぬ。斯くて人にも語らず有りしに、六右衛門が弟の法師になりてみやこ東寺の近隣、六孫王をいつき奉る寺のうちに、多門院と云ふに住みてあるが、年の始には兄の許にとて訪ひ行くを、今年は何くれと事にまぎれて、三月の十日ばかりに行けり。よろづの事語らふついで、六右衛門も、弟の事なり、ことに法師の身なれば、つゝむべき事にもあらずと思ひて、「しか〴〵の事なんある。そこは佛につかふる身なり。彼の松の下に行きて阿彌陀佛唱へくれよかし」といふに、多門院しばしとて言ふやう、「待ち給へや、そは聞きおける事あり。三十年あまりのむかし、此村にいみじき行者の有りしが、小鳥をこのみて多くすゑ籠にこめて樂みけるを、あしき狐ありて、夜な〳〵取りしかば、行者はらだちて食とめの呪

ふつに—全く

うごもてり—土高く盛り上れり

おしあて事—推量事

のれは斯く軒をならべて、やからのやうに睦びかはせば、如何ならんことも隱し給ふべきにあらず。若しさもおはせば隔なく語り聞かせ給へ」といふに、思ひもかけぬ事なれば、しばしあきれ居たるが、「わぬしは漫言いふ人にあらず、何事を見聞きて斯くはいふぞ。ふつに思ひよらぬことなり」といふ。おしかへして、「いな諍ひ給ふな。たしかに埋み給へる所を知り侍り」といふ。あるじいよ〳〵訝りて、「そは何處ぞ」と問へば、「荒神松の下よ」といふ。あるじ、「さらに知らぬことなり。いかなればしか言ふぞ」といふ。某いふやう、「おのれ昨日のつとめて、起き出でて草のへだてのあらがき結ひつくろはんとさしのぞきたれば、荒神松のもとのいつも草生ひぬ所、あらたに掘りかへしたりと見えて、土うごもてり。年の暮には、誰もことたらはぬならひにてあれば、いとうきたるおしあて事なれど、そこには有るまじき事ながら、心よりほかに、もし黄金もたる人をや傷ひて、人知れず埋め給ひしと思へば、へだてなき中は、うしろやすからず思ひ參らせて、斯くは聞ゆるなり」といふ。あるじ、「いぶかしき事かな、何事も言はじ、いざ行きて見ん」とて、二人して松の下にいたり見るに、まことに新に土を掘りかへして、物を埋めしやうにうるほひうごもてり。あるじも驚きて、弟の夢語をも語りて、「如何にまれ、掘り見

言いみ―不吉の言を避くること

と云ふが、兄にむかひて言ふは、「年の始に言いみもしあへで、かゝることと聞ゆるは、いかにぞや思ふ給へれど、さて黙し居るべきならねば聞ゆるなり。おのれ一昨日昨日と二夜つゞけて、いとまさしき夢見侍り。其夢は、わが家のうしろの岡くづれて荒神松たふれ、家もおし崩されぬと見き。二夜まで同じ夢見しは、必ず其さとし有ることならん」といふに、六右衛門は、心ふとき男なりけるが、年頃思ひわたりけるは、此岡のもと五百坪もあるべきを、いたづらに野ら藪となし置かんこと、益なき事なり、いかで此岡崩し平げ、草原刈りはらひて、畑にもうち苑にもなして、こゝは林檎の土にあへる所なれば、林檎の林ともなさばや、さらば年毎にいくそばくの價を得ましと思ふ、心だくみかねて有りしかば、弟がかく言ふをよきをりぞと思ひて、「我もしか思ふなり。三日をも過ぐさばもろともに堀りたひらげん。其こゝろじたくせよ」と言ひ合せてある程に、三日の口になりぬ。つとめて隣に住める某名忘れたりとかやいふ賤の男、年の始のことぶきとて來しが、「ひそかに聞ゆべき事侍り」といへば、おくまりたる所に誘ひて、「何事ぞ」と問ふに、某ちかく居寄りて、「いと聞え苦しく、うちつけに無禮なることには侍れど、そこには、もし年の暮に人を傷ひて、なきがらを人知れず埋みかくされしことは侍らずや。お

つとめて―翌朝

うからやから―一族

しに、おのれあらぬ程なりければ、懐紙に、この墓誌の文書きて、文中に（文は別にしるせり）うたがはしき事など記し出でて、「おのれが思ふ所も問はまほしき。一日二日のうちに、又も訪ひ來なまし」と、言ひおきて歸りぬ。さて高雄より歸りて先うち見るに、めづらしく覺えて、明日はとく詮がもとに訪ひ行きて、其金牌をも見、又傳のくはしき事をも問ひ聞かんと明くるを待つに、つとめてより人々とひ來ていとまなく、日を暮しぬ。廿九日の夕暮いとまを得て、詮を訪ひて、先金牌の事を問ふに、詮くはしく語りきかするやう、攝津國鳥上郡白髪郷、（白髪をまかみとよめる由の考は、別にくはしく記せり）と云ふは、阿久刀神社の北にあたれり。こゝにあくた川と云ふもあり。河をわたりて廿町ばかり行けば、古曾部とて、能因法師が住みしあと所なり。そこに光徳寺と云ふ寺ありて、やがて光徳寺村といふ。村長田中六右衛門は、幾代もかさねてこゝに住めるものなり。六右衛門が垣内に、いさゝかの岡山有りて、岡のきはに一本の松生ひたり。いつの世に誰が言ひそめしとも知らず、荒神松とよび來れり。其岡のもと五百坪ばかり野らとなりてあるに、松の下五尺四方のみは、昔よりたえて草生ひたることなしとぞ。今年正月元日のつとめて、都も鄙もおしなべたる祝ひごととて、餅のあつもの調じて、うからやからつらなり居て食ふに、六右衛門が弟與兵衛

沙彌―佛門に入り剃髪したる男子、沙彌尼に對す

慧眼。生々得總持。必證大菩提矣。　執筆沙彌顯慶（春秋廿三歳）

大野廣城云ふ、此類聚名義は、おのれ早く元本を布寫しにたる本を得て所藏す。後に或人の所藏せるを借り得て挍するに、此本五卷ありて、中のさま小異あり。委細に挍合して初に附錄一卷あり。都合十一卷なり。此頃の古寫本全部したるは世の中に久しくなし。尊むべし。

名義抄本文臨摹

麥（广牀禾　ムギ）麦麦（正　大―フトムギ　一云カチカタ）小―（コムギ一云マムギ）―奴（クロムギ一云ムギノクロミ）蕎（一上騎ソハムギ）穬（上廣　―カラスムギ）瞿―（ナデシコ）

前の和名抄の處に云ふ如く、朱點をほどこして聲をさして記されたり。此書全體のまゝにて世に出でしことといとくめでたき事にこそ。時代追考。

○石川年足朝臣の墓誌

石川年足朝臣の墓誌の金牌ほり出でしは、三月十五日のことなりけり。おのれ難波に有りしほどなりしに、難波にて誰知れるものもなかりき。廿七日京にかへり上りても、又誰知れるものなかりき。一月を經て、四月廿七日高雄山にのぼりし日、瀧詮が訪ひ來り

偕下

魚虫鼠龜黽 鬼風酉雜

凡此書者。爲愚癡者任意抄也。不可爲證矣。立篇者源依玉篇於次第。取相似者置隣也。於字數少者集爲雜部。依類者決也。篇中聚字者私所爲也。印字雖在人部。依難求入卩部。失字雖在手部。依難知爲大部等也。自餘字准可知之。注中多略用片。

ユ音字 乙訓字 ｜也字 ネ従字 才於字 等也。

朱音者正音也。墨聲者和音也。片假名有朱點者。皆有證據。亦有師說。無點者雜雜書中。隨見得註付之不知所。追々可決之。

卷尾に云ふ、

仁治二年辛丑九月六日。於賀茂菴室交點畢。凡此書者。以作者自筆草本書寫之間。文字前後。或重々定有紕繆。尋淸書之證本。追必可交合之。

釋子慈念 生年卅六歲

建長參年八月八日亥刻。於洛陽城鷹司之邊。一筆書寫之畢。願以此結緣。世々開

佛下 本

舟丹 骨角貝頁彡髟長 手木林 大才

佛下 末

牛牛 片爿 豸豕 乙几九九火光元 牧八 八大火黑

類聚名義抄法上

水シン 言足立音 豆豈豐 卜ヒ止 面齒

法中

石玉王 色邑阝卩邑 阜阝自 土士 心忄 巾帛 糸衣ネ

法下

木ネ 禾耒 香黍米乚宀冖 勹穴雨雲西 門門 囗尸虍 席處 广疒 鹿疒 歹歺夕 子了 斗乾卓 寸

類聚名義抄僧上

艸サ 竹力刀刄ノ 羽毛食金

僧中

人一瓜冈皿瓦缶弓㫃方 矢斤矛予 戈欠又攴支文攵鬥 皮韋車羊馬烏隹

頓阿法師―歌僧、和歌の四天王の一人

おろ〳〵―ざつと、ほゞ

佛法僧―佛の所謂三寶

はめ執行の宅にいたりて、此日記を見つゝ人々抄錄することあり。おのれも速水春曉齋にそゝのかされて行きて見ぬ。こまやかに書きて、百枚ほどつゞきたる六册あり。皆ほぐのうらにかきたり。貞和應安の巻をみしに、いとをかしき事も多し。頓阿法師この執行が隣に住みし由など見えたりき。

○類聚名義抄

東寺の觀智院に類聚名義抄の古鈔本ある由、はやくより聞きおきたれば、知るすぢをもとめて行き見ぬ。ひねもすくりかへし見て、おろ〳〵寫しとりぬ。菅原是善の撰と聞きおけれど、さにはあらじ、延喜以後の物にて、かならず法師の手に出來しものなるべし。佛法僧の三字にて巻の序なせるにても知る。巻首巻尾をいさゝかこゝに記す。

類聚名義抄佛上篇目

人亻辵夂匸ヒ走麦一丨十身

佛中

耳女舌口卯品㗊 目自 鼻見曰日白是 田肉月

思ひあがれる―自負し、たかぶれる

執行―寺の事務を總理する職

むね〳〵しき―重立ちたる

桐の葉　　六　巻
常葉　　七　巻
奈良の葉　　十六巻

此ほかにも猶有りしとぞ。これは山田の人杉浦光基が親しき友のもとに持ち傳へしかぎりなり。月のゆくへ、池のもくづ、ふじのいはやの三部は、おのれも寫しとりぬ。此おうないと思ひあがれる本性にて、人のいさめに從ふことを爲さず。本居氏、宇治氏などによろづ問ひ聞くことをなさゞりしかば、惜むべし、書ける物てにをは調はぬ事多かりけり。其友とするは多くはからまなびのはかせたちのみにて、龍公、美野公、臺江、北海などと親しく交られしとなり。

○祇園執行日記

祇園の社まへ町南側に、執行とてむね〳〵しき家あり。世々につぎ來りて、先祖よりの日記あり。執行日記といひ傳へたれど、表題には社家日記とあり。世に祕物にして人に見すること無かりしを、京都好事の人たち、とかく言ひよりて、月に壹兩度づつ日をき

三鏡—水鏡、大鏡、増鏡

遊仙窟—張文成の著せる支那小説

○荒木田麗女著述書目

伊勢山田御師慶德三郎太夫妻麗女といへるは、荒木田武遇が女なり。物語書を好みよみて、其すぢの書どもおほく自らも作り出でたり。

月のゆくへ　三鏡の文體になぞらへて、高倉帝、安德帝二代の事を記す。そのこゝろざし、いや世つぎの今世にうせたるを試みおぎなはんとなるべし。	三巻
池の藻くづ　增鏡のつぎを慶長まで書きつけたり	七巻
ふじのいはや　遊仙窟をよくうつし書けり	二巻
桂中將	三巻
野中清水	二巻
奈良志波	五巻
しの竹	八巻
安達原	三巻
五葉	五巻
常陸帶	三巻

聲をさし－訓みを示し

臨摹－見て寫す

る處あり。されど其舊は同本なるべく思はるゝさまなり。中西本物名の漢字、又和名の榜に朱點を施して聲をさしたる巻あり。今朱色を換へて委曲に寫せり 此を重複の巻の中の朱點に對校するに差ふことなし。さて案ずるに、倭名抄原本如レ此朱點を施して聲をさして記されたるを、世の中の本は多く點を省きて寫し傳へたるを、たま〳〵此本に遺れる事いと〳〵めでたし。類聚名義抄、字鏡集、伊呂波字類抄などにも指聲の點あり。東宮切韻唐玉篇の字訓にも點ありしこと、字鏡集跋に見え、名義抄にも其點を重くせしこと篇目の巻に見えたり。又今の印本の日本紀にも點の遺れるあり。永和の古本には朱點いと多し。釋日本紀にもあり。其外古書共に例ありて、古は言語をつゝしみたること知るべし。

中西本臨摹

調度部第十四　征戰具七十三　幡 附旒 云々 音翻 波太 云々 音流波 太阿之

おのれ廣城、和名抄古寫本數本傳寫して所藏す。因に其目錄の一二三をこゝに擧ぐ。

古本和名抄 本文の頭毎に●印施し又頭毎に一二三の印を施したり 尾張國大須眞福寺所藏古寫本、天文本 天文十五年丙午古寫本、下總國香取郡鏑木村、平山伊右衛門滿晴と云ふ醬油屋所持せり 中西本、南雲家所藏古本、此外契沖、眞淵○ 本居及び諸大人校正本を集めて校本和名抄を著述して家藏す

鈴屋翁―本居宣長

自二公意僧正御房一傳領　　三井沙門任契

大野廣城曰、伊勢山田外宮神人中西氏所藏、和名類聚抄は、二十巻の古寫本なり。第八の巻の奥に、「自二公意僧正御房一傳領三井沙門任契」（伴信友云ふ、文安二年田總能記に曰く、三井寺住心院の前意僧正筆、釋門公意加筆となり、此公意後は住心院をつぎて僧正となりたるなるべし。此僧同人歟。）とあり。是を印本に比校するに、異同すくなからず。其中重複して全くは十一巻あるを、二十巻の目次を備へて全部の如くせり。又音樂の部を音樂の具として調度の下の部へ収めたり。又形體部、術藝部、職官部及國郡部の畿内の國の部より、郷名の長門までなくて、紀伊の國の郷名より對馬に至るまであり。件の如く重複多く、本文甚だ異なる處あり。又國郡の部は、まさしく缺けたる事は明かなるをも云はずして、目次を備へて二十巻餘部の如くにせり。是は往昔缺本共を取集めて、私にしか二十巻に作り備へ、門部をも私に作り備へたるものなり。さて總て二十巻二百五十門となしたれども、三四の門は重複せり。（此門部の員序にもあはず）巻次門部の立てざまは、印本の總目録において加筆して別てり。さて此中西本、鈴屋翁の校せられし本と大方同じさまに見ゆれど、又甚だ異なる處あり。巻次門部も亦異な

欲以廣二其宮一、而得二古文尚書、禮記、論語孝經、凡數十篇一

明經—大學寮の明經科

御師—身分ひくき神官

墨點朱點一。皆用二自身之功一。子々孫々。深韞二匱內號一。不レ出二閤外一也。　清　厚

正和第三曆孟夏初五日。以二家之祕說一。授二申生德才子一。以二十一代之學業一。終二十三卷之

詁訓一。當時希有者也。　明經得業生清原長隆

古文尙書合部十三卷。花園帝正和年中。明經得業生清原長隆。以二家之祕說一。所レ加二

訓點一也。手書曰。以二十一代之學業一。終二十三卷之詁訓一。當時希有者也。且朱書所レ謂少

納言入道者。藤原信西也。所レ謂總州者。助教直講定康乎。淸原世々傳二授祕本一。明々昭

昭。余偶得レ之珍藏有レ年。然今以レ爲二希代之物一。奉二納勢州一。

大神宮文庫。而貽二萬世洪寶一。表二力寸微忱一也。唯冀神之靈永垂二

鏡照一。謹跋二一語一後證。

貞享元年甲子夏四月上旬

島原城主從四位下主殿頭藤原忠房

○和名抄古抄本

伊勢山田御師中西淸太夫家藏和名抄十冊奥書に云ふ、

尙書—書經
島原侯—島原城主藤原忠房
少納言入道—藤原信西
壁中舊本—漢書藝文志に「古文尙書者、出二孔子壁中一武帝末、魯共王、壞二孔子宅一」

○豐崎文庫尙書

伊勢山田豐崎文庫に、古文尙書十三卷あり。貞享元年島原侯奉納なり。尤もめでたきものなり。本書の奥に云ふ、

仁平元年六月廿五日申刻。以二少納言入道一摺本之釋文見合了。總州之御時。以二古本幷唐本釋文一所レ被レ付二音義一也。然而依レ有二不レ審事一。重所レ校二合古本一勘物雖レ有二委細事付一。今委二之本一合點畢。不レ載二摺本一勘物付輪。

應保二年四月廿六日見二合或古本一了。仲書江家之繼本也。披含之處。其可レ取之事有レ數。仍一部所二挍合一也。

建保六年七月九日授二仲光一了。在御判

建長第八暦晩春十一日書點了。至二此書一者以二摺本一書二寫之一。以二古本一挍二點之一。凡虞夏商周書者。壁中舊本隷古之遺字也。雖レ然 改二古字一爲二今字一。唐本又如レ此。其上高倉上皇御續之本又如レ此歟。當家尤可レ用之哉。但古字之體。一向不レ可レ失レ之。仍本用二今字一。傍附二古字一者也。一部十三卷五十八个篇。雖レ爲二一字半字一。不レ借二他人之手一。偏至二

三十六人集―三十六歌仙集、一條帝の時藤原公任の選

○古抄本三十六人集

西本願寺に所藏の三十六人集古抄本あり。奥書に云ふ、

此三十六人家集者。借二本願寺光常家珍之本一。不レ違二一字一。今書寫挍合訖。件集昔日雖レ爲二官本一。有二子細一下二賜本願寺一。云々。誠世間無雙之正本也。新院御在位之時。被レ召二上此本一。被レ遂二書寫之功一之處。三十六人集之内。三冊不足之間。抑人丸集者。照高院道晃法親王業平集者。日野前大納言弘資卿小野集。烏丸前大納言資慶卿今書續之給。仍申下。件官本補二其缺一。終二全部之功一者也。深祕二函底一。不レ可レ出二家外一。穴賢。云々。

寛文第十暦仲春　（花押）

右三十六人家集。飛鳥井一位雅章卿眞蹟之本。息左衛門督雅豐卿借二請之一。而全部染二愚筆於燈下一。連々今獨挍レ干レ玆。外題兵部卿幸仁親王眞翰也。尤依レ爲二祕本一。不レ可レ出二閫外一者乎。

元祿五壬申歳林鐘中澣　右大臣　（花押）

料足―錢
御りある―御座る
ホウラク―法樂、
五文―御門
三文―山門

コシニツイサシ、上臈サヱノ御ソバヲヨシ〳〵トトホタ、ソノ時ニ御上臈タモトヲジツトトドメテ、御トマリアレヤ殿トテ、エクボハシホニアマツタ。料足ノ一文、カタワレモモタネド、ヲトコノキリナレバ、マヅ御名ヲトウタ。コレナル上臈ノナヲバナニト申候、ハツハナト申候。ハルノハジメニオモシロヤ、ハツハナコレナル御上臈ノ、ナヲバナニト申候、アタラシ殿ト申候。アタラシ殿ト聞クヨリ、イマイデト思ウテ、ソトヨテミタレバ、御名ハアタラシ御カホハフルウ御リアル。サモアレ、イカホドノ御出ゾ、レイシキサブラウ。レイシキノコトトハ、一スヂノ御事カ、思ヒモヨラヌコトナリ。ワレサモサブラハズバ、ホウラクノ御連歌、ホウラクノ御連歌トハ、五十文ノ御事カ。オモヒモヨラヌ事カヤ。ワレサモ候ハズバ伊勢ヘノ御マヰリ。伊勢ヘノ御マヰリトハ、ミワタリノ御事カヤ、オモヒヨラヌ事ナリ。ソレサモ候ハズバ、大名ノ御カド。御カドトハ、五文ノ事カヤ、オモヒモヨラヌ事ナリ。ソレサモ候ハズバ、御寺サマノ御カド。御寺ノ御カドトハ、三文ノ事カヤ。時々ノアキナヒニ、アレカルヲエラシメ、アレカルヲエラシメ。

トッコロ—ところ、野老

一モジ—葱、京都の女の語

クヾダチ—越後方面にて山の草の人参の葉に似たるものを莖立と稱して春の頃摘み取ることあり、それなるべし

クヾヒ—白鳥

ボウ〳〵マヒ—遠山眉、茫として薄き眉

ススアウ—素素袍

ウラウ、ニテウラウ、大コンウラウ、カハホ子カブラウラウ、フキウラウ、ヲアヘノセトイフコヱ、シホナクゾキコエタ。トッコロウラン、ヤマノイモニサトイモ、春ノ野ニアルナル、カガミイヅルサワラビ、ユキノヒ丁ニヲセタル、ツク〴〵シウラウヨ。一モジスギナクヾダチ、アサツキモウラウヨ。六角町ニウル物、ウルモノ、コヒフナ、タヒトスヾキトウグヒカレヒ、ナマヅトイセゴヒト、ナヨシト、ニシヤサヾエ、ボラノコ、アハビカツホ、スルメト、正月ニイハフハ、カキヤタハラアイキヤウ、ヒシヤメハモチウリ、サハラノコハキリウリ、タコノテモヤツ、イカノテモヤツ、ホシダコモウラウヨ。坊門町ニウルモノ、キンテウ山鳥ヤマシギ田シギト、ウヅラトクヾヒト、ヒシクヒ、ガントカモトタカベト、アヂハスヾメテウナイ、シロコトリモウラウヨ。地獄(ぢごく)ガ辻(つじ)カラ、カセガツジヲミワタシ、ムロ町(まち)ヲトホレバ、ウラウウルマイハ、上臈(じやうらふ)サマノ御コトカ。十七八カラハタチニアマデ、廿四五ノ上(じやう)ラフ、ボウ〳〵マヒニウスゲシヤウ、ハサキトツテカネグロ、タチニタチテマシマス。我等ガヤウナルアツナシ、ワタモイラヌスアウ、セノヒボニキナイテ、コンノ十德(じつとく)ウヘニソツトキソウテ、スギナリノカサヲバフカ〳〵トキソウテ、フケドフカネド尺八(しやくはち)、

蓮如上人―本願寺住僧の第八世、明應八年寂す

ヤシヨウメ―艶女、なまめきてやさしき女

三品氏（貫之進、西洞院丸太町下る所に住す。）云ふ、貫之五巻抄、今南都西大寺にあり。外題には萬葉抄とあり。建仁年中鎌倉より寫しとれる由の奥書あり。合巻一冊にてやまとぢなり。萬葉十八十九廿の歌に點つけたるのみなりとぞ。

按ずるに貫之五巻抄の文、顯昭の袖中抄におほく引き用ひたり。同じ物にや。

○蓮如上人子守歌

京都丸太町通堀川西へ入る順興寺と云ふ淨土眞宗の末寺あり。此寺に蓮如上人のつくり給へりとて、みづからの筆して書きのこし給ひし子守歌と云ふものあり。文調いと古雅にして、いにしへの京地のさま思ひやらるゝなり。其文、

ヤシヨウメ〳〵、京ノ町ニヤシヨウメ、ウツツルモノヲミシヨウメ、坊門町ニウル物、クサヰカモヂハンロクテ、一クチナレドテウホウ、在京人ノメノドク九條ノ町マデ、アモトイウテトホルハ、スヤ殿ノコトカヤ。ミセヘダイテオキウリ、イタダイテヨミウリ。山城ノ國カラモテデテウル物、キウリホソネシロウリナスビヒシヤクカモウリ、アゴダウリニホダウリ、カラウリニヒメウリ、サコソアヂノアルラメ、ナ

金覆輪―縁だけを金にて覆ひたるもの

也。以二一斗三升一買二魚鳥一。謂二大魚鳥一也。

第三。定二衣服一之法式。先可レ用二麻布一。色者薄青厚青。或五所紋可レ用レ之。是則農民之上服也。衣長膝下五寸。袖長臂下三寸也。絹全不レ可レ用レ之。世工又同レ前也。但衣長膝下七八寸。商同レ前。年老後赦二紬類一亦曰。僧者木食草衣也。絹類全不レ可レ用。依二佛戒一也。士者面絹裏布也。五色從レ心用レ之。上衣紬布薄絹。行基赦レ之。綾其外異國織物等不レ可レ用レ之。民百人司者可レ用二絹裏一。若賜二貴人衣服一者可レ著レ之。太刀無レ用二金作一。鞍鎧等。蒔紋金覆輪直垂紫威鎧者。國司官人大將之外。全不レ可レ用レ之也。

第四。領地之事。其家之所領永代賜レ之。依二家々一多少不レ同也。官位職之所領者。以應二其器人一而被レ任二其官一。其位之時。賜二其職分之領地一也。其人死後不レ傳二子孫一。餘略レ之。上古法式大概如レ此。

右一卷藥園院有之處寫レ之了

永仁四丙申年五月二十五日　從五位下左衛門尉孝久

（花押）

○萬葉五卷抄

折敷—片木板を折り曲げて造れる盆、土器などを載すに用ふ

辰申—辰は午前八時より九時、申は午後四時より五時

段爲一町。町者四方六十間也。亦以六町四方爲一里。道路亦以長六町爲異國之一里。本朝亦准田畠之數。以六々三十六町爲本朝道路之一里也。

第二。貴賤之飯食法式。農民者以春雜穀四合米三合爲一日之食。爲農業則增米一合雜穀二合。百工亦然。其後行基改百工之食減米一合。爲其農業同前也。可食下鳥下魚也。器澁地墨塗赤紋三器。無漆之折敷等可用之也。無所領之四民。二十五菜之外至不可食。亦可食中魚中鳥。亦秋以來六合爲一日之食。勤其業之日以來二合中食也。冬以四合爲一日之食。勤業日則可食中食也。到秋冬中春可飲清酒也。自中春中之五日不飲清酒。無所領四民者皆然矣。亦農民不到四十歲不乘馬。若有病者赦之。但商工者赦之不赦較。亦曰。有所領之民可除雜穀。若用之者可謂恐天恩也。三十七年菜之外不用之。不可食大鳥魚。老後可飲清酒。若用濁者是亦慈愍端也。民百人之司者同官人也。三紋四器。一尺二寸之折數。內赤塗外黑漆塗可謂之。食時辰申之二刻也。以來一升爲十日之食也。國司者以六斗準一日之食。六器黃紋。臺可用之。臺高六國司之官位不同也。

右所謂下魚下鳥者。以米二升買魚鳥一也。以一斗二升買魚鳥一。謂中魚鳥

永仁—伏見天皇の時の年號

チコト點—漢字の四隅に點をうちて漢文の讀み方の記號とせるもの

十二合之升—十二合一升の割合にて

ぞや覺ゆる所あり。まづ六十餘州といふこと、行基の頃にあるべきことならず。又文中に詔二行基一といふ事見ゆれば、行基の作ならぬ事はしるし。三十六町を一里と定むるも、古くよりの事にはあらず。されど奥に永仁四年と見えたるは、其頃已前の物にはあるべし。チコト點をつけたるも、古く覺ゆ。從五位下左衞門尉孝久とふ云人、如何るなにかたしかに知りがたし。猶考へ得ることもありなんや。其文、

行基式目

抑本朝六十餘州之男女、凡五百萬口也。對二異朝一謂二一百億一也。凡本朝每年所レ出之米穀三百意（億石イ）也。以レ是養二彼生命一。或家富而飽レ食。終日好二嬌奢一。或家貧而堪二飢寒之患一矣。不レ如下立二法式一而補中窮民上矣。先以二田畠所レ出之五穀二十分一一爲レ貢。天子取以領。賜二百官莊官下司公大等一。代々如レ此。于レ茲人王四十五代之帝到二聖武天皇御宇一。詔二行基一而令定二田畠之廣狹一。以二六尺四方一爲二一歩一。以二三百六十歩一爲二一段一。凡上田出生之米穀。以二十二合之升一三石六斗也。中下之土地者。依二國郡一不レ同。以二繁多故一不レ書レ之。

亦曰。國中有レ郡有レ鄉有レ莊。凡以二三百六十歩一爲レ段。則廣六間長六十間。世以二十

落書—諷刺、名を顯はさずして嘲弄の意を書きて門壁などに張りしもの

行基—聖武天皇の時の高僧、和泉國の人

語眞字本などの體にはあらずして、東鑑の體裁に似たり。卷ごとに小序あり、一章ごとにまた小序あり。いとめづらしきものなり。惜むべし、二の卷四の卷八の卷缺けたり。

○常明寺兼好書

伊勢山田に常明寺といふ寺あり。本堂の天井に兼好法師の落書といふあり。

出生死海入二涅槃一

惠念之意趣大樂

大財常能堅固

吉田奥彈山野僧一七日箇日參籠

字の大きさ五寸四方もあるべし。吉田野僧とあるより、兼好ならんと言ひつたへしにや、いづれ四五百年前の物と見ゆ。

○行基式目

若狹小濱人石田千頴が許より、贈りおこせたる行基式目といふもの一卷、中にはいかに

しみら―終日

ふるの中道―京都郊外の名所、古學によそへたり

眞字―漢字音を借りて和語に當て用ひしもの

ともひ子のもとへおくられし消息を彫り添へたるのみなり。此奥書必ず彫りそへまほしきことなりかし。其奥書のうつし、

ともひのおもと、いかで古今歌集のあらん心を、つばらに得てしがもと其君へ申せるに、よきことぞ、やがて參でよと仰せらるゝまゝに、霜月のはじめつかた里にまかりぬ。しかあれば、朝氣の霜をふみ、夕の嵐ををかしつゝ、一日もおちず、縣居を訪はるめり。其君をもほめまゐり、此子もめづらかに、殊にいそしくあるかなと覺えて、よろづの事もおきて、晝はしみらに古りぬることをいひ、立歸りては、夜はすがらもかゞなべ記しなどせしものは、いとはや後の師走の望ばかりになん終りにし。さて詠みける。

白雪にあしもぬらして通ひにしあとは絶えせじふるの中道

○眞字平家物語

難波人井辻向監がもたる眞字平家物語といふものあり。全部十二巻、別に灌頂巻一巻そへたり。奥書に云ふ、「文安四年卯月五日」とあり。實にそのほどの書と見ゆ。伊勢物

萬葉最祕密和詞灌頂新點

莫囂（まが）二字音和。義曲也。圖（つ）今案本決當圖。傳寫變作圓。隣（り）二字音和義釣也。四字相合則曲。釣則初月名也。何以知然乎。文選第八。鮑明遠翫月城西門解中五言詩云。始出西南樓。纖々如玉鉤。末映東北墀。娟々似娥眉。蔽珠□玉鉤隔瑣窗。云々。新月艶曲似鉤。取喩暗合。之和義 大相 二字以和訓。爲和音於保比○也以爲翟。覆有兩義。取翟則喇叭之義也。取用則唯言語設也。如云。杖々使々章翟用互用。訓和訓義相從矣。先余所計爲仙覺所謂初句四字。和訓用由布豐本。和爲開夕月。也之字。仙覺用和義。雖然第二句。仙覺訓義猶爲乃則能御所仰混而失理。況余新案隨字得正義乎。因先用音更今

右契沖阿闍梨眞蹟（けいちうあざりしんせき）

山川正宣所藏

○縣居翁（あがたゐのおきな）贈（る）辨子（に）文

縣居翁（あがたゐのおきな）に古言（ふるごと）の心詞（こゝろことば）まなべなる辨子といふおもとは、田安殿（たやすどの）に仕（つか）へし女房（にようばう）なりけり。辨の字を和名抄（わみやうせう）にともひと訓（よ）めるによりて、ともひ子（こ）ともよばれたりき。翁（おきな）のもとにかよひて、古今集（こきんしふ）の講說聞（き）きて、打聽（うちぎき）ものせられしが、今板（いた）に彫（ゑ）りて世に傳はれる古（こ）今集打聽（きんしふうちぎき）なりけり。其打聽（そのうちぎき）書き終へられしより、翁のほめ聞（きこ）えられて、奧書（おくがき）にもとや思（おも）はれけん、一ひらの紙に書きて贈（おく）られたるが、いかなるにか、津（つ）の國池田人山川正宣（くにいけだのひとやまかはまさのり）がもとに傳（つた）へもたりけり。紙のたけ壹尺貳寸、橫（よこ）壹尺五寸五分ありき。正宣摸（も）して贈（おく）りおこせぬ。今板（いだ）に彫（ゑ）るには、斯（か）るもののありしをば知（し）らざりければ、たゞ翁（おきな）のもとより、

縣居翁―加茂眞淵
おもと―女を親みて云ふ語

平相國－平清盛

さはり－南蠻より出づる一種の銅器

○溫泉寺法華經

有馬の溫泉寺に、古寫の經卷二種あり。一は法華經八軸、般若心經、竝阿彌陀經一軸、觀菩薩經一軸、都合十軸也。心經裏書に云ふ、

志者爲入道心。西往生極樂也。願主君父母妻子。竝一見一禮之輩。同生一佛淨土矣。

長寬元年六月二十三日壬午。

傳へいふ平相國奉納なりと。

又一つは是も十軸にて、悲心房尊惠上人地樂より將來すといひ傳へたり。悲心房は平家物語に見えたる人なり。さはりの如き薄がねの箱に、二重に入れたり。むかし此箱のまにて、むしやけにやけたりとて、今金襴の袋に入れて、一軸ごとに口を括りてあり。軸の水晶金物などは、焦れたるまゝにて、別に一つゝみに爲してあり。箱いとめでたきものと見ゆ。

○萬葉集莫囂圓隣解

遊京漫錄　卷之下

旅路のうちぎき 自文政三年二月至九月記見聞之雜話了

○大和宇智川佛像

大和國宇智郡宇智川は、いとあさき小川にて、もすそをいさゝかかゝげて渉るべきほどなり。五條の里より、わづかに拾町ばかりなり。此の水上二町ばかり、兩岸そばだてる岩に、佛像一軀を彫りつけたり。二尺三四寸もあるべし。かたへに彫りつけたるは、

○

大般涅槃經。諸行无常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂。如是偈句。皆是過去來現世諸佛。所説開空法道。如來證涅槃永斷生死。若有至心聽□□□常得无量樂。若有書寫讀誦。爲他能説一經。其身於却後七却不墮惡道。

寶龜九年十月四日工少　　知　識

行きては見ねど

東路に行きては見ねど君いなば我こそ富士のねをも泣くらめ　同

以上二十八人は源詮につきて物學ぶ人々なり。

夢にこそ見め

留めてもとまらぬ月のかげをしみ思ふ夜な〳〵夢にこそ見め　たを子

立ちての後は

花の香を留めもあへず夏衣たちての後はくやしかるべし　鶴子

旅寝をやせん

妹を思ひ伊豆のみやまの郭公聞きつゝ君は旅寝をやせん　千枝子

かよふ心の

あかずして立ち別るとも千里までかよふ心のなどか遅れん　なほ子

人を惜むとて

東路に別るゝ人を惜むとてあふ坂山のせき留めまし　美子

おほくの山

繪にだにも寫しかねたる足引のおほくの山を越えて行くらん　やま子

いつと知りてか

名に高き富士の煙のたゝん日をいつと知りてかいかに留めん　みつ尾

たつ―裁つ、立つ

惜みつゝ

ほとゝぎす聲のかぎりを惜みつゝ語らひとめよ君が別を　惟明

別なりせば

かくばかり袖はぬらさじ假初の行きかひ路なる別れなりせば　正脩

別を惜しと

旅衣たつらん程を知らねども別ををしとまづ慕ひぬる　學玄

別路の

別路の行くへはさぞな武藏野のそらに涼しく月を見るらし　淵龍

別れて後は

かへらんと今聞くだにも戀しきに別れて後はいかゞあるらん　唯敬

空にこそなれ

君が行くおなじ旅路とあこがれて心もうはの空にこそなれ　俊章

ほどの遙けさ

又いつと逢ひ見ん程の遙けさを思へばかなし東路の空　ふち子

隔つとも

東路の雲の五百重に隔つとも心はこゝに通ひたらなん　長韶

道に出でたつ

ほとゝぎす啼きてとゞめよ故郷の道に出で立ちかへる君をば　延年

遠く行く

横雲のわかれて遠く行く人のなごりを惜しと鳴く郭公　通倘

思ひやる

別路に身をこそわけね思ひやる心ばかりは遅れざりけり　元数

留めて遠く

今はとてかへらん君が別をばとゞめて遠くなるぞ戀しき　信行

別るれば

別るれば遇ふことかたき物からに留めんよしをひた思ふやは　正遠

何か別の

よしや行け何か別れの惜しからん又もあふみと思ひかへせば　敬

きみと我

年月をあまたへだてて君と我あひ見ることも命なりけり　詮

心もともに

明日よりは心もともに影となり身はこゝながら添て行かまし　益親

心にしみて

逢ふ事は年月經んと思ふより心にしみて別れかなしも　觀主

君がわかれを

言の葉をかはす日數も夏衣ひとへに惜しき君が別を　全正

留めん留めじ

こゝろみよ留めんとめじは東路に君が越え行く道の關守　成薫

あかぬ心を

よしや君東に遠くかへるともあかぬ心を隔てざらなん　宗壽

月日かぞへて

故里に月日かぞへて待ちぬともしばし語らへ山ほとゝぎす　泰則

都の手ぶり—都風

いさらゐ—小井

君がへん木曾の山路も言の葉の花の都の手ぶりあふがん　好謙

日をさふる木陰をおほみ旅衣木曾路は夏も涼しかるらむ　恕庵

武藏野のこき紫を見るごとにおもへ都の夏山のいろ　とみ子

あひ見てし程はみじかく思ほえて別るゝ今日ぞ人はこひしき　益親

老らくの身ぞさだめなき東路のあふさか山の名はたのめども　水月

逢坂までおくり來て、

白雲の八重山遠くわかるともかけて待たばや雁の玉づさ　茂廣

いさらゐのあかぬはむすぶ淸水かな　里村立碩

送二淸水大人東歸一　僧聞中

荏土曾遊似二萍分一。頻年老去此離レ群。芳宜織レ綿皆空沒。珍重斯文獨屬レ君。

淸水君の江門にかへらせ給ふを、粟田のほとりまで送りきこえて、

年をへて又も越えませ逢坂の山松が枝の色かへずして　正輔

心して行かせ我がせこ木曾路なるうすひのあらし和田の朝霧　同

混沌菴送別歌

武藏鐙—古へ武藏より產出せし鐙

たぐへし—つけてやりたる

草づつみ—病の枕詞

紫—草の名「紫のひともと故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」古今集

東路を行きかふ鳥し後もあらば我はこととはん雁ならずとも　比禮雄

なみならず誰も忍ぶをしのばずの池のみぎはにとく歸るらん　長廣

駒なべて君がかへれど武藏鐙かけてまた來ん春をこそ待て　茂廣

扇に添へて、

別るとておくる扇の風をこそ君にたぐへし心とをしれ　同

御敎子のつらに思ひおきて給はらんことをねぎまつりて、

奧山の岩がき清水よゝかけて絕えぬ流をくまんとぞ思ふ　同

藥にそへて、

旅衣わけん夏野の草づつみな病せそと贈る藥ぞ　碩菴

なみならず語らひなれし君に今日あかず別るゝ袖の露けさ　段

土さけて照る日ざかりを心せよすゞしき風はよし吹きぬとも　同

言の葉の道のまよひを思ふにも慕はまほしき君があとかな　直孝

武藏野のゆかりもとめてむつびにし心なあせそ紫の色　好謙

木曾路をかへり給ふと聞きて、

つゝみ—恙

しかすがに—さすがに

うち日さす—都の枕詞

二葉草—加茂葵(二葉葵)に同じ

みあらか—宮殿

忘るなよ忘れで待たん言の葉にかけてかへりし賀茂の川浪　金親

年月は流れゆくとも鴨川の絶ることなくおとづれよ君　同

送別歌

旅衣きそのみ坂もつゝみなく手向よくしてとく越えね君　京都 誠之

留らぬ君とは知れどしかすがにはなちがたきは袂なりけり　眞堅

旅衣夏の日かずをかさねゆくたもとひかへよ木曾の山風　俊恕

別れなば君がみやびの言の葉を古ごと學ぶしをりとをせん　同

音にのみ聞きて忍ばんあかでしも賀茂の川浪立かへりなば　助凭

かくばかりをしと思へど言の葉は心およばぬ君がわかれ路　信賢

かつ行きてかつ歸來ん君なればいつと契らん言の葉もなし　同

うち日さす都の友をわすれずば又も來ませよ花の咲くころ　剛寛

賀茂内陣の葵にそへて、

神山の皇御神のみあらかの小簾にかけたる二葉草ぞこは　顯金

時鳥などいそぐらん橘は御階のもとにいまだ匂へり　正風

馬のはなむけ—旅立つ人への餞別

あふひ—逢ふ日、葵

おぼつかなみ—おぼつかなさに波を掛く

と自ら盃に書きておくり給へるに、いとゞあかず思ふ給へれど、家人たちと共に物まなぶ人どもも、待酒たゝへていはひ待ちおはすらん物をと、え留めもやらで、又も渡らんとなぐさめおき給へる言葉をたのみて、馬のはなむけに詠みてまゐらする歌。

別れなば賀茂の川浪よりあひて又かたらはん時を待たまし

富士の根の雪だにきゆる水無月に歸らん君が旅をしぞ思ふ

花さかば都を思へ月見つゝ我もしのばんしのばずの池

淸水大人の都の旅居をわかれたち給ふとき、人々に「ながれても淵瀬かはるな立ちかへり又もわたらん賀茂の川浪」と宣ふ御かへし。

賀茂川のきよき瀬のとを忘れずば又もあふひの頼まれもせん　　敏夏

同じく、

賀茂河を又渡らんと聞くもののおほつかなみに濡るゝ袖かな　　碩庵

同じく、

たがへずも又わたりませ賀茂川の月は淵瀬のかげ淺くとも　　菅臣

同じく、

大城のもと—江戸
ふりはへて—わざわざ、殊更
をぢ／＼—條々
けに—猶一層
いと—暇

立ち出でて君を待つまに春すぎてかすみが關に秋風ぞ吹く

送別歌　　大堀正輔

殿に仕へて大城のもとに參りけるごとに、まづ御許をとぶらひて、いにしへ今のことら語らひつゝうらなく睦ばひつることを、今數ふれば十年まりさきつ方の事になんありける。仕を退きつる後は、ふりはへても訪ひ侍らで、雲井のをちに戀ひわたりしを、二月の末つかた上りおはしてより、互に訪ひかはして、朝夕になれむつび參らせしかば、年頃いぶかしく思ひわたりし書のをぢ／＼、問ひきゝ參らせ、あるは花にともなひて、みやびの筵に伴はれ、ありしよりけに親しく交らひ參らせて、いとたのもしく思ひ聞え侍るを、かねて心ざし給へる都はさらなり、古りにし奈良の都のあとをもとひ、吉野山の花をわけ、和歌の浦にさをさし、難波堀江に船をうかべなどし給ふ折ごとに、世に名高うおはすれば、雲の上人をはじめ、知る知らぬみやび雄たちこぞりて、こゝに招き、かしこに誘ひ參らすれば、何くれといと無くおはするからに、心たらひて語らふ折もなかりけり。さて水無月なかば歸りなんとて、

流れても淵瀬かはるな立ちかへり又もわたらん賀茂の川なみ

うはがき—上、上書、書信の往復をいふ

中やどり—中途の滯在

神のごと聞えし君を思ひきや雲井へだててあふぎ見んとは　濱臣

かへし　＊　＊　＊　＊

伊勢にありけるほど、水月がもとより消息のはしに、

あひ見てはあかぬ心を鳥がなく東のそらにかへる君かな

今よりは雲のうはがきとだえなく雁のつばさに言葉かよはせ

かへし　家路へと急ぐ物からともすれば都の空ぞかへり見らるゝ　濱臣

同　今よりは雁の行きかひ絶間なくおとづれなんよ千代の春秋

箱根までかへり來けるに、信臣柏女などむかへにとて、湯あみがてら來りければ、塔の澤に日數かさねしほど、江戸より消息して、　光房

こよなき都の御長居は、さらにきこえさせせんかたなくなん。辛じてあひ見奉るべき日數のほどなきにも、猶ちかくて遠き心地せらるゝ御中やどりこそ、

今さらにこふぞすべなき百重山へなりしほどはさてもありしを

かき撫でて二子の山は見ますとも箱根のおくに長居すな君

蓮阿よりも、

すみ―定め、澄み

鳰の海―琵琶湖の別稱

かへし　逢坂の關の眞清水心あらば越え行く君が影をとゞめよ　信賢

はじめて訪ひ來る折、

心ざしふかくすみたり眞清水のながれをくまぬ人はあらじな　直道

朝顔につけて、

白露に起きおくれたるおこたりをいさめがほなる朝顔のはな　貴則

かへし　朝貌の朝い諫むる花をこそめざまし草と我も見なさめ　濱臣

大津にて久米良輔が、

思ひうし富士の高嶺も鳰の海の月みるときは忘れはつべし

かへし　鳰の海の月に心をいるゝ夜は思ひも出でず故郷のそら　濱臣

伊勢人寛信が、

御心を淸きしみづに君に我が流れて絶えずあふよしもがな

かへし　＊　＊　＊　＊　濱臣

讃岐人中村春野は、はやくより文かよはして、こゝによろづの事問ひ聞くぬしなり。難波の旅居にゆくりなく逢ひたるに、斯くいへる。

賀茂祭の日、雲錦亭にてゆくりなく濱臣大人に見え奉りて、

思ひきや賀茂のみあれの葵草かけても君に遇はんものとは　乗承

かへし　御生には今日ぞ初めて葵草君にまでとは思ひかけきや　濱臣

都にてゆくりなく清水大人にまみえ奉りて、ほどもあらず東に歸らんとし給ふに、わかれ聞ゆとて、

あふ坂の名こそたのまめ旅衣東に西にたちわかれては　乗承

かへし　程もなく別るゝ今日か都べにあふさきるさの旅ゐをばして　濱臣

清水大人都にのぼり給ひけるに詠み奉る。

吾妻より都をかけてほとゝぎす聲もとゞろに鳴きとよみつゝ　平康

かへし　都べは聞く人おほき郭公もらす初音ぞやさしかりける　濱臣

足引の山ほとゝぎす見だに得ず聲だに聞かで夏すぐらしも　川村兼輔

かへし　契あらばほどときすぎす逢も見ん若や今年の夏ならずとも　濱臣

＊＊

＊＊

あふ坂の名はむなしからめや　濱臣

までとは―まで逢はんものとは

あふさきるさ―一方善ければ一方悪し

やさし―恥し

ほどときすぎす―程時過ぎず、郭公

あふひ—逢ふ日、葵

つと—みやげ

かへし　名にも似ぬ我古寺の涼しきは君が心のすめるなりけり　成就院藏海

はじめて訪ひ來て、

ことさらにめづらしきかな郭公人づてならぬ今日のひとこゑ　荷田信美

かへし　悔しくぞ初音洩せる時鳥人傳にのみ聞かせましものを

「年ごとに忍びかけける神祭、うれしくけふにあふひなりけり」と濱臣ぬしの詠まれたるに、

東よりひかれて來しは神も亦かけつる今日のあふひならまし　直兄

かへし　❀　❀　❀　❀　濱臣

卯月末つかた、濱臣ぬしの初めて訪はれければ

千早振る我が神山のほとゝぎすあづまのつとに一聲は鳴け　直兄

かへし　東人のつとにはもらせ郭公しめの中なる初音なりとも　濱臣

はじめて訪ひ來れる折、

宮人のやどの淸水のきよき名は流れてよもの海におよべり　達阿

かへし　❀　❀　❀　❀　濱臣

まさめに―確に

見えわかれつゝ、あやどれる、絲のにほひも、中今の、物とやは見ん、上代を、まさめに見する、此のあや簾。

さゝなみの宿の寶と後の世をかけてつたへよこのあや簾　伴　鹿

都にありけるほど、若狭小濱人石田千顯がもとより、

ほとゝぎす都に名のる人づてをこゝに聞きても嬉しかりけり

かへし　時鳥都の空のはつ聲は聞かるもうれし鳴くもやさしゝ　濱　臣

播磨赤穗人長沼祐義より、

吉野山よしや花にはそみぬとも我が高砂のまつな忘れそ

かへし　高砂のまつらん君と思ひつゝなほも都の花にとまりぬ　濱　臣

消息の端に、

武藏野ににほひみちぬる言の葉の花を都に手折るうれしさ　恒　香

かへし　武藏野の野ずゑの小萩色なきを都に誰か花と見るらん　濱　臣

六月十七日の夜清水の成就院に月を見て、

心さへ身さへすゞしな月かげのきよ水寺に旅寝する夜は

かた—繪

泊洎舍—清水濱臣の舍の名
さきくさの—三つの枕詞
みつばよつば—幾棟も宮殿の重なりたる樣
みあらか—宮殿
まほに—正しく

もろこしの見ぬ花鳥のあや簾あやしや千世の物をわが得し　濱臣

清水大人の都にて得給ひぬとて、花鳥のかたいとをかしく物したる古き簾を見せ給ひければ、

花鳥の殘るにほひのあや簾かけてしのびし昔をぞ見る　茂雄

袖子にも簾の歌よみてよと言へれど、えよみ出でざりければ、

幾歳をふるき簾とおとしめて言の葉もだにかけぬなるらん　濱臣

斯くいひければ、やがてよみて出しけり。

花鳥のあかぬ色音を萬世にかけて忍ばん小簾とこそ見れ　袖子

泊洎舍の大人の得給へる古代の簾をたゝへて詠める長歌短歌

言の葉の、名におふ宮の、ふる言は、書にこそ見れ、さきくさの、みつばよつばの、みあらかも、あらたにたえぬ、代々を經て、しのぶ昔を、目のまへに、見るてふことは、かた原の、難かるものを、これぞこの、寧樂の都に、天の下、しろしめしけん、天皇の、大御代のものと、うつし身の、うつゝの世にし、つたはれる、このあや簾、あやしく〳〵、誰がつくり繪ぞ、まほにしも、見えぬものから、花のいろ、鳥のつばさも、ほの〴〵と、

つとめて―翌朝

はつ花のまちえし君を秋風のたちわかれぬる我がこゝろはも　攝津池田　山川正宣

伊豆國熊坂村竹村茂雄が許を訪ひて、二三日ありて別れかへる時、

故郷に待つらんこゝろ苦しさに別れもしひてとゞめざりけり　茂雄

袖子が許を訪ひて、年頃の物語にいたく夜ふかして歸りしつとめて、斯くいひおこせり。「よべはかりそめなる御對面にて、のこる言の葉のみおほくなん」

あひ見しはたゞ夢とのみ思ひしにあやしやこゝに殘る言の葉　袖子

見るまなく別るゝ君はなか〱に物思へとのしわざなるらん　同

惜むとも惜しともいはじ君は又いづちに急ぐ今朝の別れぞ　同

行きて見ぬ吉野の春をさながらに君が言葉のはなに見るかな　同

吉野にて花ゆゑにまよはゞうれしとよみ給へるを思ひて、

歸り來し君ぞうれしき花ゆゑにまよはば仇の名をや立てなん　同

箱根の山中といふ所までおくり來て、

伊豆の海のいつあひ見んと思ふにぞ今日箱根路の別れ悲しも　稻麿

奈良の藥師につたへたりし唐簾のいとも古きを得てよめる、

ながれにあらふ—蜀江錦

みるめ—見る目、海松

袖にみる色のみならで咲く花にあかぬこゝろもうつる萩原　高匡

故郷萩

おのれ猶にしきと見えて高圓や故郷しらぬ野べのあきはぎ　久足

月前萩

秋萩の花のにしきの露の上にやどりてすめる夜半の月かげ　秀經

雨中萩

むら雨のふる枝の萩のぬれ色にながれにあらふ錦かと見ゆ　濱臣

送別歌

別れては又いつかはと思ふにもいとゞ名殘のをしき今日かな　伊勢松坂 春庭

すゞとめの森の名よそに行く君を下樋小川のなほしたふかな　安守

見てかへれ清きなぎさの夜半の月墨田河原の秋はありとも　正興

あかずしてさやけき月に別るとも霞める春はめぐりあひ見ん　同

よる浪はたち別るとも伊勢の海に又のみるめを忘れざらなん　高匡

大淀のまつによりこし嬉しさもなか／＼つらくかへる浦浪　守良

たわみても露おもしろき花の枝は風をもうけず宮城野の萩　守良

折萩

紫のながめのみかは折る袖のにほひもふかき秋萩のはな　啓郎

朝萩

あかざりし夕暮よりも朝つゆのおきいでて見る庭の秋萩　友能

夕萩

わけよなほゆふべの露の小萩原いろ暮れぬまの錦きそへて　安守

野外萩

來てみれば今は名のみの武藏野に殘るにしきのあき萩のはな　元義

行路萩

秋萩のさかりをわくる通路は花ずりごろも著ぬ人ぞなき　元貞

萩映レ水

影ばかりうつろふ花になほあかでなみや萩こそ野路の玉川　春庭

萩移レ袖

笙　朝喬　正四位上度會宮後五神主

同　常善　從四位下度會檜垣八神主

笛　常安　從四位上度會檜垣舍人

笙　久敬　從四位下多大和守

同　都盛　從五位下大中臣山田大路藏人

篳篥　貞董　正五位下度會檜垣右兵衛

同　元善　正六位上橋山田大路主殿

笙　吉棟　正六位上度會小倉左京

笛　末慶　正六位上度會吉澤主水

篳篥　元秋　正六位上度會山田大路要人

伊勢松坂小津守良宅當座　八月五日

庭萩

咲しより朝夕庭のおもなれて見れどもあかぬ露の玉萩　正興

萩露

青海波　吉棟
　　　　元善
　　　　常安

越天樂　都盛
　　　　貞董
　　　　未慶

箏　貞度卿

　　久敬
　　元秋
　　元善
羯鼓　久敬
太鼓　常安
　　都盛
　　未慶

篳篥　貞度卿從三位度會檜垣四神主

郢曲(えいきょく)

東岸

附物

貞度卿
久敬
都盛
末慶

吉棟
元善
常安

鷄德

朝喬
貞度卿
末慶

音取

盤涉調(はんしきてう)

常善
元秋
末慶

平調―十二律の一

文政三年八月五日於二伊勢山田世義寺一樂會

平調（ひやうでう）

音取	吉棟
廿州	元善　末慶
五常樂急	常善　貞堇　常安
春楊柳	久敬　貞度卿　末慶
陪臚	都盛　元秋　末慶

外八十二名（姓名略く）

同　還水　增山亦治郎
造外宮杢小工　藤原記久　二見吉四郎
幾佐女　小川氏女
珍一　盲人
陸奥仙臺書生　藤原光命　小山要人
志摩波切村　和氣鳴鶴　萬菴
同　仙遊寺　敬之
攝津大阪　千稻　岩田甚五郎

文政三庚辰年七月従廿日至廿二日於二伊勢山田豐崎文庫一講釋伊勢物語

講師　清水濱臣
聽衆　藤田内匠長盈
中川桂次郎清憲
足代權大夫弘訓
宇治求馬久守
春木全之助晶光

宮掌大内人　秦旨武　津村正大夫
同　清水　石井源大夫
同　千町　井村傳大夫
同　信足　五富利主馬
同　光基　杉村丹藏
同　清厚　河崎惣大夫
同　重魚　横橋一學
同　時春　杉松主馬
同　富壽　河井林大夫
同　吉算　中田大進
同　吉迪　多氣環
同　文員　山崎榮治
同　文友　同重藏
同　正高　中西六左衞門
同　長發　田島城之助

入紐の―入紐は雄紐と雌紐とを結び玉にし又輪になどし、互に差入れて結び合ふより、同じ心に懸けていふ
およびー指

ぬぶ心は、入紐の、同心ぞ、同じその、書はしぬべど、同じその、心はもたれど、かくし我が、待たす心は、同じくもあらず。

今日々々とおよび折りつゝ吾を待たす君が心のすべのすべなさ

まるのぼり君に見えずて葦が散る難波にくだる吾しかなしも

文政三年七月廿七日、伊勢山田、錦江亭歌會 兼題歌文 堂坐別卷

従三位	度會貞度卿	檜垣四神主
従四位下	度會常善	同　八神主
従四位上	度會煥光	春木隼人
従四位下	度會正兌	橋村彈正
従四位下	度會弘訓	足代權太夫
正五位下	度會光茂	上部雅樂
正五位下	度會末彦	福島豐後
従五位上	荒木田久守	宇治求馬
宮掌大内人	秦貞幹	上部左馬之助
宮掌大内人	秦弘基	追沼主水

なめげ—無禮

みあれ—祭

鷄が鳴く—東の枕詞

怠りたるなめげさは、さるかたに見ゆるし給ひてよかし。まことや御歌の返は、

藻鹽草われもえ刈らで紀の海のなみ〳〵ならぬ君をみるめに

春の日もあかざりけりなよしといひし吉野のあとをよく語るとて

我もまたあやに錦にかへて見きうらなくかたる君が言葉を

こゝにも、城戸千楯よろづうしろみて、心ゆく旅居になん。賀茂のみあれ過してと思ひ侍れば、又聞えうけたまはるべくこそ。あなかしこ。

卯月ついたちいつか　　濱臣

本居君の

御もとに答へまゐる

土佐人大倉鷲夫が都にのぼりたる折、吾も都にのぼると聞きて、待ち居たりしが、さらぬ要のこと有りて、難波にくだるとて、長歌よみて城戸千楯にのこしおきける。

鷲夫

鷄が鳴く、東の國と、やき太刀の、土佐の小國は、天雲の、千重に放りて、白雲の、八重たちしきて、はろ〴〵に、なりてはあれど、いそのかみ、古き御書を、一すぢに、し

よの子ー鵜殿士寧の妹、紀州侯の夫人に仕へて瀬川と稱す、縣居三才女にの一して、家集を佐保川といふ

つくろふー治療する

先づとりあへず斯くなん。あなかしこ。

三月十五日　　大平

清水君

御もとに奉る

まことや縣居大人の、よの子におくり給へる消息とて、めづらしき筆のあと、又同じ大人の、美酒の詞の石摺うつし壹枚おくり給へる。人々にも見せて、めづらしく見侍りぬ。京の御旅居のほど、めづらしく心にくき御物語もあらば、承らまほしくこそ。

あなかしこ。

　これが返し京よりいひやれる。

かしこまりて承りぬ。先とよ、さいつ頃は、鄙の長路にやつれたる旅姿をもうとみ給はで、へだて無くむつがたり承り聞えさせしことだにあるを、御歌のかず〳〵書きて賜へること、うれしとは物かは、つゝみあまる心地なんし侍りつる。別れ聞えて後、難波に十日あまり侍りて、明日は衣かふべき日といふに、やう〳〵都へはのぼりつき侍りぬ。さていさゝか心地そこなひて、とかくつくろふ程、今日々々と過ぐいて、御返り事

みるめ—見る目、海松
縣居大人—加茂眞淵
うまごりの—綾の枕詞
なめしく—無禮なり

らで、

めづらしき君をみるめは和歌の浦の波のたよりも嬉しかりけり

いにしへの吉野の宮のみやびごとながき日あかず語るうれしさ

など思ひつゞけ侍りけれど、其折は、まづめづらしき御物語を聞きもらさじと思ひ侍りて、かゝる浪の下草はとり出で侍らざりきかし。縣居大人の若きほどの後世風の歌の集、又詩の集、又論語の註解、何くれの下書、樣々書きすさび給ひし古反故など、さるよしありて君の御許に傳へも給へる由、又岡部氏の今のあるじは、三代になりてしか〴〵など、品川の少林院に、千蔭翁の下書かきてある、東師にかゝせられたる縣居の大人の御像、うるはしくてある由、又大名たち今は大かた歌よみ給はぬはなく、中には古ぶりに深く心よせ給ふも多かりなど、何某の君に薄に月かきたる繪に御贊に、さる御心しらひありてしか〴〵など、まのあたりならでは承り難きふし〴〵、承り侍りつる。

うまごりの綾に錦に立ちまじりしくものもなき君がたまもの

となん、かへす〴〵うれしく承りぬ。猶、何くれと聞えまほしき數々も侍れど、いぶせき海士の苫屋、たづねより給へりしそのよろこび、ほど過し侍らんはなめしくやとて、

抱き云々―楚の卞和璧を抱きて楚下に哭すること三日三夜、涙盡きて之に繼ぐに血を以てせる故事

隼人―薩摩、大隅より京都に來り、禁中の外門を守り、又行幸の先驅をつとむる者、はやと

本居大平―宣長の養子

なさき―元文の儘

文たがへ

古衣うらみしよりも夜の道ふみ違へてはくやしかりけり　貞一　中村又八

玉

抱き持ちてよゝと歎きし古事のこゝろや玉の光なるらん　茂廣　近藤吉左衛門

初めてあへる

つらかりしうらみに袖は朽ちにけりあふ嬉しさを何に包まん　長廣　大橋九右衛門

＊　＊　＊　＊　經那　淺湯次右衛門

矢

いかり猪をたやすく射とる隼人の獵矢は猛き神にぞ有りける　千楯　城戸市右衛門

かゞみ

＊　＊　＊　＊　濱臣　清水月齋

難波の旅居のほど本居太平のもとよりおこせたる消息。

吉野に物し給へりし御歸さとて、立ち寄り給へるは、中昔の人ならば、花のたよりはなさき御心ざしよなど、みやびにとりなして、詠み出でつべきふしなれど、まこと然は侍

昔より代々につたへて百千まき千巻の書はかずも知られず　貞堯（西村吉右衛門）

水鶏

水鶏とはしるきものから人待てば心にかゝる宵々のこゑ　助凭（森三之助）

ほとゝぎす

東人の耳にはいかにかどなしと聞かん都の山ほとゝぎす　敏夏（服部五郎左衛門）

かどなし―珍しげなし

❀　❀　❀　❀　光隆（夏目元輔）

ころも

故郷にたち行く人のためにかも錦のころも妹が縫ひつる　元篤（高畑啓吾）

相思ふ

我が中に思ひくらべてわりなさは小鹿鳴く野の萩が花妻　芳秀（福井藤右衛門）

花妻―萩を鹿の花妻といふ事、古くよりの例也

神まつり

白妙のそでに露ちる森のかげすゞしき今日の神祭かな　眞行（吉田勘兵衛）

かざし

千早ぶる賀茂のみあれに葵草かざすや神のこゝろなるらん　眞道（前田總兵衛）

みあれ―賀茂神社にて陰暦四月中の酉の日に行はるゝ祭禮

さもといはゞ今日はこゝにて競馬急ぐにはあらず早罷りなん　濱臣

芳野山の花盛にあへるよしなど聞えて、歌ども見せ奉りければ、

三吉野の吉野の山を見しよりやおのが詞のはなにあきけん　元腆卿

文政三年四月八日於京都圓山端之寮歌會

うづき

榊とり注連繩はへて神山にみあれまつらす夏は來にけり　季鷹（賀茂縣主）

❀　❀　❀　❀　正輔（大堀茂右衛門）

しめ

末つひにほにあらはれし我戀はしりくめ繩の心地こそすれ　海廣（大江縣寶）

祝ひて思ふ

いつまでか思ふ思を下紐の下に結びてあらんとすらん　直孝（豐前人渡邊湖治）

❀　❀　❀　❀　菅緒（長谷川三折）

書

❀　❀　❀　❀　村上松堂（畫工）

夕顔の花にはちりもなかりけり賤が籬は荒れしながらも　貞隨卿

浦夏月

夏がりのあしの葉末の露のまに明けなんとするか浦の月かげ　有功卿

岡新樹

春と夏とゆききの岡の楢柏葉廣になりぬ誰いこへとか　濱臣

深夜螢

小夜ふけて露と照りたる八十草の葉末をむれて飛ぶ螢かな　光隆 夏日元輔

濱臣にはじめて對面して、

今日見てぞ思ひはは るゝ天雲の隔ててよそに名を聞きし君　貞隨卿

己こそ思ひははるれよそに見し雲井の庭を立ちならしては　濱臣

小倉中納言の御もとへ參りけるに、五月五日の事なりければ、やがて御いとま申して、賀茂の競馬見にといそぐを、しばしと引きとゞめ給ひて、

競馬見に行く方にいそぐともしばしはこゝにひきぞ留めん　元膩卿

御返し

千種侍從殿—有功(アリコト)、正三位有條の子、千々廼舍といふ、安政元年八月歿す、當時歌學の一大家なり

あるかな。

遠近につゞく高山みじか山幾重たゝめる翠なるらん

千種侍從殿にいざなはれ奉りて、大井川に船をうかべて嵐山の花見ける時よめる歌、二月二十六日のことなりけり。

大井川ゐせきの浪の立ちかへりまた來ん春の花をこそ待て　有功 千種殿

山櫻ともに見んとは大井川ゐせきの浪の思ひかけきや　正輔

わが見てし後もしばしは山の名の嵐を花に吹かせずもがな　濱臣

正輔が「山櫻ともに見んとは」といへる返し、

なみならぬ契なればや大井川流れて今日の春に逢ひけん　濱臣

千種殿の御もとに召されて、歌よみける時、富小路三位貞隨殿、梅溪左中將行通殿おはしたり。御當座、

都郭公

都をばおなじ旅路の人もあるに今宵は來鳴け山ほとゝぎす　行通卿

垣夕顔

とりよろふ—取り固む
言の葉の道—和歌の道

夏ならば涼しとのみや見てやまん心にまでは月もしまじを

春とひて花のかげ見し白瀧にはやくも秋の月ぞ流るゝ

秋の夜の月おもしろき瀧水に心をさへも入れて見るかな

行く水の流をとめて夜もすがら月をみしまのおくの山陰

疊翠軒記　三島の旅屋福島貞藏が家號なり

窓より右に富士、あしたかを望み、軒より左に足柄、箱根を見はるかせり。其の山々はや、五百重山かくみ、千重山とりよろふ。麓は驛路にて、行きかふ人絶えずにぎはひ、旅屋軒をつらねたり。あるがなかに福島といふ家のあるじ、いさゝか言の葉の道に思ひをよせて、心だましひしたゝかにまめ〳〵しき主なりければ、都路を行きかふみやびをたち、絶まなく此の家にやどりぬ。いで都より東へかよふ旅にして、山路けはしくはたおもしろきは、玉くしげ箱根の峯つゞきなりけり。そのこなたは三島の宿とて、御社の森かう〴〵しく、春は霞の衣をきそへ、秋は霧のとばりをかけて、花のあや紅葉の錦をいろどり重ね、夏は緑の梢うすく濃く、冬は四方の雪に白がさね疊みさげたるさま、すべて言はんかたなくをかしかれ。此の家のよび名を、翠を疊む軒端といふ。まことゆゑよし

こぬみ—來ね身

佐屋川の水脈さかのぼる桑名舟あしくば波の上ぞ安けき

駿河府中にやどりて、松永正平が母の五十の賀に、

百重浪千年のかずは寄すれども老はこぬみの浦の蜑人

おなじ國の陶山口渡邊正が身まかりけるに、其の子眞文があととふわざすとて、月前懐舊といふ事を題にて歌こへるに、

富士の根の麓てらしゝ月影のなど中空に雲がくれけん

八月十五夜三島の宿にやどりて、白瀧の水心亭に月を見てよめる歌并序

如月十日ばかり都にのぼるとて、こゝの宿に宿りけるに、かねてより相知れる友だちのあるを、三人四人いざなひて、白瀧の流に遊びけるに、歸るさは暑の盛にもなりなんを又、も來て此の流にすゞましと契りかはしにけり。さるを心のほかに都に長居して、八月のなかばやう〳〵こゝまで歸り來ぬ。今日しも十五夜なりけり。一昨日昨日の雨風なごりなく晴れわたりて、暮れかゝるほどより月くまなくさし上りければ、契りおける友だちと共に、かの流に夜もすがら月見あそびてよめる。

尋ねても見るべき月を嬉しきは今宵宿りをこゝにとりたる

あと川柳―吾跡川は地名、萬葉「あられふり遠つあふみのあと川柳枯れぬとも又も生ふとふ吾跡川柳」

青海波―舞曲の名

伊勢海―舞曲の名

詞の玉云々―催馬樂「伊勢海の清き渚のしほかひになのりそやつまん貝や拾はん玉や拾はん」

詞の玉は歌

みぞれせしあと川柳一葉ちり二葉みだれて秋風ぞ吹く

水影にうつるは花か秋につれ入江の穂蓼花咲きぬらん

ある人の六十の賀に

十といひて昔の秋にたちかへり千世もさかえよ老人のとも

春木隼人がもとにて、大淀のうらに松あり、木かげに女ども立てり。

うらみてもつれなき人を大淀の松のねたくも賴みけるかな

世義寺といふに、人々あつまりて、もののねあはするを聞くに、青海波のわきて面白く覺えしかば、

青海のなみ〳〵ならぬ物の音にたれも心のすみわたりぬる

大和守多久口朝臣、伊勢海をうたふ聲いとよし。

伊勢の海のきよき調を聞く今日はわれも詞の玉やひろはん

松坂の旅屋種德堂のあるじに、歌ひとつと乞はれて書きてあたふ。

まことある心の種をつねに植ゑて金花咲く身とやなりぬる

佐屋川を舟にてのぼるとて、

いとゞしく—更に一層

笑みしらがふ—あからさまに笑ふ

言ひはぶる—言戯るゝ

ゆふ—木綿に夕を掛く

て、はて〳〵は文机の上にうつぶしかゝるめり。いとくちをしき事ならずや。残るあつさの堪へがたきは、斯くていつまでかはあらん、心たゆみもさて有るべし。まなびの道のおこたりは、年毎にいとゞしくなりまさりなんと思ふからに、我と心に誡めまほしくこそ。

いすゞの宮に詣でけるかへるさ、古市町といふ所に、遊女どもの笑みしらがふを、とかく言ひはぶるゝ若人たち行きかふ。

咲きつゞく神路の山のはな蔭はゆふかけてこそ誰も寄り來れ

こゝの對嶽樓といふに月を見て、

朝くまにゆふぐも晴れて神路山長峰とほく月になりゆく

古市町はもと長峰といふ所なりとぞ。

二見にやどりて、人々と共に題をさぐりて歌よみけるに、初秋蟲を、

風をのみ人はいへども蟲の音ぞ秋を聞きしる初なりける

おきそむる露を尋ねて夜な〳〵に聲のかずそふ野邊の秋蟲

福島豊後がもとにて、秋色浮レ水といふことを、

しまらく—暫く
もとほりぬ—ためらひ居たり
土さへ云々—酷暑をいふ

ふりさけ見れば、浪の音の、聞きのさやけく、たつ石の、見のおもしろく、歸るべき、空もわすれて、しまらくは、立ちもとほりぬ、玉くしげ、二見の浦は、見れどあかぬかも。

心ゆくかぎりなりけり海山の二見の浦のあけぼのの空

山田の錦江亭につどひて歌よみけるとき、殘暑といふことを題にて作れる辭、

土さへさくる心地したるほどは、ことわりの暑に思ひなして、さまでも覺えざりしを、御祓川に流しやりつるやうに、思ひ捨てたる夏のなごり、又もたちかへりて、昨日今日となりては、なかなかに堪へがたく覺ゆるよ。あやしく然るべきことどもこそあらね、さるは庭のさまを見るにも、しなえよらるゝばかりの日影ともなく、袖ふく風も身にしみ初めぬるに、いかなれば斯く覺ゆるにはあらん、思ふに心のたゆみにこそは有りけれ。心のたゆみばかりくちをしき物はあらじ。よろづ學の道も、しかこそはあれ。初學のほどは、いかでと思ふ心のすゝみより、宵曉につとめ勵みて、文机にむかひても、春の日を短う、秋の夜を長からぬやうにのみ覺ゆるを、いさゝか物の心しり得て後は、いつとなく怠りゆくならひより、書をひらきては見るに物憂く、筆をとりては書くに心つかれ

梶鞠—七夕に行ふ蹴鞠

さくくしろ—五十鈴の枕詞

しきなみ—頻に寄せ來る波

てたづさはりて—相携へて

上りたる世にはそれとも聞えねどみやびに見ゆる今日の梶鞠

七月十日都を立ちて、東の方へかへり下らんとするに、月ごろ馴れし人々に別をしむとて、盃にかきける歌、

ながれても淵瀬かはるな立ちかへり又もわたらん賀茂の川浪

逢坂にて送り來し人々にわるるとて、

越えわびて思へばとほし逢坂を言にはやすくかけて契れど

伊勢の太神の宮にまうでて、七月十四日のことなり。

心さへすゞしくなりぬ八百萬ちよろづ神の宮めぐりして

二見の浦に人々ともなひ行きて、海上眺望の心をよめる長歌短歌、

さくくしろ、五十鈴の宮に、昨日かも、幣とりむけて、今日ははや、家路にむかひ、歸らまく、わがする時に、人みなの、語りいへらく、玉くしげ、二見の浦は、常世より、しきなみ寄せて、いにしへゆ、淸きなぎさと、語りつぎ、言ひつぎ來しを、いでわがせ、見てかへらせと、ねもごろに、かたらひ言へれ、吾もまた、おとに聞きしを、いざさらば、道のつとにと、思ふどち、てたづさはりて、行きいたり、荒磯に立ちて、青海原、

いくり―海底の黒土

神の駒―和名抄に「奈々里曾、漢語抄云、神馬藻三字、云奈乃里曾、今案、本文未詳、但、神馬莫騎之義也」

むかしみ―おくゆかしく

あなくらし―探り求め

價なき云々―無上の寶

飛鳥井殿―和歌及び蹴鞠を以て有名なる堂上家、本性は藤原

船はつる磯のいくりに生ふるめを神の駒とはたれ名づけけん

池田人山川正宣がもたる竹帙を見て、それが筥の裏に書き付けたる辭幷長歌

此の帙は、奈良の東大寺なる油藏といふに有りしを、近き世に油藏はそこなはれ果てしかば、藏のうちなる書ども、ほかに藏めかへらるゝ折、これかれちりぼひ有りて、此の竹帙もある都人のもとにつたはりぬ。かの藏の跡は今礎のみ殘りにき。さるをゆゑよしありて、山川ぬしのあがなひ得て、いとむかしみめでらるゝを、古物あつかひ好むおのれ、おなじ心に喜ぼひたゝへて詠める長歌、

あなめでた、こもの竹簀は、たが世にか、編みて作りて、萬年、千年の世々を、ふる寺の、たからの書ら、卷きつゝみ、祕め置かしけん、かぎり有りて、藏めし藏は、朽ちぬれど、これの竹簀は、此のぬしの、ふるごと好む、眞心に、あなくらし得て、價なき、そこつ寶と、かしづきて、祕めおかしけり。今よりの、五百世の後も、かくしつゝ、朽ちずそこねず、傳はらん、ことのともしさ。ことあげして、我もめでたふ、これの竹簀を。

都にかへり來て、七月七日飛鳥井殿に參りて、梶鞠の式見奉りて、

しるし—效驗

なのりそ—海藻の名

若駒をしらぬあら野にまどはして猶もほだしに繫がれぬとか

山家のかた畫ける畫に、

ことたらぬ住家と知らでとひ來ては羨ましとぞ人のいふなる

生瓢のかたに、

世の中はとにもかくにもなり瓢たゞ繫がれぬ身こそやすけれ

山家に梅が枝に鶯なく所、

梅さけり鶯鳴けりしづが家も春はいろかにとみて見えけり

有馬の御湯あみにまかりて、

一たびは吾もあみみん昔よりしるしあり馬のみゆと聞きしを

鼓瀧にて、

世々をへて音にひゞける瀧の名の鼓は浪の打つにぞありける

箕面の瀧にて、

これやこの天の川との水くだり雲より落つるたき津しら波

岩になのりそ生ひたるかた畫けるに、

よき少女ども、三人四人出で來て、三の緒かきならし舞ひうたふに、心うかれて、

物の音に思ひははれぬ雲とぢて心つきなき今宵なりしを

曉方になりて、しばしがほど雲をさまりて月いとをかし。

うき雲も夏の夜ふけてみづうみの浪をのこさず照らす月かな

淡海のうみ八十の湊のとまり舟こゝろひとつに月やめづらむ

すゞしさに心をのせて夏の夜は月に網引く浦の蜑人

人々と共に難波江に船うけて、とぶひのわざを見て、

中空に飛ぶ火のなごり流れちりてたもと涼しき舟遊かな

櫻の宮にて

名にのこる櫻の宮を夏とへば青葉にかをる風ぞすゞしき

讃岐人源春野に、難波の旅居にてあひて、よろづ物語らふほどに、日本紀會讀しをへたりとて、竟宴の歌どもあつめんとすとて、端出之繩をよませけるに、

岩屋戸にしりくめ繩をわたさずば長き長世もとこ夜ゆかまし

春野が子駒之介といへるをうしなひて嘆くに、

三の緒—三味線

心つきなき—氣にくはぬ

淡海のうみ—琵琶湖

とぶひのわざ—花火

竟宴—講筵終りし後に開く酒宴

端出之繩—しりくめ繩、日本紀神代記に出づ

しりくめ繩—注連繩

洛陽花―やまとなでしこ

たゞずまひ―様子

片山大隅目がもとにつどひて歌よみける時、夏夜。（六月五日）

吹く風も夏の夜ふけてすゞしきは水鷄おとなふ遣水のもと

ほとゝぎす聲せぬ夜半も寐られぬは橘かをり螢とびかふ

おなじ時河を、

またも來て影をうつさん石河やせみの小川よおもがはりすな

もゝよつぎ淀の川舟行きかへり流れて絶えずおとづれはせよ

羽倉信美のもとにて洛陽花を、

見るひとの言の葉からや東路の花にはまさる都なるらん

折にあひて都の花になるゝ身のなどて言葉のにほひなからむ

祇園會見奉りて、

神を今日まつるためしは世の人を八坂の里のやすけかれとて

六月十六日、湖の月見んとて、大津の水際なる遠帆樓に宿りけるに、あやにくなる雲のたゞずまひに、月の影さし出づべくもあらず。興たがひて、とかくするほど友だち二人三人とひ來て、盃めぐらすに心ゆきぬるに、いづくよりにかあらん、みめ

いざなみの神の御代よりえびかづら懸て枯せぬ木實なりけり

　青葉櫻の畫に、

さくら花ちりての後の若葉さへこと木にまさる色香なりけり

　青葉楓の畫に

夏かけて若楓のかげ見ればもみづる秋の色も思はず

　郭公二聲といふことを、

一聲は夢に過ぎしを郭公うつゝに聞けと又や鳴くらん

夜ならべて待ちしかひには時鳥聲をかさねて聞き初めしかな

　不レ尋聞二郭公一といふことを、賀茂にて、

祭見てかへるゆふべの小車に聲のせそへて行くほとゝぎす

　牡丹のかたかける畫に、

そめて見る心は誰もふかみ草いろ香にとめる花のすがたや

　ある人の八十の賀に、

今日のみの言の葉ならず九十百年まちてまたも祝はむ

いざなみの神云云―古事記に「是に伊邪那岐命畏みて逃げ還ります時に、其伊邪那美命吾に辱見せ給ひつといひて、やがてよもつ醜女を遣はして追はしき、かれ伊邪那岐命黑御鬘を取りて投げうて給ひしかば、乃ちえびかづらのみなりき」

いろ香にとめる―周茂叔の愛蓮說に「菊花之隱逸者也、牡丹花之富貴者也、蓮花之君子者也」

ねぬは―葺菜に寝をかく

女醫博士賀川ぬしの白鷺亭に、人々つどひて歌よみける時、

身の毛ふく風に暑さもしら鷺のやどは夏とやたれも訪ひ來る

下りたちて鮎子さばしる夏川の底にこゝろをいるゝ鷺かな

瀧詮がもとにて池の菖蒲を、

池水のいひしらぬまでかをるなり深きは色のあやめのみかは

羽倉信美がもとにて端午庚申を、

かりそめの枕なれどもあやめ草ねぬはのために何かゆふべき

野宿夢覺

いくそたびそよ吹く風にめさましぬ竹葉かりしき結ぶ夜床に

かりそめに草ひきむすぶうたゝねの見はてぬ夢を吹く嵐かな

鎌田硯庵がもとにて都郭公を、

都人聞きあくらんを時鳥かへる山路もわすれてぞ鳴く

かへるべきほどとき過ぎぬ都べに鳴きし初音は昨日と思ふを

葡萄の賛

あらしの麓川ー嵐山の麓の川、大堰川

西本願寺につかふる某のもとにて佛前述懷といふ事を題にて、

亡人のあととふわざも我が爲の後のしるべと聞くぞうれしき

聞名具根といふことを

口に唱へ心におもふ御名よりや目さへ耳さへさやけかるらん

名だたる宇治川の螢も、やう〳〵數すくなくなりもてゆきて、去年今年は、あらしの麓川にむれ飛ぶよし聞くをりから、いざとそゝのかす人あるに、吾も伴はれ行きて、

何事かうぢの川瀨をすみかへてかずもおほゐに螢飛ぶらん

その夜は川づらの宿にやどりて、人々と共に題をさぐりて、水邊納凉といふことを、

石ふみて渡らばいかに大堰河おと聞くのみも夏はおぼえず

ほたるとぶ岸の小草のゆふ霧を袂にかけて夏はあそばん

山家人稀

柴うりてかへる賤男のなかりせば都のつてを誰に問はまし

契りおきてまつとあらねど山里は思ひしよりも人の訪ひ來ぬ

仁和寺の御内人矢守大和竹が家の壁に、常にかゝげ置きて見るべき歌など請へるに、

雙が岡の麓なりければ、

言の葉もいかにしげらし月花にならびの岡の窓のあけ暮

ある人の乞へる夕顔の畫に、

山賤がひとへ檜垣を夕顔の花にいぶせきすみかともなし

人の旅立つはなむけに、火打袋やるとて書きつけける。

思ひ出でば打ちもみよかし草枕たび行く道のこゝろなぐさに

喜撰法師のかた書きて歌こへるに、

宇治川の流れて四方にあふぐかな都のたつみたゞひとことを

寄レ葉述懐といふことを、

いたづらに言の葉のみは繁れどもいつ生出んこのみともなし

かくしつゝ言葉の園に思ふ事ならでこのみや朽ちんとすらん

卯月ばかり高雄山にのぼりて、若楓の蔭をかしく覺えしかば、

紅葉せん秋をも待たで高雄山わか葉にそまる我がこゝろかな

なぐさに—慰めに

たゞひとこと—古今集序「よめる歌おほくきこえねばこれかれ通はしてよく知らず」後世に傳はれるは「我庵は都の巽」の一首のみ

このみ—此身、木の實

三夕—浦の苫屋の夕暮(定家)、鴫立澤の夕暮（西行)、槇の葉の夕暮(寂蓮)
あるじまうけ—饗應の設け
こまほし—來りたし、駒を掛く
かど—才氣
此君—竹の異名

三夕のかたをかける畫に、あらたに歌よみて書きつけてよと請はれて、
浦風に鹽屋のけぶり吹きくれていろなきあきのゆふ霧のそら
秋ふかきあらやまなかの夕ぐれに散る露すごし槇のしたみち
人目なき野澤のあきの夕ぐれはものがなしぎの羽音のみして
鳴原にて、海老屋吉臣、橋屋靜枝等があるじまうけして、歌合しける時、關郭公を、
ほとゝぎす誰とがめねど關山に名のりて過ぐる聲のきこゆる
當坐に題をさぐりて馬上戀を、
妹を見てこまほしけれど時のまに雲井をかけるよしのなき哉
並河左衛門權大尉が七十の賀に、都の名所をわかちて歌よませける時、大澤池を、
君によりいけりし人は大澤のそこにもちよやすまんとすらん
同じ人のこへるに、山形づきたる入江に家あり、橋かけて人行くところ、
世をよそにおもひ入江の丸木橋かどある人も知られけるかな
又竹を
千歳までかげをならべて此君を我が友としもたのむべらなり

吉野よく見し—「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よ君」萬葉の一

道をもかへじ—吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん」（新古今、西行）

かへまくぞ—更へん事の

て、此の犬石のゆゑよし記しつけて與へぬ。斯くものしおくは、大江門の言の葉人淸水の濱臣。

三月六日、吉野山に花見けるによめる歌どものなかに、

尋ねても花の盛にあひ來ずば吉野よく見しといはるべしやは

み吉野をいかなる山と思ひしに花もてうづむところなりけり

世の中の山路のかぎりあつむとも數およばめやみよし野の花

さくら花ちらぬ七日は三吉野の山にこもりてあらんとぞ思ふ

よしの山きのふはふもと今日はみねいくか晴れせぬ花の白雲

しをりして道をもかへじ花ゆゑにまよはゞうれし三吉野の奥

三吉野のよしのの山のさくらがり今年ばかりぞ花にあきたる

都へかへり來て卯月ついたちの朝、

みよし野の花にふれこし旅衣ことしはわきてかへまくぞ憂き

都にありけるほど、人々にこはれてよめる歌どものうち、上河の埋木を、

うづもれて年經ざりせば流木のながれて今にあらはれめやは

荒井の海を渡らんとするに、風いたく吹きたちて浪あらし。されどためらふべきならねば渡りぬ。思ひしよりは危げもなかりき。

浪風のあらゐの海をうれしくもこゝろやすくぞ渡り果てぬる

とよ川の橋をわたるとて、

かぞふれば家路を立ちてとよ川やいまいくよ經て都なるらん

奈良の都を見めぐりて、元明帝のみさゝぎなる犬石をうつし摺りて、一枚を旅屋のあるじ威德井屋某に贈りあたへしに、ゆゑよし記しつけてよと請へるにそへたる詞、此の犬石は、大和國添上郡なる眉見寺のうしろの岡に建てり。こゝは昔元明の帝をかくし奉りし所なりとぞ。はじめは四方四隅に建てるものにて、隼人がとものみかどもる心にてすゑしものなりけんを、時うつり星かはり、岸くえ土崩れて、地の底に埋もれしもありて、今は四つ殘れり。それもなかばは埋れたり。其のさま、立てるあり、ついゐたるあり、此の一つのみ鮮やかに全くすがたをあらはせり。しかるを、後には七疋狐とかいひならはして、つひに稲荷のほこらを營み、鳥居をさへ建てて、あらぬ事ども言ひつたふめり。おのれ今年やよひの初つ方こゝに遊べるに、旅屋のあるじの請ふにまかせ

荒井の海―濱名湖の一部、今切
とよ―豐、十夜
かくし―葬り
くえ―壞崩し
ほこら―祠堂

調度—諸道具
もろこしざえ—漢才、漢學の智識
とめ來て—訪ね來て
おばしま—欄干

のかたへ殊に見所ふかし。こゝに水にのぞきてかたの如き四阿をいとなめるあり。廣さ方丈に過ぎずして、更にわづらはしき調度もまうけず。あるじはもろこしざえにさとりかしこき翁なるが、はやくより此の驛路に住みて、ふかく此の流をめでつゝ、近き頃四阿をいとなみたて、みづから水心亭と名づけて、春秋の心やり所とせられにけり。げに心の水すましぬべき流のさまなりけり。おのれも十年あまりの昔、此の清水を見初めて、あはれをかしの流やと心にしみて覺えしを、今年ふたゝび此の流をとめ來て、はじめて此の四阿にあそぶ。いかでもだしのみもあらん。すなはち歌へらく、

世の塵をよそに流してゆく水に心をすますおばしまの下

此の流をめでて、かく歌ふは誰ぞ。大江門なる上野の岡のふもと、しのばずの池の水際、泊泊舍のあるじ、眞清水の濱臣是なり。

由比、興津のあたり、磯山の櫻みな咲きたり。此のあたりは、海を南に見てあたゝかき所なれば、早きなるべし。されど吉野の盛に遲れやせんと、心あわたゞしくて、

末とほき道のゆくての花ざかりこゝろを空にいそがさすかな

みやこ路をくだる旅人こと問はん咲きしやいかに三吉野の花

あわたゞしー氣ぜわし

こよろぎのいそー相模國餘綾郡の小餘綾磯、ト急ぐ

心やり所ー心を慰むる所

つるはぎ云々ー衣の裾を高くまくること

とこなめー河底の滑らかなること

大悲者ー觀世音菩薩

だには過ぎ給ふ」といふに、こたびは吉野の花見にと思へば、よろづあわたゞしきなりとて、

三吉野の花に遲れじと思はずばかくこよろぎのいそがましやは

湯本にて、人々と題をさぐりて歌よむ。春河を、

ふゆさへにこほらぬ水のはや河をかすみとぢても見する春かな

三島の宿、白瀧といふ所の淸水いとをかしきに、沼上城山といふ博士の心やり所あり、水心亭と名づく。城山これが記を書きてよと請ふに、やがて書きておくれる辭、

あはれ水ばかりをかしく心ゆくものはあらじかし。いかばかり岡山のたゝずまひ、おもむきある所なりとも、いさゝかの流そはざらましかば、ことたらぬ心地すべし。さはいへ、濁りるのきたなげなるは心もうつらず、あら浪の恐ろしからんも又なつかしからじ。たゞ深さはつるはぎにして渡るべく、とこなめはしりて底の水草さやかに、ひれふる魚の數よむばかりならん流をぞ、をかしく心ゆくとはいふべき。こゝに筥根山のふもと三島の驛路いくらもさらぬ北に、白瀧といふ流あり。水上は菰池とかいふより出でぬと言へど、すべて〳〵自らなる岩間より、こゝにかしこに涌き出づるが、大悲者の御堂

きさらぎ—陰暦二月

咲きしながは—品川の語を含む

みしまゝ—三島

遊京漫錄

清水濱臣

卷之上

きさらぎ七日のあした門出す。こたびは藤原爲相卿の宿次百首にならひて、驛ごとに所の名を隱して、歌よまばやとていでたつ。すなはち品川をかくし題にて、

梅の花咲きしながばに門出しつ都のさくらさかり見んとて

川崎の宿よりは、何くれとまぎるゝ事の多くて、つひに得よまずなりにけり。されど三島の宿にて、今一うた、

むかしみしまゝに光をそへまして千世にふりせぬ宮柱かも

小田原のつかへ人、櫻井勇雄、松井矩雅などがもとへ、今日こゝを過ぐるよし言ひやりおきて、筥根へと急ぐに、風祭のあたりにて二人ともに追ひ來れり。「いかでた

年今年と過ぎぬ。さるにおのれよはひ四十を過ぎて四とせ五歳、そこと衰へたる事こそあらね、身にいたづくところ無きにしもあらねば、かくて又五年十年かさねゆかば、老のさかそひなましと思ひて、此の春はあながちに思ひたちぬるになんありける。もとより年ごとに十日廿日の旅ゆき、二たび三たびと思ひたゝぬ年もなし。其の折ごとにまれ〳〵うまのはなむけとて、歌よみおこす人どもあれど、あながちに人をつどへて別をしむ事なかりき。こたびはおのれ思ふところありて、睦月の廿日一日を其日とさだめて、行く我もわかれを惜み、とゞまる友も別を惜むつどひす。其の日のありさま、人々の歌ども、猶ことものにくはしく記すべし。おのが歌は、

言の葉の匂はぬ身にもおふけなく吉野の花をわけんとぞ思ふ

心あるひとはとゞむなこゝろざすところは都ころはきさらぎ

清水濱臣

序

父ぬし世におはしましゝほど、海山にあくがるゝくせおはして、都へも七たびのぼらせ給ひ、筥根のいでゆには十五たびまでおはし、六浦なる金澤の入江をめでては、かしこに假初の庵ものして、年のうちに二たび三たび遊びたまひき。大方の國々めぐり見たまはぬ所すくなかりき。おのれはおとごにて、父ぬしよはひ五十まり六におはしましゝ時うまれにけり。さればみさかりの御程は知らず、七つになりし時、父ぬしに具して、始めて筥根の出湯に出で立ちぬ。其のほどのこと、今も猶おろ〳〵心にとゞまりぬ。父ぬし身まかり給ひて後、十七といふに母とじにともなひて、雨降山、江島、鎌倉、金澤のあたり經めぐりき。十九にて叔母刀自とともに入間の郡田中と云ふ所に、むかしより知ろすぢありて、七日八日經たりき。これらをはじめにて、年毎のやうにこゝかしこものしつれど、老人家におはするほどは心おかれて、遠き國へは出でたちがたくて、思ひながら都をよそにのみ過しつ。老人たち失せ給ひて後は、また幼きものどものうしろみなさに見はなちかねて、今

年々随筆終

しづの苧環云々—伊勢「古へのしづの苧環くりかへし昔を今に爲すよしもがな」
かきくらす—闇む

ぎもやし給ふと、うちまもりつゝ時うつる。灯火かすかに光りて、夜半のさますゞろに悲し。子時ばかりにもなりぬ、伊豫の御は日ごろ御傍去らずつかうまつりて、いたうかうじたるなるべし。すこし打まどろむと見るほどに、「御衾は我まゐらん、さながら添ひ臥させ給へ、やをら」といふは、日ごろの事ども夢みるなりけり。「今こればかりは參らん。御藥よりも驗あるわざなりと御醫師の申しつるを」といふは、御粥そゝのかすなるべし。また「起きあがらせ給はんとならば、我たすけ奉るべし」といひて、ふと立ちあがるを、人々おどろき寄りてたすくれば、現になりて、「こは夢なりけりな。おはすと思ひつるものを」とて泣くに、誰かは涙惜まん、聲うちあはせて泣きかはす。

ありと見し夢は中々ゆめならでさめて夢なる人や戀ふらん

鳥も鳴きぬ。おはしましゝほどの事ども語りつゞけて、かの折その時、と宣ひつ、斯うし給ひつと、かへらぬ事をくりかへし、しづの苧環いと心ぼそし。今は明けはてぬ。なべて世人はいさましう、千年万代と君をも人をも祝ひ喜ぶほどなるを、こゝには人々皆かきくらしつゝ、闇より闇にうつり行く心地のみして。

文化二年正月五日補二綴反古一以爲二一帖一了　　石原喜左衛門正明

はした者—僕

われかの御氣色—茫然たる御氣色

みすくなし。けふは御をぢの君の訪ひ來んと宣ひしとて、待ちおはすみけしきなりし」といふに、しづ心もなければ、紅の塵所狹くつもり來て、拂ひかねたる年の暮なれば、いそぐとすれど事ゆかで、とかうして參りたるほど、日も暮れなんとす。はした者あひたり。「御氣色かはらせ給ふ。疾くおはさなんとて人走らせ給ひつ」といふに、胸うちつぶれて、常おはします所につと入れば、先生、大君、伊豫の御など打泣きつゝまもりおはす。「今なん絶入らせ給ひつる。待ちおはしつるに、口惜しう」と宣へば、わが身つみさり所なううくやしう悲し。

かへり來ぬ別も知らで暮れて行く年のなごりを何惜みけん

大君は三浦備後守殿に宮仕しておはします。此春より時々下り居て、打添ひ見奉りたまふ。元日より打つゞき、儀式所狹ければとて、今日とぶらひにおはしたり。朝より御傍去らずつと添ひおはして、よろづに仕う奉らせ給ふ。「今はかへりのぼらせ給へ。怪しうはあらじ」と宣ひしかば、さはとて出でさせ給ふに、門にだに及ばせ給はらぬに、御氣色かはりぬと申せば、立歸りて見奉りあつかはせ給ふに、たゞ消えに消え入らせ給へば、殘り給ふ御方さへ、われかの御氣色なり。なほ打臥したるまゝにておはするを、みじろ

甲子のわざはひ
―陰陽家甲子の
年を革會と呼び
て此年厄災あり
といふ
かいつぶりの家
―蝸屋粗末なる
居寓

甲子のわざはひ大かたならず。先生の奥方の政する御方、春の頃より御心地例ならず、こぞより本所といふ所にわたりおはしませば、我市谷のかいつぶりの家とはほどへだたれど、時々參りかよひて見奉るに、御惱いつとなくて夏も過ぎぬ、葉月なかばにはすこし御おこたりざまにて、起居つゝ盛なる秋を御覽じて、御心慰むやうなりしかど、ともすれば御ながめがちにて、露けき秋を過ぐさせ給ふ。神無月の末つかたより惱まさり給ひて、年の暮近づくまゝに、いと弱げにならせ給へど、年かへりなば必ず見なほし奉りてん。春は人の氣色はれ行く物なればと思ひ居り、二十八日にまゐる。伊豫の御とて、年頃仕う奉るが、御有樣かたり聞ゆ。「御藥はきこしめせど、御粥などは御手をだにふれさせ給はず。さこそさわやぎ給ふらめと、心づようは思う給はられながら、心ぼそう」といふ。「さる事なれど、何事かはおはしまさん、年のかはるも只今の事ぞかし。御氣色なほらん春べ待ちつけ給へ」といふ。御みづからも御物語有りて時うつる。年の内には今一たび見奉るべしとて、日くるれば歸りぬ。次の日は正俊を參らす。夜も御かたはら去らず、御湯など調じてまもり居つゝ、午の時ばかり歸り來り、「よべは夜一夜なやませ給ひし、今もやきえ入らせ給ふと見奉つる、明けはてゝはすこしよろしげに見奉つれど、猶たの

言ひがたきが如きなり。じ、ずはいひざま稍かろく易げなり。言ひはじむるほど清めるが如くにて、末にごる。思ふに舌を下齒にさし當てざまにいふ故、舌の齒にいまださしあたらぬほどは清音の如くにて、あてはつれば濁るにやあらん。分明に聞きわけて、今日は斯う〳〵の事にて、それ聞分けんとて來つと言ひて、さて歸りぬ。其後も其國々の人に逢ひて物語するに、すべて心もつかず。

御―女の尊稱

長恨歌―白樂天の作

御臺所とは、御臺盤所といふ義にやあらん。御は寢殿の母屋にすませ給ひて、北庇に女房の侍るあり、臺盤所といふ。申すべき事あれば、御臺盤所の女房に告ぐる故しか申すなり。北政所とは、申すべき事を政所につぐる故なり。北とは、女方におはしませばなり。北方といふも女方につけていふ名なり。御簾中とは、おはします所をさす。奥方とは、家の奥母屋に住む義、御しんぞうとは、深窓と云ふに似たり。長恨歌なるは未嫁女の事なれど、それも奥ふかく住む故の義なれば、人妻をいふも其義にて、意かよふにやあらん。尾張にてごつさまといふは、御室樣といへるにや。かみさんといふは、物語にあるうへといふに似たり。又何某のおかたと云ふ、其家ざまをさしていふなり。女房といふ房も、奥深き方によれるにや。かゝといふは其義を知らず。

百人一首抄―この書の作者石原正明の自書にて、正しくは百人一首新抄といふ

それはた例の物わすれにて、百人一首抄に二所とか書きたがへし所ありとぞ聞きし。物書くごとにさのみぞあるべき。そも〳〵いゐ等の音ひとつに混じて、おともをとも唱へ分きがたく、えともゑとも聞きわきがたき世となりては、耕雲大徳の說のやうに、假名は打聞だに違はずば、いかやうに書かんもよろしかるべし。さりながら既に假名遣といふ物あるうへは、同じくは其によりて書くべしと、みづからは思ふなり。かゝれば別におもふ所ありて、師の所爲をわすれ、今假名を捨てたるにはあらず。記憶うすき身の學問の便宜にしたがふなり。世上の人も假名は言語の音を字音にうつしたる物といふ事と、い、ゐ、え、ゑ、お、を、は古は音異なりしを、今は混じて一つになりしなりといふ事は必ず知るべし。それ知りての後は、かなづかひは人々の心にやあらん。

九國、四國の人の物いひには、ちとしとつとすとの濁音自らわかるといふ。常其國々の人にあひて物いふは聞きながら、心もつかで過ぐしつるを、さいつ比思ひおこして、松平肥前守殿の家臣峰六郎矩常といふ人の許に行きたり。物語するほどに心をつけて聞けば、おのづから分別あり。ち、つの濁は、舌短き人の物いふごとく、重く言ひがたきが如し。さるは舌のさきを上腭にさしあてて、ぢと言ひづと言ひながらはなつ故、おもく

法師がひろめたる定家假名遣といふ書ありて、世に行はる。其序にかの卿の假名定め給ひしゆゑを記せり。今のかなづかひは、世々の宗匠、此かなづかひを增補刪削して、一部となせりと聞き及べり。い、ゐ、え、ゑ、お、を、は既にまぎれ果てての後、さる名家のしいで給ひける事の跡なるに、やごとなきあたりに皆用ひさせ給ふ事なれば、今これにしたがはんに、誰かは惑へりあやまれりといはん。かなづかひの事定れるが如し。近き頃契沖法師萬葉集を講じて、上れる世の假名遣を見さだめて、和字正濫抄をつくる。こゝに於てかなづかひ世に二流出來たり。往昔いゐ等の音の分れたりし世の古言を說くには、此假名遣によらざれば思ひ得がたし。たとへば今假名、おとこ、おとめと書くなれど、少男、少女の義なれば、古假名は、をとこ、をとめなり。大はお、小はをの義なり。かゝれば學問に志ある人、此假名も又廢しがたし。わが先生は、延喜より上なる書は古假名に、後なる書は今假名に二樣に書きて物せらる。此頃よりいゐ等の音まがひて、一つになりし事なれば、此處分や公平ならん。正明なども此のでうにこそあるべけれど、あやしう物忘する性質に、事ごとに二樣を記臆し得ん事、いと怠々しくわづらはしく、得堪へぬ事なりければ、古語とく便に、契沖法師の考へ定めたる古假名を用ひなれたり。

觴を濫べ―濫觴、物の始の義

三代集―古今、後撰、拾遺の三集

寛治嘉保―堀河帝

三藐院殿下―近衞信尹

ろづの訛言、皆これより出來るなり。さるは其頃の人、物いふに容止を思ひて、口を大にひらき、脣のしば〳〵動くを威儀なしとして、人がらをつくろひて、さて言ひ易きやうに物いふほどに、い、ゐ、え、ゑ、お、を、もまがひて分りがたく、ひふほもいうおと聞ゆる樣になれりしなり。延喜、天暦の頃よりはひたすら其定なりしかば、假名のたがひ行く源は、此時より觴を濫べたり。さりながら言葉にこそ、い、ゐ、ひ、え、ゑ、へ、お、を、ほをまがへて言ひつらめ、物書くには書き來しまゝに書きたるべければ、忽にいたくは違はず。三代集に假名違の歌をさ〳〵見えざるは此ゆゑなり。さて年をつむほどに、やう〳〵違ひもて行きて、寛治、嘉保の頃、文治、建久の末になりては、只心にまかせて書きたるなり。さても同じ假名の二つ三つあるが快からねば、上に書くい、中に書くゐ、下に書くひ、などいふ説もありしかど、其説に人よれりとも見えず。こゝに京極黄門、拾遺愚草を人にあつらへて書かせ給ひし時、假名遣を定めらる。見わたしたる同じ紙に、同じことばの出でたる時、い、ゐ、え、ゑ、お、を、の假名のかはらんが、心ゆかぬ事に思しての事なるべし。屋代太郎殿の藏板に、三藐院殿下の摸寫し給ひたる墨本あり。これかなづかひと云ふ物の出來たるはじめなり。其かなづかひを、行阿

大門ー渚

に、御名代といふ事出來て、その民をわかちて、やう〳〵國造をけづられしなり。さて國々の譽津部も湯河板擧の預なりければ、得分もありて敦き賞給はりしなり。日本紀には斯うやうにかくれたる仔細ありて、活眼にあらざれば讀みえがたし。（こまかには臣連二造考にいふべし。）さきに大原女といふ事を、おはらめがと五文字に歌によみたりしを、當座の歌なりければ、人々打かたぶくめりし。げに杜撰なるが如くなれど、建保職人歌合の作者におはらめあり。萬葉集に、

ともし火のあかしの大門に入る日にやうきわかれなん家のあたり見て

とあり。大門をおどとよむべくば、大原もなどかおはらと訓まざらん。

假名遣といふは、こゝの詞の音に文字の音をかなへて借り用ひたるなり。其中に、い、ゐ、え、ゑ、お、を、は言語の音も字音もよくわかれて、（其わかれたるさま本居先生の字音かなづかひに圖解あり）打聞けば、いか、ゐか、えか、ゑか、おか、をか、は分明に知られてまがはざりしかば、其音にしたがひて借り用ひしゆゑ、萬葉集、續日本紀などに、假名のたがへる所はなし。かくて奈良の京にはまがふ所なかりしを、今の京となりて、音便といふ事出來たり。（いつの頃よりといふ事考なし。かやうの事、いつよりときはやかには知るべきにあらず。もしは貞觀の頃より漸有りしにや。）音便といふは、いひ易きやうにまげていふ事にて、よ

伴部—舍人、吏生、兵衛、使部などの稱
品部—古へ各種の地方官の下に屬せし部民の總稱

皇子侍之。時有二鳴鵠一。度二大虚一。皇子仰觀レ鵠曰。是何物耶。天皇則知二皇子見レ鵠得一レ言。而喜之。詔二左右一曰。誰能捕二是鳥一獻レ之。於レ是鳥取造祖天湯河板擧奏言。臣必捕而獻。即天皇勅二湯河板擧一曰。汝獻二是鳥一。必敦賞矣。時湯河板擧。遠望二鵠飛之方一。追尋詣二出雲一而捕獲。或曰。得二于但馬國一。十一月甲午朔乙未。湯河板擧獻レ鵠也。譽津別命。弄二此鵠一遂得二言語一。由レ是敦賞二湯河板擧一。則賜二姓鳥取造一。因亦定二鳥取部鳥養部譽津部一

とあり。

鳥取造は、鳥取部、鳥養部を進退する職にて、いはゆる伴造なり。上古は職を世々にしたる物にて、やがて姓にもおへるなり。鳥取部、鳥養部は、後世の鷹匠ゑさしなどやうに、大御饌に奉るべき鳥を取りて參らする者と、大鳥、小鳥に餌をあたへて養ふ者とにて、今にいはゆる伴部、品部の色なり。（今には主鷹司あれど、鳥取部と覺しき物はなし。又鳥養ふ司もなく、鳥養部もなし。）譽津部といふは、諸國の百姓のうちを取りわきて、譽津部と名乘らせて、これらが奉る貢調を、此皇子に納れたるにて、今にいはゆる封戸なり。上古は國造とて國々を領する人有りて、封建のごとき世なりければ、庶民もみな國造の民の如きものなりしを、かくて譽津部などやう

まかせー注がせ

く物なれば、此池は某天皇の某年某月作りたりと、池にかけて語り傳へたるなり。崇神天皇紀に、

六十二年秋七月乙卯朔丙辰。詔曰。農天下之大本也。民所二以特以生一也。今河内狹山。植レ田水少。是以其國百姓。怠二於農事一。其多開二池溝一。以寛二民業一

とあるは、狹山に池を作りそへて、もとよりある田の水をまかせたる事なれど、新開も同じ方にて、池より水をそゝぎたる物なれば、此文證據となすべきなり。さて此池を作るといふは、庭の池水とは樣かはりて、平らかなる地を掘鑿ちて、水を湧しめたるにはあらず、山の尾のさき〳〵を築とめて、雨水雪水をためたる物にて、萬葉集に水たまる池田などよめるは是なり。かくて「冬十月。造二依網池一。十一月。作二刈坂池反折池一。」などあるも、みな屯倉御縣の類にて、公の田なり。日本紀にはかやうの子細多かるを、等閑に看過す事なれば、おどろかさんとてなん。

垂仁天皇紀に、

廿三年秋九月乙丑朔丁卯。詔二群卿一曰。譽津別王。是生年既三十。髯鬚八掬。猶泣如レ兒。常不レ言二何由一矣。因□有司而議レ之。冬十月乙丑朔壬申。天皇立二於大殿前一。譽津別

實字―虚字に對す

木といふ文字二つあり。また前大僧正慈圓

天のはらふじの煙の春のいろの霞になびくあけぼのの空

天と空と二つあり。古今集に、

秋の野の草のたもとか花薄ほに出てまねく袖と見ゆらん

袖と袂と二つあり。これらは實字なり。新古今集に、

秋篠や外山の里や時雨るらんいこまが嶽に雲のかゝれる

や文字二つあり。また、

うき身をば我だに厭ふいとへ唯そをだに同じ心と思はん

だにといふ文字二つあり。また、

てる月は雲のよそにぞ行きめぐる花ぞ此世の光なりける

ぞ文字二つあり。これらは虚字なり。猶多かるべし。

日本紀に作二云々池一とあるは、新治の田の事なり。さるは山の麓の小高き所に池をつくりて、そのあたりのやう〳〵低くなり行く所を田につくりて、水を沃ぎしなり。田どころはやう〳〵に廣ごりて、そのかみまづ出來たるはいづこばかりとも知りがたくなり行

篠目―曉

文段―文言

言通光

鐘の音のしぐれを送る槇の屋はもらでも覺むる篠目の夢

とありて、人これを難とせず。猿樂の狂言にも、鐘の音といふあり、室町殿の初のほどの物なるべしと覺しき文段なり。なほさも詠むべくや。そも〱鐘の音とはいかなる故にて詠まざるならん、其心を得ず。音とは、鹿の音虫の音など、ほそうやさしげなるにいふ事にて、鐘、鼓やうの高くおどろ〱しきには、似つかはしからずとにやあらん。詞の多きは歌よむに便あれば、なほ詠むべくや、識者に問ふべし。

千世萬代は千年萬年といふ事なり。世數千萬を代るにあらず。それを一年の事にたしかに詠める歌、新古今集に、　式子内親王

へだて行くよゝの俤かきくらし雪とふりぬる年の暮かな

此よゝは年々といふ事なり。

近代の歌よみは、同心同字をいたく忌む事なれど、それも一首のうへにて忌み忌まずは定むべきなり。新古今集に、　西行法師

小倉山ふもとの里に木の葉散れば梢にはるゝ月を見る哉

夏ごもり――もと佛家の夏行をいふ語なるを、俳諧者流は下文の如く轉用せるならん

とあるは、たれ籠めて外に出でざるに似たり。詞の數多きが歌よむに便なれば、こも詠むべきにや。

俳諧に夏籠といふ草子あり。夏ごもりとは、密室にさし籠りて、裸體にて風をひくなり。半掃庵の人に贈る消息に、「犢鼻褌一つはさすがに浮世を捨てかね候」とあり。また

物申の聲に物著る暑さかな

とあり。皆をかし。

古びさしといふは、身屋廂と分別して、南庇は賓客を居うる所、もやも同じ殿のうちなり。今時いふは座敷くばかり廣きもあれど、桁より別に屋根葺きおろしたる所にて、尾張あたりの民家には、かやぶき瓦庇のみ多かり。さる所を庇といひし事、物語などには見えねど、日觀集に、

草の庵に軒の菖蒲を葺きつればひとひさしさす心地こそすれ

とあるは、今時いふひさしなり。今時は庇をおろすといふを、こゝにはさすと有り、母屋庇といふひさしも、日影のさし入る義なるべければ、今時のは更なり。

鐘の音といふ事は、歌にはよまぬ事に人思へれど、建保三年六月十一日歌合に、權中納

淸華—攝家に次ぐ名門にて三公に任ぜらるべき家柄
貫首—藏人の頭
上階—三位に敍すること
爪木—薪

參議に任ずる時、朝牂の淺深數道あり。攝家、淸華は、三位中將より直に中納言に任じて、參議を經ざれば別義なり。華族の參議も例あれど、今は聞えず。四位參議ことにめでたし。左右大辨近衞中將、貫首の勞にて拜任する事よ。次に三木に任ずる日三位して、辨中將を敍留する。次に宰相になる日三位に敍して、中將を去り左衞門督など傍職に轉任する。次に上階の日はまづ非參議の有官になりて、後に參議に任ずる。次に無官の參議なり。これ近代の義なり。さて四位の三木をめでたしといふは、そのかみ參議は大抵四位にて、三木の後三位にもなり、中納言にも進みしを、四五百年來位階を給はる事容易なれば、非參議も上階なるが多くて、三位淵といふ計なりし故、三木は必ず三位の後なるに、これは年わかき四位のほどより、宰相にし給ふが規模にてめでたきなり。これ內敎が物語なり。

冬のころ寒さをいとひて宿にのみ居て外にさし出でぬを、俳諧者流は冬籠といふ。理しるき事なれど、萬葉集に見えたるとは事の意違ひたれば、歌人はをさ〳〵詠まぬ事なり。後鳥羽院の御歌に、

冬ごもりさびしさおもふあさな〳〵爪木の道をうづむしら雪

而除目任レ之。又例也。四位任レ之者。猶稱二某朝臣一。三位以上。稱二姓朝臣一也。

と有るは、諸司の官人の中、才ある人をえらびて、朝政の議に參らしむるなり。參るとは、俗に相談相手にするといふほどの事なり。うけばりて政をするにはあらぬ故、正官にあらずといへり。されど昔より除目に任ずる例なれば、任といひて補といはず。大抵大臣は一位、大納言は二位、中納言三位、參議は四位としたる物にて、節會の異位重行この定なるを、今は三位のみぞ多かる。さて四位の參議は、陣の議奏の定文にも、「某朝臣定申云々」といひて、有官も官を名乘らず。三位は「左衛門督源朝臣申レ之云々」といひて、名をいはず。又云ふ、

任二參議一有二數道一。左右大辨。并近衛中將。有二其才一者。藏人頭。及勘二七箇國公文一受領等是也。

と有り。大辨は朝政を勾勘したる勞、近衛中將は大かた公達、藏人頭は内藏頭大藏卿などやうの藪官にて、朝夕に奉公したる勞、受領七國みな解由を得て未進なき功也。此事むかしは知らず、白河院の御時には所見あり。文治より後は諸國受領の政廢したれば、此事あるべくもなし。

うけばりて—一ぱし引受けて

異位重行—節會の時、貴き者前に列り、卑しき者次第に其後に重り立つこと

解由—滿期の國司が後任者より事務租税等の滯りなき者の文書を請取ること

規模してほんとすべきことほまれとすべきこと

りて、時の浮沈はあれど、なほ某甲、某乙は諸大夫、某丙、某丁は侍と、家の品さだまりたり。今時、親王、大臣に伺候せらるゝ諸大夫は、一向家人のやうに見ゆれど、もとは公人にて、しかも良家なる多かり。

五位の中に、殿上なるも無官大夫などいふがあれど、いとやごとなし。地下も後々の昇進、おひさきこもれるが品々あるべし。おしこみたる諸大夫の中には、藏人五位ことにやごとなし。藏人五位とは、六位藏人爵たうばりたるを云ふ。次に式部大夫五位とて、式部丞より爵得たる、又民部丞より爵得たる、此二ツは二省五位とて拔群なり。中務兵部を除きて、此二省を尊ぶは、吏務の繁閑によるなるべし。此三つをおきては次五位といふ。五位に敍せらるゝ時必ず官を去る。前の官のまゝにて爵給はるを、敍留といひて規模とす。檢非違使左衞門尉ことにめでたし。次に大夫將監、大夫外記、大夫史などなり。他官にもありや、ふとは覺えず。源氏物語に大夫監あり、斯くのごとき官には其類すくなし、敍留にやあらん、一たび辭して遷任したるにやあらん、識者にとひて定むべし。

職原抄に、

參議者。諸臣之中。四位以上。有二其才一之人。奉レ勅參二議官中政一之意也。故非二正官一。然

江家―大江家

執柄―攝政關白異稱

判官主典―官の等級の稱、長官、次官、判官主典

貢人―國學の試驗に二經以上に通じて太政官に申送せられたるもの

いみじき貴族權門なり。次に名家、良家といふ稱あり。名家は上にいはゆる才器奉公打あひて、内府、儀同にも登揚せらるゝ家門、これもむかしは諸大夫といひし。其中に名ある家といふ事、才名の家といふ説もあるにや。才名の家といはゞ、紀傳の儒宦家江家などをこそいふべきに、職原抄などに引出でられたる人々、さる家門にはあらず、その家系を推して知るべし。良家は、地下にては省の輔などを經て、老後上階にものぼる程の家の事なり。次々は諸寮の頭などに任ずるあり。その若きほど助にもなる。職原抄に「六位諸大夫任ㇾ之」とあるは、諸大夫の家がらの人のまだ六位なるほどなり。次に諸大夫、侍と相並びたる稱呼あり。諸大夫はつぎ〳〵いへる如く、執柄、大臣に伺候して、其ちからにて昇進する人にて、彼の賀茂の瑞垣うらみし右近將監などの類なり。年へて恪勤するほどに、侍に紛るゝ所あり。侍はもと執柄、大臣の家人なり。家人の中に才器あるを、貢人にして、諸司諸國の判官、主典にも申しなしたるが、五位にもなるがありて、諸大夫に紛れ安し。畢竟は諸大夫はもとよりの公人、侍ははじめは家人にて後に公人になりたる差別なり。それは延喜、天暦それよりも上より有り來りし事にて、白川、鳥羽の御代などに至りて、やう〳〵家がらの名となれり。元暦以後はその迹に逐ふ事とな

> 内府—内大臣の唐名
> 儀同—儀同三司、准大臣の異稱

り、御前ちかくは仕う奉らぬ四位、五位なり。侍從、諸大夫の差別、藏人所にて堂上、地下といふも同じ趣なり。諸大夫とは大ぞうにおしこみたる四位、五位といふ事、侍從ならぬをおしくるめて諸とはいふなり。國史などに「賜二宴侍臣一」とあるは次侍從のみにて、非侍從（諸大夫なり。）はあづからず。「賜二五位以上宴一」とあるは、恩諸大夫に及びしなり。侍從も諸大夫も同じおほやけ人にて、俗にいふ犬も傍輩鷹も傍輩ながら、近侍をゆるされざる故、うとく輕き方にはあるなり。次に公達、諸大夫と相對ひたる諸大夫有り、公達は代々侍從の列にて、大臣、納言にも昇りしほどの人の子孫の身がらをいふ。諸大夫は、非侍從なる人攝關大臣の侍所に候し、恪勤して、（これを肩入といふ。）其ちからをかりてなりのぼる身がらをいふ。源氏物語の惟光良清、賀茂の瑞垣うらみし右近將監などの類なり。かくて代々公達、諸大夫なるほどに、つひに家がらの名となりて、公達は近衞の次將兵衞佐などを經歷して、納言、大臣にものぼる。されど又代を累ぬるほどに、いたく微弱なるも出來て、鳥羽、後白河のころは、受領にて地下なるもあり。諸大夫の英雄は、辨官をへて參議にも任ぜしを、才器奉公打あひて、内府、儀同にも登揚する事となれり。打聞きては公達は尊く、諸大夫はいやしきやうなれど、さる英雄は諸大夫とは昔の稱にて、

闡提―佛法の緣なきもの、こゝは歌道にたぐへていふ也

職事―藏人に同じ

のこるが餘韻なり。これを高しとしてねがはざるは闡提なり。歌よまん人に、かならず此境にいたるべき佛性はある物なり、心づよく思ふべし。

諸大夫といふ名目、もと一義ながら、さま〴〵に轉じたれば、其所につきて定むべき心得あり、しばらく相對する所を以て辨ぜば、まぎるゝ所なくやあらん。古書どもに、侍從、諸大夫と相對したる諸大夫あり。侍從は、職員令に、「正員八人、掌ニ常侍規諫。拾レ遺補レ闕」とありて、武家ざまの納戸近習といふによくあたる。傍に侍りて給仕する官なり。又八人のうち三人は少納言を兼ね、常侍云々の外に、奏請宣傳をつかさどる。これも今武家ざまにて、納戸役にて御用を取次ぐとおなじ事なり。これ一切藏人の職掌なり。しか同じつかさを弘仁にならべ置かれし事不審あるべし、ついであらん時いふべし。正員侍從八人の外に、次侍從といふを置かる。次をなみと訓む。侍從は本役、次侍從はなみ役也。和名抄に、「親王以下。五位以上。入ニ侍從籍一者百人」とある、これなり。拾遺補闕などこそせざりけめ、よろづ侍從もおなじ樣に、常に侍りて給仕をしたるなり。侍從と次侍從とは、職事と殿上人との如し。此二つをあはせて侍從といふ。國史に、「侍從以上。賜レ祿有レ差」などやうにあるは、みな次侍從をも兼ねたるなり。諸大夫は非侍從な

樒云々ー新古今、小侍從
道のべ云々ー同、民部卿成範
白雲の云々ー同、藤原雅經

みな上下にかけ合せたる詞なし。

　打しめりあやめぞかをる子規鳴くや五月の雨の夕ぐれ

打しめりは雨のよせなり。かくほのかに匂ひやかなるは、なほ第一義を失はず。和歌の第一義は、餘情と餘韵とにあり。餘情とは、

　年を經て祈るしるしは初瀨山尾上の鐘のよその夕ぐれ

　樒つむ山河の露にぬれにけり曉おきのすみぞめの袖

のたぐひなり。上の歌は、よその夕暮にて、我にはあはずして人にあふ事を思はせ、次の歌は、曉おきのにて、若かりしほどは男に別るゝとて、涙に袖をぬらしたる事をきかせたり。餘韵とは、一首打詠みをはりて、後まで其さま心にしみ、目に浮ぶやうに、なごりある心地するをいふ。

　道のべの草の青葉に駒とめて猶故郷をかへりみるかな

　白雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞ吹く

などの類なり。上の歌は、故郷を顧みて駒とめたらんさま、心にしみて去らぬ心地し、下の歌は、繪にかきたらんやうなる景色目にうかびて失せぬ心地す。其目にのこり心に

吉野山云々―新古今集、攝政太政大臣
見わたせば云々―新古今集、藤原定家

詞を取出づるに、詠み盡きたるすぢこそつようは變らざりけれとあるは、かの濱の眞砂などやうの歌材を書集めたる書を見て、その中の詞をとり集めて歌よめば、いたくやう變りてめづらしきことは出來ずとなり。七百番の歌合に、

野遊、　經家卿

梓弓春の日ぐらし引つれているさの原にまとゐをぞする

左方申し云ふ、野遊をさしおきて弓を詠ずるに似たり。又おほかる野をさし置きて、いるさの原に思ひよられけんわりなし。判に云ふ、右歌、左方申す旨頗る其謂なきにや。野遊のこゝろ甚しくこそ侍れ。いるさの原は梓弓にひかれて、春の日ぐらしまとゐするらん。すべて秀句きはまりなきにこそ侍るめれ。左歌は下句よろしきにや侍るらん。右秀句によりて勝ち侍らば、歌の道みぐるしくやなり侍らん。左勝に侍るべし。

とあり。此判のことは、今時の歌に藥石なり。

和歌第一義は、

よしの山はなの故郷あとたえてむなしき枝にはるかせぞ吹く

見わたせばはなも紅葉もなかりけり浦の苫屋のあきの夕ぐれ

うらみ―裏見、恨み

玉くしげ―身の枕言

歌枕―歌に詠まれたる名所

いふ書にすがりて、わづかに詠み出づる、うひまなびの業なり。新古今集の頃の英雄たち、さる事にかゝはりてんや。古人にかけては論なき事なり、今人もすこし口とけたるは、さるべき縁語は自らより來る物なり、より來ずばさてあらんかし、意だにとほりなば、これ無からんも何事かあらん。源氏物語玉葛の巻に、末摘花の、

來て見ればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして

とあるを見給ひて、「古代の歌よみは袂ぬるゝかごとこそはなれね」と宣ひ、御幸の巻に、おなじ君の御ことをいへるに、御小袿のたもとに、例の同じすぢの歌ありけり。

我身こそうらみられけりからごろも君が袂になれずと思へば

とある、をかしさを得ねんじ給はで、

からごろもまたからごろもからごろもかへすがへすもからごろもなる

とあり。又三條大宮の御歌に、

ふた方にいひもてゆけば玉くしげ我身はなれぬかけとなり鳧

とあるを、「玉くしげにまつはれたる哉、こともじはすくなし」と宣ふなど、縁の詞にまつはれたるを宣へるなり。またよろづの草子、歌枕、よくあない知り見盡して、其中の

ひはづなる―纖弱なる

むくつけう―氣味惡く

毉―醫に同じ

千金方―孫思邈の著に係る醫書

準繩―法則

みのの家苞―新今古集美濃家裹、本居宣長の著

濱の眞砂―有賀長伯撰の歌學書

宮はさばかりひはづなる御樣にて、いとむくつけう、ならはぬ事の恐しう思されけるに、御ゆなどもきこしめさず、身の心憂き事を、斯かるにつけても思しいれば、さばれ此ついでにも死なばやと思す。

とある御ゆは藥なり。これ卷々に多かり。そのかみは驗者のいのりにて病の癒えし事なれば、鬼を尙べる弊風俗とも言ひがたし。畢竟は醫といふもまじなひなり。毉といふ字の巫に從へるは、まじなひなる故なり。丹波康世の毉鍼方を見るに、多く千金方によりて、方每に呪文有り。令にも、典藥寮に、呪禁師、呪禁博士、呪禁生ありて、まじなひて病を療す。此呪禁は、唐書百官志にも有り。皇國のみ鬼を尙ぶ弊風俗なるにはあらず。

今時の歌よみは、緣の詞といふ事を大事にすなる。さるは緣の詞三つあらば、上句に二つ下句に一つ、四つあらば上に二つ下に二つ置くべきなりと、置くべき數さへ定まれり。本居先生は、蘆鶴のむらがる雁にぬき出でたるごとく、學者の中に列をはなれて秀でたる見解なれど、この準繩にまつはれて、其定ならぬ歌は、下句に月の緣なしなど言ひて捨てらるゝ事なり。みのの家苞にも常此義をたてて、めでたき歌どもを難ぜられたるは、固執にてうたてある事なり。しか緣の詞をとり集めて、一首を結構するは、濱の眞砂と

外記廳—外記は今の書記官の類

鬼—死者の靈魂

又云ふ、朝臣といふ事、もと朝廷の臣といふ事にて、漢語より出でたり。後に和訓をつくる時に、朝夕の意を借りて、あさおんの反にて、あそんと讀みたるなりと有り。朝夕の意を何故借りしならん、心得ず。本居先生は、吾脊臣の義なりと言はれたれど、迂遠なり。猶朝臣の意にはあるべし。朝政をあさまつりごとと言ふと、外記廳をあいたん所と言ふと、みな朝夕の義なり。抑も朝廷、朝政を朝といふは、百官あしたに先づ釐務にしたがひて、後に雜事にわたる故の義と思しければ、朝廷、朝政、朝臣、朝所、もとより朝夕の朝の義を帶ぶるにて、和漢一義なり。借りたるにもあらず、吾脊臣にもあらず。

又云ふ、源氏物語を見れば、病に藥用ふる事は少くて、大形は祈禱をのみしたるやうなり。今も田舍のものは斯くの如し。鬼を尙べる風俗の弊なるべしと有り。延喜式政事要略などを見るに、むかしとても病には必ず醫藥を專にせし事なり。源氏物語をふと打讀みて、藥を用ふる事なしとはいひ難し。葵卷に、

いざや聞えまほしき事いと多かれど、またいとたゆげに思したためればとて、御ゆ參れなどさへあつかひ聞え給ふを、云々。

柏木卷に、

建永元年五月二十七日。云々被レ仰下一曰。諸寺瓦垣門等。修造功輩。各給二功記一。多武峯功又如何。予奏曰。各致二合期勤一之由。雖二構申候一。本寺不二舉申一候之間。於二自稱者一。頗不審候。但於二諸寺修造一者。本寺奉行辨多付レ之。定終二其功一候歟。

とあるこれなり。

荻生茂卿、南留別志といふ隨筆あり。其說十に六七はあやまれり。土佐の谷重遠といふ人、佐留別志をつくりてこれを駁したりと聞く。佐留別志はいまだ見ず。今これを辨ぜんにもあまりはかなくて、世人もさは心得居らぬ事多ければ、かひなしとてさし置きつ。その中にまみ穴（江戸の麻生まみ穴の事なるべし）といふ所は、古金を掘りたる穴なり、まみはまふの事なり。享保六年の頃、黃金のやうなる砂出でたれども、いまだ年のたらぬ金なりとて堀らずなりぬと言へるは心得ず。金の出づべきやまは、必ずあらき金色の砂あり。江戶の砂は黑くしてこまかなり、すべて似よらず。古書に銅を出しゝ事はあれど、秩父郡なり。怪巖奇石などある山ならでは、金を出すべきにあらず。享保中に金砂を出ししといふは、人のあらぬ僞いひしを、まことと思ひて記したるなるべし。まみは狸の一名なりといふ人あり、さる事にや。まぶ穴といふ義はわろし。

八女―あまたの少女
稻實公―大嘗會の時の官名

は匹夫たり夕には天子たりといふ王者の、かざりにいふ事なり。皇國の天皇はさる御ゆゑにはおはしまさず。から國の天子は、春秋繁露に、「德侔二天地一者。天祐而子レ之。故稱二天子一」とある如く、うはべを飾りたる稱なり。されど代レ天用レ事ものにしあれば、天宰といふべきが如し、子といふ文字は似合しからず。古き書に「日出處天子。日沒處天子」とあり。天子といふ名は同じくて、其意ばへいたく異なり。

源氏物語夕顏の卷に見えたる切懸は、板がこひのかりそめなるなり。兵範記に、仁安三年十一月二日、大嘗會齋場所の結構を記して、

南廂自二第三四間一。敷二布端疊一。爲二八女座一。同第五間。敷二同疊一。爲二稻實公座一。東第一間切懸下。敷二六男座一

とあり。齋場所などは、假初なる事と思し。切懸とは、柱に切懸をして、それに板をさしてあて上より押木をうちたり。板蔀は、狹衣物語飛鳥井の宿に、「いたじとみ長々とし渡して」とあるは、立板にて、今時板屛といふ物なり。此圖志貴寺緣起に見えたり。板蔀とみには格子いれたるも有るべし。ついひぢは今いふねり壁なり。熱田宮などのやうなる瓦練壁は、瓦垣といふ物なり。三長記に、

臘八—十二月八日の灌佛會

江戸にて、二月八日、十二月八日に、芋、蒟蒻、小豆などを入れて汁を煮る、これをおこと汁と云ふ。二度ともに事始なりとも事納なりとも言ひて、さだかならず。尾張にては、二月は不沙汰なり、骨の無き物を食ふ事なりといふ。むじつ講とて、無實の難をまぬかるゝ義なりといひ傳へたり。臘八は釋迦成道の義なりといふは附會なり。おこととは何事ならんと、年頃不審なりしを、出雲國日御崎の神職神西左門行秕が語りけらく、出雲にては十二月十三日に煤取などやうの正月の事を仕初めて、芋、蒟蒻、小豆等の汁を食ふ、これを事始といふ。さて年神をまつりて、正月廿日に鏡餅を撤却して飯を供す、是を飯くらへと云ふ。二月一日鱠を供す、是を鱠くらへと云ふ。鱠くらへ七日ありて、八日に年神の棚を取る、これを事納と云ふ。十二月と同じ汁を食ふといへりき。これにて事とは正月の事なることも、初終も能くわかれたり。

天子といふ稱は、から國よりうつり來しなり。されどわが天皇は日の神の御後におはしませば、天子とも天孫とも天神子とも申して、其ながれ萬世無窮の天子におはしませば、から國とは樣かはりて、實によりたる御稱なり。しかるを公式令義解に、「凡人君者。父レ天母レ地。故曰二天子一」とあるは、汎說二故事一と云ふ例なれど、から書の抄書にて、朝に

紫の一もと―戸田茂睡の著、江戸の地理を記せる書

し事とおぼし。我も人も風呂と稱して酒を饗するほどに、道路に風呂屋と稱して酒をうる家出來たり。賓客どもまづ風呂に入りて、浴後に酒を呑む事なりしとぞ。さて其家に女をすゑて、湯を出づる時はかたびらを假し、酒になれば酌をとる。これを湯女といふ。此湯女つひに情を賣るものとなりて、風呂屋は北里の名と轉じたり。紫の一もとに、麹町紀の國阪に風呂屋ありといへるは、みな娼家の事にて、湯はありしやうにもなし。今大阪の島の内の娼家は、某屋とは言はで、某風呂といふ。さくら風呂、常盤風呂といふ類なり。湯女のなごりはなほ在れど、一浴すべき風呂はなし。江戸にも元祿の頃までは有りしと見ゆるを、いつ制せられて然る家ども絶え果てけん。湯屋と風呂屋と別なりと、江戸人のよくいふ事なり。さても如何なるわざするを風呂屋といふとまでは知らねど、猶聞傳へたる所有りていふなり。世の中何事も斯うまでうつり行く物なるを、心得をるべき事なり。風呂の饗は、尾張國甚目寺村に其遺風あり。去年妻を迎へたる家々に、正月十一日湯を設けて、同じ所の人を招き入湯せしめて、浴後に一杯を勸む。親類隣よしある者、皆この招きに應ず。富める者は村中を盡す。年によりては五所六所にあり。人によりては三所四所にも飲み歩く。今日は風呂をしたり來給へと案内する事なり。

うけばり—承認せられ

春宮帯刀—東宮に侍ひて宿直する衛士、その長を帯刀先生といふ

貞治應安の頃—後村上、後龜山帝の頃

とあり。先生とは吾に先だちて生ひし人、いはゆる長者にて、道を聞く事吾より先なる義を具したるなり。げに道に通達する事の先ならんには、後生といへども猶先生なり。年の先後生を問ふべきにあらず。かくて日本紀に南淵先生とあるは、物まなびの師なれば、稱呼すでに定まりて、和漢に通じてうけばりたる名なり。その呼方二字皆にごる。春宮帯刀の古老を先生といふに同じ。正明、先生の御徳にて、古き本數本を見しに、先生と聲をさしたり。をぐらき所より大人といふ名を引き出でんより、明らかに先生といはんに、何の憚かはあるべき。

伊勢備後守貞彌の日記、世に花營三代記と云ふ、「春日亭え風呂御成」といふ事年々あり。春日亭とは伊勢守の里第なり。其第へ御成を申して、御酒奉りし事なり。さるは此頃の風俗に、人を招きて燕樂する事を、風呂と稱したる物なり。風呂とは浴室の事、今日は湯を設けたり來給へ、といふは、事のさまを容易にいふにて、尾張の俗に、人に酒飯を進むる時、某の日御茶をまゐらすべし、來給へ、といふと同じ趣意なり。かくて浴湯をも設けたる物にて、浴後に一杯をすゝめしものなり。此事貞治應安の頃の物には見ゆれど、其後の書に見あたらず。見あたらねど猶打つゞきありし事には有るべし。慶長以後はさかりに行はれ

うしはく―主(うし)たる意にて其土地を領すること

韓昌黎―韓退之

賤。我後二於彼一千有餘年。彼已爲レ主。我則爲レ客。不レ能下謂二我業一曰二和學一。不丙以別乙於彼甲。施二之於事一。有レ用有二不用一。其業之貴賤。於レ是可レ知也。名不二舍レ實而獨行一至下於謂二我業一曰中和學上。我則從レ衆。

近き頃皇國の學さかりに行はれて、萬葉集、古事記、日本紀の歌どもを講じて古言を説く人々、我が物まなびの師をさして大人と言ふはいとよしなし。大人はぬしなり、うとぬと通ふ。人をさして某主といふ事はあれど、師などをさしていふべきに非ず。又尊稱に大人といふ事は絶えてなし。本居先生はのうしの約なりと言はれき。それも然る事ながら、これはなほ轉語なるべきにや。一郡一郷ばかりの地にもあれ、土地の主たるを、萬葉集にうしはくと言へる其うしなり。三熊の大人は、三熊といふ所の主なり、物まなびの師にあらず。本居先生は師といはれき、これは難なし。しかれども物の師を大かたに師と言はんにはよろしけれど、必ずさす人ありて言はんには親しからず。まのあたりに師といひては、その人の事とも聞えず、なほ先生といふべきなり。韓昌黎がことばに、

生二乎吾前一。其聞レ道也。固先二乎吾一。吾從而師レ之。生二乎吾後一。其聞レ道也。亦先二乎吾一。吾從而師レ之。吾師レ道也。庸知三其年之先二後生於吾一乎。

羅刹―鬼神

立槐下―三公の位に立つをいふ、周禮に「面三槐三公位焉」

回祿―火災

わづか歌謠の穿鑿を終身の業とするは、くちをしき事ならずや。大丈夫は有用の學に志すべきわざなり。

孔子曰。必也正レ名乎。正レ名謂レ正レ實。實有二貴賤一。而名從レ之。故實正則貴賤之分自定八十瑞形端嚴微妙者。謂二之如來一。我則尊レ之。雙角四牙凶惡暴戾者。謂二之羅刹一。我則惡レ之。若代二其名一。則尊二羅刹一。而惡二如來一已。名不レ舍レ實而獨行。豈有二貴賤一哉。皇國文華之盛。四方之國。百家之業。無レ有下不二幅輳一而傳授上者。皆謂二其業一曰二某學一。謂二其人一曰二某學者一。獨儒乎。謂二其業一曰二學問一。謂二其人一曰二學者一。何其卓然而自專哉。是固有レ以也。中古之制。儒有二四道一。曰紀傳。曰明經。曰明法。曰算。從二其成業一。課試取レ人。用レ才尙レ德。或立二槐下一。衣冠之徒。儒者過レ半。政有二疑殆一。下二問異見一。詔勅符牒。筆研之事。莫下不レ出二於儒門一者上。老佛無用之學。醫卜有レ局之術。固不レ能二相抗衡一。而皇國之學。古未二之有一。神道幽微。一人奉レ之。公事職務。羣臣行レ之。星霜二千。家門相承。能奉能行。未三嘗須二學問一也。應仁以來。兵革相襲。朝家回祿。有司散二之四方一。文物典章。或有二闕如一。神祖撥レ亂。於レ今二百年。逸書殘篇。日出成レ堆。於レ是二三先生。講レ古立レ業。世謂二之曰二和學一。何其內レ彼而外レ我哉。是亦固有レ以也。物有二先後一。後者未二必爲レ

久かたの天云々ー枕詞などの穿鑿に過ぎずといふこ

年々隨筆 六 甲子

近き世まで、皇國の書を講ずる事はをさ〳〵聞えず。おのづからありもすれど、大儒先生の博物の料にせし事にて、みな傍ごとなりつるを、此頃は皇國の事を專にする先生も出來たるは、さはいへど契沖法師、岡部先生のちからなり。しかはあれど、その講ずる所萬葉、古今の難きふし、久かたの天、あらがねの土を穿鑿するに過ぎず。おなじ書おなじ事を、われ人工夫して少しづつも異なる說をいひ出ぬれば、やがて書にも書きいれ語りつたへて、某が說く〳〵と、いくつも〳〵言ひならべて、遂に其定說を知らず。其上にも猶めづらしき事いひ出でんと、息をつめ心をこらして、同じ事して世を終ふめるはかたはらいたき事なり。久かたの天、あらがねの地は、しばらく枕詞として、古歌解くにも今詠み出づるにも、さして事缺くこともなければ、猶ありなん。萬葉、古今のかたき歌どもも、知られずば知らでをあらまし。古き歌の十首、廿首解き得ざらんからに、何の妨かはあらん。大御國にて故事制度さばかりめでたき典章の備りたるをさし置きて、

乃佐皇太已萬津留 加倍利萬字夫
命ニ獻故更且還米問ニ其大國主神ニ汝子等事代主神建御名方神二神者隨ニ天神御子之
命ニ勿レ違白訖故汝心奈何爾答曰之僕子等二神隨ニ白（申須萬仁）僕ゝ之不レ違此葦原中國
（ゐこさのりの太加比萬津良志申於波年奴いましか伊加年にて申さく也串加禮加古）（太加伊萬津良之）
者隨命既獻也唯僕住所者如ニ天神御子之天津日繼ニ所知之登陀流（此三字以音下效此）
（ゐこさのりのまにまに太天萬津留なり）

和銅五年正月廿八日　　正五位上勳五等太朝安麻侶撰

とあり、脫字も衍文もいさゝかあり、訓の訛れる所も見ゆれど、漢文よむとはいたく異なるを、古斯くざまにも訓みし物なりといふ事を心得居らんは、物學のちからとなるべく、二先生の勞もかひある心地してなん書いつく。

文化元年九月五日反古之卷逼軸了　　石原喜左衛門正明

奉(倍萬津留倍之)然於此道者僕(也津加礼加御子)子建御雷神可遣。乃貢進爾天鳥船神副建御雷神而遣。是以此二神而降到出雲國伊那佐之小濱而。(伊那佐三字以音)拔十掬劍逆刺立于浪穗(佐加之萬仁津知仁津岐太弖々字)趺坐其(知久美仁非天)劍前問其大國主神言。天照大神高木神之命以問使之汝之宇志波祁流(此五字以音)葦原中國者。我御子之所知國言依賜(佐里萬津良牟也)故汝心奈何(伊加牟)爾答白之(久)僕者不得白(止比申天)我子八重言代主神是可白(申須倍之)然爲鳥遊取莫而大御之前未還來。故爾遣天鳥船神徵(世女波)來(太弖)八重事代主神而問賜之時(フ佐利萬津留倍之哉)語其父大神言。恐之此國者立奉天神之御子即踏(布美加倍之天)傾其船而天逆手矣(佐加太知爾)於青柴垣(阿於布之和岐乎字知奈之弖加久禮萬之奴)打成而隱也。(訓柴云布斯)故爾問其大國主神今汝子事代主神如白訖(かく申於波牟奴)亦有可白子乎(申倍伎)。於是亦白云亦我子有建御名方神除此者無也如此白之間其建御名方神千引石擎手末而來言。誰來我國而忍々如此物言(申須)然欲爲(布世牟)力競(止知加良安良曾伊)故我先欲取其御手故令取其御手者即取成立氷々取成劍刀故爾懼而退(於津々志利曾岐)居(於留)爾欲取其建御名方神之手(比弖)乞歸而取者。如取若葦(阿志乃和加此於)搤批而捉離(止利波奈禮弖仁氣左留)者即逃去。故追往而(於弖由久)迫(仁氣伊太留)到科野國之州羽海(須波乃宇美仁)將殺時(津美世年止須留時)建御名方神白(申さ)恐莫殺我(和禮於奈津美志萬志曾保加波)除此地者不行他處(由加之安太之止古呂倍)亦不違我父(太加伊萬津良之)大國主神之命(申玉ふに)不違八重事代主神之言(了乃給仁毛)此葦原中國者隨天神御子之(萬仁々々)(乃皇)

日本紀の今の訓は、卜部兼賢などの進退したる物とは見ゆれど、なほ養老のそのかみより、しかざまに訓みし物にて、公望の私記などにも、訓の義を講ぜし所あり。古事記はいかさまに訓みし物なりけん。本居先生の傳の訓は、古訓なりと世人は心得めれど、いかゞあらん、なほ新義にぞ有るべき。今少しから書よむやうなる所まじりたるべしと思ひつるを、三年ばかりさきに尾張に物して、無所碍上人とぶらひに眞福寺に行きて、古書ども多く見たりし中に、古事記の抄本あり。奥書なくていつ頃の物と定めがたけれど、此寺の所藏は、延慶、元亨より上、弘安、建長より下なるが多かる。其中にも古色みゆる物なり。これ古のよみざまなるを、かくて思へば、傳のよみざまいとよう似かよひたり。こは岡部氏のおもひよりし事にて、本居先生はとかう直されたるなれば、二先生のいみじき見解なる中に、岡部先生いとめでたし。その文、

天照大御詔之亦遣曷（太禮乃）神者吉（與介年）。爾思金神及諸神白之。坐天安河々上之天石室名伊都之尾羽張神。（伊都二字以音）是可レ遣。若亦非二此神一者。其神之子建御雷之男神此應レ遣。且其天尾羽張神者。逆二塞（布佐加豆）上天安河之水一而塞レ道居（於利萬之萬須阿太之）。故他神不レ得（古止於）行。故別遣二天迦久神一可レ問。故爾使二天迦久神一問二天尾羽張神一之時答白（申天萬宇佐久）。恐之（玉）仕（津加）

よせおもき―世の人望ある

さうぐしき―淋しき

三木―參議

鐵線―きくからくさ、花咲く蔓草

幄の座―神事を行ふ時南殿の前庭に設くる屋

松にかゝれる藤、山谷にもあまるばかりに立ちつゞきたる桃の花、白き黄なる菊の花のしたゝかならずつくろひたる、みなめでたし。いと清き遣水、もしは心ひろき池水に、杜若の咲きにほひたるは宰相中將、八重山吹の大きやかなるが一本、朝露おもげに咲きみちたるは參議左大辨、みな三位にて、中納言の闕を待つ。いとよせおもき上卿なり。牡丹は參議左衞門督、別當にていとうるはし。色白き桃、棚にしたる藤の花は、非參議の三位、めでたくともさうぐしき心地す。女郎花はおなじ非三木ながら、三位の中將、すぢ異にやごとなし。柘榴、紫の色みどりうつくしげに、花の色もゆばかり紅なるは參議大藏卿、蓮は三木右兵衞督、みな正下の四位なる中に、大藏卿は諸大夫にや、品おくれたる心地すめり。右兵衞督は細公達にて、世のおぼえすさまじげなり。なでしこは頭中將、時めきわたる君達にて、此日の奉行の藏人なり。龍膽、朝顏、すみれ、秋海棠、荻、かるかやは、左右の近衞の次將、階下に陣をひく。紫苑、桔梗、花ざくろ、花あやめ、鐵線、唐桐、何くれの花は侍從諸大夫。近き世には幄の座の饗絶えたれば、此日の恩にはもれてやあらん。鷄頭花、千日草はとのもりの伴のみやつこ、庭燎を焚き庭かきはらひ、これぞ下種の限なりける。

あし―錢、葦

朝三暮四―姑息の生活

しうとく―宿德、德を積むこと

昭宣公―藤原基經

臈―功を積むこと

思ひて、次の日また後の二首にくらべ見て、こはいまだとゝのはず、さばれ昨日はいたうながれたりと思ひつるものをと、あやしかるべし。さばかり古今集を執しながら古今集の姿を知らず、いかなる事ならん。

蘆庵の若かりし時、いと貧しかりけり。物を買ふに、價の三つ足らざりければ、隣に乞ひかりて買ふ。さて詠める、

くやしくも難波のみつのあしをなみこと浦かけてかゝせつる哉

あはれに心ぐるし。正明も、市谷わたりに蝸牛ばかりの身を入るゝ宿はありながら、朝三暮四に心ぼそし。

あはれとも見やはとがめぬ淺間山あさましきまでほそき煙を

宿世とは思ひつゝなん。

もし花の節會あらんに、櫻はしうとくの太政大臣、いみじき有識にて、内辨を奉仕す。相國の内辨は、昭宣公の例とかや。外辨に大納言二人、紅梅は大將かけていとやごとなし。海棠は二位の臈高き新大納言、才ある儒卿なり。梅は二位の中納言、すこしをめりて同列にたつ。花のさまのびやかならぬは、晩達の公卿と見えたり。三位の中納言は柳、

不堪—堪能ならざること
蘆庵—小澤蘆庵
ながれたるなり—調の外れたる也
老らく—老いの延轉

不堪なるを思ふとて、此ことばによりて此論をたつる、先生といはるゝ人に多かり。蘆庵といふ名高き歌よみあり。古今集の風をよしといひて、萬葉集は未だ調ほらざるなり、後撰集より後は早うながれたるなり、古今集ひとり其體を得たりといふ論を立てて、人にすゝむる人なりき。又みづからの歌も、よみ出でたる歌を古今集にくらべ見て、それよりも古くはいまだ調ほらざるなりと思ひ、それより後ざまならばはやうながれたるなりと思ふべしといふ教なりき。古今集は、もと古今の集なれば、其姿一樣ならず、いづれの歌をさして古今集の體とはいふべき。たとへば、

老らくの來んと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを
和田の原寄せくる浪のしば〳〵にみまくのほしき玉津島かも

などある歌は、今の京の歌とは思はれず、

年毎に花のかゞみとなる水は散りかゝるをや曇るといふらん
吉野川岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり

といふは、爲家卿の後といへども、此歌の姿なしとは言ひがたし。かくて今の歌人、うた一首よみ出でて、初の二首にくらべ見て、あらず、改作せばや、いたうながれたり、と

爾」とあり。つとゝとちかくかよふ。四方の國にてつがといふを、京に栂尾といふ所ありて、たゞ一つなり。さて樛の木のいやつぎ〳〵にと詞をたゝみて續きたれば、樛木はつがの木なる事仔細なし。冠辭考に此條ありて、論辨すべき事もあれど、又の序に言ふべし。

古今集の序の、「やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」とあるを、近頃の學者に心得あやまる人多し。さるは心にうかび來る事を其まゝに言ひ出づれば、やがて歌なりといひ思ふめれど、花ざかりを見て、あゝよう咲いたといひ、月清き夜に、とんだよう晴れたといふは、人の心はこゝろなれど、それを種として、文ある詞にいひなさゞる故歌にはあらず。よう咲いた、よう晴れたは、萬人一途の言葉にて、よろづの言の葉になりゆかず。よろづの言の葉にいひなさるゝは、詞にあやをあらする故なり。種といふ文字よろづといふ文字に心をつくれば、此あやまりは有るべからず。かやうの折には斯う〳〵思はるゝ物ぞといふ、その時々の心をたねとして打つけにも言ひ、物によそへても言ひ、うらへかへして立ちたる思を知らせ、心をふくめて下の心を思はせなど、あやある詞はよろづになり行くものぞかし。その心を知らぬ人、おのれが歌の

南有二樛木一云々
―詩經周南樛木三章の句

と、日を同うして言ひがたし。論語に「樂而不レ淫」とあるはこれなり。しかるを大序小序といふあやしき物ありて、千歳のむかしより詩の正義をうしなへり。詩は皇國の催馬樂と同じ物にて歌謠なるを、言語のたすけとせし物なり。歌謠には彼此古今、男女の事多かる物ぞかし。

「南有二樛木一葛藟纍之」とある樛木を曲木なりといふは何ゆゑぞ。葛藟纍之とあれば、まがれる木は枝など垂れたるべければ、葛藟まつはれやすかるべしと思へるか。幹はまがれりとも、枝は低れたりとも、地にいたらざる限は葛藟は及ばず。根より幹へ這ひまつはれ昇るべければ、曲らずともありぬべし。いかさまにも一木の名と聞えたるを、小序に惑ひてこれを思ふ人なし。萬葉集に、樛木をつがの木と訓めり。さるゆゑありて訓めるなるべし。詩なるもしばらくしか心得てあらばや。さて此篇の義は、樛の木に葛藟のまつへるが如く、めでたき（樂只）我君（君子）には、さいはひ（福履）の身にまつはれて、綏之將之成之となり、祝言の詩なり。これを例の序に、后妃の下に及ぶなりなどあるは、あやしき事なり。樛木の事萬葉集一卷に、「樛木乃彌繼嗣爾」三卷に、「神奈備山爾。五百枝刺。繁生有。都賀乃樹乃。彌繼嗣爾」とあり。六卷に、「御舟乃山爾。水枝刺。四時爾生有。刀我乃樹能。彌繼嗣

關雎―詩經の周南の詩篇の名

まきし―契りし

荇菜―和名「アサザ」

邶鄘―詩經に周南に次て邶あり鄘あり

梅の花うす紅の下かきを　むらく染むるはる霞かな

とある下かきは、下ぞめなり。かきは紺がきのかきなり。そめ汁を瓶に入れて、底にゐぬやうにくるりくと搔廻して染むる故いふなるべし。

關雎は戀の詩なり。初章は、鳴きかはしつゝみさごは河の洲に居りといひて、をとこ女の思ひかはしたるに譬へたり。さてものふかくしめやかなるひめぎみは、このわかきんだちに打ちあひたる中ぞとなり。これ一篇の總括にて、第二章は初めてまきしほどの事、第三章は得たりし時の樂なり。（五章とみる説はあらず。）第二章は、そろはぬあさゞは、かなたこなたにながれなびきてとり難しといひて、女の得難きたとへ、めでたきをとめのよるひるとなく戀しければ、これをまくになびかねば、ふしまろびいねかへりて思ふとなり。第三章は、參差なる荇菜も、かなたこなたにとりえらぶべしといひて、女を得たるたとへ、めでたき乙女を得たれば、琴瑟鐘鼓もてたのしむるがうれしとなり。かくて此詩は后妃の德をうたひしにはあらず、詩は國々に行はれし歌謠なり、さるむづかしき事にはあらず。其中に關雎ばかり文辭のをかしきもなく、節奏の和雅なるも無かりしにて、邶鄘の詩のけやけくにぎはゝしく、打聞けば酒にすゝみ色にすゝみ、ともすれば惡風俗にうつらしむる

夕されば—此說前にも見えて全く重復せり

と有り。同じ義なり。

夕ぐれは、夕の早うくらくなりしほどなり。明ぐれは、明方のいまだ闇きほどなり。たそがれ時は、誰ともかれとも辨へがたきほどなり。かはたれ時は、かれは誰ならんとおぼめくほどなり。

夕さればさ文字春されば、秋されば、なども言ひて、夕になれば、春になれば、秋になれば、といふ事、されといふに、させる意なし。もと去の字なり。詩には晩來といふ來に意なし。老去、歸去といひ、春來、秋來などいふ去來の字、いと輕くて添へていふ文字なり。近代は夕ざれさ文字といひて、夕ぐれの義とす。春されば、秋さればにかよはざる故、誤なる事あきらけし。されど此說もやゝ古き事なり。大藏卿行宗卿集に、

さらぬだに歸る宿なき夕ざれにむすびとゞむる神垣の藤

治暦二年三月十五日備中守定綱朝臣家歌合、基綱、

朝まだきふる秋霧に夕ざれの春の霞は立ちまさりつゝ

猶多かり。これらの歌、去來の義にあらず。

日觀集に、

普廣院―足利義教の謚

まはり―守り

里村縣ハ太平郊原トナリニケリ。嗚呼淺マシヤ鹿苑院殿ノ御時ハ、倉役四季ニカヽリケン。普廣院殿ノ御代ニ成リテ、倉役一年ニ十二箇度ニナサレケン。然ルヲ當義政將軍ノ御代ト成リテ、倉役ノ臨時シゲクカヽリシカバ、大嘗會ノアリシトシノ霜月ニハ臨時九箇度、臘月八ケ度ナリ。

とあり。此ごろ酒屋の壺役といふも有り。壺といふは今の如き一升ばかり入るものにはあらで水がめの類にて、今は桶にて作るを、むかしは壺にて作りしにやあらん。さらでは役を取るにいかゞ也。亂世の民のくるしきを見て、國家昇平の恩をおもふべきなり。あなかしこ。

衣は著るも、袴ははくも、衾は臥すも、もといひ、まといふが衣服の名なりと、我先生の說なり。尾張の人賓客の來て何くれとなく物語して歸るを、よも山のはなしして歸りしと云ふ。よも山は古言なり。神樂採物の歌に弓、

よも山のまぼりにたのむ梓弓神のたからに今日しつる哉

梓にも、

よも山の人のまほりにする梓を神の御前にいはひつる哉

季御讀經—春秋二季に禁中にて大般若經を講ぜられしこと

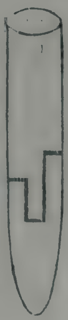
沈—沈香

とあり。七月會以下は物に見えず。季御讀經も四季にはなくて春秋二度なり。月次の修法ははやくより怠りし物にぞ有るべき。

應仁記に、

九番ニ花御幸、因レ玆御家ノ大營萬民ノ弊、其語ノ不レ及所ナリ。サルハ花御覽ノ結構ハ、百味百菓ヲ以テツクリ、御所ノ御相伴衆ノ筯ヲバ金ヲ以テ展レ之、御供衆ノ筯ヲバ沈ヲ以テ削レ之、金ヲ以テ逆鰐口ヲカク。

と有り。逆鰐口の箸、今世上に多く用ゆる物なり、如レ此。



同記に、亂所御遊しげかりし事とて、大事九ケ條をかぞへ立てて、

如レ此面々名ヲ惜ミ諸家ヲ恥ヂテ、粧ヲノミ刷カント奔走セシマヽニ、公家モ武家モ、皆所領ヲ質ニ置キ、財寶ヲ沽却シテ勤レ之ラル。是ヲ以テ國々土民百姓等ニ課役ヲカケ、段錢（田畠の段數に役錢をわりあつるなり）棟別（家數にて取る課役なり）ヲ色々ノ樣ヲカヘテ譴責スレバ、國々ノ名主百姓ハ耕作シエズ、田畠ヲ捨テ乞食シ、足手ニ任セテ閤エ行ク。依レ之萬邦ノ郷

を傳へたる事しるし。狂言は鹿苑院殿の頃よりこなたの事なり。そのかみは一年十二月の修行ありて、寺々にて行ふ會式ありしと思し。天下泰平國家安寧五穀豐熟萬人快樂のためにぞ有るべき。今はさるわざ凡てきこえず。京の蓮臺寺に修正といふ事あり。おびたゞしく鐘をうつとて、失火燒亡など人のあやしまん事を恐れて、年々有司に申すとぞ聞きし。尾張の甚目寺にて正月十一日修正を行ふ。形の如き事なりと聞きつ。修二は奈良に二月堂あり。修二月會堂にぞ有るべき。中右記に、

天永三年二月三日。參二圓宗寺一。行二最勝會一。御座引レ列。有二左右舞事一。行二常行堂修二月一。入レ夜歸。

と有り。修三、修四は物に見えたるか覺えねど、奈良に三月堂、四月堂有り。修五は三長記に、

建永元年五月廿七日。今日被レ行二新日吉小五月會一。式日依二御熊野詣一延引也。

とあり。修六は、同日記に僧事の除書を載せて、

法橋院明。御佛並熊乃六月會用途功。 小右記寛弘九年六月丶日。權僧正被レ過。良久清談。次云。爲二六月會竪義一。弟子玄晦登山。云々。而今朔日有二修善之御消息一。申二所勞之由一。云々。

と有り。御禱ありしなるべし。樗嚢抄相撲條に、

三合甲子。正暦四三合。萬壽元甲子。寛治三合。停止。延喜廿依病。天延三三合。

とあり。御愼ふかくて相撲停止せられし事もありしなり。近來このさたある事を聞かず。

そのかみ祈禱に石塔といふわざあり。小右記、

寛治二年三月廿三日庚午。云々。今日侍所石塔。次仰二所々一令レ書二寫壽命經七百十五卷一。卽殊書二寫一百卷一。依レ例供二養心經七百九卷一。

とあり。こゝろざす所の事、石の塔婆を立てたる功德にてかなふ義なり。壽命經は其供養なるべし。年賀などよろづによかめるわざなるに、今は佛法かたの如き世にて、さる事きこえず。たゞ盲人一座に、二月六日守瞽神をまつりて、石塔の事あり。此座中に故實の遺風古代の名目の遺れる事多し。これも其一つなり。其次第こまかに問ひもとめて注すべし。猿樂の狂言に、某座頭といふものありて、多くは石塔にて勾當の參會する事どもなり。まらうどの勾當あるじに向ひて、「お塔めでたうござる」と云ふ。其やうを見るに、職檢校の房の儀のやうにうるはしき事とも見えねど、かの座には昔より此わざ

勾當—盲人の官

五行―世界の成立せる基なりと假定せる木、火、土、金、水の五

五德―五行

殷鑒―戒とすべき前人の跡、論語に出づ

一元なり。から書よむ輩、これをいみじき事にほめのゝしる。されどこれはいとしもなし。一帝一元がめでたくば、某皇帝初年、二年にて事たれり。年號は何の料ぞや。漢文の惑をさとりて漢武の蹤をふむ、痴事なり。何のほむる事かはあらん。

革命、革令の外に、三合といふ災歲あり。改元はせられねども、御祈どもありて御つつしみなりき。三合とは、三代實錄に、

貞觀十七年十一月十五日。陰陽寮言。黃帝九宮經。蕭吉九宮篇云。承二天之道一。因二人之情一。上占二三元一。下用二五行一。三神相合。名曰二三合一。所レ謂三神者。大歲客氣太陰是也。今自二上元己亥一。至二于本朝貞觀十八年丙申一。積レ年四千九百一十八年也。以二三元百八十一除レ之。今中元之末。河元之內也。三合之運。當レ在二明年一。經曰。毒氣流行。水旱接竝。苗稼傷殘。寇盜大起。兵喪疾疫。競口竝起。實是雖レ當二五行之理運一。而弭レ災之術。既在二祈禱一。夫禍福之應。譬猶二影響一。吉凶之變。愼與レ不レ愼也。當二此時一。人君修レ德。施二行仁一。自然銷レ災致レ福。去天平寶字三年。歲當二三合之理運一。是則三元大終。而五德復始之年矣。上元之三合。初在二斯歲一。由レ是有司上奏。詔頒二下天下一。令レ讀二般若心經一。既免二其災一。卽是本朝之殷鑒也。

元—年號

方士—神仙の術を修むる人、道士

通鑑—宋の司馬温公の撰、戰國より五代迄の間の歴史

元年は初年といふ事なり。一帝一元なる事いふもさら也。されど元は善之長なりとて、初年を元年といふが、もとより吉祥の名をもとめたるなれば、一帝幾干元なりとも、祥瑞怪異に元を改めて、延壽消殃のはかり事あらんは、あるべき世の理なり。それを惑なりといはゞ、元年も初年とぞいふべき。こは年の名號にて、後の世よりあがれる代をいふに、分別しやすく記憶しやすく、便ありていとめでたし。此事唐國にて漢文帝よりはじまれり。かの帝卽位十六年四月に、

方士新垣平。使三人持二玉杯一。詣レ闕獻レ之。刻曰。人主延レ壽。又言。候二日再中一。居頃之。日卻復。於レ更始是以二十七年一爲二元年一。

と通鑑に見えたり。十七年をふたゝび元年となしゝは、傾きし日の再び午時にかへりしに象れるなり。さて景帝は三元、武帝は十一元、三元は卽位元年、中元年、後元年といふ。中、後とは後よりいふ稱にて、その時は三つともに同じ元年二年なれば、事に臨みてまぎらはしかりけん。武帝にいたりては、しば〱の改元なるに、名字なくては紛はしき故、建元、元光、元朔、元狩などやうに、年の名號を設けしなり。いづれも吉祥をまねき凶災を避くるわざにて、和漢これをうけつぐ事なり。明の世祖より、かの國は一帝

召すべき由申下りにけり。其後筑紫にてかくれ給ひければ、法皇かしこくぞ尋ね置きけると思召し出でて、彼少女を召して琵琶を聞召す事ありけり。いまだいろなりければ、かうじ色の袴著て、にぶ色の衣ども著て、かきあはせより三曲まで、數を盡して引きたりけり。

と有り。

尾張の名古屋にて、人の死にたる時子は白小袖淺黃の上下を著る。これは諸國にわたりたる風俗なれば、室町殿の頃よりの事なるべし。弟姪などは茶色の上下を著る。萱草色のうつれるなるべし。

今年は革令なれば、改元ありて文化といふ、いとめでたし。誰人の勘文にて何書より採られたるならん、問ひ求めて註すべし。弘治の度にも此號いでて、化の字新字なりといふ難ありき。新字は近き例、寛政の政の字いともめでたき例なれば、何の仔細かあらん。そも〳〵年號は大化を始とす。化の字新字之條心得ず。さるは大化は事のはじめにて、その儀連綿せず。年號の有无まち〳〵なり。大寶よりこなたは必ずあるべき物となりたれば、其以前は猶數の外としたる說にや。

かうじ色―だいだい色

革令―甲子の年、陰陽家の語

勘文―朝廷よりの諮問に博士などが其勘考を書きて奉りし意見

御服—御喪

意須比—上古、頭の上よりかぶりて襴まで垂れたる衣、後世のかづきの類

御所の名—倚廬

帥—太宰帥

論語などに、先王之道とやうにいへる先王は、文武周公令を立てし君の事なり。儒者たちにもしか解く人有りもやすらん、いまだ見及はず、聞及ばず、古先聖王の義とするはいとわろし。先を古先といふ、いとつたなし。王は聖王といふも、聖の字あながちにそへたる文字也。打まかせて先祖先考といへば、必ずわが父祖の事なり。他族にかけて言ふべきにあらず。周の世にて先王といひて、往代の王者堯舜禹湯に係るべき物かは。

東國にて親の死にたる時、はふりのわざするに其子いろといふ物を著る。絹にて頭をつみて、左右へたれたり。猿樂の狂言のゆぼうしといふ物に似たり。こは人にあひても見えざらん料の物にて、意須比の類ならんかし。いろといふは、天子の御服のころおはします御所の名より出でて、服する物にうつれるなるべし。服の日ごろをいろといひしは、

十訓抄に、

基綱卿、年たけて後帥になりて下られける時、白河院、年高くなりて遙に赴く。心ぼそくおぼし召し、琵琶の祕事など誰にか傳へおける、聞召しおくべき事なりと仰せられければ、時俊、通言などに、如レ形つたへ置き侍れども、其器にたらず侍れば、孫にて候少女に底を拂ひて敎へ置きて侍り。もし聞召すべき事あらば、彼を

壁代—棹の如きものに布を懸けて壁に代用するもの

大口—大口袴、束帯の時に穿つ裾口廣き袴

公冶長—周代の人、孔子の門人

縑は細絲の絹にて、うすき故に夏ごろもによろしきなり。帷をかたびらといふも、もとは片絲の平苧もて織れる布をいふなどあるは、みな杜撰なり。かたひらのかたは裏なき事、ひらはひらめく意、帳、几帳、壁代、（和名抄に、帷圍也、以二白障一圍也。和名加太比良とあるは、壁代なり。）みな其定なり。又著る物のかたびらは、浴後に著る湯取のかたびら、（天子に奉るを天羽衣と云ふ）をもとにて、夏は汗取の帷を束帯の下にも著るやうになれり。湯取のかたびら（今ゆかたといふは、ゆかたびらの略かれたる也）は、裏なくてひらめく事勿論、汗取のかたびらは、大口表袴をも著、帯などもさしたれば、ひらめく事はなけれど、湯帷よりうつりたる名、後世の大帷と同じ。世上おしなべて著るかたびらも、袴肩衣などを著、さらでも帯引きしめてひらめくにはあらねど、なほ湯取のうつりにてかたびらとはいふなり。

鳥獸は、鳴く聲に遲速緩急大小高低ありて、喜怒哀樂の勢をうつすなるが、つぶ〳〵と物語する計、下の情の通ずるものなり。おのがどち通ふ詞ありて、啼きつゝ物語するにはあらず。鹿、雀、雲雀、鴿、雉などの笛によるにてしるし。笛の音に言語あるべきにはあらねど、遲速緩急高低大小をうつす故、鳥獸もしかぞと思ひて寄るなり。公冶長が鳥語に通じたりといふ說は、よしなき事なり。

平苧―苧は麻

藻」（これは數いと多ければ略すとて三條引けり、今又略之。）こは枕とつゞけたり。巻五に、「敷多倍乃登許能邊佐良受云々」こは夜床をいひかけたれば、卽ち夜の物をいふとあり。今おもふに、敷たへの上なる枕、敷たへを敷設けし床といふつゞきにて、いひつゞけたるさま、敷妙の衣とは異なり。又考へ云ふ、「布細乃宅乎毛造」また、「敷細乃家從者出而雲隱去寸」こは寢衣より一たびうつりて夜床につゞけ、二たびうつりて常に所レ宿家にも言ひかけたるなりとあり。此說の如し。

なつごろもかとりのうち、考へ云ふ、こはふるき書には見えず、後世の歌にあり。されど此つゞけたる樣をおもふに、後の人の語にはあらじ。さて夏の衣は、縒らぬ片絲もて織る故、片織とつゞけたるなり。且その加多於利の多於の反登なれば、加登利とつゞけし物にて、古ざまの語なり。帷をかたびらといふも、もとは片絲の平苧もて織れる布をいふなど、思ひあはせよと有るは、何といふ事ぞ。まづ縒絲といふは、絲二すぢを合せて縒りかけたる物にて、物ぬふ絲なり。片絲とは、しか二すぢを合せず、繭より引きしまま麻を績みたるまゝにて、絹布に織る絲なり。さて夏衣にする絹布は、縒らぬ片絲にて織る故に、片織といはゞ、夏衣ならぬ絹布は、二すぢ合せたる諸絲にて織る物とするか。

思ふに、敷たへの衣とつゞきたるは衣の字をかけて義をなす。夜の衣は下に引きしく物なれば、敷たへといふ名は有り。今蒲團と云ふ物なり。上にかうぶるも有り。言ひなれてはそれも敷たへの衣といふべし。こは枕詞にはあらざるを、岡部氏はいかゞ心得つらん。まづ萬葉集二なるは、柿本人丸の、石見なる妻に別れて京に上る時の歌にて、

ますらをと思へる我も敷たへの衣の袖はとほりて濡れぬ

とありて、別れし夜の旅寢に妻を思ひてよるの衣を泣きぬらしたりといふ事、其次なるは、同じ人の妻を國に殘して來たる事にて、

玉藻なすなびき我が寢し敷たへの妹が袂を露霜の置きてし來れば

と有り。敷たへのいもが袂とは、夫婦相寢る時は、女の衣は下に敷き、男の衣は上に著る事なればや。露霜の置きてし來ればは、歌のつゞきは衣を置きて來る事なれど、やがて妻を殘しおきて來し事なり。敷たへの衣手かれては、女に久しくあはぬを、その衣に遠ざかる事にいへるなり。敷たへの袖かへしつゝ寢る夜おちず夢には見れどは、夢に見ん爲に夜の衣をかへす、其夜ごとに夢に見し事、以上敷拷乃衣とつゞきて、始めて義をなす。被衾なり、美織にはあらず。又考へ云ふ、卷一に、「敷妙之枕之邊忘可禰津

牟志夫須麻―暖かなる衾
多久夫須麻―栲の皮にて織りたる布の衾

しきたへの衣の袖 枕 床 たもと いへ 考に云ふ、萬葉二に、「敷妙乃衣袖者通而沾奴」また、「靡我宿之敷妙之妹之手本乎」巻十一に、
敷妙之衣手離而玉藻成靡可宿濫和乎待難爾
また「敷細之衣手可禮天」巻十七に、
之岐多倍能蘇泥可幣志都追宿夜於知受 云々

こは夜の衣袖に冠らせたり。さて敷細布とて、專寢衣に冠らしむる事は、古事記に、
牟志夫須麻。爾古夜賀斯多爾。多久夫須麻。佐夜具賀斯多爾。云々
萬葉にも、「蒸被なこやが下に寢たれども」といへり。然ればなこやかに身に親しきを用ふる故に、和かなる服てふ意にて、敷栲の夜の衣といふより、袖、枕、床とも續くるなり。既に朱良引敷たへの霞下に引ける如く、神祇令の集解に、「敷和者宇都波多也」といへる敷は絹布の織目のしげき意、和はなこやかなる謂なれば、美織也といへるをも思へとあり。敷の字に絹布の織目のしげき義はあるべくもなけれど、しきといふ詞の假文字として、繁き意に見たるなり。織目の繁きは絲の繁きといふ事にて、俗に地のよいといふ事なるべし。地のよい栲は、晴の衣にこそ似つかはしからめ、夜の衣には物遠し。今

紅花―薊に似たる草、花瓣を摘みて紅を製するより末摘花ともいふ

紫―植物、根を搾りて、ひさかきの木の灰汁を交へて紫色を染むるに用ふ

形木―版木

續飯―そくひ

はねど、紅には淺きが有るも常なればつゞけたり。卷十六に、「紫乃。粉潟乃海」といへるは濃きとかゝれるを打かへして見よとあり。紅の淺葉とつゞけたるは、紅の薄染衣とよみたると同じく、うす紅にて、後世一斤染といふ。深紅もめでたき色なれど、淺きも世にめでし物なれば、淺葉とつゞけしなり。桃花色は一斤染よりも濃かるべし。深紅は京方にておやま紅といふ燕脂のやうに、黑きを帶びて光るなるべし。薄染も桃花褐も、あらそめと言ふはわろし、あらそめは退紅と書く。紅花染のかすにて染むる故退紅といふか。あらそめといふも、あらはかすの義に似たり。されど紅花のかすは物を染むる事なしといふ。何にて染めたる色ならん、黑きけをおびて賤者の服なり。

むらさきのこかた、萬葉集十六に、

紫乃粉潟乃海爾潜鳥珠潜出者吾玉爾將爲

眞淵は紫の濃きと掛かれりと思へり、それもよろし。又一義、粉は紫の根を粉にしたる事、かたは形木にて摺る事にて、こかたとつゞきたるか、いはゆる紫の根摺なり。根摺は、紫の根の粉を續飯にてねりて、形木にさまぐ\の文あるを摺入れたるなり。二說いづれよけん。

宍人部―魚などを料理する人のむれ

この上のは、御狩のさまなり。さて跡見を居置といひたれば、鳥獸の處を知るべき人を居うるをいふ。射目は立渡とも鹿待とも續けたれば、鳥獸を射る人をあまた立渡すをいへり。且その射目は射部なり。目と部と語の通ひて、且その目は牟例反なれば、群ある事を目とも部ともいへり。凡そ御狩には、鷹飼部、犬飼部、射部、跡見部、山守部、野守部などの部々あるべしと有り。此部々あるべしといへるは似つかはしき事なり。されど射目、跡見部、各一部の人ならば、跡見の枕詞に射目をいふべくもなし。今思ふに、いめは後にまふしといふ物、狩人のかくれ居て鳥獸を射るものなり。○いめのいは射、めは目にて、其かみより鳥獸を見るべく構へたる物なり。まふしのまも目なり。ふしは柴なり。小柴など折りかこひて身を隱すやうにしたるなり。文選射雉賦に、射翳と有りて、翳はかくるゝ意、まふしに隱れて鳥をも射たりしかば、射翳樹て鳥見とつゞきたるなり。いめ人のふしみといふ條もあるは、射翳の隱なる人の柴より鳥を見ると言ふつゞきなり。又いめは射部の義ならば、いめ人といふ稱は有るべからず。宍人部などのやうに、人部とは續くとも、部人と續くべくもあらず。

くれなゐのあさけのうら、考に云ふ、卷十一に、「紅之。淺葉之野良爾。苅草乃。云々。」こは卷十二に、「紅 薄染衣 淺爾」また、「桃花褐淺等乃衣 淺爾」とやうに、あらそめともい

さゞ浪や志賀の濱松古りにけり誰世に引ける子日なるらん

とあるは、引栽ゑし意なれば、はやう實を失ひしなり。

枕詞は、冠辭考によりて義をもとむる當時のならひなり。長流の燭明抄などいふも聞ゆれど、得がたきにや、人多くは翫ばず。考の說心ゆかぬ所もあれど、大かたはよろしくて、岡部氏の述作は、これらをすぐれたりとす。此頃ものの序これを見て、二三條その非を摘みて書きつく。又の序に又も書きつけてん。いめたてて、　考へ云ふ、萬葉卷八に、

射目立而跡見乃岳邊之瞿麥花總手折吾者持將去寧樂人之爲

こはまづ取りすべて言はゞ、御狩人をたてて鳥獸の跡どころをとめて射さする意なり。そを委しくいはんには、卷六に、

見芳野乃。飽津乃小野笑。野上者。跡見居置而。御山者。射目立渡。朝獵爾。十六履起之。夕狩爾。十里蹋立。

卷十三に、

高山。峯之手折爾。射目立。十六待如。床敷而。吾待公。云々

年中行事祕抄―禁中の年中行事の註說書、著者不詳

故鄕の野邊見に行くといふめるをいざ諸共に若菜つみてん

子日しにまかりける人のもとに遲れ侍りてつかはしける、みつね、

春の野に心をだにもやらぬ身は若菜は摘まで年をこそつめ

と有り。五首こと〴〵く若菜をよみて、二首は小松をよまず。正明これに心附きて、子日に若菜をみづからも詠み、人にも敎へて詠ますする事なり。七種の菜は、すゞな、すゞしろなどとは違へる物なり。年中行事祕抄にや有りけん、白河院の仰に、松を添へて奉るはひがごとなり、菘と書きてなと訓むなりと宣へりし事みえたりき。其頃はやう松は食はざりしなり。信濃國少縣郡の農夫に問ひし事あり。かの國にては松を食ふ。四月ごろ松の若芽の出でたるを折り來てゆでて食ふ。松脂のけは無しといふ。そは赤松の芽なりしか、聞きもらしたり。赤松は尾張、美濃にてひめこと云ふ。松の雌品なり。木も良材にて、柱にして檜にまがふばかりにて、すべて脂なし。その今年計もえ出でたる若苗は、引きて食はんにも軟かにて、脂あるべくもなし。味こそすぐれざらめ、食ふに堪へたる物にはあるべし。今時好事の人、子日に野外に遊びて小松は引けど、何にすべき物とも知らず。俊成卿歌に、

まつ—松、待つ

と云ふはあらじ。夏ならば反舌鳥なりと言はましを、さへづる春はとあればかなはず。ある人は、百鳥といはんも同じくて、くさぐ〳〵の鳥なりといへり。さる事にや。

此ごろの歌よみ、子日といふ題に、小松をよみて若菜をよまず。子日遊の仔細を知らざるなり。後撰集に、子日の歌五首ある、小松のなき歌もまじれゝど、若菜よまぬはなし。小松も菜の一種なり。されど千年よろづ世とめでたるものなるゆゑ、とりわきたるにて、つひには小松引くばかりのことに人おもへり。かの後撰集の歌、朱雀院の子日におはしましけるに、さはること侍りてえつかうまつらずして、延光朝臣につかはしける、左大臣、

　松も引きわか菜も摘まずなりぬるをいつしか櫻はやも咲かなん

院の御かへし、

　まつにくる人しなければ春の野のわか菜も何もかひなかりけり

小松引きになんまかると人のいひければ、

　君のみや野邊に小松を引きにゆく我もかたみに摘まんわか菜を

宇多院、子日せんと有りければ、式部卿のみこを誘ふとて、行明親王、

摩訶摩尼―共に佛語にて摩訶は大、摩尼は如意珠と譯す、極めて立派なる意にいへるにや

燕石―玉に似て非なるもの

三船の山―大和吉野郡にあり

　　あしびきの山井の水は氷れるをいかなるひもの解くるなるらん

淸少納言、

　　うは氷あわに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりぞ

と有り。かゞみは氷の面のきら〳〵としたるを譬へたり。

古今集の祕訣は、摩訶摩尼のつたへありて、やごとなきあたりにては、燕石を寶とし給はず。その緣なき我ともがらは、これかれの書にあはせて、斯くもやあらんと推量事するわざなり。呼子鳥はつゝ鳥なりといふ說よろしきが如し。つゝ鳥は、春の末夏のはじめ、麥畑などの間に居て鳴く。大かたは夜鳴く。晝も夕ぐれ明けがたなどに鳴く。人よぶ聲に似たりといはゞ、これいと似合しけれど、萬葉集に、

　　瀧のうへの三船の山ゆ秋津邊に來鳴きわたるは誰よぶこ鳥

とあり。此鳥飛びながら鳴くものにあらねば、此說かなはず。いなおほせ鳥は鶺鴒なりといふ。折から似合し。されど大和物語に、とし子、千兼を待ちける夜、

　　小夜更けていなおほせ鳥の鳴きけるを君がたゝくと思ひける哉

とあり。鶺鴒の鳴くをたゝくとは言ひがたければ、なほ異鳥なりけり。百千鳥は鶯なり

内宴―正月三十日に禁中にて行はるゝ内々の節會

除日―十二月の大晦日

故鄕云々―唐詩の句、前に「旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然」

草の枕―旅寢

紐鏡―氷の異名

と春いひけちたる昔の人も、ひたおもむきなるかたくな心もて、物のあはれ知りがほにと、惡きまでなん。久かたの雲の上人は、內宴臨時客など、うるはしうもをかしうも樣樣なりとか。さらぬ田舍の藪陰にも、若菜摘み小松引きて、こと古りたる千年萬世ながら、あかずめでたし。哀ともをかしとも思はるゝは時となき物ながら、猶初春こそ。

品川に一年ばかりありての除日に、いそぐべき事もなければ、枯れわたりたる庭の面をながめつゝ、くれ過ぐるまで格子もおろさず、「故鄕今夜思㆓千里㆒。霜鬢明朝又一年」とひとりごちつゝ、此年ごろ親にもまさりてたのみ聞えし兄弟にもわかれて、草の枕も我宿のやうにて、世にまじはらねば、心やすき方もあれど、ありしにも似ぬ身のさま哉と、あはれに心ぼそし。池の水氷りわたれるに、

我宿とすみなす池の紐鏡うつりかはれりこれや世の中

あやしき歌なれど、しのび難くて。

其のついでに書きつくべし。ひも鏡とよめる歌、近き物にも見えたらんを、例の物忘する癖にて、すべて覺えず。されどよみ來し事論なければ、今もよむべし。ひもは氷なり、實方朝臣、

年々隨筆 五 甲子

朝夕とうつり行く一年のほどに、折にふれ時にしたがひて、あはれにもをかしうも覺ゆる中に、初春の景色こそいさましう心ゆく物はあれ。何事か昨日にかはれると打眺めやる初空、いつの間にか霞みわたり、明けゆく雞が音まづいさましう、門毎に松切りたて、竹さし添へて、春風の音づれ待ちつけたる、いとうれし。梅の花いとめでたし、香はもとよりいはん方なし、色も羅敷のをとめの月のもとに立てりけん昔おぼえて、艶にやさし。大かた世の人は櫻をのみめでたき物にする、それまことにめでたけれど、桃、海棠など、及ばずとも傍ある心地するに、これは異木の冬籠りたる中に、匂ひいとこよなくて、氷のひまより打出づる波ならで、立ちならぶ花もなきは、心とかりけりと思はるゝがをかしきなり。此かげにぞ黄鸝はかくるなる。この鳥はた打ちとけて聲をしまぬ後の日數よりも、尚こゝろもと無げなる初音こそ、けにくゝてゆかしけれ。柳が枝もやうやうに淺緑なる絲打靡きて、眉ごもりたるほどいとをかし。花のひとへに咲くばかり

羅敷―羅浮に作るべきか、隋の趙師雄が羅浮の梅花村にて月夜夢寐恍惚の間に美人に會せる話、柳宗之の龍城錄に見ゆ

黄鸝―うぐひす

眉ごもり―めぐみて未だ開かざるをいふ

比興—事を物に托して打興ずる事

擧句—連歌の最後の句

の御名乘をば家隆とこそ、知りまゐらせて候へ。世にも又さこそ申し候なれ」と陳じたりける、比興の事、此卿聞かれて、入興せられけるとなん。此物語古今著聞集に見えたり。そのかみ打まかせて字音にとなへし事知るべし。

物毎の果の事を結句といふ。四五百年來の消息に多く見ゆ。詩の結句よりうつれり。今はあげくといふ、連歌の擧句よりうつれり。

享和三年癸亥十二月十五日成三一卷一丁　　正　明

江談抄―大江匡房の著

などぞ見えし。

人の實名を字音によぶ事、江談抄に、

天曆皇帝召二道風朝臣一勅云。我朝上手何人哉。申云。空海敏行。時人難云。於二大師御名一可レ奏二音讀一也。敏行事ハ。猶止志由岐止奈牟可レ奏。云々

この外に道風、佐理、行成みな能書なり。基俊、俊頼、俊成、定家、家隆みな歌人なり。平家物語を見るに、實定、家成、雅頼など何となき人にもいへり。定家、家隆を限として、其後はたえて聞えず。

壬生二品家隆の家にて、ある人の子ををとこになす事侍りけり。隆祐朝臣の子になして、やがて彼朝臣加冠はしけり。名をば何とかつくべきなど沙汰しけるを、あつゝの三郎爲俊といふ田舍侍聞きて、進み出でて云ひけるは、「此殿に御一家は、みな隆の字を名のらせ給へば、いへたかと附け參らせらるべくや候らん」と、ゆゝしくはからひ申したるげにて言ふを、人々わらひ訇る事限なし。爲俊が父圖書允爲弘聞きて、「いかに汝はかゝる不思議をば申すぞ。殿の御名乘をば知りまゐらせぬか」といへば、「いかでか知りまゐらせぬ事あるべき」といふ。「さるにはかゝる事を申すか」といはれて、「さも候はず、殿

ざまに隠し入れたり、

侘びつゝは汝だに君にとこなれよかはさぬ夜半の枕なりとも

と見ゆ。磁器の枕をいふに似たり。今磁器うる家を茶碗屋といふ、よしなきにあらず。

平野社はそのかみ殊なる御尊崇なりけるを、今も其定なるべけれど、御社のいたう荒れまどひておはしますがかしこう心ぐるし。平家の氏神にておはしますに、今は源氏の御代なれば無沙汰なりなど民間にはいへど、さる事にはあらじ。自らゆゑある事なるべし。平家の氏神たる條は、何くれの書どもに見えたるを、抄してもおかず、たゞ一つ二つぞある。今鏡に、

今又平のうちの國母かく榮えさせ給ふうへに、おなじうちの上達部、殿上人、近衞づかさなど多くきこえ給ふ。云々

平野はあまたの家の氏神にておはすなれど、御名もとりわきて、この神垣のさかえ給ふ時なるべし。清輔朝臣集に、

平家の人のつかさなれるよろこびに、

おひのぼる平野の松は吹く風のおとに聞くだに涼しかりけり

し物なるを、兼時が家に茶碗のありけん、いぶかしき事なり。もし磁器の通稱にはあらじか。

前栽とは、物語などにも草花の事にのみ見ゆれど、後撰集に、「前栽に紅梅を植ゑて、又の春おそく咲きければ、云々」又「家より遠き所にまかる時、前栽の櫻の花にゆひつけ侍りける、云々」十訓抄に「前栽の中の楓の木、二俣に是程きりてこと、云々」なほ花紅葉の木にもいふなりけり。

親鸞聖人の門徒の在家、朝夕の看經に、上下の上ばかりを著る有り。又輕業力持のはやし方、上下の上ばかりを著るををかしき事に思ひこしに、十訓抄に、

　大原の聖達四五人ばかり連れて高野へ參りけるに、河内國石川郡に留りけり。家主は紺の直垂ばかり著て、袴は著ず。云々

とあり。昔もさる例ありけり。

茶碗を磁器の通稱なりといふ事又一條、十訓抄に、

　近くは德大寺の右大臣、うちまかせては言ひ出でがたき女房のもとへ、師子の形を作りたる茶碗の枕を奉るとて、うすやうの紙をやりて、此歌を書きて、思ひかけぬは

蘆庵―小澤蘆庵

散木―散木奇歌集、藤原俊頼の歌集

ひさぎ―楸、木の名、梓の類にて幹直に延び、葉はやゝ桐に類し、夏の頃穗を出して小さき花を開く、材は堅くして琴碁盤を作るに適す

事のかずつまんとすなる重荷にはいとゞ小づけをこりも添へなん

とあり。近き代蘆庵といひし人、

　やせ馬に重荷にこづけ附け添へて鞭をおほする世にこそありけれ

とよめり。此人つねに古今體といふ事を唱へしかど、これはたゞ散木の口氣なり、いかが。又これは時政を憤りたる述懐ときこえたり。さる隱遁の身にて何事か憤ろしかりけん。

清輔朝臣集に、寒夜千鳥。

　ひさぎおふるあその川原の川おろしにたぐふ千鳥の聲のさやけさ

そも〳〵山おろしは山より吹下す風なれば、おろしとはいふを、川おろしとはいかゞ。英雄人を欺くなり、例とも證ともなすべからず。

江家次第春日使のところに、

　中關白爲レ使。於二兼時山崎家一飲レ水。兼時依レ無二土器一。以二茶垸一獻レ之。關白有二疑色一。兼時得レ意乍レ給二茶垸一渡レ前。云々。未レ用之由歟

とあり。此比茶は僧房の物にて、ことなる法會の饗ならでは、これを設くる事はなかり

勢語臆斷―僧契沖の伊勢物語を註釋せる書

輕殆―少しあやぶむこと

小附―ある荷物に別に添ふる小き荷物

高砂住の江の松もあひおひのやうに覺えとは、老後の述懐なり。相おひとは、もろ心に思ふを相思ひといふ相にて、もろともに生出でたる意、俗にいふおない年なり。これ本居先生の説なり。此先生は古學者となのる眞淵の流にて、延約相通をむねとして詞を解かるゝ中に、斯うおだやかなる說の出來るは、めづらかにめでたし。

勢語臆斷に、「さすがにあはれとや思ひけん、いきて寢にけり。夜ふかく出でにければ女云々」とある所の注に、源氏物語の末摘花に、「何事につけてかは御心もとまらん。夜ふかく出で給ふ」とある文をひけり。こは夜ふかく出づる例證なるべし。すべて注釋は、注釋なくてはきこえ難きふし、例證なくては輕殆の殘るふしにこそ物すべけれ。夜深く出でにければに、何の注釋をか俟たん、何の例證をか俟たん。近頃の注釋には、かやうの無益の引文して、物々しくしたる所多かる物なるを、力いりたりと見おどろく事なかれ、初學の人たち。

春の神をさほ姫といふ、佐保は山の名。秋の神を立田姫といふ、立田は山の名。奈良の京の東西にありて、みな高山也。されば奈良の時代の諺なる事知るべし。

重荷に小附といふことわざいと古し。後撰集に、村上御製

あさまなる―浅はかなる

ぬまどひなり。こゝの京を洛陽長安といふ事は、桓武の御時都定め給ひて、左京を洛陽城、右京を長安城と名づけられたる御制のまゝにいふなり、さらにわたくしの稱呼にあらず。これもとから國をうちつけに學びたる名にて、あさまなる心地はすれど、何事も吉例を逐はるゝが朝廷の恒典なるに、この二つはから國にてめでたき京の名なれば、それをうつされたるにて、これ故實なり。更にあさまなる事にはあらず。それよりも、この詩人の牛込を牛門、小石川を礫川などいふこそ片言はあれ。おのれひとり心得て、人にはいづくの事とも知られず。

契沖が伊勢物語の注に、

　譬へば比叡の山を二十ばかり重ねたらんほどして、とある所に、はたちは、源氏にも、とをはたみそよそと書けり。諺には人の年を數ふるにのみ言ひなれたれど、思へば年にのみ限るべきにあらず。

と言ひて、はたとは云々、ちとは云々と言はず。この說はをさなけれど、解きざまは當用をつとめたり。大かた言葉はかやうに解くべき事にて、事に用ふるに便あり。あながちなる延約通用、ふようなる事のみ多かり。

堯舜云々―新語に出で、之に對して「桀紂之民可比屋而誅」といへり
くさはひ―種、材料
四凶―渾敦、窮奇、檮杌、饕餮

とあり。これ延喜式、また長寛の大神宮御裝束送官符などに見えたる、蟹目釘と云ふ物なり。釘かくしを作り付けたる釘にて、今時はビャウといふ。蟹の目の細く高く出でて、末の丸く大きなるか、その形の似たれば、斯くいふなるべし。

「堯舜之民比屋可レ封」といふは、から人の例のそらぼめなるを、世々の物しりたち、ともすれば口に誦して、當時を譏るくさはひとするは、いとかたはらいたき事なり。そはたゞ此一句を解して、堯舜の世を解せず。もし此説のごとくならば、瞽叟も象も誰が民ぞ。丹朱商鈞は誰が子ぞ、四凶は誰が臣ぞ。事迹にあてゝみれば、忽に知らるゝ事にて、臣子すら斯く不肖なり、いかでか比屋可レ封事のあらん。富士の山いとめでたけれど、さりとてうばらも生ひずしてはあらず。いかに時政はめでたくとも、惡者もいでくるは自然の事なり。さらばさてあれと言ひては、惡しき人いよ〳〵はびこる故、或は教へ或はこらして廣らざるやうにする事なり。その敎には令なり、こらしには律なり。經濟の意律令をおきて其術ある事なし。學者の心をとゞむべきわざならずや。

京都を洛陽、長安といふを、物しり人のよくそしる事なり。さるは唐國に此二つの京名高きゆゑ、こゝの京をもそのまねして、何となくいふ事とおもふ故なり。そは中々物しら

そほづ—案山子

けに—更に一層

蟹の目—かなめ

る所あれば、いと古より言ひ來しなりけり。後撰集に、

男の物など言ひつかはしける女の田舍の家にまかりて叩きけれども、聞きつけずやありけん、門もあけずなりにければ、田のほとりにかへるの鳴きけるを聞きて、

足引の山田のそほづ打侘びて獨かへるの音をのみぞ鳴く

淸輔朝臣集に、

女をうらみて、今は遇はじなどちかごと立てて後、もとよりけに戀しかりければ、靑きすぢある帋にてかへるの歌をつくりて、書きつけてやりける。

誓ひしを思ひかへるの人しれず口から物をおもひけるかな

扇のかなめといふは、かのめの訛れるなり。かのめは蟹の目を略きたるなり。行宗卿集に、

內裏にて、大夫のすけの、扇の要かためてとて遣したりしかば、かためて遣すとて、

蟹の目のはなるゝ度にいとゞしく君が心のうしろめたさよ

返し、　大夫のすけ、

今日よりは君が要にかたまりぬ人のあふぎは思ひはなたん

夜ひかる玉―名玉夜光玉

箕裘と聞ゆる業―禮記「良弓之子、必先爲ㇾ箕、良治之子、必先爲ㇾ裘」父祖の業を承ぐ義

點つかるまじく―批難さるまじく

久留金之助殿の御そひ臥も、文月ばかりよりわづらひて、葉月、長月やう〳〵弱りもてゆきて、神無月のはじめになん亡せ給ひし。五七日は霜月十日ばかりなり。金之助殿の母君後の御いとなみし給ふを弔ひきこえて、

衣手のかわく世やなきかきくれし時雨は雪と日數ふれども

と詠みて參らせつ。又先生のをさない君、これはまだ二つにて、美しうつぶ〳〵と肥えて、此ごろ何となき物語し、高やかに打笑ひなどして、らうたき事かぎりなし。男子はこれひとつにてさへあれば、夜ひかる玉とこそもてかしづきしか、行末はおのれ力を盡して、箕裘と聞ゆる業も、すべて何事も點つかるまじくうしろみたてんと思ひつるに、雜熱などいへば心さわぎして、いかでこたみ恙なくなど祈らぬ神も佛もなし。ゆゝしき御大事ぞなど醫師どもの打かたぶけば、いとおそろしけれど、さりとも異なる事あらじと、神佛をたけきものに思ひつるに、三日ばかりありて、たゞ消えに消え入り給へば、心地ほれ〴〵として思ひわくかたこそなかりしか。此時はあまりの悲しさに歌などもいでこず。

蛙をかはづとのみ歌によみて、かへるとはをさ〳〵言はねど、萬葉集に楓を蝦手と書け

えやみ―流行性の悪病、疾

人の限―人だけ

魂をかへす香―反魂香、漢の孝武帝の故事

今年はしかといふえやみおこりて、高きいやしきみな病みのゝしる。卯月ばかりよりの事にて、五月水無月家々おちず疾みつゞけたり。この病は、生ける限にたゞ一たびわづらふ事にて、二十年餘物へだてておこる事なり。さきの度にはおのれもわづらひつるを、まだ幼きほどにて、はか〴〵しう覺えねど、世に知らず苦しかりしとばかりは猶忘られず。それは安永五年の事なりといへば、二十八年さきの事なり。さやうにまれ〴〵にのみあるものなれば、醫師なども物なれずてたど〴〵しうのみあめり。さきの度に專療治せしは、此比老いしれて物の用にたつは少く、此頃むねと療治するは、さきの度はまだ書生にて、その術をよくも覺えず。されば藥もよくもあたらぬにやあらむ、人のおほく死ぬめるは、せんかたなく悲しき事なり。文月のほどはたゞ死にに死にて、野邊の煙も天雲とたなびくばかりなりし。世の常なきは今にはじめぬ事ながら、これはたゞ若くさかりなる人の限わづらふ病なれば、いと悲しき事のみ多くて、世もかくて盡きぬるにやと覺ゆかし。おのれが親しきあたりにも、悲しき事ども多かり。加藤淡路守殿の北方うせ給ふ。その比薫物まゐらせて、つゝみ紙に、

　魂をかへす香のそれならで夜半の煙やおもかげに立つ

等持院―足利尊氏の謚
鹿苑院―足利義滿の謚
檢斷―檢斷職、檢斷の事を司る武家の役名

とり過ぎたる事ぞよ。大酒呑むけにや、あまりに肥えていみじげに見えしかば、中風などの起らんがゆゝしさに、湯藥をも服せよと思ひて、用意せよと言ひつるは」とて、笑ふに、心おち居て、さては事なかりけりとて嬉しかりけりとぞ。

殿といふは、敢て其身をさゝず、居所をさして呼ぶ禮節なり。物語ぶみどもに多くみえていと古し。樣といふは方角をさす。西ざま、東ざま、とざま、かうざまのさまなり。五百年外の日記どもに、洞院樣、西園寺邊などやうに書ける常なり。この樣といふは邊といふに同じくて、方角をさす。そはたゞ外々のうはさする所にこそ言へれ、まさしくその人に對して、樣とも邊ともいひし事はなし。室町殿の比より、等持院殿樣、鹿苑院殿樣などいふ事きこえて、後には字體によりて尊卑をわかつやうの事出來たり。この殿樣と重なりたるさまは、もはら今樣のおもむきなれど、なほ方角をさす本の義遺りていとよろし。茶壺といふ狂言に、「判斷なしてたび給へ、所の檢斷殿樣」とうたふ。世上なべて言ひし事なるべし。今なべてはきこえねど、尾張美濃の民間に、庄屋殿樣、醫者殿樣、舅殿樣、禰宜殿樣といふ事あり。此四種の外をさ〳〵聞えず。なま心ある者は、詞重なれりとて恥ぢていはず、たゞ賤民の口にのこれり。これ三四百年來の古風なり。

物け給る―物うけたまはるの約

かうじ―勘じ、しかり

はそれもしたりし事もあれど、今はいかでか。たゞ賽なげ筒とるより外のわざは何事もし侍らず」といふに、「ひまんし給はざらんに、庄屋殿樣のいたうひまんせしな、ゆゝしき事なりとは、いかでか宣はん。さても身の置所なきまでひまんするやうやはある。あさましう」など言へば、「天道神明おはします、ひまんしたらば斯くいふ舌も腐れぬべし」「猶宣ふよ。心の限ひまんしながら、ひまんはせずなど我等を欺きて」と、すべて口あかすべうもあらず。「さるにても斯くておはしまさば、搦められ給ひていと辛かりなん。まづ二ケ月ばかりは隣國に忍びておはせ。世上のけしきとりてやがて告げ申さん」とて、出し立ててやる。月こえても何事あるべしとも見えず。子分等いと心得ず思ひて、其中に物よくいふ男庄屋がもとに行きて、「物け給る。こゝにおはしますか」といふ。「何事ぞ」と問へば、「さいつ比虎は御勘當にて今は家に侍らず。母など年老いて歎くが理に心ぐるしう、朝夕の煙も心ほそうのみなり行くに、いとゞあはれに思ひ給へられ侍り」といひて、まことにわびしげなり。庄屋、「げに此頃は虎が來らざりつるを、心もつかで訪ひもせざりき。さばかりかうじつる事もなかりしに、いかでさは言ふらん」「肥滿しつるがくせ事と仰事侍りつと承り侍り」といふに、をかしくて、「嗚呼のやつかな。肥滿とはふ

いふに、虎顏の色青くなりて、かしこまりたるやうにて出でぬ。さて家にかへりて、心の鬼にいと恐しければ、子分ども呼び集めて、「今日庄屋殿樣にまうでつるに、斯う〳〵なん宣ひつれば、やすき心地もせず。そも〳〵肥滿とはなでふ事にか」といふ。子分ども、「おのれらも知り侍らず。されど身のため惡しかる事と宣はんには、ゆゝしき大事なり。明日ばかりには搦められさせ給はんにこそ。いかで隱し奉らん」と言ふもあり。「常もかなしうし給ふが、かゝる大事に先づおどろかし給ふ。うれしき庄屋殿樣の御心ざしかな」と、口々にいひて、死ぬばかり恐しと思ひたり。「大かた親分の不當におはすなり。博奕などは然るものにて、我等にもしのびて、ひまんをさへ仕つることのあまりけしからず」など責められて、「あなかま給へ。近きほどは惡事にも用意を加ふるほどに、ひまんとやらん聞知らぬ業などいかでかし侍らん。抑ひまんとは何事にかあらん。いかで物しり人にあひて聞定めてしがな」と打歎きつゝおぼつかなう思ひたり。「それ聞きて何にかはし給ふ。何わざにても罪は罪なり。身のため惡しかる事ぞ、用意せよとありつる御詞にて、はやう事は定りぬ」と言ひてうけひかず。「それもげに理にて、たゞわびしきは虎が身の上なり。さるにても肥滿とはひはぎ人かどはしなどの事にやあらん。わかき頃

心の鬼—疑心暗鬼の意、自らの思ひなしにて自ら苦しむをいふ

かなしう—慈愍を掛ける意

あなかま給へ—あゝやかましいわい

ひはぎ—追剝

かた―繪

せうそこ―訪れ

くとく」と責めもよほして、さて歸りぬ。出でて去ぬるかげ見送りて、物狂高やかに打笑ひて、「嗚呼のやつかな。おのれを恐るゝと思ふよ」といふ。「さはなど今は懼ぢつらん、いと苦しげに見えつるものを」といへば、物狂、「さる所以ある事ぞかし。おのれむかし熊野に住みし比、文覺上人の荒行すとて、那智の瀧にうたれておはしつるを見たりしに、氣色いみじう、顏つきたけく怒りて、いとこそ恐しげなりしか。かれが肩腕にそのかたを畫きたるを見れば、たゞ其折の心地して、身にしみて恐しさに、覺えずかしこまるにこそあれ」と答へしかば、人々あきれながら且はうれしうて、かの荒行の繪を物にかきて、壁におしつけて置きしかば、物狂見るたびにいみじうおびえて、遂におちにけり。

或里の古ばくちうち、名をば虎といふ。子分なども多く持たりけらし。その里の庄屋、かしこきたばかりある者にて、世にむべ〳〵しく思はれ、おほやけ人たちも、さる輩の中にはたのもしきものに思して、何くれの仰事などあるをうけたまはれば、やがて道理のまゝに糺しなど、いとかひ〴〵しくて、其里あたりの里々までも、勢あるものなりけり。ある日虎、庄屋がもとに行きてせうそこせしに、庄屋出であひて、「いかにぞ虎、おのれいみじう肥滿したりな。しか肥滿して身のためよからめや、用意せよ。あなゆゝし」と

夕つかたいとゞ狂ひまさるに、此あたりの鳶の者何某とかや、喜八が家など建つる時は、常につかはれて、世をわたるものなり、かう物狂すと聞きてとぶらひに來たり。腰のあたりに著るものけしきばかり引纏ひて、かみもしもも裸のまゝにて、つと入り來て言ふやう、「いかにぞ喜八は物に狂ふといふは實か」と言ふに、喜八かしこまりて、「さる事侍れど、これはたゞ假初なる事に侍るを、こと〴〵しく人の申しなすにや」と、ふるひ〳〵言ふさま、いたう恐れたりと見ゆ。此男はつね喜八が領の下にて女子をも養へば、おのれこそおち從ふ事なれ、打ちかへし斯うするがいと心得がたけれど、さばれ威してん、たま〳〵おつる事もこそあれとたけく思ひなりて、いたう怒れるさまして、「なでう狐が此喜八を惱すらん、疾くおちなんや、さらずばからきめ見せん」と言へば、いよ〳〵かしこまりて、「今おち侍りぬべし、いたうな責め給ひそ」と、手を押しすりて詫ぶ。汗あえ涙おとして、いと苦しげなり。さらば必ずと言ひて出でて行く。跡にて物に狂ふ事ただ同じさまなり。家のうちの人々、など斯う恐れつらん。猶物あざむく狐のしわざかと思ひ居り。彼男も同じやうに心も得ねば、又の朝疾く來たり。喜八見るより恐れかしこまるさま昨日に異ならず。さては欺くにはあらじと思ひて、「などかおちざらん、たゞ疾

玉海—藤原兼實の日記

いたはる事—病氣

ねぎ—願ひ

はあなれど、烏帽子引きいれずして人などに見ゆる事はさら〳〵なき事にて、時忠の大納言の月代のすきかげ簾中より見えしとて、荒涼なる事に玉海には記し置き給ひしを、今はなべて烏帽子きるものは無く、月代もひかるばかり剃りたるが禮にて、さらぬ折は、此比いたはる事侍りてなん、長髮にて無禮になどかしこまり言ふよ。時世を歴るまゝにかはりもて行くさま、斯うまでやはと驚かるゝばかりなり。

文身につけて思ひ出せし事あり、今は六年ばかりにならんかし、麻生の谷町に喜八といふ工匠あり、一日たちまち物狂をしてのゝしりさわぐを、妻おどろきて、あたりの人々に告ぐるに、皆來つどひて、制すれどさらに叶はず。これが言ふやう、「けがれたる木して宮居立てたる、いみじう腹だたしきに、おのれが世の限かいそひて物に狂はせん」と言ひつゝ立騷ぐ。人々せんかたなくて、其ゆゑをよく求むれば、何某殿と申す大名おはします。その里第の稻荷の社を修理せられたるに、喜八その事うけたまはりて造りたるが、穢にふれたる木を兩三ばかりまじへ用ひしなりけり。「そは思ひかまへてせし事にも侍らず、心つかでの怠なれば、さしも惱まし給ふな。此物狂だになほり侍らば、やがて取りかへ清め奉らん」と、かしこまりねぎ申せど、ゆるぐ氣色もなくて、二三日は過ぎぬ。

縫腋—袍の兩腋の下を縫ひ分けて裔のあるもの天子及び武官の雜服なり

半臂—束帶の時袍の下に著る袖の殆ど無きやうなる短き衣

グハエン—江戸人歌合に、「臥煙、ふり廻す纏[マトヒ]の露に影見えて火の子まじりに月ぞちりかふ」

鳶の者—消火夫

傳に、

取レ笏之後。不レ顯二兩手一。左手之上。覆二其袖之端一。側レ手隔レ袖取レ笏。

と見え、又辨官抄に、「欲レ揖之間。以二左右手一把レ笏。不レ顯レ手」また

持レ笏事。右手把レ之。不レ令レ動二搖笏一。以二左手一引二右袖鰭一天。人差指與二中指一之中引

夾天拳ヲ蔽レ爪。人差指許令レ出也

と見ゆ。この類なほ多かれど、思ひ出づるまゝに一ツ二ツ引きつ。およそ袍の下に襲ね著るも、表袴の下に大口著るも、指貫の下に下袴きるも、又縫腋の下に半臂著るも、皆ほころびて膚あらはさん事をおそれての用意なり。しかるに今の江戸ざまの諸家の召供は、侍とあるものよりして、下衆男にいたるまで、みな脛高くかゝげて、赤肌をあらはすを、禮節とするならはしなり。亂世などにはかやうにせしがつき／＼しく見えしを、今もなほ其のならひのまゝに物するなるべし。下衆のかぎり、グハエン鳶の者などいふにいたりては、常裸にて、かひな肩のあたりに種々の繪を彫入れて、墨くろ／＼と見ゆるに、青く赤く色どりなどして、父母の遺體をきざみて風流する、あさましき事なり。こは文身といひてから國人も卑むる事ぞかし。又そのかみは衣大口など打解けて居る事

立君―辻君

おちまかせて―一口に

朝野羣載―三善爲康撰、官府に關する文章を載せたるもの

とあり。下衆なども衣かづきといふをして、あらはに人の顔見るまじき用意せし事なり。下りたる世の物なれど、七十一番の職人歌合に、立君のかづき著たる圖あり。これにても大かた世中のさま知られたり。正明はじめて京に物したりしは寛政のはじめなりき。其時は被衣著たる女を時々見つるに、四年ばかりさきに行きし時は、さやうの人には一人もあはず。又尾張國などにても、六七十年の古は、人みな著たりしものと言ひつたへて、古き家には今もなほ持たり。人の身まかりし時とかう物する寺、あるは三昧などいふ所まで、したしき限は男女みな送ることなるに、女は白きかづきを今も著るなり。名も打ちまかせてかづきといへば、此白かづきの事にて、凶服の名のやうになりにたり。又白かづきに對へて、むかし著たりしたゞのかづきを染かづきと唱ふる、主客違ひたれど、なほ餘波あり。名古屋にては、田舍めきたりとて、此白かづきも著ぬ事となれるは、くちをしき事なり。しかるに此江戸などの女どもは、ことさらに頸をひろくあけて、肩までも見ゆるやうにす。又袴著ぬはなべての事なれど、こゝには衣どもを一つまへといふに著て、裾を蹴出すほどに、歩むたび〳〵脛しろく見ゆる、いとしどけなし。昔も男は顔は隱さねど、顔をおきては、指の先をもをさ〳〵あらはさず。朝野羣載に載せたる進退

けさうなる所―あらはなる所
みそかに―密に
曹司―女官の部屋
袿―婦人の禮服として、衣の上に著し服
伊周公―中宮定子の御兄大納言伊周

を得ざる所を出入するに、筵道など敷きてけさうなる所をわたるには、よろしき人は几帳さゝせ、さらぬは顔に扇をおしあてて面隱する事なり。額髮といふは、今びんといふわたりの髮を、貌のかたへ眉尻のほどまで解きかけて、末を片方搖りこしたるものなり。かくするは、貌なかばは髮のうちに隱れて片そばよりは見えざるやうにとの心しらひにこそ。その末をそぎて短くして、ともすれば顔へはら〱とこぼれかゝるやうにしたるは、扇なども無くてわりなき時、ふりかけて面がくしせん料にやあらん。大和物語に、

おなじ帝、月のおもしろき夜、みそかに御息所たちの御曹司どもを見歩かせ給ひけり。御供に公忠さぶらひけり。それにある御曹司より、濃き袿一かさね著たる女のいときよげなる出來て、いみじう泣きけり。公忠を近く召して見せ給ひければ、髮をふりおほひていみじう泣く。云々

枕草紙に、清少納言が中宮に初めて參りたるほど、伊周公にとらへられて恥かしかりし事書ける所に、

かしこきかげとさゝげたる扇をさへとり給へるに、ふりかくべき髮のあやしささへ思ふに、云々

故事の—「の」文字「を」と解すべし、前後にも類例見ゆ

見馴れたる心より疑ふなり。しか古に昧く今に惑ふ知見にて、古き書とかんとすとも、故人故事の論ぜんとすとも、その說の當るべきやうあらましや。古學者と口たけく言ふ輩のいへる事を聞くに、萬葉など唯いさゝかばかり、おのが心得たるあたりの事に、今の世の事などまじへて言ひのゝしり、これ學問ぞ、これ見識ぞと心得居るなる、かたへより見ては、あなかたは、今すこし書讀ませたらんには、斯うまでつたなくはあらじものをと、哀に見ゆるぞかし。返すぐ〳〵もこの沿革をよくあきらめんと思ふべきなり。しかはあれど、此事見識といふ物大きくて、博く書をもよみあきらめでは爲し得ざるわざなれば、いと〳〵難くなん。正明この心つきしより、いかでその大概を書きて傳へましと思へど、才つたなくて心得かねたるふし多かるうへに、家まづしく身いとまなくていまだえ物せず。代々の先達たちも、物まなびの古今にわたらんことを惡しとやは思へる。されどこれをむねと心懸けよといふ事の言へる事のきこえぬは、等閑なる事なり。今斯う露ばかりおどろかしおくも、後進の扶とならざらんや。

中ごろは、赤肌の見ゆるを殊の外に恥ぢし事なり。女は兄弟夫などにも、をさ〳〵さし對ひては見えず、几帳へだてて物語などせし事なり。禁中など、又里にても、やむこと

本鳥—髻

大饗—二の大饗は正月二日禁中にて、中宮と東宮とより群臣に饗を賜りしと、大臣大饗は大臣任官の披露宴、何れにしても感宴をいふ也

賤者との著るものにて、もと立ちはたらくに落冠せじの用意なり。老懸といふ名は、老人の本鳥などほそう落ちたらん人は、文官にてもこれを懸くべきにやあらん。又かけ緒といふは、冠を塗りかためたる後の物にやあらん。こは蹴鞠の時の具と聞ゆるを、有職の中には、常にも懸けらるゝといふ、ゆゑある事にや。

學問に志ある人は、古と今とかはり來し有樣をよく知り得んと心がくべきわざなり。古の事、今より見てはいとけしからぬ沿革あるものにて、事によりては、ゆくへも知らずうつり來たるものあり。然るをたゞ文章のうはべと、今の世のさまとを思ひあはせて、大かたにのみ心得居るゆゑ、かすめる夜半の月見るやうにて、おほ〳〵しき事のみなり。たとへば、往昔諸家の侍といふは、家祿給分賜はりし物にあらず、皆おのがじし著るべき物も何も調へ出でて、朝夕つかうまつりしものなり。たゞ物賜はらぬのみにあらず、大饗、物詣など、何くれの御いそぎとあれば、裝束、調度、饗饌、絹布をあてられて出せしものなりといはんに、往昔の有樣よくも心得ざらん人、一撮米一文錢も賜はらで、何事も我と物して、よるひるとなく追ひつかはれ、そのうへに物あてられて出すとやうの嗚呼なる事ありなんやと思はでやは有るべき。そは今の世の諸家の家來といふものを常

皀緌—黒き冠の細

菊綴—縫ひどめを綴ぢ附けたる緒の餘りを菊花の如く縮ねたるもの

料とに見えて外にはなし。其ゆゑは、褌をもそへて三ッ並べていふ時は、大口は中袴なれども、褌は何となく言ひ出づべき物にもあらねば、たゞ表袴と大口とをかぞへて、褌は外物にしたるなり、中袴といふべき理なし。奴袴に重ぬるも大口とおなじ物なる、そはやがて下袴といふ。褌と名を同じうしたるも、褌は外物にしてかぞへざる故なり。

緌といふものは、文字によらば冠の紐なるべきに、耳のあたりに獣の毛もて扇ひろげたらんやうにてあるは如何なる事ぞと、年ごろいぶかしう思ひつるに、此ころ考へたる事あり、さるは衣服令に皀緌とありて、「謂二冠紘一也」とあり。その紘の字は、左傳に「衡紞紘綖」といふ事ある、紘を「纓自レ下而上者」とあるにあはせて見れば、一すぢの緒のなかばを頷の下にあてて、二ッの端を耳より上にて冠に貫き結びて、残れる緒の末をふつと切捨てしものなり、しかすれば二つの端ふさ〳〵となりて、直垂水干の菊綴といふものの如くになる。其菊綴も縫絲の末のほゝけたるを形容せしものなるを、これは今一きは威儀あらせんとて、毛もて作れるなるべし。齋宮式に、緌八十二條とあり。緒なればこそ條と數へたれ、當時のごとき物ならば、枚といふべきものの姿なり。これは武官と

齋王―天皇の御代毎に伊勢神宮と加茂神社とに奉仕せしめ給ひし未婚の女王又は內親王

當色―其年の惠方に常れる色

なり。いかに打ちとけたらんからに、湯具あらはして居らんやうなし。大口とは括りなどもせで、口の大きく廣くあきたる故の名なるべきに、隱すべき物隱さん料ならば、大口にせでもありぬべくや。猶いはゞ、賤しき者は古とても大口著たる物にあらず、身は賤しくとも隱すべき物かくさでやは有るべき。旁大口は褌にあらず。そのかみ褌は單よりも下に著てたけ短かりし物なり。後三年合戰の繪詞に其圖あり。縫殿式年中御服の條に、

春季云々。表袴中袴各十腰料。絹十六疋四丈。別五丈。糸三兩一分二銖。別三銖。袷袴單袴各十腰料。絹十一疋二丈。袷別四丈。單別一丈。腰料八尺。糸二兩三銖。別五銖。

と見ゆ。中袴とあるは大口なり。褌は、こゝは表袴中袴に對へて下のはかまと讀むべし、御肌に付けおはします、今の湯具なり。料の絹にて短かりし事も知らる。式の中に御料と齋王の御料とを除きて、褌といふ物見えざなるは、祭服當色など賜はすとても、さやうにうちうちの物までそへて賜はるべきにあらねば、こは皆みづから物せし事なるべし。もろもろの日記などにも、さらに見えたる事なきも、單よりも下にみじかくて、かりにも人の目に見ゆべきにあらず、有職の故實あるべきにもあらねば、おのづから記し置かざるなり、大口の褌なる故にはあらず。又中袴といふ事も、御料と齋王御

あざり—小石、阿闍梨

袍—正禮束帶の時に用ふる上衣

袙—中古、男子の裝束の下に著けたるもの

俗間に小石をざりといふ。歌にさゞれとよむと同言なるべし。さゞれも、ざりもさらさらじやりくといふ音を形容したるなり。十訓抄に、

三井寺の覺讃僧正、年高くなりて有職をゆりざりけるが、熊野に詣でて、

山河のあざりとならで沈みなば深きうらみの名をや殘さん

とあり。ざりといふも古き事なり。

近ごろ大口は肌にしたしく付きたるものなりといふ說出來て、今の湯具に當れりとす。心ある人みな此說をよろしとする事なれども、猶思ふに然らず。大口は袍に下襲あるが如く、もとより二つ重ねて著たるものなり。しか重ねて著るゆゑは、たまくほころびなどしたらん時、見苦しかるまじき用意にぞ有るべき。袍にはなほ袙も單衣もあれど、それだに下襲はきるを、袴は、ようせずば赤裸見ゆるまではころぶる所もあるべし。いかでか重ねて著ざらんや。もし大口が褌ならば、單衣より下に著るべし。單衣は今のジユバンのやうなる物なるに、先づジユバン著て、其上に湯具する事はあるべくもなし。又染裝束には、大口の色をも換ふる事なるに、湯具に風流せんは、今時の相撲見るごとく、品におくれたる事なり。うちとけたる時は指貫をも略して大口ばかり著て居るも常の事

いろ許されて―服裝の色に深紫深紅は禁色なりしを、其を用ふる事を許されたる也

かとりー織物の名、目を細かく織りたる絹布

皮と見えたるこれなり。刀の鞘にきする皮の衣は、尻鞘といふものなり。それを皺文皮にて造れるは、ひきはだの尻鞘といふべきなり。今時打ちまかせてひきはだといへば、尻鞘の事となりにたり。又今鏡に、成通卿の事の迹記せる所に、

白河院御いとほしみの人にておはしき。殿上人の中にはたゞ一人いろ許されておはすとぞ。雪ふりの御幸に、ひきわだの狩衣を著給へりとて、心得ぬ事に仰せらるゝと聞きて、資遠とて侍りし檢非違使の、まだ童にて、おまへにも近くつかはせ給ひしに、わび申すよし聞かせまゐらせよと宣ひければ、はかなく打出して、成道こそひきわだの事かしこまり申し候へと申せと申したりければ、惡しよしの御氣色は無くて、まことに奇怪なりとぞ仰せられける。近衞のすけなどは、かとりうす物など、花の色紅葉のかたなど染めつけらるべかりけるを、ひきわだのあら〳〵しく思ほしめしけるにや。

と見えたるひきわだは、何にかあらん。もしははをわと言便にいひたるにて、皺文皮の狩衣か。今時桐油といふ物著るごとく、ひきはだの狩衣を著給ひしも知るべからず、雪ふりの御幸なればなり。もし然らば、まことに奇怪の事なり。

ひらきけん、あやしき事なり。さる道をしも、朝廷に尊び弘め給ひけん、又あやしき事なり。

夕さればといふ詞、さればは去の字なり。春されば、秋されば、などいふも皆同じ。かやうの去の字は助語にて、意義にあづからず。詩にも老去、擲去などの去の意なくて、和漢符合せり。近代夕ざればとよみて、夕ざれは夕ぐれの義とす。畢竟の説はかはらねど、去の字の義にうとし。されど此説久しき事にや、大藏卿行宗卿の集に、

さらぬだに歸る人なき夕ざれにむすび止むる神垣の藤

治暦三年三月十五日、備中守定綱朝臣家歌合、基綱、

朝またふる秋霧にゆふざれの春の霞は立ちまさりつゝ

去の字の義としては事とものとも續かず、なほ夕ざれの説なりけり。

江戸の人、かざりなき人を見てヤボと云ふ。世説注に、「意趣野老」

古き物語に、草花を前栽といふ。尾張の風俗、草花植うる地を前栽といふ、なほよしあり。江戸の人は大根、牛房、菜類をしも、前栽といふは訛なり。そは後園とぞいふべき。

ひきはだとは皮の名なり。蝦蟆の膚の如くつぶだちたればしかいふ。延喜民部式に皺文

ろ寒き心地す。さるしれ者のくせに、物しりだちて、古を考へるたよりになどぞ言ふめる。さばかり惡しきわざせずば考へがたき事ならば、それ知らずともなでふ事かあらん。いにしへを考へんとならば、書をやは見ぬ、書を見あきらむる力なくては、いく百千の墓を發きて、幾千萬の古き器を得たらんも、何事をかは考へ出でん。いと益なき事なり。そもそももろこし人は、初よりよからぬ事と知りながら、世のたつきなき儘に、餓死なんよりはとて、し出づるわざなれば、猶許さるゝ方もあるを、これは好事しきすさみばかりに、かゝる罪をかして、猶ことよげにいひ居るなど、まことにいはん方なし。あなゆゝしゆゝし。

眉輪王―安康天皇を弑す

主殺の例は眉輪王なれど、いとやんごとなき皇親にて、しかも事いとをさなく、親の御ためにてさへあれば、たしかに逆臣の例ともいひがたし。蘇我の馬子こそ、かしこくもおほけなくも、きたなくもよこしまにも、思ひかまへて君を弑せまつれるなれ。又親ころしの例は、推古天皇三十二年に、「有二一僧一執レ斧毆二祖父一」とありて、これに依りて僧正、僧都、法頭を置かれし事みゆ。律條には、祖父母父母を一般にしたれば、これ的例なり。佛法まう來ていまだ幾許ならず、一人は比丘、一人は優婆塞にて、かゝる禍の門

優婆塞に―俗ありて佛門に歸依する男子

てんと宣ふなり。その夷狄とて卑しむるも、おのづから卑しむる故あり。被髪左衽によれる事にはあらず。化内を尊び化外をいやしめ、本國をあげ、他國をおとすは、古今一般の人情にて、聖人といへどもおなじ事なり。孔子もし被髪左衽の國に生れ給はゞ、髯髪右衽といやしめ給はんとす。浩々たる上天の見そなはさんに、左衽右衽何の尊卑かはあらん。すべて浮世のものしりたちは、孔子の御心をまねばんとはせで、たゞ文字にのみ泥むなる、いともはかなき事ならずや。

古き冢を發く事、唐にははやくより多かる事にて、心ある人は、中々厚葬をいみじき物にいひ思ふなり。さるはたゞ世渡の爲にて、山賊、海賊なども同じものなれば、中々論なし。皇國にはちかき世までさる事はなかりしを、此頃なん、事好むともがら、勾玉鏡などやうの、くさ〴〵の古き物を、いみじうもてはやし扱ふほどに、いかで然るもの得まほしくて、古き墓ども發く事きこゆなる。いとゆゝしう心憂きわざなり。その墓よ、そのかみいかなる貴人を瘞めたるも知るべからず。又おのれが幾世の遠祖、あるは同氏同統の人ならんも、いかでか知らん。さらぬ凡人にても、枯れたる骨をかきあちはされて、さこそうらめしき物に、よみの國より思ひおこすらめと推量られて、身の毛だち、そゞ

うけばり―我物顔の

ねよげに云々―「うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばんことをしぞ思ふ」

うらなく云々―「初草のなどめづらしき言の葉ぞ……」

褻の服―私服

わりなき―理なき

とあり。世にうけばりたるさまにはあらず。伊勢物語に、「ねよげに見ゆる若草を」といへる返しに、「うらなく物を思ひけるかな」とあり。うらなくは今の世にきのないと言ふほどの事にて、その間がらをあぢきなく思ひしなり。狹衣の物語の源氏宮は、大將にあひ給はんにいとよき御間なるべきを、かけはなれにげなきものに宮の思したるも、同じ所に生立ちて、兄弟のやうなりしゆゑぞ。これより後さるたはけ心あらんはまことに禽獸なり。

續日本紀に、「養老三年二月壬戌、初令ニ天下百姓右レ襟」とあるは、それよりさきに左袵なりしにこそ。今思へば左袵は便あしきやうなれど、常にしかしたらば、中々右袵はふるまひ惡からんも知るべからず。何事もなれたるが便よきものなり。大寶の衣服令は、唐の制にならはれたるものなれば、その時はやく禮服、朝服は右袵なるべけれど、下ざまの者、公卿も褻の服などは、なほ古きならはしの儘にぞ有りけん。から物まなびするともがらこれを卑しげにいひ思ひ、こゝの學者もわりなき事に恥づめるは、論語に、「微ニ管仲一吾其被レ髮左レ袵矣」とあるがいやしげに聞ゆる故なり。此被髮左袵は只夷狄といふ事なるを、あやなして宣ひたるにて、先王の禮制絶え果てて、たゞ夷狄のやうになりは

玉葉集―藤原爲兼の撰集、二十一代集の一

ればやう〳〵に相娶らぬやうになりしと見えて、事の迹ものに多くは見えず。これ制度にはあらねど、人情にしたがふ道なり。されどもと忌まざりしものなれば、おのづから娶ひし人もあり。かくて年經て今の京となりては、人情にいたう快からぬ事に思ひしにこそ。玉葉集に、（玉葉集はいたう後の集なれど、さる古集ありてとられたるなるべし。歌の姿も後ざまなりと疑ふべからず。かの朝臣の體なり。）妹のをかしきを見て書きつけて侍りける。參議篁、

中にゆく芳野の川はあせななん妹背の山を越えて見つべく

返し、參議峯守朝臣女、

妹背山かげだに見えでやみぬべく吉野の川はにごれとぞ思ふ

新千載集に、

妹の影だに見えでやみぬべく芳野の川はにごれとぞ思ふ

と申し侍りければよめる。

濁る瀬はしばしばかりぞ水しあらばすみなんとこそ頼渡らめ

又續古今集に、

身のならん淵瀬も知らず妹背川おりたちぬべき心地のみして

率レ姓云々—中庸の開卷に出づ

の世の法なれば、これ周公の制にそむけりといはゞ、我のがるゝ所なし。もし道にそむけりといはゞ、率レ姓謂二之道一。いかでか道にそむくべき。皇國はおのづから皇國なり、周の制度を守るべきゆゑあらましや。さていにしへ異母兄弟に婚ひしは道に乖けることはなけれど、今の世のありがたちは、異母といふも、おなじ所に生出でて、たゞ兄弟も同じ定に生立つものなれば、これにあふはまことに禽獸にちかく、みだりがはしき事にて、公ざまにも、其御禁はあるなるべし。古と今と事のさま違ひたれば、是非する所もことなり。學者は何事につけても、この沿革に心を用ふべきわざなり。

異母の妹を娶る事、上古は百官の家おの〳〵その本居に住みながら宮仕せしものなり。女もその本居に住みければ、相娶るには、男の里より女の里まで、夜な〳〵通ひたりしものなり。かくて女二人三人もたる人は、女はおの〳〵その里にありて、男はこゝへもかしこへも通ひたり。さて其子どもは、母の里々にて生長するものにしあれば、異母の兄弟は、中には國郡へだてたるもありて、いと〳〵疎き中なり。かゝれば娶ふ事をも憚らざりしなり、平城の京より、百官の第宅大かたは帝都にある事なれば、いづれの家もほどいと近し。近ければおのづから行きかよひなどする事もありて、やゝ親し。親しけ

あふ―娶る

まき―求婿

年々隨筆 四 癸亥

皇國の上古は、同母兄弟にあふ事はなくて、異母兄弟は忌まず。今の世より見れば、異母といへども兄弟といたくかはらぬを、夫妻としもなれるは、世々のものしりの打ちかたぶくめる禽獸にちかきに似たり。されど、古書どもを考へて人情によそへて思へば、おのづからゆゑある事なり。いにしへは尊き卑しきとなく、夫妻のまじらひは、女の家へ男の通ひし事にて、今のごとく夫の家へむかへとりし物にはあらず。かくてその子はおの〳〵其母のもとにて生長つもの故、異母は兄弟といへどいと疎く、他姓の人と異なる事なし。女どちの異母はいけるかぎり相見ざるもあるべし。よき女を見て、いかで得てしがなと思ふは人の性なるに、かう疎々しくのみある中なれば、まきもし、なびきもし、しか人情のよる所なるゆゑ、神もゆるし給ひ、人もとがめざりしなり。こはもとより道なり、さらに禽獸にちかき事にはあらず。しかるを同姓不㆓相娶㆒といふ事を準として、あしかる事に言ひおもふ人もあめるは、いとをこなる事なり。同姓相娶らぬは周

享和二年十二月五日。餘白既盡。姑閣レ筆了。春天垂ニ帷於品川莊園一。偶有ニ白波寒レ心之患一。秋日鳴ニ鐸於市谷廨居一。雖レ奈ニ紅塵撲レ面之煩一。未ニ達君平卜レ居之意一。却似ニ孟母擇レ隣之所爲一者歟。

石原喜左衞門正明

新選字鏡—僧昌住の著、我國最古の字書

あひなめ—あゆなめ、硬鰭類に屬する魚

五島—五島産のするめ、殊に有名なり

七寶—金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、碼碯

百味飲食—多種の味よき飲食物の義

とある入鹿は、此江戸にて常見ゆる物なり。新選字鏡に鮪の字をいるかと訓めり。げにこれもしびまぐろの類にて、肉の色赤く黑し。いと〳〵下品なり。酒賣る小家にて眞黑となのりて商ふ。諸家の小者など下衆の食物なり。鼻やくさからん、血やくさからん、追風遠じるし。抑も名かへの幣として、大御食の魚たてまつらせ給はんには、鯛、鰑などこそあるべきに、地の名におふばかり臭かりつる入鹿をしも獻らせ給ひける神の御心なん、測りがたきものは有りける。

清少納言が枕草子、いと心ゆく書なれど、うまき物といふ條の無きは、あかぬ心地す、今補へてん。鯛、あいなめ、するめ、五島はさらなり。いと暑き頃、日ざかりは身もうくばかり汗流れて、息のみあへがるゝに、辛うじて日ぐらしの聲待ちつけ、湯浴などして、酒呑まばやと思ふ折しも。鰺のいと鮮けき、籠の中にて猶をどるを、鹽あえて燒きて、ささげのひたし物など殊更にはあらで、一二杯かたぶけたる、樂さいはん方なし。庭の梢そよ〳〵といひて、いと涼しき風の時々音づるゝなど、七寶行樹、百味飲食まのあたりなり。さよりも燒きたる、筍、松茸、大根、菘。

佛語にて、—

高志前之角鹿―越前國敦賀

幣―禮物

依二一浦一―浦一杯に滿ちたり

かう解かばいかに。さばかり詩人といはれし人のつくれる國字解の、いとも〳〵つたなきを思へば、遠鏡はます〳〵尊し。

鮪と眞黑とは一物か二物か詳ならず、いとよう似てあらぬ物にて、これを鑒定むる方魚市の祕說なりといふ。其品の高下はと問へば、さしも異ならずとぞ。さばかり見わき難き物の品の高下さへたがはずば、一物と心得たらんもなでふ事かあらん。陸奥に物したりし頃、金華山のあたり大原といふ里に宿りしに、家あるじは漁人にて、其頃しびを取ると言ひのゝしる。しびと眞黑とはいづくか異なると問ひしかば、同じ物にて、春鮪といひ、秋眞黑といふと答へき。古事記に、

建内宿禰命率二其太子一爲レ將レ禊。而經二歷淡海及若狹國一之時。於二高志前之角鹿一造二假宮一而坐。爾坐二其地一伊奢沙和氣大神之命。見二於夜夢一云下以二吾名一欲レ易二御子之御名。爾言禱白之。恐隨レ命易奉。亦其神詔。明日之旦。應レ幸二於濱一。獻二易レ名之幣一。故其旦幸二行于濱一之時。毀レ鼻入鹿魚。既依二一浦一。於レ是御子令レ白二于神一云。我給二御食之魚一。故亦稱二其御名一號二御氣津大神一。故于レ今謂二氣比大神一也。亦其入鹿魚之鼻血臭。故號二其處一謂二血浦一。今謂二都奴賀一也。

取りくたしト解平淡に過ぎて古歌の雅致を傷くるをいふ

らるゝは解説を待たず、知られぬは世をかへても知り難ければ、これに力を入れん事、いたづらなる事なり。

本居先生の古今集遠鏡、いまだ世に廣ごらざるほど、其かまへを傳へ聞きて、いたく取りくたしたる事なり、唐詩選の國字解てふ物にぞ似るべきと思へりしに、さもめでたく解きなされたり。大かた注釋を讀みては、ねぶたうのみなり行くに、これはいと興ありて目さむる心地す。世の唐詩選解くともがらは、皆かの國字解のたぐひにて、蓮の蕾にはらまれて、十二の天樂聞くがごとく、心ゆかぬ事のみなり。人ごとによみ講ずる書なるを、など斯う人の心にしむばかり說きなす人のなからん。おのれ試に、

題二袁氏別業一

主人不二相識一。偶座爲二林泉一。莫レ愁二漫買一レ酒。囊中自有レ錢。

御亭主トハコレマデマダオチカヅキデナイ。ソレニ、カヤウニヒザグミデ御意エルト云フモ、ヘヽ、此御下屋敷の風景ガヨサカラヂヤ。ソレヂヤニ、コレハメッタニ酒ヲ買フコトヂヤトテ、御メイワクガリナサレナ。酒買錢バカリハ巾著ノソコニシゼントアルモノヂヤヨ。アハヽ、アハヽ

すめきー「うめき」の訛

といふに義あらば、青といふにも義なくてはあるべからず。それは云々の義といはゞ、その云々にも源なくてやはあるべき。いつまでももとめ行かんに、其もとのねざしとある詞は、何となく言ひ出づるなりといふより外なし。しからば言語の源は窮めつくし解盡す事難きは知るからずや。たゞ天は月日のゆく所、青は松竹の色といふ事だに知らば、事缺くまじきを、何を明すとしてか、頭をかゝへてうめきすめき思ふらん。故先生は、かの延約のさたのみする眞淵が弟子にて、古學者といふ流ながら、此事はさしも要ならずとて、其理物に書かれし事あり。いとめづらかなり。世上の學者は、これぞ學問と心えて、我人しひ言くらべする世ぞかし。そは皆もみぢ葉をまそほまり出づる葉と說くがごとく、迂遠き事いふばかりなし。さやうの事のみし出づる故、和學を不要の物なりと、儒者達にあなづらるゝよ。

物の名には、古きと新しきとありて、言語あり初めての折の名は、何となく言ひはじめたる物なれば、いかに心をめぐらしても知るべきにあらず。新しきは理ありてつけしものの故、中にはいとよう知らるゝもありて、一概には言ひがたし。たとへば瓜は何の義とも知られねど、熟瓜は臍落なり、蛤は何の義とも知られねど、蚌蛤は濱栗なり。その知

松坂ざま—宣長の說

ねは、もとは金は土中より生ずるゆゑの義とせしにや。さらばかなあれのなどぞ言はまし。用語を先にいふ事、皇國にはなき事なり。眞淵は、くだ〳〵しき論はありながら、ことなる義勢なし。すべて、金、銀、銅、鐵、何がねにもあれ、みな岩山のいはほの中に生じて、土より出づるものならねば、かゝりたる義事違へり。松坂ざまには、舍根の義として說かれたれど、根もじ穩ならず。一說に、土生金の義といへるはをかし。正明思ふに、あら玉は璞、未だみがかざる玉なり。そは砥をもてみがく故ととかゝる。あらかねは鑛、いまだ鍛へざる金なり。そは鎚もて鍛ふ故つちと掛る。あら玉はふるき說にありしにや。あらかねは今や始ならん。此二つ、言ひかゝりたるさま專おなじければ、相照して心得べし。されどこれら猶こと心なるも知るべからず、さら〳〵此義を執するにあらず。おのづから見聞かん人、正明が說とな言ひたてそ。そも〳〵あら玉のは年の枕詞、あらかねのは土の枕詞、此外に用ふる事なき詞なれば、かうだに知らば事缺く事あらじ。古學といひて詞のもとをさぐらんとする人たち、自らの力のほどをも知らで、いかで新しき說言出でんとするは、徒なる力いれにて、よそ目さへくるし。すべて詞の源を解く事は、そのかみより在り來し事なれど、いとふようなり。天は青みえなどいふ說は、よろしげに聞ゆれど、天

磯城瑞籬宮ー崇神天皇のおはせし宮

大宮ー大和

冠辭考ー加茂眞淵の著

松阪の古先生ー本居宣長

ら調じ出で給ひし物とやせん。おのづから百官はありて、その事とり申さんために、大宮へ參りたりし事、何の仔細かあらん。されば雄略天皇はしばしまして、神武天皇の御歌に見えたるも、すべて妨なし。さてみづからの說々、契沖はもゝしきを、「崇神天皇磯城瑞籬宮六十八年までつゞきて、いと久しくめでたかりし御世なれば、百敷といひ初めしなり」といへれど、百年世をしろしめしゝ磯城宮といふ事を、年といふ文字をさへ省きてきこえん物か。たゞ師木といふ物の數百とこそ聞ゆれ。眞淵は百の石もて堅めたる城といふ事なりといへり。これは詞の說きざまはさもと聞ゆれど、何れの城とても石もて築かぬはあるまじきに、取りわきて大宮にかけん事いかゞ。百とは數多き事にて、取りわきて大宮にかけたるなりと言はゞ、千敷八千敷、猶數多くいふべきに、百としも限れるはいかゞ、百ばかりの石もて、大宮は築かるべき物かは。

あら玉のとしとつゞけ、あらがねの土とつゞくる事は、其說いまだ詳ならず。まづあら玉を、眞淵は、あら玉は明玉、としはてらしの約、（てらの約はたなるを通はしてとゝいふとなり。）などいへど、例の強ごとなり。明をあらといふ事あるべくもなし。（冠辭考ありきぬの條に例證を引出てたれど、みなあたらず。その中に現御神荒魂をも引出てたるはあまりくるしげなり）松坂の故先生は、おだら〳〵まのいふ事なりとて、長々しき說あれど、迂遠なり、あらが

宰相以上を上卿といふ。記録どもに、日の上の事ならで、すべての公卿を上卿といへる事折々あるを、正明も公卿の誤なりとしてなほしなどせし事もありしを、行敎の諷諫にてさる事と知りつ。その上卿を上ともいふ。物語などに上達部といふは、上等部にて、公卿といふも同じ心ばへなり。左大臣を一上といふも、右大臣以下もみな上なれど、その中に第一の上といふ事なり。

百敷は百座にて、座を百ばかりも敷くといふ事なり。その座は百官の參入して事を行ふ座なり。古き說にも、百官の座を敷く事なりとはいへれど、それは百を百官の百の字と見、敷は用の語にて、座を敷く事としたれば、說きざまたがへり。百官の事を百、座を敷く事をしきとばかり言ひては、きこゆる物にあらず。されど言ひもてゆけば、事の趣は同じきを、契沖、眞淵などこれを破りて、雄略天皇の御歌に、「百敷の大宮人」と詠ませ給へるに、彼頃までは百官の沙汰なしとぞいふなる。そは孝德天皇の御時、はじめて八省百官を置かれたりとある、日本紀の文になづめるなり。此御代には、制度の改りしにて、漢樣の官々を始めて置れたる事なり。もし是よりさきに官々なかりしとせば、世々の政、誰人か執り申してきこしめしたりとせん。大御饌、大御衣も、御自

これぞ世のつね。呉竹の子生ひたり。

　呉竹は子もたりとてもひとり來てひとり歸れる我を笑ふな

これもよの常など、戯言のやうなれど、其の身にとりては中々の哀なり。何物も皆あなあはれと思ふ中に、櫻こそとりわきての哀なれ。

　それをだに夢かとぞおもふ春いづくなれし櫻のはなの下臥

いまだ老といふ文字はかけぬ齢ながら、同じ事のみせらるゝよ。あなあはれ〳〵。

大臣以下參議以上は宰相なるに、參議をしも宰相とよぶは、宰相を規模とする故なり。四位、五位は大夫なるに、五位をしも大夫といふは、大夫を規模とするゆゑなり。宰相はよく人のいぶかしがる事なれど、大夫は不審したる人だに聞えず。大臣より下六位までも、昇殿ゆるされたるかぎりは殿上人なるを、公卿は、公卿を規模とするゆゑ、打まかせては殿上人といはず。六位は、駈使のための昇殿にて、もとよりすぢ異なれば、打まかせて殿上人といはず。四位、五位の人々は、殿上ゆりて近侍の臣となれるを規模とするゆゑ、打まかせたる名になれるなり。參議を宰相、五位を大夫といふと同じ趣なり。

ぬるでー白膠木
ちほうー未詳

のから、雨の餘波露おもげにて、何となくしめ〴〵としたり。心なしとはいかでかいはん。あな哀れ。

目かるゝをうらむな松よこの陰に千年も經んと我や契りし

こは見なしなるべし。ぬるで、葉のさまちほうなれど、秋毎にまづ染め出づるものを、あなあはれ。えの木、何事をかはなつかしとも思はん、たゞ月のさしかゝりたりしほど、はえありて覺えしぞかし。あな哀れ。躑躅、あな哀れ。

來ん春は入日うつろふ雲を見てさぞなつゝじと思ひ起さん

萩、あなあはれ。我が染めし心の色は、異木草よりも深かりしはや。

やよ眞萩わかるゝ人の袖を見よいろなる露は秋のみや置く

紫苑、桔梗、見るものごとに、あな哀れ。

植ゑし時たゞ一本とおもひしを庭も狹きまで繁合ひにけり

軒ちかう植ゑにしはなも秋待たで目かるゝ人を哀とや見る

いで哀くらべんなどもひとりごつ。又梅、あなあはれ。

春來てもわが袖ふれし匂ひぞとたれかは問はん梅の木の下

葉守の神—樹木を守る神、或は柏の葉を守る神ともいふ

まろかしら—圓き芥子坊主

あまりこちたきやうにもあれど、あはれと思ひいらるゝが斯うまでなん。柏、植ゑし時根をやいためけん、いとよわ〳〵と見えしを、土かひ水そゝぎ、我がひとつ子のやうにて養ひしぞかし。あな哀れ。

今日までは我がしめはへし玉柏葉守の神にまかせてや見ん

雨やみぬ。草のしげみは露むづかしけれど、園の中をたゞずみ歩く。これも限にやとて、

我が分けし跡もなきまで明日は又しげりやそはむ園の夏草

あなあはれと高らかに言へど、聞きつくる人もなきは、まことにうき世の外の心地す。芥子の花、心とまるとしもなけれど、見るまゝに哀なり。おとゝひこそ咲きそめしか、かつ散りたるもありて、まろかしらふとさし出でたり。

山かへる我さへあやな草だにも法のみとなる宿からにして

倉の造りざまのよの常と異なれば、道行く人の御堂ぞと心得て、「阿彌陀佛おはします。いな觀音大士にこそ」など言ひしらひし事、ふと思ひあはせられて、芥子の入道あな哀れ、我もさもやとまでなん。いく百千ともなき松の木蔭をたゞずみ歩く。こはまことの二葉を植ゑてき。今はたけにも過ぎにたり。深緑つや〳〵として、心地よげに榮ゆるも

もあれど、斯う世ばなれたる所は、むくつけき事はた無きにしもあらず。

松風もそよ白浪と騒ぐかな世をうみ渡る岡のべの宿

よし然らずとも、物おもふ人の魂はうかれ出づるならひなるものを、下がひのつま結ばるべきよすがもなければなど思ひなる。此頃まだきより五月雨のやうにて、八重雲とぢたる空さへあはれなるにもよほされて、つくぐ\とながめ居たり。郭公音づる。あな哀江戸も家かは。

行方も又旅なるを子規いかで帰るに如かずとは鳴く

かしこにては、又こゝをこそ戀ひめなど、五年の餘波まづ思ひやらる。庭の池水を見るにも、あな哀れ。

すみ馴れし契ぞ深き心あらば我影とめよ庭の池みづ

楓、今年はこよなう繁りにたり、夏も日影はもらじかし、下照るばかりは、長月の廿日あまりにこそ、見ずやあらん、あな哀といふまゝに、はらぐ\とこぼれ出でて、下枝の雫もあらそひかねたり。

降る雨にいま紅葉せよ若楓我衣手の色にならひて

下がいのつま――著物の下まへの端、源氏物語「なげきわび空にみだるゝわがたまをむすびとゞめよ下がひのつま」

歸るに如かず――子規の異名を不如歸といふ、其故事は蜀王本紀に出づ

もとのねざし―身の素姓

住吉の岸―古來名だたる名所にて歌も數多かれど、殊に住吉物語の趣などを取りていふなるべし

巖の中―山に遁れずして住吉の如き海邊を選みたるをいふ

食」とあると相照して思へば、もし臭などや惡しかりけん。雉はえもいはぬ物食ふものなれば、さる事あるまじきにもあらず。しかるを、おのが時をえたる哉と宣ひしを、子路が聞きあやまれるなりとぞ説くめる。子路ともある賢き人の、その時聞きあやまれりし御言を、千載の後によく聞き辨ふる博士たちは、いみじき才のほどなりけり。

あな哀、世はあぢきなきものなり。假初のやうなりし此品川の旅住居もはや五年なり。庭の木草は皆手づから植ゑつる物ぞかし。常に目なれて心にもつかねど、いつしか立ちのび繁り合ひ、いたう物古りたる山里となりぬ。今は目離るべきにつけても、まづ浮世の中の思ひなりされて、たゞあな哀とぞいはるゝや。さるは此きさらぎの初より、胸つとふたがりてよろづ歎きがちに、はるゝ世知らぬを、いかで慰まんとて、そゞろにあくがれ出づるなりけり。あな哀、われ何事をかは思ふらん、人數ならぬは口惜しけれど、もとのねざしもはか〴〵しからねば、そはいとよう思ひあきらめて、さしも思ひ屈したる事もなし。たゞ何となう世の中あぢきなく、身をうき物に思はるゝがせん方なさのあまり、戀せぬ身にも住吉の岸尋ねばやとてなん。あな哀、さらば巖の中とも思ひ入らでと、われながらあやしう、物おもはしさは我身ぞかし。里の名くたしと、情なきやうに

子夏が云々―論語卷一爲政第二に出づ

顏色を云々―朱註に舊說といふもの、次の愉色婉容は朱註の說也

山梁云々―論語卷二鄕黨第十に出づ

だ、年老いて夢見ずとならば、しどけなき浮世物語にて、何の教にかはなるべき。あたら論語を、はかなき草子に見なしたる博士たち、あに孔子の忠臣ならんや。

子夏が孝を問ひし時、孔子の答に。

色難。有レ事弟子服二其勞一。有二酒食一先生饌。曾是以爲レ孝乎。

と宣へる、色は好色の事、難とは、色のことにつきては、ふとしたる意も出來て、ともすれば孝行の道をも忘るゝ、これが難儀ぞとなり。それより下は、先輩の說もたがはず。すべて人は色と食物と勞なきとを好めるが常の情なる中に、親に孝ある子などは、勞をいとはぬはもとよりにて、食物も、おのれは餓ゑてもまづ親に與へんとするも多くて、これらの事にて操を改むるはをさ〳〵無きを、此男女のなからひにつきては、俄に中惡しくなるも有り、あるはあらぬ死をし、行くへも知らずあくがれなどして、親を遺るゝもまゝある事なり。何事も色によりては志のかはりやすき物ぞかし。顏色を奉順する事といひ、愉色婉容ある事などいふは、いと物遠し。

「山梁雌雉時哉々々」とは、食はまほしく思したるなり。詞のいきほひしか聞ゆ。子路が奉りしもその故なり。三嗅ぎてやみ給ひしは、いかなる故とも知り難けれど、「臭惡不レ

富士も茄子も━瑞夢の諺に「一富士二鷹三茄子」

したりし比、えの形して、片面の色淡黒き物を見つ。墨をさといかけたるやうにて、端ざまにほひやかに白く、鰭の末更に又黒し。赤えの赤き色の定なり。仙臺あたりに多かる物にて、土人はこれをカラカイといふ。これ黒えにて、それに對へて赤えといふなるべしと思ひとりつ。後に聞けば、尾張國篠島、三河國龜島などにて、早う黒えといふ物ありとぞ。國にありし程見聞かざりしは、いたうも多からぬにや。これ彼のカラカイの事なるべし。

論語の「我不㆔復夢見㆓周公㆒」とある周公は、周公のごとき人といふ事なり。「孔子之後。復無㆓孔子㆒」の孔子と同じ。此條は、孔子禮樂のすたれたる事をいたくなげき思して、周公のごとき人世に出で給はゞ、禮樂再びふるふべきに、我いまださやうなる人は夢にだに見ずと宣ふなり。復の字も「復無㆓孔子㆒」のまたと同じ。然るを若かりしほどは時時周公を夢み給ひしが、年おい氣力衰へてまた見ずと宣ひしなりと說くめるは、人情にうとく、はた詞の勢をもえ知らざるなり。述懷めきたることは聖人の語勢にあらずと思ふは頑なり。氣力衰へて昔みつる夢もまた見ずとばかりならば、富士も茄子も同じ事にて、周公にかぎるべからず。周公としも宣へるは、そのゆゑなくてやは有るべき。そのうへ論語は、人を敎へみちびきて、萬代の規範ともなるべき事を書き集めたるを、た

木兎、さゝぎ—みゝづくみそさざい

こよなし。いかにも〳〵神代紀の赤女といふ物は、鯛の事にはあらずなん。
鰡魚のいと小きは、白かねの色にひかるものなり、是をはくといふ。その次はおぼこ、六七月のほどよりすばしり、年こえたるはなよし、年つみたるはぼらといふ。かうはかなき物だに、大きくなるにしたがひて名も變れるに、幾年たちても書生とのみ名乘るこそ、めづらしげなく哀なれ。

古人の名におへる魚名、鮪、鯯魚、入鹿（赤兄は魚の名か、しからじか。）など、今の世には品くだりたる魚なるを、そのかみはさるものやうせしにや。時のうつり變るにつけて、食物の好惡もかはる事なればなり。又は時にもてはやせし魚のゆゑにはあらねど、木兎、さゝぎなどやうの事ありて、負ひし名なるも知り難し。

中臣鎌子連をカマスノムラジとよみて、魚の名なりといふ說がある、それ僻事なり。子の字をスと呼ぶは唐音にて、禪家の僧多く入宋してうつせし音なり。日本紀えらばれし時代に、かけてもさる音ありしにあらず、かやうの事にも沿革を知るが大切なり。

赤えといふ物、いづれも片面は朽葉色したり、いづれも赤き物ならば、たゞエと言ひてありぬべきを、赤えとしもいふは、いかなる事ならんと訝しうおもへりしに、陸奧へ物

郭璞孫敬―郭璞は元帝より著作郎とて重んぜられし人、爾雅註、山海經註等あり、孫敬は三國の楚の人、閉戸先生として知らる、共に有名の博物學者

の口の大きに廣れるは、かい探られし故にもやあらん。はかなき方言を據にすなれど、（みし魚なるべき）やがてあかだひといふ事もあると、めだひと鯛女と通ひてきこゆると、赤女がその小品なると、口女がその種類なると、かたぐ〜よしありげなり。さて又書に見えたる名字どもを説かば、赤女とあるは、女は藻魚島物といへる數品を攝ねたる種類の名、その中に一種殊に色あかき故の名にて、すなはち女鯛をさして言へるなり。（しばらく大小品を混じて赤女といへると見るべし。）口女は、同種類ゆゑまぎれたるつたへ、鯛女は鯛に似たる女といふ事と見て、すべてよくかなひたり。赤鯛、海赤鯽魚は、形鯛に似てその色ことに赤きゆゑの名、（黒鯛にむかへて、たひを赤鯛といふと心得べからず。）（鯛はたひにてうけばりたる名。赤鯛は鯛にむかへていへるなり。）やがて今もしかいふ。海鯽魚がたひならば、海赤鯽魚が赤鯛なるに論なし。「赤女鯛魚名也」とあるぞ、すこしいかゞながら、是も打まかせて鯛の事と思はれたらば、鯛魚也とこそあるべきに、名の字をしも加へたるは、鯛の一種と心得られたるにや。赤女は藻魚の屬にて、鯛とはもてはなれたる物ながら、形の似たればまぎれもすべし。日本紀つくれる博士たち、郭璞、孫敬が流にもあらず、蜑人魚舖にもあらざれば、さばかりの誤はありもすべし。斯うまでわりなう論ずるも、世にたぐひあるまじきものを、御饌に奉らぬといふが、くちをしさの餘ぞかし。女鯛もうまけれど、鯛には

御饌—御食物

藻魚—形めばるに似て、鰭は長く赤く、　は赤くして岐なし

女とも赤鯛とも鯛女ともあり。又古事記に海赤鯽魚とありて、本居先生の説は、仲哀紀に海鯽魚をたひとよめるを據として、鯛の事なりとあり。日本紀のおもてもまづは鯛の事と見えたれば、御饌に奉らぬにやあらん。かう類なくうまきものの、くちをしき契なりけり。しかれども御元服の理髪の大臣、干鯛を奉る事あり。今もつねに奉ると聞く。かた〴〵いぶかしき事なり。今こゝ正明思ふ事あり。尾張國知多郡の浦々、篠島ひまり島などにてとる魚に、ヂンメ、ヂンナメ、アイナメ、アカメ、クヂメなどめといふ魚なほ多かり。これらみな藻魚の種類にて、鯛よりは味淡く、毒なき小魚どもなり。およそは、あいなめを除きて、その餘はおしこめて藻魚といひ、さよりをも藻さよりといふ又島物これはしの島ひまり島などにておほくとらるゝ故の名なるべし。といひて、こまかなる名は漁人魚市の口にのみ傳はれり。そのアカメは、赤もどこともいふ、紅色にて三四五寸ばかりあり、江戸にても常見る物なり。クヂメは、淡黑色なり、くろもどこともいふ。赤女と口女とは鯛と黑鯛とのごとし。さて又一種、今やがて赤鯛ともいひ、又女鯛ともいふ物有り、形鯛に似て腹のあたりほそく、肉あつく、まなこ殊の外にふくれ出でて、めだひとは此魚の目の大きなるによりていふか、もしはめはこの種類の名にて鯛女といふも同じ事か。鱗の色もゆるばかり赤し、これすなはち赤女の大品にて、味淡く、藻魚の屬なり。鯛の種類にはあらず。これぞ幸物のそ

もろこし人も云云ー孟子告子上篇に「告子曰、食色性也、仁內也非レ外也、義外也非レ內也」

羊の羹にて云々ー戰國策中山傳に「中山君饗二都士大夫一、司馬子期在焉、羊羹不レ遍、司馬子期怒而走二於楚一說二楚王一伐二中山一」とあるをいふ

口疾ー口のいたみ、鈎針をのみて口をいためたる也

たゞよはしー不確定

もいともすぢなき事なり。今は貧しくとも財はうる時ありもすべければ、よし今寺は建てずとも、その時を待つよしにて、土地ある人の院號つくは難なきを、庶人の地を得る世なき事なれば、きはめて僭上の事と定むべし。かの寺を院ともいふ、これはた一區なるゆゑぞよ。

もろこし人も言ひけんやうに、食物と色ごのみとは、人の性にこそ有りけれ。その中に色ごのみは、はかなき花紅葉につけても、さまぐ\のなさけありて、歌物語にも常多かる、を、食物の事は、品おくれたる心地して、をさく\物にも見えざなる。されどよろづよりも人の情見ゆるものにて、羊の羹のために國をほろぼせし類少からず。たまく\うまき物を得ては、何某招じて酒すゝめばやと先づ思ひ出でらるゝよ。

魚は何よりも鯛よろし。神代紀に、「赤女比有二口疾一云々」注に、

赤女鯛魚名也。一書云。赤女有二口疾一不レ來。亦曰。口女有二口疾一。卽急召至探二其口一者。所レ失之針鉤立得。於レ是海神制曰。儞自レ今以後不レ得レ預二天孫之饌一。卽以二口女魚一所三以不二進御一者。此其緣也。

とあり。此一書の文は、口女か赤女かたゞよはしきやうなれど、又の一書どもには、赤

地下―五位以下にて昇殿を許されぬ官人

事して附くるなど、をこなる事いふばかりなし。抑も僭上と心づきたる人も、心ざしはさる事ながら、是は天子をまねぶにはあらざれば、しかるべき人品に贈らん事、難なかるべき事なるを、何ばかりの人よりと、きはやかに限を立つべきやうもなく、さりとてその限なくては、やう〳〵に上をまねぶが人情にて、下が下まで附くるやうになるは、せん方なき物の勢なり。おのれ試にこれを評めん。公卿、殿上人、地下も、おほやけに仕う奉る人々、みなやごとなければ、さらにも言はず、此江戸にていはんに、大名は論なし、籏本衆も、三千石賜りたらんほどの人は、小寺ひとつ建てんに、土地も費もとゞこほる事なければ、寺は建てずとも、其心ばへにて難なし。又祿はうすくとも諸大夫とある人は、人がらのやごとなければよろし。さらぬ籏本衆も、知行すべき地賜りたるは、その雑費こそ堪へまじけれど、寺たつべき地はもたれば、なほ宜しかるべし。又土地を賜はらざるも、土地賜はりたる籏本衆とよろづ同じ格なれば、その准據として、ことなる咎にはあらじ。諸家の陪臣も、地得たるは、しばらくさてもありぬべきにや。籏本ともなき御家人衆にては、いかゞなる事と思はる。まして土地なき陪臣は、いとあるまじき事なり。商人、農夫は、財もたるはありもすべけれど、寺立つべき地やはもたる、いと

兼家公―藤原師輔の第三子

よそへ―比し

りゆくが世のならひにて、うるはしき朝廷の御制にも、此たぐひのみ多かり。又凡人のつく院號は、攝關大臣などやごとなき人たちの御願とて、寺を造られつるが、その人薨ぜられて後、其寺の名をおふせて稱ふる事あり。道長公を法成寺殿、實能公を德大寺殿といふ類よ。その寺に院號なるもあるにつきて、兼家公を法興院殿、忠實公を知足院殿などやうに、院と稱せしもあり。この寺建つるが源にて、末のながれやう〳〵亂れて、何のゆゑよしはなくとも、然るべき人はみな寺號院號贈る事となれり。その中に、古は寺號の方多かりつるを、三四百年このかた院號おほくなりて、一二百年あなたまでは、なほ寺號も稀にはありしを、今はなべて院號ばかりつく事なり。上件の差別ありて、天子の院號は、別院よりおこれる故、大かた地名をもて付け奉る事、凡人のは寺院よりおこれゝば、すべて佛語をもて附くる事なり。今誰も〳〵物するは、法師らが授くる事にて、そのほど〳〵に隨ひて幣物など取るなるべし。中には腹ぎたなきえせ法師もありて、貨得まほしきまゝに、商人、農夫、相撲、俳優までも、其方の沙汰のとゞこほらぬほどは、此號を授くる故、かう亂りがはしうなりにたり。わかき寡婦の髮の末すこしばかりそぎたるにも、例の此號授くるに、佛語はいま〳〵しげなれば、松柏によそへ、福壽と祝ひ、祝

學館院などの類皆然り。施藥院は、便なき病人を置きて療して給はる所、悲田院は、貧しき老人などを置きて養ひて給はる所なれば、院といふ文字必ずしも貴からぬ事いちじるし。獄令に、「流徒罪居作者。云々。毎レ旬給ニ假一日一。不レ得レ出ニ所役之院一」とあるは、罪人を置く所をしも院といふ。こは逃亡の用意に、築地などめぐりて、一構なる所にこめ置くなり。されば此稱、公家の別院にも限らず。花山院、河原院などやうに、一構なる所なれば、臣下の里第に院といへるも常の事なり。かくて陽成院、朱雀院、冷泉院、亭子院などいふは、みな公家の別業にて、今の代にては御下屋敷といふものなるか。さやうの所は、もとより一區なるゆゑ、院といふ名もあるなり。さて天子の御追號某院と申すことは、御位をおりさせ給ひて後、別院におはしますを、その帝の御上の事は、やがてそのおはします院の名をもて稱せしが、崩御の後も、猶そのまゝに稱へ申せしなり。陽成院、朱雀院、冷泉院、圓融院など皆おはしましゝ所の名なり。具にいはゞ某院天皇と申すべき事にて、大江匡衡朝臣の家集に、朱雀院天皇、冷泉院天皇と書けり。されど常には便にまかせて、たゞ某院とのみ申せしなり。はじめこそ然ることなりけれ、やがて事うつりて、後一條院よりこなたは、在位にて崩御なりしも、なほ院とのみ申すなり。かう轉

億計天皇―仁賢天皇

大爲―伴信友校訂本「大脚」に作る、又「島郎」同書に右傍ヲトコ、左傍シイラツコと訓ぜり

中和院―内裏の御殿の名、眞言院の東にあり

物、また盜人ばくち打のつくあだ名といふものに似たり。字はやがてその異名のうつれるにて、本義ならんかし。又日本紀には、「億計天皇。諱大爲。字島郎」とありしよな。彼紀は漢風に書きたる所多かれど、こゝはその例にもあらで、「自餘天皇。不レ言二諱字一。而至二此天皇一。獨自書者。據二舊本一耳」とあるは、はやく此紀よりもさきに、しか漢風なる史もありしなりけり。こは文飾にて實にあらず。いにしへ王たちの御名かならずしも一つに限らざりける物なれば、億計、大爲、島郎みな御名なり。諱にも字にもあらず、思ひまがふ事なかれ。

今の世に大名旗本とある家がらはさらにもいはず、諸家の陪臣、農夫、商人なども、むねむねしきは、死ぬれば院號といふ物贈ることとなるを、近頃心ある學者は、天子を僭するなりとて、いみじう惡しかる事にいふも聞ゆ。何心なき者もこれを聞きつたへて、かしこき事に思ふもかつ〳〵出來たれど、なべての世の風俗なれば、心ならでも我人これをつくる事なり。まことに猥なる事ながら、これは天子を某院と申し奉るを見まねたるにはあらず、もとより異事なり。今くはしくこれを辨ぜむ。まづ院といふ文字は、四方築地などして、隣つゞきの家はなく、別に一構なる處をいふ。中和院、眞言院、勸學院

難波津、淺香山云々—はんの初學、古今集序「難波津淺香山の歌は手習ふ子の初にぞしける」

玉葉—寫本三十卷、藤原道家撰、卷一土御門院の承元三年より第三十卷寛喜元年に至る朝儀の記錄

どの六位にておはしましゝ頃、字つくる事を二條の東院にてし給ふ事ありて、その作法いかめしげに見ゆるは、身のほど〳〵につきてうるはしうしてつく事なるべし。さるは此君、大學の衆になり給ひつる故に、字もつき給ふにこそありけれ。然るを今の世はよろづそゞろきて、今日書よみそむるよりやがてつくなる。打聞は物々しく博士めきて、その實はまだ難波津、淺香山のほどなるは、戯れだちてをこがましき事なり。斯くてから國の字はみな二字なるを、皇國のは多くは一字にて。菅三丈琳などやうに姓を加へて二字なり、ゆゑある事なるべし。しかればかの難波津も一字こそつくべきに、さる故實は知らずして、なほ二字をのみぞつくなる。そも〳〵あざなといふ義はいかなる事ならん。此から流のを除きて、實名ならぬ名乘をみな字といふめり。今昔物語に、字太郎介、字澤股四郎などいふが見えたるは、今時の俗名のさまなり。日本靈異記に、字上田三郎、萬葉集に字仲郎といふあり。輩行を字といふ事いと古よりありこしなりけり。玉葉に、字伊與内侍、字辨内侍などいふ事の見ゆるは、今はよび名といふにや。十訓抄に、南都の舞師に字和博士晴遠といふ人あり。宇治拾遺物語に、ぬす人の大將軍保輔が、保昌朝臣に、「字はかまだれといはれ候」といへるは、今時のすまひのつく名乘といふ

を鬼にとられし事見えたり。今某大夫となのるはその餘波なり。又諸寮の次官も賣られつるか、某助と名乘る人もあり。某進は京職修理大膳の判官、某内は内舍人、これらは除書に常みゆ。内舍人はかならず衞府を帶せし物にて、藤内左衞門、源内兵衞などいふを、時としてはこれを省きて、藤内、源内とばかりも言ひしなるべし。これら皆成功の遺風にて、今も名乘るなり。某藏といふは、佐々木源三、梶原平三などのやうに、三を言便に三といひし餘波にて、藏と書くは轉訛るなるべし。諸院の藏人になりし事もあるにや。土岐十郎藏人など、太平記に見えしにや、もし此類か。某作、某吉は、亂世になりての後、人の名の由緒をも知らで、おのが事好にまかせて、杜撰につきしなり。源は杜撰なれど、三百年來世あまねくつく事なれば、今においては仔細なし。たゞ此頃此江戸人の名には、をさ／＼つかぬ文字をつき、又輔祐などかならず書くまじき文字を書き、あるは阿畑根住などやうに人の名とも聞えぬ事をぞ名乘るなる。愚につたなき事いふばかりもなくて、いと／＼惡きならひなり。

いにしへは中書王儀同三司などやうに、めでたき文人といへども、その道の人ならぬは、字といふ物はつく事なかりつと見えて、すべて聞えず。源氏物語乙女卷に、夕霧のおと

杜撰―典故なくみだりなること

中書王―王子にして中務卿たる御方、前に兼明親王あり、後に具平親王あり、普通に中書王といふは兼明親王にて、具平親王をば後中書王といへり

儀同三司―大納言の勳勞あるものを大臣に擧げんとすれども闕官なき時暫く大臣の禮を賜ける人

こちなく—ぶこつにて

河原院—源融が京都加茂河原の別莊

下は輩行官名とも、何とも知らで、たゞ人の名はかうやうの物ぞと心得て名乘りしほどに、上の一もじ姓ならぬも出來たるなり。されば世の中のうつり來しにしたがひて、成功の實もうせ、輩行の序もみだれて、そのかみの樣にうるはしくこそあらねど、きと由緒ある事にて、今においては、諾りたる名乘に、これを置きては何かはあらん。然るを此頃の學者たち、さるゆゑよしは知らずやあらん、世に俗名と稱ふれば、ひたすら俗なりと心得て、歌よ消息よと人のがり遣るにも、これを忌みさけて、人の實名書きちらすこそ、さもこちなくうたてき事なれ。そもそもこれは、皇國の學するともがらのみにもあらず、儒者とある人たちの漢文に書かんにも、いとよろしき稱呼なるを、さる事のきこえぬは、くちをしき事なり。朝夕に目なれ口なれためる唐詩選などをも見よ、王大高五などあるは輩行、高都護杜少府などあるは官名にて、今時の名と專ら同じきを、唐人の名のるは雅にて、こゝにて物するは俗なるやうあらましや。今時の漢文を見るに稱呼の妄なる事いふべくもあらず。

今の俗名は、成功のなごりなるに就きて思ふに、衛門兵衛丞允の外に、爵をもうられつと見えて、今昔物語に、田舍人榮爵買はんとて京へのぼりて、河原院にやどりて、女

ナ取集メテ養子ニシケルニ、此維茂甥子ナルニ、亦中ニモ年若カリケレバ十五郎ニ立テテ養子ニシケレバ、字ヲ餘五君トハ云ヒケル也。

とあり。眞田與一、淺利與一などいふもこれか。これら必ずしも十餘子とは見えざなれど、餘五のやうなる仔細ありもやしけん。その程すでに、曾我十郎は兄にて、五郎は弟なる類あれば、この與一も輩行のみだれたるにもあらんかし。成功とは、上條にいへるごとく、物をいだして四府の尉、諸司の三分になりて、その官名を名乘るなり。かくてその族々に、太郎二郎兵衛衛門ありて、他氏他族と參會しても、さらぬをりも、何事につけてもまぎらはしき故、その上に姓の一文字をそへて、藤太郎、源二郎、清兵衛、宗左衛門などやうに名乘りたる物にて、今時の名はこの姿なり。さてもなほ同じ名の多かるほどに、居所の地名をそへて呼ぶ。新庄にすむ藤太郎は新庄藤太郎、山田に居る源二郎は山田源二郎なり。これすなはち今の名苗字なり。元弘建武よりは、成功の事は絶えはてたれど、代々に官申したる家は、父祖の名乘りしまゝに名乘りもしつらん。さらぬ者も、僭上して兵衛衛門と附きもしたらん、亂世にて誰とがむる者もなきゆゑなり。應仁以後にいたりては、何事も舊き蹤うしなひ果てつる世なれば、上の一文字を姓といふ事も、

葉黃記―寫本五巻、葉室定嗣の撰にて、寶元寶治の頃の朝儀、廷臣の參觀等に關する事項を記録す

元弘建武―後醍醐天皇の御代

今昔物語―源隆國の著、山城宇治の閑居にて諸人の物語を聞きて書き集めたるもの

がたき勢とはいひながら、悲しきわざなり。成功の數多くなれば、おのづから物も多くは出さぬやうになり、物多く出さねば、任人の數いよ／＼増して、四府の尉、諸司の三分、天下にみち／＼たり。（これ今時の俗名に兵衛衛門多かるゆゑなり。）成功の物の事、靭負丞は八百疋、兵衛尉は四百疋、諸司の三分は二百疋に過ぎずといふ事、葉黃記に見えたり。錢の價は今時の百倍にも過ぎたれど、されど猶あさましういさゝかの物召さるゝなりけり。元弘建武の頃よりの物には此事見えず。さるは天下たゞみだれにみだれて、皇威諸國に及ばず、かの富豪の輩、數代成功せしは、先祖の名のりしまゝに、某左衛門、某兵衛と名のりしなり。兵革やむ時なくて、さやうの事糺明せらるべき時世にあらねばなり。

今時の俗名といふものは、人の實名はかりにも他より呼ぶべきものならねば、輩行と成功との二つをもて稱へし物なり。其輩行といふは、兄を太郎といひ、つぎを二郎といひ、三郎、四郎、次序のまゝに呼ぶ事なり。十郎より上は、餘一、餘二などぞいひけらし。

今昔物語に、

其國ニ平維茂ト云フ者アリケリ。此ハ丹波守平貞盛ト云ケル兵ノ弟ニ、武藏權守重成ト云フガ子、上總守兼忠ガ太郎也。ソレヲ曾祖伯父貞盛ガ甥竝甥子ナドヲミ

除目―古へ諸臣を官職に任ぜられたる公事
四府―左右近衛府、左右兵衛府
有職―ものしり人

功を募らるゝやうになりしも、いつのほどよりならん、いまだ考へず。もしは後白河院などの御おこたりにはあらざるか。一人二人づつやう／＼に數まして、きはやかに何時よりといふ事はなきなるべし。文治のころは無員數なる事勿論なり。寛元の比になりては、猥なる事いふべくもあらず。寛元三年の平戸記に、十三度の除目の聞書を載す。その度ごとに四府の尉おの／＼十二三人づつ任ぜらる。又治部丞五人一時に任ぜられし事なども見ゆるは、あまりなる事なり。かの記に、「靫負尉以下。無量無數」などいひ、

公事毎度。被レ行二成功之口任一。雖レ知二末世之至一。猶々可レ悲。

ともあるは、その比の有職も嘆かれし事ながら、これを除きては生財の道なかりしなり。さるは諸國に守護、地頭をおかれしより、國々の賦役大かた無實になり果てて、國役と成功とをもて、かつ／＼臨時の事は行はれしなりけり。任ずる人がらも、朝野羣載に見ゆる申文どもは、諸大夫侍、しかるべき人にて、望外の職に轉じ、次序を守らずして超越するなどやうの事なるを、かの無量無數の成功にいたりては、行事官より諸國に觸れて、富豪の百姓に募りたる物なれば、昨日まで庄官里長の沓とりし者も、今日は正六位上左衛門尉となりて、弓やなぐひなど勢だち歩くは、いと／＼みだりにて、やみ

熟國温職—良國、栄職
一分二分のともがら—一分は央生、二分は、目〔サクワン〕、三分は掾、公廨配當の律也

と見えたり。さばかり諸國に衛府舍人（衛府舍人とは、近衛兵衛門部をいふ）の多かりけんは、賣れたる故ならんか。中頃より諸國受領の政おとろへ、庄園多くなりて、公田減じ、調庸租税やう／＼に少くなりて、成功といふ事いできたり。成功とは、造宮造寺にもあれ、臨時の大事の公用ある時は、私物を以てその事を成し、功を立てて、官を申す事なり。本朝文粋に、大江匡衡朝臣の美濃守を望む申狀に云ふ、

匡衡爲二尾張守一之時。撫レ民治レ國。致二合期之勤一。有レ功無レ過之由。諸卿僉議已畢。又依二官符宣旨一。修二造國分二寺神社諸定額寺十二箇所一。不レ申二請官物一。別進二造伊勢豐受宮之料米五百斛造宣陽殿料准穎十餘萬束一。依二官符宣旨藏人所召一。所二交易進一絹二百餘疋等。不レ立二用公帳一。皆是諸國吏之誇レ功稱レ雄之事也。

とあるをもて思へば、此事はじめは受領など、何となく土木の功をなし、召さるゝ物たてまつり置きて、かさねて熟國温職など望むたつきにせし物なりしを、用度年をへて乏しく、造營日に逐うて多くなりしかば、ことさらに一分二分のともがらを催しても募らるゝ事になりけん。されど白河院、鳥羽院などの御時までは、必ず闕によらるゝ事にて、朝野羣載に載せたる申狀ども皆其定なり。衛府尉、諸司三分を、無員數にして成

本朝文粋―藤原明衡の撰、嵯峨帝より一條院まで十五代間の詩集

類聚三代格―三代格、即ち弘仁格、貞觀格、延喜格の三代を類聚せるもの

年々隨筆　三　壬戌

官を賣らるゝ事は、いつよりか有り初めけむ。皇綱のゆるぶ基にて、かなしきわざなり。本朝文粋に載せたる菅三品の異見三箇條の中に、請レ停レ賣レ官事といふ條ありて、

方今授任之道非レ不レ正。黜陟之規非レ不レ明。然時有三以レ財官二レ人矣。公家以爲助二國用一。衆庶以爲輕二天工一。云々。

と見えたり。これらはいかなる官を賣られしにかあらん。類聚三代格に見えたる昌泰四年格に、

播磨國解稱。調庸租稅。國之大事也。此國百姓。過半是六衛府舍人。初府牒出レ國以後。□稱二宿御一。不レ備二課役一。領二作田疇一。

又延喜二年の格に、

河內三河但馬等國解稱。此國久承二流弊一。□多二困窮一。就レ中頗有二資產一。可レ堪レ從レ事之輩。既帶二諸衛府舍人一。云々。

涅槃の期―死期
阿難、迦葉―共に釋迦十六弟子の一、こゝは有爲の弟子の義

せにしか。京にては六如、蘆庵、江戸にては平洲、松窓、みな世にゆるされし人々なり。何よりも本居先生こそあたらしけれ。故事記傳など寶とある書つくり出で、やんごとなきあたりにても物きこしめし、弟子などもよろしきが多かれば、其方はあかぬ事なければど、猶涅槃の期おそからんには、めでたき說敎どももあるべく、阿難、迦葉も數そふべきを、辛酉の厄、これぞいみじき事なりける。

享和元年十二月十一日於二品川莊居一更成二一小冊一了

正明

壺の石文―此事「閑田耕筆」卷之一に詳し

革命―陰陽家の語にて、災厄あるべき辛酉の年

あり、猶奥の地にもさる所ありとぞ。共に信じがたし。多賀城碑は天平の古物にて、いと／＼めでたけれど、壺の石文にはあらず。つぼの碑は、古歌どもに多くは蝦夷を詠みあはせたるにても、いたう奥なる事しるきうへに、清輔朝臣の家集に、

石ぶみや津軽の遠にありと聞くえぞ世の中を思ひはなれぬ

とあるにて、津軽近き所なる事を知るべし。袖中抄に、顕昭云ふ、

いしぶみとは、陸奥のおくに、つものいしぶみあり。日本のはてといへり。但田村将軍征夷之時、弓のはずにて、石の面に日本の中央のよしを書附けたれば、石文といふと云へり。

と見えたるにも、多賀城にてはかなはず。南部殿のしらす地につぼ村あり。そこに石文大明神といふ社あり。石文湮滅して後、その跡を神に祭りたりといひ傳へたりとなん。これよくかなひて覺ゆ。かやうの類諸國に多し。多くはすきものの、我郷にゆゑありげにせんとてのわざなれど、なからんも恥なき事なり。かやうの事に強ごとする、いとあぢきなし。

ことしは革命の運なれば、何事かあらんとゆゝしかりしに、名高き物しり達こそ多くう

七ふには―「陸奥の十ふの菅薦七ふには君をねかして三ふに我ねん」夫木抄

金葉集、

三日月のおぼろげならぬ戀しさにわれてぞ出づる雲の上より

新古今集、

花ながす瀬をも見るべき三日月のわれて入りぬる山の遠方

風雅集、

ほのかなる俤ばかり三日月のわれて月見る名や立ちぬらん

新後拾遺集、

思ひいづやあら磯浪のうつせ貝われてもあひし昔がたりは

山家集、

いむといひて影にあたらぬ今宵しもわれて月見る名や立ちぬらん

此等わかれてと見てはきこえず。

二村山は尾張國なり。兵部式に、「尾張國驛馬。（馬津新溝兩村各十疋。）」とある兩村（印本兩を雨に誤る、古本どもには兩と有り。）これなり。今は兩説なる中に、多くは三河國と定めれど然らず。陸奥の十府の菅薦、とふは地名にはあらじ。七ふには云々、みふに云々とある語勢にて知るべし。今宮城郡にその所

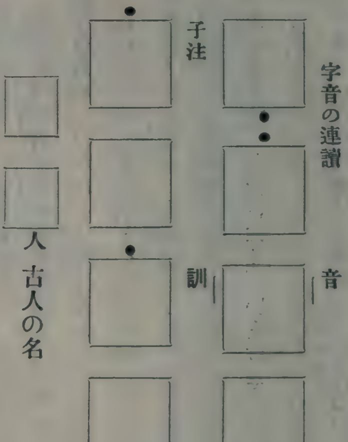
むらい云々—無禮も頓著してゐられず
良治がり—良治が許へ
聖賢—清酒を聖、濁酒を賢といふ、古へ支那酒客の通語
利口—洒落言葉
竹の葉云々—此君（シクン）とは竹の異名なれば、酒の異名の竹葉に掛けて洒落たる也
岩にせかるゝ云々—崇德院「瀨をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ」

たり。酒いたうすゝみて、むらいもさりあへず、歌よむもあり、すゞろなる朗詠などして、もて興ずるほどに、亥の時もはやう過ぎにけり。良治はかへりぬ。行教も正明も酔ひふしぬ。又の日はかしら痛く起上るべうもあらず苦しければ、「昨宵歡樂生二歡樂一」と書きて良治がり遣りつれば、「昔日聖賢味二聖賢一」と書きそへてやがておこせつ。聖賢とは酒の事なりとぞ。

尾張國に朔花といふ誹諧師あり、誹諧もけしうはあらぬなるべし。利口などしてをかしき翁なり。一日此朔花がり行きしに、やがて盃もて出でて、「何事の情をも添ふるはこれこそあれ、いかにぞ日頃はまゐるや」と問ふ。「一日も此君なくてやはあるべき」といふに、「さりや、竹の葉ときこゆる物なれば」といひしは、をかしう覺えたりき。

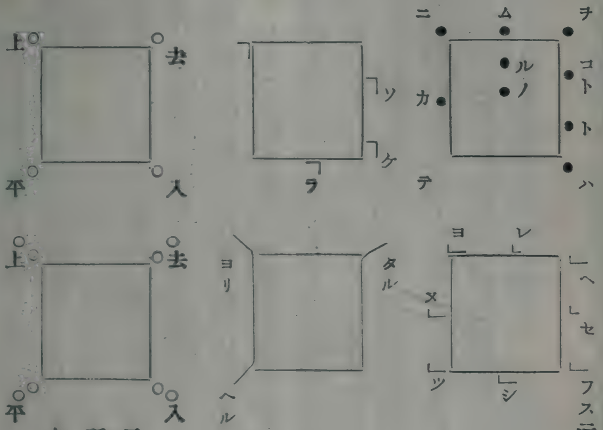
われてといふ詞を、先達はわかれて說くめり。さても、「岩にせかるゝ瀧川の」といふ歌はかなへれど、異歌は解きがたし。われては、わりなくてなり、わりなくのなくは、無の意にあらず、おほけなく、いとけなくのなくなり。りとれと通ふ、もと同言なり。古今集、

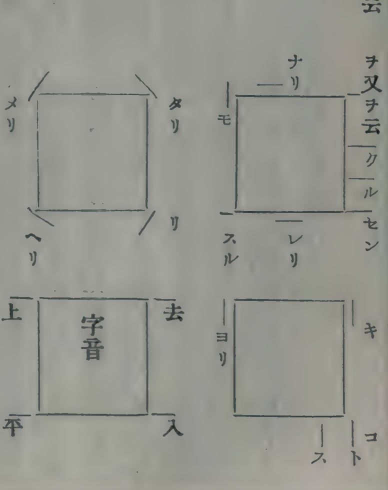
よひのまに出でて入りぬる三日月のわれて物おもふ比にもある哉



子注は文字本文の大さにて字の首に朱にて〇これほどの圏を隔字につけたり、又毎字つけたる所もあり。

斯くのごとし。字音は、平上去の三聲は、文字の平上去には拘らずして、よみざまの平上去なり。入聲は入聲の文字なり。すべて何書に聲をさしたるも斯くの如し。やまひを歡樂といふは、死喪を吉事といふ如く、凶をさけて言へるなり。五六百年こなたの記錄どもに常見ゆ。去年の秋、萩の花さかりに咲きみちて、池水にうつろふがをかしきに、月さへをかしき比なりければ、稻山行敎、淸水良治などに消息して、まとゐし





又字音の傍注に乚—立—と書き附けたる所々あり、乚ハンの字ォをはぶきたるなり、立は音の省文なり。

稻懸太平—本居太平、本居宣長に師事し遂に其の養子となる、稻懸は本性

といへば、か文字柔軟にて、ら文字う文字やう〳〵にあがり行く故、發語の勢し文字に及びて、それにひかれて濁らるゝなり。幾度もいひ試むれば、敎を待たずしてよく知らるゝ事ぞ。

本居先生、古と今と淸濁違へる事ありといふ說ありて備れり。遠江國人石塚龍麿といふ人、この說をひろめて、古言淸濁考といふ書をつくれり。一年伊勢へ物したりし頃、稻懸太平これを見せたりき。旅のならひ、何くれと心せかれて、よくもえ見わたさゞりしは、心のこるわざなり。今上木すべしなどいふ、はやう事なりぬなどもいふ。さらば又見る時もあらんかし。そも〳〵此淸濁の異なるゆゑは、いひざまの上り去りの異なるなり。すべて物いひは、上りざまなるが便よきにや。言便といふもの多く上聲なり。上聲の下は濁る事上にいへるが如くなる故、古淸みたるを、後には濁るが多し。かの淸濁考に書集めたるもさこそあらんと推量らるゝはいかゞあらん。

令の校合にあづかりし比、古本どもにつけたる點を勘合せて點圖をつくりたり。その後律式などの古本を見るに皆おなじければ、法家の點一例なりけん。

定なる書をさく／＼見えずなり行くは、あたらしく悲しきわざなり。天台、眞言の經疏の類は、印本にもおほく聲をさしたり。それに從ひてよむとも見えざなれど、告朔の餼羊にていと嬉し。皇國の書も、國史令律などうるはしき物はさらにも言はず、歌物語といへども、上り去りおごそかに調へてよみし物なり。顯昭の古今集注は、注にすら清濁四聲をさしたり。今の學者は、かゝる事あるものとも思ひたらず。

字音に訓みつくるスルセルなどの類、或は清みあるひは濁るは、平上去によれり。そは文字の平上去にはあらで、よみざまの上り去りなり。去聲は言ひ初むる時つよくて、やう／＼さがり行く聲なる故、發語の勢開口のところに盡きて、訓みつくる文字までに及ばねば、語のまゝに清まるゝなり。上聲ははじめ柔にて漸うにつよく上る聲なる故、發語の勢よみつくる文字まで殘りて、その勢にひかれて濁らるゝなり。便㆓童蒙㆒辨㆓陰陽㆒この二つをいひ試みて、發語の輕重を知るべきなり。平聲のは、もとするゑ同じほどなる中に、いさゝか上聲へちかきは濁るなるべし。此事字音に限りたる事にはあらず、よろづの詞みな此定なり。たとへば辛苦なる事をからくしてと言へば、からの二文字去聲なる故、發語の勢こゝに盡きて、し文字は語のまゝに清まるゝを、言便にからうじて

告朔の餼羊―虚禮なりと雖も、事に害なきものは之を存し置く方、廢止するに優れりとの義、此語論語八佾篇に出づ

言便―音便

るやうになりて、餘韻は隱々として聲の喉へかへる間にあり。皇國の詞には平上去の三つあり。その上り去るさまいたうきは〳〵しからず。から國の聲にては、同じ平聲といふほどなるべし。しかさがる事甚しからざる故、いかに言ひなしてもつまる事なければ、入はなし。たゞ俗語に、人がサッサとはしる。火がクワックワと燃るといふたぐひ、たま〳〵入聲なれど、それもいくつもかさぬる事は、息つまりていひ難し。そは餘韻なき故なり。から國にては、餘韻咽喉の間にありて、息のつまる事なきゆゑ、いくつも重ねていはるれども、猶詩賦のたぐひ、しらべよく調ふるには、多く重ねては惡しかるわざなりとぞ。

唐書佛書などの古本どもに、四聲をさしたるは、皆よみざまの上り去りなり。そのかみは假初に書よむにも、訓詁の曲雅なるはさるものにて、よみ聲の上り去りまでとゝのへて、うるはしくめでたかりしを、近頃は、荻生惣右衛門といひし人、訓をやうなきものにおもひ、音がちによみなし、てにをはもところへず、いやしげに物せしが、かく下れる時世にあひて、あまねくなれるなりといふ人あり、さる事にや。ひたすら相傳といふ事をやぶり、見識といふものをさきにして、みだりに物するやうになりて、おのれが知見の陋きまゝに、かやうのすぢをも皆迂遠なりと心得て、鄙俚きよみざまに物するゆゑ、清濁四聲訓詁の則などやう〳〵失せて、その

唐菓子―古へ木の實の外に、漢土の寒具の類を學びて作れる菓子

尺素往來―一條兼良の撰に係る書簡文の書

四聲―漢字の聲調の似たるによりて分てる平聲、上聲、去聲、入聲の四大別、又或は上去入の三聲を合して仄聲といふ

米の粉を粘してまろめて蒸したるを、世にダンゴとぞいふなる。團子といふ字唐書に見えて、同じさまなる物と見ゆれど、音訓にわたれゝば、これによりたる名にはあらじ。八種の唐菓子といふ中の團喜よりうつれるにやあらん。今團喜の形を見るに、米の粉に胡麻をまじへ、粘して丸くしたるものなり。白き黒き相混りたるが碁に似たれば、團碁といふものなるを、漢音によみなして、好字に書き改めて、團喜といふにやあらん。尺素往來に、碁子麪といふもの見えたり。これは伊勢、尾張などにては今も調ずる物にて、湯餅に胡麻を入れたり。これらをもて思ひよれる事なり。さて今のダンゴには、胡麻は入れざなれど、そは省けるにて、代を經るまゝにうつれるなり。此考なほ迂遠にや。

から國の四聲といふは、上聲は、言ひはじめ低くやはらかなるが、末やうやくにあがり強くなる聲なり。平聲は、もとすゑ同じほど、去聲は、はじめ強く高きが、やう〳〵にさがる聲なり。聲のさがるさま、遠ざかり行く心地するものなる故、去といふ。入聲もさがる聲なり。そのさがる事直に急にして、末つまるばかりの聲なり。つまる聲は喉のうちへ更に入り行く心地する故、入といふ。去聲と入聲とは同じくさがる聲なる中に、去はやう〳〵にさがる故、アイウと引き、ンとはぬる韵あり。入は直にさがる故、息つま

ど、その考共も、あたらざるも多かれば、あいなきたのみ所なり。すべて世の事と詞と打あひたる物にしあれば、今時の雜事を、古言にいひとらん事難きわざなり。されば俗語も入りまじりて、頼政の卿の射たりけん怪鳥のごとく、かしらは猿尾はくちなはにて、見苦しきわざならずや。學問を打出でてとく見えんとのすさみにこそ。よしなしよしなし。

佛法に、結夏といふ事のあるは、天竺はいと暑き國なれば、夏のほどはいと苦しく堪へがたくて、何事も懈る事なるを、それをも堪へしのびて行すませば、おのづからその行業もすゝむゆゑの事なり。今の世に寒稽古とて、何伎藝にても、冬のいと寒きに、朝疾くおきて物するも同じおもむきなり。皇國は寒さ暑さおなじ程といふ中に、猶寒き方の忍び難き故、寒稽古するなれば、法師たちも結冬したるなん宜しかるべき。

佛書に見ゆる偏袒右肩は、かの國はいと暑き故、常は左右ともに袒ぎたるを、貴き人にむかへば、片方を著るゝにやあらん。打聞はしからざるが如くなれど、貴人を見てことさらに肩ぬがん事、あるべき事と思はれず、儀軌などいふものには如何ある事ならん、尋ね問ふべし。

頼政云々—源頼政禁中に鵼を射たる事、平家物語卷四に詳し

偏袒—片肌脫ぐこと

儀軌—佛家の儀式の書

不平―原本この文字を傍註せれど、正しくは風病あり、雜藥も草藥の誤

おほし垣下主云云―總ての主人方の取持の人々は甚だけしからぬ

斯くばかりのしるしとある―斯程の光榮ある

ふくつけし―むくつけし、親しみなし

ぜたる、さし對ひたる詞にも、わりなく字音に言ひなしたれば、ふとは聞取りがたくて、やゝと打かたぶくに、云々の事よとことわりたるなど、いと便なし。をこがましき事ながら、これ人情にて、おのづから然るにや。源氏物語箒木巻、蒜食の女の詞に、

月比不平おもきに堪へかねて、極熱の雜藥を服して、いと臭きにより、え對面給はらぬ。

又乙女巻博士の詞に、

おほし垣下主、はなはだ非常に侍りたうぶ。斯くばかりのしるしとある何がしらを知らずしてや、朝廷には仕う奉り給へる。はなはだ嗚呼なり。

などいひしことと見ゆ。此物語讀む人、誰かは蒜食ひの女はたをやかならず、博士はこちなくふくつけしと思はざる。さてまのあたりの學生らの、片ことまじりの字音ことばは、いかゞさだむる事ならん。中には「今日大風土砂眼入」などいふがわびしきといふ人もあるべし。これはから言のみにもあらず、古學といひて、古事記、萬葉集のさたする輩は消息文にも詞にも、古言めかしきことのみ出できて、彼のからさへづりよりも聞きつかず見苦し。さるは契沖、眞淵、本居先生などの考を見なれ聞きなれて言ふめれ

唐さへづり—漢學の半可通の聞き分け難き言葉

安南のから國に似たるは、久しくかの國に屬きて、何事も其制をうくる故なり。さればかの二國の似たるは恥にて、似ぬ國々こそ却りてたけき物にはあれ。

同じ書に、公卿殿上人をさして、王人と書ける所爰かしこ見ゆ。もとより俗語まじりの俗文に綴りながら、此一言をきり入れたるはいかに。公家衆などいふを、俗なりと思ひしにや。そは天子に仕うまつる人といふ事にて、常れる文字とや思ふらん。いとつたなし。から國の書をも見よ。秦、漢よりこなたの百官を、王人と書ける事やはある。王といひては同じから國の天子にすら當らぬ文字なるを、ましてかしこくも我天皇にかけ奉らんや。そも〳〵左傳に、齊人、楚人などいふも同じやうに、王人といひたるは、ゆゑある事なるを、かばかりにてはよもえ知らじと、專門の學さへ、底ひ見ゆる心地なんする。

から書わづかに讀み初むるより、やがて其のすぢにまつはれて、よろづに唐さへづりの出來くるこそ見苦しきわざなれ。消息なども、いはゆる書牘などうるはしき様にもあらで、字音がちに書きすくめ、熟字といふ物も、思ふにまかせたるはた無きなるべし、俗語ながらにおしゆがめて作りなし、さても猶え續けもはてず、奉存候など、時々は打ま

中夏―四方の蠻夷に對して中央の開化したる國の義、中華

しらねども、これはいみじう物に狂ふわざなり。愚に頑なることはさるものにて、これは國をはづかしめ、公をもおとしむるすぢにて、いみじき罪なり。もと聖人の書をいたづらに讀みて、聖人の御情をえ知らぬ故、かやうの事もいふぞかし。孔子の外蕃を夷狄とていやしめ、わが國を中夏とて尊げに宣ひしは、いかなる御情ぞと、その御こゝろを知り學ばんに、かゝる妄言いはましや。かやうの人は、孔子のおのが父を賊と宣はゞ、己も賊といはんにこそ。

同じ東海談に、

　地名の正しく雅なるは、中華はいふにや及ぶ、次に朝鮮と安南とのみ。此二國はよく中華を學びたるなり。豈唯これのみならんや、名字稱號の正しきは、二國に及ぶやある。此國をのぞく外はすべて夷言なり。

といへるは、頑なる論なり。皇國とても、江戸をさして江戸といひ、大阪をさして大阪といひ、親をおや、君をきみと言はんに、何の正しからざる事かはあらん。西土の稱呼を準として、それに似たるを正しと思ふはつたなし。西土も一域、皇國も一域、異國々々も一域なれば、其國々々の稱號こそ正しけれ、からに似ずともなでふ事かあらん。朝鮮、

古學―我國固有の道義を研究闡明せんとしたる學問、眞淵、宣長等の唱へしもの

さうぐしき―ものさびしき

袞冕―天子の衣冠

べきを、あやしきえせ風流なり。されど漢文字讀なるは、かの連歌師などより稍ふるく、世あまねき事なれば咎なし。すべて何事も早うよりし來つる事の、我も人も物する事は、惡しからんとても如何はせん。さしはへて咎むべきにあらず。心づからし出づる事こそ、よく思ふべき事なりけれ。しかるに此ごろ古學といひて、から國をいみじう譏る人々、この家の名の唐めきたるを惡みながら、無くてはさうぐしきにや、松の屋、竹の屋など、訓にてぞ附くめる。もとの根ざしはから風をうらやみながら、うはべはつれなくやまと魂がはなるは、心きたなく、つみ深き事なり。これ誰人が初めつらん。眞淵なども、縣居といひしにや。そよ、此あがたゐの居、かの田居のゐとおなじ義にや。

平維章と聞ゆるは、篠崎金吾といひし人なり。東海談といふ隨筆あり。此頃物のついでこれを讀みし中に、

徂徠翁の孔子畫像賛に云ふ、是謂ニ克肖一。吾豈敢。是謂レ不ニ克肖一。吾豈敢。亦唯唐帝之賜袞冕十二章。儼然王者服。萬世之下。萬里之外。伏惟聖德遠矣哉。癸卯之夏。日本夷人物茂卿稽首拜手謹題。此夷人の二字、看官以て如何とかする。其評を聞かまほし。

とあり。維章がおどろかせし意は、けしからずと思ひしやらん、大見識と思ひしやらん、

里第—民間の館宅

くれ竹のふしみの田ゐのかりの夜に思ひ知られてもり明すらん

などの類、猶多かり。

居所に名づくる事は、九重のうちの事なり。さるは、おなじやうなる殿舍門廊いと多かれば、名なくてはわきまふべきやうなき故に、建春門、宜秋門など名づけしなり。里第なるは、たゞ西對、東對、惣門、中門などにて事たるめれば、ことさらに名を設けし事きこえず。東三條殿、小一條殿などいふは、その在所をさして言へるにて、異家に分たんとて、外の人のいふ事なり、風流につけし名にあらず。枇杷殿、紅梅殿など、ことさらめきたるも有れど、さる木の目にたつがありしを、おのづから呼び初めたるにて、地名よぶも同じ意ばへなり。あるじの意として設けられたるにはあらず。やゝくだりて、連歌師などにこそ、梵灯庵、種玉庵などいふも聞ゆれ。西土も、そのかみは然る事なかりしを、桃李園、獨樂園（猶ふるくもありもやすらん。ふとはえ思ひ出てず。蘭亭などはいかゞあらん。）など、唐の比まれ〳〵見えて、宋よりこなたやう〳〵多く、今はなべてなるやうなり。皇國の儒者たちは、よろづ唐風を學ぶならはしにて、家の名はた人人にさたすめる。儒者ならでも、なま心あるものは、皆この家の名つくるならはしなり。小き家たゞ一つもたらん人、何某が宅にて事たりぬ

飛鳥井に云々—催馬樂「飛鳥井にやどりはすべしかげもよしみもひも寒しみまくさもよし」

結ぶ手の—下の句「あかでも人にわかれぬるかな」古今集、紀貫之

かん事いかゞと思ひて、田づらの家の事とぞいふなる。さらば山里を山ゐとも、浦里を浦ゐともいふべきを、さる類一つもきこえざなるはいかゞ。すべて居の字をゐとよむは、起居の居なり。居所の居はすまゐとよむべき意ばへなり。（もとゝ訓と、かたへはあひて、かたへはあはざる、常ある事なり。居の字、古くすまゐとよみし事ありやなしや。ふとはおぼえねど、歌の語にて、しかよむべき意ばへなり。）ゐと訓むべきよしなし。もとゐといふ物を知らで、強ひたる説なり。ゐを堀井戸の事としてかなはぬは、田ゐに限りたる事かは。「飛鳥井にやどりはすべし」も、「せかゐの水をひさごもて」も、似つかはしくもきこえず。「結ぶ手の雫に濁る山のゐの」とある、堀井戸の水、手に結ぶべきやうもなく、雫に濁らんやうもなし。「走井のこかやより」も、堀井戸の底に萱の生ひんやうあらましや。池と渠との事としては、一も滞ふる所なし。さて又、此田ゐといふ詞、後々にはたゞ田の事と心得て詠めるが、撰集にも入れり。續千載集に、

あし引の山した水をひきわけしすそわの田ゐに早苗とるなり

新拾遺集に、

筑波嶺のしづくの田ゐの秋の庵このもかのもに煙立つなり

新千載集、

飛鳥井—山城國東の京二條萬里小路にありし井

出でて、二様に書く說はわろしと、誰もいひたりき。（今尾張國美濃國などにて、一ツ水口より七村八村ほどづつ水を沃す。其村を井組といひ、其事につきたる雜費を賄ふ米を井料米といふ。それを石高にわりつくるを井高といふ。）さるは山田は山の尾さきとく〱の間を築きとめて、その山のたり水雨水などをためて池として、（萬葉集九に、つくばねのすそわの田ゐとあるにても、其さまを知るべし。）ひの口より水をかよはして、其下なる田にそゝぐ事なり。（歌に池水の言ひとかゝるは是なり。）これを池ともいひ、沼ともいへり。（名所の池沼みな此事なり。今も中國にては池といひ、東國にては沼といふ。）打まかせては池沼といふものなれど、田に沃す料の水なるゆゑ、井とも、井どとも、（どは所の意。）山ゐとも、田ゐとも言ふなり。さて又平なる地にては、大井川などやうの河をせきわけて（ゐせきといふは、川の底に杭をうち、土石を集めて、そのかみに水の淀むやうにして、其淀より水をせきわくるなり。田にまかす水をせきわくるゆゑ、ゐせきといふ。）細き渠を掘りて、その流の末より沃すなり。その堤を井手といふ。（手は畷の手なり、今いふ土手もその詞の遺れるか。）今尾張、美濃などにて井桁といふ。（けたはゆげたのけたと同じかるべし。かれは、溫泉を人のあむべき淺深をはかりてつきとめし土手の事にやあらん。）山城の井手も、さる堤のありし故、所の名にも負ひしなり。玉川やがてその流なるべし。飛鳥井も、せゐも、數々の某井も、みな此渠と池との事なるを、近き世の先達は、井を堀井戸のみの事と心得たるにや。さては、「尾花散るしづくの田ゐに雁がね も寒く來啼きぬ（萬葉九）」又「伏見が田ゐに雁渡るらし（萬葉九）」又「朝霧のたなびく田ゐに啼く雁も（萬葉十九）」などあるを、井戸の底にて雁の鳴

陸奥に云々―同日記附錄に出づ
此人―蜻蛉日記の筆者即ち藤原兼家の室

假字もしか二樣に書かるゝ事なれど、それあらぬ事なり。をかしをおむかしの略といふは、萬葉集に、おむかしのおを省きてむかしといへる所もあれば、むを省きておかしとも言ふべしと思へるなれど、おむかしは、面向けしの約れるにて、（もむの反むなる上に、同聲にてことに約めやすし。）めで思ふ時は、面のその方に向はるゝを言へるなり。むかしは向けしにて、おといふ詞はもとよりなし。（向けしも面のむかはるゝ事なり。おもとはいはでも其意になる。）省きたるにも約めたるにもあらず。をこかしといふ詞はすべてなき事なり。をかしのをは笑ふ聲、かしは語辭（わらふのわも聲、ちふは語辭。）にやあらんと且は覺ゆれど、それ將よしなき穿鑿なり。たゞ笑ふ事とのみ心得たるなん、おいらかにてよからまし。穿鑿をむねとすれば、いたづらなるちからを費すものなり。蜻蛉日記に、

「陸奥國に、をかしかりけり所々を繪に書きてもてのぼりて見せ給ひければ、

　陸奥のちがの浦にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし」

とあるも、おも白き方なるを岡にいひかけたれば、をかしなる證とすべし。此人の父倫寧朝臣の陸奥守になりしは、天暦八年なり。任はてて上りし此の歌なれば、天德のはじめの事と定むべし。和名抄はた此前後にこそ出來つらめ。和名抄の假字とらんほどにては、いかでかこれも取らざらん。村田春海にさきに對面したりし頃、つゝじの岡など引

置きまどはせる—心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花

何がし—服部嵐雪

美晴—米山美晴

から國にては、菊は黄なるを愛づめり。詩どもにも黄菊、黄花などぞ聞ゆる。皇國には、置きまどはせると霜によそへしより始めて、白きをむねと言ひならはしたり。實に手を盡したる種々の色よりも、白菊黄菊のいたく大ならず、又小くもあらぬを、わざとつくろひなどもせで咲かせたる、此園の中など、そこらの松影に匂ひみちたるこそをかしけれ。そがぎくとは黄菊のことなりといふ、さる事にや。何がしとかや聞えし連歌師の句に、

　黄菊白菊その外の名は無くもがな

さる事なり。

紅葉は楓、銀杏、返す〴〵めでたし。かつらといふ木の黄にそめたるは、銀杏よりもめでたしと美晴語りき。此かつら、賀茂祭のおなじ物にやあらん。ゆかしき事なり。

をかしとは笑ふ事なり。さるは心にめで思ひて、樂み喜びて笑ふも、嘲りそしりつまはじきをして、笑ふもみなをかしにて、いづ方につきても、しのびかねて聲にあらはるゝ事なり。わらふといふ詞も、此二かたにわたりて、古今おなじ事なり。しかるに田中道麻呂といふ人、「めでたのしむ方は、おむかしの略にておかし、あざみそしる方はをこかしの略にてをかし。もとより詞異なり」といへりしを、本居先生もこれをよしと定めて、

文月―七月
あかぎ―牛込赤城
卯月―四月
ふくつけさ―むくつけさ
うつき―憂、卯月
事ざまし―興をさます
日ぐらし―日暮里

郭公をめづる歌、古にはをさ〳〵無し。おのづからありもすれど、後々のやうに打まかせてめでたき物にしたるにはあらず。いつの頃より斯くもてなして、我人めづるものにはしたりけん。それも、京にては稀に聞くゆゑの事なり。江戸にては、はじめ一日こそ、これぞ初音よと思ふに、めづらしき心地もすれ、月日へて、里なるまゝに、たゞ耳のもとにさしつけたらんやうにてうるさし。四谷、市ケ谷などにては、文月なかば、猶聲たえず、いとすさまじ。卯月に閏のありける年、あかぎの杜の木陰すゞしかるべしとて、二人三人物しつ。そこはかとなく茂りあひたる、遠近のけしきいとをかしうて久しく立てるに、時鳥のわが陰しめたる槻の木にしも、二つ三つとまり居て、いづれまされりと音をつくす。うるさしといへど、行くての聲は猶をかしきを、こゝ去らず鳴くは、ふくつけさにくさいはん方なし。おのれ、

　うるさしよ聞くもうつきの今年またあまりあるまで鳴く郭公

と詠みつ。事ざましなる歌なり。斯くいひながらも、年ごとの卯月のはじめ、今は鳴くべきにやと、心もとなうて待たるゝぞ、心よわきや。日ぐらしにて昨日、小石川にてをとゝひなど、人づての聞ゆれば、あやしうすゞろなる心地す。

子は云々ー論語に「父爲子隱、子爲父隱、直在其中」

諡といふは、まことにはあぢきなき事なり。生けりし時の行迹の善さ悪しさを論じて名に負すとぞ。まさしく宜しからぬ事あらんからに、父のため、君のため、あしき諡おくるやうやはある。子は父の爲にかくすと孔子の宣ひつるものをや。行迹につきて名づくとはいへど、うみの子孫のうけ繼ぎたるは、わろものもよき諡を得て、國をうしなひ身をほろぼして、詐を我がすぢに傳へざるのみ。よき行あるも悪しき諡おくらるめれば、何の勸誡にかはあらん。畢竟無用の詐なりかし。皇國に此制を立てられしは、桓武天皇の御時なり。（天平寶字二年に、天平のみかどを勝寶感神聖武皇帝と尊號上りし、これぞ始にはありけれど、此度は、臨時の事にて、恒の典とせられたるにあらず。又公式令に、天皇諡とあるは法を設けて行はれざるなり。大寶養老に此事ありしには非ず。）さてその御代を桓武とたてまつりしより、其制たゞちに變じて、仁明、文德、光孝、此三御代の外はなし。（その始は遜位みかどには奉らざる故事なりけれど、やがて村上天皇など在位崩御の御代にも上らず。）崇德、安德、順德など、ことよりて聞ゆるも、御追號とて事異なり。政迹によりて御諡たてまつるが人情にそむきて、神の御心に叶はぬ故にぞあるべき。秦の始皇制して云ふ、

朕聞、太古有レ號無レ諡。中古死而以レ行爲レ諡。如レ此則子議レ父。臣議レ君也。甚無レ謂。朕不レ取焉。

といふ事もあるは、誠に千載一人の卓見の君なりけり。

有職—古實を取調ぶる學問

雅亮の裝束抄—群書類從には滿佐須計裝束抄として收む、寫本二卷、康永二年大炊御門冬信の奥書あり

年々隨筆　二　辛酉下

日野中納言資朝卿は太平記に見えて、人のよく知れる人なり。かの卿は、忠烈のたぐひなきのみにあらず、有職の事もいみじかりけり。その日記を見て知るべし。此記世にもまれに侍るなるを、先生はうつし得てもたれたり。絵の事を唐笠と書かれたる所ありて、此名いと古かりけりと、めづらかに覺えたりしを、はやう雅亮の裝束抄に、「その内に鏡臺をはりて立つ。その體、燈臺の土ゐなくて、からかさの紙のやうなり」と見ゆ。猶ふるくも在りもやすらん。

同じ帝の再度御位につかせ給ひしは、稱德、齊明、皆女帝におはします。さてはじめの度は崩御ましましたるにあらねば、御諡あるべきやうもなきを、皇極、孝謙と奉りたるは、孝謙、稱德は、天平寶字二年に、寶字稱德孝謙皇帝と上りし、現御世の尊號を、二つにして用ひたり。されど二つにしては二所ときこえていかゞなり。いかなる事ならん。桓武天皇の御時に、上世の御諡は奉りしといふ説あり。その時仰事うけたまはりし博士御代のかはる毎にかたはしよりつけ參らせて、玉體の一柱なるもいはず、疎漏なりし事にこそ。

し。也、矣、之、焉なども、此書に用ひたるはさま異なり。これはた謠のはやしにて、義理にあづからぬ故なり。世々の儒者たち、誰かは詩經を講ぜざる。さても此事のきこえぬは、經といふ名を尊ぶあまりに、謠といふ本を忘るゝにやあらん、如何あらん。

女の眉そる事は、黛もて畫かんとての事なり。さるは、生際のしどけなき所、色の濃き薄き所などありて、わろびたれば、それをそり落して、思ふまゝに畫くなり。今大かたは剃りたるまゝにて、畫かん物とも思ひたらぬは、無沙汰なる事なり。又はぐろめは、色のきばみてきたなげなるを隱さん料なり。共に女しく物心つきたるおもむきなり。俗にこれを元服といふは、あらぬ事ながら、おとなになりたる意はかよへり。

享和元年九月十一日始成二一卷一了。先生品川別業。長松密竹。頗爲二幽玄之所一。正明移二住莊中一。於レ今四年。欲レ勵二蹇劣之性一。而五車之富。遠在二江戸一。恨レ缺二旦昏披閲之事一。筆削鹵莽。併爲二是故一也。

石原喜左衞門正明

無沙汰—不注意
はぐろめ—おはぐろ

用の語—働く語、體の語に對す

打かへして謠へるなるを、たかを略きしなり。うたひ物には、打かへしてうたふ事も、上なる文字をはぶく事も、常の事なり。はやしとは、歌に勢あらせんとての彩なれば、令㆑榮の義か。いひはやす、もてはやすなど言ふも、榮あらしむる意なるべきこそ。はやしといふ名、古くよりいひこし事か、物などに見えざるか、すべて覺えず。はやすと用の語にいひたるは、貫首祕抄、平家物語などに見えたりき。拍子といふも、はやしの言便にはあらざるか。今の世の謠どもにも、此はやしといふ物常多かるを、よく思へば古のといたく異ならず、考のたつきにいとよしかし。

から國書の中に詩經といふは、そのかみの謠をあつめしものなり。されば此書の文字遣も、其心して見ずば有るべからず。虛字てふものも、只、斯、思、且などの類、此書をおきてはをさ〳〵見なれぬもあり。さるはゆゑあることぞかし。そも〳〵焉、哉、乎、也のたぐひ、各其義ありて、置くべき所大かたはさだまりありて、これにて義理を整ふる事なるに、詩經のは、さらに趣意にあづからず、たゞ音をかりたるものにて、謠のはやしなり。螽斯の斯もはやしなり。小序に、「若㆔螽斯不㆓妬忌㆒」とあるを見て、螽斯といふ蟲の名と心得めれど、鷽斯、柳斯、鹿斯などあるを倂見ても、斯は虛字なる事あきらけ

えもいはぬ—いふにいはれぬ、嘔吐

こぶし—辛夷、花始めて開く時、小兒の拳の如き形なるよりいふ

し。これを壺菫なりといふ人もあり、さる事にや。つぼすみれ、すみれ、もと一品にて、此花のいたう廣ごらざるより言ふにもあるべし。から國ぶみには、菜の部に入れたり。若葉を食ふ事ならんかし。大かた花は折るとこそいへ、摘むとはいはざるを、此花にしもしかいふは、莖いと短くて、折るとはいふべくもあらぬ樣なればなり。しかるを此あたりのものしり人、なまく〳〵に菜の類なる事をも聞き知り、又摘むといへるが、若菜などのやうに聞ゆるなど思ひあはせてのわざなるべし、此花をいと多く摘みもて來て食へりしが、いたうわづらひて、えもいはぬ事などして苦みけるとぞ。足八つありとて、あらぬ蟹を食ひし事、から人にもあり。物しり人の中々なる僻事する、今にはじめぬ事なりかし。

さくらの花待遠なる比、こぶしてふもののまづ咲出でたるが、それかとばかり似かよひていとうれし。此花を人におくるとて、

　時しあればこぶしの花もひらけたり君がにぎれる手にかゝれかし

續詞花集に見ゆ。此花の歌いとめづらし。

催馬樂に、「高砂のさいさごの」とある、さいは、はやしなり。さごのは、上の高砂のを

先生—本居宣長

山吹がさね—表は薄朽葉に裏は黄なるかさねの色

散るぞめでたき—「殘りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ」古今集

とありき。事のついでのをかしきに、こゝに書附けてん。をとゝしの春、おまへの花見んと先生に申して、百首百杯といふ事をしたりき。題をさぐりて歌をよむ。一首よむごとに、酒一杯づつ呑むあそびなり。ひつじの時より申の二點まで、一時あまりによみ終へつ。肴は一種物、正明は、王餘魚のあぶり物を山吹かさねの色紙につゝみて、山吹の打板につけたり。行教は題者なり。小き紙に百首の題を書きて、ひねりかけて、短き串につけて、さゝやかなる肴一つに一つづつさして、硯の蓋に盛りたり。題をとれば肴を得る、それやがて一杯の料となれり。かゝりしかば、行教のは食ひ盡しつれど、歌よむに心せかれて、こと人のは手だにふれで止みたりし。いとこそねたう覺えしか。流謙一勾當、米山美晴など、四人ばかりしての事なり。

散るぞめでたきと詠みしも理なり。櫻の盛はたゞ二日三日ばかり、あまりあへなき心地はすれど、又來ん春はと心いられして待たるゝも、久しからぬ故ぞかし。唐桐といふ物、葉のさま涼しげに、花の色いとめでたけれど、夏のなかばより秋過ぐるまで、たゞ同じさまに咲きたるにあきはてて、とく枯れよかしとさへぞ思はるゝや。

菫二種あり、いづれもよろし。葉の細くてながきが殊によろし。ひろくて短きは色あさ

立君―辻君に同じ、よたか

兵部卿宮云々―源氏物語「若菜巻下」の條

たはけ―戀をし

なり。順に戀の本情、逆は戀の風致なり。本居先生、此本情を準として徒然草を論ぜられたる、理は理として、をかしげなし。あふをむねと戀をいはゞ、辻君、立君、あふ事はたやすけれど、品くだりたる事なりかし。

人の心は、萬なだらかなるよりは、一ふしある方におもむくものなり。兵部卿宮の、眞木柱の君のいたうも惱ませてなびき給ひたるを、うらみ所なしと思したるも、此おもむきなり。からきは人の好むまじき味なればこそ、辛艱辛苦などもいふに、わさび、はじかみ、唐がらしといふ物をさへ好める人もあるは、たゞ甘くなだらかならんよりも、中々なる心地するゆゑなり。むかしの高き人たちに人しも多かるに、法師とたはけ給へる事の見ゆるは、唐がらし好むたぐひなり。

法師とたはくる事につきて、此頃讀みしから書拊掌錄に、

許義方之妻劉氏。以二端潔一自許。義方甞出。經レ年始歸。語二其妻一曰。獨處無聊。得レ無下與二隣里親戚一相往還上乎。劉曰。自二君之出一。惟閉レ門自守。足未二嘗履一レ閾。義方咨嘆不レ已。又問。何以自娛。答。唯作二小詩一以適レ情耳。義方欣然命取レ詩觀レ之。開卷第一篇。題云。月夜招二隣僧一閑話。

草は云々—紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながらあはれとぞ見る

あひ給ひし—源氏が

末には筆の勢たゆみてさま悪しく見ゆ。「あふをのみ戀といふものかは」といへるは、人情にわたりていとめでたし。源氏物語など讀むにも、花散里、うちの中君などのやうに、こともなくえ給へるあたりは見所少し。薄雲女院の御事よ。その事こそふさはしからね、かやうのあたりに、かぎりなき情は見ゆるぞかし。致仕の大臣の御女を、夕霧の大臣のえ給はん事のあまり似つかはしき故、六位すくせの事つくり出でたるも、物はかなき女三宮に、右衛門督のこゝろいれたるも、みなあひがたきより出でたるおもむきなり。手習の君は、何のすぐれたる所かはある。大將殿は、總角の君の御ゆかりに、草はみながらとも御らんずべきに、宇治の中君、左大臣殿の六君、世にたぐひなき女二人までも給へる兵部卿宮しも、からきうちかよひし給へるは、あやにくなるに御心のまさるなり。朧月夜の君に、弘徽殿の細殿にて始めてあひ給ひし夜、頭中將のすさめぬ四の君などこそよしと聞えしか。中〳〵それならましかば、今少しをかしからましと思したるも、今より見ては、さる御あはひにてと、けしからぬ事のやうに思はるれど、かへりて情ある事なりしなるべし。一夫一妻にさだまりたる後の世の心にては、思ふにたがふ事多し。そも〳〵これは順逆のたがひにて、遇ふは順なり、遇ひがたきおもむきは逆

纐纈—鹿子絞
倚廬—喪中に籠り居る假家
文永—龜山天皇
しろうるり云々—徒然草の盛親僧都の條に出づ
花は云々—徒然草

は纐纈にてするを、倚廬の御料は鈍色の布にてしたり。放免のつけ物、放免といふは、世のわろものの、かろき方の罪犯して流徒に配役せらるべきを、放免して檢非違使のつかふものなり。さる惡者は、かくろへたる犯ある者をも、おのづからよく知るものにて、追捕に便ある故なり。附物といふは、御幸始、祭の日など、ことなる晴にする事なり。はなやかなる木草の花を、隨身などの著るものにおしつくるなり。賀茂祭の日、檢非違使の具したる放免、附物する事にて、文永の祭の繪詞に此圖見えたり。これらは何の子細もなき事なるを、つれ〴〵草は、むげの人のみもてさわぎあつかひて、大事とも思ふめり。しろうるりは、さる物やはあるべき。色しろくたけ高くて、痴げに見ゆる人を、何となく言へるにて、よくせずば言ひそこなひならんも知り難し。「さる物をわれも知らず。もしあらましかば、此僧の顏に似てん」と言ひたるも、おもしろき言ひざまなり。しかるを、なき手を出し考へものして、「祕訣大事と言ひかまふるは、いかなる事ならん。いひし人だに知らぬ事を、後の代に知らんとするは、しろうるりに似たる人の所爲なりけり。

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」と書き出でたるはめでたし。同條も、

四部の弟子―四衆ともいふ、優婆塞は佛弟子の俗男、優婆夷は俗女

馬のきつれろ云云―徒然草の資季と具氏との問答の條、この説前の閑田耕筆に出づ

かわき砂子云々―同書、鎌倉の中書王蹴鞠の條

鹽云々―同書、有房とあつしげとの問答の條

さた―品定め

水引―水引の幕

は心につく物語もあり。證空上人とかいふ聖の、女の乘りたる馬に行きあひたるに、口とり、口をあしく引きて、堀にふみ落されて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな。比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼よりは優婆塞はおとり、優婆塞よりは優婆夷はおとれり。かくの如くの優婆夷の身にて、比丘を堀へ蹴入れさするやうやはある」といひて、きはまりなき放言しつと思ひしはをかし。女房に、「郭公は聞き給ひつや」と問はれて、「數ならぬ身はえ聞き候はず」といひしは、答のふと出來ざりしさましろくをかしきに、「數ならぬ身むづかし」と、定めたる詞さへをかし。もの知りがほする人に、馬のきつれう問ひたる、いと心とし。「かわき砂子の用意やなかりけん」といはれて、いかにはづかしかりけんと心ぐるし。鹽といふ文字のさたこそかたはらいたき事なれ。何がしのおとども兼好も、才のほど見ゆるよ。塩とかくは俗なりとや思ひけん。あつしげはさすがに道の人なりけり。ちかきほどは世にしらぬ物忘なるうへに、たゞ一わたり讀みつるまでにて、人の名も事のさまも、はやう忘れにたり。

布の帽額、帽額は、御帳の帷をかけたる桁のきはに、横ざまに引きわたすものなり。ひとへなるを中折にして、わなを下にして引くなり。今水引といふもののさましたり。常

紫摩金―すぐれたる黃金、佛語

天野氏―鹽尻の著者天野信景

あたらしみて―惜しく思ひて

けしうは―惡くは

らんもいかでか知らん。いとよう似たりといふ人もあれど、そは紫摩金の身のたとへに、黃疸やみを引出づるが如し。其色こそ似たらめ、尊さときたなさと、いとゞこよなし。から人もかの雜纂をかしとや思ふらん。つぎ〳〵出來て、四續まであり。出づるごとにいよ〳〵きたなし。

近き世の人の隨筆にめづらかなるは鹽尻、そのはじめ三百餘卷はありしとぞ。天野氏身まかりての後、下種男に、きたなき心のやつありて、盜み出でてほぐにして賣りける故、はやう世にたえて、其家にもわづか七十餘卷のこれりとぞ。堀田何がしこれをあたらしみてつひに百卷となせり。猶おびたゞし。おのれさきに爰かしこ抄出して寫せる本五六卷見つ。まだいと物まなびの物心知らぬほどにて、いかなる事とさだかにはなけれど、よろしき論も考もありつるやうに覺ゆるを、いかで又見てしがな。

隨筆の中にはつれ〴〵草、いと幸ある書なり。げに其世にとりてはよろしげなる筆つきとは見ゆめれど、枕草子など猶めでたき書はいと多かるを、何とも思ひたらで、注釋など所狹きまでつくり出でてもてはやすなる。大かた此書、文章などはけしうはあらぬを、道心がましく、さかし立ちたる事書きちらしたるが、かしらいたき心地す。されど中に

本居先生―本居宣長
さよみ―貲布、古へしなのきの皮を紡ぎて製せし布

李義山―名は商隠、玉溪子と號す唐代の人、最も律詩に長ず

隨筆は、見聞く事、いひ思ふ事、あだ事もまめ事も、よりくるに隨ひて書きつくるものにしあれば、常にはいとよく知りをる事も、忘れては僻事いひ、淺まなる考どもも立ちまじり、文章も艶にこまやかには、ふとえ書きとらで、こち〴〵しく拙き事などもありて、さまあしき物ながら、さるつくろひなきものなる故、心いき、才のほど、器のかぎりも見えて、中々おもしろきものなり。本居先生の玉かつまに、東鏡にあるさよみを引出でて、今のさいみにやといはれしを、江戸の物知りたちの中には、いみじう譏るがありとぞ。さるは、さよみは和名抄にも見えたるを、東鏡をめづらしげに引出でられたりとて笑ふなり。こは笑ふ人こそをかしけれ。げに貲布の物に見えたるはいと古けれど、玉かつまの此條は、東鏡を讀みたるほど、ふと思ひよられつる事どもの中にありて、物のついでにしいでられたる事なれば、和名抄にある事よく知り居らんからに、爰に引くべきいはれなし。是ぞ隨筆といふものの姿なりける。すべて此玉かつまに、淺まなる誤の何くれと見ゆるは、隨筆なる故なるべし。

隨筆の中に、いにしへ今、からやまとにわたりてめでたきは枕草子、李義山が雜纂にもとづきたりといふ說あり。時代のほどを思ふに、さる事ならんも知りがたし。又偶合な

源氏物語に云々—帚木卷に出づ

こち〳〵しき博士—氣すぐな物しり

追風—起居につけ衣の動くによりて起る風

ひ思ふならん。さらでも、家の中にそらだきをし、衣服にも何にも香たきしむる世となりては、しか臭きもの食ふべきよしなし。源氏物語に見えたる蒜食ひの女は、艶にやさしき事はなく、こち〳〵しき博士なり。それすら此香うせなん時、又立寄らせ給へといひて、そのほどは交もせざりしなり。かくむくつけき物にいひ思ひしより、おのづから禁忌のやうになれるなるべし。今は江戸などにては忌むべきものとも無きが如し。正明が故郷などにては、下種は忌まず、然るべき人はをさ〳〵食はぬ事なりしを、十年ばかり何となく食ふ人多くなりて、女も食ふやうにやう〳〵なり行くは、世の中の事しかのみあるわざながら、口惜しき事なり。今これを評めていはく、世あまねく食ふ事なるに、もとより穢ともなき物なれば、大かたの人のこれ食はん、なでふ事かあらん。神事にあづかる人がら、さらぬ人も神拜の日、貴人の御前ちかく物する日は忌むべし。女はたかきいやしきとなく、男もおもとづかへする人たちは忌むべし。物いふたびに立ちそへる追風、艶になつかしうもあらぬ物をや。そもこれらの事、正史典章おもひ出づるまゝに、いさゝか引出す。記錄先例所せく多かるを、悉く引出でなば、觸穢部類などうるはしき書にやならん、隨筆にはあまりしたゝかにや。

西宮北山—西宮記、北山抄、前者は源高明の著、後者は藤原公任の撰

事かき—事闕、不足

五辛—五種の味辛き蔬菜、即ち韮、薤、葱、蒜、薑

此官尋常忌レ之。但當二祭時一。餘司皆忌。

とあるは、穢惡の條に入りたれども、餘司の常に忌まぬをおもへば、猶神事にて穢にはあらず。其の字を置きて事を隔てたるも、上とは事異にて、穢にあらぬ故なるべし。管見かくの如くにて一決せず。西宮北山などに所見ありや。かさねて引考ふべし。とまれかくまれ、穢にうたがはしき物食はざらんに仔細なし。鯛鱸なき世の中かは、何の事かきかはある。今も田舍にては、肉くふはいみじき恥にて、まじらひをも嫌ふやうなるに、中々江戸などにてこそ、やんごとなきあたりを置きて、凡人は誰も食ふなれ。から書よみからうた作るなま學生、ことに多し。けがれといふを俗なりとさだめて、これ見識ぞと心得めり。いはゆる見識といふものなん、あやしき物はありける。

五辛食ふ事は、もとより穢にあらず、神事に忌む事は家說、社說には見えたれど、うるはしき制符はなし。日本紀十に、

日本武尊。披レ烟凌レ霧。遙經二大山一。既逮二于峰一。而飢之。食二於山中一。山神令レ苦レ王。以化二白鹿一。立二於王前一。王異之。以二一箇蒜一。彈二白鹿一。則中レ眼而殺之。云々。

と見えて、貴人もきこしめしつる事あきらけし。佛道よりうつりてや、穢のやうにもい

鰭廣鰭狭—大小の魚

釋奠の胙—古へ二月と八月とに孔子竝に其十哲を祭る祭に供ふる肉

御歯固—正月元三の日に、齢を固むる意にて猪鹿の肉等の如き堅き物を食ひし儀式

月夜見尊。受レ勅而降。已到二于保食神許一。保食神乃廻レ首嚮レ國。則自レ口出レ飯。又嚮レ海。則鰭廣鰭狭亦自レ口出。又嚮レ山。則毛麁毛柔亦自レ口出。夫品物悉備。貯二之百机一而饗レ之。

又十一に、

仁徳天皇三十八年秋七月。天皇與二皇后一居二高臺一而避レ暑。毎レ夜自二菟餓野一有レ聞二鹿鳴一。云々。及二月盡一以鹿鳴不レ聆。爰天皇語二皇后一曰。當二此夕一而鹿不レ鳴。其何由焉。明日猪名縣佐伯部獻二苞苴一。天皇令二膳部一以問曰。其苞苴何物也。對言。牡鹿也。問レ之。何處鹿也。曰菟餓野。時天皇以爲是苞苴者必其鳴鹿也。云々。

と見えたり。天武天皇の御時に、牛馬の肉を食ふ事を禁ぜられしも、猪鹿憚なき趣なり。釋奠の胙はさるものにて、御歯固の供御にも猪完、鹿完あり。後には雉、水鳥を代りに用ふる事なれど、はじめはやがて其物を奉りしなるべし。祈年祭祝詞に、「白猪白鶏」諸の祝詞に、「毛乃麁物毛乃柔物」などあるも、神饌の料ときこゆ。これら穢にあらじかと思ふゆゑよしなり。延喜式に、

凡觸二穢悪事一應レ忌者。人死限二卅日一。産七日。六畜死五日。産三日。其喫レ完三日。

四至之外—四至は四境、境内の外

きたなまる—けがらはしく思はる

が落ちたるか。延喜式によれば三十日なれど、ここはしからず。日數多きを上に記したればなり。產竝畜死七日。產三日。

文保記に、

猪鹿食人禁忌百日。同火人廿一日。又相火七日。不レ參二太神宮一。

と見えたる。みな神事によりていへる文なれど、死産に混じて差別なく、同火三轉忌むなど、正しく穢ときこえて、泆樂をつゝしむ作樂の類にはあらず。又類聚三代格に載せたる承和十一年の格に、

鴨河之流。經二神宮一。但欲レ淸二潔之一。豈敢汚穢。而遊獵之徒。就二屠割事一。濫穢二上流一。直觸二神社一。因レ茲汚穢之祟。屢出二御卜一。

又式に、

凡鴨御祖社南邊者。雖レ在二四至之外一。濫僧屠者等。不レ得二居住一。

といふ事も見ゆ。屠者は肉を屠るものか。四至之外にすら忌まるゝは、いみじき穢なるが如し。又皮はぐものにて、今の穢多の類か。いにしへは肉を屠るも皮をはぐも一つにぞ有りけん。穢多は今もいみじうきたなまるゝものにて、良き人は同火せず、家の内へも入れず。さて又穢にあらじかと思ふ由は、日本紀一に、

散齋—あらいみ、前に出づ

同火—同じ竈にて煮炊きすること

須蘇爾。都紀多々那牟余。故爾御合而。云々。

と見ゆ。重き穢ならば、御酒盞など參り給はんやうもなく、まして御合ひますべきやうあらましや。月水の女房常に内裡に祇候してはゞからず。禁祕抄劒璽條に、「月障内侍者。闕如之時或持レ之。不レ可レ然事也」とあり。宜しき事にはあらずとも、かりにも神器の役にしたがふ事あるを以て、重き穢にはあらぬ事を知るべし。又延喜式に、

凡宮女懷妊者。散齋之日已前退出。有二月事一者。祭日之前退二下於宿廬一。不レ得二上殿一。

とあり。祭日のみ局へおるゝにては、深き穢にあらぬ趣なり。しかるに當時社によりては、禰宜、祝部の後、さらでも神堺の内など、此禁忌いみじう嚴にて、タヤとかいへる下屋におろして、其ほど七日、跡の忌七日、火を改めて一日、十五日は同宿同火せぬ所もありと聞く。さては半に過ぎたる旅宿にて、いとからき事なるべし。物清るはよき事ながら、これはあまりの事にやあらん。

食レ肉は穢なりや否、いまだ勘定めず。穢ならんとおもふ由は、「内七言の忌詞に、「完謂レ菌一」とあるは、穢を避くる由にぞ有るべき。儀式貞觀大嘗祭儀に、

預二喪産竝雜畜死産一事。喪限二卅日一。食レ完限レ月。（日數の多少をいはず、其月の中をいむ事か。一本限レ日とあり。此本によらば、限二十日一などありし）

平戸記—寫本五巻、平經高の著、巻一延應二年正月より巻五仁治三年に及ぶ記録

御事ありし—御薨去

意須比—頭の上よりかぶりて襴まで垂れたる衣、後世のかづきの類

氣勢流—著て有る

穢所に入るには、薦を敷きて、其上を草履をはきてわたる。さては穢にならずとぞ聞く。又門の閾にも薦をかけて、その上を通ふ。閾をふめばやがて穢なりといふ。又簀子には、腰かけたるも穢にあらず。伊勢の祠官なども此定なりとぞ。平戸記、仁治三年十月十日順徳院御事ありしを弔ひ奉る所に、

其後參六條宮。御悲歎過法云々。令混彼穢給之間。乍著沓懸尻於簀子端。於北面妻戸口謁女房。閑談之處。御乳母尼公又被來謁。云々。

とあり。これらも其趣なり。

月水は、和名抄に、「俗云佐波利」とあり。和泉式部が歌にも、「月のさはりとなるぞ悲しき」とよめり。さはりといふばかりにては、重き穢にはあらざるにやあらん。古事記倭建命東征の御かへるさの所に、

入坐先日所期美夜受比賣之許。於是獻大御食之時。其美夜受比賣捧大御盞以獻。爾美夜受比賣其於意須比之襴著月經。故見其月經。御歌曰。云々。多和夜賀比那遠。麻迦牟登波。阿禮波意母閉杼。那賀氣勢流。意須比能須蘇爾。都紀多知邇祁理。爾美夜受比賣答御歌曰。云々。岐美麻知賀多爾。和賀氣勢流。意須比能

常世往―常夜ゆくにて、世の亂れて闇の如きをいふ

伯家―神祇官の長官

べし。文明、寛正などいひし比は、世中亂と亂れて、常世往やうなりしかば、明法の家家にも、はかぐ〻しき博士なかりしにこそ。公私につきて疑ある時は、神祇道に問はるゝやうになれり。伯家、卜家の代々の記錄どもに、其勘答あまた見ゆめり。假をいみといふも、神事の禁忌よりうつれる名なり。そのかみ忌ときこゆるは、七々日の法事のことなり。いみに籠るといふ事のありて、四十九日のほど、親しき人法師など本家にこもりて、念佛讀經などせし事なり。いみといふ名これよりうつれるかと思へど、しからず。

延喜式に、

甲處有レ穢。乙入二其處一。（謂着座。下亦同）乙及同處人皆爲レ穢。

とあり。人の死穢は著座をもて穢とす。座につかざれば、喪家に入るとも穢はなし。家内に入るとも板敷に立ちたるばかりは穢にあらざるか。源氏物語に、夕顔の君におくれ給ひてのくるつ日の所に、「大殿の公達もまゐり給へど、頭中將ばかりを、立ちながらこなたに入り給へと宣ひて、御簾のうちながら宣ふ」とあり。沓をはきながら板敷にのぼりしにや。今も公家ざまには、觸穢の時穢に混ずべからざる人、やむ事をえずして

明法道―大學寮の據所、大學寮は記傳、明經、明法、算道の四科を教へし處

去後來人者不レ及二丁穢一。清涼抄說有二此文一。
とある。いと心得やすければ引出す。
父母の喪に遭ふ人は、本服一年、服中すべて事に從ふべきにあらざる故、官を解かるゝ事なり。これを喪解といふ。罪なくて官を解かるゝ事なる故、公ざまにもその御心しらひありて、あるべき限は其官を虚しうして、服の期みちて後、復任せらるゝなり。さて又奪情從公といふ制あり。官も樞要の官、久しく虚くすべからず、人も器量たる人、久しくこめ置きがたき時は、相構へて出仕すべき由を仰せられて、事に從ふなり。此制事に便あれば、誰も〳〵此定になりて、服解の跡たえたるが如し。名敎のためには少し輕薄らぬやうなれど、何事もしかのみなりゆく勢なれば、さていかゞはせん。假五十日といふさだめは、奪情從公の日限をあらかじめ立てたるが如し。
假、服、汚穢、神事、みな法度に拘りたるものにしあれば、事に臨みて疑あれば、明法道にとはれし事なり。文保記、永正記と云ふ書あり、伊勢の祠官の汚穢の雜事を記したり。中に疑しき事ども官に申して、法家の勘答を得て定めたるも數多あり。神宮にのみ下されて、世にひろからぬ制ながら、准的の例に據あり。志ある人たち求め得て見る

延喜式―禁中の年中儀式其他諸國の恒式を記せる書、藤原忠平等の撰

具穢、傷胎穢、到二山作所一穢、改葬穢、血氣穢、灸穢、六畜死穢、産穢、燒亡穢など、古くものに見えたり。猶いろ〱の子細ありて、文保記、永正記に記せり。穢氣は神事にかぎらず、常々誰もいみきらひし事にて、中にも死穢（これは親に拘りたる事にあらず。穢に觸れば他人とても三十日けがる。觸れざれば父子とても穢はなし。）は、人にも轉る事なれば、穢者はおほかた世のまじらひもせで、ひたすらかき籠り居りし事なり。上件の四條、公家ざまには今もその定なれば、いとようわかれて惑なかめれど、世上にはをさ〱知らぬ事ゆゑ書きつけつ。さて死穢の轉るといふは、延喜式に、

　甲處有レ穢。乙入二其處一。（謂者座）乙及同處人皆爲レ穢。丙入二乙處一。只丙一身爲レ穢。同處人不レ爲レ穢。乙入二丙處一。同處人皆爲レ穢。丁入二丙處一。不レ爲レ穢。

とある本文にて明らかなる事ながら、簡略にて、聞きとり難くまぎるゝ所もあるべし。宇槐雜抄、仁平二年觸穢の事ありて沙汰ありし所に、

　死人の候所は甲也。死人取棄之後入二其所一之人は乙也。其人の來所は丙也。其人去之後來二其所一之人は丁也。（西宮、北山、清涼抄、天慶八年外記日記、皆有二此意一。）甲人來所は乙也。與二甲人一同時居合は乙也。甲乙去後向二其所一之人は丙也。丙人來所は丁也。與二丙人一同時居合人者丁也。丙人

祇官にて行はれし豐年を祈る祭
月次—月次祭、六月十二月の神事
神今食—六月及び十二月の十一日の神事
散齋—神事に預る人の一ヶ月間物忌すること、あらいみ
完—菌、獸肉也

しむ事なり。本文は、神祇令に、

凡散齋之內。諸司用レ事如レ舊。不レ得ニ弔レ喪問レ病食一レ完。亦不レ判ニ刑政ニ。不レ決ニ罰罪人ニ。不レ作ニ音樂ニ。不レ預ニ穢惡之事ニ。致齋唯祭祀事得レ行。自餘悉斷。

と見えたり。さる大事のみならず、諸社祭の上卿以下、又は奉幣の使にさゝれたる人々、社々の禰宜祝などみな此定なり。すべて公私の事につきて、神のおまへに頭さし出づるほどの人、みな神事することとなれば、今世上の人のうへにても、嚴密なる齋こそかたからめ、さる心しらひして、神拜はすべきことなり。その齋の主意は、志を神事に精一にせんとのことなり。をかしき事にも悲しき事にも、尊き事にも、何事にも心うつりて一すぢならぬを嫌ふ事なり。佛像經卷僧尼を忌むも、其かたの尊さに意のうつらんかとての事なり。重輕服の人をいみ、弔レ喪問レ病ことを忌み、不レ判ニ刑政ニ。不レ決ニ罰罪人ニなどあるも、悲しくゆゝしく心くるしきに心うごきて、神事おろかにやならんとなり。不レ食レ完。不レ作ニ音樂ニなど見ゆるは、たのしさに荒まんかとなり。これら皆神事の時ばかり忌みて、常は憚らず。もとより穢につきたる事にもあらず。

汚穢といふは、きたなきものに觸れて、その穢氣をうくるをいふ。死穢、産穢、五體不

服—喪服
素服—喪の時に著る白き衣服

曹司—官人又は女官などの部屋

新年—新年祭、陰曆二月四日神

かゝはりたる事にもあらず。
服は素服、鈍色に染めたる布の衣なり。親戚のおもひに居る日數のかぎり此衣をきる。歌に藤衣とよむもこれなり。鈍色は、今鼠色といふ色にて、その人の親しき疎きによりて、其色の濃き薄き意しらひある事なるべし。親戚のおもひにて、美服するこゝろもなき人情をねざしにて定めたる制なり。此服をきたるほどは猶悲びおもひ居る姿なり。假の日數だにたてば、服者といへども事にしたがひて、素服ながら内裏へも曹司廳へも參入せし事なり。中ごろよりは、父母喪にも除服を仰せらるゝ事となりしかば、今においては、公家ざまといへども、服を著ながら出歩く事はなし。まして下ざまには、服きる事は跡たえて、名の義をも知らざめり。結句は火の穢るゝ日限と心得る人も出來にたり。これはさらに穢にはあらず。たとへば、國をへだてて親の喪にあふ時は、服は一年なれども、穢は一日もなし。神事に服者をいむは、その哀戚に情のうつらん事をおそるゝなり。神事は、志を精一にせんと構ふるものにて、佛像經卷をも忌むと同じ趣意なり。きたなき故にはあらず。輕服にては、神事に從へる例さへ稀にはあるをや。
神事といふ事あり。新年、月次、神今食、新嘗などの諸祭、ことなる神事の時忌みつゝ

さうで—閉めずして

忌服—喪に籠る間

假—暇に同じ

さるゝも、いとゞ浮世遠き心地ぞする。春は、小雨そぼ〳〵と降りて、絶え〴〵なる玉水の、かしはの枯葉にかゝる音する。夏は蚊こそうるさけれど、まきの板戸もさゝで置きたるに、廿よ日の月窓ふかくさし入りたる。秋は、かりがね、きり〴〵すいと哀にて、我も共になきあかさんとす。

忌服と汚穢とは別事なるを、世には、服中は火のけがれたるやうに思ふ人も多かるにや。これは凡の人のみにもあらず、書などよみて物の意知りたる人も、なほ此まどひありげなり。つぎ〴〵これを辨へばや。今いみといふは、いみといふ名は外よりうつれる物なれど、事はいにしへいはゆる假にて、奉公せぬ日數なり。親戚の喪にあひて悲びまどふまゝに、官を治むる事もはか〴〵しからじとて、そのなげきのさむるほど、宮仕のいとま給はる趣なり。假寧令に、

凡職事官遭二父母喪一。竝解レ官。自餘皆給レ假。夫及祖父母。養父母。外祖父母。三十日。三月服十日。七日服三日。

とあり。日數などいさゝか違へるは、代々の制度の沿革にて、趣意はいまのいみに相當せり。かゝれば假は宮仕につきたることにて、凡の人には無用の物なり。もとより穢に

たゞこゝもと—つひ手近

うるしもてぬりたらむやうに照り光りて、只二葉ばかり見ゆる、いとめづらかなり。黄なるは銀杏。

上野は時となくよろし、花の幾千本となきが、常盤木に立ちまじりたる、嵐山おぼえてをかし。夏はいとゞ繁りあひて、日かげうときに、下枝ひまある方より、忍ばずの池の蓮所狹う咲きみちたるがほの見ゆるに、追風いと涼しうて、さと匂ひ來る、いとうれし。紅葉のころ又いはん方なし。

夕やまさりたらん、村雨なごりなく晴れ、風いと涼しうて、山のはの雲いと白う、わざとならず所々に隱れるに、いさよふ月の今出づべきにやあらん、にほひうつりて見ゆる。朝やまさりたらん、峰の松原こき緑なるに、あかねの色もゆるやうにて、日の半ばかりさし出でたる。

曉いとよきものなり。かう世ばなれたる里ながら、晝のほどは、とかくまぎるゝ事もあり。宵のほどは、ひと日の疲とり集めてねぶたきを、丑みつなどいふほどより起きいでて、書にむかひたる、四方にはいさゝかの物音もなくて、いと心すむわざなり。冬はひまもる風のいと寒きに、埋火かきおこすほど、遠山寺の鐘の音、たゞこゝもとに聞えな

ゆほびかなる—廣々した

すがたみの橋—戸塚村に在り

二藍—赤藍と青藍との間色

所も無人にて、獨のみ明し暮す神無月つごもり方、風いたう吹きあるゝに、埋火によりつゝ、夕暮の空を打眺めたる、何事をかはおもひ殘さん。暗うなりはてても、何のあやめもなき外の方を見出して、酒二つ三つ飲みて、ねぶたうなりぬれば、其儘にそひ臥したり。目さめて見れば、格子もおろさず、火などもとぼさであり。いつのほどにか、霜がれたる淺茅原、なごりの露おもげに置きわたしたるに、星の光きら〳〵と見ゆ。かくこそすさまじき宿なりしか、今はこよなう目やすくなりにたり。

長月つごもり、神無月ついたち、山ふところの少しゆほびかなる邊を行くこそおもしろけれ。紅葉紅なる、黄なる、濃き、薄き、匂ある、匂なき、おのがさま〴〵の情にて見所多かり。又常盤木の濃き綠なるに、下葉のいひしらず染めたるなど、いとをかし。江戸のあたりにては、目黑、すがたみの橋、さては此園の中。

もみぢは楓、猶綠なるに、たゞ一しほ今ぞ染めつらんと思しくて、つや〳〵と匂へる二藍の色めでたし。いと濃く緋色に染めなしたるもをかし。今の世には、もみぢといふ名を己がものにぞしたる、宿世いと尊しかし。梔はめでたけれど、葉のさまうるはしうて、なつかしげなし。ぬるでは品くだりにたり。柿の葉の霜より後まで散り殘りたるが、

總角―小兒
こちたき―甚だ多き

或人の考に、自の上をまろといふは、藝能ある人をかどありといふ反にて、唐國にて不肖などいふも同じ意ばへなりといへり。げにこれはよく相對ひてきこゆる詞なれば、打聞はよろしき說のやうなれど、さやうにこざかしく自謙しなどする事は、上れる代には無き事ぞかし。もし此說の如くならば、猿まろは藝なし猿といふ事ならんかし。螽丸も藝なしいなごといふにやあらん。かの物語には、拍子うつとありつるものを、心うき名にあらずや。すべて言葉の本義は、いかなる事とも知りがたし。それ知らずとも、まろは自稱などやうに、常用をだに知らば、何の事缺く事もなし。しかるをあながちに解かんとすれば、必ず横ざまにゆがみ行くものなり。しか知り難き事を知らんとせんより、いとよう知らるべき事の知らでであるが多かるを、まづそれより學びとるべきわざならずや。世の學者たち。

今は四年ばかりにもなりぬらん。此品川の莊居に始めて移りたりしは長月なかば、四方の草葉はやう〳〵稀になりゆくほどなるに、園の中なべて荒れまどひて、人の住むべき所ともなし。野らといへど、總角は分けかよふべし。こゝはたゞ兎の徑さへぞ見えぬや。こちたき葎にうづもれて、さゝやかなる家たゞ一つあるを、我がための寢殿ながら、侍

天平勝寶―孝謙帝の年號

てはさしも尊げに見えざなれば、思ひあやまるなめり。かの書どもは、天皇の御うへを記せる其ちなみに、彼人々にもおよべるなれば、天皇の御うへと相對へて見る故、貴人ともなきが如くなれど、みな一國を領りたるものにて、大小こそ異なれ、今の世の大名に似たるものなり、凡人にはあらず。我女妹など、姫君といはざらんほどにて、彦といふ名つきてよからめや。

古の人は、某麿といふ名多し。自稱してまろといふも、まろはもとより自稱なるにつきて、人の名にも多くつくか。人の名に多かるゆゑ、自稱ともなれるか。本末は知らねど、一つ根ざしの詞にはあるべし。近頃までは天子の自稱のやうに心得居りつるを、學問の道あきらかになりて、今はさしもあらぬにや。牛飼は、後々までも丸といふ名つくうへに、天平勝寶の東大寺の奴婢籍にも、某丸といふ名多かり。

宇治拾遺物語に猿を猿まろといひ、狹衣物語に畚をいなごまろといへり。枕草子に犬に翁まろあり。駿牛繪詞に牛に貘丸あり。太刀、刀、琴、笛、何物によらず、某丸といふ名多くつけたる物なりしに、今はさる事をさ〳〵聞えず。たゞ舟のみになほ其名殘あり。

北野の—菅原道眞、「の」は「が」と解すべし

うきたる—據り所なき

なほびと—たゞ人

勘文に、

明年辛酉。當二帝王革命之期一。君臣剋賊之運一。云々。

又北野の右大臣とておはしましゝに、書たてまつりて、

明年辛酉。運當二變革一。二月建卯。口動二干戈一。遭レ凶衝レ禍。雖レ不レ知二誰是一。引レ弩射レ市。當レ中二薄命一。云々。伏冀知二其止足一。察二其榮分一。擅二風情於烟霞一。藏二山智於丘壑一。後世仰視不二亦可一乎。努々力々。勿レ忽二鄙言一。

とあり。やがてその辛酉の正月に、北野の御事をあしざまに申せるものありて、左遷し給へるは、まことに掌をさすが如くあさましきまでなん。神武天皇元年を辛酉と定めたるがうきたる上に、鄭註などもうきたる事のやうにて、何のしるしかは有らんと思ひあなづらるゝ事なるに、斯うまさしくいひあてたるは、實にいみじき博士なりけり。

古學といふ物學する人々、某麿、某彦といふ名を多くつくなる。丸は仔細もなけれど、中ごろよりは童名にのみきこゆれば、成人のうへにて實名につかん事、今においては如何なり。彦はいとけしからず。彦と姫とは相對ひたる詞にて、貴人のうへの稱なり。なほびとの妄につくべき事にあらず。さるは珍彦、登美彦など、日本紀、古事記のうへに

博士など其勘考を書きて奉りし意見

淸行—三善淸行

鄭玄—字は康成、後漢の學者

蔀の首—前漢律歷志「以二閏餘一之數一爲二蔀首一」

善家—三善淸行

りや、あたらずや、聞かまほし。寺々にも仰事ありて、御祈どもありと聞くはいみじう尊し。其御修法の名金門鳥敏々々々とは、カノトノトリノトシといふ事なりとぞ。まことにやあらん。はかなだち戯にちかくて、御法の尊くめでたかるべきには、打ちあはぬ心地す。例なれば改元あるべし。寛政といふ年號、政の字はじめて用ひられつるに、十三年までつゞきて、造内裏以下、よき事のかぎりなりつれば、めでたき例にぞなるべき。辛酉の改元は、延喜の度をはじめとす。淸行の宰相の勘奏によられたるなり。さるは易緯に、「辛酉爲二革命一。甲子爲二革令一。」とありて、鄭玄が說に、

天道不レ遠。三五而變。六甲爲二一元一。四六二六交相乘。七玄有二三變一。三七相乘。二十一元爲二一蔀一。合千三百二十年。

とあるによりて、神武天皇元年を一蔀の首として、齊明天皇六年庚申まで千三百二十年、天智天皇卽位の年（齊明天皇八年）の辛酉を第二の蔀首として、昌泰三年まで二百四十年、四六相乘の數みちて、延喜元年は大變革命の運なりとぞ。もし此說によらば、今年は第四の四六よりは六十年おくれ、第三の蔀首よりは百八十年さきだちて、大變の運にはあたらぬにやあらん。諸道の勘答はいかゞあらん、いぶかしきことなり。さてかの善家の革命の

ことごとしく――仰山らしく

八隅知之――天皇遊獵內野之時中皇命使間人連老献歌

伊縁立之――いは發語

大夫之云々――元明天皇の御製

勘文――朝廷よりの諮問につきて

鳴弦とて、弓弦打鳴して邪氣をさぐる事は、今の世の射禮家にて物するやうに、ことごとしくこそあらざりけれど、やゝ上代よりある事にて物に見えたり。神代の遺れる風にやあらん。さて萬葉集一の巻に、

八隅知之。我大王乃。朝庭。取撫賜。夕庭。伊縁立之。御執之。梓弓之。奈加弭乃。音爲奈利。

とあるを、奈加弭は奈利弭の誤にて、弭に鈴などつけて、ことに音あるやうに設けたるなりといふ說あれど、鈴つけたらんからに、なり弭とはいかでかいはん。今按ふに、弭は弦の誤、奈利弦にや。さやうに弓弦打鳴す事は、御狩軍陣などのねぎごとならんかし。

同巻に、

丈夫之。鞆乃音爲奈利。物部。大臣。楯立良之母。

とあるも、さる折の出立のわざにやとおぼし。相照し見るべし。又夜をまもるものの弓弦ならすこともあるは、警衛のためながら、猶此わざの同じ源なるべし。

辛酉は、革命とていみじう惡しかる事とぞ。何事のあらんとすらん、ゆゝしき事なり。それも運によりてあたらぬ事もありとぞ。諸道の勘文を召さるといふ、ことしはあたれ

華陽―華山の南

すでにしか昔よりいふ事なれば、今人のいはん、はた咎むべきにもあらず。又某陽といふ事は、いつの頃よりいひそめけん、二百年ばかりの書には見ゆるを、猶ふるくも有りつらんかし。ふとは得思ひ出でず。これはいと〳〵すぢなき事なり。さるは唐國に某陰某陽といふ所の多かるに倣ひてのわざなめれど、かの陰陽は、南北のかへ文字にて、山にそひ、水にそひたる地の、その山水の南北につきてよぶ事にこそあれ、皇國の人の伊勢を勢陽、尾張を尾陽といふ類にはあらず。洛陽、華陽などきこゆるも、洛華は山水の名ぞかし。益州を益陽、荊州を荊陽といへる事はあらじ物をや。

太宰彌右衛門ときこえし人の著れる書どもに、日本信陽太宰純と名のるこそいと〳〵心えね。まづ漢人、唐人の漢唐に對へて日本といへるは、事のさまたがひたり。漢唐は世の名にて國の名にあらず。日本は國の名にて世の名にあらず。相對ふべきことわりはなきに、それをだに思ひえざる、いとはかなし。次に信陽といへるはいかに、信は山の名か、水の名か、此人の皇國の事論じたる、悉くひがごとながら、それは宗とせぬ學問なればと、ゆるさるゝ方もあるを、おのが故郷のやうにいひ思ふ土の地名の陽の字の義をだにえ知らぬは、いかなる唐物まなびぞも。

から人の登りけん云々—晉の庾亮南樓に月を賞したる故事により、秋夜觀月の宴を南樓之會といふ
ほの〴〵—甚だかすかに
さがしき—嶮しき
土佐家—土佐守春日經隆を祖とする繪畫の一派
大同弘仁—平城、嵯峨の時代

るは、くちをしき事なり。

月は水のほとり殊によろし。いと大きなる川ののどやかに流るゝあなたの岸にまとゐして、打笑ひなどしたる、から人の登りけん南の樓おもひ出でられて、誰ならんとゆかしきに、千里に明らかなりと詠ずるにやあらん、ほの〴〵聞ゆるいとをかし。

雪はいづくも〳〵をかし。たゞ海のみすさまじげなり。それも、みなと江の蘆すこしばかり折れ殘りたるひまに、泊舟二つ三ッ篷いと白う見ゆるはをかし。

市の中は何事もめとまる事なけれど、たゞ雪の朝こそめづらしうをかしけれ。すべて何處も雪はけしきことに、所かはりたる心地して珍しうをかし。日のさしのぼるほど、皆おき出で、往來さがしきまで道あしうなりぬべし、いとあぢきなし、「疾くはき集めよ。取捨てよ」など、いひ騷ぐこそかなしけれ。

月のいと淸き夜、大きやかなる松の竝立てるを、程隔てて打見やりたるは、土佐家といへる繪のさましたり。今の世に唐繪とて物すめるは、さるおもむきなし。

皇國に某州といふ制はなきことなるを、城州和州などやうに稱ふるは、みだりなる事なり。されど此事いと昔より有り來しなり。大同弘仁のころの詩人などやいひ初めつらん。

年々随筆

石原正明

一　辛酉上

花はさくら、櫻多かる山に松など立まじりて、色どり分けたらむやうなるが、一しほ見所あり。友だち四五人ばかり、一とせ嵐山の花見に行きし事あり。今日ぞさかりならむとおぼゆるほどにて、かつ散るもあるに、渡月橋のこなたを川添にみなかみの方へ行く。風のさと吹きあるゝに、雪かとばかり亂るゝ花の、となせの瀧の岩なみにやがてまがひ行くなど、いひしらずをかし。中野三郎といへる人、川中の大きやかなる巖に腰うちかけて、笛高やかに吹きならしたるが、水音にひゞきあひてをかしきに、かたへにありつる法師、「春おもしろく聞ゆるは」と打誦したりしこそ、折からをかしう覺えしか。此法師いづくの人なりけん、心にくきけしきなりつるを、物をだにいはでやがて行き別れつ

吾かぞの翁つねの心淡しきからに、筆ずさびもまたあはし。さればある人なじりて、此條々うち思ふまゝに記されてあるは、かにかくにあげつらひもあれど、とりすぶる所なきは、もとよりおのれにたてたる旨なければなり。よくまれ悪しくまれ、一かたに心の筋をとほしてこそもの書くかひはあるべけれ、といふ。やつがり答ふらく、そのたてたる旨なしと見ゆるが、おのづからにたてたる旨にやあらん。かぞは常にわが心狭きを恥づるものから、あはれ大空に倣はゞやといへり。曇みはれみ、雨よ風よとさわぐとも、跡をとゞめじと思へるならしなどいひて、後にしか〴〵とかぞに告ぐれば、彼言よし、いましが答もまたよし、されば文字のたがひ、言の滞る所をよく考へてよ、といひてやみぬ。此日比この文の端に、終にまなかなの言添へてんといふ人もあれど、さることゞ〳〵しきものにはあらずとてうけねば、あまりにさう〴〵しきからに、いさゝげ此あげつらひを記して、かうがへの筆をさむ。

寛政十まり一とせの霜月　　男伴資規誌

松永翁―松永貞德

僻を知らざる故なり。譏るはあたらずといへども遠からず」とあるは、實にたふとし。寵辱如レ驚、吾儕のためには適當の藥石なり。

○「觀二山水一亦如レ讀レ書。隨二其見趣之高下一」といへる古人の語を、幻阿法師取出て、「若き時知れる所も、老いて再び見れば更に同じものにあらず」と書かれしはさることにて、さすがに年ふりぬれば、かはらぬ風雲月露も、其趣味を知るに近し。さるから又松永翁、老いぬれば眼はあがり口はさがるとて、自ら長頭丸と名のられしはをかし。しかのみならず、人の喜びもせぬ年にほこりて人を見くだし、吾いにしへのよからぬ事は、いかに知る人尠しとて、恥づべくも思はで、初生より賢きおもゝちして、假初にも理窟めかしくもの言ふなん、吾儕の僻なり。此よしなしごとども筆にまかするにつきても、此僻や雜らんと懼るゝ所なりかし。

閑田耕筆 終

樂天—白樂天

餓鬼の斷食—止むを得ずして道を守る意の諺

○或書に彼斯匿王經を引きて出せる語、

守レ口攝レ意身莫レ犯。如レ是行者得レ度レ世。周利槃特。以二此偈一得二阿羅漢果一。匿王怪而問レ佛。佛偈答曰。學必不レ多。行レ之爲レ上。云々

たふとき哉、身口意を愼むこと斯くの如くならば、まことに足りぬべし。われ人學を好めども實ならざるをいかん。あるものの言に、おのれらが如きものは耳學問なり、もの學ぶ人は眼學文多し、といへるは理におぼえき。烏窠禪師、樂天に對して、「諸惡莫作衆善奉行」と示されしを、こは三歲の兒輩も知るといへりしに、知ることは三歲の兒も知る、行ふことは百歲の翁もかたしと說れしも是なり。槃特は愚魯なるがために一語もて得道し、世人は黠智によりて多岐に迷惑せり。實に小智は大道の敵なる哉。

○予ひそかに四少三安の養生を思へり、四少は少二飲食一少二交遊一少二言語一少二思慮一也、三安は安レ分安レ心安二死生一也。しかも四少猶守りがたし、況や三安は賢者も病る所歟、何ぞよくやすんぜん。唯年老いて世間に希望の事なきのみ、自然の養生となる。是は餓鬼の斷食といふものかも。

○此比百如律師の法語を示さる、其初に、「人の褒むるは諂へるにあらざれば、吾惡しき

高橋圖南翁―名は宗直、天明中の和學者

合雜―料理の物名魚に鰹節削りまぜて酒にひたせるもの

○昔年高橋圖南翁の話に、「三百年前の膳具の書つけに、がんぞうと假名にて書けることあまた見ゆ。それはいろ〳〵の物を取交へて膾やうのものにせるなり。此がんぞうの名義詳ならず」とありしに、「おのれも近江にて常にがぞうと、人のいふを聞き侍りつ、されども其義は知らず」と言ひしが、ふと其席上に思ひよりて、「もし含藏の字にて、膾の中に色々をふくみかくす意にや」といひしに、「いな三百年前の文華なき時、さやうに文字をあつかふべきにあらず」と有りし。さて歸りても心に掛りて思惟せしが、何のこともなく合雜の字音なるべしと思ひ得て、他日翁に正しければ、誠然々々と點頭ありし。

がふもがんも横通にて同じ。

○樂庵老人問ふ、「平家物語の景清は十六でをぢを討つといへる如き、での字如何」予云ふ、「にてに代ふるなり」曰く、「然らばにてをでといふ意如何」予暫く按じて答ふ、「にての約ねなり、ねの濁音でなり」樂庵大にうけがはる。

○或人云ふ、「平家物語の内に本三位重衡と有る本の字心得がたし、一説に、父子三位なる時父を本三位といひ、子を新三位といふといへるも、本三位の證を不レ知うへに、重衡卿子なし、是は平の字を本に誤るならんかといへり。

十四町、從四位二十町、正五位十二町、從五位八町、女減三分之一、職分田太政大臣四十町、左右大臣三十町、大納言二十町

かくの如くなれば、令外の官もまた准らへて知るべし、兼官ありともいふに足らじ。但し莊園は官位に拘らず代々相傳し、天曆の比ほひより後藤氏の威權盛なりし時は、國々にあまた持ち給ひたりけん。されども大よそを思へば、今封建の世の大小侯には類ふべからずこそ。

○或人問ふ、「昔の貴族其富今の諸侯に及ばざるはさることなり。然るに殿舍諸佛寺の造立廣大なるものの成りしはいかにぞ」答ふ、「是は其功人民を驅使ひ給ひしによりて、費用は材木金鐵の類のみに止るゆゑなるべし。されば佛寺の建立の功德を尋ね給ひしに、答へて、ことごとく是地獄の業と永觀律師は歎息し給ひけんかし」

○又或人神社に位階を奉らるゝことをいぶかしみていふ、「もとより貴き神を、正五位、正四位など申すことはいかにぞ」答ふ、「是は正五位なれば十二町、正四位なれば二十四町の田を奉らるゝなり。次第は令の定のごとし。有名無實にして、稻荷といへば、必ず正一位を社家より免許せるたぐひにはあらず。

永觀律師―承德三年南都東大寺に住となりし有名の高僧

千乘—兵車千乘を出す資格ある諸侯の國の稱

職田位田—官職或は位階によりて賜はりたる田

の故事より出でて、二字を一字にせるにやあらん。

○學者彼是會談せる時、漢人の祿石數戶數の話におよぶ。明文を記得せる人なかりしが、おのれ前漢書にて見しを、ほの〴〵思ひ出しまゝに語りき。手近きことにて却りてよく覺えぬ人もあればこゝに擧ぐ。前漢百官公卿表題下師古注曰、

漢制三公號稱萬石。其俸月各三百五十斛、穀其稱中二千石者月各百八十斛。二千石者百二十斛比。二千石者百斛。千石者九十石比。千石者八十斛。以上斛數 同功臣表平陽懿侯曹參侯狀戶數下以右丞相侯萬六百戶。同六世元鼎三年侯宗嗣。中略 戶二萬三千。蓋頭許惠元曰。參始封萬六百戶。至其六世乃有二萬三千。敍所謂 敍とは功臣表之敍也 四五世間流民歸。戶口亦息者也。以上戶數

私にいふ、封建の世列國千乘の富にも及べるを、郡縣の世となりて、三公といへども周年の通計纔に四千二百斛、封侯の戶數は是にあはせては大也といへども、また封建の世のさまにくらぶれば物の數ならず。此方も中世まで職田位田の定令に見えたる所、

位田一品八十町、二品六十町、三品五十町、四品三十町、正一位八十町、従一位七十町、正二位六十町、従二位五十四町、正三位四十町、従三位三十四町、正四位二

も有るべけれど、忍びて養育すれば實子のごとくなるものなり」といひしが、其後此友人男子を養ひて女に婚せける時、此工人の言をいくたびか思ひ出でて、ことなく相續せしめたり。義齒によりて善言を得たりと喜びしを、此義の字によりて思ひ出でたり。友人も工人も倶に賢なる哉。

○或人の話に、辻といふ字此方にて作れるは誰も知れり、然るに世に辻と書くは義なし。十字街の事にて、十しといふ假名を一字になしたるなり。四辻殿略譜にも辻と書かる、若し又辻と書けるは、之はしに同じとぞ。

○本朝にて作れる字、右に擧ぐる辻の字の類、峠、畠、畑、榊など猶多かるべし。挊の字も此方にて作れると覺えたるを、或人見出でて示す。字典に引二五音類聚一云ふ、俗弄の字と。此方にてはかせぐといふことに用ひて、義は異なれどもかしこの俗字なり。唐の則天の時作れる字どもも物に見ゆ。又今の清朝にて作れる俗字塊は橋限の事の由。線香などの印紙に見ゆ。⿰氵乔は舟の著く岸のこととぞ。又礁といふ字、海上のことに「不レ懼二風波一懼レ礁」と清人の文にあり。水中の大石にて船を損ずる故おそるゝなり。こなたにて今はえといふものなるべしと、故人樫田房州の話なり。私に按ずるに、列子にある沃焦石

○先年金龍道人といふが祇園林にて庵を結び、茶を施す由にて義茶亭と名づく。義の字のことを尋ねけるに、唐山にて蜜湯を施すことを義蜜湯といふと計こたへて、出所に及ばず。按ずるに義の字に施の意はあるべからず、此頃正字通義の字の下を見るに、容齋隨筆を引きて、「人物以レ義爲レ名。其別最多」の條々の中に、「與レ衆共レ之曰レ義。義倉、義社、義田、義學、義役、義井之類是也」とあり。然れば施にはあらで、人と共にするの意にて用ふるならんかし。

○ついでにいふ、右の容齋隨筆に、「衆所レ尊戴一曰レ義。義帝是也」とあり。しかるに義帝は項羽是を立てて、其威を借るものにして、陽り尊ぶのみなれば、猶義子義兄弟のごときかといへる人有り。彼隨筆にも、「自レ外入而非レ正者」の類を擧ぐる條々あり。義帝も亦此の中に入るべし。たゞし生存の日に稱するならば、表は衆尊戴の意にて、裏面は非正の意にやあらん。

○義齒は俗いふ入齒なり。四條に名工あり、予が友人是に此物を托せる時、工人いふ、「馴れ給はぬ間は心あしきものなり、それを堪へて久しく經れば、まことの齒にかはらぬやうになれり。たとへば義子のごとし、血肉の者にあらねば愛も薄く、心にかなはぬこと

兜鍪―かぶと
卞和―楚の人、其涙血の事韓非子に出づ
獻芹―呂氏春秋「野人美レ芹、願之獻二至尊一」人に物を贈る謙辭
遼東の豕―後漢書に出づ、自ら奇異なりとして誇るも、他人より見れば凡庸なること
上東門院―藤原彰子

を書けり。と見ゆ、是にて明かなり。

○俗間に甲の字を誤りて冑のこととす。按ずるに、禮記曲禮上篇
獻レ甲者執レ冑。鄭注。設二其大者一擧二其小者一便也。甲鎧也。冑兜鍪也
と見ゆ、是にて甲冑の差別分明なり。或人云ふ、史に得二甲首一とあるより誤れり。是は甲著たる者の首といふことなりと、さも有るべし。

○血に泣くといふことは、世間皆泪の色のかはるを指していふとのみ心得たるは、卞和が「涙盡繼レ之以レ血」と史に見えたるによれり。然るに又禮記檀弓の篇に、「高子皐執二親之喪一泣血三年」此下の鄭注に、「言泣無レ聲如二血出一」と見ゆ。是は人の心づかぬことにやと記すは、獻芹のたぐひ遼東の豕の話歟。

○時俗咳の高きを自負といふは、昔より然るなり。曲禮の上に曰く、「車上不二廣咳一。鄭注。爲レ若二自矜一廣猶レ弘也」と見ゆ。又榮花物語かと覺ゆ、有國卿御堂殿のために造作のことを指揮せられしに、なげしを高く作らせたり、後に上東門院御入内の時の儀式に、なげしの高きが用にあたりしかば、有國卿高く咳せられしことあり。こなたにても久しきならはしなり。

橘洲―唐衣橘洲有名なる江戸の狂歌師

散米―悪魔を拂ふ爲に散らす米うちまき

あたらもの―惜しきもの

三十文　粽　硯水一日分

同ヲカ引ノ内

十六文　酒　硯水

硯水と書ける仔細は未レ聞、もし硯の乾きたるに水をうつすが如く、疲れたる者に酒菓を與へて是を慰め用をなす義にや。されど是は推量の說なり。橘洲は間食かといへり。

○餅をかちんといふにつきて、或は能因法師伊豫の三島にて祈雨の歌をよみて験ありしよろこびに、餅をつきてもてなしけるより起れるとて、則ち歌賃の字を充つ。又いつの比とかや、朝廷御衰微の比川端道喜なるもの日毎に餅を獻ず。（是は例にて今も日毎に小豆のもちを獻ずるとぞ。）それが褐色の服を著たりしより、女房達、「今日はかちんはいかに」など言ひならはせしより、終に餅の異名となれりともいふ。皆信じがたきを、藤堂樂庵、搗飯ならんといはれしは理に覺ゆ。搗栗といふも栗を搗きたるなり。

○婦女の詞に、米をうちまきといふは、散米よりいへるなり。うつは物語藤原君巻に、「市女祓させんとする時に宣ふ、あたらものを我がために塵ばかりのわざすな、祓すともうちまきに米入るべし、もみにて種なさば多くなるべし」（是は大臣にて吝嗇甚しき人、市女をとりて妻にしたるが、祓ひ給ふ時のさま）

夢想國師―伊勢國の高僧、後醍醐天皇の知遇を受く

を占ひしともいへり。予其文を見ざればさだかなる事を知らず。一老人いふ、「板に彫りて賣物にする文に凶事のいまく〱しき事をやは書くべき、是をもて吉凶をうらなひしは愚に直き事なり。今世の黠智盛なる人々は執用ひず、廢れしも理なり」といへり。

○厠を雪隱と常にいひながら、人其所以を知らず。是は夢想國師の法嗣義堂和尚の著されし空華集に、雪竇和尚（音便にてろと唱ふ）靈隱寺の淨頭（厠を司る役僧の名）となる故に、斯くいひはじむと見ゆと、祖芳和尚の話なり。又東司に（厠のことなり）雪隱の二字を額とするは、建仁寺に初ると同じき話なり。予思ふに、近古禪法盛に行はれしかば、屋舍器財の名も禪流に傚へること多し。玄關の類の如きかぞふるにいとまあらず、雪隱もこれなり。（兒輩のためにいふ、是も音便にてせつちんといふべし、せついんと改むる人は笑ふべし。）

○今世造作をせる時、諸職人に三時の食物の外に勞を慰むるために、酒餅の類を與ふるをけんずいと言ふ。其字も義も知らず、唯ならはしにて、言ふものも聞くものも此事と心得るなり。然るに此比藤叔藏藏せる古文書の零紙を見るに、硯水の字を用ゆ。

天正十九年六月

檜造作入目注文と題せる數條の内

いりとは、りとかと上下の二文字をのこして、中の七文字を除くるを、中くぼれいりとは言ひまぎらはしたるなり。ぐれんどうは顚倒にて、殘れるりかの二文字をさかしまによみ、雁になるなぞ〳〵とは解けたり。さしも深くいひかすめて興ぜし昔の風流なるべしと言へり。おのれ思ふに、此うちれいりの三文字はいひまぎらはしたるとはいへど、猶いかにとも思はるゝものから、かりと判ずるはおもしろし。此ころ後奈良院御撰の謎の書を示す人のありしに、ゆきは下よりとけて水のうへにそふ弓と解き、いちご岩なしちごとゝき、花の山は花のき、はゝその森ははゝその木山寺と解くるはこれなり。

○和名抄に「獨樂和名古末都玖利有レ孔者なり」と有り。然るに行成大納言小松ふりといふものに、むら濃の絲を添へて奉れ給ふといふこと、小世繼に見ゆ。くりとふりとは通へども廻す時は振るものなれば、ふるは言のもと歟。絲もて廻すものあれば、絲を添へたまふもきこえたり。有レ孔者なりの注は、今世のさまに異なれば心得がたし。もし孔に絲を通してまはせしにや。

○除夜に懸想文といふものを賣るを買ひて、元旦に是をひらき、其年の運をうらなふこと、元祿の比ほひまでありしならはしとぞ。けさう文といふは艶書の事なるを、彼賣りける文は女文などのさまに書ける故に此名ありや。或は此文にて未レ嫁女の緣のよしあし

緇素—僧俗

絶妙好辭—曹娥碑背の八家「黃絹幼婦外孫齏臼」黃絹は色絲、色絲は「絶」の字、幼婦は少女、少女は「妙」の字、外孫は女子、女子は「好」の字、齏臼は辛を受く、受辛は「辭」の字、事類全書に出づ

負わざ—負けたる方より酒肴を以て饗應すること

になりたれば氣強くなりて彼賊を引きとらへ、すまふの手にて何の苦もなく谷へ投入れ、心靜に衣類を引きかづきて過ぎしとなり。是は赤はだかになりし故に、平生好むすまひの力わざを思ひ出でしなり。衣裳によりて禮を思ふも亦かゝるべし。

　何ゆゑに捨てにし世ぞと折々は姿に恥ぢよ墨染の袖

といふも、緇素のかはりはあれど、形をもて心を正す道理は同じ。

○謎語といふもの、やまと唐土も古へより聞ゆ。絶妙好辭を謎字にせる如し。こゝに栢原の瓦全記せるもの有り、をかしければあぐ。

あたり近きに、ある宮がたの古女房の住みておはしけるが、雨夜のつれ〴〵なるに、なぞ〳〵などかけて興じ給ふ。椿葉落ちて露となるとかけて、雪と解く、椿葉落ちてとは、はの言を除くなり、露となるとは、つばきのつをゆに置きかふるなり。さてゆきとはなりぬ。これにつきてかの兼好の書き給ふつれ〴〵草の中に、「馬のきつりやうきつにの岡中くほれいりぐれんどう、と言ふことのわき難きに、ものしりの大納言殿も負になりて、負わざいかめしうせられし、といふこと見ゆるが、心にうかびて考へ見るに、馬のきつは馬といふ言のくなり。りやうきつにの岡中くほれ

十二冠階―聖德太子の御定
大織―大織冠、今の正一位の位に賜りたる冠の名

さるに日本紀天武天皇の卷十年丁卯、「男女始結レ髮。仍著二漆沙冠一」と見え、北畠准后の神皇正統記の天武帝の條に、「朝廷の法度多く定められにけり。上下漆ぬりの頭巾をきること此御時より始る」と書き給へるも、右日本紀の文に據りたまへると見ゆ。おもふに此漆沙とある沙は紗にて、是は朝服の冠に限り、烏帽子は後までも巾なりしにや、知る人に尋ぬべし。朝服の冠ももと紗の巾にて髻を卷きて紐にてゆはへ、それを後へ垂れたるが纓なり。是は誰も知ることなれども、童蒙のために記す。又彼十二冠階の時の次第、大織、小織、大錦、小錦のごときは、織地と色をもて分たれけんかし。

○衣裳は禮の標示、尊卑のわかるゝも是によれり。一とせ或卿關東に在留し給ひし日、大火有りけるに、美麗なる官服にて提灯を照らし遁れ給ひしかば、近寄るものなく、さしも騷動の間に障なかりしとぞ。其反にて諸侯盛會の時、急火ありて頓に逃げはしり給ひしが、皆廡上下なり。出入の町人も能く見物を許されて參りしかば、ともに遁れたるが、同じ姿にてわかちがたく、國主も工商も雜りて一つ小屋の狹きに押合ひてしばし在られしとなん。又一笑話あり、近江にて相撲好む男、夜深く旅立ちたるが、山陰にて賊にあひたり。衣類を脫がずばめにもの見せんといふに、おそれてたゞちに裸になりたり。裸

修驗者云々―同書「興言利口」に出づ

源右大將―源頼朝

るも亦同轍なり。

○伊勢物語の畫に、烏帽子を冠りながら臥したる所あるを、斯くはあらじと笑へる人ありしが、榮花物語に儀同三司伊周公なやみ臥し給ふ所に、烏帽子を引入れ給ふ由見えし。又古今著聞に、修驗者が釜匠のゑばうしを盜み著、女の臥所へ忍びしこと有り、やゝ後世まで然りしにや。或人は、其頃までの烏帽子は巾にて黑漆にて堅めしものにあらねば、便利なるべしといへり。男たるものは卑賤の者といへども必ず著ること、即ち彼伊勢物語隅田川の所に、船頭の象はたれも知れり。濱名橋の古圖に、馬士又物賣る店の主が烏帽子を著たるさまも有り。近頃田舍より出でしとて、疊みては懐にすべく、左折にも右折にもすべきものを見しが、源右大將の烏帽子とて鎌倉某の寺に傳はるもしかなりとぞ。又義經少年の日東行の路にて、左折の烏帽子をもとめ給ひしに、速に折りたてて參らせし由小說に見ゆ。漆塗にては速に折りたつることかなふべからず。後三年の奧州合戰の繪卷物に、冑を脱ぎて手に持ちたる兵の烏帽子を著たるが、冑の下に著たればひしげたるさまを畫けり。今の士ゑばうしも頭ひしげたる象なりといふ人もありき。たゞし近古の詞に、ゑばうしを縁ぬりといひたるは、轉じて縁ばかりを漆ぬりにしたるにやと思し。

今井似閑—京都の國學者

龍山公—近衞前久、天文二十三年關白氏長者となる

玉露—鶴林玉露

にあづかり、妹は男のごとくにて權中納言になりしが、面貌よく似たる故に、後には又人知れず互に姿を改めて、宣耀殿と中納言ありのまゝにて事なく過ぎし由なり。此物語は源氏、狹衣より後に作れるものと見ゆる由爲章の說なり。おのれいまだ見ねども、草子の作意唐山の小說にあるべかしき事なり。

○右の物語の中に女のまことの形に改むる時の詞に、「眉ぬき鐵漿つけなど女びさせたれば」と有りと爲章引出されたり。是によりて思へば、此物語作れる世は、中納言の人といへども、男の鐵漿染むることは無かりしなるべし。今井似閑の和訓類林に、「西峰先進の說に謂始二于後鳥羽天皇一見二于日本傳一」と書ける、さも侍らん。朝廷の一變おもひはかるべし。

○專齋の老人雜話に、今世の肩衣袴は近衞龍山公薩摩にして制し給へりと記す。世には松永彈正製せりともいふ、いづれか眞なるを知らず。戰鬪の間袖の長きを不便なりとて、素袍の袖をきりて製せし由なり。玉露に、「宋渡江以來。士大夫始衣二紫窄衫一。上下如レ一。又云。紫窄袖衫乃戎服也。出二於兵興一時權宜。而相承至レ今。不レ能レ改」と記す。袖の窄きと袖のなきと、兵興一時の權宜に出づるもの其意全く同じく、永世改むること能はざ

とりかへばやの物語―平安朝時代の小說

彰考館―水戸光圀公の建てし史籍編纂所

○源氏物語に、王家統天子の御系といふことなり。をわかんどほりといへり。落窪物語には、わかうどほりと書けり。同じことなれど、落窪にあるは大かた人知らず。

○古今集三條西家の祕本を、中院也足軒一字をたがへず、寫し給ふとて、細川玄旨法印天正十六年の奥書ある本を又寫せしを見しに、かな序の内、「花をそふとて」といふ所「花をこふとて」とあり。契沖阿闍梨の餘材抄に、そはこの字を誤るならんといはれしにあへり。阿闍梨の卓見稱すべしと、矢部直なる人語りき。又或人の考に、後拾遺集の序に、「花をもてあそぶとて」と書かれしは、全く古今集のことばを摸せられしなれば、「もてあ」の三字脫せるにやといへれど、なほこふにて侍らんかし。

○安藤爲章の年山打聞に、「とりかへばやの物語作者未レ詳、彰考館の御本合冊にて四冊」と記さる。江戸隱士明阿彌の話に、いにしへ今の物語の歌ばかりを集めたる書あり、其中に此とりかへばや新舊二本の歌を擧ぐ。彼の爲章のいはれしは新のかたなり。歌にて知りぬ。舊本は見たりといふ人いまだ聞かず、さだめて世に傳はらぬなるべしといへり。其頃或人も此書を得たりと聞きしが、是も定めて新の方ならん。さてとりかへばやといふ義は、兄弟の人兄は女めける故に、女の如く生ひたちて中頃宣耀殿となり、女帝の寵

晏子が諂―晏平仲嬰、節儉力行を以て有名なる人

を見給ふに、明障子皆字紙にて張りたりしかば、彼も亦爲る所有りしものなりと感じ給ひしとなん。此等の話を聞けば、戰國の諸侯は今の庶人に及ざること遠し。儉の甚しきは、晏子が諂なくしもあらじなれど、亂後の風俗志氣ある人は斯かりしを知るべし。官家は大に衰微の時なれば理なれども、或卿晴のこと有りて白小袖を同僚の卿へ借りにやり給ふに、卽ち一重使へ參らす由の答にて文箱一つ來り、內に掛衿二つ入りて有りしとなん。專齋の老人雜話にも、「何某殿の歌の會に、黑み古びたる臺に、赤豆餠のころころしたるを盛りて出されたる計なりき、されども歌は上手なりし」と記せり。凡そ貧富をいはず質素なる時風を見るべし。

○近世庶人の墓の大なること、唯其富によれり。「天下のために其親を儉せず」と孟子も說き給へど、尊卑によりて其禮はたがはざるべし。墓碣大小定めあることは、唐の六曲文公家禮にも見えたりとか、本朝もまた昔はしかるべし。さしも高名なる人々の墓の今殘れるを見るに、僅なる五輪なり。桓司馬が石棺の三年成らざりしを、孔夫子のにくみ給へること思ふべし。すべて何事も過奢にのみ成り行くは世の常なれども、心あるべきは愼むべきことならし。

人云ふ、「然らばひかへるといふべし、是は光れるなり。爲家卿此曲を本據にして、

露結ぶ田中の井戸の葱の葉に光さやけき夕づく日かな

とよみ給へるも證すべし」とぞ。其後加茂氏の注を見しに、「光れるは葱の花をいふか、又葉もつや／＼めけば言ふか」と有りしも同意なり。然も花より葉にしたしく聞ゆ。

○或人語りしは、慶元の間功有りし諸侯封地三十餘萬石におよびたるに、其愛女白き小袖唯一つのみありてやゝ古びしかば、侍女閨門のことを預る士に告げて父君へ訴へ、新なるを調せんとす。侯敢て許さず。侍女是は士が申さぬなるべしと疑ひて、間を得て直に訴へければ、侯、「さきにも士某が此事をいひしかども、一箇あれば事足るよしを答へぬるに、又もいひ出づるは何事ぞ」とて、けしきいと惡しくおはせしかば、重ねて此事まうすまじきよしの詫狀を奉りて、やう／＼怒をなだめけるとなり。又或時其國の上大夫に列る人を他國へ使に遣はさるゝに、「さだめて肩衣ふるびたるべし、他國への晴なれば、同列の士某が物を借りて著るべし」とて、其まゝ自筆に書を認めて借すべき由、いひやり給ふとなん。凡そ家士への書翰、感狀など、五六寸七八寸計の紙なりし。是は物につかひたる紙の剪裁ちたるを集めて用ゐ給ふとなり。初めて入國の時先城主の居間

泰に否を含む—安泰の中に否運を含む、易經に出づ

いはせ—云はせ、岩瀬森（大和國）

豳風—詩經の一篇

富貴保ちがたく、泰に否を含む心、世にあひ時めく人は鑑とすべき御歌なり。新葉集に前關白、

君のため民のためぞとおもはずは雪もほたるも何かあつめん

此集には猶此たぐひ多し、南朝に君子多ければなるべし。

○能因の玄々集に、儒者孝宣といふ人のうた詞書に、爲義朝臣人づてによばせければ、

こひしくば來ても見よかし人づてにいはせの森の呼子鳥かな

と見ゆるは、來りて學ぶの道有り、往きて教ふるの禮なきこゝろなるべし、おもしろき詠みやうにて其本職にかなへり。

○催馬樂、

田中の井戸に光れる田蔥つめつめあこめこあこめ

といへるは、田に生ふる蔥は苗を害する惡草なれば、摘み捨てよと女子等を勉勵し教示するならん。歌曲にはかやうなるを取るべしと鈴木修敬はいはれし。實に言簡にして義廣し。豳風の農事をつとむる意にも愜ふべし。或は取り用ひては私曲を掃除するにもあたらんかし。ついでにいふ、此光れるといふを引れると心得たる人も有りしを、小澤老

子史—諸子百家の書と歷史の書

菅江二家—菅家、大江家

積善云々—易經に出づ

といへり。西行上人の歌に、

　山深くさこそ心はかよふとも住まであはれは知らんものかは

といへるも是なり。自己をもて試みて、實のおほふべからざるは恥かしきものなり。

○佛經を題してよめるは常にして、儒經子史の類の語を題とせる例は見えず。菅江二家の儒流に歌人も聞ゆるをいかにぞや。昔は儒書といへば、たゞ文字のことにのみ用ひて、道理をとることは佛經によるが常となりたる故にやあらん。たゞし題には見えねど、儒教の意によれる歌もまゝあり、今纔に記得せるを擧げば、夫木抄に爲家卿、

　あまのはら高しとばかりあふぎ見ておほふ報を知らぬ悲しさ

天は高きに居て卑きに聞き、積善餘慶、積不善餘殃必ず報ある心ならん。又

　人ごとにいつつのをしへ絶えはてば神もほとけも何を守らん

是は五常の教絶えて行はれずば、神佛も守るべきよしなからんの心、世に假初のことをも祈しさわぎて其私を察すれば、不仁不義の徒などにはよき諫なるべし。又九條内大臣、

　たのしみに歎は影と添ふものを世にあふほどは知る人やなき

穴にまろぶべし—難に陥るべし
入りほが—心を入れ過して事實に遠ざかること
さはれ—さもあらばあれ

やすらか〳〵といふ穴にまろぶべし。たゞごとは、萬葉風はもとよりにて、中古體にも近體にもあるべし。うち思ふまゝに口ずさぶ當意の贈答などには然るべからんを、或は彼入りほがにむづかしきものを惡みて、斯くてこそと、何の趣もなくいふものは、又曲れるを揉めて直きに過ぐるとやいはん」又問ふらく、「さらばいかに心得てかよむべき」答ふ、「唯眞心のまゝをうるはしき辭もてつゞけんは、天に背かず人に背かずといはん歟。夫をも誚る人はさばれ、

さしてゆく心の道し直からばなにか人めもはゞかりの關

いにしへの人の心の高間山今しもよそに見てやまめやは

となん述懷の歌の中に口號み侍りしは、常に思ふ所なり。但おのが如き才つたなく態のかなはぬはせんかたなし、道理はかゝるべきのみ」

○鶴林玉露に

雖下貪者賦二廉詩一仕者賦中隱逸詩上。亦豈能逃二識者之眼一哉。

又楊誠齋云ふ

古人之詩天也。后世之詩人焉而已矣。此論得レ之。

わなみ—我輩

をまた一きはめづらにも幽玄にもとかまふるほどに、風調くるしく、ともすればむづかしく心得られぬなり。おもしろきさまとは、うち見て花やかにも風流にもおぼゆるなるべし。其病は、なよび過ぎてつや〳〵心もなきにや落ちん。是は新古今集をまねぶ歟。此集は後拾遺集よりこのかた、世の歌ざま平話の樣になりもて來めるを、改めて一超向上に仕立てしものにて、其代にも後拾遺の風を執する人よりは、達磨風と謗れる由、長明入道の記に見ゆ。竝々の人是をまねては、其達磨風も、空腹高心にて蜃氣樓を見る心地すべし。萬葉風といふものは、中比はつかに顯昭法橋、衣笠内府、鎌倉右府などこれをたしみ給ふを、近年加茂眞淵更に唱へ出して、世間の人をおどろかしむ。されども老後には、奇辭僻語を除きて、唯けだかくて古調ならんとかまへられしにやと思し。したしく其門に學べる人の今殘れるも、心あるきはおだしく詠まるゝなり。かへりて遠き國々などには、彼翁の一旦の體をまねびて、なべては知らぬ詞どもをつどへて、姿もつゞけがらもいたはらず詠むを古風と覺えたるが多し。或はまた詞は古にて意は今やうなるも見ゆ。さて中古體をまねぶは古今集をむねとしてわなみの好む所なれども、そもあながちに序歌のごとき、優美をのみ眼にして心の少く味なからんは、姿こそかはれ、彼

古風―萬葉風
たゞごと―平話
草庵集―頓阿法師の歌集
玉葉―勅撰集第十四、撰者爲兼
風雅―勅撰集第十七、花園院親撰
三玉集―柏玉集、雪玉集、碧玉集

○或人國歌の體裁を問ひて、「今時やすらかなりと言ふものあり、巧なりといふもの有り、おもしろきさまと見ゆるもあり、又古風とて、大かたの人の心得がたき詞共をもてつゞくるもあり、あるは中古の風とて詞をのびらかにし意を少くよむ人も有り、たゞごとゝて常いふ言葉のごとく、口に任せていひ流すもあり、いづれにかよらん。たゞし其體にとりて皆病はありや如何」といふ。答へていへらく、「およそ今世文華盛なるからに、國歌の體裁もまたさま〴〵に分るゝなるべし、いづれをいかにとも拙きおのれがわくべきにはあらねど、今こゝろみに是を論ぜん歟。まづやすらかなりといふ體は、誰もよきことゝいふべきを、其病は輭弱に落つべし。是は思ふに、草庵集などのうはべの美しくおだしきを學びてよむもの歟。草庵の歌は底に力を入れてうへを穩しくつゞけしものにて、玉葉、風雅兩集のごとき風調異ざまに損じたるをためんとて、ことに詞がらをいたはられしなるべし。さるを今是をまねぶ人は、其力は及ばず、うはべの美しき計をとる程に、弱きに落つるはことわりなり。たくみなりといふは、力の見ゆるものなれども、其病は心得られぬに落つべし。これは三玉集を基にして、近世の新題林、新明題集のたぐひをまねぶもの歟。これらの歌は上手の心をつくして新奇を旨とよみ給ふなるに、其上

もろこしのから紅に咲きにけり吾日の本のやまとなでしこ

といふを、「吾日の本憚あり、此日の本と直して入れん」と、撰者沙汰せられしを、「さやうに直してならば入るべからず」といなびければ、入れずしてやみぬとなん。是はことわりなり。此日の本とは異國の客鴻臚館にしていふべき詞にて、日の本の人吾住む國を吾といふは、自他をわかつ詞にて、西土の人吾唐とも吾宋ともいふに同じ、憚るべき事にもあらず。天皇に限る御詞とおもはれしは、撰者の無稽なり。直されんは實に苦しかるべし。又風雅集御撰の時頓阿法師の歌、

あふ坂のゆふつけ鳥もうづもれて明くる梢の雪に啼くなり

といふを、雪や鳴くらんと直されんとの御事なりしを、吾意にあらずと辭し申されしも甚だ旨ありて、邪正の堺の分るゝ所なるべし。田舍にて何のわいだめなく、今勅もなき撰集の事をいひ出でて、凡下の者はよき歌よみても入集かなはねばせんなし、吾らに應じたるは俳諧こそといふは、彼撰に入るをよろこびし人をのみ知りて、辭したる人の志を考へざるなり。花に啼く鶯水にすむ蛙も、おのれ〳〵が志をのぶるなり、豈人にとらるゝとられざるをもて進退せんや。

鴻臚館―古へ京都に設立して外國の來賓を宿泊せしめし館

ゆふつけ鳥―鶏

花に啼く鶯云々―古今集の序

艶史—戀愛を歌へる詩

數寄—風流

五條三位—藤原俊成

一言芳談に、

　たのめたゞたとへば人の僞を重ねてこそはまたもうら見め

といふ新古今の戀歌にて、他力念佛の意を會したる人も有り、（敬佛房といふが明遍僧都に申されし言なり）正宗贊といふ錄に、頻に小玉と呼ぶも元これ無事、唯檀郎が聲を認得せんことを要すといへる艶史の語もて悟りし人も有り、（圓悟禪師五祖演禪師の侍者として此ことあり）堺の漁庵和尚も閨怨の詩作りて、其見所を呈せしかば、一休禪師肯へりき。此境界に至りては、なにはのことか法ならぬ、諷ふも舞ふも意にまかせたるべし、ひとへに自己の意に問ふこそよからめ。

○撰集に入ることをいたく喜ぶ人々は、鴨長明千載集に纔に一首入りしを、たび〳〵喜びければ、さしもなき人も數首入りしからに、さは有るまじきものをと人もあやしみしと、みづから無名抄に書ける、又道因法師の沒後、其數寄をおもひて十八首まで同じ集に入れられしを夢に見えて悅びければ、哀がりてまた二首くはへられしこと有り。忠度朝臣も都落に隨ひながら、狐川より引かへして五條三位殿へまうで、よみ歌の卷を出して入集を望まれしも世の知る所なり。これらは其志哀に殊勝の事といふべし。さるに又おのが意にあらずとて入集を辭せし人は、金葉集を撰ばれし時、金源三といふ人の歌、

刻薄の人云々―人情冷刻なる人の思ひきりよきに過ぐるを難ずる也

すさうげ―殊勝氣に

欣求の心―淨土を喜び願ひ求むる心

ものに、「何ごとも道理を考へて是非なきことと思ひ切るは、よき了簡といふべけれど、かなはぬ事をもくり返し、とやかく思ふが詩人の情なり」といへるが如く、是即戀歌の趣に愜ふべし。刻薄の人決絶にいさみて、臣の君を辭するには日の力を窮め、妻の夫を離るゝには、粧具とりあへぬ如きには、是等の旨を知らせまほしくこそ。

僞とおもはで人も契りけんかはるならひの世こそつらけれ

などやうに怨みて怒らざる歌は、其人がらいと慕はしくこそ。

○ある僧の詩集に閨怨の詩ありしを、其朋諫めてのぞかせたる事あり。其身に應ぜざることは歌も亦然るべし。若き法師のつやゝかなる面もちして、艶なる戀の歌打誦したるは、聞くも丸木ばしうち渡るやうに危く、老いたる和尙の髭髮白きが、すさうげにうめき出でたるも、いと思はずなる心地す。緣にふれて心は動くものなれば、五倫の外に遊ぶ僧は戀歌よまざるも可ならん歟、たゞしそれも唯人によるべし。慈鎭和尙の拾玉集にいはく、「戀の歌よめる事こそまことに浮世を離れぬためしには、皆思ひ馴れたる事にて侍るめれど、是によせてこそは厭離の心を敎へ欣求の心をも顯さんとて、百歌にかぞへたして、五十路につがひ侍りぬ」など見え、およそ詠み給ふ戀歌あまたなり。西行上人又同じ

石見のや云々—「柿本朝臣人麻呂從石見國別妻上來時歌」萬葉集卷之二相聞

關雎—詩經の周南にある詩篇の名、文王と王妃との和合せる德を咏ず

杜子美—杜甫、唐代の大詩人

大人の、

　石見のや高角山の木の間ゆも吾が振る袖を妹見つらんか

と紅粉樓中を省み給ふごとき、譽謝女王の、

　ながらふるつまふく風の寒きよに吾脊の君は獨か寢らん

と良人の旅愁を想像し給へるなどは、關雎の和鳴ともいひつべし。かゝれば絕えて戀歌よまざらんも人情に背くに似たり。

　戀せずば人は心もなからまし物のあはれもこれよりぞ知る

と五條入道殿の詠じ給へるもさることにて、春の野にあさる雉のこゑ、秋の山に紅葉ふみ分くる鹿の音をあはれと聞くも、戀の情を知る人は、ことに身にしみ侍らんかし。されば戀歌はよむべし、猥褻は避くべし。辭氣を出して、斯に鄙倍を遠ざく、といへる曾子の遺訓、凡そ言辭のうへにわたりて思ふべくこそ。

○杜子美が辛酸萬狀止むことを得ずして秦を去る時、

　尙憐終南山。回レ首淸渭濱。

と聞ゆるは、俗情をもていはゞ、決斷なくまどへるに似たれども、南郭が燈下書といふ

よそにのみ云々―新古今集戀一最初の歌

中冓―後宮、奥向き

獨を愼む―中庸に「莫見乎隱莫顯乎微故君子愼其獨也」

吾古びを好むは僻めりと、これより古器の潔からぬを悟りて、遂に茶事を廢せり。又俳諧の連歌をたしめりしが、或會に卑俗なる句を付合せたるに、披講の時、其句にあたりて吾名を讀みあげられしに恥を生じて、おぼえず背に汗す。是より此伎をも止めて、學文に精を入れ、歌をもよめりしと、其知己の人語りぬ。事にあたりて道理を考へ恥を知るは君子なる哉、吾儕及ぶべからず。

○萬葉集中に猥雜なる歌あり、又近體の巧なる中の戀の歌など、あまりに情にしたしからんとて、父子の間にて唱ふべからぬものも見ゆ、これらは傚ふべからず。

　よそにのみ見てややみなんかづらきや高まの山の峰の白雲

とても戀なるものを、何ぞいふ言のあしき。中冓の猥褻をあらはにせんや。こゝに又荷田春滿は、生涯戀歌をよまれず、寄レ戀の題をも雜にかへられしこと、近世畸人傳に記せるごとし。是は中世の弊風、殿舍の間にても男女別なく戲れかはし、詠歌是が媒となる如きをにくみて、其獨を愼むの志ならん。されども戀は人情のまぬかれぬ處、

　大土もとればつきけり世の中に盡せぬものは戀にざりけり

と萬葉集中に見ゆるごとく、神代のむかし花月の風流なきよにも、戀の歌は多し。柿本

首服—烏帽子

むづかり‥怒り

利休のことばとかや、

釜ひとつ持てば茶湯はなるものをよろづの道具好むはかなさ

釜なくば鍋湯なりともすき給へそれこそ茶湯日本一なれ

かくいへば有る道具をも押隠しなき眞似をする人もはかなき

○茶禮に心得がたき事あり。招るゝ俗體の客は、麻上下の體服をつけ、迎ふる主僧は法衣を脱ぎてあらぬ服をつけ、茶をたつるに辨利なるやうを計らふ。禮の相當らぬをいかん。又必ず禮服をつくべきならば、官位ある人は烏帽子裝束なるべきを、さて狹き入口の名におふにじりあがり叶ふべからねば、首服を脱ぎ上をとり、指貫ばかりにておはさんか。凡そかゝれば果して禮による歟よらざるか、書院のあつかひは別なるべけれど、これは常ざまの茶室のうへにて思へるなり。

○一人茶を翫びて、苔むしたる石の盥水盤を愛し、今參の男に水かへさせけるが、彼苔を殘りなく洗ひ捨つるにおどろきて、斯くはするものかとむづかりしに、答へて、「さきに見侍れば、蚯蚓、蜒蚰、蝸牛やうの蟲、苔をよすがに宿りしかば、口をも漱ぎ給ふものをと思ひて能く清め侍りし」といふ。主こゝにして思惟すらく、彼がいふは理にして、

わらふだ—圓座、圓き草蓆

ことさめて—興さめて

魚目と眞珠—似て非なる喩、韓詩外傳に「白骨類レ象魚目似レ珠」

黠智—惡智慧

ゆかしく、やがてさし入りしに、飛石の上にわらふだを設けたるは、雪のあとをいとふならんと、彌興に入りて待合に休らひたれば、あるじ長き棹を携へて、ものかげに枝もたわゝになりたる柚の實をうち落すが見ゆ。とりあへぬ饗のまうけならんと思ひつゝ居るに、後はたして膳のさきに柚味噌を調じて付けたり。さればこそとをかしきに、又鮮けき魚をあつものにして出したりしかば、是にことさめて、彼柚はわざと風流をかまへたるなりしと覺えぬとぞ。茶のみにあらず、萬の事にもわたるべし。自然に出づると作りものとは、魚目と眞珠の違なり。

○茶の態の盆は、いとふつゝかにあらく〳〵しき人も、是を翫べば起居おとなしく、物を取扱ふも見ざまよくなりぬ。又主客の禮節、たとへば夜會にあるじ手燭を携へ出でて客を迎へ、燭を石上などに置きて禮して退く、客其燭を取りて庭の木立など見るふりして、わざとなく主の歸る道を照すなどやうの心づかひ、禮の實に愜ひて、此意をめぐらさば陰德なるべし。さるに俗流の弊風、得がたきをもとめ金錢を費し、あるはまた其產業ならぬ人も、黠智あれば是をもて利を射るにも及び、心ざまよからず成り行くもまゝ見ゆ。富豪の家に茶を翫ぶことを禁ずるがあるも、子孫過奢に及ばんことを懼るゝとなり。

片桐宗關翁―名は貞昌、石州流茶道の祖

猿戸―犬子集に「推あけてけさくる年のさる戸哉」といふ句見ゆ、中垣のふさき開き戸の稱なるべし

ずさび壁のしつらひ、貧賤のさまをさながらに隱士の態に似合しきを、かへりて香の具はいかに美麗なるも限り有りて、茶具は古器の價數百千金にもあまるものあり。されば侘びたる室かたわに見ゆる器は、金殿に飽き珠玉の器めづらしげなき尊貴の翫び給ふこそ、御眼覺むる心地すべけれ。陋室に倦み、陶瓦の全からぬを左右にするものは、たまたま香の具の艶に美なるを取扱ひたらんは、しばしよき夢見たる思ひせんかし。

○或茶博士男資規に示していふ、「萬の調度有るに隨ひ無きにまかせて、只各境界のままなるが茶道にかなふべし。古語にも、風流ならざる所也風流、といへり。求めて風流なるは却つて風流ならざるなり」片桐宗關翁も、さびたるはよし、さばしたるはあしゝ」と示めし給ふ。利休居士男道安を伴ひて或人のもとに行きしに、露路の中垣に古き猿戸を釣りたり。道安「さびておもしろし」といへれば、利休首をふりて、「我はさびたりと思はず、是は遠き山寺などより求めたるべし。其役夫の費用いか計ぞや。麁なる猿戸を其業するものに求めて釣りてこそ、誠に侘にては有るべけれ。其人の茶道は、はや見えたり」と申されしとなん。以上は茶匠の示しなり。予又聞く、誰とかや雪の朝に興に乘じて或數寄者のもとを訪はれしが、露路の戸を細く明けたるは、さすがに人待つにやと

かゝり—蹴鞠を行ふ場所及び其所に植うる植物の稱

はりありの聲—蹴鞠の掛聲

調度—器物什器

源氏に見ゆるも櫻の木陰なり。新古今集にも雅經卿の言書に、

最勝寺のさくらは鞠のかゝりにて久しくなりにしを、其木年ふりて風にたふれたる由聞き侍りしかば、をのこどもに仰せてこと木を其あとにうつし植ゑさせし時、まかりて見侍りければ、あまたの年々暮れにし春まで立馴れけることなど、思ひ出でてよみ侍りける。

馴れ〳〵て見しは名殘の春ぞともなどしら川の花の下かげ

と有り。又柳も鞠に詠合せたることめづらしからず。又雑木を植うる證も有りとやらん、其道の人は委しく知るべし。

○蹴鞠の伎の立合に、人には蹴よきやうにしてわたし、蹴にくき所をとりてあつこふなど、萬の心ばへかゝらましかばと思はるゝを、其伎にのみとゞまりて、他の交りにうつすべきこととも知らぬは念なし。されどもさすがに勝負を爭ひ、われよく人惡しかれと思ふ態には似ず。たゞし此伎日毎に半日を費し、はりありの聲に暮を待つは惜むべし。

○茶、香は風流の態にて、近世盛に行はる。香はもてあつかふ調度など、金銀蒔繪のものにかなひて、貴人の翫びと見ゆ。茶具はものさびて、其室も松の木柱、竹のなげし、長





打毬—騎馬にて毬を打つ古の遊戯

明月記—藤原定家の日記

鞠場の植物—蹴鞠を行ふ場所の四隅に植うる物、普通には松、櫻、楓、柳を植うるなり

○蹴鞠の伎むかしは若き人の戯にてありしにや、狹衣の物語に、「人々まり弄ぶ所に、大將やゝもせば下りたちぬべき心地す、今少しわかくばなどやうに宣へること、まだ二十ばかりにやと見ゆるさまなれども、官位やゝ高ければ、おとなしやかにもてしづめ給ふ」と見ゆ。源氏若菜卷も趣同じ。もろこしの打毬も少年行の態なり。彼物語どもは、實事にあらざれども、其代の趣をもて書ければ、かゝる證には取るべし。さるに成道大納言此伎に妙有りし聞え有り、雅經卿もまたいたく好きて、遂に是をもて家をなし給ふ。爲家卿も若き時これにふけられしを、定家卿諫め給ふことは、明月記に見ゆ。されど後々も弄び給ふよしなり。時代につれて伎藝のふりもかはり行くなるべし。今は凡下の者までも其伎の裝束に次第あり。僧形も亦其裝束あり。嚴重の事になりたり。たゞし地下なん、衣裝は美麗にて官服にかよひながら、頭はかうむりもの無くはだかなるは、人魚のごとしと或者は戯れぬるに、近き頃は烏帽子の制も出來たり。是も文華の世なればなりかし。

○鞠場の植物、宗匠家は四本松、なべては松、柳、櫻、楓等皆二股のものを植ゆ。或は免許によりて二本松、三本松の次第も有りとかや。むかしは是も法なかりしなるべし、

粉本—繪の下書

月代—男子の冠の下の髪を半月形に剃ること、さかやき

でたる作り花をさしはさむ如きものなり。今世は唯奢侈をもて風流とす。凡ての事皆かくの如し、可レ嘆。さて相撲の繪卷物おのが見しうつしには、藤原基光（土佐家の祖）息男阿闍梨、巨勢公持（或は公望と書けるは非なりとぞ、金岡の孫金忠の子とかや。）等畫く所と記せり。さるに同圖を田中訥言生持てるは、土佐光吉（光信の孫光茂の二男剃髪久翌と云ふ）粉本のうつしなりといふ。光吉は慶長のころの人なれば、彼古本をもて畫けるなるべし。今田中氏の縮圖をこゝに擧ぐ。また此圖にとりて頭を半剃ること古きならひなりといふ事をさとりぬ。或は太平記大塔の宮の熊野落の所に、村上彦四郎あらあつやと頭巾をとりて、まことの山伏ならぬを知らせける所にて、其前よりの事かといひ、又なほ古き證は撰集抄に、月代の跡あざやかなりと見えたりなどいへども、此すまひの圖は其撰集抄よりも時代のぼりて古きものと見ゆれば、其はじめは知らねど、いかさまにも縉紳家ならぬ人は久しきならはしならし。

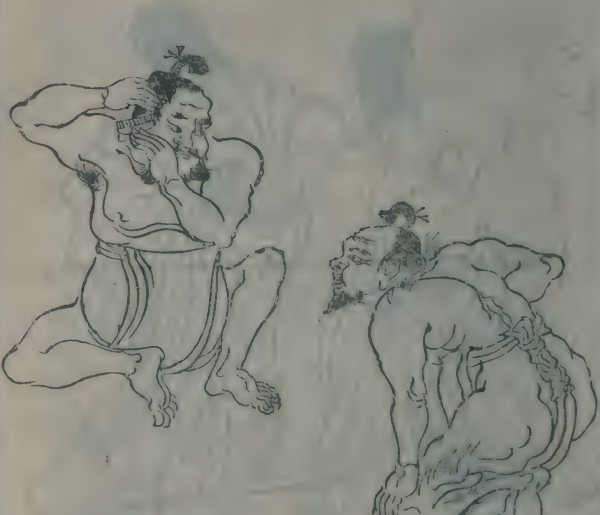
因にいふ、近江草津近邑人、產土神の神事をさうもくと稱ふ。それはいかに何わざをかすると問へば、神前にてすまふとるなりといふ。さらば相撲の字を呉音に唱へ、やがて神事の稱とさへならひしなるべし。他所にては聞かぬことにて、中古の唱への殘れるならんと、殊勝におぼゆ。













二許丈。（一牧置ニ剱衣ニ料）次一番。（左先出著ニ葵華ヲ取ニ剱衣ヲ置ニ北圓座ニ進ニ立櫻樹下ニ次右出著ニ瓠華ニ次次番）裏書云。葵瓠華造花也。一番（右許負。事長暦元年以後例）

（蒿溪按ずるに、加茂競馬又凡そ歌合一番、左は必ず云々「不負、若不勝」もまた持とすること歌合の例なり。　玉串氏云ふ最手の名目三代實録四十九、又うつほ物語俊蔭巻にも見ゆ。今いふ關なり。腋手、助手も推當つれば、掖手は關脇、助手は小結なるべし。又相撲の長とは今の頭取ならん。勝負の數をとるなり。立合とは今の行事なり。弓を以て指圖をなす。又結番文といふは、今の番付なり、又算刺といふことあり。圓座を敷きて先矢一筋を立て、それより勝負に従ひて矢をたつ。其體は鳥羽僧正の畫巻物に見ゆ。此巻物相撲のことを考ふるによしあり。又犢鼻の著樣、職人盡歌合、相撲人の像、及び光長が地獄の圖の羅刹の褌、佛鬼軍の巻物、或は千本閻魔堂の粉壁の地獄の圖の羅刹の褌を以て合せ考ふべし。）

又玉串氏云ふ、關といふ名目は近世室町殿物語といふものに、秀次公相撲を見給ふ條に、「こゝに西岡の住人につきうすといふ相撲あり、かくれなき相撲とは申せども、さるべき相手なきによりて、宵より一番もとらざりければ、人々出でて關をとれとぞ勸めける。行事聞きて、いそぎ出でられ候へ、遲參は御前へおほそれあり、と申さるれば、是非なく出でにけり」（下略）此詞をもて見れば、今世のごとく定りたるものとは見えず。終に取るをば關といふにや。（蒿溪云ふ、前の記録に近き例上より始むとも、或は白丁より一々取るとも見えて一定の義なし。秀次公の比は今世のごとく終りにとるは上手なるべければ、相撲人の中にて首たるものを稱して關といへるなるべし。古に引合すれば最手に當るなり。）又云ふ、此次に此つきうすが體をいふに、「白布を三重にまはして、如何にも強くしめたりける。さて岩根の介は云々、あかねの下帶二重にまはして大手をひろげつい立ちける」と有るをもて見れば、昔はさしも晴の者に白布茜布などにて質朴の儀なり。今織物繡物の美をつくすは奢侈の至なりと。蒿蹊云ふ、むかしの風流は右に出

りける」と見ゆ。古今著聞集には、烏帽子水干袴ながら重忠の相撲とりしこと見ゆれども、是はとみの事にて取りあへぬさまなるべし。只いづれの御前にても裸にてとるなるべしといへるは、實にしかるべし。さて又これにつきて相撲の古のさま、及び此生のかうがへ等、因に左に擧ぐ。

西宮記召合條註。左著藿花。右著匏花。取劒衣等出。裏書云。天曆七年七月二十八日。於仁壽殿前有内取事。（中略）次相撲人三十人立庭中。（西面）有天氣。上卿仰云。北戸向介。次仰云。罷入（禮）。列而入畢。次始。自白丁一々取畢。（十五番。）（玉甲氏按、北山抄に據るに、北向の上に東廂向介次仰云の七字あるべき歟。）此時最手額田成連。與腋宇治郡利里。決勝負。成連負畢。吏部王記。應和二年八月十六日。有相撲事。次相撲（著櫝鼻巾。葵花瓠花）北山抄内取條云。相撲人進出列立御前。大將候天氣。仰東向。次仰北向。次仰罷入。次相撲。江家次第云。相撲人等次第進出列立於庭中。（傍書曰。自上鶉田）大將候天氣。仰云。東戸向介。次仰云。北戸向介（傍書云。以上依御所之體可改。詞或有先南向次東向之所）次仰云。罷入（禮。作禮。一本禮）次相撲。（傍書云。近例曰上始）一番（最手與助手取。若有披共可決之者。最手獨練退入畢（下略）玉甲氏云ふ、御前へ出て東へ向け北へ向けなどの樣子、今いふ土俵入に似たり。）裏書云。十五番。左右各十五番也。故相撲人左右各可爲三十人也。助手又云腋也。最手掖手皆近衞府各補也。相撲人者皆近衞之類也。召合條云。取圓座置幕前

周頌―詩經

なみたち―竝び立ち

○市街に餳を賣る者笛を吹きて小兒を集むるは、西土よりおこりて久しきことなり。周頌有瞽篇の鄭箋に、「簫編二竹管一爲レ之。如今賣レ餳者所レ吹也とあり。

○相撲の赤裸になることは後世の弊風なるべしと思ひしに、古き繪卷物の相撲の圖を見れば、皆赤躶なり。是に附きて又玉串正視生の考を得たれば左に掲ぐ。

西宮記內取條註曰。（玉串氏の按今俗地取と云ふもの也、左は左と手合し、右は右と手合す。）左相撲。犢鼻上著二狩衣一。經レ陣向レ幕。右犢鼻上著二狩衣袴一入レ幕。近代不二分別一。又江家次第內取條云。左相撲人參入。犢鼻褌上著二狩衣一。差レ紐挿二狩衣前一。（中略）右相撲。犢鼻褌上著二狩衣一。開レ紐以二狩衣前一相違夾レ之。裏書曰。延久三年江記云、次相撲人三十人。次第行列。（其装束烏帽狩衣犢鼻褌也）差レ紐。狩衣上著レ帶。不著二下衣袴一。徒跣。或人曰。大內時左相撲人如レ此。是依レ渡二陣座前一也。右相撲依レ不レ渡二陣前一。開レ紐。狩衣前不レ加レ帶。左右引違夾レ之。今仗座在二右方一。若下左方可レ用二右體一歟。然而依レ爲二年來例一不レ改也。

蒿蹊云ふ、或は袴を著或は不レ著、或は紐をさし或は紐を開き、帶を加ふると加へざるとの差別はあれども、畢竟は躶體に狩衣をつけて參るなり。手合するときは狩衣をもぬぐべし。玉串生又按ず、「榮花物語根合卷（相撲の條）はだかなる姿どもの、なみたちたるぞ疎ましか

袁彥道云々―袁彥道名は耽、友人桓溫の負債を償はんとして桓の債主と戲し、十萬一擲直ちに百萬に上ること、晉書に見ゆ、博奕を袁彥道といふも其名に出づ

たくなりしならん。又笛字ちやくともよむことは、笙笛琴箜篌と連續したる語にて知らる。同じ字も昔よりのならはしにて、唱へ轉ずるなり。

○大和物語に、「右京のかみ宗于の君の三郎にあたりける人はくやうをして、親はらからにも憎まれければ、足のむかん方へ行かんとて、人の國へ行きける」といふ文を、季吟抄に、「人は供養をしてと佛事に見る註は非なるに論なし。一說博奕をしてと解して博樣の字を充てらる。博奕の事は實にしかるべきを、本書やうと假名を誤るに心つかず樣字を充てられしは非歟」按ずるに是も先の横笛の例に同じく、奕字は入聲藥韻にして、えきともえふとも通はすべし。されば博奕の字のまゝはくえふの假名にて論なかるべし。おのれ此物語を講じける時、條々に考ふる所あれども、修繕に及ばず年を經たり。餘命あらば注せんや否や知らず。

○博奕といふは本朝も漢土も共にもろ〳〵の勝負の都名なるを、こなたにては殊に雙六をいへる歟。建保の職人盡歌合には、腹うちひろげて雙六うつさまを畫けり。袁彥道が一擲號叫は樗蒲にて、博物志に「老子入レ胡作二五木一也。今人擲レ之爲レ戲」といふものなりとぞ。こなたには傳はれりや否やいまだ考へず。

亂―囃の絶え間なく急なること

田樂法師―古へ農夫の耕作の勞を慰むる爲に奏したる舞樂、後一藝となりて專ら法師の業となる

れん飛―俚言集覽に此文を引きて、「このれん飛は蓮の實の飛出すごときをいふとぞ」といへり

○この雜話につきて思ふに、昔は能も手輕き事にて、臨時に見物者より所望し、夫に應じて何にてもしたりと見ゆ。今貴人の御乞といふものの如し。當時は數十日前より催して番組し、役者をも定めてのゝしるなり。彼輩いふ、猩々の亂といふもの、昔は大夫の心にて、若し切幕より扇をひろげて出づれば、囃の役人心得て亂をうちたり。然らざれば常の猩々なりと。是等も手輕く、又其道に達者なるゆゑなり。藝は下手になり、事は重々敷なること、何の藝も同じ。

○田樂法師の態むかしは盛なりし旨は太平記に見ゆ。今は豆腐の串に貫きしが、彼が木をのぼりてれん飛とやらんいふ事するに似たれば、田樂と名づくるのみ、世に知ることと成りぬ。纔に春日祭の時形ばかりをまねぶ。されど今も水戸にては、此もの一村をなして、年々の神事をつとめ、又三十年一度の大祭の時は、殊に藝をつくすと聞ゆ。

○笛をようでうと平家物語などに書きたり。笛の事とは知りても其由をさだかにせる人なし。體源抄は樂家の書なるに、笛の下に腰打といふ字を小書にしたるのみ。腰打とても其義辨へがたきを、おのれ思ひ得たり。是は横笛の字を吳音によめるにて、何の仔細もなきこと歟。笛は入聲の字にて、てきに通ひ、てふと書くべきを、てうと誤るより辨へが

人長—神樂の舞人の長

張良—謠曲の曲名、漢の高祖の名臣張良の史談を脚色せるもの

薪の能—陰曆二月奈良の興福寺にて行ふ神事

○内侍所の御神樂は一旦中絶したるを、男山初卯の夜行はるゝが殘りて、御再興ありけるとかや。顯昭古今集の註に、「神樂には巫女は常には無けれど、やをとめとて八人の巫女相具したり。石清水の御神樂にも有り」と書かれたれば、石清水の御神樂も久しきことなり。今は巫女一人のみ人長と共に立舞へり。

○謠ひものは其書傳り、節章など付けたるものあれど、聲ぶり失せぬれば再びかへらず。今樣或はしをり萩などいふものも傳はらず。七八十年前までは京にても行はれし舞といふものも、今は知る人なくなりたり。越前に幸若とて其家あれども、祿あるゆゑに世間へ廣めんともせざるにや、其書おのれは幼き時常に見たり。

○劇場を俗に芝居といふは、むかしは芝にて伎をなせし故なるべし。然るに江村專齋の老人雜話に、觀世宗雪が能の事をいふ所に、「觀世小次郎一の弟子に堀江宗室といふもの有り、二月の能の張良を二度芝居より所望しければ、宗室にさせたり」と書けり。かゝれば芝居は舞臺に對して見物者の座所をさしたると聞ゆるを、是は後世の一轉なる歟。一友人云ふ、昔の伎をなすさまは、今南都薪の能にて知るべし。後世舞臺を構へしは、陣小屋に倣ひて、城門といひ櫓といひ、太鼓を擊つも陣鼓のさまなりといへるは然るべし。

催馬樂―神樂歌に類する古代の俗樂

吾駒、伊勢海、竹川―共に催馬樂の律の曲名
序、破、急―音樂の順序也、始めは徐々にして閑か也、これ序、やがて普調やゝ急となるこれ破

なるべし。又繁手は淫樂にして雅樂は簡なりといへども、それも限りあるべし。今箏琴、琵琶ともに吹くものによりて彈じ、獨調のよしなきは疑なきにあらず。

○催馬樂の樂曲にあふもの多しと、常に鈴木氏かたられしが、みづから歌ひ又笛にあはせ箏にのせて聞かされしことも有りき。是おもしろきことなり。いづれの曲も斯くやうにうたひものに合ましかば、俗樂を捨ててこれによる人も有るべきものをと、歎息したりし。樂所には、催馬樂も纔に二三曲、近年勅によりて再興ありとかや。

○催馬樂の名目は、貢物を負せたる馬を曳きてうたへるによると、梁塵愚案抄には記させ給へるを、或人の説には、體源抄に「吾駒を序とし、伊勢海を破とし、竹川を急とし、三曲を合せたるが催馬樂といふ樂の一曲なり」と見ゆるによれば、

いで吾駒はやく行きませまつち山侍つらん妹を行きてはや見ん

といふ歌によりて、馬を催すの文字を用ひたるにやといへり。是も言はれたれども、兩説ともに文字によりて義をなすなれば、いにしへには有るまじきこと歟。加茂眞淵の説に、神樂の前張の節に傚ふ故にといふならん、催馬樂の文字は音を借りたるのみ、といふは、さもやと覺ゆ。

宮、商、角、徵、羽―自然の發聲を此五音とし、其音の高低を次第するもの即ち十二調子なり。
貳前云々―二つ前に揃ひて斜に竝ぶ樣にならちずとの意、次の四前云々も同意
流泉啄木―古の名曲の名

角生レ宮。古法なり。是を十三絃に配する時、順八逆六にして愜ふ。今のごときは壹越は三絃以下黃鍾となり、雙調は三絃已下壹越となる。然れどもかくせざれば今の手つきにはあはず、黃鍾盤涉は古今別なし。又曰く、今壹越調壹貳の絃柱、貳前して鴈行にならず、されども今の手付かくの如くせざればかなはず。黃鍾調も一二三四の絃柱四前鴈行にならず。是は押下げても彈かるれども。黃鍾低くなるをにくみて四前するなり。古きにはあはずとぞ。此外話せられし事ども多けれども、おのれ全體解せざることなれば、夢中に飮食せる如くおぼゆるものから記さず。

○國朝の樂、高麗唐樂みな譜のみなるか、或は章歌を傳へたる樂家もあれど、祕して出さぬとも聞ゆ。凡そ樂家の僻にて祕することを旨とし、祕するによりて古の名曲どもの傳を失へるが尠からず。流泉啄木の類猶有るべし。惜むべく歎かざるべしや。琴はいたく徵音にて、源氏物語の須磨の巻に、もとの五節が船にて奏せし音の、海はすこし遠しといふ源氏の假家へ聞えしといふにはあはず。是は作物語なれども、其代になきことは書くべからず。或は昔は大琴小琴といふもの有りしなどいふ說もあれど、さだかなる證文を見ず。すべて傳はらずして、後世の疑を生ずるは、皆祕するのわざはひ

箏—箏の琴、十三絃

の極まる所は知らざれども、理さもやと覺えしまゝ、其說を書置けるを、いさゝかこゝに擧ぐ。今樂家十二調子の次第は、壹越、斷金、平調、勝絶、下無、雙調、鳧鐘、黃鐘、鸞鏡、盤渉、神仙、上無なり。是を唐山の十二律に配すれば、黃鍾、大呂、大簇、夾鍾、姑洗、仲呂、蕤賓、林鍾、夷則、南呂、無射、應鍾、次第のまゝに壹越を黃鍾に充つるなり。然るにかくの如くにては、すべての人聲雙調法までならではとゞかず、鳧鐘以上は唯器の聲のみとなる。凡そ十二律はなべての人聲の高下に應ずべきものなるを、器の聲のみにては本義にあらざること知るべし。されば是を改めてかなたの黃鐘をこなたの黃鍾に充てて下音の極とし、鸞鏡より漸々に次第すれば、壹越第六次に充り、中音となり、鳧鍾上音の極となる。古所謂黃鐘を律の本とし、九寸より次第に短くなるの義に的當す。今古違へる所以は甲乙の事なり。黃鍾を乙にし鳧鐘を甲にすればかくの如し。壹越を中音とせるが人聲に應ずる證は、今俗間優曲者の一本といへるはやゝ高き音にて、一本は卽ち壹越の義なるを、俗間には知らずしていへども當れり。朝に失ひて野にもとむるといふも是なるべしとなん。又箏を論じていふ、宮生レ徵徵生レ商。商生レ羽羽生レ角。

伊勢―伊勢氏に傳へたる足利家の古禮法

折紙―太刀に添へたる鑒定書

律學―音樂の學

も、殿舍の作樣、坊保、坊門の有樣を畫きたるなど、むかしを知るに足れり。

○加茂祭御再興の初年の近衞使は、野宮定基朝臣故實者にて勤め給ひしに、渡殿の疊を少し筋違ひて敷きたりしを、直して座し給へりしが、歸館の後心にかゝりしにや、祕藏の古記錄を探り給ひしに、筋違へは神前に向ひて宣命よみ給ふによしありて、是故實なりき。我家に記錄は有りながら、あやまりぬるは寶のもて腐らしなりと悔み給ひしとなり。かしこにはよく知る人有りしなるべしと、古き人語りぬ。

○いつの頃にか彥根侯の御內の士に、小笠原、伊勢二流の間武家の禮式をよく知る人あり。彥根侯關東御使として上洛し給ひし時、彼士諸家の使者執次の役をつとめしに、もとより禮を知るの名高かりしかば、使者にたつ人皆おぢて、太刀折紙の進退にあらかじめ心を勞せしに、彼士は何の樣子もなく太刀を請取ると引きかたげて出入す、是はいかにと又あやしみけるが、老練の人甚だ感じて、「事しげき間にては斯くせざれば事辨ぜず、時宜を知るは卽ち禮を知るなり」といへりしとぞ、おもしろき事なり。

○故人鈴木修敬は多能の人にて、殊に樂を好めりし。管も絃も皆弄びしかども、他人に異なるは律學にて、和漢を考へあはせて說かれし趣、予は此道にくらければ、其是非

閑田耕筆 巻之四

事部

○舊友和田荊山の話に、加茂祭は久しく絶えたりしを、鴨の長官梨木祐之三位政府に言上し御再興なりしは、元祿七年なり。此時の歌、

絶えたるを繼ぐもかしこし此御代にあひにあふひの今日の祭は

此人あづまへ召されしは正親町公通卿の吹擧にて、（此事公通卿の養女町子といへるが柳澤家の側室にて才女なるが、書かれし松蔭日記にも見えて、即ち柳澤侯專ら執持たれしなり。）歌人の御所望なりしかども、歌は長ずる所にあらず、つひに國學をもて御もちゐなりしとぞ。日本逸史の著述あり、日本後紀の闕けたるを補ふものにして、其功大なりといふべし。神學は垂加翁の門人なり。始め御社零落のことを歎きまうじ、終に神事御再興にも及ばれしとなん。行粧は古き繪巻物によられしとか。此巻物の寫し世間にも傳はれり。凡そ是のみならず、繪巻物の圖の益をなすこと多し。予前後所々に證とせるものの如し。歡喜光寺の一遍上人の行狀の巻物、知恩院に納まる圓光大師の繪詞傳など

あふひ—逢ふ日に葵を掛く、加茂際には葵を掛くるが例也

垂加翁—山崎闇齋

一遍上人—伊豫國の人、天台の奥旨を極め別に融通念佛の一派を開く

○淡海長命寺に普門坊といへる住侶、其麓松が崎の巖の上に百日荒行して、終に生身天狗に化したりとて、其社卽ち松が崎の上本堂の裏面の山に有り。此僧の俗性は此長命寺のむかひ牧といふ村にて、某氏忠兵衛といふ鄕士の家より出でたりしが、化して後一度至り暇乞し、「今よりは來らじ」と聲ばかり聞えて去れりとなん。今は百有餘年前のこととかや。今も年々某月日、此社の祭は、彼忠兵衛の家より行ふとぞ。

○某浦よりかゝる奇物出でたり、某山より怪獸顯れたりなど、圖してとりはやすことどもあれど、或は好事の者のいひふらすも知るべからねば、こゝには擧げず。天地間の廣き、いかなるもの有るべきも計るべからねども、虛も害なく實も益なきことはさて有りなん。

さて有りなん…そのまゝ是非を論ぜずして置くべきならん

けー故

椎尾といふ山背より登りしに、半腹にて一道の暴風吹來り、是に競ひて谷を過ぐる一僧長常に殊なるあり、緋衣を著たるが、袖は風に翩翻し、瞬目の間に吾來しかたへ往き去りぬ。世にめづらしく足速き人哉と計思ひて、あやしと迄は心づかざりしが、同行の僧一人おくれしを待てども來らず、立歸りて見るに、巖の陰に打臥したり。是はいかにといへども、物に醉ひたるごとく眞氣なければ、せんかたなく兩僧の肩に引きかけて登り、本堂の前に至る時、堂守と思しき僧是を見て、「いとほしや、山人にあひ給へるや」といひし時、始めて心づきて、先に見しは是なるべし、吾は何とも心なくて過ぎしが、此僧は道におくれたる間、此異形におそれけるならんと覺えし。やう〱に助けて旅宿をもとめ休めけるが、明る日は事故なかりし。さて昨日の事はいかにと問ひしかども、恐れしけにや遂に其由を語らで過ぎぬ。是世にいふ天狗なるべし。堂守が僧の精心なきを見て山人に逢ひ給へるならんと言ひしを思へば、此山にては常に有ることなるべしと語られし。又愛宕山、吉野山にても、人のとらるゝこと折々有り。引裂きて杉の枝にかけたるなども見し人あり。あるは數年引きつれられて後故なく歸りたる話もあり。野狐にかどはされしとは趣大きに異なり。不思議なるものなり。

業通—魔性の通力

どもの爲に施すなり」といへり。「一盃の飯をあまたに施し、はた一月に兩回にて足り、みづからは喰ふに及ばずといへる皆あやし」と詰問せられしに、「人間には異なり」とのみいひしとかや。小祠成就し、彼書けるものは額にして今も有りとなん。凡そ少し物よみ理窟などいふ人は、狐狸の附托すといへばうけがはず、それは狂亂なり癇症なりなど笑ふも多し。吾智の限り有るをかへり見ず、事物の理を究めたりと思ふは、かへりて笑ふに堪へたり。人は人の良智あれば、物は物の業通有り。予もまさしく知れる所あれども、あまりに怪談多ければもらしつ。凡そ數百年の狐は氣ばかりにて形はなしとおほし。

○本朝にていふ天狗は唐土にて說なきことなれば、諸儒さまざま議論す。徂徠氏も天狗の說といふ著述あれども、決定の義なし。然るに先年護法資治論とて、水戶の儒士義學を好める人の著せし書を見しに、曰く、

世傳天狗者、主㆓災禍㆒。是非㆓天狗星之類㆒。地藏經曰。天龍夜叉天狗土后等。依㆓此排次㆒。是一種鬼神也。

予是說によりて地藏經を閱せしにたがはず、畢竟山鬼の一種なり。天竺の言を傳へて、こなたにてもしかいふなるべし。予相識る一老禪少き時筑波山に詣でんとて、同行に三僧

檀越―施主

神を祭れば云々―論語卷一八佾に「祭如レ在、祭レ神如二神在一」

朔望―陰曆の一日と十五日

へ來り恩を謝し、「そこの終身は衣食乏しからず守護すべし」といひて去れりしが、寮主の檀越のうちに此事を聞きし人、「此僧は無我に正直なる故に此奇特を得たりけり」と感じて、平日衣食を供養せしとなん。是は守興和尙江戸留學の間の事にて、正に見聞きしとなり。予思ふに、神を祭れば神いますこと疑ふべからず、辨財天と念じて法施せしからに、靈狐所を失ふ、鬼神を祭る人必ず思ふべき事なり。

○又同じく和尙の話に、是も增上寺にて、卽ち和尙留學の寮の傍輩の若僧に狐つきて、其所作女のふりに成りぬ。さて主僧にむかひて言へらく、「吾は隣舍の庭に小祠ありて住みしものなるが、寮主祠をこぼち捨てられしかば住むべき所なし。あはれ御庭にかたばかりの物をしつらひてたばへ」と乞ふ。主僧うけがひて其從來を問ひ、はた、「名もありや」と問ふ。答へて、「もと洛西久世の者なり。數百歲の先此地に來り、名は花崎と申すなり」といふ。「然らばみづから名を書くべし。それを鳥居の額にせん」とあるに、「物書くことかなはず。されども手本を賜はゞ書きさむらはん」といふまゝに、花崎社と三字書きて與へたれば、それを見てたゞちに書きたるが、書きたる所は寮主の手にまさること遠し。さて又請ふらく、「月の朔望には一飯を與へたまへ、吾は喰ふに及ばずといへども、眷族

初午―二月の初の午の日の稻荷神社の祭事

影向し―姿を現し

用ふる由の話ども聞けるにつきて、稻荷の神官達に其金の納まる所を問ひしに、かつて知る人なし。彼等が黨にての所爲ありや、知られぬことなり。

○江戸增上寺内の寮舍に狐の小祠ありしかば、初午に近隣の僧衆を招きて酒飯などもてなさんとす。既に膳具調ひて先小祠に備ふべき折しも、住僧は法衣を脱したれば、新に來たる僧に備へ物を托し、「法施をもせられよ」とあつらへたれば、うけがひて事濟みぬ。然るに明の日其寮中にある一僧の少しおろかなる人玄關に居れる所へ、烏帽子裝束したる人來りて、「たのみたきこと有り」といふ。「何事ぞ」といへば、「年來吾住める小祠へ辨天影向し給ひて居がたし。別に小祠をかまへ給はれと寮主へ傳へ給へ」といふ。何心もなくうけがひたれば去りぬ。さてうち忘れて二三日を經たるに、再び來りて、「なぞ傳へ給はらざる」と怨みしかば、おどろきて速にかくと告げたりしに、寮主あやしみながら思惟して、彼初午の日膳具を托したる僧の所へ行きて、「何と念じて法施ありしや」と問ふに、「辨天と心得て拜みたり」と答ふ。「初午に辨天を祭るべきやは」といへば、「實にあやまてり、社の故にふと辨天と思ひしなり」と笑ひぬ。さりければ彼あつらへしまゝに其傍に又祠をかまへて勸請の式など行ひしに、程なく彼烏帽子きたる人もとの僧の居所

などふせぐ事はもとよりにて、住僧他へ法事などに行く時は守護して行くとか。人の眼には見えねど、或時彼僧のはける草履にものをかけし人有りしに、歸りて後もの陰より人語をなし、「吾草履の上にありしに汚せり」とて大に怒りしを、住僧、「夫は人の眼に見えねばせんかたなし、怒るは無理なり」とさとしければ、げにと理に伏せりとぞ。此狐の告げし言に、「凡そ吾黨に三段有り、主領といふは頭にて、其次を寄方といふ、其下を野狐といふ。人に禍するは大かた野狐なり。然れども吾下の野狐にあらざれば制しがたし。所々に主領有り、もし他の主領の下の寄方、もしは野狐にもあれ、是を制すれば怨をうくること深し。一旦の怨永世忘れざること人よりも甚し」といへりとなん。是は狐つきのことを彼寺にたのみて問はしめし時、こたへし言とぞ。凡そ物を問はんと思へば、書附けて本堂にさし置けば、其答をまた書きても見す、人語をなして答ふることも有り。形は見せず。凡そ住僧を敬することは君のごとくす。或時官を進むために金の不足せるを助力せられんことを乞ふ。住僧うけがひながら不審して「其もとの金はいかにして持てるや」と問はれしに、「本堂の賽錢の箱に入らずこぼれたるを、折々に拾ひ置きしなり」と答へしとか。常に本堂の天井に住めりとなん。さて此狐に限らず、官に進むとて金を

はけつねといふ。昔はけつねとのみ稱へしにや。或書は何にか、おのれ彼是考ふれどもいまだ見あたらず。稻生の社今下の五神合祭の神供殿は、常のごとく狛犬にて、上段の三神をいはへる社は白狐を狛犬にかふ。是も彼訓よりおこれりとぞ。されば世人狐をつかはしめと思ふのみならず、狐もまたしかおぼえたるべし。諸國より番狐といふもの此山に來りて穴に住めり。大かた夫婦すみて、もし女狐姙身の時は、別に産屋の穴にて子を産めり。しかも其子をいづくへ移すや、山に住むはたゞ夫婦のみなり。又番の年限りあるや、時有りてはかはると思し。或は田舍より、「我里の狐殿番に參られたり、いづくにあらるゝや逢ひたし」とて來る人もあり。夫は穴を敎へてやる。其子細はかつて知らずと、彼御社の神官たちはいへり。又此番狐の外は野狐一疋も山中に住まずとなん。又狐附は此社中へつれ來れば大に恐れて必ず去るとかや。都鄙ともに或は狐の所望、又さらでも稻生とて狐を勸請する時は、必ずこの神官の家々に勸請の驗を請ふ。いにしへは知らず今世狐の本所とするはまさしき事なり。

○淡海八幡の近邑田中江の正念寺といふ一向宗の寺に住める狐有り。其寺のために火災

はぶつかひ—はぶを自在に使役する者

交趾—今の安南

稲生—又稲荷に作る、本文前後混用せり

惣身にめぐりて死す。又はぶつかひといふ者あり、其島々にて悪事をなせるもの、陳じて善悪わかちがたき時、其咎ある者を咎なきものと共に車座にして、彼はぶつかひを呼びてはぶをはなせば、必ず咎ある者をうつとなり。常にも此はぶにうたるゝは宜からぬ者なりとかや。然らば交趾の象を用ふるに似たり。さるに此蛇を見附くれば必ず打殺すといふは心得ず。人の善悪を知りてうつものならば正しき物といふべし。

○章魚の内に或は蛇の化するもの有りといふ。ある人の話に、越前にて大巌にふれて尾を裂きたるが、遂に脚に成りたり、其間時をうつせしといへりし。又使ひし僕も彼國の者にて、是は山より小蛇あまた下り來て水際に漬り小石にふれ、漸々に化して水に入りたりと言ひき。彼邊にては折々有る事ならし。

○薯蕷の半鰻魚に化したるが、彼薯蕷の分折れたれば、生氣出でずやみたる物をまさしく見たりといふ人ありき。谷川の岸の自然生の芋水に漬りて化するとぞ。筬魚とて鮎のごとき魚も、竹の水にひたりて化すといふ、同じ類なり。

○狐を稲生明神の使はしめといふこと、古書に見ゆる所なきを、或書に御食津の神といふ。稲生の神の本號なり訓に三狐と附きたりといふ人ありき。狐はきつねといふのみならず、くつねと

眞魚筯—魚肉を料理する時に用ふる金屬の箸、眞魚箸

六—首尾四肢

其札を取拂ふ時見附けたり。札の年號を見れば、二十餘年を經たるに死なでありけることを記さる。此類にて今は四十年にも成りぬらん、中京に眞魚筯を負へる鳶常に飛びありきて、人皆見しりけるが、年をへて其柄の木は朽ちて刃はさびながら猶見えし。是ははじめ人の魚を調ずる所へ下りて其肉を取らんとせしを、やがてもてる眞魚筯を打ちたてしに、それ負ひながら飛び去りしなりとなん。是も同じ類なり。苦痛はあらめども死生に心なき故にかへりて死せざるや。莊子に所謂醉ひて車より墮る者はなやまぬためしならん。東近江にて、小兒が竹林に入りて誤りて竹の切株の尖にて横腹を刺し、腸數尺出でしを、予が識る醫士腸を收め縫ひて故なく平癒したり。大人ならば心先へ勞して堪へまじきに、小兒なるが故に生きたりと語られしも、同じ理なり。まして畜類は鶴の首の長き、龜の六を出入する類、能く長壽をたもつは、數屈伸而導引精氣、身を損じても重きを負うても堪ふるは此道理ならん歟と或人はいへりき。

○大隅の人の話に、鬼界島、大島、とくのしまなどに、はぶ（文字はしらず）といふ蛇ありて、太く長きものなり。人をとらんとしては竪になりて、其齒をもて人の頭にても身にてもうつ。うたれたる所毒氣にて腐れり。手などなれば其うたれたる所を切捨つ、然らされば、腐

正しき—虚構ならざる

し、油をも出すなり。人のおそるゝ時汗を流し尿するも同じ理なりとぞ。

○鼈を薬用にすべしと醫の教へたるに、其人殺すに忍びず、鼈にむかひて其由をいひ含めて放ちたるに、其病はたして癒えたりとなん。此類の話あまたあれど、これはおのれ知る人の浪花にて交りたる人此事をなし、此驗を得たりと語りし旨なり。病は痔疾にてありしとなん。凡そ鼈は執念深きものにて、折ふし奇なることも聞ゆ。中京の者三人鼈を喰はんといひ合せて、それ賣る家へ行きたるに、中に一人門をさし入るより、俄に「我は喰ふまじ」といひしに、二人も亦げにとて連立ちて出でたり。さて歸るさ、「なぞ俄に喰ふまじき意には成りたるや」と問ひしに、其男身を戰慄して、「我立入りて見れば、鼈火爐によりて寢たるがあやしくて、能く見れば亭主なりしほどに、おそろしく成りたり」といひしに、二人も、「そよ我々も同じことにてありしに、吾子喰ふまじといひ出でしかば、うれしくて速に應じたるなり」と語りあひ、此後は永く此物を喰はず。是も正しきことなり。

○龜を床下のさゝへ物にしたるに、年をへて食はずして能く生をたもちける事史記龜策傳に見ゆ。又中山三柳の醍醐隨筆に、蜈蚣を誤りて祈禱の札の下へ針もて打附けたるを、

水尾つくし―澪標

龜背―せむし

妙なり。味噌汁に調じて喰へば、數寸脱せるも卽時に收りて、其勢ひ病人も自らおどろく計なり。時にやゝ痛めども收りては後患なしとなん。

○同じ和尚備前の下津居より船にて丸龜へ渡る海上、丸龜近くなりて遙かむかひに五尺計なる黑き水尾つくし見ゆ。さも深かるべき所に、いかに長き木をうちこみてかく見ゆる計にやとあやしくて、船頭に問はれしかば、船頭見て、「あれは大龜の首を出したるなり。空曇なく海のどかなる日は、かく首を出し或は全身をも見す。昔より大小二龜住みて、大なるは卄疊敷のほどもあらん、小なるもさのみは劣らず。このものの住めるが故にこゝを丸龜とは名附けたり」と語りしとぞ。

○龜の看經といふこと世に傳ふ。おのれは正に聞きたり。誠に程拍子よく、音の堅き鉦を打つごとく、初は雨だれ拍子にて、次第に急に、俗に責念佛といふ如し。又鼈をすぽんといふも、其鳴聲によれり。是は間遠にすぽん／＼といふ、皆夜に及びて聞けり。

○龜尿は小兒の龜背を治す、是を取るには漆器にのせ煎餅やうのものを喰せ、覆せ置けば一時餘には小猪口に一盃ほどは泄ると、試みたる醫師の話なり。又或人云ふ、朱漆の器よし、或は龜に鏡を見するもよし、蝦蟆の油を取るに同じ。是は己が影におそれて尿

しぞくー氏族・やから

すさろー殊勝

木綿ー古へ楮の纖維にて製せし布

このさかづきは、建久のむかし和田のしぞく大磯につどひて宴しける折にめぐらしたるものの、今なほ鶴が岡の宮居に納りたるを、露たがはずうつせるなり。作りざま繪つけのやうなど、實もむかし覺えてすさうなる上に、彼宴には曾我の十郎虎ごぜと共にたちまじり、弟の五郎がいさみ猛かりし事など世の語り草にて、いよゝ此杯の光を添ふるといふべし。

〇木綿は今世稀なるが、阿波國麻殖郡種穗忌部神社の神主より、神祇伯の御家へ年々參らす例なりとぞ。麻殖郡の名も是によるなるべし。此社所レ祭神天日鷲命、天太玉命、栲幡千々姫命、長白羽神、津咋見神等なりといふ、古き由緒あるにや、木綿は常の麻よりも白くて脆きものなり。

〇海龜は尾のふさやかなる物なり。おのれ播磨高砂の沖にて水中に居るを見たり。宗興和尙の話に、このもの岸に登りて卵を產み、身をもてよく地を堅めて、人知らぬやうに構ふ。人も亦はゞかりて是をとらず、取れば祟りて其年漁りても魚を得がたし。龜は龍王に次ぎて海中に勢ある物なればとかや。さて彼卵を埋みたる所の遠近をとめて、其年の波の高と低を占ふ。又童などもし彼卵を取ることあれば、是をもて脫肛を療するに

鎌倉和田盃圖

亘リ四寸九分
高六分半
裏上底亘リ一寸六分
深六厘
惣ハ黒漆ぬりあハせ
うすく木理をみせ
押所ハ金泥為
委文下　山



武藏鐙―古へ武藏國にて造り出せりといふ鐙

こみたるなれば同じといへり。畑橘洲もまた説あり、曰く、くもではくむ手なり、手をくみたる如くやり違へたるをいふ、蛛をくもといふも、絲をくむの義なり、又雲をくもといふも曇るにて、くもるはこもるなり、義は別なれども言のためし斯くの如しとぞ。尤も面白き考にて、古巖が證文をてらすべし。

○又古巖の考、槻弓は槻の若生にて作るべし、京極黄門の歌、

けさ見れば弓きる程に成りにけり植ゑし岡べのつきの片えは

拾遺愚草に出づ。此木は堅くさくゝて、老いては弓に作りがたしとぞ。

○又同話に、武藏鐙さすがとつゞきたるを、契沖師の考、鐙さすと計りうけたるとす。然るにさすがとは鐙の上の輪の中の鉄をいふ。今はさすがねと誤る。武藏鐙は此かね短くて、左へも右へも心のまゝに掛けかふべし。⊙形如レ此、今の製は此かね上にとゞきたればかたく一定す。⦶かくの如し。さすがにかけて思ふの詞も左右せるにて、武藏鐙の所詮見ゆといへり。

○和田一類酒宴せしといふ盃、今鶴岡の神庫に納まりたる物を、或人うつして事故を記すべくもとむ。今をもて見れば古雅なるからに左に圖す。予が記は、

鷹經辨疑論—寫本一卷あり、著者の隨筆にて、十餘項の考證を揭ぐ

上人もなしと申すとこたふる由、村井古巖かたれり。

○又同じ人の話に、しのぶの形は今川了俊の言塵抄に圖出でぬ。是は加茂眞淵の說に同じく、風蘭の形してうらに星あるものなり。忍ぶ摺の狩衣といふは小き水玉のごとき形を摺りて、彼うらの星になぞらへたるものにや。其子細は鷹經辨疑論に、鷹尾にしのぶのふといへるもの有り、これ水玉の小きものなり、これをもて推して知るといへり。

○伊勢物語八橋の段に、「水せく川のくもでなれば」（今本に水行とあり、眞名本にせくとあるものよしとぞ。）といふを、加茂氏の解に、蜘の手をひらきたるやうに右左へ枝川を取りて、田へ水を入るゝためにす。されば橋を八ツわたせるなりといへりとて、其圖をも出せり。さるに今燈臺のくもでといふは十文字を斜にしたるものなり。是も古くよりいふ由、同じく古巖の考に、初瀨寺の緣起に、ろの字を上下に置きて歌よめる者に、女を與へんといふ人有りしに、其女を戀ひて觀世音に祈り申しければ、示現ましますとて、

轆轤ひくたがひの綱の行きかへりくもでに物を思ふこのごろ

と見えたるも右十字の斜なるをいふべし。又平家物語に、大納言成親卿を取籠めし所へ小松殿とひ給ふ條に、「くもで結ひたる内に取りこめて」とあり。是も木を違へて打ちか

物名の歌―題の詞を歌中に詠み入るゝ和歌の一體

墨滅の歌―古今集の古來諸家の證本と稱するものの中に、書き入れてはありながら黑にて消したる歌にて、本文庫本も亦之を流布本の例に倣ひ、巻末に一括して揭げ置けり

るものに、古今集のをがたまの木は御賀玉とて、祝ふことに用ゆるものの由かけるは笑ふべし。物名の歌

みよしのの吉野の瀧に浮び出るあはをかたまの消ゆと見ゆらん

といふさへ賀のものには似つかはしからぬに、まして墨滅の歌には、

かけりても何をかたまの來ても見んからはほのほと成りにし物を

といふは類なくいま〱し。それがために墨滅なるべけれど、元來賀に用ゆる物に、かくよむべきものかは。もとよりをおの假名の違もわきまへぬにや。

○もゝちどりはよろづの鳥の春に時えて囀るこゝろ論なく、萬葉集にてわきまふべし。後世にも逍遙院殿の御歌に、

百千鳥さへづる中にあらたまのとしの初音はうぐひすの聲

是にて惑說は破るべし。

○われからといふもの、小きえびのごとしと袖中抄にも見ゆ。越前若狹丹後わたりの方言にはありからといふ。尺なぎといふ物に似て、凡そ一寸計の赤きものなり。わかめの類の藻につけり。わかめ賣る女どもに、ありから多く附けたりと咎むれば、ありから喰はぬ

進上　尹大納言殿

嘉曆元年十月八日　加賀守　在判　花押

三位註記御坊

此正文は義卿がもとにあり。

嘉曆元年十月十三日　圓意　在判

預所在判　奥島庄上司殿

○　まきもくの檜原もいまだ雲ゐねば小松が原に淡雪ぞふる

と云ふ歌を、六帖にくもらねばと誤り、其儘にて新古今集にも入れらる。されば解きむつかしきにより、新古今集中祕歌の一種とする説も聞ゆ。逍遙院殿も檜のくもるを日にかけ給へり。萬葉集の雲ゐねばは、後代のてにはにては雲ゐぬにといふ意なり。集中の歌に例あまたあり。

○薩摩がたの鬼界島、屋久島、兀了島の内に、をかたまの木といふもの有りとぞ。其屋久島より得たるもの津國灘吉田氏に祕藏す。花は紫瓣黃蘂、實は橘柚の類となん。是往古よりある物歟しらねど、聞くまゝに記す。或は祕書と號けて、心得ぬことのみ書きた

逍遙院殿—三條實隆

てにはーてにをは、助辭

采女口ー采女司、宮內省に屬して采女の檢校の事を掌る處
近江表ー近江國蒲生郡の近邊より產する疊表

蓋野木瓜通草形狀相類。故道祐以之爲通草子。亦誤也。

私に云ふ、順の說にあらず、式に見えたる所上に擧ぐるごとし。是論誰なることを知らず。

閑田子曰く、これは奥島の內王之濱といふ所に生ずとなり。里人は某王の此所にて飢ゑさせ給ひし時奉りし例といふ。其王說とさだかならず、王之濱の名あれば、いづれにも帝王のおはしましておものに奉りしなるべし。今彥根侯より牟倍田といふ除地有りて、其費用に充てらる。人夫禁中へ持參る時は黃衣の上計を著る。京極宮の諸大夫生島家より執奏し、采女口へ差出せば、長橋より靑銅貳拾疋を賜ふ。閏月ある時は三十疋也となん。又生島氏へも同じさまにて贈り、且近江表拾枚を附す。此家にて酒食を與ふ。近年は夜宿をもせしめらるゝとなん。其盛所の器古朴にて面白きものなれば、左に圖す。式所謂輿籠の遺製歟。又彼奥島に傳來せる所の文書を示す人あり、依りてこゝに寫す。

近江國蒲生郡奥島庄內莫供御人等申任先例。此非分之課役可專調貢之由被聞食事。可下令下知給上之旨。
天氣所候也。仍言上如件。俊秀誠恐謹言。

十一月廿一日　　左中辨俊秀達


郁子ノ葉
進上折貮合
下司
葉数三四五
四手
十六紙

永徳百首―北朝の永徳年間に行はれたる百首歌合

といふは、夏熟すの説にあへり。又永徳百首に、

此ごろは實さへ花さへ同じ枝に並べて見つる軒の橘

といふは、珍らしきよみやうとはいへど、世の常の橘柚花落つる時、やがて少き實生れば不審なきにやと或人は言はれき。

○近江蒲生郡奥島より、毎歳霜月朔日に禁裏へ獻ずる牟倍といふもの一奇品なり。延喜大膳職式に曰く、「諸國貢進菓子近江國郁子二輿籠」と見ゆるものなり。黒川道祐の日次記事に説あり。曰く、

今考。所レ獻之物通草之實。而其氣味形色與二郁核子一大異也。按土人以二此獻物一不レ稱レ名。專謂二御貢一。御貢與二郁核一倭語相近。故誤稱二通草一。而謂二宇倍一者乎。以二枯柴一造二小籠一盛。其體存二朴古一。（按ずるに、以枯柴造小籠とは誤也。其圖左に出す。）

或人此黒川氏の考を論ぜる書入有り、曰く、

按順和名抄云。郁子和名牟閉。今視二近江國所レ獻之物一。乃野木瓜實也。和名止岐波阿計比又名二牟倍一。凡貢物和訓皆稱二牟倍一。即於仁倍之轉語也。此物近江自レ古有レ故爲二貢物一來。故稱二之牟倍一。特不二此物名一レ之。貢物之惣稱也。順誤以二郁子一當二牟倍一。

戴叔倫―唐の金壇の人、字は幼公、有名の詩人也

白香山―白居易

うかにて、後にねぶと訓じたるも知るべからねど、初の歌合歡花とあるからは、ねぶの花とよむべし。光俊朝臣はたゞ六帖にのみよりて萬葉集を考へられざりけるなるべし。又按ずるに、若しかうはかふの誤、合字の音にて、かは歡字の音くわんの約かんのんを省きたるにてやあらん。然らばいよ〳〵萬葉集の古義にはあるべからず。

○戴叔倫が盧橘花開楓葉衰と云ふ詩の三體詩に見えたる註に、

廣州記云。盧橘皮厚氣色大如レ柑酢。夏熟。土人呼爲二壺橘一。又增註。盧橘即枇杷也。

とあり。又正字通橘條を見るに、曰く、

或云。金橘盧橘也。蘇軾誤以二盧橘一爲二枇杷一。陶九成始疑レ之。以二廣州之壺橘一爲二盧橘一。

とあり。白香山の律詩に、「盧橘實低山雨重。棕櫚葉戰水風涼」とある對句をもて見れば、是も夏熟するものとす。然るに和歌者流にて、盧橘の題は唯橘をよむことの流例にて、花を主とし、右の義には愜はず。たゞし其中堀河院初度百首神祇伯顯仲卿の歌に、

吾園の花橘の色みれば金の鈴をならすなりけり

杜詩―杜甫の詩

傳授祕說―足利時代の末葉より歌道衰退して、古今和歌集中の言葉に三木三鳥の傳、三草一木の傳など稱へて容易に人に傳へぬものを設けたる事をいふ

鉾といふとか。鉾も鑓も同じく、形によりていふなり。此類許多あるべし。燕麥とは麥に似たるものにて。杜詩に出づ、俗名茶ひき艸、西どちともいふ由、西どちの義は知らず、茶ひきとは穗を爪上に載すればまはる故とぞ。小兒は「ぎい」といふ。是も引けばなるの義なりと聞けり。これらは見る所によりて心々に名づけたり。おのれは物產に暗ければ、纔に聞く所を擧ぐ。

○常見聞くものも、古今の名異にして辨へがたき故に、和歌者流など傳授祕說などいふこと多し。知られぬことは知られぬにしてさし措くも何の咎かはあらん。しひて明らめんとて牽強附會するはいかんぞや。或は今古の間疑はしきことも有り。光俊朝臣の歌、

山深みいつよりねぶと名をかへてかうかの木には人まどふらん

といふは六帖に

晝は咲き夜はこひぬるかうかの木君のみや見んわけさへに見よ　萬葉に合歡花と書けり、わけは我なり

我妹子がかたみのかうか花にのみ咲てけらしもみにならぬかも　萬葉にはけらしもをけだしもとあり

といふによりて詠まれしなるべし。さるに此二首もと萬葉に有りて、合歡と書きねぶと訓ましむ。今も亦ねぶといふ。六帖撰の比のみかうかといひたるや、たゞし若し古訓か

松尾の峯しづかなる曙にあふぎて聞けば佛法僧啼く

といふ歌なるべし。今は彼山にて聞きたるといふ人なし、絶えたるにや。又下野那須の雲巖寺に此鳥あり、及び慈悲心鳥もありと、播磨玉拙法師話せり。

○雀の子飼へばよく人に馴るゝものにて、放飼にするに安し。或は人の肩に登り懐にも入り、又庭の樹木にも遊ぶ、苦しげも見えずよきものなれども、あまりに馴れて人の足もとにまとひ、あやまちて踏殺すことのあるがかなしと人いひき。此飽雀にふと酒糟を喰せたれば頓て死したりとか。さらば雀には限らず、鳥類には大毒なるか。人の心づかぬことなり。

○雀の字、大雀尊と古事記に書かれしごとく、さゝは古訓なるべし。さゝとは少き事なり。本草綱目時珍說、上の少は其容につき、隹は短尾の鳥を稱する字なれば、合せて雀字を作るといへり。後世さゝと稱へず、すゞめと訓みても少き事に用ゆ。すゞめうりは、ひめうりともいひて、王瓜の類なり。すゞめの鐵炮といふは看麥娘といふ草にて、皆少きものなりと一友人話せりき。

○和漢同物にて、名づくる所も同じきもの有り。狐の鑓と俗名せる草は、かなたにて香

王瓜ーからすうり

金瘡―刀きづ

京兆尹―京兆は古の左右京職の唐名、京都町奉行

また此ごろ或人の筆記を見れば、靈元法皇の御製御集に有りとかや。御詞書、佛法僧の巣をつくりたるを見て、

聲を聞き姿をいつのよにか見ん佛法僧のありし梢に

此巣はいとめづらし、いづこより採りきて叡覽に入れけるにや、京ちかくにては松尾によめり。是につきて一話あり、近古に京師に名ある醫師を夜更けて迎ふる者あり、かねて相識る人の名をいひたれば、速に輿に乘りしを、頓て物にて押しつゝみ、數人圍みていづことも知らず勾引し行きぬ。さていと山深き所の大なる家の内に舁き入れ、家あるじと思しき者の金瘡を療ぜしめ、藥をこひて後あつく謝物をあたへ、また先のごとく圍みてかへしたり。いかさまにも賊の隱れたる所と思しく、ものをも得たるからに、默してはあられず、官に訟へたれば、時の京兆尹板倉侯其所のさまを尋ね給へども、東西をもわきまふる所なかりし旨上の件をのべけるが、唯一つめづらしと覺えしは、佛法僧と鳴く鳥有りしと申す。侯さては松尾なるべし、松尾に此鳥をよめる古歌ありとて、速に吏をつかはして彼山深くもとめさせ給ひしかば、はたして賊の首領居りしとなり。これは新六帖に光俊、

佛法僧—佛と法と僧、佛敎の所謂三寶

太山—みやを賦

とよめりし、因に人々にも歌勸めぬとかや。おのれも乞はれて、

　慈悲心と鳴く聲きけば鳥にだにしかぬわが身のはづかしき哉

とよみておくりぬ。比叡に詣づる人は心にかくべきことぞ。又佛法僧といふ鳥も、同じく鳴聲につきて名附けたる類なり。高野山に名高きは大師の性靈集に見えしが本なり。後夜聞ニ佛法僧鳥一と題せられて、

　寒林獨座草堂曉。三寶之名聞ニ一鳥一。一鳥有レ聲人有レ心。聲心雲水俱了々。

玉串正視云ふ、此詩を梅村載筆といふものに評して、「性靈集中此詩尤も好きなり」またいはく、「高野山にあり、下野國日光山にも有りと、藤原敦光の書ける縁起に見えたり」と記せるとぞ。又高野山通念集に、佛法僧の鳥のことは、靈窟の閑林の内にて曉がた一夏の間啼くとなり。雄佛法と鳴けば雌僧と聲をあはすなり、と見ゆとかや。此一書は予いまだ見ねども、他の説による。又古歌にもよめり、

　吾が國は御法のみちの廣ければ鳥もとなふる佛法僧かな

また、

　うきことを聞かぬ太山の鳥だにも鳴くねはたつな三の御法に

まけり—まがりの轉語

ますほの薄云々—徒然草に見えたる有名の話
ふりはへて—わざわざ、殊更

國めぐるあとりがまけり行めぐり歸來までにいはひて待たね

といふを、仙注には、あとりは我一人なりといふ。あれひとりの略語とおもへるなるべし。これを代匠記には獦子鳥とす。尤も從ふべし。貝原翁大和本草に獦子鳥をもて名とせるは、いまだ出所を詳にせずとて、事は右の日本紀を引かる。猶他書にも見ゆべけれど予はおぼえず。

○慈悲心鳥といふものは、下野の黒髪山にあり。（日光山なり、此鳥の形狀鳩のごとく、羽は鼠色にして尾長く、足と嘴は黑し。聲勝れて高く、夏の氣候に入れば晝夜ともに啼くと、百井塘雨筆記にしるせり。此人は足跡天下に周き人なり。）さるに其宮に仕まつる鵜川氏、はからず比叡の山にても聞きつけしと語られしかば、柏原瓦全なる人、彼ますほの薄をとひにまうでし登蓮法師が昔にならひて、やがてふりはへて比叡にのぼりしに、比は水無月斗唯老の鶯駒鳥などの聲のみなりしかば、口をしながら諸堂ども拜みめぐり、暑さに汗あへてこうじたれば、よしや今はとて下りしに、水呑みと云ふ人舍のほどにてほのかに聞きつけたり。あはやと心をしづめ耳を澄すに、十聲斗淸らに鳴きつゞけたる、嬉しさいはんかたなかりしといへり。はじめ修學院にて或僧をいざなひし時、

慈悲心と鳴くてふ鳥をたづね行く道しるべせよ法のころも手


納言

防人―昔外寇を防がん爲に筑紫の太宰府に置かれたる兵士

日本紀天武天皇七年「獦子鳥蔽レ天自二西南一飛二東北一」と出づ。和名抄に、

辨色立成云。臈觜鳥阿止里（一名胡雀）漢語抄云獦子鳥（和名同上）自註曰。今按兩說所レ出未レ詳。

但本朝國史用二獦子鳥一。又或說云。此鳥群飛如三列卒之滿二山林一。故名二獦子鳥一也。

袖中抄に、

あまたゆひゆたひたゆたふ雲間より聞えやすらんあまどりの聲

といふ歌を出し、「あまどりとは空の雲の中に住みて大かた人にも知られぬ鳥なり。其鳥六月晦日七月になる程に、雲の中に巣を作りて子をうむが、風など吹きて雲いたくさわぎて其巣破れぬべければ、侘びて鳴くなり。其時計ぞ世の人鳴聲をも聞く」と或書にかけり。まことゝも覺えねど、古雙紙にしるしたれば書載するなり。但和名抄には胡鸞と書きてあまどりとよめり。又あとりともよめりとて、右に引く所の和名の文を出されたり。今按ずるに、和名抄の胡鸞は別物ならん歟。別條にて、

兼名苑注云。鸞有二胡越二種一。楊氏漢語抄云。胡鸞子阿萬止里。

と見ゆるを、袖中にひとつにして舉げられたるは覺束なし。もとより雲中に巣を作くるなどいふ雙紙の說は論に及ばず。さて又萬葉第二十防人が歌に、

ならじやは｜ならざらんや

しくなるとて竹棹などもて追ひやらふ人もありとなん。畢竟世の風に乗ると價の貴きにまどふならじやは。あるは耳目の翫びにはあらで、利を求むるがために、他の好みを射るも多しとか。士農工商各其業あるがうへに、かうやうの小徑によりて利を謀るは論ずるに足らねども、また大息せらる。

○飼鳥を好む人は非にして、飼るゝ鳥のやうを知る人に聞けば奇特なるものなり。巣ながらに畜れて籠の內をおのが所とし、山野の廣莫なるを知らず、子鳥の時は附親の音を大事と聞きうけんとす。親鳥と呼ばれて、子鳥あまたつどへるを、門弟子の思をすらん。先音をたてんとしては能く餌をしたゝめて後、あるはしばし休らひ心をしづむるさまにて鳴出づるが、甚だつゝしみて引色までまさしく繰返し〳〵數ふる趣なりとぞ。人は敎ふるも學ぶも利欲といふものの病になりて、其正しきを得ざるも多きに、小鳥の振舞感ぜざらんや。

○あとりといふもの、過ぎし寛政七卯年秋冬をへて明くる春まで嵯峨天龍寺の林に群飛す。都下の人も亦群衆して見に行けり。此鳥は諸書に出づ。其時人に問はれて考へる所略左に擧ぐ。

珍禽奇獸國不レ畜―尚書に「珍禽奇獸不レ育ニ于國一」

三光の囀―鶯の囀る聲、或は法華經と曰ふが如く、或は古計不盡（コケフジ）といふが如く、或は月星日といが如し、共月星日をば三光の囀といふ也

るかし。

○珍禽奇獸國不レ畜は古の誡、異草靈木も亦同じ。瑞祥を獻じて君上の喜をむかふるも是が基なるべし。凡そ人は眼馴れぬものを尊むの習和漢同轍にして、有來れるは多きが故にいやしむ。世にもし鷄といふもの稀ならんに、頭に紅冠を戴き身には五綵を備へ、晝夜時を報ずるといはゞ、深谷海島の遙なるをもいはず、是をもとめて數百金をも惜まざらんを、常あるからに物ともせず、異國の人は日々の食料にさへ充つめり。又猫といふものなき世にて、たまく見る人有りて、虎の形して小に、人に馴安く、其能はよく鼠を捉ふといはゞ、いかに得まく欲せん。あるは世に常あるものといへども、すこし異なれば是を賞してやまず。此頃平地木の實の色異なるを貴びて、世人狂せるごときはいとあやし。いかに奇なる色なりとも、梅櫻はさらなり、草花のうるはしきにたぐふべきかは。まことに吾心に問はゞ明らかならん。又鶯なども聲の引色三光の囀などいひて、親鳥を選み、つ　とてかれが聲を學ばしむとか。これも舊年の内に聲しどろなるより、やうやう日影のどかに成行くにつけてうちとくる音を、おのれも嬉しげに枝うつりして遊ぶさまは、籠の内にさびしげなるにはいづれ。さるをこれは野鳥といやしみ、飼鳥の音あ

本草—支那古代の草木の藥用とすべき物を記せる書

求歡鳥—九官鳥、支那に產して巧に人語をまぬ

秦吉了—又、了哥、結遼鳥ともいふ、和漢三才圖會に「按了哥來於中華」長崎七人稱之九官」又稱佐留加」

なり。川澤にてかく水共に呑みて魚を取るとなん。其水は吐出せり。指揮せるものの言に從ひ進退せる抔、教ふれば教へらるゝものなりと感じぬ。教に從はぬ人は、げに鳥にだも如かずといふべし。

○めづらなるものには、豪猪、やまあらしと俗名せるもの、是は本草又和漢三才圖會などにも出でたるに違はず。惣身管をもて作れる簑を著たるがごとく、色は上黒く下白し。動く時はさわ〳〵と音す。又駝鳥といふもの、凡そ鴈の形象にて大に、足は馬のごとし。是は右の書どもに見えし形とは異なり。求歡鳥とて見せしは、秦吉了なりとか。鵯鳥よりも大に、鳩より小なり。色は眞黒に光あり、言語全く十二三計の童の聲にて、人數へねども、戲場の隣にて、かしこにて人をよぶ聲をたゞちにうつしいふ、教ふる言はもとよりなり、從來人の知る鸚鵡のたぐひにあらず、其音さわやかなりき。形も大に異なり。又右のがらん鳥を初めて見せし後、似たる名を附けてがらくん鳥とて見せしは、實名何なりけん、色あひなどさだかには覺えず、美しきもののいと大なるが、尾を團扇のごとくひろげて舞ひありきし、凡そ五十年計に成りぬらん。此外奇物數十年の間見もし聞きもせしを、書きもとゞめねば大かたは忘れつ。海山の廣き國々の多きさま〴〵の物出づ

觀場—見せもの

うけがはじ—成程と納得せざるべし

口に附きて—命令に從つて

鵜鶘—一種の水鳥、なつてう

を嚙みてあたへしに、今は三年になれり」といひしが、猶小なりし。旅人來あひて、「是は大にして觀場の料に賣らんとにや」といひしに、女「いな斯く養ひて何かは賣るべき、生涯飼ひぬべし。もとより是がために物買ふ人も多し」といはれて、旅人は得ものいはざりき。殊勝のこたへなりと思ひて忘れず。

○年毎に、洛北今宮の御旅所、四條河原の納涼などに出づる奇獸異鳥の類さまぐなり。浪華はまして是を賣買ふもの多しとぞ。其人語につきて伎をなすこと、見ぬ人に語らばうけがはじと思ふ計なり。其中にわきてあやしかりしは、二十年前、形象蝙蝠のごとくにて大なるものを、ごふ鳥と名附けて見せし、つかふ者の口に附きて綱を亙り、或は身を飜轉す。又近き頃水豹とて見せしが、海獸にて、たとはゞ鼬の色象に似て、大さは鹿よりもまさるべし。魚を喰せて、「味きや」といへば、「あ」と答ふ。「今一つ欲しきや」といへば、手を動して小兒の物乞ふさまをす。水ぶねに入れて、物喰しむる所は板を張りたるに、魚を見すれば飛登り、身の尺長けれども進退自由なり。これらの物物品の學ある人はよく知るらんかし。此外がらん鳥と名附けて鵜鶘を見せしが、頷下に袋有りて、數升の水をのましむるに能く收む。たゞし面赤くなり眼をはたらかして頗る苦しむさま

うまご―孫
もたれば―持ちたれば
伊吹山―近江國阪田郡

たる犬、衆僧念經の時、毎に堂前に蹲りて、ともに聲をたてて吠ゆ。食時には、同じく食を與ふればかけ來り、時をたがへずして喰ふ、唯形の異なるのみなりしと、そこに勤めし尼かたられき。黒谷勢至堂にありし犬も同じ類にて、衆僧勤修の時こゑを揚げしが、是は二月十五日涅槃像のかゝりたるに向ひて、前庭に死したりしも不思議なりしとぞ。
○兒島尙膳醫士語られしは、京師より丹波路を經て播磨に歸る山中にて、うち向ふ所物騷がしく、何ならんと見れば、猿どもあまた集りたるが中に、藤かづらやうの物にてあみたる畚のごとき物をすゑて、かはる〲たちより菓など與へなぐさむるさまなり。內には老いさらぼひたる猿ほのかに見ゆ。子うまごども是につかふると知られて、みづからも母の親もたれば、殊更に感じて、かへる道のいとゞいそがれしとなり。形人に近ければ其情も亦近きなるべし。されば是を畜ふもの伎藝を敎ふれば、馴れてよく起舞せり。
○山獸の中には熊は人に馴れ安きものなり。華山のさき牛尾道と三條への別路に、菓賣る女の假初に出で居るが熊の子をつなぎたるを、おのれ立寄り見て其菓物を買ひて熊に與へたれば、女「うまいと申せ」といふ聲に隨ひてうなりたる、いかにもうまい〱と聞ゆ。幾度も同じ。「伊吹山よりいまだ乳をのむものを人のとらへ來るを買ひて、初は物

續畸人傳の評―同書卷之一、馬郎孫兵衛の傳の評

陸氏云々―陸機呉に有り後洛に仕へし時、其愛犬黃耳機の手紙を首につけて呉の鄕家に往き、更に其返書を得て洛に還りし事、述異記に見ゆ

畸人傳の評に錄せり。智も亦人にちかし、老いて用ふる所なしとて餌取の手に委ねて屠るなどは、其情牛馬におとれり。

○是につぎて人に近きものは犬なり。

おもひぐま人は中々なきものを哀に犬の主を知りける

といふごときは常のことにて、陸氏が手飼の類今もはた聞くこと多し。こゝに其智につきて己がまさに知る所を擧ぐ。近江八幡にて或家に養ひたる犬、縣吏の犬を嚙みたるとて大に怒りしかば、せんかたなく西近江より柴賣に來るものの船にことづてて彼地にやりたるに、二十日餘をへて、いたく衰へ毛もはげたゞれて歸り來り、陸地こそあらめ、船にてやりしものの歸るべき道をいかで知りけんと、皆あやしみけり。西近江は比良、小松の邊、もし北へよりては古津、今津などいふわたりよりは常に船かよふ由なるを、いづれの船にか有りけん、此わたりより八幡への陸路、北に向はゞ鹽津、海津をへて三十里にもあまるべし、南へめぐらば堅田より大津、勢多をへて二十里にもやゝ過ぎたるべし。船路は五六里の程ならんを、かく遙に行きめぐりて歸り來りたる事奇といふべし。又人語をよく辨ふるが如きはめづらしからず、中にも彦根の傍南泉庵といふ尼院に飼ひ

故なく—故障なく

閑田耕筆　巻之三

物之部

○過ぎし癸丑歳七月二十二日、攝津高槻の近邑農家の男兒、纔六歳にて馬を追ひて城下に出でて歸るさ、道なる川に水出でて渡るべからず、いかにせんと見居りける間、暮にせまりて雨いよ〳〵はげしければ人かげもなし。童大に叫び歎きしかば、馬やがて此子を喰へてやす〳〵川を渡り、向にして地に放つといへども、闇夜に雨篠をつくが如くなれば、行くべき方を知らざりしに、馬また先にたちて歩みければ、童も泣く〳〵綱を取りて、つひに故なく我宿にかへりたり。迎に人を出したれども、馬は間道を歸りたれば逢はざりし。さるにことなく歸りて、しか〴〵の由を語りしかば、家こぞりて限なくよろこび、先馬をもてなし、明る日餅を搗きて其邊の家々へ配りしが、其隣へ行きたる士、その日聞きて語られし趣なりとぞ。凡そ牛馬は人の勞をたすけて世の爲有益の物なること、他の獸にまされり、疎にあつかふべきかは。牛も舊主を見知りて涙を流せし話、既に續

あつかふ―仲裁する
どよみ―どつと笑ひ

て「吾門を塞げて何とするぞ、疾く他所へ引き連れ行け」といふ。長いらへて、「無理なる人哉、かく危き劍の下にて、我心にまかすべきものかは」といふに、家あるじ息まきて、「花子の身をもて無禮なることをいふものか」と、握りこぶしをもて打たんとす。長も怒りて、「我は其花子を治め、はた斯くやうの非常を防ぐが任なり。貧者の身をもて吾を花子とやはいふべき」と、是も棒を引きそばめ、打たば打たんず勢なり。其間に醉人は本性になりて劍を室にし、肩をさし入れて彼爭ふ中に入りて、「さしもなき事にさは爭ふものかは」とあつかふを見て、つどへる人はみなどよみけりとぞ。つらく〱思ふに、本末混じ恩仇定めなき事、亂世は論なく、治世といへども人間の波瀾かくの如し。一隻眼を豁開してこれに觸れず傍觀せずば、劍樹刀山俄然として脚下に現成すべし。危き哉おそるべき哉。

男にては—在俗の時には

貨が貨を殖し—諺「金が金をうむ」

花子—乞食

同じ人、或人考へ出せりとて示さるゝは、長明發心集に云ふ、此書眞作にあらずといへども時代格別後の物にはあらじ。に唐坊行因の條に、「此人眞言ならひ初めける比師の大阿闍梨の、心見んとや思はれけん、「男にては物のまねをよくし給ひて、をかしきかたに人興ぜられけりと聞きつるなり、千秋萬歳し給へ、見ん」といはれければ、又こともなく「うけ給りぬ」とて、經のつゝみ紙のあたりけるを頭にうちかづきてめでたく舞ふたりければ。云々下略」又古今著聞集の興言利口部に、「知足院殿、大殿とておはしましける侍を御勘當有りけるには、千秋萬歳をもちてはやさせて、其侍を舞はせられけり。さる御勘當やはあるべき。云々」先々の證文はみな足利家の中葉の時なり、此二件は北條氏執權の比ほひの年記なるべければ、やゝ先よりありしことなり。凡そかくかりそめの事も、基有りて、それに付きて搜索すれば、次第に明らかに成り行く事、世に貨が貨を殖し、力が力をもち出すといふ類なりとをかし。

○京の四方に夙といへる一種類有り、其所由を知らず。平民にはあらざるものなり。

○近江八幡にてもと有りしこととて人の語りしは、醉人もろ肩をぬぎ劒を廻して過ぐるもの有り、花子の長非常をみめぐる者、或家の門にて見つけて、此劒を奪はんとす。醉人は取られじとすまふ間、見るもの堵の如くなれば、彼家のあるじ出でて花子の長を叱り

けぢかく—通俗的に

革歲—新年

後成恩寺殿—一條兼良

りて世にあまねくは知らず。壽詞五段、頗る古雅にて大鼓一調をもてはやすとなん。彼大和の者はあまねく民間をもめぐりて、舞ぶり詞がらも稍くだりてけぢかく、十餘段小鼓もてはやすさま世に知るごとし。因にいふ、彼唱歌に、「とくわかに御萬歲」といふ詞、何ごとゝも知りがたきを、或人いふ、とこ若にて。とことはに若きのいひなりと。又「やしよめ〳〵京の町のやしよめ」といふこと有り、これもやさめにて艶しきめといへるなり。京の町のと重ねたるにて知るべしとなん。

○右の條を竹苞樓主に語りけるついで、此ものはもといつ計よりおこりぬらんといひ出でて、かたみに考へたるに、彼人云ふ、臥雲日件錄（右に出せる夢語集同作にて日記なり）文安四年正月二日の條に、「一種乞食革歲首到二人家一歌二祝言一。世號二之千秋萬歲一。前後相逐來。各與二百錢一。云々」又御遊とののうへの日記に云ふ、「元龜三年正月五日北畠のせんすまんざい三人參る」と有りと。おのれ云ふ、勸進聖の歌合第一番に、千秋萬歲法師有り、此時は法師にて祝ひ言して來りけるなり。又後成恩寺殿の御作源語祕訣に、「末代に千秋萬歲などいふは男踏歌の餘風なり。後嵯峨院の御時にもはやりしことなり」と書き給へりといへば、彼人けに世諺問答にも此由見ゆといふ。同公の御作なれば然るべしなどいひしろひける。後又

應仁廣記—五卷、應仁文明間の變遷擾亂を詳記し、三十五箇條より成る

陰陽家—卜占を掌る家

仙洞—法皇の御所

○國史に民夷と並べ擧げ給ふ詔勅所々に見ゆ。民は平民なり、夷は蝦夷を諸國に分ち住ましめ給ふにて、後世に餌取といふ種類なるべし。餌取を訛りて今は穢多といふことは、前に擧ぐるごとし。唐山にては餌取の住める所を猺人洞といふこと、四分律に出でたる由、一友人いへり。

○一種の巫祝、祓、祈禱、方角占卜のことなどを業とせるもの、土御門家支配と標を出せるが洛外などに見ゆるを、京師にては名目をうしなへり、近江にては是をしよもじといふ。應仁廣記に、洛北の地名に唱門師村あり、是なるべし。山城名勝志には、二水記に聖門師と書かれたとり見ゆ。是は唯音を借りたる計歟。今も禁裏に役するものに此名目有りとぞ。然るに豊滿陶庵といひし八幡の儒醫、このしよもじの文字を唱文師ならん、巫祝を業とすれば、といはれしは甚だ理あり。此類も國名をつき刀を帶ぶるも有り、しかも平民にあらざること犬神人の類なり。此もの等近江又攝津にも古塚あるあたりに住居せるがあれば、守烟何戸と式にみゆる其子孫にやと或人はいへり。

○千秋萬歲は大和より出づる者一種類なり。萬歲村有りとぞ。河內、三河などより出づるも其類歟。京師にては陰陽家の人小泉より出づ。これは禁裏、仙洞、后宮など計へ參

しならん。犬櫻、犬蓼の例なりといへるは、誠に然るべし。連歌の筑波集に倣ひて犬筑波といふ俳諧の書も有り、近古よりいふ俗語なるべし。神人とは、此者もとより清水の地主權現の神祭に預るよし、又祇園會の神輿を守護し、頭を白布にて包み、棒を携へて先導せるもの六人、次に甲冑を帶びたる者許多行列す。けに神人に似て神人にあらざるなり。かく神事に供奉せるかとおもへば、又東西本願寺佛光寺等、御門主の葬儀には此者かの祇園會の先導の姿にて出でたち、荼毘の事を行ふ。おもふに此愛宕寺近く建仁寺町西側、今蛭子社の南方に庶人の火葬所ありしさま、正保慶安比の京繪圖に見ゆ。其頃は此種類總て火葬の事を執りあつかひしにや。是は火葬場につきての推量なり。國名を付けていかしめく、しかも平民とは婚姻を通ぜぬものなり。

○右犬の稱につきて思ひ得たる事有り。九州には犬神つかひといふもの有り、犬の靈を祭りて使令すと傳ふれども、是も其奇特をなすこと神靈に似たりといふ意にてやあらん。出雲、伯耆のあたりにては狐持と稱へて、彼は何疋持ちたりなどいふ由なり。其意に違ふ者にはとりつきて惱す事、狀をきくに全く同じ。中原の者には敵すること能はざるも同じとぞ。

筑波集—二條良基著
犬筑波集—山崎宗鑑著

荼毘—火葬

中原—本州

普化禪師―風穴〔フケ〕道者朗菴をいふ、初め妙法院の堺内妙安寺に住し、宇治郡吸江菴に卒す、風穴塚は宇治郡岡本村の東にありといふ

鉢叩―瓢を叩きて念佛を唱ふる者、即ち空也念佛の行を爲す僧

一臈―年功によりて長たる人

歟。もし又雨の用意野宿のためのまうけにもやあらん、其故は知らず。今はかゝるものを付くる事なし。文字も虚無と改めたるは、此徒普化禪師をより所となし、禪宗なれば後世莊りて書くならんかし。

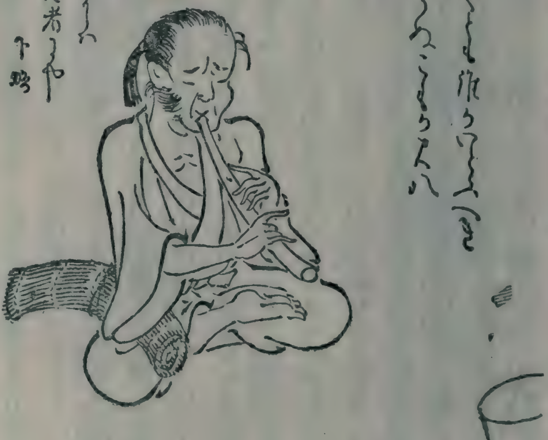
○鉢叩といふもの、四條坊油小路極樂寺より出づ。住僧は法衣を著袈裟をかけて、淨家の和尚のさまなり、是は一臈とぞ。其下はつねの半剃りたる頭にて、法衣の上計と見ゆるものを著る、いとあやしき姿なり。然るに貞享比の板本にて、いろ〳〵の人品を繪がきたるものには、素袍の上に鷹羽の紋付きたるを著たるさまなり。其後よく知る人の話をきゝしに、衣の上のごときものに改めしは元祿以後なり。彼鷹羽の紋も定まれる事萬歳の橘の紋のごとしとなん。是は俗形相應にして、改めたるは異ざまなり。

○五條の東（今の松原通なり）愛宕寺の内に一種類あり、弓の弦を賣るを業として絃めそといふ。是は賣聲につきて名によぶなるべし。「めそ」は「めせ」の通音にて、むかしは「つるめそつるめそ」と賣りありきしならん。橋辨慶といふ猿樂の能の間に、絃うるもの五條橋の邊にて牛若に出であひて迷惑せる由の所作有り、其通街のさまをもて、此ものを出せるなり。此もの文字には犬神人と書けるを解せざりしが、森川高尹、神人に似て非なるもののよ

花ちりてそこも作らす尺八を
うせしわかれのこゑの尺八

判詞云
薦僧の二膝
紙子の肩よ
り面桶腰に
付る虚無僧の
門にふりたる
尺八ふくへくは
判乃業なれ者こそ

下崎





建保―順德天皇の時の年號
東北院―上東門院の御所の稱
流灌頂―無緣の亡者又は水死人等の供養

〇古今の人物其業は同じくて、名の改りたるもあらん、又は古ありて今なき物もあらん。職人盡歌合といふもの、建保の東北院を始にて度々に及ぶ、其中に知りがたき名目ども、歌と繪とを合せて知らるゝ有り。たとへばいたかといふは流灌頂勸むる乞丐僧なり、藏廻りといふは、女すあひに對して質物取りかふるものなり。其由は歌に見え、繪には刀脇指衣裝などもたるもののさまなり。今かくして廻るものはなし。又皮かうといふは、獸の皮を卷きて朸に結びたり。是は朝來るものと歌にも判詞にも見ゆ。或人の話に、

うれしきは人まつ宵の油賣うきは別の皮かうの聲

といふ歌有り、皮かうは今皮抹香とて燒くものならんといへりしはひが事のみ。「皮かはふ」の略語「かふ」の假名にて、「かう」にあらじ。油うりは夕に來り、此ものは朝來るを對へいへり。右の歌合にて明白なり。但し此歌は何に出でたりやいまだかうがへず、人口には有り。又尺八を吹きて米を乞ふもの今虛無僧と書くを、勸進聖の歌合の中には、（此職人盡歌合は勸進聖を判者にしたれば、此名をおほせたり。勸進聖とは、其頃鐘鑄のために勸進せる野僧の有りしなるべし。序にも判詞にも其由見えぬ。圖は左に出せり、古き卷ものの終に此繪樣あり。）薦僧と書きて繪にも有髮にて、藁薦を卷きて腰につけて、座して吹くさまなり。これは乞丐執行の標示

論なし―論ずるまでもなし
藍より青く―「青は之を藍より取りて藍より青く、氷は水之をなして水よりも寒し」荀子の勸學篇に出づ
滯貨―うれ殘り

奇といふには足らず。

○三十年前范古といへる畫人ありしが、長崎にて學び京に住めりし。其人業をつぐべき弟子なく、纔に貧生の扇面を書きて食料に充てたしとねがひしもの兩人あり。又此人を信じてとかくの家事をも心を付けてまかなひし富商の弟子一人ありしのみ。其言に曰く、「おのれは弟子をとること嫌なり。其故は、初學のほどは夜晝となく入り來りて學ぶが、やゝ筆力も出來、人にも知らるゝほどになれば、誰が弟子といはるゝを惡みて、他人師のことを問へば、其人もと知人なりしなどよそごとに言ひなすもの、自他のうへにあまた知れり。それに懲りたり」といはれき。其後畫には限らず、よろづの藝能につきて、かうやうの人どもを見聞くにつけて、此范古が事をおもひ出でぬ。此弟子といふものの意いかにぞや。師に及ばざるは論なし、もし藍より青く水より寒きほどならば、かへりて手がらといふべきものを、大かた世の人も誰が門人なりといひはやすを、否々さらずといひて、強ひて人の口を塞がんとするとも得べからず。畢竟其心術のあしきを惡まるゝが損なりといふことを知らずや、悲しむべし。吾才能を售らめや〳〵とかまへて、却りて滯貨となりぬ。

旅所—祭禮の時神輿の一時止り給ふ所

往來もの—手紙の贈答の文案を集め記せる書

羊祜—晉代の人、字は叔子世世長吏にして祜に至るまで九世、清德を以て稱せらる、下文の事は其五歲の時、隣家は李氏といふ

頸の皮の屈伸する生質にて、心ゆるぶ時は伸ぶるなり、病にはあらじ。もとより飛頭蠻の話のごとく、數丈延びて押下に登るなどやうの事はあるまじきことなり。

○小兒にして其智早く開け、藝能成人にまさるものまゝ有り。或は早世し又生存ふれば、常人にも及ざるごとく成りゆくも多し。上京水火天神社邊の貧人、孫を負ひて今宮旅所の前に到りしが、其兒纔に三歲、背に負はれながらそこに建てたる公禁の札をよみしに、老父おどろきてやがて歸り、讀ましむべき書を近隣にもとむるに、窮境なればあるものなし。辛じて往來ものと名づくる俗書をかり來りて、讀むや否やと問ふに、何の苦もなくかたはしより讀みつゞく。相識るもの見聞きて皆おどろきしが、七八歲にて身まかりぬとぞ。思ふに三歲にして貴富の家の兒といへどもいまだ一丁字を知るべきにあらず、況やかゝる所がらにては論なし。然るに學ばずしてよく讀むは前生の因なるべしや。羊祜が前生隣家の兒にして、玉環を地中にもとめしと同日の談なり。予が相識る山家の一兒、三歲にしてついまつをとりしが、是は母なるもの敎へけるを、才ありてよく覺えしなり。おのれもこゝろみに花風の字を敎へしに、明る年來りし時もよくおぼえ居たりき。されど僻遠の地に生長して後には常人なりし、惜むべし。此たぐひはあまたありて

渡部綱が云々―渡部は渡邊に作るべし、鬼退治を指す

まらうど―客人

ねぎ―願ひ

ば、「子知らずや、それは轆轤首の名有り、何のあやしき事もなかりしや」といふ。一音初は戯言なりと思ひてあらがひしかども、友人皆其聞くことの遅きを嘲りて止まねば、さらば急に實否を見はてんといひて、又其席より引きかへしてかしこに至る。かの渡部綱が羅城門に趣きし心地なりけんと思ふもをかし。さて遊び戯れあまりに酔ひて、一夜よく寐て明けはてぬるに、かくながら歸りては友人のためにいふべき詞なしと思ひて、又其日もそこに暮し、此夜は先の夜に懲りて酔ひたるふりながら、露計もねぶらず窺ひしに、妓は馴れてやゝ心解けしにやあらん、熟く眠りぬ。夜半過ぐる比ほひ、一音眼を開きて見れば、其首枕を離るゝこと一尺計にして垂れたるに、心得ながらもおどろきてかけ出で、われ知らず大聲をたてたれば、不寐の番する男とみに來りて一音が口をふたぎ、「此まらうどはおそはれ給へり、皆おはしませ」とわめきて紛らはしたれば、かれこれの妓ども起出でて、彼妓は退けて後酒を勸め夜を明し、さて朝になりて家あるじより殊更に盛膳を出し、人をもてひそかに言へらく、「もしあやしと思すこともあらめど、必ず口に出し給ふことなからんを深くねぎまゐらす。あしき名とりては吾家の疵にて、大かたならぬ愁に侍り」とねもごろにいひしとぞ。おのれこの形状を思ふに、轆轤の名のごとく、

飛頭蠻―唐書に飛頭獠の記事見え、妻子看守するに夜病めば首飛び亡せ翌旦歸るといへり、獠は西南の蠻也

て危き時俄に祈りたりとて肯け給ふべからねば、それますます よしなきことなるべし」といへりしとぞ。危きに臨みて心を動さゞるは奇特といふべし。

○後漢書建安七年の下に曰く、「是歳越巂男子化爲二女子一」と見ゆ。本朝にも慶長年間一老僧弟子を携へて某所（今地名を遺忘す）に投宿す。其弟子僧一夜腹痛甚しく、朝に及び男根沒入して爲二女根一。老僧せんかたなく其者を其家に托して去りしに、漸々に顔貌身體も女のごとくなりて終に其家の妻となり、子をも産せしと、和漢三才圖繪に見ゆるも、同日の談なり。女の男に化せしことは、近年江戸某の士の家婢にありしと、珍しきことにいひはやせしを、備中玉島近き邑（邑名失す）に姉妹年を隔ててともに男に化せしを正しく知る由、予相識る彼國の人の話なり。是は田舍の事なれば人知らず。かゝれば聞ゆると聞えぬにこそあれ、世にあることにこそ。

○世に轆轤首といふは一種の奇病とす。或は是を飛頭蠻に混じて數丈の間を徘徊するなどもいふを、俳諧師の遊蕩一音といへる男正しく見たる話あり。其若き時江戸新吉原にして一妓容貌美なる者を見て卽ち相接し、朝に歸るさ友人のもとへ立寄り、此美貌を撰み得て接することを誇りしに、集ひたる二三の少年ども皆掌を拍ちて笑ふ。「なぞ」といへ

りて聞きつけ、憐みて數十の金をもて其妓を買ひて、此男にあたへしなりしとぞ。其折には夫婦ともにしば〳〵まみえしかども、心にもとゞめざりしか、露計もおぼえず、金を費すことはもとより物の數ともせねば、恩をかけしとも思はず、此船泊の時に聞きて、げにさることも有りしとほのかに思ひ出せしとなん。又一時船にて京へ登るに、風波はげしく、帆柱も折れて船危きに及び、船頭も、「せんかたなし、各神佛を祈り給へ、生死は人人の運に有るべきのみ」といふに、一船の人歎きかなしぶこと大かたならず、或は念佛題目を唱ふるもあり、一向氣を失ふもありしに、貞佐も妻子を具したるが、其妻痞を發して苦しみしかば、主片手にては其胸腹を按じ、片手には兩人の子を抱へながら、船辨慶といふ謠曲の終、知盛が靈義經の船を沈めんとする所をうたふ。凡そ船中にては謠曲をうたふ事いたく忌むに、ましてかやうなる所は言の端にも憚るべきを、船人ども大きに騒ぎ防ぐ中なれば耳へも入らざるからに、制止せねば思ひのまゝ高聲にうたふ。さてやうやう風しづまり、辛うじて某の湊へ船をよせし時、伴ひたる人、「けしからぬこと哉、船にて忌む事をうたふはよしなき事なり。其ひまに神佛をも念じ給ふべきを」といふに、貞佐笑ひて、「常にたのむ神佛は守りもし給はめども、吾すべて念ずる所なし。常に念ぜずし

三角―奥田三角、「續近世畸人傳」を見よ

貞佐―芥川貞佐、性卓犖不羈にして奇才あり

又なき中―非常に深い中

を思ふべしとなん。是又東白暫く龜山に有りし時と同じ人いへり。

○伊勢三角儒士の文集に出されし孝子の内に、同國蛸路村の醫元伯は母に至孝なるが、其介抱の爲にと人の勸むるまゝに、母の姪女已に五十有餘の者を娶る。自らいまだ三十有餘なりしに、孝の爲に是を厭はず。三角翁曰く、「元伯が孝他は能くすべし、此一條におきては大に難しといふべし」となん。げにさる事なり。これも續畸人傳にもらしてここに擧げぬ。

○又續畸人傳に、安藝廣島貞佐といふ人の傳をいだす。それは狂歌の流をくむ人の記せるを潤色して擧げしなり。然るに其後貞佐の男又佐といへるにあひて奇なる狀をきく、傳中の事狀よりもまさりて興あれば、追つてこゝに錄す。貞佐船にて物へ行きし時、某の浦に船泊てしに、一人の男此由を聞きて、やがて迎へて吾家へ伴ひたれば、家婦も出てさまざま美酒佳肴をすゝめてもてなし、厚恩を蒙り、今かく夫婦のどかに世を經る由の謝を述ぶ。貞佐は少しも覺えたることなく、其夫婦の顏も見知らず、いかなることにやと問へば、幾年さきに此家婦は宮島の妓にて此男に相馴れ、又なき中なりしかども、金錢とぼしければ相見ることかたく、共に死にもやせんと悲しみけるを、貞佐故有

忍びぬ。さて夫の愛せし櫻一樹庭外にあるを形見と守り、夫に仕ふる心地に木のもとを淸め枝をいたはり、假初にも人に折らすることなし。かくすること二十年許、樹はますます榮え二女も生長して、それ〴〵に身も納りぬ。かくて此婦身まかりける後、櫻忽ちに萎み衰へたり。よりて心ある人は呼びて操櫻と稱す。非情の草木も人の誠に感通すと、同國馬路の醫中河東白の話なりと、播磨の人兒島尙善傳へらる。

○同國龜山に頗る富める商夫有り、母嚚しくて、若きより妻を娶ることを肯ぜず、鰥にて六十有餘に及びし時、母九十計にて疾厚きに、此男醫藥の事に心を盡しもてあつかふ餘り、一日ことさらに禮服をつけて彼東白の所に至り、人を避けて竊にいへらく、「母の病に利あらば金錢を惜まず、いかさまにも療し給はれ」とて、銀二貫目を出して與ふ。醫「其志は感ずれども、旣に九旬の人なれば、醫療の術なし、又參など用ふべき症にあらず」といひて歸しつるが、再び來りて托すること初のごとし。銀をも益して携へ來り、强ひて術を乞ふ。醫陽り怒りて、「子我を知らず、金錢のために醫術に私するものとやは思ふ」と罵りければ、懼れて力なくかへりぬ。其後も病狀はげしければ自らはだしにてかけ來りて診を乞ふことしば〴〵なりき。つひに母は身まかりしが、此にて平生の孝

嚚—古傳に「口不レ道二忠臣之言一爲レ嚚」ひすかしは心ねぢけたける意の古語なれば、義を以て訓じたる也

參—人參

うたてく—いやに

執—執念

畸人傳—筆者の著、寛政十年刊

木匠—大工

の洗濯を托したる女に相馴れけるが、其女醜きがうへに一眼眇なれば、僧もいつしかうたてくなりて其所を去りしに、跡を追ひて尼になりて付きまとひければ、いよ〳〵わびしくて、又後の所を夜に紛れて宇治に來れるなりしとぞ。執は懼るべきものなり。是は同宗の尼僧よく知りて語れり。

○五條下寺町某寺（憚りて名はもらす）の子院に無頼の僧有りて、つひに還俗して七條新地賤妓樓の主になりて有りしが、年へて後病に苦しむ。其病狀あやしきよしを聞きて、もと相識る僧さすがに憐にて行きて見しに、臥しながら手をも觸れずして物を喰ひ、口の中にてねり返すさまなり。物いふ言はわからず、唯おう〳〵と聞ゆるが全く牛の聲なり。生きながら變化したるなりと、其見し僧予が社中の人に語れり。此外此類の話多けれど、さのみはうるさくて止む。

○續畸人傳删補しける日、入るべきを後れて聞きしかばこゝに擧ぐ。丹波桑田郡小林村とて龜山ちかきに、木匠某が妻長といへる有り、夫婦が中に女子二人ありて、いまだ幼きほど、夫は江戸大火後造作多きをたのみて下りしが、終にかしこにて妻をまうけ音信もせざるに、妻は操を守りて二人の女子を養育して、縫針洗濯の傭業をして貧しき世を堪へ

洞家―禪宗中の一派宗洞宗をいふ

○五條の上大黑町某家に伯母同居せるが、よく家事をまかなひて漸昌へしに、妻迎へて後、此妻伯母に順從せず、不貞なりしかども、出さんもさすがにて、伯母を別居させ、年に三百錢の銀をあたへんと約し、さて日々の食事野菜をも心をつけて參らせよといひ敎ふれども、主には送る旨を僞りておくらず。かくて伯母何となく病み出でしに、またいつの程よりか此家婦も心地あしとて、屛風を引きめぐらして出でず、亭主にもまみえず、二三日もかくの如くなれば、あやしみて强ひて屛風の內に入りて見れば、小蛇首にまとひたり。おどろきて引きはなせども離れず、せんかたなく北野近きに智寶院といふ修驗者を招きて祈禱をたのめるに、「是を退けば婦必ず死せん」といふ。「死すとも此苦しみは見るに忍びず、唯退けたまはれ」と乞ひしかば、壇をかまへて祈ること三日、其終小蛇首を離れて婦が口のうちに入りて婦は忽ち死せり。さて其時刻伯母も死せりとなん。是も同じく子歲なり。ある人したしく知りて話す。

○洞家の一病僧宇治に安居して有りしが、一日常に立入る帶賣る男行きたるに、門より片眼眇ひたる蛇一筋入來る。其さま何となく恐しくおぼえて、我しらず芋の荷を打捨てて、其近き家へ迯入りたるが、其時病僧は息絕えたり。其所由を聞くに、此僧某國にて衣類

者うちよりて引揚げしが、それよりは毎夜かくの如くなれば、母の怨により冥の責を蒙るならんと邑の人々議して、一七日に當れる日、村中三箇寺の僧を請じ、阿彌陀經を誦せしめしかば、其夜より止みたり。こゝに於て此男慚悔して僧となり、此世にて現責をうけしは、猶母の慈悲なり、若かゝらずば、永世の苦輪をいかゞせんなど言ひけるとぞ。彼火に落ちしより片輪になりしなど奴が話なり。かうやうのことは昔の因果物語の說とのみ思ひ過すべがらず。

○信濃國にて天龍川の邊某里（名を失す）の民慮平、寛政四子歳に及び四十三歳、妻某三十三歳、女いく十八歳、母勘六十六歳なり。父十兵衛七年已前死せり。慮平平生不孝甚しきに、父死に臨みて、必ず近く變事あらんといひけるが、當年に及び母發狂し、口ばしりて慮平が不孝の事をのみ說く、其聲も所作も全く父のごとし。かくて母の身に鱗のごときもの出で、漸々惣體に及ぶ。後には天龍川の岸に伴ひ行けと叫ぶ故に、止むことを得ず、栗丸太の大なるをもて牢のごとく作り、四寸四方の窓を開きて食物を入るゝ所とす。さて慮平も發狂し、其河邊の牢にむかひ、得も知れぬことをいひて甚だ苦しむさまなりとなん。これは其年官へ上書の旨とて、其寫しを見し人語れり。

顔淵の短命―顔淵の如き高徳の人も短命なるは修短の命―長短の壽命

事に侍ふ、いつともなくゆるびて、此近き年頃はまた折々漁獵するは、他に慰む事なければなり」といふに、「そはあしき事なり、さばかりの現益を見、父も亦いましめ給へるものを」といさめて旅舍へ歸りしが、あやしき事は、其夜此男頓死せり。若吾言をげにもと罪に伏したる所にて、天刑を示し給へるか、官の罪人を刑せしめ給ふも、罪に伏して行るゝなりなど語らる。彼塞翁が神相は予が相識も彼是試みて語れり。中には無病の人を見て、此月の中を過ぎず身まからんといひて當れるものありき。右の殺生によりて命短しと知りぬるも奇なり。顔淵の短命いかにともすべからずといへども、先善を行ひ不善をとゞめて後こそ、實に修短の命には委ぬべけれ。

○吾もとつかひし奴僕が舊里、美濃國池田郡小島庄廣瀬の阪本といふ村にて、そこに實右衛門といへる無頼あり、一人の母に不孝なること類なく、折々は脚をもて蹈蹴るに及ぶ。其後此母死して火葬するに、片腕燒えざりしかば、人の見ることをいとひ、竊に携へかへり、藁苞にして棟木につり置き、他日河に流しもせんと思ひけらし。さるに其夜此實右衛門狂亂して騷ぎ迯走り、彼腕蛇になりて吾を追ふといひて門に出づると、ます〳〵懼れ號叫び、二鬼又吾を責むるとて迯入りて、火の燃ゆる圍爐へ倒れて苦しむを、近隣の

勃然―怒る貌

るべしといふ。父大に歎きて、遁るべき法もあらんやと問ふ。翁強ひておこなはゞ無きにもあらじなれど、得行はじと答ふ。父、たとひ家を傾くるほどの金銭を参らすもいとはじ、唯此延壽の法を教へ給はれと乞ひしに、翁勃然として、吾は金銭を貪るものとや思ふ、さる心にてはいよ／＼教ふとも行はじとて、ふたゝびもの言はず。父旅宿に歸りても唯此事をのみうれへて、さきの失言を謝し、再三翁に乞ひたれば、翁さらば教へん、他のことにあらず、聞く所そこの家村中にゐて他の嗜好なく、富みていとまあるまゝに漁獵をもてあそびとす、是夭死の所以なり。若し以後かたく殺生を愼まば、或は壽限を延ぶべし、此外に術なしといへり。是よりふつに殺生を止めしが、おのれ十七といふ年父は身まかりぬ。我先立ちて汝が死を見ざることのうれしきとなん申しき。さて十九になりたる年、一夜頭割くがごとく痛みて、苦しきことといふばかりなし。時に彼塞翁が言を思ひ出でて、今夜身まかるべしと決せしが、夜の明行くに隨ひ漸々に痛かろみて、朝になりて止みしかば、閨を出でしに、家の内の者ども顏を見てあやしみ笑ふ。おどろきて鏡をとりて見ればかくの如し。是死する代りなりと悟りて、醫療をくはへず、今五十三歳までながらへたり」と語るに、「さては今も堅く殺生をつゝしみ給ふらん」といへば、「其

りつる辻堂雷火に燃上りぬ。さては彼婦人も小兒もうたれて死しつらんとあはれさ限りなく、吾免れしを不思議におぼえぬと話せられぬとぞ。然るに近き年洛南竹田街道油小路の下にて、四五人雷雨を佗びて一茶店に休らひしが、其中兩人は何ばかりの事かはとて出で行きたり。人々とゞめしかどもきかず、程なく雷近く落ちたりしが、やゝはれて後殘る人々も南へさして行きて見れば、さきの兩人路中にうたれて死してありしとぞ。これは強ひて出でて災にあふ、さきの儕は出でてまぬかれたり。或は隣家へ雷落ちてこなたの人は震死し、其家は恙なきたぐひ年々に聞くことあり。おの〳〵が命分いかにかもせん。

壽夭―長壽と早死

○壽夭の天命いかにともすべからねども、或は善により不善によりて延促あるべきことも、亦たがはぬ事なるべし。袁了凡の陰隲錄にも此旨をねもごろに示さる。こゝに一話有り、畑鶴山一とせ津國郡山の近邑宿庄といふに遊びて、その豪農某にあひたるに、其面左方へゆがみて又あるまじき象なりしに、其人もあやしく思はんと心得てや、吾面につきて物語有りとて語りしは、「おのれ十二三年の年、父京へつれ行きて、時に名ある相人郭塞翁に見せしめたり。其時は人なみ〳〵の面なりき。塞翁見て、此兒の壽十九歲に限

滅を取れり―
死に就きたり

〇人の命數は不測のものなり。橘南谿の東遊記に、越中絲魚川近き下名立といふ所の津浪の話を載せられしに、生有るもの悉く皆亡せし中に、女一人木の根にかゝりて有りしが、息を吹返して初よりの事どもを語りし旨をしるさる。又寛政四子歳四月朔日夜、島原津浪のときも、溺死の者の中に纔にも氣息ある者は、藥を用ひしかども皆救ひえざるに、四五歳の小兒唯一人存命せしかば、三寶村の莊官の宅にて育ふとなり。又今は百年前歟、浪華津浪の時、同國富田普門寺の龍溪和尙、人の請によりて滯留の日にて、人皆迯走りしを、和尙は時なりとて禪客十人と共に座して滅を取れり、年八十有餘なり。然るに其十人の中に唯一人氣息通ふやうに見えしかば、藥を用ひしに蘇りて、和尙の示しなど語れりとなん。是も同轍なり。和尙は富田にあられば難なかるべきを、こゝに來り給ひしは、又橫死の命なるべし。

〇一友人かたらく、永源寺末下の僧關東に有りし日、某の野中にて電雨甚しきに逢ひて、辻堂を見つけて休らひしが、一婦人の子を抱きたる者同じく駈入りて、晴るゝを待つに時うつりぬ。僧は急ぐ事有りしからに、止むことを得ず雨を犯して出行きたり。一町餘も過ぎぬる頃、あとのかたへ雷の落ちし音せし程に、ふり返りて見しに、今までやど

王賓―金の人、字は徳卿

本卦―本卦返りといふ、己の生年の干支と同じ干支の年に再び返る義

○四十を年賀のはじめとすることは、代々の歌集に見ゆ。西土にも四十を賀すること王賓の詩に、

昔年嶽降産英雄。誕節奇逢日西東。萬善作基天必壽。一恒立性德何窮。文章五色鳴時鳳。豪氣千尋貫斗虹。四十古來稱始仕。桂秋留意爲君紅。

と見えたる旨畑橘洲示さる。しかるに初老といふことの出所かしこにはありやいなや、こなたにても例あること人多く知らず。おのれも近年に及びて、或書に菅家文艸を引きたるにて見出でたり。左金吾善相公於宜風坊臨水亭餞別奥州刺史と題ある詩に、

相公送君君知否。爲我君聞說本因。裡里一千五百路。星霜四十六廻人。人是初老路何遠。下略

四十年滿るに限らず、五旬までの間を云ふべき證とすべし。

○近世の俗六十一を本卦と稱す。明 陳憲章が詩あり、

世間甲子是何年。母鬢雙皤子亦然。十數曾孫羅膝下。兩三杯酒笑燈前。尋僧野寺花迷路。吹笛江門月滿船。聖主萬年歌不足。黃河淸了鳳翩躚。

即ち題に六十一自壽すとあり。彼邦も六十一を壽する事見つべしと、同じく橘洲話なり。

秦人越人の云々―全然沒交渉なる意の諺

横井也有―俳人、彼の俳文を集めたるものに「鶉衣」あり

六旬の賀―六十の賀

いまそかり―居らせらるゝ

六尺―駕籠舁

○近來年賀又追福の勸進を無緣の人にも乞ふこと流行す、心得がたき事なり。凡そ賀も悼も、相識のうへ千世も生延びよとも、身まかるをばまことに悲しとも思へば、其意をよむなり。所謂秦人越人の肥瘠を見るごとく、まだ知らぬ人には、情かつて動かず。さるをよむ人はいつはりをいふなり。乞ふ人はおのが賀は何百首に及べり、高名の人々には誰々など、ほこるの料とす。甚しうしては長崎に緣を求め、異國人の詩をさへもとむるに至るは笑ふべし。唐人旅館の徒然に、何の趣味もなく、よくもあらぬ詩を書きおこせたるが何の榮ぞや。近來尾張の士横井也有といふ人、六旬の賀を勸むれどもせぬ由の文章に「妻子こそ悦びもすべけれ、他人にあづかる事かは」と書けるこそ、けだかく倣ふべき志なれ。又芭蕉門人其角が句集に、

七十餘の老醫身まかりて、弟子どもこぞりて泣くまゝに、予に追悼の句を乞ひける。其老醫いまそかりける時、さらに見知れる人にもあらず、哀にもおもひよらずして、古來稀なる年にこそなど言へど、とかくゆるさゞりければ、

六尺も力落しや五月雨

と見ゆ。さすがの男なり。

浪花の陣―豊臣氏の大阪籠城の戰陣

九十七歲御直參 下條七兵衞 九十一歲御直參 茶人一雲 九十一歲細川采女正殿内 岡本半兵衞 八十三歲浪人 以上七老也。百歲已下といへども、精神實ならでは會に赴きがたきを、さだめて矍鑠の老人なるべし。

○右之内志賀瑞翁は人よく聞き知れり。おのれ三十二三の時、此翁の三十三回にあたれりとて手向の歌を勸進する人有りしが、これは彼延壽の藥方を傳へて、賣人其恩を報うが爲なりと聞えき。此年紀をもて算ふれば、正德五年より八十七八年、猶ながらへて凡そ二百七十餘歲なり。長壽とは聞きしかども、二百に餘れるとはいふ人なし。もし正德の會の時の齡たがへる歟、いぶかし。こはとまれかくまれ、浪花の陣をも經たる人なればとて、其代の事を問ふに、答さだかならず、强ひて問ひければ、「さることを能く記憶するごとく心を用ひては長壽は保ちがたし」といひけるとなり。おのれ思ふ、かくのごとくならば長壽も益なし、壽を尊ぶは古きことを記憶して、其中には有益の事もあればなり。自らもまた漸々に少壯の非をも悔いて改むれば、壽の益あるをおぼゆべし。昔相識る下村道瑞といへる老人、「鶴龜の千萬歲も益なし、人は上古の事をも知れば百歲も萬歲にまさる」と示されしは、甚だ理におぼえしが、其後淵明の詩「得レ知二千載外一上賴二古人書一」といふを鶴林玉露にて見て、彼話に思ひ合せし。

己に云々―孟子「曾子曰、戒レ之戒レ之、出二乎爾一者反二乎爾一也」

三浦大介―三浦義明

尙齒會―高年の人の寄り集る雅會

樂天―白樂天

べし。源義朝父を殺せし時、其弟數人の童子も皆船岡山にして刑す。然るに義朝の殃其身に留らず、其子賴朝も亦兩弟義經、範賴を害し、又賴朝の子賴家、實朝、賴家の子一幡、公曉倶に相害して亡び、北條が爲嗣を移さる、悲しからずや。

○賴朝は魏武に似、時政は仲達に似たり。政子は呂后に類して、妬心の甚しきも亦同じ。才氣勇鋭丈夫に勝り、しかも其子のために謀らずして吾族のために力を用ふ。あやしむべし。

○三浦大介戰死の年九十八才、世に百六つと傳ふるは謬とぞ。されどいくばくの違ひめもあらず。既に期に及ぶ齡なれば、老いてはます〱壯なるべしといふにも過ぎたるを、子孫の後榮の爲に身を捨てたり。さるにかひなく、いくばくもあらず和田氏亡びたるは悲しむべし。

○尙齒會の名高きは樂天の會、本朝にて淸輔朝臣の會なり。然れども其壽數におきては高しとするに足らず、唯文潞公の會、程珦、司馬旦、席汝言、各七十八、是を同甲會といふもの稍まされり。めづらしきは或人の話せる正德五年江戸の人生島幽軒八旬の賀に招きし人々の齡なり。志賀瑞翁 百八十七歲榊原越中守殿內 小森閑齋 百三十六歲同侯內 古結宗軒 百八歲松平肥後守殿內 石寺權左衛門

近江關白―秀次、其死を賜へるは文祿四年七月の事に屬す

積善云々―易經に出づ

と。帝欣然として是に從ふ。是世繼を心とし給ふ故に、胎を殺すことを免る。夫魏主殘忍の性をもて恣に殺戮を行うて、是を回すべからざるが如くなれども、一たび是語を聞きて甚だ是が爲にいたみ、少しく刑禁を弛む。然る時は人誰か此心なからん。能く其機を動し仁念を挽回せば、「差易耳」といへり。然るに豐太閤の慘刻甚しからずや。近江關白に死を賜ひて後、其愛姬三十六人三條瑞泉寺にて戮せしむ。刑の婦女子に及ぶは其胎あらんことを疑ふなり。若し夫此おそれあらば、月を經て姙むとあらざるを明にして後、處置あるべきを、一旦の忿を忍ぶこと能はず、或はまた故人に與するものありて保護せんことを慮る歟。いかにもあれ、崔光が所謂桀紂が心を心とせるものなり。又ある時大阪にて其祕藏の鷹の放れたるを、某町の家婢笊をもて伏せたるが、露顯に及び、其一町が間の老少男女をいはず皆斬罪に處せられし旨、東涯の盍簪錄に見ゆ。是を諫むる臣なきは、諫むれば忽ち災身に及ぶ故歟。畢竟戰鬭の餘君臣共に學術なく、我意に任せて行へばなるべし。されば骨いまだ冷えざるに嗣ほろび、廟食を絕つ事、秦始皇に同じきも、天理もとより然るべし。

○積善餘慶積不善餘殃は古今の通識、又己に出づるものは己にかへるの敎、仰ぎて信ず

餌取—獸を屠り皮を剝ぎ其の皮又は肉を賣るを業とする者、ゑた

野客叢書—十二卷、宋の王楙夫の撰に係り、經籍の異同を考正す

春秋—年齡

を得ずして芋賣者に乞へらく、「見らるゝ如くなり、されども今錢なし、しばし貸し給はれ、其うち錢とゝのはゞ違はず返すべし」といへどもうけがはず、「あてもなき人に錢かすべきものかは」ととりあはねば、せんかたなく泣兒をつれて行き過ぐるとき、雪踏を直す餌取、さきよりの樣子を見しかば、ひそかに其人を招きて、「あまりに痛はしければ今有所の錢十字を參らせん、芋をとゝのへ給へ。いつにてもかへし給はんことは御心のまゝなり」といふに、浪人とりて押戴き、「思はぬ情を受くる事なり、されどもこればかり受けたる同前なり、用ふべからず」と返す。餌取、「吾かゝる者なれば、さ宣ふは理なれども、事によるぞかし。たゞ〳〵」と勸むれどもうけず、橋の欄干によると見えしが、兒を引きつかんで水に打入る。妻これはと驚くを、又足をかきて倶に投入れ、つゞきてみづからも飛込みたり。見る人驚くといへども救ふべきよしなく、忽ち溺れ死したりとなん。大志ある人にはあらねど、其廉恥賞すべし悲しむべし。

○野客叢書に、「北魏永平の間、元愉が妾李氏を誅せんとす。崔光奏して曰く、元愉が妾懷妊す、剹の胎を割くに至るは、桀紂の主此事をおこなふ。陛下春秋日長し、いまだ儲君あらず、皇子繦褓尋で夭失に至る。是がために李氏が獄をゆるべて育孕を候ひたまへ

の義人、事は史記の刺客傳に詳なり

廉吏—廉直なる官吏

しかば、客大に服す。

○上野國の士人の家に祕藏の皿二十枚有りし。もし是を破るものあらば一命を取るべしと、世々いひ傳ふ。然るに一婢あやまちて一枚を破りしかば、合家みなおどろき悲しむを、裏に米を舂く男これを聞きつけて、「わが家に祕藥ありて、破れたる陶器を繼ぐに跡も見えず、先其皿を見せ給へ」といふに、皆色を直して其男を呼んで見せしに、二十枚をかさねてつく〴〵見るふりして、持ちたる杵にて微塵に碎きたり。人々これは如何にとあきれたれば、笑ひていふ、「一枚破りたるも二十枚破りたるも、同じく一命をめさるるなれば、皆わが破りたると主人に仰せられよ。此皿陶物なれば一々破るゝ期有るべし、然らば二十人の命にかゝるを、我一人の命をもてつくのふべし、繼ぐべき祕藥有りといひしは僞にて、斯くせんがためなり」と、一寸もたじろかず主人の歸りを待ちたるに、主人歸りて此子細を聞きて其義勇を甚だ感じ、城主へまうして士に取りたてられたりしが、果して廉吏なりしとかや。

○江戸兩國橋を、いかにも淺ましき浪人、妻子を具して通りかゝりしが、薩摩芋を賣るを見て、小兒あれほしと言ひてうごかず。さま〴〵にすかしこしらふれども聞かず。止む事

世出世—俗人と僧侶
亢龍の悔—尊貴を極めて戒愼せざれば敗亡の悔あるをいふ、易に出づ
檗門—黄檗宗
晏子が故態—支那の齊の學者、靈公、莊公、景公等に歴任し節倹力行を以て重んぜらる。其の言行は晏子春秋に出づ
豫讓が所行—晉

て、會中危懼を抱きしかども、信施多く會終りしが、つゞきて遷化せられぬ。彼本師の言違はざりしを人皆驚きたりとぞ。其先識のほどはかるべからねど、凡そよろづの事世出世によらず、亢龍の悔あるためしには思ふべき事なりかし。

○檗門大眉和尚の法嗣梅嶺和尚といふは、伊勢、近江の間に開基の寺ども有り、然も大かた大眉を祖とす。其うち伊勢相可の法泉といふは自らの開基として壽像有り。それに施主ありて常燈を供ず。これに付きて其寺を嗣れし悟心和尚の話に、梅嶺和尚生涯夜燈を消して寢ね給ふ。今像前に晝も燈火のあるは、其つくのひなるべしやとありし。假初のことなれども應報の理、福を愼む龜鑑とすべし。

○大石良雄を誚る人有り、曰く、初長矩朝臣に死を賜ひ、居城を官に返し奉りて後、其弟大學頭殿をもて家を興されんことを訴へしかども、事成らざりしかば、終に吉良氏を討ちて復讐を唱ふ。これ事成らざるによりて、其怒を吉良氏に洩すなりと。己いふ、子が誚は却りて良雄の良たる所なり。家國の爲に謀りて一君のうへにかゝはらざるは、晏子が故態にて、社稷の臣の分なり。しかも事不成しては、又亡君のために其遺意を繼いで讐を復するなん、豫讓が所行にして、忠臣の分なり。得て二つながら全きにあらずやと判せ

櫻雲記―後醍醐天皇御即位より南朝の皇統亡ぶるまでの事を記せる書、著者不詳

千人結制―千人の制戒を結ばしむること

見ゆ。是によりて新井白石翁の讀史餘論にも記されぬ。此時南朝後龜山院の皇子小倉宮います、南朝御和合の時、南北の御末一代づつかはり〴〵に御位につかせ給ふべき御約にありしかば、幸に此時北朝の御末微々なれば、南朝の御末にて繼がせ參らせば、足利氏の信義もたゝんに、おもひかけぬ御即位の故に、南朝の餘類北畠のごとき怨みて蜂起し、是より世は戰鬪止むひまなく、終に足利氏亡ぶるにいたる。若しはたして一休のはからひならば、事機に暗きことあやしむべし。和尚はもと後小松院の落胤なりといふ一說によらば、いよゝ吾黨に私すといはざらんや。しかも櫻雲記は街巷の小說にして憑むべからざる書なれば、おそらくは一休和尚の寃なるべし。

○享保十七子歲東福寺千人結制の師家象海和尚は、高德の名聞あまねし。東福の僧堂年來衰廢せしも、此和尚の志願により政府の上聽に達し、中興出來しとかや。其本師は（名失す）西國に隱れて世に知られぬ人なり。さるに結制の前にいたり、書をよせて此師家たることを止めて曰く、請に應ぜられば命期を速にすべし、若し壽を延べんとならば是を辭せらるべしと諫められしが、象海も此老師のいさめ知る所有るべしと信じながら、一旦請をうけて今さら辭すべからざる勢なれば、つとめ給ひぬ。さて此時天下大饑饉に

勅定云々―これによりて式部が日本紀の局と呼ばれし事有名の話也

伊尹―有莘の野に耕せしを、殷の湯王幣を以て三度之を聘し、遂に起ちて夏を伐ちて民を救ひ、孟子をして「聖の任なるもの」と歎稱せしめし古聖

るべし。されば式部は日本紀をよく見たりと勅定ありしも、これら共に一つにやあらん。

○古書に、三善清行卿をきよゆきとよみて反名居易と見ゆ。（反名とは、妹子を因高、史を不比等、馬飼を宇合と書ける類、訓を音にして字をうめたるなり。反切をいふことにはあらず。）後世名に橘逸勢を萬佐奈理とよむ由、神鏡抄を引きて和漢三才圖繪にいへるも類せり。常に清行をきよつら、逸勢をはやなりと訓むは非歟。

○續日本紀大寶三年の下に、衣縫造孔子といふ名あり。慶雲元年の下に、文忌寸釋迦、又養老五年の下一能ある者に物を賜ふ條、我閇連阿彌陀あり。此後かやうの名を禁ぜらるゝことも同紀に見ゆ。されども唐人の名を附けたる類は、藤原伊尹公、同相如の類尚有るべし。相如は彼にても、藺相如をうらやみ司馬相如とつき、公孫無忌、魏無忌の如きあればさも有るべし。伊尹はあまりにや。禪家には古法の號を附く人あまた聞ゆるが、然らずともと覺ゆ。

○百二代稱光院の御嗣絶えしかば、後花園院を伏見よりむかへ奉りて御位につけ參らする。これは無品道衿親王の御子崇光院より四世なり。此前足利義教將軍御位につけ奉るべき御仁體を一休に謀らる。歌をもてさとして此王子を迎へまゐらさるゝ由、櫻雲記に

熊野別當辨眞が子といふは其證なきよし、熊野別當は語られぬと記せり。東鑑にも、辨慶がことかつて見えずと或人はいへり。水戸大日本史にも此人の傳は見えず、義經傳下伊勢義盛、佐藤嗣信、忠信あるのみ。

辨慶が難を遁れし云々ー義經北國落に如意の渡におけ る出來事

○辨慶、義經を打ちて人の見咎むる難を遁れしこと義經記に見え、世にも傳ふる話なり。鶴林玉露の內三事相類すといふ條下に記されし事狀全く同じ。こゝにしては四事相類すといふべし、但虛實は知らず。

○應神帝九年武內宿禰筑紫にありて、讒をえて殺されんとする時、壹岐直祖眞根子といふ人、吾貌宿禰に似たるをもて、宿禰に說きて忍びて都にいたらしめ、おのれ代りて劒に伏して死す。此眞根子といふ名をおもふに、眞根とはまことに似たるの言にて、轉じてはまねぶといひ、人まねともいふ。まなぶも亦是より轉じたる語ならん。されば此人の貌似たるより、やがて名に呼べる史の筆にはあらずや。神代紀に手摩足摩の意、やがて手なづち足なづちと名になれる類を思へばなり。後の世におよびて源氏物語の人名、紫のうへ、花ちるさと、玉かづら、浮舟などの、類歌によりて名づくるもあり、髭くろ、かをる、匂ふ宮の如き、そのさまによりて名としたるもあるは、神代の卷のおもかげ成

二條家の傳へ―二條傳授、即ち二條家の和歌の正流を傳へたるもの

とうでて―取出して

龍艸廬―平安の儒者、本姓は武田名は公美字は君玉、詩を善くし又書に巧なり

のさしもなきからに、あなづらはしう思ひて、其説どもの残れるもとり用ふる人尠きにや。もし二條家の傳へならねば用ひずと思ふ人もあらん。あるは歌よみは一筋に唯よむべし、迷ふ道なくよむにて足りぬ、なぞかくしも物みることをつとむべきなどいふ人もあらんかし。歌よみは必ず物よく見るべしといふにもあらねど、物見ぬをよきことにしておもひ捨つるは、又いかにぞや。今の世は文の道明らかに、草刈童菜摘少女も、よみ書をつとむるものを、たとひさまよき歌にても、いにしへにくらく事たがひたることをよみ出でて、もの知る人にあざまれなん、此道のために耻見るわざならんといたましきに、此法橋をしもとうでてあげつらふ。よみうたはよみうたのよきに倣ひ、學は又學のよき人にならふべし。おのれ〳〵が才の近きかたにつきて、成ると成らざるは其人にあるべし。物見ねばよき歌のよまるゝといふことはえ知らず。

○昔年龍草廬の話に、武藏坊辨慶は伊勢渡會氏系譜の内にあり、従五位下權禰宜晴親孫僧淨智が子なり。辨慶も亦子あり、晨尙といふと。又百井塘雨が遺書を見れば、出雲穴深磯に摩尼組の牧とてあり。此地辨慶誕生の所とて産湯の水有り、其靈を祭る社もあり。

三史—前漢書、後漢書、史記
陽唐の韻—長は陽の韻、康は唐の韻

いとはれて胸やすからぬ思ひをば人のうへにぞ書き寫しぬる

とよまれしを、右の方より、左の歌何ごとにかととがめしに、長康隣女を艶して給に書きて逢ひたることなりと陳ぜし、そを五條入道殿の判にかくのみ申したれば、昔通の三史の中には聞遠く、又陽唐の韻などの人の名にも見るとも覺え侍らず。長康誰の人にかなど宣まへり。長康は晋顧愷之が字にして、畫に妙なりき。近くは蒙求世說などにも見えたるを、顧の字をいはざるからに、入道殿の心づきなかりしにや。其隣女を戀ふよしは、げにも大かた知られぬことなれば、昔小西梁山なるともに語らひしに、つひに考へ出でてしめされしは、太平廣記に名畫記を引きて曰く、かつて隣女をよろこびて其象を壁に畫き、心にあたりてこれを釘す。女むねをやみて長康に告げつれば、やがて釘をぬきて愈えたりとなん。此比おのれも此書を見しに、顧愷之と題せる下に出でたり。廣記は其比はまだこなたへは來らずやあらん、さだめてもとにつきて知られたるべし。かゝるけどほきことまでを探りえて、歌のれうにも取り用ひられしは、いとめづらなることなり。此歌は判に宣へるやうに、いひかなへられたりとも聞えねど、其學びの廣きはまた其世にたぐひなかるべし。よみ口

京極黄門｜藤原定家

花まひなしに｜古今集旋頭歌「春されば野邊にまづ咲く見れどあかぬ花まひなしにたゞなのるべき花の名なれや」、まひは幣の訓にてまひない也

顯昭のみならず、其代に及ぶ人はをさ〳〵稀ならんとおぼゆ。其身まかられし時、京極黄門奇異の逸物とをしみ給へるは、さることなるべし。常の人がらよりも、歌の道にかゝりてはわたくしなかりしことを、長明入道も賞めたりし。さてしもおのれはまた顯昭の學びに深きことをよく識る人なきが心ゆかで、こゝにいさゝかあげつらふ。其古今集の註は、定家卿の密勘を添へられ、なじり給ふ所ども多かれど、「花まひなしに」の歌に至りて、萬葉の「月よみをとこまひはせん」と言ふを引きてことわられしを、卿もいたくめでて、花もいひなしにと心得て、みづからの歌にもよみしははづかしなどまで書き給へりき。袖中抄はた古き詞どもを取出て說かれしに、取るべきが多からし。近き世に契沖阿闍梨いにしへの學びを唱へられしも、此法橋を基にしたまへりと思し。又國つ學びのみならず、からまなびにおきても廣かりけらし。六百番歌合の中に寄レ橋戀を、

いざやさは君にあはずば渡らじと身をうぢはしに書きしるさばや

是は人も知れる司馬相如の故事をとられしにて、論なう歌ざまもよろしき歟。また給に寄する戀の歌に、

城郡に生れ、佛敎を好み呪術を善くす、葛城山の巖窟に苦業を積むこと三十餘年也

獨鈷—眞言宗の僧侶の持つ兩端尖れる銅製の持物

晝を憚りて夜のみ役に就く、故に遲緩せるを、小角怒りて一言主神を呪縛すといふ說、傳りて故事となり、岩橋の歌などにあまたよめり。其事は辨ずるに足らざる街巷の小說なれども、第一其一言主神を形醜しといかにいひ出でしことならん。日本紀雄略天皇の卷に、帝狩し給ふ時に形樣全く同じき人出で來りしを、帝あやしみて問ひ給へば、一言主神と名のり給ひ、倶に狩しあそび給ふと見ゆ。まことに容貌見にくゝば、こゝに現れて帝と同じく見え給はんや。此時は容うるはしく、岩橋を役せらるゝ時に醜きはなぞ。もし又神通力自在ならば、醜くば見えたまはじ。一笑すべし。

〇天智帝御舃一隻を殘して上天ましますといふ說の非は、日本紀、萬葉集等御違例の間よりのこと詳なるにて知るべし。

〇此比予が廬文會の宿題に、古人を論ふといふ題を出し、人々こゝろ〴〵に書きすさぶ。おのれが論ずる所左に揭ぐ。是非はまた見ん人の論に委ぬ。

顯昭法橋は國つまなびに深く、寂蓮法師はよみ歌にたけたり。されば歌合といふごとに互に爭ひければ、女房達は獨鈷、鎌首と名づけて笑ひけるとなん。寂蓮、顯昭を嘲りて、かれがよむ如き歌は、筆さしぬらしてよくしてんといへるが、まことに

文字をよみ詩作ることを解する計の人と年を同じうして語るべけんや。さて薨後の封なるを知らざるは何事ぞ。唐山のことは上三皇五帝より下當今の清朝に至るまで、さしもなき人のうへをも知りて、吾生國のいにしへにおきては、此公の始末をもかうがへず言をみだりにす。是を何とかいはん。或儒生韓人に筆語せる時、皇國のことを問はれて得答へざりしかば、韓人嘲りしと或人いへるも同じ趣なり。不比等の御事は日本紀に見え、淡海公に封じ給へることは續日本紀に明らかなり。續日本紀の文左のごとし。

廢帝天平寶字四年八月勅云。勳績滿二於宇宙一朝賞レ未充二人望一。宜下依二太公故事一追以二近江國十二郡一爲中淡海公上。餘官如レ故。

其後も此例にて封ぜらるゝこと、昭宣公を越前公とし、忠仁公を美濃公とし給ふがごとき、九公に及べり。しかるをたま〱淡海公のみ世人文忠公といへる謚を知らで、封號をもて稱せるによりて、取りて當國の人とせるは、史を窺はざるの誤なり。儒家のうち新井白石、貝原益軒、伊藤東涯、土佐谷氏の諸先生のごときは、國朝の人たるに不レ恥といふべし。

○役小角久米の岩橋を渡さんとして、諸の鬼神を驅役す。葛城一言主神、形醜きによりて

江定基入道寂照は、新發心の人なるに、求法のため入唐し、しかも彼帝王の尊崇にあづかりしは希代のことといふべし。發心の初も其器量拔群の人と知らる。又其母公愛をさきて求法の志願を遂げしめられしも、大かたの男子の及ぶべきにあらず。儒釋道こそかはれ、道を勸むるの志は孟母にひとし。

○世々の人後世に緣あるあり緣なきあり、さばかりの人も學者すら記得せざるは緣なきなり。緣あるの至極は、束帶の像は必ず菅神なりとおぼえ、行脚の僧の像は必ず西行法師なりとおぼゆ。書を學ぶ兒童等菅神を崇めて、道風、佐理、行成の諸公をいはず、和歌者流はひとり柿本神を祭りて、山邊の大人を祭らぬがごとき、いかにともすべからず。兼好法師はつれづれ草によりて名高く、頓阿法師は俗間に知らず、義經は稱へて範頼はいはず、弘法大師の奇特を仰ぎて、傳教大師の德を擧げず、此類いくらもあるべし。

○藤原不比等公を淡海公に封じたまへるより、或は近江の人なりとおもへるが有り。俗間のみならず、江戸の儒者近江彦根の人の詩集の序に、「湖中の勝景を稱じて、勝地には名士有るべし、然るに淡海公以來其人を聞かざりしに、今此人を得たり」と書けるは笑ふべし。まづ義を取ること暗し。淡海公は朝家の大臣にして、其功宇宙を覆へり。纔に

孟母云々―孟子の母の斷機三遷の教をいふ

道風、佐理、行成―小野道風、藤原佐理、藤原行成、所謂三蹟也

頓阿法師―兼好、淨辨、慶運と共に和歌の四天王と稱せらる

吉備公―吉備眞備

今百卷計殘るとなん。是は山科西向寺南圭といふ老僧の話なり。此社は唐土より小松内府重盛公へおくりし陳仁稜が石刻の阿彌陀經の碑ある所なり。是は希代の名物にして、摺りたる物まゝ世間に傳ふ。さて此安覺に似たることは、建仁寺開祖榮西禪師の肉弟良友といふ僧禪師と共に入宋せられしが、かしこにて人にあひては、唯紙の續ぎやうのみ問ひぬ。歸朝して後常に所を定めず、行脚して机を首にかけ、いづこにても筆に任せて一切經を書寫す。全く諳記せるなり。彼紙の續ぎやうを問はれしは、是がためなりしとぞ。其一切經は筑前博多箱崎の八幡宮に納りぬるが、他に散じたるを見しに、卷ごとに奥書あり「一切經一筆書寫行人釋良友於二其所一書レ之」と、某所每卷皆かはれり。或は「於二住吉松下一」と記せる卷も有りきと。是は山科妙見堂に寓居せし慈堂和尚といへるが話なり。記憶強き人々もあればある世なりけり。同じ筑前に筆痕の殘れるも歸朝の順路故歟。

○本邦よりかしこへ渡りて名をえし人、官人には吉備公、安倍仲麻呂、是は續日本紀にも既に記されたり。仲麿はかしこにても其代に名を得たる人々に親しく交を結ばれしは、本朝の光輝といふべし。風波に障られて歸朝かなはず歿せられし時、貧しかりしも、官に居て清廉なりしにやとおぼし。僧家はかしこにて用ひられし人多かるべし。中にも大

かにー「かに」と濁りて「樣に」の意に解すべき語也、類例甚だ多し、されど下に疑の詞云々といへるより見れば此著者は「かに」と清みて心得たりと見ゆ

鶴林玉露ー十六卷、宋の羅大經の撰に係り、詩話、話錄、小說の間に出入して、議論を專らとせり

本朝文粹ー藤原明衡の撰

○小野篁は閻王の化身にして、常に冥府に往來し給ふといひて、五條（今の松原通なり）の東に死の六道、上嵯峨に生の六道といふは、出入の穴有りし所なりと傳ふ。又世に閻王の像といへば篁の作なりといふもの多し。然るに古今集に此卿の歌、妹の身まかりける時にと言書ありて、

なく涙雨とふらなん渡り河水まさりなば歸りくるかに

といふが見ゆ。是は冥途の案内おぼつかなき歌なり。常に往來し給ふとならば、歸りくるかにの疑の詞にては慊はず。此卿文才比類なきに、入唐の副使の時も、かしこにて白樂天と贈答あるべきことを人も望みし程のことなり。又其母に孝ありしなど史に著るるをいふものなく、あらぬことのみ傳はるはなぞ。

○鶴林玉露に本朝の僧安覺がことを記して、ことごとく一部の藏經をそらんじて歸らんとし、念誦甚だ苦み晝夜を不レ舍、遺忘るゝ事あれば、佛前に頭を叩きて佛の陰相を祈る、是時既に半を記えぬと成したり。此安覺のこと本朝文粹にも出づといふ人あれど、予いまだ探り見ず。又香月牛山の記有りとぞ。筑前宗像神社（田島村に在り一宮といふ）兩部にて、開基は卽ち此安覺なり。遺像倚子にかゝり、手に筆を携ふ、卽ち手筆の大般若有りしが、散逸して

しなてるや云々―「しなてるや片岡山にいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし」
いかるがや云々―「いかるがや富の緒川の絶えばこそ我が大君の御名を忘れめ」
冥府―冥土
わくらばに―たまさかに

や、雲中より投下し給ふや。其寺は大刹なるが、かゝることを說くは、他の寶物も贋物の疑ひを生ずといふことを思はざるか。ついでに云ふ、又或寺の寶物に、聖德太子と達磨大師片岡山にて互に其像を畫き給ふよしの兩幅有りて、上に、「しなてるや片岡山云々」「いかるがや富緒川云々」（此歌は人口にあり、是は拾遺集に出でたるごとくなり。日本紀には數句多くして長歌なり）此兩首の贈答を題せるは尊氏將軍の筆といふ、太子飢人に面會し給ふ時、互に畫をなし給ふといふが笑ふべきのみならず、其讃を後世尊氏の書かれしといふ取よりもあまりなる傳說にて、論ずるにたらねども、總て僧徒の僞を傳ふること、識者のあざけりを受くるがいたむべきものなり。緣記など見まく間に、脊に汗出づるもの尠からず。

○齋明天皇冥府にして本田善助にまみえ給ひ、

わくらばに問ふ人あらば死出の山なく／＼ひとり行くとこたへよ

と宣ひけると傳ふ。こは古今集にある在原行平卿の歌、

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶと答へよ

といふを引直せるなり。齋明の御製日本紀に出でたるを考へて、其代の體にあらざるをも知るべし。

王仁―百濟の人、應仁天皇の御代に來朝す

手に梅花―難波津に咲くや花この花冬ごもりの歌を附會せるなるべし

關帝―三國時代に蜀の劉備に仕へし關羽、死後神に祀らる

へども、前の像と年記いづれぞやと思ひしに、同時なりとなん。或は王仁の像を誤りて菅公と傳へたるならんといへる說有るは、西土の服を著、手に梅花をもち給へれば言へるにて、たしかなる證はなかるべし。彼傳衣の說をうたがひて此異說を作るといへども、今現に傳ふる所の徐璉が圖件の說によりて畫きしものなれば、圖像の據とすべし。又近世鷹峰卍山和尚の錄にも、件の傳衣の事故を載せらる。數十年前假初に見てさだかにはえ覺えず。世に人のいひ傳ふる、

　唐衣さしてきたのの神ぞとは袖に持ちたる梅にても知れ

といふ御歌といふも、卍山の錄に載せられしかと覺ゆ。又竹苞主人話す、臥雲日件錄文正元年丙戌九月廿四日咲雲來話の條「天神參二無準一像大唐亦畫レ之以實云々」私に言ふ、かしこにて關帝の像を尊崇する類におもへるなるべし。關帝もまた靈顯れて參禪せられし說ありて、相似たることなり。

○或寺の開扉に、水鏡の天神の像あり、御自作の由をいふ。其緣起は、天拜山に登り天帝に祈請し、既に上天まします時に、水鏡を見て作り給ふよしなり。其像雲上に忿怒ましますさまなり。可レ笑。此期に臨みいづれの所に材をもとめ、いづれの所に彫刻し給ふ

云」都府樓は太宰府の廳にありし樓

地によりて云々—自己の缺點短所を知る時は、これよりして徹に進むを得べしといふ意の謬妄は究却りて尊崇の因となり、失やがて得の地を爲したる意に轉用せる也

ふと傳ふるものと、天淵のたがひを知るべし。されども此冤によりて千載の今なほ貴賤をいはず尊崇し奉ること、所謂地によりて倒るゝものは地によりて起つなるべし。

○渡唐天神の像といふは、菅公薨後宋徑山無準佛鑑禪師にまみえて衣法を授かり給ひし圖像とかや。事實は相國寺瑞濱周鳳和尙の臥雲夢語集に、（此書珍書にて世に多からず、たまたま竹苞主人示されて見つ、）授衣記といふものを引きて委しく記さるれども、今は是を略す。其奥に、

應永二十七年庚子、甲斐武田此像を圖して洛下諸師の贊をもとむ。又是より先天龍開山の徒、普觀庵主京師に居れり。同參佐庵主筑紫より天神の畫像を贈る、いまだ披き見るに遑あらず、壁間に投ず。翌日醫僧眞知客來り話す。某天神を夢む、袖に梅花を插み肘に小袋をかけていはく、我無準に參して衣を受くと云々、不レ知何の謂ぞと。普觀驚きて曰く、昨日天神の像を得たりと、便ち侍僧に命じて取り來らしめ、是を展ぶれば圖樣眞が說く所のごとし。二人稱嘆して不レ已、既而悟心椿庭和尙作レ贊因つて此事を述ぶ、爾よりこのかた、人多く此像を設くと云々。（以上夢語集）

今妙心寺中雜華院の什物に明徐璉といふ人の畫せる像に、本朝の僧東福寺の了庵桂悟禪師贊を作れるを、同時詹仲和といふ明人書せるもの有りて、是此像を畫きし初なりとい

菅神—菅原道眞
藤左府—藤原時平
都府樓云々—「從謫落就柴荊、萬死兢々跼蹐情、都府樓云

閑田耕筆 巻之二

人部

○凡そ人の受け得たる所の禍福、いかにともすべからざるものは佛家に因果といふ。この種子ありて此果を得るの謂なり。菅神の寃をうけ給ふこと是歟。藤左府の讒によりて筑紫に左遷し給ふは、御生存の日の寃なり、薨後雷電の變をなして禁中を驚し給ふといふ浮說も寃なり。とにもかくにも寃を免れ給ふこと能はざるをいかん。嗚呼神は忠良才能比類なくおはしますことはいふに及ばず、其配所にしても朝家を重んじ、御身を愼みたまふことは御作にて知るべし。今記得せるは、

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持每日拜餘香。

また或時は、

都府樓僅視瓦色。觀音寺唯聽鐘聲。

と、これは一歩をも動さず閑居ましますなり。世に朝家を恨み天拜山に祈りて上天給し

だみ—泥し、彩色し

つしぬ。唯柿園の石誌あるのみ。さて彼法華經はいづこにかかくしけん、近き比𢌞ぐとてあまた出し、細書にして一小冊に全部を盡す。毎冊奥書ありて共に印刻す。翁の記せるなり。如左。

奉納報恩藏千部之内也。

これは人丸、赤人を始め奉り、萬の歌仙は申すに及ばず、過去、現在、未來の歌よみ連歌、俳諧に至るまで、此敷島の道に心をよする一切の貴賤上下道俗男女、殊には麿が御恩を蒙りし尊師連の御菩提皆具成佛の御爲なり。

南無三寶　諸天善神

慶安三稔庚寅正月二十八日　　長頭丸敬白

あはれに殊勝なる書きざまなり。板短冊もまた持てる人ありて見しが、官家の書は地を金にだみ、凡下のは色繪など有りし。吾見しは俳諧の發句なりき。今をもて見ればをさなき物數奇なり。俳諧を盛に弘められしかば、かゝる好みも俗にちかくまうけられしなるべし。

日吉の社—日吉神社、近江國滋賀郡
貞德—俳人松永貞德

また殘れりとぞ。村中に祓殿の辻などいふ名もあり。
○新日吉の社の經營もまたいかめしきこと古繪圖にて見たり。其後豐國社とかはり、それ破壞して又もとの日吉を勸請す。轉變定めなきこと所々皆かくのごとし。
○右はおのれが幽居のわたりなれば、案内を知りて記す。此ついでに近世貞德の翁の柿園の事をいはんに、これは北村季吟法印のつぎねふといひて、山城の名所舊跡を集められしものにくはしく出でしを、其書寫本にて人のもてるを見しが、寫しもとゞめず、今所在を知らず。柿園は池田町寺島吉左衛門といふ瓦棟梁の地面にて、即ちおのが閑田廬の合壁北隣なり。貞德翁此家にゆかり有りしかば作られしなりと、彼家の話なり。つぎねふに見ゆる趣は、報恩藏といひて法華千部を收む。（此翁は日蓮宗の信者なればなり。）吟花廊といへるは繪馬舍に似て、貴賤をいはず、歌、連歌、俳諧等を板短册に書きて掛けたり。蘆の丸やといふは翁の蘆の葉もたる肖像を納む。（私に云ふ、もし是は翁の歿後作れるか、生前あらかじめまうけられしか知らず。）此外の屋も有りしや記得せず。其後本町（伏見街道をいふ）七條の南にうつりし所は、馬杉亨安といふ老人知りて語られし。それも又いかなる故か有りけん、舊地の半町餘南にうつしたれども、荒廢して昔の形見に殘るものも見えず、蘆の丸やの肖像も、近比鳥羽實相寺といふ、即ち翁の墓所へう

百錬抄―冷泉天皇より後深草天皇までの日録、撰者未詳

法住寺の御所―後白河天皇の御所

過ぎし天明六年午のとし四五月の比より鳴動す、其音甚だあやしといふ人ありしが、九月六日の夜丑二刻計聞きつけたり。如レ鼓聲四段に鳴りて、以上十二聲なりし。其夜三條橋大水にて損じたれども、かゝるかろ〲しき事の故にはあらじ。同八申の年平安大火の前兆ならん。百錬抄に、「平家都落の時將軍塚鳴如レ鼓」と見えたるにあへり。世の大事といふ時はかゝるなるべし。凡そ天變地妖天下の安危をあらかじめしめし給へども、人の心づかぬなりとぞ。

○法住寺の御所より新熊野社へ、御舟にて南へめぐりて詣でさせ給ふやうにかまへしもの歟、今其御池のあとを池田町といふ。義仲法住寺殿をせめし時、御舟にて遁れさせ給ふもこゝなるべし。泉涌寺の松原の北のかたの田に大鳥居の名殘れり。御社は南にむかひて建てられたるなり。今も然り。昔は嚴重の經營にて、山伏あまた守護すとかや。今彼村の農民先祖は知らず、數百年土著して、三百年ばかり以後の者は、新入といひて村役は持たしめず、集會の席なども卑しといふ故に、さらば古き家は山伏の子孫なるべし、御社おとろへて守護の山伏農民になれるならんといひしかば、手を打ちて、誠にさも侍るべし、傳れるものに古き金杖など侍りといひつ。此御社のめぐりの田の名に坊の名などあ

將軍塚ー相武天皇の御時埋めたる田村將軍の墓と傳ふ

の寵に遇ひし日、何にても希望の事あらば速に成就せしめんとありしに、妾望む所なし、たゞし郷里水に乏しく旱魃の憂あり、願くは此田園を潤すべき謀をなし給はれといへり。こゝにおいて大に功を興して永世不朽の涌水を掘りて、其利今に及ぶ。女の望には奇ならずや。されば妓王は此莊の產土神の託生にて、其生存の日は神の託宣を祈るに驗なかりしといひ傳ふ。涌水の源は三十丁ばかり西野洲河より地中を通じて水を引きたるものなれば、なみ〳〵の工夫をもて成就すべからず。其代の平家の勢いちじるしなど語りしは、其寺の緣記にしるせしなるべし。何ぞの軍記に見ゆることにや考へ得ず。平家物語にて見れば、此兩女は種姓も知れざる舞妓のやうに見ゆるを、此說はさも有るべきことなり。おのれが知る所にて、清泉の溢れてみゆるは、此所と洛西大通寺の門前櫛笥にしくものなし。

○平安東山の將軍塚は國家鎭護のため土偶に甲胄をかうむらしめて埋め給へることは、世の知る所なり。纔にも變あれば必鳴動すること世々たがはず。予幼き時は地震にもあらで、こだまの如く聞ゆるをおぼえぬ。三條街のものなればなり。其後近江に住み、又洛南に閑居せれば、聞きわすれたる歟、今は心もつかず。然るに老禪祖芳和尙の話に、

看主—又、管主と書く、住職代理

妓王妓女—平家物語に見えたる有名なる白拍子

が、開基を神璽和尚といふ、是安德帝にてまします歟といふ。此寺住持あらず、看主にて相續す。住僧と名のれば死すと云ふ。其寺に劍あり、御持物なるべし、請雨に驗あり。又平氏の墓も有りといふ。畢竟決しがたき事なれども、異聞に備ふべしとぞ。又或說に、肥後東南五ケ山といふは、平家の族遁隱れし所にて、村中皆先祖の稱號を傳へたり。其氏神と崇むる社は安德帝を祭り、御璽は寶劍なりといへり。因に一說有り、緒方三郎は無二の平家の方人なるに、俄に心變せしといふは、實は平家の勢とても支ふべからざるを知りて、帝をはじめ奉り、一門の然るべき人々を、此五ケ山に隱せるがための謀なり。其後つひに戰まけて入水せるは、皆其さまを眞似たる人なりといへり。奥州の泰衡が頼朝卿に從ひて、却りて義經を蝦夷に落せしといふ話に似たり。是尤も實否は今定めがたき事なるべし。

○近江野洲郡江部の庄に涌水有り、江部、北村、永原三邑の間に水道を通じ、田圃を潤し、餘波數村に及ぶ、是を妓王涌と呼ぶ。北村に妓王寺あり、予四十餘年前その庵に至りし時、守僧の由緣を語りしは、妓王、妓女はもと此莊の產にて、父を江部の九郎時久といふ、平家の家士にて、熊野合戰に戰死せしかば、母刀自兩女を抱きて此里に蟄す。後淸盛公

衣笠内府—衣笠内大臣家良公

まなし堅間—目の無きまで密に編める竹籠、神代記廿三「作無目籠内彦火々出見尊於籠中」云々、波わけしは此故事をいふ

門脇宰相—平教盛

地ことに險隘しく、其河流駛く、しかも東岸高く西卑ければ、階梯をたてて登りて籃に就く。椿原は是よりも猶危しとぞ。記者中山を賦せる古詩の歌體長篇あれど、事繁ければ洩しぬ。いにしへ衣笠内府の御詠とて其所につたふるは、

徒にやすく過ぎ來ぬ山藤のかごのわたりもあれば有るものを

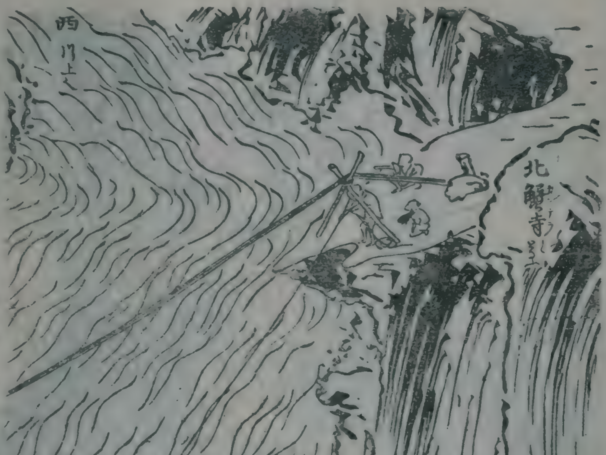
おのれにも歌を乞はれて、とみに口ずさぶ。

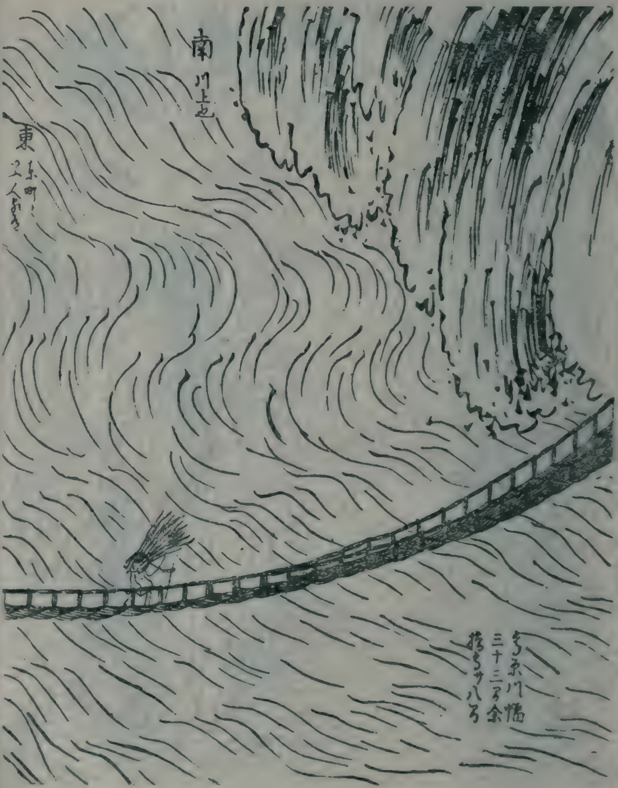
波分けしまなし堅間のふることも斐太にありてふ渡にぞ思ふ

○佐野儒士の話、阿波にて祖谷山の邊深山幽谷に村里多し、村といふことを名といふ。其所にて然るべき者を名主とよぶ。下の民を名子といふ。東大寺の古文書に村を名といふことあるにかなへり。又諸侯を大名といふも、名主の大なる心なるべしとぞ。

○同話に、此名主の中に門脇宰相の子孫といふもの山あまた持たるあり、又祖谷の並びに木屋平といふ山に、劒權現と號くる社有り、安德帝の御懐劒と御髮を納めし所といふ。實は御出家にてながらへまし〳〵けるといへり。凡そ此帝の御名殘をまうす所猶二所あり、豐前小倉のうちかくれ蓑といふ里に安德庵といふは、御落飾の後かくれ給ふ所にて、四十歲餘まで御生存と傳ふ。近侍の人の墓もありとぞ。又肥後神護寺といふ


南


西
北解寺


南
川上也
東



つばらか—審
眞名文—漢文

くをまたずしてよく渡りし牛もありしとか。馴るればなるゝものなりなど、彼記に猶つばらかなり。記は高山の人田元義なる人著せり。眞名文なるを今要をとりて和す。且其詩に、

蒼藤織作橋千尺。人似二龍蛇背上行一。

の句有りて、さこそと親しく見るこゝちせり。同郡茂住村益田郡大島にも亦ありといへり。籠のわたりは吉城郡中山村に在りて、神通河に架す。川の北は蟹寺（里人カンテラと稱ふ）村とて、越中の南鄙なり。籠渡とは橋にあらず、西域傳にいへる度索といふものか。其地兩岸絶壁にして、河の流れいちはやく、水に航すべからず、岸に橋すべからず、故に大索三筋を張りて岸に架し、懸くるに小籠をもてし、人其中にうづくまるを、籠に兩索ありて前岸曳レ之後岸送レ之、南北より相助け、からうじて渡る。土人は男女をいはず、手をもてみづから索をたぐりて、たやすく行きかひすること神のごとし。籠は木を撓めて幹とし、底は藤をもてめぐらし、編むこと蜘のあみを結ぶがごとし。三の大索月毎に一筋を更ふるといふ。其往來のしげき事知るべし。飛驒より越中に行く道あまたあれど、此道便なればとかや。此餘椿原荻町共に此國大野郡にして、此籠もて渡る事同じ。荻町は其

和尚心よからざりしが、ほどなく隱居せられしとぞ、むづかしき靈といふべし。

○懸崖絶壁數十丈屹立し、下は急流迅瀬にして柱を建つべからざる所、奇巧を用ひて橋をわたすもの、甲斐に猿橋、信濃に水内の曲橋など、圖を見、其話をも聞きしが、曲橋は信濃地名考に出でたれば更にいふべからず、猿はしは圖を寫しとめざりき。其所由は、猿のたくみにならひて架け初めたりしとかや。こゝにまた此頃飛驒の人田中記文といふが訪ひ來て、其國の藤橋かごのわたりのことをかたり、且記せるものを示さる。藤橋三所有り、其あらはれたるものは吉城郡舟津町村にありて、高原川にわたす。東西各民家あり、西を朝浦といひ、東を東町といふ。川の兩旁石崖突出せる上に架けたるものにして、歳ごとに近縣の民相つどひて改め作る。長さ三十三間餘、濶數尺、一柱を建てず、藤を經にし木を緯にして織ること席のごとし。往々木を横へて歩を進むるの程限とし。兩邊藤索を張りて欄干に代ふ、是を攀ぢて渡るべし。然も風に觸てゆらめくからに、行人難み、あるひは匍匐ひて前むこと能ざるものあり。土人は重きを負ひつ戴きて、しかも彼程限を踏みて進む。かつて一歩をあやまたず。或は雨夜に燭を執らず、木履を穿きて行くとなん。狗もよく行く。牛馬は常に駄を解きて水を游がしむれども、或は駄を解

船幽靈—水死せし者の幽靈

檀林—佛敎の學問所、文德帝の仁壽三年に檀林院の起りしを嚆矢とす

法性—諸法の眞實の體性

其日は雲霧深くて四方かつて見えず、はじめは友船のよぶにやと思ひしが、影も見えねば、また霧のかなたに島などありて、鳥の聲の人語にまがふにやとも疑ひしが、此船人のいらへにて、あやしき物とは知りぬ。其後又是はなぞと問はまほしかりしかども、船中にてはいたく物忌すれば默しぬ。按ずるに、こは船幽靈といふもの歟。夜は火の光見えて、しきりに船を漕ぎよせて、或は檜杓をこふ事有り、其時底なきものを與ふ。もし底あれば、海水をこなたの船へ汲入れて、つひに覆すといひ傳ふ。此外船中の怪異聞くこと多し。溺れ死したるものの靈、おのがごとく船を沈めんとするなりとぞ。ことに七月十五夜、十二月晦日夜は、諸船往來せぬがならひにて、此兩夜は海上に怪しきことあまた有りといふを、何某の船頭强氣なるものにて、試みに船を出せしが、果して風波さわがしく、鬼火あまた見え、叫ぶこえなど所々に聞え、おそろしさ言にもつくされずと、其船頭鈴木修敬に語りしとなり。まさしくおのが彼聲を聞きしにて虛妄ならぬを知りぬ。

○幽靈のついでに思ひ出でしことは、江戶某の檀林に一僧の靈有り、學力ある住僧あれば必ず出でて見ゆ。一代の和尙夜本堂に登らんとする時、是にあひて忽ち商量す。「心法性元淨、忘念何によりてか生ず」と有りしに、靈にらみて「腐小僧めが」といひし。

橘南谿―京都の名醫、國學に通ず、東西を周遊し東遊記西遊記を著して名あり

○邊鄙にはかくあやしき事あるも疑ふべからず。出羽は陰地にて常に曇りがちなり、さる故に人も陰氣にて、幽靈の出づること多きよし、橘南谿の東遊記に記さる。松前の奥の蝦夷地もまた然りと傳へ聞きぬ。はた唐山も同じき歟。往年長崎に來りし唐人病人を療するがために、願ひて町家にやどりしことありしに、（もとは唐人平常町家に來り遊びて飲食などもせしよし、そこに住せし人老の後話せし。）其隣に新死の女のありし家を、夜々うかゞひしを、何事ぞと問ひしに、幽靈の出づるを見んと思ひてなりと答へしこと、廣川醫士の筆記にも見ゆ。ついでに又まさしく予があひたりし怪異をいはんに、今は十七八年前讃岐の金比羅にまうでて、夫より嚴島に遊ばんとする海路おんどの瀬戸といふ所を過ぎて船をとゞめ、天明をまちて出せしに、二三里計も過ぎぬらんとおもふ比、船頭俄に人語を制す。何事ぞとあやしむに、烏帽子のごときもの浮みて船に行違ひたり。さて後なぞと問ふに、船人彼物と計こたへしは鱶なりと知られぬ。かのゑぼしの如きは、尾の先の顯れしなり。是は船を覆へし、或は人をも捕れば、大きにおそるゝなり。さて怪異といふは是にはあらず、此ものを見ていくほどもあらず、東北の間とおぼしき方より十三四計の童子の聲して、ほい〳〵と呼ぶこと二聲、船人また手して人の物いふことをとゞめて彼方に向ひ、「よいは、そこにをれ〳〵」といふ。

さゝえ—酒を入るゝ竹筒

厨屋川の戰—源賴義安倍貞任をこゝに窮迫して擒にせし戰、厨川は陸中國岩手郡にあり

を廻り二三尺計に巻きて、高さは一間有餘、或は軒にも及ぶ、大小定らず。町家の門々兩側に建てて是を燒く。此中を諸士馬に乘りて馳通る。こは馬に火を馴れしむる習練とぞ。いとおびたゞしき事なれども、昔より此火にて燒亡の事はなしといへり。樺は鵜飼の篝にも用ひて、此火は水を得ていよ〳〵燃えまさるものとなん。

○南部七戸に六里四方計の野あり、それに年々の二月の末に狐隊といふこと有り、其邊の人はさゝえなど携へて見にゆく。およそ空薄曇りたる日なり。あらかじめ窺ふに、狐ども出でて飛びありくさまあれば、必ず其日にて、初に二三十の狐出づるを、人々高聲に褒むれば、頓て城郭の形顯はる、是は二丁計のかなたに見ゆ。さて甲冑を帶び馬にまたがり陣立をなす、凡そ二百計に見ゆ。又こなたより頻に聲をかくるほどに、やがて諸侯の行列をなすことふたゝび、一度は松前侯の行粧、一度は津輕侯のさまをまねぶなり。彼城郭陣立などは、厨屋川の戰の昔をまねぶ歟。此野の狐は、これらの事より外に見知ることなければなりといへり。たゞこなたの見る人多くて、聲をかくるもしげければ、かしこの人數も多く花々しく見え、人も聲も少なければさびしとなん。是も重厚まさしく見しよし語られぬ。

末の松山云々―上句「君をおきてあだし心を我がもたば」古今集東歌

森岡―今の盛岡

よせ―より所

野田の玉川―六つ玉川の一

是は袖中抄に出でたる歌なり。また

　みちのくは奥ゆかしくぞおもほゆるつぼのいしぶみ外のはま風

といふも、ともに南部にてよくあへり。

○同じ話に、末の松山も南部地五戸、今福岡といふ所にありて、其上を波打峠といひ、貝の化石も有りといふ、是は心得がたし。波のこえぬ所故に、「末の松山波もこえなん」と誓の言によめるなり。凡誓にはあるまじき事をいふが常なり。然るを波打峠といひ、貝の化石ありては、誓にはとりがたし。たゞし松山は實にこゝなれども、後人此うたを心得損じて波打の名を負せ、貝石など附會せしにや、尋ぬべし。仙臺にあるは後世の作りものとは誰もいふかし。

○同じ話に、森岡の城下にたゝら山といふ小山、萬葉集中に「あたゝらの根にふす鹿」とも、「あたゝら眞弓」ともよめる所やといふ。今獅子社と號くるが有るも、ふす鹿によせ有りて覺ゆ、鹿を俗にしゝともいへばなりといふ。果して此所か知らず、錄して例の後勘に委ぬ。野田の玉川も南部に有り、仙臺にあるは實にあらずといふ。

○森岡の城下に七月十四五夜樺火といふこと有りて、魂祭の手向の火といへり。樺の皮

壺碑―聖武天皇の時大野東人が陸奥國に多賀城を築きて其處に建てし石碑
南部地―南部領
袖中抄―釋顯昭の著にして、萬葉、古今より堀川百首までの仔細ある歌の詞を解釋せるもの

○重厚なる人東奥行脚の話に、壺碑は南部地に入りて七戸より野邊地の間にあり、壺川といふ大河に壺村といふ小村もあり、其傍に千曳の社といふもの、是壺碑を納めし所なりといへるは謬にて、是は千曳の石といふものを埋めて祭れるなり。碑は百年あまりのさき大水に流れたり。砂石に埋れしならんと傳ふるとぞ。予案ずるに、袖中抄に、「顯昭云ふ、陸奥のおくにつぼの石文あり、日本のはてといへり。但し田村將軍征夷の時弓のはずにて石の面に日本中央のよし書付けたれば、石ぶみといふと云々。信家侍從の申しは、石の面長さ四五丈ばかりなるに文ゑり付けたり、其所をば壺といふなり。私にいふ、みちのくには東の果と思へど、えぞの島は廣くて千しまともいへば、陸地をいはんに、日本の中央にても侍るにこそ」以上袖中抄と見えたるにあへり。さて猶思ふに、將軍奥羽の蝦夷を平げ給ひしが、猶異國までも從へてこゝを中央にせんと思せしにやあらん。今仙臺城下市川村多賀城の古跡に壺碑とよぶは、鎭守府の碑とかや。或人はいふ、上に西字あるは、是西の壺碑にて、南部なるは東の碑なりと。此は西の字に付きて説をなすものなれども、壺の名義壺川によるべければとりがたし。

いしぶみやけふの狹布はつ〳〵に逢ひ見ても猶あかぬけさかな

長岡の都―長岡は山城國相樂郡にあり、桓武帝奈良より遷られ、一時都と定められし地

○先年伊豫國宇和島領上之灘尾端串浦社の神木を伐らんとする時、白衣の人四百人計來り止むれどもきかず、伐りて船に積みたる時、此四百人やがて船を乘り沈め、吏及び人夫共に没死すと或人語れり。又吉野上市の上にて、俗稱いもせ山といふに社あり、其神木を伐りて賣りしに、伐りたる者をはじめ、其材を買ひしものまで祟をうけ、或は狂亂し、或は病惱して數家皆死絶えたりと、其所の人話せり。右青木明神の奇異とひとし。凡そ神靈は疑ふまじきものなり。此頃山庵雜錄（明人恕中無慍禪師の著述なり）を見しに、「世人局二其耳目之所一レ及。耳目之外以爲レ誕吁」と示されしは、さることなり。

○西岡鷄冠井といふ里の田地のあざなに、大極殿といふあり。長岡の都にて作られける舊跡なり。其古瓦稀に地中より出づるよし、門生源詮の話なり。

○鳴海驛山父といふ老人の話に、今八橋といふは、實の古跡にあらず、今の所より三里計東に擧母といふ所あり、其田の路に小橋あまたあり、此所なり。それより細川といふ所へわたる、細川は和名抄に豐川といふ、三河の其一つなりと、岡崎六所明神の神主大竹大膳といふ人古義を好めるが、九十の老人にて、今よりは五十年前の話なりといひき。何ぞ考ふる古圖古記文にても有りしや知らず、唯聞くまゝに錄す。

大梵天王―色界初禪天の第三重にして即ち初禪天の第一位に存する主君也、印度の神なるを、本地垂跡の說によりて我神殿にも祭れる也

としまざき―一年交替に

又こゝを青木の里ともいふ。あふきと稱ふ。

こがらしの 風の吹けども 散らずして 青木の里や常盤なるらん

といふ歌も有り。こゝに青木明神と申すは相殿大梵天王、古は大社にて、今も數村の產土神とすとなん。因に奇話あり、一年請雨せしに、林頭より水氣のぼりて、他よりは失火の烟歟とて見騷ぎし程なりしが、大雨ふりて其あづかる村々のみ潤ひける。其時拜殿に人々會集せし所へ、一尺計の白蛇出でたるも不思議なり。また或時大風にて數十本の樹倒れながら、五十日計をへしかば、幸に賣らんとせしに、一夜何とも知らず物音村中にきこえ、明くるあした見れば、もとのごとく起直りて次第に繁茂せりと。同じく百如律師其ほとりに庵居して、正しき視聽の旨を語らる。又男資規其邊をよく知りて話す、此社の北の方山崖の巖の中より、三尺計の椿二股なるが生ひ出でたり、昔より此樹如此といふ、其二股片枝は枯れ片枝は繁茂す、年によりて又枯枝繁茂しかはるなり。その繁るかたにあたれる里は田作實り、枯れたるはよからず、としまざきに替ることもあり、二年も續き片枝のみ繁ることも有り、いと不思議なり。もし此木全く枯るゝ時は、神此社にいまさじと神詫有りし由、村老はいへりとなん。

せしからに越中宮と申し、はた其御作歌にも、
今はまたとひ來る人もなこの浦にしほたれて住む海士と知らなん
といふが李花集（御家集なり）に見えたるにあへり。また
ふるさとの人に見せばや立山の千年ふるてふ雪のあけぼの
といふ御歌其所の口碑に傳へて、牧野の北の口に少し高き地を雪見岡といふ。猶此邊に親王の御名殘を申す所これかれありとかや。かの射水河も此邊より八九丁の間にて、又四五町にして北海に流れ入るとぞ。
○近江坂田郡番場驛より八丁北に、能登瀬村のとせ川あり、萬葉第三に、
さゞれ浪磯越道なる能登湍川音のさやけさたぎつ瀬ごとに
といへる所なり。此歌のごとく今もあまた所に瀧落ちていさぎよしと、百如律師の話なり。私に案ず、古く近江と注せるを、代匠記に、「大和の巨勢か、又こせぢは越路にて北陸道にや、能登瀬川は能登國にある歟」と見ゆ。然るに同萬葉集第十二に「高湍なる能登せの川」とあるは、古訓たかせと讀めれど、こせと讀むべしといふ說は從ふべし。今の歌も近江にして、二の句穩かならねば、大和なるべけれど、地景のあへるも亦一奇なり。

しほたれて―歎きに沈みて、海の縁語

さゞれ浪云々―波多朝臣少足の歌

代匠記―萬葉代匠記、契沖の著

家持卿の歌―遊覽布勢水海賦一首と題して、長歌一首反歌四首を載せたり

り。或は信濃とも美濃とも記せる書あるはいかにやといへり。美濃といへる書は予いまだ見ず、何を證に出せるにや。凡そ古今屬國のたがへる類は右にもいへる如くなれど、かくの如く正しく國の眞中にあれば、六帖の歌もおそらくは都人の聞きたがひなるべし。むかしとても聞きたがひ有るべければ、一首の歌をもて現在の地理には爭ひがたし。

○越中國布勢の湖は、家持卿の歌萬葉集に見ゆるに付きて、其邊の地理を國人に問ふに、先かの卿を祭れる社湖邊にありて、御蔭明神と稱す。多胡のうらは今湖をさること半里餘にして、陸地の一邑となれり。此間の湖水は埋れて田となりしなるべし。たゞ名におふ藤は大なる古樹今も繁茂せり。澁谷崎は二上山の北の尾のうみに臨む所をいふ。射水河は水源飛驒山中より出でて當國礪波郡井波といふ所にいたり、細き谷口より流れ出づるが、水勢甚だ急なり。さて其水二流に別れ、また末にて合し、一大河となるを射水河と號く。兩岸相去ること四百間計とぞ。

○同じ國名子の浦は、今放生津といひて、名にも似ず、漁家三千餘ある、其東北の一町を名子町とよぶのみ。むかしは此邊より牧野といふわたりかけて名呉の浦なるべし。牧野は、南朝の將軍中務卿宗良親王三年がほどおはしませし所なりなどいふ。げにこゝにはま

後京極―藤原良經

れども、其地に至らざれば知らず、せんかたなし。又不審なることあり、後京極の御歌に、

　　遙かなる三上の山をめにかけていく瀬わたりぬやすの川浪

とあるは、道の記の御歌なれば違ふべくもあらぬを、三上山はたゞちに野洲川の東岸にのぞめりし、これも三上山を遙に御覽じ來らせ給ひて、さて野洲河に臨ませ給ふとうけ給ふらん歟、然らば梓山みのの中道とつゞくに准ふべし。

○位山はなべての名所集飛驒と記せるを、六帖に、

　　衣手のいろまさりつゝ信濃なる位の山は君がまに〱

といふ歌あり、契沖あざりの吐懷篇に、「此歌によれば飛驒にあらざること明けし。もしは伊勢物語のかふちの國いこまを見ればといへるも、伊駒は大和勿論なれども、西の方は河内にもかゝれば、かうかけるやうに、信濃ながら飛驒にもわたるにや。さりとも大かたにつかば猶信濃とぞ申すべき」と判ぜらる。然るに此ころ飛驒高山加藤氏の書音に、位山當國大野郡宮村にありて、東信濃境まで十二里、南美濃境まで十七里、西美濃境郡上、越前、加賀境迄各十二里ばかり、北越中境まで十四里にして、國の中央にある山な

八雲御抄―順德院の御撰にして詠歌の方式を記せし書

曾丹集―曾根好忠の歌集、曾丹後、曾丹は共に彼の異稱

「信濃なる木曾路のさくら咲きにけり」などよまる。又山城の北極大布施大悲山は、其佛具の銘には皆丹波桑田郡と記されたるよし、名所にはあらねど類すべし。又古今變改はなけれども、貴人の聞きたがへ給ひしもあらん。伊吹山は近江なれども、八雲御抄には美濃と記し給へり。大山にて美濃にも薄りたれば、たま〳〵其下をかよへる宮人も美濃とおもひて聞え奉れるなるべし。是につきて、此ごろ彼わたりに遊びたる門人の道の記を示して、「柏原より今の道一里ばかりをへて、西の山中に大なる谷川有り、梓川といふ、里ありて同じく梓とよぶ。梓杣は諸名所集近江とあるにあへるを、契沖師の吐懐篇に、

梓山みのの中道絶えしよりわが身にあきの來ると知りにき

といふ曾丹集の歌を引きて、美濃にあることさだかなりと見ゆ。たゞし此邊東南の嶺々、近江、美濃引きつゞきたればまがへるにや、いかゞ思へる」と問へり。予答へて、此曾丹集の歌をもて見ればげにも美濃なるべけれど、梓山をへて美濃に入れば斯くはよまれしにや、今正に近江にあれば、疑なく古説に從ふべしといへり。予先に吐懐篇に補注を加へしかども、其所を知らざればば論ぜざりき。是等のたぐひも諸國に有るべきことな

祝子―はふりに同じ、神主の次位の神官

木工頭―木工寮の長官

歌人は云々―平家物語、九、「吉野初瀬の花をば見れども歌人が知り云々」などあり

祝子が絶えず注連引く朝日山よゝに曇らぬ影を仰ぎて　五辻兵部卿宮

頼もしな綿の御山のいともかく守りこし道の跡はふりせず　九條殿御名可尋

露ふかき朝日が野邊にをがや刈る賤が袂もかくはぬれじを　清輔朝臣

餘所よりもゆふべ／＼は風戰ぎ月かげ涼し篠の谷川　藤房卿

今の社地を馬見が岳といふは、牧の馬を檢する所なりし故なり。日野の名も朝日の野を略き稱へしなりなど話多し。又ついでにいふ、貫之うし木工頭に任ぜられし事は、補任に天慶八年三月と見ゆれば是にあへり。從四位下に進れしことは他に考ふる所なけれども、是を證とすべし。九年に逝去にていくほどなければ、記録に洩れたるならんかし。此所昔は杢寮の領地にて、檜物庄なれば、寮頭にて梁簡をも記し給ふならんといへり。

○俗諺に、歌人は居ながら名所を知るといへるは、古歌により古記文によりて知るのよしなるべし。されども古今に國郡の違ひもすくなからず。高槻むかしは山城にて、萬葉集黑人の歌に、

とく來ても見てましものを山城の高つき村の散にけるかも

とあるを、今は攝津に屬し、木曾はもと美濃に屬せしを、後は信濃にて、中世の歌にも、

の玄兎は月、相對して歲月の意とす、春雨秋露も然り

八荒—八方也、天下也

式内—延喜式部名帳に記載せる社

點二其珠一。玄兎速過兮。秋露疵二其璃一。清宮既廢矣。故今復上レ棟立レ柱以全二其作踊一。因以祝冀。明謨朗融四裔定焉。良弼協和。八荒安焉。四時序レ季疾病除焉。十雨順レ節穀粱登焉。俯念神明叡聖。尙垂二皇愍一矣。敬白。

天慶八年乙巳八月二日

従四位下行木工頭紀朝臣貫之謹誌

神主正六位上出雲宿禰　貞主

工匠　爲位　鞍部稲足

右銘中に錦嶽といふは、錦面山とも綿向が嶽ともいふ、錦面を謬りて綿向とよみ來れりとも、または今の地に御遷座の時綿を擘るがごとき一片の白雲東に向ひて飛去り、猪部の杜の古櫻樹に止れる故ともいへり。あるは奇日嶺、朝日山ともいふ。大嵩とも稱ふるは、彦神山を小嵩といふに對ふるとぞ。祭神三座、天穂日命、天夷鳥命二座は、式内小社に入る。武熊大人命一座は式外なり。すべて社地のことに付き、記文具に殘れるを見しかども、今は略きぬ。所に殘れる古歌左のごとし。

大嵩の篠吹く風に空はれて鏡の山に月はくもらず　作者不知

右鏡山は此邊にあるなるべし

新六帖―新撰六帖、前に出づ
梁簡―棟簡、前に出づ
攝社―相殿
赤烏―太陽、次

らんといふ。
○推古紀又聖徳太子傳に見えたる人魚塚は、小野村といふにあり。天智紀に「近江國置レ牧放レ馬」と見ゆる其牧は、岡本より東の山をいふ。同紀「天皇幸二蒲生郡匱迮野一而視二宮地一」とあるは、今檜物庄とて、日野近き十二村の地名なり。新六帖に光俊朝臣、

近江なるひものの里の樺ざくら花をばわきて折る人もなし

といへる所なりとぞ。
○日野大宮といへるに紀貫之大人の梁簡銘あり、本書はいつ失ひけん、今ある所寫したるものなれども、いと古びて蟲ばみたり。近年其攝社を再建せる時、はからず取出せりとなん、乃ち左にしるす。

天慶八年梁簡銘

大嵩社者。
天穗日命。神世之古趾也。於レ是
欽明天皇御宇六年。觀レ瑞以創二祠於錦嶽一。其後
天武天皇白鳳甲申。仰レ德更作二時於筱谷一。而奠儀竟備矣。雖レ然赤烏早翔兮。春雨

塋―墓
蹄闕の石―牛馬の出入を禁ずる標石

帝の御父市邊押磐皇子の陵墓音羽村といふにあり、土人御墓とよび、又御廟野と稱ふ、塋前に蹄闕の石あり、牛馬此内に入れば忽ち斃ること、今もいちじるし。此皇子は雄略天皇に害せられ給ひしことは、日本紀、古事記共に見ゆ。はじめ安康天皇國を傳んと思しけるを恨み給ひて、近江來田綿蚊屋野に狩せんと陽りて伴ひ出で、射殺し給ふなり。其蚊屋野といふ所いづことも知らず、蒲生野は此後天智天武の御狩も有りしかば、此野の古名にやとおもふ。又皇子と共に殺されし佐伯部賣輪が骨と雜りて、髑髏の外は分ちがたきをもて、雙陵を起て、葬儀無異と日本紀には見えたるを、今在るところ一陵のみ。古事記には唯蚊屋野の東の山に御陵墓を作るとのみ見ゆ。是正しき歟。その東山は今の音羽村ならん。昔はおよそ日野のわたり大山の岬にて山中なり、また蒲生野に薄りてこほし塚といふ里有り、是もと害せられ給ひし時、御骨を馬槽に入れてうづむと古事記にいへる所、改葬の時こぼちし故こぼち塚といふを、訛りてこぼしとは言ふならん。今鬼が窪といふ所あるは、皇子が埳を誤れりとぞ。參考太平記に惡事高丸がこぼち塚とあり、義經記に田村丸高丸退治の事を引けども、正史に見えざれば、こは僻事とおぼし。はた此邊より日野わたりまでは三里ばかりを隔てたれども、大かたに東の山とは書かれたるな

田村將軍—坂上田村麿

あまさへ—あまつさへ

過ぐる故に、其上の山に森一村見ゆるを御陵なりと誤るが多し。彼森は山神を祭れるなりといへり。さしもの眞淵も彼山上の森を御陵なりとおもはれしにや、萬葉考の書きざまにて察せらる。醍醐に醍醐、朱雀兩帝の御陵も唯かたばかりにおはします。猶此わたりに皇后、大臣の陵墓の所在を失するも多し、

○山科栗栖野に田村將軍の塚は杉一株たてりしが、田の上におほひて障なりとて伐らんとせしに、眼くるめきて伐りえず、祟なるべしと畏れて止みぬ。其後自然に樹より火出でて燒けつれば、農作に害なくなりぬとぞ。神靈たふとむべし。將軍は奥羽の蝦夷を歸化せしめ、朝家に大功の良臣なるを、世には鈴鹿の妖鬼を討ち給ひし浮說、清水建立の由緣のみを傳へて、大功は知る人尠く、あまさへ其古墳さへ微々に、しるしの樹燒亡びぬるは歎くべし。又遍昭僧正の墳の花山にあるも、石塔は失れぬ、これは一年茶事を好めるものの取來りて己が庭に居ゑたるが、祟有りしかば畏れて本國寺とやらんへ納めしとぞ。古物の貴きを知りて、古人の尊むべきを知らず、祟をおぼえても、もとへかへさゞるが如き不敬の所爲惡むべし。

○門人淡海、日野濱崎望海、其近境の古跡を話せし內、耳に留るを擧ぐ。顯宗、仁賢二

御しるし—御墓標

譽田陵—應神天皇の御陵

のほとりに、垂仁天皇の陵、池ひろく山の姿おもしろければ、土人蓬莱の丸山といひならはして、陵なることをわきまへず。おのれかしこに遊びし時、此由をいひさとせしかどもうけがはず。安康天皇の陵も近くて、是は兵庫山とよぶ。又右に擧ぐる大江の坂の西沓掛村のはしつ方に酒呑童子が首塚といふものは、桓武天皇の御母高野氏贈皇太后宮の御しるしなり。世遠く隔たればとはいふものの、一王萬代の國に斯くしも謬るべきにはあらぬものをと、いともかしこし。平安城開闢の桓武天皇の陵だに、深草の東谷口といふ所の人家の後に、それともなくて纔に殘れり。近年桓武天皇と記す石の表たちて知らるるのみなり。其傍に南へ流るゝ川あるは、めぐりの堀の名殘にやあらん。此陵などは殊に嚴重の御構へ有るべきものをと思し。又光孝天皇の陵仁和寺の西田間に大樹の松あるのみ、封境いくばくもなし。此外おのが知る所にて嚴重なるは、和泉百舌鳥野の仁德天皇の大仙陵、又攝津に繼體天皇の藍陵、是は芥川の西面にて、今いふ藍村よりはやゝ北なり。河内に譽田陵は御社あれば人皆詣づ。されど是も陵の上へ人をのぼすはおほけなき事ぞ。また山科に天智帝の陵は、御廟野の名かくれなけれど、陵は小くして傍に小社有り、鳥居に天智天皇と記す。三條の通衢ながら、人皆陵の所へ立ちよらずして行き

護法―佛法守護

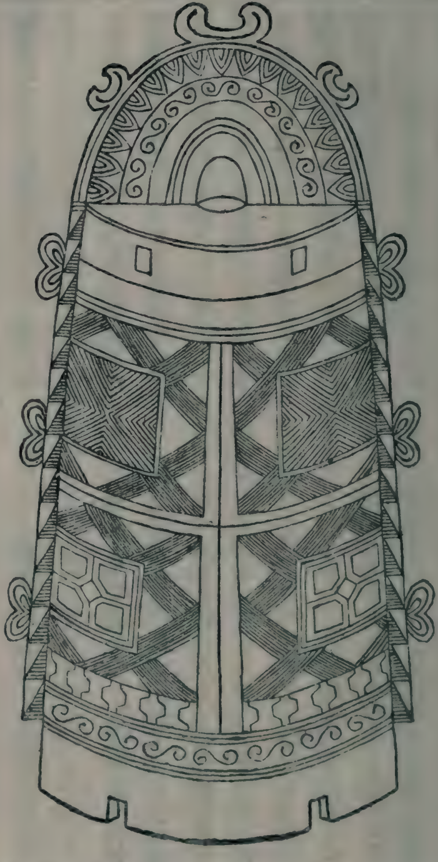
稻田姫―櫛稻田姫、素盞嗚尊の蛇退治の神話にて有名なる御方、下文も其話に基く

にして、中には抹香のごとき砂ありて、金牌に記せる所、此砂釋尊靈山にて說法し給ふ會座の物なり。

聖武帝護法の御志をよみして贈り奉るとなり。三戒檀ともに此金牌砂等定めて有るべしとぞ。

○水戸宍戸（苗氏にもありて、宍と書くは誤りなり。肉と同字にて、國訓しゝといふなり。）といふ所に、稻田姫を祭れる小祠あり、其邊の崖崩れたるを修めんとするにあたる物あり、何ならんと掘りて見れば、大なる甕のごとし。彼鋤にふれて缺けたる所を取りあげ見れば、大なる齒骨なり。猶此甕のごときもの限も知られず、齒も隨ひて數あり。官の檢を得て此齒を奉りしが、一枚の重三貫五百目なり。彼の甕のごときは龍頭に決す。猶掘れば全體顯るべけれど、益なしとてやみぬ。傳說なければ由緣は知らねども、稻田姫を祭れるも、もしくは此龍の妖を鎭めんがため、八股の蛇の故事をおもへるにやと、かしこに仕官せし人かたりぬ。

○大和三輪と柳本の間に箸中村といふ里中に箸塚といふは、倭迹々百襲姫の御墓にて、箸をもて御陰をつきてかくれませし故に箸の名あり。事は日本紀崇神天皇の巻に見ゆ。然るを土人昔ありし長者の箸を埋めし所といふは、いともかしこしや。又添下郡招提寺



ば、神慮に恢はざることを思ひて、取除けてもとの空社となしたる趣なり。此文眞名にて甚だ拙きものなれば今不レ舉、所の繪圖はこゝに出す。かゝる舊地も時有りて顯はるゝは文明の化なりけり。

○過ぎつる四年壬子歳閏二月十五日より十七日に及び、三河國渥美郡神戸鄕谷之口村の池塘を修補するとて堀出せし一奇物有り、銅鐸高三尺四寸、厚二分、重九貫目なるもの一枚、又重八貫目なるもの一枚、同じく地紋の彫刻甚だ密なり。

昔貞觀二庚辰歳八月十四日辛卯。三河國獻二銅鐸一。高三尺四寸。於二渥美郡村松山中一獲レ之。或人曰。是阿育王之寶鐸也

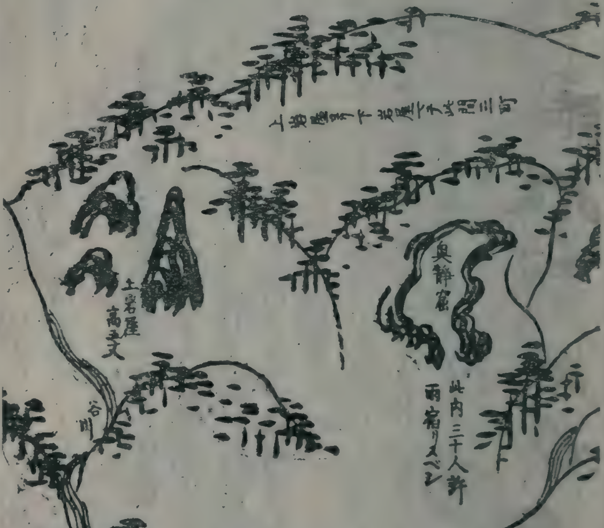
と三代實錄に見えたる其村、松山中も此谷の口を去ること今の里數四里に不足とぞ。又近年小き銅鐸を此邊より掘出すことは時々有りと云ふ。貞觀の時既に分明ならぬ物なれば、今考ふべからねど、古佛寺の物ならんとおぼし。千載を經てふたゝび出でたるも奇なり。

○筑紫觀音寺は日本三戒壇の一所にて太宰府にあり、今は荒蕪に及べり。然るに一年封境をだにもさだかにせんとて治め繕ひしに、地中より壺一つを掘出せり。壺のさま壯麗

銅鐸—銅の大鈴、古へ敎令を宣告するに始と終とに用ひたり

阿育王—古の印度の王、又無憂王、阿輪迦王とも云ふ、性殘忍なりしが後に佛道に入れり

三戒壇—京都の東大寺、下野國の藥師寺、筑紫國の觀音寺の稱


奥静窟
此内三十人許
雨宿リスベシ
土岩屋
谷川


石見國邑知郡岩屋村
静窟圖
向岩
高一丈余
下ゟ岩屋
高二丈許
此下三千人許
雨宿リナスヘシ
静窟
此中二十人許
雨宿リナスヘシ
鏡岩ヨリ
一峯岩屋
ヘ十三町
登ル
谷川
鏡岩
高二丈五尺
横二丈五尺
此所村里
人家有

棟簡―棟上の際に其の家の建前の年月及び建築者の姓名を記して棟裏に打ちつけ置く木札

○萬葉集第十三の長歌に、「處女等之。麻笥垂有。績麻成。長門之浦丹。（中略）吾妹子爾。戀作來者。阿胡之海之。荒磯之於丹。（下略）」といふ長門のうらを、安藝國なり、阿胡之海は住吉也といふ注あるを、長門人のいふ、阿胡は長門にまさしくあれば、長門の浦といふも他國にあらざるべしとなん。此長歌げに一意にて、安藝より住吉までをはるかによめりとも見えず、只戀ひつゞくればにて、旅行體とは見ゆれども、長門一國にて足るべし。

○萬葉集に、

おほなむち少彦名の作りけん靜の巖屋は見れどあかぬかも

とあるしづのいはや何方とも知られず、抄物にもいはれず、或は播磨の石寶殿をそれなりといふは非なること論なし。然るに近年小篠道冲といふ人、石見國濱田侯の臣にて、京師逗留の日話せられし趣を傳へきくに、其國邑知郡に靜窟といふもの有り、ゆゑに其鄕を岩屋村と號す、鏡岩といふものの下に小社ありて、靜權現と稱す、侯命によりて社を開くに、内に物なく、棟簡に少彦名神と書けるのみ。且元錄年間に書ける文章あり、其意は、里人少名彦神といひならはせども、社中物なき故に、一旦藥師佛の鑄像の土中より掘り出せしを安置せしに、其鑄佛を蟲喰ひける、いとあるまじきことなれ

○朝鮮國初の主を檀君といふ、これ素盞烏尊にておはしますと、對馬にての話なりとなん。其素尊の朝鮮へ渡り給ひしといへる所、對馬の西北にて飛前と名號く。又神功皇后朝鮮を歸化せしめて、對馬より九州へ歸船まします所も飛前といふ、これは國の南なりとぞ。私に按ずるに、素尊一旦新羅へ渡りたまひしといふことは、神代紀中の一書の說に見えたり。

○尾張の津島の社司眞野時綱といふ人書ける津島の祭の記に、昔より津島の渡といふはこゝなりと書けるはいかにぞや。

在根良つしまのわたりわた中にぬさ取りむけてはや歸り來ね

といふ萬葉集のうた、洋中ならではよしなし。大和の都より異國へ渡る人、何のために東國の尾張に至らんや。無稽の言論なけれども、又まどふ人もあれば記す。

○在根良のこと、ありねよしと古くよみ來れるを、ありねらと訓むべしとも近來說有り、其義も說々あれども、とても今をもては知るべからぬことなり。凡そ發語は、唯知らぬことにてさし置くべしと京極黄門の說なるを、契沖は肯はれず、其義を考へらる。是につぎて荷田春滿、加茂眞淵、近歲建綾足も著書有り、されど知られぬこと多し。予は強解を欲りせず。

在根良―對馬の枕詞

無稽の言―根據のなき言

京極黄門―藤原定家

立ちわかれ云々―「立ち別れいなばの山の嶺に生ふるまつとしきかば今歸りこむ」古今集離別歌
由良の戶云々―「由良の戶を渡る船人梶をたえゆくへも知らぬ戀の道かな」
九原―冥途
佐比河原―賽河原

に、保昌朝臣のがり色々の玉をめしに遣したれば、まゐらすとて和泉（式部なり、時に保昌の妻なり。）添へたり。

　數ならぬ涙の露を添へてだに玉のかざりをまさんとぞ思ふ

こはある人考へ出せるを擧ぐ。是より後に玉の浦の名を負せたるか、もとよりしか言ひて玉石を出せれば、召し給ひける歟、知るべからず。此地名はますます人知らざることなり。凡そ同名は其歌の作者の事狀と國所のつゞきによりてわかつべし。作者の事狀とは、「立ちわかれいなばの山」の歌は在原行平卿因幡國司なりしかば、美濃の稻葉山にあらざること明けく、「由良の戶を渡る船人」の歌は曾根好忠丹後掾なりし程に、紀伊の由良にあらぬこと知るべきがごとし。好忠の歌は戀によせて身の述懷とぞ。

○山城紀伊郡に佐比の里あり、三代實錄貞觀十三年閏八月に制有りて、百姓送葬の地を定め給ふ條に、下佐比、上佐比をも其地と定めらる。佐比寺は延喜式にも、「九原送葬之輩更留二柩於橋頭一」と見えたり。世に佐比河原を冥途にて小兒の集る所とし、且地藏尊是を化置し給ふといふは、此葬所に小石塔多く、或は石像の地藏尊もありしよりいひ出でしならんと、或人のいへるはさも有るべし。

景物―四季折々の風情を添ふる物

ひりへれど―拾ひたれど

保昌朝臣―藤原元方の子、剛膽を以て知られたる人、其巨盗袴垂を瀕易せしめし話の如き、最も人口に膾炙せり

ひて丹後に有りしほどなれば、そなたなること知るべし。

○右のたぐひにて玉のうらといふは、萬葉集にみゆる所二所あり。紀伊は後世の名所集にも擧げたるを、備後國なるはよく考へず。紀伊に紛らはしきも、此集第十五巻に短歌、長歌に見えて、前後國の次地名のついで左のごとし。短歌は遣二新羅一使人の歌の中、乘レ船入二海路上一八首の第二武庫浦 攝津 第三いなみづま 播磨 第五多摩の浦、第六神島 備中、但レ八雲御抄宗祇抄紀伊といふは非とぞ。第七、第八はむろの木をよめる、これは其頃名だたる備後の鞆の浦の景物なり。又屬レ物發レ思長歌、前にみつの濱、みぬめ 以上攝津 淡路の島、明石のうら、家島 以上二所播磨 次に多麻の浦に船をとゞめてとあり。反歌にも、

玉のうらの沖つ白玉ひりへれど又ぞ置きつる見る人をなみ

とあり。斯くさだかなるに、もとを正さゞるは中世已後の弊なり。近來彼浦の人うらみて此記を予に需む、こは尾道の舊名なりとぞ。又丹後にも橋立の西成合の邊、保昌朝臣の館のあとといふわたりをしかいふとなん。そこより實に玉のごとき小石を得たり。紀伊の國熊野近き錦の浦より得たるものと類す。さて此保昌の館の邊昔より此玉石を出せる歟、榮花物語玉のかざりの巻に、「枇杷殿うせ給ひて後御佛つくらせ給ふ、御かざりの御れう

大納言旅人—大伴旅人、家持の父

たぐひて—ついて行って

帖に光俊、

ふる雨にくるすの小野の小鷹狩ぬれしぞ家の始なりける

とよめるは宇治郡なり。蒿蹊云ふ、是は故事によればなり。三代實錄二十六又四十二、延喜式第十四主水司式氷室一所と見えたる、又源氏物語に見えたるも、倶に愛宕郡栗栖野なりなど、勝地一覽に委し。また萬葉第六大納言旅人卿、

さし杉のくるすの小野の萩が花ちらん時にし行きてたむけん

の歌は、大和忍海郡栗栖と和名に出でたる所なるべし。然るを世の名所集山城に入れたるは誤なり、本集にて辨ふべし。

○大江山二所あり、山城、丹波の界樫原の西に俗老の坂と稱ふるもの、大江山の坂を誤るなり。和名抄「乙訓郡大江」とあり。慈鎭和尚の御歌にも、

大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の西に落つるかりがね

とあるは是なり。此山つゞき小鹽良峯今作善峰と南へかけて都の西に屛風を引きたるごとし。又丹波、丹後の界なるものは酒呑童子といふ賊の籠りし所にて、今千丈ヶ嶽といふ。「大江山いくのの道の遠ければ」と小式部内侍のよみしは、其母和泉式部保昌朝臣にたぐ

松葉集—松葉名所和歌集十六巻、宗恵といふ連歌師が萬治三年に編する所也

新撰六帖—家良、爲家、知家、信實、光俊の五人が六帖の假字にてよめる歌集

ふ里にて、其縁記をこの頃知る人に尋ねて得たり。安吉山雪野寺元明天皇和銅三年行基菩薩開基にして、龍宮より出現せしといふ名鐘有り、是は光仁帝寶龜元年なりとぞ。一條院勅して龍王寺と改め、鐘樓に龍壽鐘殿の宸翰の額を賜ふ。今はまた雪野寺とよびて叡山安樂家の律院なり。彼延喜式に出づる野寺は、今其舊趾を知らず。歌によめるは果していづれにや、姑く錄して例の後人の考索に委ぬ。

○船木、松葉集に美濃とし、船木の濱は近江とす。大嘗會の名所にとられしは近江分明なり。又、「さゞ浪や舟木の山の時鳥」といふ歌を美濃に入れたるも、論なく松葉集の謬にて、さゞ浪の詞近江によしあり。さて此近江に船木崎とて高島郡にあるは、人多く知れる所にて、是ならんと思はるゝを、和名抄蒲生郡と見えたれば、八幡の近邑に船木村といふものなるべし。

○栗栖野山城に二所人皆知れり。契沖阿闍利和名抄を引きて、愛宕郡栗野久留須、又宇治郡小栗、乎久留須所の名凡そ二字なれば、栗野は栖字を略してくるすと野の字は加へながらよまざるなり。たゞし假名付の乃字落ちたるにや。小栗は小栗栖なるを、これも栖字を略きてよみ付けたるなり。くるすの小野と歌にみゆるは、皆愛宕郡なるをよむ。唯新撰六

夜光の玉—述異記に「南海有ㇾ珠、即鯨目、夜可ㇾ以鑒、謂ㇾ之夜光」

小野—山城國
野上—美濃國

かゝればもとは三上山の秋月、石山の晩鐘、三井の落雁と思召しけるを、御製に憚りて次を追ひて改め給ひしなるべし。予正に知る、此石山の月、中秋の頃かつて湖面にうつらず、遙かみなみにあり、紫女の傳說もよく地理を知らぬ人のいひ出したることならん。此源氏此寺にて作られたるといふ說の非は、既に安藤爲章の紫女七論に委しければ、こゝにはいはず。八景も此浮說により給へるにあらざること、此御自筆にて明らけし。湖水の月を賞する人は三井寺、堅田へ行くべし、石山は唯當におきては他に無雙とおぼし。たゞしそれも眞盛は三日ばかりに過ぎずといふ。おのれはからず其盛にあひて、此川添の家に宿りたるが、水面のみか、樹木の間、たゞ夜光の玉を貫きかけたるごとくにて、眼をおどろかせし。或は舟を買ひて此川下の大日山といふまで行きて見る人あれども、眞盛にはそれに及ばず。

○野寺は、いづくの野にてもある佛寺をいふも常ながら、又所を定めていふは、例せば小野、野上、高砂、磯邊のごとし。契沖師の勝地一覽に、延喜式大膳式下三十三に、「七寺盂蘭盆供養料、東西佐比寺、八坂寺、野寺、出雲寺、聖神寺」といふを引ける、予按ずるに、此は洛外なり。然るに諸名所集野寺近江とす。其所は今正しく蒲生郡川守とい

りしに、雷鳴頻なりしかば、畏れて領主津和野侯へ達せしにより、命有りてもとの如く埋め、石の垣など嚴重に構へられたり。此戸田は大人のかくれ給へる所なりといひ傳へしが、これを掘り出していよ／＼其葬送の所なりといふことも知られぬとぞ。又其近き地より朱の多く入りし壺を掘り出せしことあり。思ふにこれも其族の人の骨を朱もて歛めたるにやあらん。此わたり邊鄙にて、貴人はもとより世に知られたる人の住みし事は、此うしより外に聞えねば、紛るべくもあらずやとぞ。私に曰く、もし石見などの任の内に卒して其國に葬りし人も有るべけれど、それは知られぬことなり。

○近江八景は唐山の八景に擬せられしは勿論なり。其うち石山の秋月といふは、世に傳ふる紫式部此寺にこもりて、八月十五夜湖面にうつる月を見て、須磨、明石の巻より筆をたてそめて、源氏物語を成せりといふによりて題せられしものと思ひしを、此ごろ一知己のもとにて、近衛三藐院殿下の御自筆の此八景御歌の一巻を拜見せしに、その御奥書左のごとし。

最前三上山の月を主上にあそばし候はんとの事故、それをば用捨故、石山になほし候。石山の鐘をば三井になほし、落雁を堅田に改め候。法談の間轉覽もやと僻作書付け候。（花押）(御花押なり)

唐山の八景―支那の瀟湘の八景

三藐院殿下―近衛信尹、近衛流書風の祖也、初め織田信長の諱字を受けて信基といひ、後信輔と改め、又信尹と改む

柿本の神—柿本人麿

總髮—男子の月代を剃らず全髮を束ね結びたる髻

づれば、ともに詣でたるに、蕎麥切をおびたゞしく掛けて備へたり。あやしくて其由を問へば、「蕎麥喰の神と申し、萬の祈もしるしある神にて、此喰物をめで給へば御名にも呼び、又里の名も山蕎麥喰村といへり」と答へしがをかしかりしと語れる。是を直好の考に、凡そ國の名に山脊、河內、里の名に山口、山中などいふ例にて、山の傍にあれば山傍村といひけんを、喰物の蕎麥に誤りて喰の字をさへ添へ、そこに祭る神なればやがて此名を負せ奉るにや。かくいやしき名をもいとひ給はず、其祭るものをも受け給ふは、神の御心廣きなるべしといへり。おもしろきかうがへなり。

○石見の人いふ、柿本の神の舊跡高角山の外濱千軒內濱千軒有りて、北海一の大湊なりしが、元龜年間の津浪にて山崩れ家も人も亡びうせし後、半里ばかりを去りて今の所にうつせり。此時神像も松の枝に乘りて海に漂ひ給ひしを取りあげたり。其岸を松が崎といふ。神靈たとむべし。今の社の木像即ち是なり。（座像にて常人よりも大なるほどなり、予も昔繪にうつしたるを拜みたり。）もとの社の有りし寺は行基寺といひ、（行基菩薩の開基なり）後に人麿寺ともいひしとぞ。今の寺は直福寺と號く。又今の社より三十丁計の所に戸田といふ里あり、柿本うしに仕へし子孫家名氏とて住めり。（此訓奇なり、定めてゆゑ有るべし、今も古風を存して總髮なりとぞ。）其者近來家富みて地を廣めし時、二間計の石棺を堀り出した

海道記—東海道を經て鎌倉に至りし紀行

道隆公—藤原道隆

といふ墓有りて、清女なりといへどもたしかならず。又阿波の里の海士にも、清女入水せるを埋めたるといふ墓あれども、ます〱信じがたしとなん。又世に松島の記といふ寫本ありて、清女おちぶれて後陸奥へさすらへて書かれしといへども、さしたる證も見えず。筆のさまはよきものなれども、別の官女にや。尼になりさまよひし由なり。これはいくたりもあるべきことにて、例せば、一世に海道記といふ書作者知れざるが、貞應二年とみゆるを長明と誤り傳へ、又仁治三年源親行記行（或は父光行ともいへり）をも印行の本に長明と記せる類なるべし。おのれおもふに、讃岐には清女の所縁ある歟。象頭山より一里餘の所にて道隆寺といふ寺に古墓ありて、道隆親王と札を立てたり。親王は必ず誤にて、中關白道隆公なるべし。此寺の造立の主故に、即ち寺の號に呼ぶならん。此關白の莊園この國にありて、其御女定子皇后に仕へまつりし清女なれば、皇后かくれさせ給ひ、關白の御系も衰へ給ひて後、清女も此ゆかりにつきて此國にさすらへけんは、ことわり成るべし。

○吾黨の人坪坂直好、蕎麥喰社の辨といふ一篇をしめさる。今要をとりて記す。ある人越後の高田より山一つこなたの里に至りて見れば、折しも其產土神の祭とて、人むれて詣

しめさん―見せしめん
式―延喜式
とはれんなれど―訪はるゝ譯にはあらねども

吾妹子にいなのは見せつ名次山角松原いつかしめさん

とある其名次山は、西宮のうしろの山といふ。式にみゆる名次神社、今は石もて作れる小社ながら、やゝ大なる鳥井を建てて其柱に其名を記す、たがはざるべき歟。予近年門人のかしこに寓居せるをとひて其案内にて知れり。角の松原は此西宮の東の端尼崎道につとと訛れる所なりといふ。しかるに猪名野は河邊郡にてやゝ東なれば、西より登るにはいまだ見るべからず。いぶかしきにつきて思ふに、もし是はいなみのことにて、みの字落ちたるか、或は印南と書けば南をなとばかりよみしか。然らずば此歌は下る時にて、のぼる時の歌と竝べ記されし歟、或は名次山、角の松原などこゝにはあらざる歟、いづれにもたがふこと有るべし。

○讃岐象頭山の鐘樓の傍に石の誌有りて、清少納言の古墳と傳ふ。いつの比とかや、此墳を他へ移さんとせしに、金光院といふ坊の住侶の夢に一婦人來りて、

うつゝなき跡のしるしを誰にかはとはれんなれどありてしもがな

と唱ふと見てさめぬ。さてはまことに清女の墓なるべしとおもひて、もとのまゝにさし置きたりとぞ。又同國白鳥といふ所（日本武尊の社います、所の名は彼白鳥に化し給ふ故事によるとぞ。）の鏡が峯といふにも、京の女郎

源親行紀行―東關紀行

布薩―毘尼母論に「何名㆓布薩㆒云云、能斷㆓所作㆒不善法、斷㆓煩惱㆒斷㆓一切不善法㆒、故又云淸淨名㆓布薩㆒」

迄おはしますべき餘年なかるべし。

○野路の篠原は近江東街道の大路なり。野路は草津の西にて、玉川の名殘絶々なれども、里の名によべばたがはざる歟、篠原といふ所はなし。中山道守山鏡の間に大篠原小篠原といふ里ありて、平宗盛父子の塚もあれど、是は野路より二里餘もへだたり、しかも東街道の順路にあらねば、古人も言をつゞけていふべきにあらず。

行く人もとまらぬ里となりしより荒のみまさる野路の篠原

と源親行紀行に見えたれば、篠原は野路につきたる名ともいふべけれど、猶隣りたる地名にやとおぼし。これにつきて一考有り、草津といふ名ふるきものに見えねば、此草津の舊名篠原にやあらん。其故は、草津常善寺といふは石山より十八年前、天平寶字元年の草創にて、開祖は同じく良辨僧正なり。中興興正菩薩建長年間此寺にて布薩をひろめ給ひしより、里の名をふさつといひしを、訛りてくさつと呼び來れるよし、彼寺の緣記に見ゆ。然れば其もとの名なくてはあるべからずと思ふより、此說をおもひ得たり。猶後勘をまつ。

○萬葉集中第三高市連黑人其妻を伴ひて西國より登る時の歌二首の中に、

親王―惟喬親王、小野宮と申す、文徳天皇第一の皇子、藤原良房を憚りて帝位に即かず、僧となりて小野の里に居給ふ
さずき―棧敷、假に構へ造れる床座敷
小野毛人―小野妹子の子
東涯―伊東東涯

り。これが中に北の小野の東北に棧敷が嶽といふ山ありて、親王のさずきして遊び給ひし所といふ。其麓の東河内といふ里にみこの御社ありと、山州名跡志に記せる、それは今は其所の藥師堂の内にうつし据ゆ。此堂もみこの御建立といひて、山中にしてはやゝ大也。親王の牌子も佛前に安ず。予遊びて知れり。是より半里ばかり山路をへて岩屋不動堂に出づるなり。然るに伊勢物語、古今集などに、比叡の山の麓といふにはかなはず。されば比叡の麓にはしかいふ所なしと名跡志にもあやしぶ。是はよく考へざるものか。一乘寺村の北に高野といふが舊名小野なるべし。高野河の堤の道を小野畷といふ。又近世こゝより小野毛人の墓誌眞鍮の牌を堀出せしこと、名跡志及び東涯の盍簪錄に見ゆ。村中の寶幢寺に納めしを、祟ありしかばもとの如く土中に埋めしとなん。然れば此所か。又大原の小野に親王の御社ありて、例祭九月とかや。是も横河の下にあたりて比叡の麓といふによしあり。高野には親王の舊跡の傳へはなし。畢竟知るべからぬことなれども、錄して後勘に委ぬ。

○東近江山中に政所君が畑などいふ所、維喬親王のおはしませし故の名なりといふは、おそらくは謬傳なるべし。みこは御出家の後いくほどなくかくれ給へば、かゝる所

勸請—離れたる地の神體佛體を移し祭ること

好士—風雅の人

たき見物は、大和はいふに及ばず、おそらくは見ぬもろこしにもあらじとぞ思ふ」など書かれしを、夫より五十餘年をへて、予二十歳の頃ほひに初めて見にまかりしには、纔に六田よりのぼる道の所々竝木の櫻のみにて、谷間は皆杉になりぬ。又近年登りしには、ます〳〵少く、纔に俗に一目千本といふ所のみ集りて數株あり。民唯利をのみはかりて、櫻の枯るゝを幸とし、或はひそかに根をやきて枯らしめ、代ふるに杉をもてすなどもきけり。又嵯峨の嵐山は昔吉野をうつされて藏王權現を勸請あり、千本の櫻を栽ゑられし所なるを、貞享の年間に著せし山州名跡志には、「土地にふさはぬにや、今はさくらなし」と書けり。さるを近世は櫻あまたにて都下の壯觀となりぬ。是も二十年前迄は唯好士のみ遊びて、大かたの人は御室に聚り、帷幕數十百をもて算へしに、今かしこはおとろへ、大井の川邊煩らしきまで茶店軒を竝べ、水上は舟連り絃歌かまびすしく、なべてこゝを花の湊とす。世界の變遷かくのごとし。

○惟喬親王のおはしませし小野は、人其所をさだかにせず。凡そ山城國中に小野と名づくる所多し。南醍醐のこなたの小野、北鷹峯通の小野はあまねく人知れり。又市原野の邊の小野は小野皇后のおはしませし所、淸原深養父の補陀落寺の舊跡などもある所な

ふじの山云々ー古今集の序文

秋津の野ー大和國、秋、呼子鳥の名所

やまつみー山神

後京極ー藤原良經、家集を月清集といふ

「ふじの山も今は烟たゝずなり、長良の橋も造るなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける」と昔もなげかれけるかし。

○古今集の序に、「よし野の櫻は人麿が目には雲かとのみなん見えける」とあれど、此歌の知られざるのみにあらず、萬葉集中吉野にことさらに櫻をよまれたる歌見えず、はつかに此大人のよし野の宮にいでましの時の長歌に、「花ちらふ秋津の野べ」といふことば、又一首に、「やまつみのまつるみつぎと、春べは花かざしもち、秋たてば紅葉かざせり」などあれど、これは櫻ともさだめがたし。されど、

むかし誰かゝる櫻のたねを植ゑてよしのを春の山となしけん

と後京極のよみ給へるごとく、其始は知らず、既に古今撰集のさきより、もはら櫻に名だたる所なりけんかし。貝原翁元祿九年に記されし大和廻りの記に、「六田の方の麓より奥の院まで百餘町の間、民家なき所は左右皆竝木の櫻なり。又左右の傍も下の谷も櫻多し。まれに杉あり。二三月は花の世界といひつべし。中略山僧曰く、此四十年前は今よりも此山に櫻多しと。中略よし野の町よりも、向ひ左より右方凡そ二十町ばかり唯一目に見えて、皆花の林なり。おもしろさたとへて言はんかたなし」など、猶言多く、「かうやうのめで

滄桑相變ずる―「滄海變じて桑田と爲る」
猪名の湊―攝津國

のれかしこに遊びて中山と尋ねしに、西大寺の西一村を中に隔てて十四五丁ばかり有りといひつ。又伏見を尋ねしに、絶えて知る人なかりしが、からうじて一人、興福院村といふ上の小山を伏見山といふと教ゆ。小山は卽ち岡なり。然らば其興福院村卽ち伏見の里にや。ついでにいふ、此興福といふは尼院にて、一名弘文院、もとはこゝに有りしが、寛永年間添上郡にうつされぬとぞ。其名南都中の興福寺に紛らはしければ記す。

○土地の名改りて知られず成り行くのみならず、變遷も亦古今いくたびぞや。滄桑相變ずるは仙人ならでは見るべからねど、佐々木盛綱が渡りし藤戸も今は陸地となりぬ。鳴海も海遠くなりて宿驛の名に殘れり。猪名の湊による波の音も、池田伊丹の市人の聲にかはるとか。住吉、堺のうらなどの埋り行くを見れば、所々に此類多く侍らんかし。夫木集に俊成卿のうた、

　野邊はみな嵯峨野とりべ野今はさと遠きのべこそ野は殘りけれ

新六帖に爲家卿、

　いかにせむ内野の芝生年をへてあらぬ作りにせばくなるよを

などありのまゝによみ給へり。其遠き野の武藏野、宮城野などさへ今は里多しとかや。

つら杖—頰杖

秋篠の—新古今、西行法師の歌

貝原翁—貝原益軒

周齋は頗る和歌の名ありしが、少年より是を尋ねてやまず、或時又其わたりを過ぎけるに、一老夫鋤をつら杖にしてうちながめ、

　秋篠の外山のさとや時雨るらんいこまの嶽に雲のかゝれる

と高らかに唱ふ。周齋あやしみて、さまに似ぬ風流の男かなと思ひて立寄りて、「いかなる人ぞや、吾は其外山の里を知らんと思へること久し、ねがはくは敎へられよ」といふに、農夫よろこびて、「吾も亦かく問ひ給ふ人を待つこと久し。吾は物も知らぬ賤者なれども、若き時仕へし人此ことをよくおぼえて、吾死なば又知る人もなく成らなん、をしむべし、汝心ある人を待ちて傳へよと、ねもごろに示されしかば、年頃さるべき人をだに見れば、必ず此歌を唱へて試み侍りしが、幸に尋ね給ふるにあひて、主の本意を今果せり。其外山の里を今は中山とよぶ、一旦此里の東に外山氏の人有りしかば、是に憚りて中山と呼びかへぬるなり、あるまじき事にて古き名所を失ひぬと申されぬ」と語りしとぞ。按ずるに貝原翁の大和路の記には、「秋篠の西なり、名木の楓有り」と記さる。然れば此呼改めしは元祿の中頃よりこなたにや。さて賞すべきは此農夫が主の遺命を忘れず、數十年心にかけて常に此歌を唱へて、尋ぬる人を待ちしなり。其主はいかなる人なりけんとゆかし。お

親長卿記—後花園帝の朝に仕へ權大納言に至れる甘露寺親長の日錄、文明二年九月より明應七年八月に及べり

資益王記—神祇伯たりし王の文明六年、同十三年、同十六年の等大要記事

拾芥抄—藤原實熙の著

ば社字よりうつりて、木篇に從ひし杜字をも用ふるならん。もりの言はまもるにて、社を守る意とおぼし。漢の書に杜字に此意かつて見えず、甘棠の類にて、一種の木の名のみ。因にいふ、社字もかしこには社稷と列ねて、社は土神なり。こゝになべて神のいまし所をまうす意にあらず。やしろの國語は屋代の謂ならん。漢にては廟といふがこれなり、禹廟關帝廟の類めづらしからぬことなれども、聊童蒙に示すのみ。

○橋本氏の話に、三條橋東屠者（今穢多と書くは、唱へあやまりて其まゝに字を付けたるなるべし。和名抄に屠者と書けり。鷹隼の爲に餌を取る意なり。）の居所をあまべといふは、餘戸の略語なるべし。和名抄諸國の郷名の下に、餘戸といふもの有り、今いふ出村のことにて、屠者この出村に居たれば、やがて此名を負するにやとぞ。（今印刻の和名抄、餘戸にかなを付けざれば、國訓に何とよむことを知らぬ人多し。あまりべとよむべしとぞ。）

○落西西院村高山寺、もとは高西寺といへることは、親長卿記、資益王記にも六地藏廻のうちに見ゆ。此後の田の名にすないといふ有り。是は淳和院の略にて、此西院をさいと唱へ、淑景舍をしげいさと稱ふるに同じ。高西寺卽ち淳和院の離宮の地なること分明なりと、同じ人の話なり。按ずるに、拾芥抄に「淳和院北京號西院」とあり。

○大和の國秋篠の外山のさととよめる所、今知られず。然るに同國並松（法隆寺門を云ふ）の人藤川

あさぢふ、よもぎふ―淺茅生、蓬生

大宰氏―大宰春臺

○加茂眞淵氏冠辭考に、「あさぢふ、よもぎふなどいふふに生字を書くは假字なり。實は原字なり。萬葉に苧原茅原など皆ふとよむ。和名抄にも、攝津國東生郡味原郷、あぢふとよむ」と言へり。今私に按ずるに、原字には限らず、總て物の生ふる地をさしてふといふべし。日本紀には、粟田、豆田を、あはふ、まめふとよめり。然るにうつぼ物語たたこその巻に、「をかしき御文あさぢふにさしたり」とあり。ふの字心得ず、いかにとあやしみ思ひしに、其後おもひ得たるは、萬葉第七に、

をみなへしおふる澤邊の眞葛原いつかもくりてわが衣に著ん

とあるこの原字も添へたるものにて、眞葛を絡りて衣に著んといへるなり。又うつほとしかげの巻に、「岩木の皮を著物とし」とあり、岩の皮といふことは有るべからず、唯木の皮といふに岩を添へたるは、詞の勢なるべし。此類を漢にては帶說といふ。太宰氏が漫筆に、「或人曰易曰潤レ之以二風雨一也。と風豈物を潤さんや、帶說なり」と書けるも同じ。多きことを多少といふも類なり。

○名所に何の杜といふは、凡そ神社のある所なり。唯木のあまたある所と思ふは非なり。萬葉集中の歌、またなべて名所の杜の今さだかに殘れるも、社あるにて知るべし。され

夏に失ひて云々―夏は中國夷はえびすの國雅正の言語音樂の都會に失はれて却りて田舍に存するをいふ

せり。常にあわ雪は降るほどなく消ゆる春の雪とのみ思へり。それにても萬葉の歌聞えざるにはあらねど切ならず。これらも夏に失ひて夷にもとむるといふべし。

○予少年のむかし、人のいへることは、「圃をはたけといふ、けは毛にて、其作物蔬菜をいふ。地を指す時は唯はたといふべし。孔明出師表に不毛之地といふも、穀類蔬菜の不レ生處をいふにて知るべし」となん。其時はいとことわりに覺えしを、今按ずれば然らず。本邦にてははたけといふは、全く地をさす詞なること疑なし。和名抄曰、「暵玉篇呼且反。耕レ麥地也。唐韻耕田壠っ日本紀師說八太介」とあり。是はおもふに、日本紀仁賢天皇卷韓泉郎暵といふ人の名あるを引かれしなるべし。たゞし紀自注に「柯羅摩能波陀詠」とあり。詠字書誤とおぼしきを、或說には計の字ならんといひ、又似閑（契沖門人京人今井氏）著せる倭訓類林には、咳の字ならんと記す。おのれ又思ふに、此咳の字も亦傳寫の誤にて、該の字ならん歟。詠の言篇に基すればなり。いづれにもあれ、はたけなることは和名を證とすべし。又物語の類にも、源氏松風の卷に、「御莊の田はたけなどいふことの荒れ侍りしかば」とあり。うつほ藤原君の卷に、「てうだなさかどのの方は、しとみの下まではたけに作れり。殿の人上下鋤鍬をとりてはたけを作る」と見ゆ。古今通用の詞なることあきらかなり。

腰細の云々―萬葉集九に出づ

すがるなく―「秋の萩はら朝たちて旅行く人をいつとか待たん」古今集

猪養の岡―大和國

轉じたるなるべし。

○陸奥にては蜂をすがりといふとなり。是腰細のすがるをとめの古歌、又雄略紀に蜾蠃といふ人の名すがると訓ずるにあへり。後世すがるなくといふ歌を心得たがひて、鹿の事といふは非なる證とすべし。すがり、すがるは通ふこと論なし。

○近江彦根の陪臣大菅中養父、其主の領地を檢する時、或山家にて不納を責むるにつきて、其家の後山に林繁茂せるを見付け、「是を伐剪て代なさば、かく未納にも及ぶまじきを」と咎む。農夫、「いな、これ無くてはあわのふせぎ如何にともすべからず」といふ。「それは何の事ぞ」と問ひしに、「雪はつもる物なり、あわはつみて崩るゝものなれば、林をもて防がざれば家をうち倒すなり」と答へけるに、中養父は古義を好む人なれば、はじめて悟りぬ。萬葉集に、

ふる雪はあわになふりそ吉張の猪養の岡の塞ならまくに

とあるも正しく是にて、あわは降りて崩るゝ故に塞となりがたければ、あわにはふることなかれといふなりけりといへり。「凝雪は水氣ある故によくつむ、あわは密雪に充つべし。寒至りて強き故に、水氣盡きて輕し。されば、あわとはいふならん」と、上田秋成は釋

そへにとて云々—下句「あないひ知らずあふさきるさに」讀人しらず

を見れば、「有二遺味一者矣」と訓あり。是古きよみくせならん。然れば謠曲も呼法によりて古訓を存したりといふべしと、書林竹苞鵜鷄氏の話なり。

○橋本經亮の話に、萬里小路（今柳馬場と俗稱す）を、或は萬利とも書けり。里、利ともにてと訓むこと知りがたきを、田の水をとる井手を由理といふ由は井に通ひ、理は手とよむ例右と同じかるべしといへり。

○田舍にて田畑の事をのらといふ。萬葉集に大のら荒のら、古今集にも秋の野らと有り。此古言の殘りて轉じたるなり。又互の事を近江にてかたみと言ふも、かたみに袖をしぼりつゝなどの古言の如し。又そへにといふ言を用ふ。例へばさきの事はいよ〳〵違はずやといふ時、そへにと答ふ。いふにや及ぶとの意なり。古今集に、「そへにとてとすればかかりかくすれば」といふ歌の詞其もとか。古今は其方にといふ意と聞ゆ。古今著聞集に、文覺と壇光兩法師强力なるが不意に行きあひてすまひとりける所に、「おのれは聞ゆる文覺かなといへば、そへにといらへて、おのれは聞ゆる壇光かなといふ。又そへにと答ふ」といふ詞あり。是はいかにもといふ詞と聞ゆるを、近江の俗言にあはせて、互に聞及びたることなれば、いふにや及ぶと解すれば勢有りて、さも有るべくも覺ゆ。もとの詞の

位田—左右大臣以上の人の位階によりて賜はれる田地

淺香潟—淺香浦に同じ、和泉國

さと假名を付けたるさに、一點を誤り添へてきになりたるにやあらん。ひらかたを枚方と書けるは、枚字につめを添へたる誤は誰も知るべし。淀の隣村に一口と書きていもあらひと唱ふるもいぶかしきを、或人はいふ、「一はいなり、口はもらひと義訓せるか、いもらひとも稱ふるなり」といへり。備後國世良郡の邊鄙に、小童村と書き、ひちむらといふ所あり、其所の人も義は知らずといふ。又伊勢國三重郡に、四足八鳥村と書きてろくろみ村とよむも、同じく解くべからず。是等はもしひちといひろくろみといふ名あるがうへに、又小童とよび、四足八鳥とよぶ名をおほせて、兩名の文字と唱と混じたるにや。其文字も唱も、其時には各所由あるべけれど、後には俱に知られずなりたるならし。近江愛知川の近邑にいんでといへるは、位田と書けり。是は昔菅家の位田に充て給ひし所にて、音便にて轉じたるならん。北近江坂田郡馬渡、まうたりと稱するも同例也。

○七條の南油小路に不動堂有り、今畠物の市を立つる所にて、土俗ふどん堂と稱ふ。又六波羅密寺のことを熊野といふ。謠曲に「六波羅の地ぞん堂よと伏拜む」と謳ふ。今觀音を本尊とすれども、近古まで地藏尊を主とす。今も脇檀に安ず。太平記にも地藏堂のかねをつくとあり。又高砂に、「のこんの雪の淺かんがた」とうたふ、殘る雪の淺香潟といふことなり。唯うたひものの呼法とのみ思へるに、近來清家古點の禮記

油滑—ぬらりくらり、「瓢簞なまづ」とうまく誤間化すをいふ
論語徴—荻生徂徠の論語に關する一家見を披攊せるもの
前漢書—後漢の班固の撰にして前漢十二代の歴史
加茂氏—加茂眞淵

油滑に、僻境の人は魯直にして偏窄なり。孔子曰、「里仁爲レ美。擇不レ處レ仁焉得レ知」と、是地によりて氣をうつすの由なり。論語徴に、里の字を居のごとくなして見るべしといへるも亦理あれども、唯字のまゝに見れば如此し。

○西王母は仙女にして漢武帝にまみえしこと、漢武故事列仙傳等に見えて人皆知れども、地名なることは考へ得ず。前漢書九十五西域傳に、烏弋山離國の下に曰く、「安息長老傳へ聞。條支有二弱水西王母一。亦未二嘗見一也。注引三爾雅曰觚竹北戸西王母日下謂二之四荒一」と斯くのごとくなれば西域の國名也。

○國里の名に唱と文字と異なるもの、近江はもと淡海なれども、都近き江といふより、今の字に改れり。遠江も是に對す。上毛下毛も、唱は殘りて文字は上野下野に改れり。むさし、さがみも、武藏、相摸の文字にてはいかにも訓むべからず。むさしもむさかみの略、武者のこゝろなりと加茂氏はいへり。慶雲年間諸國好文字に改め給ひし時の所爲にや。今はいふ人も書く人も馴れてあやしまざるなり。里の名も、かすがを春日と書けるは、春はかすむ義、日はいくかといふかにや、滓鹿とも古書に見ゆるは明かなり。河内國交野郡に私部私市と書きて、きさべきさ市といふ、私の字きさと訓むこと心得がたし。もしさ

追福—追善

調度—手まはりの道具

惻隱の情—人に忍びざる心なり孟子に「惻隱之心、仁之端也云云」

くのごとくなれば、況や鳥獸におきては、是を割くこと非情の草木を見るごとく、嘗ていたむことを知らず。廚中にて生牛を割くごときは、聖代の法とさへなれり。長崎へ來る唐人の話とて人の語りしは、「かしこにては毎朝家猪を殺し、悲鳴する聲四隣にかまびすし。此地にては嘗て聞かず、心のどかなり」といへりしとぞ。又此ごろ廣川醫士の筆記を見るに、「唐人等は追福に小舟を造りて、さま〴〵の調度をも、或は形小に造り、略しては紙にても模して舟につみ、海に浮べてしばらく漕出して後燒き捨つることをす。是に家猪の子、鷄の雛などをも載せて行き、これをも共に燒き捨つ。彼物等烟に咽びくるしむが見るに忍びず」といへり。人の追福に物をくるしめ殺すといふは、道理にあたらぬことはもとよりなれども、廚中に牛を割くも同じことにて、習にひかれ意を用ひぬなるべし。齊宣王、鄭子産等牛を殺すに忍びず、生魚を放てるなどは、たま〳〵惻隱の情の動けるなるべし。

○風習といふものは如何ともすべからず、唐山にて國々の風を論ずるごとく、吾朝にても、大國の人は氣象おのづから優に、小國の人は逼れり。或は其領主勢あれば士民驕泰に、勢なければ畏縮す。海濱の人は散漫に、山中の人は儉素なり。市井の人は黠智多く

内府―前内大臣宗盛をいふ

三帝の遠狩―承久の亂に後鳥羽、順德、土御門の三帝の流されさせ給へること

人を罪す云々―孟子に「罪不レ孥」連坐の刑を行はざるをいふ

三族―父母、兄弟、子孫

處せらる。源頼朝平氏をほろぼし、内府をはじめ斬罪梟首に行はれしよりこそ、官位を選ばず刑することにはなりけめ。其始め院宣をもて追討すといへども實の朝敵といふにもあらず、頼朝私の宿仇のみ、などか法皇の御處置なかりけん。凡そ保元、平治に基して、壽永、文治に本邦の風大に變じける成るべし。況や北條氏權を握り、三帝の遠狩においては、天を仰ぎ地を撲つに堪へ、元弘建武に窮れりといふべし。

○彼國風は文餘ありて武たらず、歴史にも猶豫して事機をあやまてる事あまた見ゆ。力量もそれに應じて弱きか。今も長崎に來る唐人ども、日本人と相撲をしては常に負けて怒るとなん。しかもまた殘忍性となり、代々の聖人の教誡餘りなけれども改らず、開闢以來しみつきたる風習をいかん。其一二をいはゞ、人を罪すること孥までにせずと書に見えたれども、さしもなき罪にても人を刑すること、やゝもすれば三族より朋友までにも及ぶ趣歴史に多し。或は冎音寡といふ極刑あり、是を凌遲ともいふ、生きながら肉をこそげて骨計にす、俗になぶり殺しといふものなり。又戰國より已來人を煮ること常に見ゆ。これら吾朝にては曾て聞かざることなり。人を煮ることは近世に到りて唯一度、石河五右衞門といふ賊をにくみて、豐臣公これを行はるゝのみ。凡そかしこは人類すらか

源二位―頼朝

腐儒―荻生徂徠

を用ひ給へるにこそ。或は大唐大明などいふ大も同じく唯彼屬國のみ稱すべし、本邦よりはいふべからず。

○本邦の風は質直にて文飾少きが本色なるべし、善も惡も進むに速にして省る所たらざるか、はた質直によりて天皇を仰ぐこと、實に天のごとし、民心一つなればか。雄略紀に樟姫といふ者、其夫弟君が父と共に上に叛くを知りて、ひそかに殺せるを、「國家情深。君臣義切。忠踰㆓白日㆒。節冠㆓青雲㆒。」と褒め給へり。婦にして夫を殺すを節とし忠とせる、紀者の詞あたらずといへども、國風の然らしむるなり。

○中世より威權藤氏に歸し、政務全く其手に出づ。やがて此權平氏にうつり、源二位に至りて惣追補使の任をもて四海を掌にめぐらされしも、天位に望をかくるに及ばず、神統連綿せさせましますは、忝く、君臣の分正しき國風にあらずや。然るを吾所生の國の美をいはず、其學ぶところに牽れて、かしこを崇めこゝを卑め、自ら日本夷人と書きし腐儒もあり。是國の蠹のみならず、孔夫子春秋の筆意にも背くものか。彼國に臣を稱し官服を得たる源義滿の流といふべし。

○本邦には人を殺すことをたしまず、高官の人は重き罪あるも死一等をなだめて流刑に

五等─天地人物事此書序文にいへる如く五雜俎に傚ひたれば也

水戸の大日本史─徳川光圀の撰

○世にうけむけといふは、暦にあづからぬことなれども、貴人は厳重に祝ひたまふことなり。うけは七つめ、むけは五つめにて、性をとるは、木ならば卯より算ふるなり。然るに其文字を有卦無卦と書きならひたるは、先の恵方のごとく誤にて、有暇無暇と書くべし。大般若經に、「貧窮無暇入ㇾ有暇」といふに基せり。俗に「貧乏暇なし」といふも是より出づると、祖芳老禪の話なり。

おのれ天學の事におきては露ばかりも知らず、されど五等の一を缺くべからねば、止むことを得ず、纔に五條をもて數に足すのみ。此外に聞くこともあれど、元より知らざることはたゞ〳〵しければこれを略けり。

○唐山は開闢も早く、世々に聖者出でたまひて、文物制度備はれば、本邦の禮樂刑政もかしこに傚ひ給へること多きはうべなり。然れども必ずしも彼の國風よきにもあらず、こなたも天竺も通じて互に是非あるべし。

○かしこの人自稱して中華とも華夏ともいふは然るべし、こなたの人それに傚ひていふは思はざるなり。天地間の廣莫なる、いづこをかさだめて中とせん、華も美稱にして、こなたより稱すべきにもあらず。されば水戸の大日本史に一所も中華の文字なきは、心

楊萬里―字は廷秀、宋の孝宗に仕へ愛君憂國を以て知られたる學者

呉牛の喘―世説の註に「今の水牛なり、唯だ江淮の間に生ず故に之を呉牛といふ、南土暑多し、此牛熱を畏る、月を見て是れ日かと疑ふ、故に月を見ても則ち喘ぐ」

名にしおふ葉月長月の月はあれど月は文月の中空の月

と戯れしが、思ふに東坡の前赤壁賦も七月既望なり、又此頃一友人示せる楊萬里が詩に、

月色如レ霜不レ粟レ肌。月光如レ水不レ沾レ衣。一年沒レ賽二中元節一。政是初涼未レ冷時。

人情はひとしきものなりと、是を聞きて感じぬ。さるに或人はいふ、「七月はなほ晝のあつきからに、月を見ても照日のおもひあり、呉牛の喘も吾にひとしきか」といへり。これはまた暑をにくむの甚しきによるべし。

○暦に兄方といふことを世に恵方と書くは、恵をうくる方と心得たるにや。然らず、甲丙庚壬等の方にあたれば兄弟の兄なり、甲乙をもて兄弟とするなり。此繰りやうは、

甲己歳は甲方　寅卯間
乙庚歳は庚方　申酉間
丙辛歳は丙方　巳午間
丁壬歳は壬方　亥子間
戊癸歳は丙方

以上は故人小西梁山の話なり。

牛女交會―織女烏鵲の橋を渡りて牽牛星と交會すること
乞巧奠―七夕祭、織機を始め女の手工の巧ならんことを乞ふ意也
文月―陰曆七月

○七夕に牛女交會の說は、もろこしの昔よりいひ傳へて、萬葉集にも歌あまた見ゆ。詩歌の人のみならず、乞巧奠は公事の一つにさへなりぬ。さるに或人星の妹背といふ僞を世に傳ふるよしの歌をよみて、或卿に見せ申せしに、かゝることは歌道の邪義なりといましめ給ひしこと、或聞書に見えたり。是は古人の例に背きて、一己の理窟に落つるをいましめ給ふなるべし。さて後仁齋先生の歌を見し中に、

さかしらに誰がいひ初めて七夕の今宵なき名を空にたつらん

といふがありき。是は宋儒の說に、二星交會の俗說は天上の列宿を汚穢せるものなりといへるによられしか、經儒の本式といふべし。例せば屠蘇は少年より呑みはじむるといふを、宋儒、吾家の屠蘇は長者よりはじむ、年の初より長幼の禮を失ふべからずといへるにひとし。

○上弦は南方缺くる、下弦は北方より薄くなるは、定れることなれども、畫などにもたがへるもの見ゆ。

○おのれ幼より蒲柳の質にて、秋冷を畏るゝ故に、月を賞するは文月にますかげなしと思へり。されば或年の秋、

長庚星—金星、明星、太白ともいふ

貝原翁—貝原益軒、日本釋名は劉熙の釋名に倣ひて我邦事物の名稱を解釋したるもの

閑田耕筆

閑田盧蒿蹊著
男伴資規直樹校

巻之一

天地部

○長庚星を、常に夕豆都と、中のつ文字を濁る。和名抄「由不豆々」とあるは、二字共に濁音によめとにや。しかるに此訓の出所は、詩小雅大東篇、西有二長庚一の下の毛傳に、「月既入謂二明星一爲二長庚一、庚續也」とあるによれるか。しからばつゞくの意にて、下の一文字をのみ濁るべきものなり。予此考をなして後、貝原翁の日本釋名を見れば、夕の日につゞきて出づればなりと解せられたるも同じけれど、清濁の義はいはれず。萬葉第二には、夕星の字をゆふづつと讀ますれど、假名書には見えざれば、清濁の義はより處なし、故に愚意をのぶ。

老來幾部著書成。　祇道屛居遂嬾情

最是紙田　不レ得　長遺ニ筆耒ニ四時耕

此予卜ニ居閑田廬ニ之初。林泉院六如尊者見レ惠之作。眞知ニ予平生ニ者也。及レ著ニ此書ニ。遂取レ之以名焉。故揭ニ之卷首ニ云

己未冬日　　　　蒿蹊識

閑田耕筆

としごろ人の語れること、おのが見もし思ひも得たることのくさぐ〵を、反古のうらはしなどに書付け置きたるを、さながら捨(すてら)れなんも惜むべし、書いつめて見せよとそゝのかす人々のあるに、いづれをさきにし、いづれを後にとも思ひえねば、五雜俎のついでにならひて、天地人物事とわかちて、かの反古の中より見出づるまゝに書(かき)いる。又たゞ心にのみとゞまれることの、此題にひかれておもひ出づる事も此ついでに殘さず。ものしる人のためには笑れんことこそ多からめ。

内容細目終

花月草紙

遊京漫錄

年々隨筆

内容細目

閑田耕筆

目録

花月草紙は、松平定信の隨筆にして、其文の遒勁にして而も典雅なる、隨筆文中罕に觀る所也。定信は白川の城主松平定邦の嗣、天明三年封を嗣ぎて越中守と稱し、同七年老中となり、侍従に任ぜられぬ。其治績の赫々として、德化のよく下に及びたる事、寔に德川治世三百年史中の盛觀と稱すべし。夙に學を好み、和歌を能くし、又畫に巧なり。文化九年致仕して樂翁と稱し、文政十二年七十二を以て卒す。

以上四書を收めて本篇を成すに當り、閑田耕筆、年々隨筆は流布の版本を底本とし、花月草紙は著者自筆の六册本に據り、遊京漫錄は最も信頼するに足ると認めたる寫本と百家說林本とを對讐して其宜しきに從へり。假名遣を一定し、間々漢字を配し、句讀を施したる等、校訂上の一般方針は他の本文庫と異る所なし。

本書の校訂校正に關しては椿强祐、星野亮太郞二氏の手を煩はしたる所多し。記して謝意を表す。

大正四年一月　　校訂者　塚本哲三

緒　言

閑田耕筆四卷は伴蒿蹊の隨筆也。蒿蹊名は資芳、近江八幡の人、出でて京師に住し、其居を閑田廬と號し、自ら閑田子と稱せり。本書の名は卽ち之に基く。蒿蹊古學を研究して遂に一家を爲し、蘆庵、澄月、慈延と相竝びて平安の四天王と稱せられ、和歌文章を以て重きを一世に爲せり。

年々隨筆は、石原正明の筆述に係れる「辛酉上」「辛酉下」「壬戌」「癸亥」「甲子上」「甲子下」の六卷に加へたる總稱也。正明は尾張の人、蓬堂と號し、喜左衞門と稱す。始め本居宣長の門に入り、後塙保己一に師事せり。其典故に通じ、國學に造詣深く、自ら一家の見を立てて古學家流の固陋を難じたる事、本書の說く所に徵して知るべし。

遊京漫錄二卷は淸水濱臣の著はす所、前半は專ら其西下の日錄にして、下半は旅中の見聞を纂輯したる隨筆也。濱臣は通稱を玄長といひ、醫を以て業とし、江戶不忍池邊に住して、其廬を泊洦舍といひ、又月齋と號せり。村田春海に就きて古學を修め、業成りて子弟を敎へ、歌文を以て覇を一代に唱へぬ。

開田耕筆　全

年々隨筆　全

遊京漫録　全

華月草紙　全

